

令和二年度

博士論文（指導教員：須田義治）

日本語・満洲語・漢語の言語接触の研究
—オノマトペを中心に—

大東文化大学大学院外国語学研究科
日本語文化学専攻博士課程後期課程
（学籍番号：17233101）

王 則堯

目次

序章	9
1 はじめに	9
2 資料について	10
3 研究方法	10
4 各章の概説	11
第一節 三言語におけるオノマトペの定義	13
1 日本語のオノマトペ	13
1. 1 事典類におけるオノマトペの定義	13
1. 2 まとめ	17
2 漢語のオノマトペ	18
3 満洲語のオノマトペ	19
第二節 日本語オノマトペの研究史	20
1 鈴木朗(1816)『雅語音聲考』『希雅』	20
2 小林英夫(1933)「言語学方法論考」	21
3 佐久間鼎(1943)『日本の言語理論的研究』「音聲的描寫による語構成」	21
4 小林好日(1941)「音義説と音聲象徴」	23
5 金田一春彦(1951)「コトバと旋律」	25
6 天沼(1974)『擬音語・擬態語辞典』一序文「擬音語・擬態語について」	26
7 浅野鶴子・金田一春彦(1978)『擬音語・擬態語辞典』一序文「擬音語・擬態語概説」	27
8 小野正弘(2007)『擬音・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』	28
第三節 日本語オノマトペの分類	29
第一章 満文『玉堂字彙』から見た満洲語のオノマトペの諸相	33
第一節 満洲語のオノマトペの形態	33
1 はじめに	33
2 先行研究のオノマトペの形態	33
2. 1 先行研究	33
2. 1. 1 語彙の特徴による3種類	33
2. 1. 2 語尾音と語頭音から見た特徴	33
2. 1. 3 構造から見た特徴	35
2. 2 先行研究の問題点	36
3 研究方法と目的	36
4 形態分類	36
4. 1 満洲語『玉堂字彙』におけるオノマトペの形態上の分類	36

4. 1. 1	「単語形式」のオノマトペの分布状況	36
4. 1. 2	「双語形式」のオノマトペの分布状況	37
4. 2	「～seme」と「～と」との類似性	39
4. 2. 1	「sembi」「seme」とは	39
4. 2. 2	「sembi」を伴うオノマトペ	40
4. 2. 3	「seme」を伴うオノマトペ	40
4. 2. 4	まとめ	41

第二節 満洲語「seme」「sembi」を伴うオノマトペ 44

1	はじめに	44
2	先行研究	44
3	資料	45
4	「seme」を伴うオノマトペ	45
4. 1	「sembi」「seme」とは	45
4. 2	「seme」を伴うオノマトペの下位分類	46
5	「sembi」を伴うオノマトペの下位分類	49
6	おわりに	54

第三節 満文『玉堂字彙』における語尾が b、k、ng で終わる単純形式のオノマトペ

		56
1	はじめに	56
2	語尾が b で終わる単純形式のオノマトペ	56
2. 1	満洲語オノマトペ「gib」の満和対照	57
2. 2	満洲語オノマトペ「keb」の満和対照	57
2. 3	満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「～b」の分類	57
3	語尾が k で終わる単純形式のオノマトペ	58
3. 1	多義オノマトペ「fak」	58
3. 2	満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「～k」の分類	59
4	語尾が ng で終わる単純形式のオノマトペ	60
4. 1	類似オノマトペ「keng」の満和対照	60
4. 2	満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「～ng」の分類	61
5	おわりに	62

第二章 『唐五代言語辞典』と『詩経』における漢語のオノマトペ	64
第一節 『唐五代言語辞典』における漢語のオノマトペ	64
1 はじめに	64
2 漢語のオノマトペについて	64
2. 1 漢語のオノマトペの品詞	64
2. 2 漢語のオノマトペの分類	64
2. 2. 1 現代漢語のオノマトペの分類	64
2. 2. 2 古典中国語のオノマトペの分類	65
3 唐に見られる漢語のオノマトペ	65
3. 1 擬態語の割合	65
3. 2 唐に見られる漢語の擬態語の分類	65
3. 2. 1 人間	65
3. 2. 2 動物	66
3. 2. 3 物事	67
4 重言型のオノマトペ	67
4. 1 『日本国語大辞典』に収録されている重言型のオノマトペ	68
4. 2 重言型のオノマトペの和漢比較	68
5 おわりに	71
第二節 『詩経』における動物を対象とした漢語のオノマトペ	72
1 はじめに	72
2 『詩経』における漢語オノマトペの日本語への受容について	72
3 『詩経』における動物を対象とした擬音語の意味分類	74
3. 1 鳥	74
3. 2 虫	76
3. 3 鶏	77
3. 4 馬	78
3. 5 鹿	78
3. 6 まとめ	78
4 『詩経』における動物を対象とした擬態語の意味分類	79
4. 1 鳥	79
4. 2 虫	81
4. 3 魚	81
4. 4 狐	82
4. 5 牛	82
4. 6 馬	82
4. 7 まとめ	84

5	おわりに	85
第三節 『詩経』における植物を対象とした漢語のオノマトペ		
1	『詩経』における植物を対象とした擬音語の意味分類	86
1. 1	きび	86
1. 2	こめ	86
2	『詩経』における植物を対象とした擬態語の意味分類	86
2. 1	くず	86
2. 2	かずら	88
2. 3	きび	88
2. 4	あし	89
2. 5	まめ	91
2. 6	うり	91
2. 7	むぎ	91
2. 8	いね	92
2. 9	はぐさ	92
2. 10	こくもつ	93
2. 11	いばら	93
2. 12	あおぎり	94
2. 13	やなぎ	94
2. 14	しょうはく	95
2. 15	とち	96
2. 16	もものき	96
2. 17	あかなし	97
2. 18	やぶ	97
2. 19	たけ	98
2. 20	いららぐさ	98
2. 21	おはぎ	99
2. 22	くさぎ	99
2. 23	もものはな	99
2. 24	はな	100
3	まとめ	100
4	おわりに	102
第四節 『詩経』における自然現象を対象とした漢語のオノマトペ		
1	はじめに	103
2	『詩経』における自然現象を対象とした擬音語	103
2. 1	川	103

2. 2	雷	103
3	『詩經』における自然現象を対象とした擬態語の意味分類	103
3. 1	雨	103
3. 2	雪	104
3. 3	雲	105
3. 4	水	105
3. 5	光	106
3. 6	露	107
3. 7	山	107
第五節	『詩經』における人間の様子を対象とした漢語のオノマトペ	108
第六節	『詩經』における人間の心理状態を対象とした漢語のオノマトペ	115
第七節	『詩經』における抽象的なものを対象とした漢語のオノマトペ	117
第三章	『萬葉集』から見た奈良時代のオノマトペ	122
第一節	AB型の擬態語について	122
1	はじめに	122
2	研究方法	122
3	AB型の擬態語「ここ」	123
3. 1	「ここ」の意味	123
3. 2	「ここ」と「ここし」	124
4	AB型の擬態語「ほろ」	124
4. 1	「ほろ」の意味	124
4. 2	「ほろ(に)」と「ほろ(と)」	125
4. 3	「ほろ」を含む単語群	126
5	AB型の擬態語「ゆた」	127
5. 1	「ゆた」の意味	127
5. 2	「ゆた」を含む単語群	128
5. 3	「ゆた」と「たゆた」	128
6	AB型の擬態語「しの」	129
6. 1	「しの」の意味	129
6. 2	「しの」と「しのの」	130
7	AB型の擬態語「さや」	131
7. 1	「さや」の意味	131
7. 2	「さや」を含む単語群	132
7. 3	「さや」と「さやさや」	132

8. おわりに	133
第二節 AB型の擬音語について	134
1 はじめに	134
2 AB型の擬音語「そよ」	134
2.1 「そよ」の意味	134
2.2 「そよ」を含む単語	136
3 AB型の擬音語「とど」	137
3.1 「とど」の意味	137
3.2 「とど」から派生した単語	139
4 AB型の擬音語「ひし」	139
4.1 「ひし」の意味	139
4.2 「ひし」を含む単語群	140
5 AB型の擬音語「ゆら」	141
5.1 「ゆら」の意味	141
5.2 「ゆら」と「ゆらら」	141
6 おわりに	143

付章

日本文学の翻訳作品より見たオノマトペの日中比較—宮沢賢治の児童文学を中心に—

	144
1 はじめに	144
2 先行研究及び問題点	144
2.1 オノマトペに関する先行研究	144
2.1.1 日本語オノマトペについて	144
2.1.2 オノマトペの日中比較について	145
2.2 宮沢賢治のオノマトペに関する先行研究	145
2.3 問題点	146
2.4 研究目的	147
3 調査資料	147
3.1 宮沢賢治の童話作品	147
3.2 宮沢賢治の童話作品の現代漢語訳	148
4 直訳、意識および現代漢語訳の諸問題	149
4.1 直訳について	149
4.1.1 借用動量詞「一+～」の形に訳されているオノマトペ	149
4.1.2 「一+～」の形で訳されているオノマトペに関する数的分析	162
4.2 相似したオノマトペの現代漢語訳の境目について	162

4. 2. 1	十二本の童話作品における「震え」を表すオノマトペと現代漢語訳	162
4. 2. 2	十二本の童話作品における「蹠踉めき」を表すオノマトペと現代漢訳	165
4. 2. 3	十二本の童話作品における「驚き」を表すオノマトペと現代漢語訳	167
4. 2. 4	十二本の童話作品における「輝き」を表すオノマトペと現代漢語訳	169
4. 3	意識について.....	171
4. 4	宮沢賢治の独特のオノマトペとその現代漢語訳の問題点について.....	179
5	おわりに	190
終章		192
文献目録		205
	満洲語オノマトペの部.....	205
	漢語オノマトペの部.....	206
	日本語オノマトペの部.....	206
付表		208
満洲語オノマトペについて		
1	満洲語注音・注釈『玉堂字彙』におけるオノマトペの満和対訳表.....	208
2	『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）における「sembi」を伴うオノマトペ.....	237
3	『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）における「seme」を伴うオノマトペ.....	251
4	満洲語『玉堂字彙』におけるオノマトペの形態上の分類.....	258
5	満洲語『玉堂字彙』における「seme」、「sembi」を伴うオノマトペの下位分類	259
漢語オノマトペについて		
6	唐・五代の漢語にみられるオノマトペ.....	260
7	『詩経』における漢語オノマトペ.....	275
日本語オノマトペについて		
8	『萬葉集』におけるオノマトペ.....	320

宮沢賢治のオノマトペについて

9 「貝の火」におけるオノマトペと現代漢語訳	330
10 「どんぐりと山猫」におけるオノマトペと現代漢語訳	335
11 「狼森と笹森、盗森」におけるオノマトペと現代漢語訳	338
12 「注文の多い料理店」におけるオノマトペと現代漢語訳	340
13 「雪渡り」におけるオノマトペと現代漢語訳	342
14 「水仙月の四日」におけるオノマトペと現代漢語訳	346
15 「雁の童子」におけるオノマトペと現代漢語訳	350
16 「虔十の公園林」におけるオノマトペと現代漢語訳	352
17 「オツベルと象」におけるオノマトペと現代漢語訳	354
18 「グスコーブドリの伝記」におけるオノマトペと現代漢語訳	357
19 「セロ弾きのゴーシュ」におけるオノマトペと現代漢語訳	363
20 「風の又三郎」におけるオノマトペと現代漢語訳	368

付属資料

21 『萬葉集』におけるオノマトペの出典の抜粋	378
-------------------------	-----

序章

1.はじめに

本論文は、おもに寺村(2007)で検討されている東アジアにおける言語接触という観点から、日本語・満洲語・漢語のオノマトペについて研究したものである。地理的に見ても、日本は古代から周辺諸国からさまざまな言語の流入や文化の影響を受け、自らの言語や文化を育んできたと考えられる。そうした影響関係について、現代語でなく、古い時代の満洲語、漢語、日本語のオノマトペを比較検討することによって、その一端を明らかにしていきたいと思う。

擬音語、擬声語、擬態語は一般的にオノマトペと総称される。オノマトペは、直接的にはフランス語にもとづく用語だが、その語源は、造語すること、名前を造ることといった意味を表す古代ギリシア語に遡るとい¹。那須(2008)も「オノマトペには新しい語形を次々と作りだす力が備わっている。」²と述べているように、オノマトペは非常に生産的なものであり、より新鮮な表現効果を求めて、つねに新しいオノマトペが作られていると言っているだろう。その際に、自ら新しいオノマトペを生み出すだけでなく、多言語からの影響を受けて、新しいオノマトペが作られることもある。

そうした影響関係を明らかにするため、本論文では、まず、満洲語、漢語、日本語の、三言語におけるオノマトペの対照研究を行い、日本語のオノマトペを中心として、満和、和漢それぞれの相違点を明らかにする。そして、それにもとづきながら、東アジアにおける満洲語と漢語と日本語の言語接触について検討していく。

東アジアにおける言語接触の研究としては寺村(2007)があるが、寺村(2007)は、トルコ語、モンゴル語、満洲語、韓国語、日本語などのアルタイ諸語の語彙の面における影響関係について明らかにしている³。その一例をあげれば、日本語の「味噌(Miso)」という言葉は、満洲語では「Misun」、韓国語では「密蘇(Misu)」であり⁴、もとは同じ単語からきていることが分かるという。

また、オノマトペに関しても、本論文でくわしく述べるように、次のような類似性を見出すことができる。

たとえば、「ぶくぶくと沸き上がるさま」の「ぶくぶく(buku buku)」に当たる満洲語は「bur bur」であり、漢語は「咕嘟咕嘟(gudu gudu)」である。また、「水がさらさらと流れるさま」の「さらさら(sara sara)」に当たる満洲語は「hūwar」であり、漢語は「哗啦哗啦(huala huala)」である。さらに、「地をカタンと踏む」の「カタン(kat ann)」に当たる満洲語は「katang」であり、漢語は「喀哒(kada)」である。

こうした語彙における音声的な類似性だけでなく、語構成上の類似性も見られる。

日本語のオノマトペでは、「はっきりと」「ぐるぐると」などは任意に、「ぱっと」「ぐっと」などは義務的に、後ろに「と」がつくのだが、満洲語のオノマトペでは、「pu r seme (ぱっと飛ぶ)」「kos seme (げっそりと痩せる)」「kang seme (がやがやと喋る)」のように、「seme」がつくことがある(河内・清瀬(2002)では、満洲語のオノマトペには、引用の後置詞化した「seme」を伴うものとそうでないものがあると述べている⁵⁾)。また、漢語のオノマトペでは、後ろに日本語の「と」と似た機能を持つ「地」がつく。このように、満洲語、日本語、漢語のオノマトペは、それぞれ、似たような機能をはたす「と」、「seme」、「地」がつくという語構成上の類似性を持っているのである。

2.資料について

本論文で扱う資料は以下のとおりである。

・満洲語：

寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』—研究と翻刻・繙訳』(子集～亥集)水門一言葉と歴史・特別刊行叢書

・漢語：

劉堅・江藍生『唐五代語言詞典』、
目加田誠著作集第二卷『詩經訳注(上)』『詩經訳注(下)・楚詞訳注』

・日本語：

「新編日本古典文学全集6～9」小島憲之・木下正俊・東野治之『萬葉集』

3.研究方法

本研究は、日本語、漢語、満洲語の三言語におけるオノマトペの対照研究である。奈良時代の文学作品を代表する『萬葉集』にみられるオノマトペ、中国における最も古い詩集である『詩経』および『唐五代語言辞典』にみられる漢語のオノマトペ、そして、寺村政男著『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』—研究と翻刻・繙訳—』計12巻から各文献におけるすべてのオノマトペを収集し、形態分類、意味分類をしたうえで、満和、和漢の比較対照を行う。

4.各章の概説

序章

序章では、研究の意義（はじめに）、取り扱う資料、研究方法について説明する。

- ・第一節において、日本語、漢語、満洲語三言語のオノマトペの定義について検討する。
- ・第二節において、日本語オノマトペの研究史について、先駆者たちの見解を概説する。
- ・第三節において、これまで行われてきた日本語オノマトペの分類を紹介する。

第一章

第一章では、満文『玉堂字彙』から見た満洲語のオノマトペを中心に、その形態的な分類および特徴について検討する。

第二章

第二章では、『唐五代言語辞典』『詩経』における漢語のオノマトペについて、漢和比較の観点から、重言型のオノマトペを主とし、意味的な分類を行う。そして、『詩経』における漢語のオノマトペがどれほど日本語語彙として定着されているかを確認し、受容しやすいか否かは、受容レベルで示す。

第三章

第三章では、奈良時代を代表する日本文学作品である『萬葉集』における古語のオノマトペについて検討する。日本語で、最も古いオノマトペは、『古事記』にみられる。『萬葉集』にも「ゆら」「ゆた」「さや」といったAB型の古語オノマトペを確認できたので、『萬葉集』全四巻・4516首の和歌から、オノマトペを収集し、その意味分類を行う。

第一節では、『萬葉集』におけるAB型の擬態語について検討する。主に「こご」「ほろ」「ゆた」「しの」「さや」の五語を中心に取り上げる。『全訳古語辞典』『角川古語大辞典』『日本国語大辞典』から意味を確認し、各語を含む単語群を表で示す。「こご」を例にすると、その単語群は「こごふ」「こごし」「こごる」「こごむ」「こごなる」である。本章では、AB型を中心に検討していくが、「ゆた」に対するABA型の「たゆた」との差異について触れる。「しの」とABB型の「しのの」、「さや」とABAB型の「さやさや」などもそれである。

第二節では、『萬葉集』におけるAB型の擬音語について検討する。主に「そよ」「とど」「ひし」「ゆら」の4語を中心に、それぞれの意味、派生した単語を確認する。ま

た、第一節と同様に、「ゆら」に似ている ABB 型の「ゆらら」との差異について検討する。

付章

第一章、第二章、第三章は、満洲語、漢語と日本語の古語のオノマトペを中心に検討したものである。付章では、古語ではなく、現代小説にも辞典にも見出されていないオノマトペを多数使用する宮沢賢治の童話作品に見られるオノマトペを日中比較の観点から検討する。オノマトペの語源であるギリシア語の「造語する」という名にふさわしい宮沢賢治の特殊なオノマトペは、いかに現代漢語に訳されているかを確認し、その現代漢語の特徴について検討する。また、「ざふんと」「どふんと」「どぼんと」といったような、意味が相似しているオノマトペの現代漢語訳を確認し、その問題点を指摘する。

終章

日本語、漢語、満洲語三言語のオノマトペについて、全体的にまとめる。

第一節 三言語におけるオノマトペの定義

1 日本語のオノマトペ

日本語にはオノマトペが多く、オノマトペは日本語の特徴の一つだと言われることもあるが、オノマトペは古くは『古事記』にもみられる。その例として、小野（2009）は、塩をかきならす時に発する音の「許々袁々呂々」と玉の触れ合って鳴るさまの「母由良邇」を挙げている⁶。

「つくえ」「ネコ」のような一般語彙と異なり、オノマトペは形態とその意味との関係が恣意的でなく有契的だが、オノマトペも時代とともにその語形を変えていく。古語の「こをろこをろ」から、現代人のわれわれがそれが指し示すものを連想することは難しいだろう。また、一般語彙の中においても、オノマトペ由来のものも存在する。キリギリス、コオロギ、ホトトギスなどが挙げられる⁷。

日本語のオノマトペとは何かを確認するまえ、擬音語、擬態語の定義を、日本語オノマトペ辞典と言語学辞典からまとめたい。

1. 1 事典類におけるオノマトペの定義

(1) 『言語学大辞典 術語篇』

『言語学大辞典 術語篇』には、オノマトペという項目がないが、擬声語と擬態語について以下のように書かれている。

擬声語：

音声象徴 (sound symbolism) によってつくられた語の一種。動物の声や自然界のもろもろの音、または、およそ物の発する音を模写したもの。たとえば、ホーホケキョ、ワンワン、ゴロゴロ、ピーポー等々。反響語 (echo-word, echoic word) ともいう。また、その声と音を区別して、音の模写の場合を特に擬音語ということがある。擬声語の擬声あるいは写声を、反響 (echoism) あるいは声喩ということがある⁸。

擬態語：

音声象徴 (sound symbolism) によって感覚・感情を写し出す一群の語。たとえば、ハッキリ、ボンヤリなどはそうである⁹。

このように、擬声語と擬態語はいずれも音声象徴によってつくられた語とも言える。擬声語は、場合によって、反響語、擬音語、声喩ともいう。一方、擬態語は、感覚と感情を写す語とされている。

(2) 『国語学大辞典』

『言語学大辞典 術語篇』と同様、『国語学大辞典』にも、オノマトペという項目を立てておらず、擬声語・擬態語という形で載っており、以下のように書かれている。

擬声語：

音象徴 (sound symbolism) が存在すると考えられる語の一群。音響の描写をおこなう語、「ドアをガチャンと閉める」「机をドンと叩く」におけるガチャン・ドンのたぐいは擬声語・擬音語・音画写生語などと言われる¹⁰。

擬態語：

音響には無関係な事象の状態などを音で描写する語、「ピタリと命中する」「ヒョッコリあらわれる」における「ピタリ」「ヒョッコリ」の如き語は擬態語・擬貌語・写容語・模様語などとも称されるが、擬声語と擬態語との境界は時々截然としないため、総称的に擬声語・オノマトペ (onomatopoeia) ・象徴語等で済まされることも多い¹¹。

つまり、音響の描写を行う語が擬声語であり、音響には無関係な事象の状態を音で描写する語が擬態語である。そして、擬声語を擬音語、音画写生語ともいい、擬態語を擬貌語、写容語、模様語ともいう。また、擬声語と擬態語を、擬声語、オノマトペ、象徴語と総称する場合も多い。

(3) 『日本語大事典』

『日本語大事典』も前掲した2冊の辞典と同じく、オノマトペを立項していなく、擬声語、擬態語の代わりに、「象徴詞」について、以下のように書かれている。

生物・事物の立てる音や状態、人間の心情を直接、感覚的に表現した言葉。擬声語。オノマトペ（ア）。写生詞。音画。音象徴（語）。音や声を表したものを「擬音語（擬声語）」、状態を表したものを「擬態語」、心情を表したものを「擬情語」と分けていうことがある。ただし、この区分を厳密につけることは難しく、同じ語が音と様子、両方の表現として使われることもある¹²。

『日本語大事典』では、音象徴によるか、または音響には関係の有無などについて触れていない。そして、『国語学大事典』と同様に、擬声語と擬態語をはっきりと区別できないことを指摘している。

(4) 『日本語学大辞典』

『日本語大辞典』には、擬音語、擬態語、象徴詞という項目がなく、オノマトペのみ立項している。「定義」「名称の変遷」「一般語との差異」「文法的な位置づけ」「特殊な語形と意味」「造語が可能」「型の推移」「派生語をつくる」「研究史」の順に書かれている。それぞれの内容をまとめると、以下のようになる。

「定義」

定義に関しては、冒頭で外界の物音や状態を言語音で模写した言葉と書いてある。擬音語は、ガタガタ・ドタッ・ホーホケキョを例にとり、擬態語はヒョロヒョロ・ペタン・ヒッソリを列挙し、音や声を言語音で模写した擬音語と、状態を言語音でいかにもそれらしく模写した擬態語の総称と定義している¹³。

また、オノマトペの語源に関しては、フランス語の「onomatopée」、英語のオノマトピーア「onomatopoeia」、「名前をつける」というギリシア語の「onomatopoiia」、三言語から来たと書いてある¹⁴。

「名称の変遷」

「音まね語」「模写語」「擬声語」「象徴辞」「象徴詞」「音象徴語」「象徴音」とこれまでさまざまな名称が提案されていることと、どれも定着するには至らなかったという経緯があることを指摘している¹⁵。

「一般語との差異」

「ゴトゴト」を例に、オノマトペが一般語と大きくと異なっているのは、言語音と意味の間に心理的な必然的關係があると説明している。また、オノマトペは、一般語よりも人

間の感性や感情に訴えかける力が強く、迫真的描写力を持つと書いている。一方、「サメザメ」「ハルバル」「ホノボノ」を例にとり、これらの言葉は、オノマトペなのか、一般語なのか、明確しがたい境界領域にあると指摘している¹⁶。

「文法的な位置づけ」

文法的には、主に副詞として機能し、「雨がザアザアと降る」「電灯がチカチカと点滅する」を例にとり、多くは「と」をとって動詞を修飾し、動作・行動の様態説明の役割を果たすと書いている¹⁷。また、「と」のほか、「クタクタに疲れる」「ビショビショに濡れる」を例にとり、結果を表すときには「に」をとることもあると説明している¹⁸。

「特殊な語型と意味」

ここでいう特殊な語型は主に現代日本語の場合をさす。促音「Aッ（ピッ）」、撥音「Aン（ポン）」、長音「Aー（プー）」、反復型「ABッ（サクッ）」「ABン（ガタン）」「ABリ（ピカリ）」「ABAB（ボカボカ）」「AッBリ（ピッターリ）」「AンBリ（ドンヨリ）」を例にとり、それぞれの特徴を以下のようにまとめてある¹⁹。

・促音：

瞬間的に止まる感じを付加する。

・撥音：

共鳴しつつ終わる感じを与える。

・リ音：

固定し完了した感じを付け加える。

・「ABの語基」に「リ」、「ン」を添える場合：

より強調された感じを付加する。

・反復型：

動作・状態が連続的であることを示す。

「造語が可能」

オノマトペは以上のような型に当てはめさえすれば、新しい語を造ることができる²⁰と書いてある²⁰。

「型の推移」

前掲の特殊な語型は現代語の場合をさして。古語の場合は、以下のような例をとってある²¹。

奈良時代：「ABB」がよく使われている

例：「クルル」「シホホ」「ハララ」

鎌倉・室町時代：「AAラ」「AッBラ」「AンBラ」がみられる

例：「ボボラ」「ウツトラ」「スンズラ」

室町時代から江戸時代にかけて：「AッB」「AンB」がよく使われていた

例：「サツパ」「ザンブ」

また、型は時代によって栄枯盛衰をたどっているが、一貫して使い続けられている型がある。その代表は「ABAB」型であり、日本語のオノマトペの中核を担っていると書いてある²²。

「派生語をつくる」

「どよめく」「ひらめく」「がたつく」「べたつく」「いじける」「にやける」「ぐずる」「ちびる」を例にとり、オノマトペは、接辞「めく」「つく」「ける」「る」などをつけて、動詞を派生させると書いてある。また、「つく」「ける」「る」がついたオノマトペから派生した動詞はいずれもマイナスイメージをもっていると説明している。

「研究史」

研究史に関しては、第三節にて詳しくまとめることにする。

1. 2 まとめ

以上引用した各辞典の定義からすると、オノマトペは、擬音語、擬態語、擬容語、擬情語などの語の総称である。オノマトペは、「さらさら」は、川の流れる音をさすか、川がよどみなく流れるさまをさすか、といったように、擬音語か擬態語かははっきりと区別できない場合が多いようである。

また、おおもとギリシア語に遡り、造語するという意味という面から考えてみれば、象徴詞、写生語よりも、オノマトペのほうがふさわしいと思われる。なぜならば、一般語彙の増え方、つまり、恣意性がある語彙と異なり、オノマトペは、既存する語彙から派生するのではなく、新たに創られていくからだと思われる。

2 漢語のオノマトペ

中国語にもオノマトペは存在する。「ワンワン」というイヌの鳴き声は、中国語では「汪汪」と言い、「ハハハ」という笑い声は、中国語では「哈哈」と言う。こうした単語は、中国語では「象声詞」と呼ばれている。

「象声詞」という名づけからも分かるように、象声詞としてあげられるのは、ほとんど擬音語である。それでは、中国語に擬態語がないかということ、そうではない。

擬態語にあたる言葉は中国語の文法用語としては特にないようだ。しかし、用語がないからといって、擬態語自体がないわけではない。“热乎乎（ほかほかしている）”、“滑溜溜（つるつるしている）”などの後置成分をおく形容詞、いわゆるABB型形容詞は一種の擬態語と考えられる²³。

そのため、中国語学では、象声詞は擬音語だけでなく擬態語も含む用語として定義づけられている。

象声词是用语音来模拟实在的声音或者描写各种情态。象声词的形式跟形容词的生动化形式非常相似，要把它作为形容词的一个小类也未尝不可²⁴。（『現代漢語八百詞 増訂本』）（筆者訳：象声詞は音で実際の音声を描写し、または状態を表す。象声詞の形式は形容詞の生動化式によく相似しているのので、形容詞の一つの類として取り扱っても良い。）

このように、象声詞は実在する音声または有様を描写するのに用いるとされている。

また、『言語学大辞典 術語篇』による漢語の擬態語について、以下のように書かれている²⁵。

中国語では、古典的に「連語」とよばれるものが擬態語に当たる。たとえば、朦朧とか参差などがそうである。朦朧は、月の光がボンヤリ霞んでいる感じを表す語で、その音形はmung-lung. すなわち、韻（rhyme）を合わせた形で、このような連語を疊韻連語という。これも疊音によるものであるが、単なる疊音（例えば、皎皎）とは違って、子音を変化させたものである。一方、参差は物の不揃いなさま、あるいは、いろいろ入り混じっている感じを表す擬態語で、この方は頭の子音は同じであるが、韻を変化させている。これを双声連語という。いずれも疊音が基になって、若干の変化

を加えたものである。

『言語学大辞典 術語篇』による漢語の擬態語について、現代語ではなく、古語の擬態語を疊韻、単なる疊音、双声連語と分けている。

3 満洲語のオノマトペ

満洲語のオノマトペに関する定義は日本語に近い。

河内・清瀬(2002)では、満洲語には、日本語と同様に、cu ca (ひそひそ)、katak (がちやり) のような擬音語も、buru bara (ぼんやり)、koskon kaskan (せかせか) のような擬態語もあると書かれている。

季永海・劉憲景・屈六生(1986)では、満洲語のオノマトペを「摹擬詞」と呼んでいる²⁶。そして、擬音語に相当するものは「摹声詞」あるいは中国語と同じように「象声詞」とし、擬態語は「摹形詞」あるいは「象形詞」としている。

つまり、オノマトペの定義において、満洲語は中国語と異なり、擬音語(象声詞)と擬態語(象形詞)がはっきりと区別されているのである。

第二節 日本語オノマトペの研究史

1 鈴木朗(1816)『雅語音聲考』『希雅』

日本におけるオノマトペの研究は、江戸後期の鈴木朗に始まる。鈴木は日本語のオノマトペについて次のように書いている。

言語ハ音聲也音聲ニ形アリ姿アリコトロアリ、サレバ言語ニハ、音聲ヲ以テ物事ヲ象リウツス事多シ、(中略)サラヌ詞ニモ亦多ク是アル事ヲ、人多クハ心ツカズ、今ハ其ノ大槩ネヲ顯ハサントシテ、ソノ類ヒヲ四ツ二分ツ、一ツニハケモノノ聲ヲウツス。二ツニハ人ノ聲ヲウツス、三ツニハ万物ノ聲ヲウツス、四ツニハ万ノ形有様意シワザヲ寫ス是也、下ニ次々ニ擧グルモ見ルベシ (『雅語音聲考』²⁷⁾)

鈴木は、日本語のオノマトペを意味的に次のように分類している。

鳥獸蟲ノ聲ヲウツセル言、人ノ聲ヲウツセル言、萬物ノ聲ヲウツセル言、萬ノ形有様意シワザヲウツセル言

- ①鳥獸の声を写せる言
- ②人の声を写せる言
- ③万物の声を写せる言
- ④万の形、有様、意、しわざを写せる言

このうち、①②③は擬音語(擬声語)であり、④は擬態語(擬容語)である。鈴木は擬音語、擬態語という用語こそ用いていないが、オノマトペとされる日本語の語彙をとりだし、その意味を記述していることは重要である。

さらに、鈴木は漢語のオノマトペについても触れている。

凡テ下ヲトモジニテ承テ、漢語ニ何然、何乎ト云タグイノ詞ハ、大カタ音聲ニテ形容シタル詞ナリ。(中略)

漢語ノ中ニ音聲ニヨレル所和語ト符合スル事ノアルヲ思ヒ、當ル限り下ニ擧。

そして、次のような例をあげている。

颯々サツサ (風ノ声ナリ、サヤク、ソヨソヨ)

骨碌々々コロコ (カナタノ俗語也、此ニコロブ又今俗コロ々々ト云ニ符合ス)

軟ナン、柔ニユ、弱ミヤク (ナユ、ナヨ)

蕩タウ (トロ)

揚 (アメナリ、是モトロケタル意ナリ 蕩ける)

これらの漢語のオノマトペは、それと意味的に近い和語のオノマトペと、音声的に類似している。とくに、「颯々」(sa sa)と「ソヨソヨ」、「骨碌々々」(gu lu gu lu)と「コロコロ」など、擬態語と言えるようなものも、非常に似ているのである。

2 小林英夫(1933)「言語学方法論考」

小林(1933)は、音象徴やオノマトペなどの用語の概念に対する認識が混乱していると指摘し、それを明確に、次のように定義している。

- ①語音をもって自然音を写そうとしたもの。写される内容も写す手段も共に音響世界である。反響語＝狭義のオノマトペ。
- ②ある種の態度を自然音に相当する語音をもって、類推的に写したもの。狭義の象徴。テキパキ
- ③ある種の状態を自然音とは何ら対応するところなき語音をもって示したもの。世にいう符号、符牒。

そして、小林は、言語記号を「無縁的記号」と「有縁的記号」に分け、さらに「有縁的記号」を「直接写意—擬音語」と「間接写意—擬容語」に下位分類している。

なお、擬声語・擬態語ではなく、擬音語・擬容語という用語を用いる理由として、擬声語は「声をまねる」という意味になり、一般的に音を表すという意味にならず、また、擬態語は生物学上の術語と衝突するおそれがあるからであると小林は述べている。

また、小林(1933)は、象徴音の事実を「集団的なもの」と「散在的なもの」に大きく二分している。

3 佐久間鼎(1943)『日本の言語理論的研究』「音聲的描寫による語構成」

佐久間(1943)「音聲的描寫による語構成」は、日本語のオノマトペを、まず、形態上、擬聲音・擬態語を単式と複式に分け、さらに、それらを下位分類している。

表：佐久間（1943）による擬聲音・擬態語の形態上の分類

	種別	語例
A.単式	1. 短母音＋促音	ドッ（と）
	2. 長母音＋促音	スーッ（と）
	3. 短母音＋撥音	ピン（と）
	4. 長母音＋撥音	ピーン（と）
B.複式	I.同音反復	
	5. 長母音	キヤーキヤー
	6. 短母音（＋促音）	セッセ（と）
	7. 短母音＋撥音	ピンピン
	8. 複音節	ピカピカ
	II.異音聯成	
	9. 重疊	ガタピシ
	10. ～＋撥音	ドタン
	11. ～＋促音	ピシヤッ
	12. ～＋リ	コトリ

また、佐久間（1943）では、擬声語における音声の描写について、音声的構成と、描写される音響との間の関係を以下のように分類している。

	上位分類	下位分類
擬声語における音聲描写	吹きならされた音	a.一声だけのもの
		b.連続して鳴る音
	打ちならされた音	a.比較的単純なもの（破音+母音+ン）
		b.打拍の反復されるもの
		c.打ち鳴らされる対象になるニュアンス
		d.はちく、はねるという程度
	物のきしみ、こすれ合って出る音	なし
	物音のいりまじる場合	なし
とどろく	なし	
物音のいりまじる場合	なし	
擬態語における音聲描写	なめらかに渋滞なく進行する様子	なし
	急速度の進行を示す動き	なし
	たちまち現れる変化、発動……促音的效果	なし
	ふるえ動く様子（または回転、ためらい）	a.ゆるやかな移行
		b.ゆるやかな回転または動揺
		c.急な進行また回転
		d.反転、ひらめき
リズム的反復運動……畳語的構成	なし	
動作態度	なし	

4 小林好日(1941)「音義説と音聲象徴」

小林（1941）は、音義説と音響象徴について次のように述べている。

言語は二つの側面から観察しなければならない。記號的性能と暗示的性能とである。

（中略）

言語が恣意的記號であることは、勿論言語の本質である。しかし言語は記號たる機能をいとなむと共に、之に伴つて又それに劣らぬ重要な機能をいとなみ、言語活動の上で、直接に端的に吾人の心的状態を人に傳へる一面がある。この二つの側面が記號的言語と暗示的言語である²⁸。

（中略）

音聲象徴の考へられるのは、恣意的記號としての言語のほか、一種プラス、アルファなるものがあるからである。

例：「煙草」

子供が煙草と云ふよりも、パッパと云ふ語を早くおぼえる。

例：「かみなり」

「かみなり」と云ふ語はおぼえないでも、「ごろごろさま」と云ふのは容易におぼえるのは、全くこの為にちがひない。

音聲象徴は、言語の発達の上に大きい役割を演じてゐる。語の發生に於て、音聲象徴は存在したとは必ずしも云はれないが、音聲が意義を暗示するやうに発達して來たと考へられる例は、いくらかもある²⁹。

例：「をかし」「をこ」「愚か」「疎^{オロカ}」

小林（1941）は、中古語「つぶつぶ」を例にとり、各時代の文学作品から例を挙げて、その意義の変遷を明らかにしている。小嶋（1972）は、小林（1941）にあげられている「つぶつぶ」の意味を次のようにまとめている³⁰。

- ①水の流れる音を模した擬声語
- ②涙の流れるさま
- ③縷縷として物語るさま
- ④物をつぶさに書くさま
- ⑤思いの胸中に漲るさま
- ⑥人の肥え太っているさま（肉体の豊満さ）

「つぶつぶ」の意味変化について、小林（1941）は次のように述べる。

記號的性能と暗示的性能とは渾融してゐるが、その混和の割合には種々のものがある。擬聲語は、記號的意義よりむしろ暗示的意義を持つてゐることが大きく、その内容は情趣的であり、漠然たるものがあるから、對象の上にある氣分の聯想に由つて、容易に意義は移つて行くのである³¹。

小林が明らかにしている「つぶつぶ」の意味の変化をみると、もとの意味である水の流れる音から、涙の流れるさま、縷縷として物語るさま、物をつぶさに書くさま、思いの胸中に漲るさま、人の肥え太っているさままで、その意味を拡張している。つまり、音を表す擬音語から、様態を表す擬態語が派生しているのである。このような、擬音語からの擬態語の派生は、日本語のオノマトペに見られる一般的な傾向であり、結果的として、オノマトペの語彙の多義語化を引き起こしている。

5 金田一春彦(1951)「コトバと旋律」

金田一(1951)では、コトバのフシを産み出す要因を九種に分け、そのうち、コトバのフシの第八要因は「模写・象徴の存在」であると述べている。金田一は「擬声語」を「模写」、「擬態語」を「象徴」と名付けている。

〈模写〉

話し手が、ある語句を用いる時に、内容が生彩を帯びて聞こえるように、特殊なフシをつけてその状況を模写することである³²。

模写の例：「ゴロゴロ」

①修飾を用いる方法

雷が耳をつんざくばかりに**ゴロゴロ**鳴った。

②直接に表現する方法

雷が**ゴロゴロ**と鳴りました。

〈象徴〉

服部四郎先生が既にこれを注目され、これを「誇張の強調」と呼んでおられるが、多くの例を集めて考えてみると、「誇張」という名で呼ぶには似つかわしくないものもあるので、あえて象徴と呼びたいと思うのである³³。

「象徴」の例：「ブラリブラリ」

①通常：

ひょうたんが**ぶらりぶらり**ゆれている。

②呑気そうな表現：

ヒョウタンガ**ブラーリブラーリブラーリブラーリ**トユレテイル。

また、金田一は「模写」と「象徴」の持つ性質を以下のようにまとめている³⁴。

- ①合目的的である（社会によって多少違うが）
- ②非体系的である（音響が一つ増えればその様式も一つ増える）
- ③ラングの外にある
- ④イントネーション・プロミネンスについて

- a. 模写のごときは、音を表す擬声語か、引用された他人のコトバに限られている。象徴も、加えられるのは、大体形容詞と副詞と限られている。
- b. もとの語のアクセントをあとかたもなく破壊する力をもっている。

c. 新しい型を考え出すことが出来そうである。

以上は金田一（1951）「コトバと旋律」において、「模写」と「象徴」というコトバのフシの一要因について、擬声語を「模写」、擬態語を「象徴」と呼び、それぞれの持つ性質をまとめたものである。それらの性質からみると、話し手がその場で物事のありさまを相手に伝える際、もとの状態を最大限に反映させるため、アクセントを破壊してでも、かつ、必要に応じたイントネーション・プロミネンスの新しいつけかたまでも認められるのが分かる。そして、音響が一つ増えればその様式も一つ増えるという点からすると、オノマトペはバリエーションに富む性格を持つというのにつながる。

6 天沼（1974）『擬音語・擬態語辞典』一序文「擬音語・擬態語について」

天沼（1974）は、擬音語について、以下のように述べている。

擬音語とは、人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、ものを飲んだり、平手でたたいたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音、また、自然界に自然に発する音響や、無生物が、いわば自然に、あるいは、外力の作用を受けて発する音響を、音声で表現した言葉である。p7

そして、天沼（1974）は、擬態語について、以下のように述べている。

擬態語とは、われわれ人間を含む生物、無生物、自然界の事物の有様・現象・変化・動き・成長などの状態・様子を描写的・象徴的に音声で表現したものである。p8

擬音語と擬態語ははっきりと区別を付けにくいので、天沼（1974）は、一括して「擬音語・擬態語」として取り扱うことにした。また、天沼（1974）は、漢語由来の言葉、古語、方言、および一般性がない音響の描写は数限りがないため、擬音語・擬態語としない。くわしくは以下のようなになる。

①漢語（字音語）。（堂々、潺潺）

②名詞・副詞・動詞の連用形、形容詞の語幹、その他の品詞の語の一部などを二つ重ねて疊語にしたもの。

・道→みちみち考えながら歩く。

・先ず→まずまず成功ということが出来る。

・生きる→いきいき（と）した表情。

・赤い→あかあかと輝く夕日。

・見る→みるみる顔色が変わった。

③本来の副詞、および、主として、幼児語・事物の名称としてだけに用いられるもの。

いよいよ（愈々）、ますます（益々）、わざわざ（態々）

④定型をはずれた特殊な形のもの

ひばり：ピールル、ビールル、パイパイパイパイパイパイパイパイ、ビルビル、チーチーチッチョイチョイ、パイパイパイ…

自動きつぷ発売機の音：チャラチャラ、コチン…ジャラジャラ〔毎日新聞（夕刊）47.3.15〕

⑤古語・方言

天沼（1974）『擬音語・擬態語辞典』で取り扱うのは、すべて現代語である。

7 浅野鶴子・金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』—序文「擬音語・擬態語概説」

金田一（1978）は、日本語のオノマトペを擬音語、擬態語、擬情語、擬容語に分けている。それぞれについて、以下のように述べている。

擬音語：外界の音を写した言葉を擬音語と呼ぶ。p5

擬態語：音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉で、これは擬態語と呼ぶ。

擬容語：無生物の状態を表すものの方は、正統の「擬態語」で、生物の状態を表すものは擬容語とでも言うべきものだ。p8

擬情語：擬態語の中には、さらに進んで、人間の心の状態を表すようなものもある。……これは擬情語と言うべきものである。p8

また、擬音語・擬態語の由来に関しては、以下のように述べている。

擬音語・擬態語には、もともと固有の日本語、すなわち和語のものと、中国から渡来した漢語のものがある。その他に欧米から渡来した洋語もあり、擬音語には時計の音チクタクがあり、擬態語には電光形に曲がって進むことをジグザグとしたのはその例であるが、類例は少ない。p11～12

つまり、前述した天沼（1974）と異なり、金田一（1978）は、漢語由来のものを日本語のオノマトペとみなしている。

8 小野正弘(2007) 『擬音・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』

小野正弘が著した『擬音・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』において、オノマトペの定義については以下のように述べている。

オノマトペとは、これまで、擬音語(または擬声語)・擬態語などとも呼ばれてきた言葉の総称です。「オノマトペ」というカタカナ言葉そのもの語源はフランス語で、*onomatopée* とつづります。英語だと *onomatopoeia* で、発音はオノマトピーアのような感じになります。おおもとは古代ギリシア語にまでさかのぼり、造語すること、名前を造ることというがあつたとされています³⁵。

つまり、古代ギリシア語の解釈によると、オノマトペという言葉は擬音語や、擬態語のみならず、名前を創るという意味も含まれている。従って、オノマトペには物の音、動物の鳴き声、そして人間の感情を示す声や動作の様子、状態等々を名付けるという働きがあると考えられる。

第三節 日本語オノマトペの分類

天沼（1974）は、現代日本語のオノマトペを一拍、二拍、三拍、四拍のものに分け、それぞれ異なる拍を X、Y、Z、W で表し、そして、特殊音は、促音を t、リ音を r、撥音を n、長音を：で示し、以下のように、計 31 の型に分類している。（五拍以上のものについては、四拍のものに促音「ッ」や撥ねる音「ン」がついたものがほとんどなので、細かい分類は行わないことにしている。）

1、一拍のもの

①X 型 例：フ

2、二拍のもの

②XY 型 例：ピタ

③X t 型 例：ギョッ

④X:型 例：ツー

3、三拍のもの

⑤XY t 型 例：パラッ

⑥XY r 型 例：チラリ

⑦XY n 型 例：パタン

⑧X t X 型 例：サッサ

⑨XY:型 例：スイー

⑩X : Y 型 例：チーン

⑪X : t 型 例：パーッ

4、四拍のもの

⑫XYXY 型 例：イライラ

⑬XYZY 型 例：ウロチョロ

⑭XYXZ 型 例：キンキラ、

⑮XYZW—1 型 例：カサコソ (kasakoso)

⑯XYZW—2 型 例：チョコマカ (tyokomaka)

⑰XYZW—3 型 例：ガタピシ (gatapisi)

⑱XYZW—4 型 例：スタコラ (sutakora)

⑲XYZW—5 型 例：ゴタクサ (gotakusa)

⑳XYZW—6 型 例：ワンサカ (wannsaka)

㉑XYrt 型 例：カラリッ

㉒XYrn 型 例：カラリン

㉓XtYZ 型 例：ウッスラ

㉔XtYr 型 例：ウッカリ

㉕XtYn 型 例：ゴットン

- ②⑥XnYr 型 例：アングリ
- ②⑦XY:r 型 例：スラーリ
- ②⑧XY:t 型 例：ジローツ
- ②⑨XY:n 型 例：ガラーン
- ③⑩X:Yr 型 例：スーフリ
- ③⑪X:Y:型 例：ガーガー

このように、天沼（1974）は日本語のオノマトペを31の型に分類しているが、金田一（1978）は、拍や特殊音といった同じような基準で、日本語のオノマトペを18の型に分類している。

- ①一拍のもの
 - ふ（と）、つ（と）
- ②一拍の語根＋「い」「ん」「っ」引く音のもの
 - つい（と）、ぶい（と）、ぼん（と）、かつ（と）
- ③二拍の語根のもの
 - がば（と）、びた（と）
- ④一拍の語根に＋「い」「う」「ん」「っ」のうちのもものが二箇
 - ごうん、ぼうっ、ぼいん
- ⑤二拍の語根＋「っ」の形のもの
 - ごろっ（と）、ばさっ（と）、ぱたっ（と）、ぴかっ（と）、びたっ（と）
- ⑥二拍の語根＋「ん」のもの
 - かちん（と）、こつん（と）どきん（と）、ぱたん（と）、ぴよこん（と）、ぺたん（と）
- ⑦二拍の語根＋「り」の形のもの
 - ぐるり（と）、ごろり（と）、つるり（と）、ぴかり（と）
- ⑧ ⑦の一種「り」でないもの。古風な語
 - うらら、しとど、そよろ、とどろ
- ⑨二拍の語根の中間に、つめ、はねの入ったもの
 - ざんぶ（と）、むんず（と）、やんや（と）、かつか（と）、さっさ（と）
- ⑩ ⑦の形の第一拍と第二拍の間に、はねる音、つめる音の入ったもの
 - あんぐり、ぐんにゃり、こんがり、こんもり、ちんまり、どんぶり、まんじり、やんわり、あっさり、うっとり、おっとり、がっかり、がつくり、きっちり、くつきり、さっぱり、しっかり、しっぽり、すっかり
- ⑪二拍の語根の繰り返し、ことに第二音がラ行のものが多い

からから、がらがら、かりかり、きらきら、くるくる、こりこり、ころころ、さらさら、ざらざら、じゃらじゃら、しゃりしゃり、じりじり、するする、そろそろ、ぞろぞろ、たらたら、つるつる、とろとろ、いそいそ、かさかさ、かたかた、かちかち、がぶがぶ、きびきび、くしゃくしゃ、ぐずぐず、くよくよ、げぶげぶ、ごしごし、こそこそ、こちこち、ごとごと
ごぼごぼ

⑫前項に似て類音のものを重ねるもの

あたふた、かさこそ、かたこと、からころ、ちらほら、つべこべ、てきばき、どぎまぎ、ぺちやくちや、むしゃくしゃ

⑬全く似ていない二拍を重ねたもの

がたびし、そそくさ(と)、ちょこなん(と)、すたこら、ちょこまか、ぱちくり、

⑭二拍語+「りん」「りっ」の形

くるりっ(と)、ころりん

⑮五拍のもの

ころりんこ(と)、けろりかん(と)

⑯ ⑦⑧⑨の繰り返し

ぐてんぐてん、ころりころり、ごろんごろん、のたりのたり、ぱっかぱっか

⑰ ⑯に似てあとのものは、多少形のちがうもの

しどろもどろ、てんやわんや、のらりくらり、やっさもっさ、

⑱その他の六拍のもの

こけこっこう、すってんてん、すっからかん、つんつるてん、とんちんかん、ほううほけきょう、ゆっくりかん

これらに対して、田守(1999)は、オノマトペを「1モーラを基本形に持つもの」と「2モーラの語基を持つもの」に大きく分け、そして、Cを子音、Vを母音、Qを促音、Nを撥音、「り」を「ri」で表して、簡潔に7つの型に分類している。

(1) 1モーラを基本形に持つもの

①CV ふ

②CVQ ふっ、CVN ばん

③CVV がー

④CVVQ ばーっ、CVVN ばーん

⑤CVQ-CVQ くっくっ、CVN-CVN ばんばん、CVV-CVV ぎゃーぎゃー

(2) 2モーラの語基を持つもの

⑥CVCV そよ

⑦CVCVQ ばたっ、CVCVri ばたり

日本語のオノマトペというと、おもに和語のオノマトペがあげられるが、金田一(1978)は、和語だけでなく、漢語のオノマトペもとりあげて、それを11種類の型に分けている(漢語のオノマトペは拍ではなく、漢字の文字数によって分類されている)。

(一)漢字一字のもの：

燦サン(として)、寂セキ(として)、恬テン(として)、香ヨウ(として)

(二)漢字二字のもの：

①「一焉」の形のもの

溢焉ヨウエン、忽焉コツエン

②「一乎」の形のもの

確乎カツコ、斷乎ダンコ

③「一爾」の形のもの

莞爾カンジ(として)、卓爾タクジ、卒爾ソツジ、渺爾ビョウジ(たる)

④「一若」の形のもの

自若ジジヤク(たり)、瞳若ドウジヤク(たらしめる)

⑤「一如」の形のもの

突如トツジョ、躍如ヤクジョ

⑥「一然」の形のもの

宛然、嫣然、画然、愕然、敢然、欣然、決然、公然、昂然、傲然、渾然、燦然、积然、肅然、悄然、騷然

⑦同じ語根を重ねたもの

藹々、唯々、營々、奄々、延々、炎々、怏々、峨々、赫々、嬉々、汲々、炯々、呱々、煌々、匆々、淙々

⑧同じ子音の拍を重ねたもの

詰屈キツクツ、恍惚ヨウコツ、颯爽サクソウ、忸怩ジュジ、瀟洒ショウシヤ、參差サンシ、淒愴セイソウ、倉卒ソウソツ

⑨同じ韻をもつ拍を重ねたもの

婀娜アダ、靉靆アイタイ、安閑アンカン、蜿蜒エンエン、宛轉エンテン、混沌コシタン、索漠サクバク、蹉跎サダ、慘憺サンタン、燦爛サンラン、蕭條ショウジョウ、從容ジョウヨウ、嬋娟センケン、踟躕ソウロウ

⑩漢字三字のもの

鞠躬如キョクキョウジョ、欣々然キンキンゼン、洋々乎ヨウヨウコ

⑪漢字四字のもの

唯々諾々イイダクダク、意気揚々イキヨウヨウ、侃々諤々カンカンガクガク、虎視眈眈コシタンタン、小心翼翼ショウシンヨクヨク、正々堂々セイセイドウドウ、戰々センセン、兢兢キョウキョウ、八面玲瓏ハチメンレイロウ、優々閑々ユウユウカンカン

第一章 満文『玉堂字彙』から見た満州語のオノマトペの諸相

第一節 満州語のオノマトペの形態

1 はじめに

『言語学大辞典』によれば、ツングース諸語には、エウエンキー語、エウエン語、ソロン語、ネギダル語、ウデヘ語、オロチ語、ナーナイ語、オルチャ語、ウイルタ語、満洲語など10の言語がある³⁶。満洲語 (Manju gisun) は、その中の一つであり、唯一表記手段の文字を持っている。津曲 (2002) は、「満洲語は、系統的にも構造的にも、いろいろな点で日本語によく似た言葉である。」と述べている³⁷。そして、「満洲語の語彙の中で、特徴的なものとして、豊富な擬音語、擬態語があげられる。」という³⁸。本節では、満文『玉堂字彙』の中の満洲語の擬音語・擬態語 (オノマトペ) を形態の観点から検討し、その基礎的な分析を行う。

2 先行研究と問題点

2. 1 先行研究

管見の限りでは、満州語のオノマトペについての論文は、暁春 (2015) 「満語擬声詞刍議」 (筆者訳: 「満洲語の擬声語についての卑見」) しかない³⁹。まず、この暁春 (2015) が擬声語について明らかにしていることを見ていく。

2. 1. 1 語彙の特徴による3種類

暁春は、語彙の特徴から、満洲語の擬声語を3種類に分けている。

- ①人間が発する声: 「ei ei」哭声→泣き声。「ho ha」叹气声→ため息。
- ②動物が発する声: 「ko ko」鸡鸣声→鶏の鳴き声。「gon gan」天鹅鸣声→白鳥の鳴き声。
- ③物が発する音: 「cang cang」钟声→鐘声。「tung tung」鼓声→太鼓の音。

2. 1. 2 語尾音と語頭音から見た特徴

暁春は、『漢清文鑑簡編』における擬声語200語について、語尾と語頭の音の分布状況を調査し、満洲語の擬声語は語頭音が状態を、語尾音が強さを表すことができると述べている。

A. 語尾音の特徴

- ①「r」を語尾音とした擬声語:

- ・意味：一般表示颤动，震动或连续发出的声音（筆者訳：一般的に小刻みに揺れ動く。震動する。または続けざまに発生する物音を指す）。
- ・例：「or ir」诵经声→読経の声。「sor」下雨声→雨が降る音⁴⁰。
- ②「ng」を語尾音とした擬声語：
 - ・意味：表示较长而厚重的声音或强烈碰撞，穿透力较强的声音（筆者訳：長い且つよく響く音、または激しく衝突したり、強く貫通したりする音を表す。）
 - ・例：「cang cang」钟声→鐘声。「tung tung」鼓声→太鼓の音。
- ③「k」を語尾音とした擬声語：
 - ・意味：表示在短时间内发生的聲音（筆者訳：短時間のうちに発する声と音を表す）。
 - ・例：「kiyak」折干木声→乾いた木の折れる音。「tok tok」→ドアをノックする音。
- ④「s」を語尾音とした擬声語：
 - ・意味：表示断裂，撕裂的声音（筆者訳：断ち切ったり、引き裂いたりする音を表す）。
 - ・例：「kas kas」剪布声→布を切る音。「pes pas」马蹄羁绊声→馬の脚のもつれる音⁴¹。
- ⑤「b」を語尾音とした擬声語：
 - ・意味：表示力度较大，但不太响亮的声音（筆者訳：力強いが、あまり高らかではない音を表す）。
 - ・例：「tab」→水滴が落ちる音。「giyab」→犬が吠える音。
- ⑥「母音」を語尾音とした擬声語：
 - ・意味：除了人类发出的声音之外，还表示动物发出的声音（筆者訳：人間ないし動物が発する声を表す）。
 - ・例：「ei ei」哭声→泣き声。「ho ha」叹气声→ため息。

曉春がまとめている語尾音の分布状況の表から見ると、『漢清文鑑簡編』における満洲語の擬声語 200 語のうち、「r」(86)「ng」(43)「k」(21)を語尾音とする擬声語は圧倒的に数が多い。中でも、「r」を語尾としたものは、43%を占めている⁴²。

B. 語頭音の特徴

- ①「b, p, d, t, g, k」などの破裂音を語頭音とした擬声語：
 - ・意味：表示爆破或強烈的声音（筆者訳：爆発的、或いは強烈的な音を表す）。
 - ・例：「tung tung」鼓声（太鼓の音）
- ②「f, w, s, š, h」などの摩擦音を語頭音とした擬声語：

・意味：表示浑浊或沙哑的声音（筆者訳：どんよりとした声。または、嘎れた声を表す）。

・例：「her har」喉转声（痰の纏わる音⁴³）

③「c, j」を語頭音とした擬声語：

・意味：表示尖细，刺耳的声音（筆者訳：甲高く、鋭い声と音を表す）。

・例：「jingjing jangjang」箫管唢呐声→箫やチャルメラを吹く音。

④「m」を語頭音とした擬声語：

・意味：表示牛羊尖叫声或幼儿哭泣声（筆者訳：牛や羊の鋭い鳴き声、或いは幼児の泣き声を表す）。

・例：「mung mang」牛吼鹿鸣声（牛や鹿の鳴き声）

「miyang ming」乳儿哭声（赤ん坊の泣き声）

⑤「l」を語頭音とした擬声語：

・意味：表达细雨或话不休歇等状况（筆者訳：小糠雨、話が止まらないなどの状況を表す）。

・例：「ler」细雨（細かに降る雨）「lor」话不休歇状（ぺちやくちやと喋りまくる）

⑥「y」を語頭音とした擬声語：

・意味：表达水细流貌，蚊蝇飞声（筆者訳：水が細かく流れるさま。蚊や蠅が飛んで鳴らす音）。

・例：「yar」水细流貌（水が細かく流れるさま）

「yang ing」蚊蝇飞声（蚊や蠅が飛んで鳴らす音）

⑦「母音」を語頭音とした擬声語：

・意味：表示人类发出的声音（筆者訳：人間が発する声を表す）。

・例：「ei ei」哭声（泣き声）「or」呕吐声（嘔吐の声）

曉春がまとめている語頭音の分布状況の表から見ると、『漢清文鑑簡編』における200個の満洲語の擬声語のうち、「k」「g」を語頭音とした擬声語は、比較的、数が多い。中でも、「k」を語頭音としたものは26.7%を占めている。

2. 1. 3 構造から見た特徴

曉春は、満洲語の擬声語を、その音節構造に基づいて、「単一式」→（単一型）、「重疊式」→（重疊型）、「諧音式」→（諧音型）、「対偶式」→（対偶型）の四種類に分けている。

①**単一型**：「a」（単音節）、「giyab」（二音節）、「hūwalar」（三音節）

②**重疊型**：「ei ei」（単音節重疊）、「giyar giyar」（二音節重疊）

③**諧音型**：「ger gar」（母音諧音）、「kakari fakari」（子音諧音）

④**対偶型**：「miyang ming」（脱音対偶）、「hung hiyong」（増音対偶）

2. 2 先行研究

これまで、満洲語のオノマトペに関する先行研究は、管見の限り、上記した曉春（2015）しか見つからなかった。この論文は意味、音声、構成の三つの面から分類したものである。しかし、曉春が分類した研究対象は、専ら擬音語であり、擬態語は、極めて数が少ない。満洲語には、擬音語だけではなく、擬態語も豊富に存在しているので⁴⁴、擬態語を研究対象から外せば、満洲語のオノマトペの特徴を十分に明らかにすることができないと思われる。

また、曉春（2015）は満洲語の擬声語は連用修飾語、述語、独立語の3つの構文的機能をもつと述べている。そのうち、連用修飾語というのは、満洲語の擬声語が「seme」と結合し、動詞または動詞句を修飾する機能をもつものである。この「seme」は、動詞である「sembi」から派生したものである。「sembi」という動詞は、活用が、「seme」「sere」「sehe」などと活用する。「seme」のほかにも、満洲語の擬声語は、「sere」「sembi」などを伴って、連体修飾や言い切りなどの機能をもつようになる。「sembi」「seme」に関しては4.2で詳述する。

3 研究方法と目的

本節は寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』から、オノマトペ、および漢字に対する満洲語の解釈の中のオノマトペを抽出する⁴⁵。そして、形態的な分類をし、満洲語のオノマトペ「～seme」と日本語オノマトペの「～と」との類似性について検討する。

4 形態分類

4. 1 満洲語『玉堂字彙』におけるオノマトペの形態上の分類

『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』の子集から戌集までの11集にある満洲語のオノマトペ、および漢字に対する満洲語の解釈に見られるオノマトペは、延べ語数で826語、異なり語数で234語である⁴⁶。満洲語のオノマトペを大きく「**単語形式**」と「**双語形式**」に分け、それぞれの分布状況をグラフで示す。

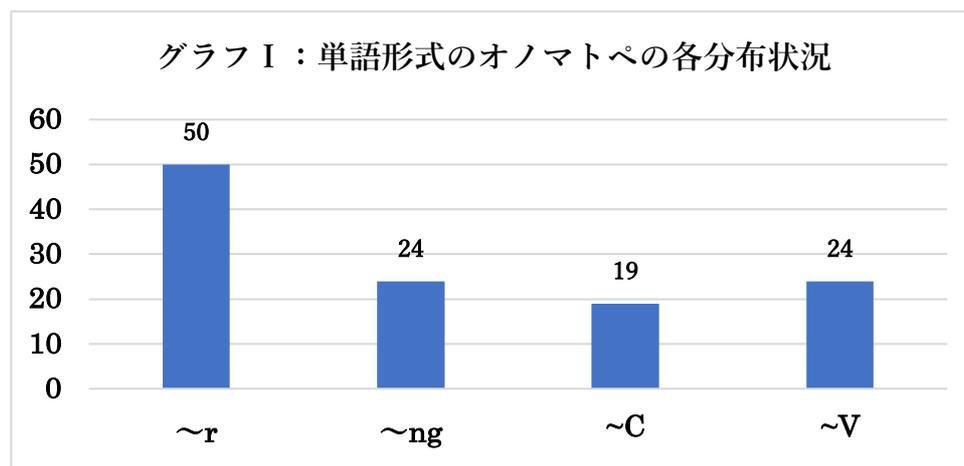
4. 1. 1 「単語形式」のオノマトペの分布状況

「単語形式」のオノマトペは、音節数は決まっておらず、「seme」を付けずに、一つの単語をなすものを指す。そして、それらは、「～r」「～ng」「～C」「～V」に下位分類できる。

①「～r」型：「bodar」、「cir」などのような、「r」を語尾としたもの

- ② 「～ng」型：「cing」「darang」などのような、「～ng」を語尾としたもの
- ③ 「～C」型⁴⁷：「cib」「fik」などのような、「子音」を語尾としたもの
- ④ 「～V」型⁴⁸：「cu」「ha」などのような、「母音」を語尾としたもの

それぞれの語数は次のグラフのようになる。



グラフ I で示したように、「～r」を語尾とした語数は、とりわけ多く、「単語形式」の 42.7%を占めている。これは、『漢清文鑑簡編』における擬声語 200 語のうち「r」を語尾とした語が 43%を占めるとしている前掲の曉春（2015）と一致する⁴⁹。

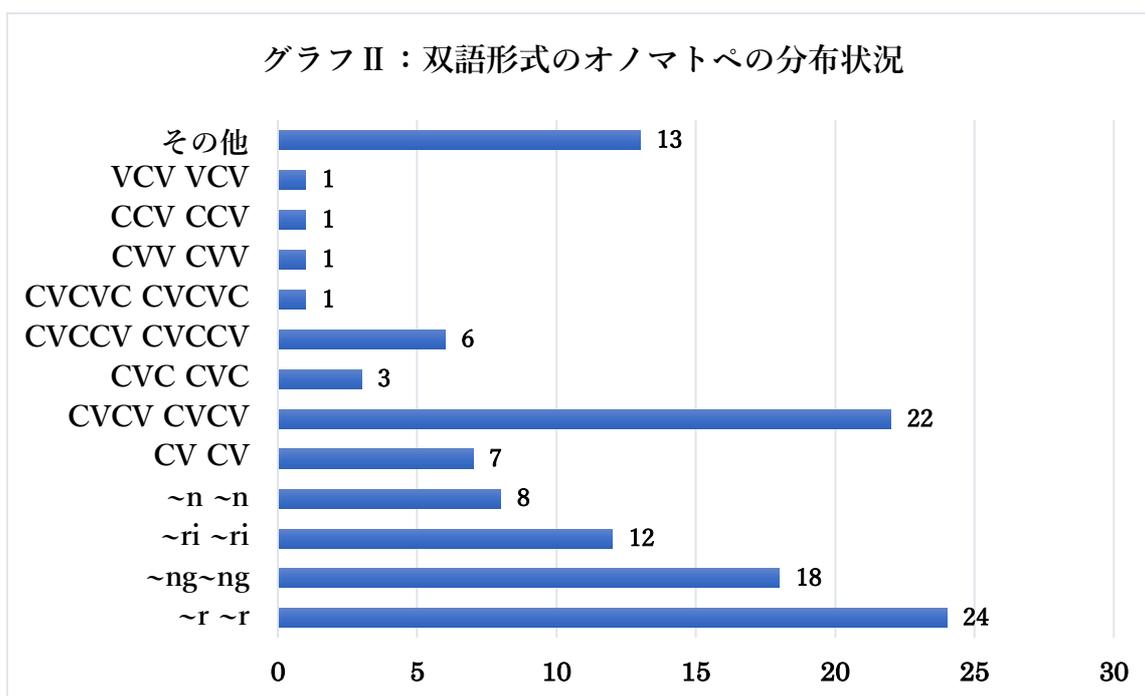
次に、二番目に多い「～ng」と「～V」は、20.5%を占めている。これも、曉春が割り出した数（21.5%）とほぼ重なる。ちなみに、筆者は、「bur bur」、「fer far」などの二つのグループをなすオノマトペは「双語形式」としたので、ここでのデータは、「双語形式」の「～r ～r」語や「～ng ～ng」語を除いたものである。

4. 1. 2 「双語形式」のオノマトペの分布状況

「双語形式」のオノマトペとは、「単語形式」に対し、二つの部分からなるものを指す。前提条件は、「単語形式」と同様に、「seme」を付けないままである。

- ① 「～r ～r」型：「bur bur」「fer far」などのように、それぞれの部分の語尾が「r」であるもの
- ② 「～ng ～ng」型：「cang cang」「jang jing」などのような、それぞれの部分の語尾が「ng」であるもの
- ③ 「～ri ～ri」型：「šari širi」「ederi tederi」などのような、それぞれの部分の語尾が「ri」であるもの

- ④ 「～n ～n」型：「derden dardan」「koskon kaskan」などのような、それぞれの部分の語尾が「n」であるもの
- ⑤ 「CV CV」型：「fu fa」「gu gu」などのような、「CV」の繰り返し
- ⑥ 「CVCV CVCV」型：「bubu baba」「cucu caca」などのような、「CVCV」の繰り返し
- ⑦ 「CVC CVC」型：「keb kab」「tab tib」などのような、「CVC」の繰り返し
- ⑧ 「CVCCV CVCCV」型：「bekte bakta」「gebge gabga」などのような、「CVCCV」の繰り返し
- ⑨ 「CVCVC CVCVC」型：「katak kitik」のような、「CVCVC」の繰り返し
- ⑩ 「CVV CVV」型：「hao hio」のような、「CVV」の繰り返し
- ⑪ 「CCV CCV」型：「dze dze」のような、「CCV」の繰り返し
- ⑫ 「VCV VCV」型：「oyo oyo」のような、「VCV」の繰り返し
- ⑬ 「その他」：「kiyab kib」「piyas pis」「kūwata kiti」などのような、グループごとに、母音と子音の組み合わせの音節数が異なるもの



グラフ II から分かるように、「単語形式」と同様、「～r」と「～ng」を語尾とした「双語形式」のオノマトペは多い。また、この「双語形式」では、「CVCV CVCV」型のオノマトペもそれらと同じくらいの語数となっている。

「双語形式」のオノマトペは、かなり複雑である。形態上の特徴から分類すると、13種類になるが、意味的な特徴からは、さらに下位分類することができると思われる。

次に、満洲語のオノマトペの後ろにつく「seme」「sembi」と日本語オノマトペの後ろにつく「と」との類似性について検討していきたいと思う。

4.2 「～seme」と「～と」との類似性

河内（2002）は、満洲語のオノマトペについて、「……その語だけで、あるいは、補助動詞 sembi（と言う）の各種活用形と結合して連用修飾語、述語、目的語となることが出来る。」と述べている⁵⁰。また、津曲（2002）は、満洲語の擬音語・擬態語は「単独で用いられるほか、同形のまま、（あるいは一部の母音や子音を変えた形で）反復して用いられる。さらに、後置詞 seme（と）を伴うことも多い。」と指摘している⁵¹。

つまり、「seme」は、動詞である「sembi」の活用形あり、「と」に相当するものである。以下、「sembi」「seme」の定義を各満和辞書に沿って見ていく。

4.2.1 「sembi」「seme」とは

羽田（1972）『満和辞典』、福田（2008）『補訂満洲語文語辞典』、河内（2014）『満洲語辞典』では、「sembi」「seme」について以下のように書かれている。

表 4-1 「sembi」「seme」とは

	『満和辞典』 ⁵²	『補訂満洲語文語辞典』 ⁵³	『満洲語辞典』 ⁵⁴
sembi	語る。話す。…と云ふ。	動詞。(1)と言う。だそうだ。(2)と する。(3)と思う。	補助動詞。云う。～ と云う。
seme	…と。…と云 ひ。…とて。	助詞。sembi の限定の副動詞である が、助詞化している。(1)引用の 「と」。(2)逆接の「とも」「ど も」「とて」「ても」(3)サ変動詞 連用形の「して」(4)「と思い」	助動詞。接続詞。動 詞。(sembi の非完 了連用形)。～と (いう)。～とて。 と言っても。と思っ て。として。

次に、日本語オノマトペの「～と」を見ていく。日本語の「と」は、品詞としては格助詞、接続助詞、接続詞とされるが、ここでいう「～と」は、格助詞と思われる。『日本国語大辞典』では、その一部は以下のように説明されている。

と(一)〔格助〕②連用関係を表すもの。㊦引用を表わす。文あるいは文相当の語句や擬声語を承け、下の動詞（「思う」「言う」「聞く」などの場合が多い）の内容を表わす。㊧体言を承けてそれを状態性概念とし、また、擬態語を承けて状態性副詞を構成し、動作概念を修飾する。体言を承けた場合、比喩的修飾となることがある⁵⁵。

上記した「sembi」「seme」の定義には、いずれも、オノマトペに関係すると思われるところがないが、「seme」には「引用の「と）」という用法があげられている。これは、日本語「と」の「引用を表わす」と一致する。即ち、満洲語でも、日本語でも、オノマトペの後ろに引用を示すものを伴うのが、一般的だと考えられる。満洲語『玉堂字彙』におけるオノマトペの中で、「sembi」「seme」を伴うものがどのくらいあるかについては、4.2.2と4.2.3で述べる。

4.2.2 「sembi」を伴うオノマトペ

満洲語『玉堂字彙』（亥集を除き）におけるオノマトペ、および漢字に対する満洲語の解釈に出てくるオノマトペの延べ語数は、826語である。そのうち、「sembi」を伴うものは360語であり、約43.7%を占めている。以下、「sembi」を伴うものについて、いくつかの例を取り上げ、その日本語訳を参考にしながら見ていく。

表4-2 満洲語『玉堂字彙』における「sembi」を伴うオノマトペとその日本語訳の例

漢字	所在	漢字に対する満洲語の解釈	満洲語の日本語訳 ⁵⁶
僅	巳・水部 p41-7	muke <u>tor</u> sembi	水が <u>くるくる</u> と <u>回る</u> さま
槻	巳・水部 p135-9	muke <u>hūwalar</u> sembi	水が <u>さらさら</u> と <u>流れる</u> 様
訃	酉・言部 p40-4	<u>kiyarkiya</u> sembi	<u>べちやくちや</u> と <u>しゃべる</u>
辨	巳・牛部 p203-4	ihan <u>meng mang</u> sembi	牛が <u>モーモー</u> と <u>鳴く</u>
角	巳・水部 p18-10	<u>bur bur</u> sembi	<u>ぶくぶく</u> と <u>沸き上がる</u> 様
聒	未・耳部 p201-9	<u>gib</u> sembi	<u>グワーン</u> と <u>耳が振動する</u> 様

表4-2で示したように、「～+sembi」は「～と+動詞」に訳される傾向がある。満洲語の解釈では、満洲語のオノマトペが動詞である「sembi」と結合し、一つの動詞句となっている。一方、その日本語訳では、「オノマトペ+と」を、様々な動詞と組み合わせることによって、満洲語の解釈の動詞句に対応していると考えられる。表4-2から見ると、「sembi」は、日本語オノマトペの後ろにつく「と」と、そのオノマトペが修飾する具体的な動作を表わす動詞を合わせたものに相当するということが分かる。

4.2.3 「seme」を伴うオノマトペ

満洲語『玉堂字彙』（亥集を除き）におけるオノマトペの中で、「seme」を伴うものは167語あり、約20.2%を占めている。以下、「seme」を伴うものについて、その日本語訳を参考にしながら見ていく。

表 4-3 満洲語『玉堂字彙』における「**seme**」を伴うオノマトペとその日本語訳の例

漢字	所在	漢字に対する満洲語の解釈	満洲語の日本語訳
寒	巳・水部 p24-2	<u>hūwalar</u> seme eyembi	<u>さらさら</u> と流れる
匳	寅・ㄹ部 p114-2	<u>jir jir</u> seme eyembi	<u>チョロチョロ</u> と水が流れる
侃	子・人部 p55-2	<u>kang</u> seme gisurembi	<u>がやがや</u> としゃべる
陔	戌・阜部 p98-9	<u>kiki kaka</u> seme injembi	<u>カッカ</u> と笑う
幘	丑・口部 p20-4	<u>kiyatar</u> seme injembi	<u>からから</u> と笑う
牲	午・生部 p67-5	<u>kunggur</u> seme ilimbi	衆人が <u>ばたばた</u> と立つ

表 4-3 から分かるように、「～+seme」は、「～と」に訳される傾向がある。「sembi」に対し、「seme」の後ろに、そのオノマトペに対応する具体的な動作を表わす動詞が付いているので、「seme」は日本語の「と」に当たると考えられる。この場合は、日本語の表現と一致すると言える。「sembi」と「seme」との違いについては、表 4-4 で示す。

表 4-4 「sembi」と「seme」の違い

漢字	所在	漢字に対する満洲語の解釈	満洲語の日本語訳
槻	巳・水部 p135-9	muke <u>hūwalar</u> sembi	水が <u>さらさら</u> と流れる様
寒	巳・水部 p24-2	<u>hūwalar</u> seme eyembi	<u>さらさら</u> と流れる

表 4-4 から分かるように、「hūwalar」は「さらさら」という意味であり、上段と下段の違いは「流れる」という動詞がいかにな表現されているかにある。上段の例では、「sembi」が「と流れる」を意味するのに対し、下段の例では、「eyembi」が「流れる」を意味している。「sembi」そのものには、「流れる」という意味がないが、「sembi」の前につくオノマトペによって、「sembi」の意味も変化するということである。

つまり、「sembi」より、「seme」の方が日本語オノマトペに付く「と」に近いと考えられる。

4. 2. 4 まとめ

4. 2. 2 と 4. 2. 3 で取り上げたものについては、以下のようにまとめることができる。

$$\begin{aligned}
 O_{\text{満}}^{57} + \text{sembi} &\quad \cong \quad O_{\text{日}}^{58} + \text{と} + V_{\text{日}}^{59} \\
 O_{\text{満}} + \text{seme} + V_{\text{満}}^{60} &\quad \cong \quad O_{\text{日}} + \text{と} + V_{\text{日}}
 \end{aligned}$$

以上、形態の面から、「seme」「sembi」を伴うオノマトペについて基礎的な分析を行ってきたが、満洲語には、「seme」「sembi」のいずれも伴わないオノマトペも存在している。この点に関しては、満洲語『玉堂字彙』におけるオノマトペを擬音語と擬態語に分けた上で、「seme」「sembi」を伴わないオノマトペの特徴について触れないことにする。

また、gar gir→がやがや(gaya gaya)、darang→だらん (darann)、kalang→からん (karann) といった例にみられるように、満洲語と日本語のオノマトペの音声上の類似性についても、検討していきたいと思う。

原典資料：

- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』子集-研究と翻刻・繙訳』
語学教育フォーラム-27-号 大東文化大学語学教育研究所 2013. 01. 18
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』丑集-研究と翻刻・繙訳』
語学教育フォーラム-29-号 大東文化大学語学教育研究所 2014. 02. 28
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』寅集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第1号-「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2014. 10. 01
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』卯集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第2号-「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015. 05. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』辰集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第3号-「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015. 08. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』巳集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第4号-「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015. 12. 25
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』午集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第5号-「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016. 04. 20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』未集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第6号-「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016. 07. 20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』申集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第7号-「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016. 10. 30

・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』酉集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書一第8号―「水門（みなと）会―言葉と歴史」編集部
2017.03.31

・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』戌集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書一第9号―「水門（みなと）会―言葉と歴史」編集部
2017.07.20

第二節 満洲語「seme」「sembi」を伴うオノマトペ

1 はじめに

満洲語はアルタイ語系 (Altaic) のツングース諸語に属する⁶¹。唯一表記手段を持ちツングース諸語を代表する言語と言える満洲語だが、他のツングース諸語と同じく、消滅の危機に瀕している言語の一つである。満洲語は、構造的に日本語によく似た言語だと言われているが⁶²、その類似点の一つが、日本語と同様に、満洲語に豊富に存在するオノマトペである⁶³。

満洲語のオノマトペは、形態上、後ろに「seme」、「sembi」をつけて使用されることが多い。「seme」は、津曲(2002)では⁶⁴後置詞とされ、「sembi」は河内・清瀬(2002)では補助動詞とされている⁶⁵。本稿では、寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』を用いて、この「seme」、「sembi」を伴う満洲語オノマトペの下位分類を行う⁶⁶。

2 先行研究

曉春(2015)は、満洲語の擬声語を「人間が発する声」、「動物が発する声」、「物が発する音」の3つに分けている⁶⁷。また、曉春は『漢清文鑑簡編』の中の200語の擬声語について、その語頭音と語尾音の音象徴を明らかにしている。さらに、満洲語の擬声語を構造の面から、単一型、重畳型、諧音型、対偶型の4つに分けている。

満洲語の擬声語は、その構文的な機能として、連用修飾語、述語、独立語という三つの機能をもつと、曉春は述べている。そのうち、連用修飾語として使用される場合、擬声語が「seme」と結合するとされる。

しかし、曉春が分類した研究対象は、専ら擬音語であり、擬態語は、極めて少ない。また、曉春は「sembi」については、論じていない。

「sembi」に関して、『満語雑識』では、以下のように書かれている⁶⁸。

拟声词摹拟人和物的声音，拟态词摹拟人和物的状态。这类词没有语法作用。拟声和拟态词没有结构上的词缀变化，因而比较简单。这类词大多数的后面要用 sembi。这里的 sembi 有其本身具备的变化。可以说拟声和拟态词都需要 sembi，有些不用 sembi 的可以认为是省略了。

(筆者訳：擬音語は、人間や物の音声を模倣するものであり、擬態語は、人間や物の状態を模倣するものである。これらの言葉は、文法機能を持たない。擬音語と擬態語の構造は、接頭辞や接尾辞などが変化しないので、比較的簡単である。この種の言葉の後ろには、よく「sembi」を付けるのである。この

「sembi」は、それ自体が変化する。擬音語と擬態語とも後ろに「sembi」を付ける必要があると言ってよいが、「sembi」をつけない場合は、省略されていると見なしでもよい。)

一方、『満語口語音典』では、「sembi」について、以下のように書かれている⁶⁹。

有些拟声词后加 sembi, 即可作动词用 kab (猛扑), kab sembi (猛扑一下); kanggūr kinggur (慌慌张张) 加 sembi, 表示大声落下。

(筆者訳: 一部の擬声語は後ろに、「sembi」を加えることによって、動詞として使われる。kab、kab sembi (飛びつく); kanggūr kinggur (そわそわ) に「sembi」をつけると、物が落ちる時に伴う大きな音を表す⁷⁰。)

このように、「sembi」が省略されることがあるが、「sembi」がつくことによって、品詞と意味が変わることもある。満洲語のオノマトペに関する先行研究は極めて少なく、「seme」「sembi」を伴うオノマトペについて詳しく論じたものも皆無である。そこで、『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』をもとに、「seme」「sembi」を伴うオノマトペを分類した上で、それぞれの特徴を明らかにしたいと思う。

3 資料

本節で取り扱った原典資料は、寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）の11集である。『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』の子集から戌集にある満洲語のオノマトペ、および漢字に対する満洲語の解釈の中のオノマトペを抜き出したところ、満洲語のオノマトペの延べ語数は、826語であり、異なり語数は、234語であった。

本節では、「seme」「sembi」がついていないオノマトペは、研究対象から外し、「seme」「sembi」を伴うオノマトペだけを取り上げ、その下位分類を行う。

4 「seme」を伴うオノマトペ

寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）から抜け出した「seme」を伴うオノマトペの語数は167語であり、異なり語数は59語である。

「seme」を伴うオノマトペの下位分類を行う前に、「sembi」「seme」の意味用法をいくつかの辞書で見えていく。

4.1 「sembi」「seme」とは

満洲語「sembi」「seme」の意味用法は、表4-1で示す。

表 4-1 「sembi」「seme」とは

	『満和辞典』 ⁷¹	『補訂満洲語文語辞典』 ⁷²	『満州語辞典』 ⁷³
sembi	語る。話す。…と云ふ。	動詞。(1)と言う。だそうだ。(2)と する。(3)と思う。	補助動詞。云う。～と云う。
seme	…と。…と云ひ。…とて。	助詞。sembi の限定の副動詞であるが、助詞化している。(1)引用の「と」。(2)逆接の「とも」「ども」「とて」「ても」(3)サ変動詞連用形の「して」(4)「と思い」	助動詞。接続詞。動詞。(sembi の非完了連用形)。～と(いう)。～とて。と言っても。と思つて。として。

次に、日本語オノマトペの「～と」を見ていく。日本語の「と」は、品詞としては格助詞、接続助詞、接続詞とされるが、ここでいう「～と」は、格助詞と思われる。『日本国語大辞典』では、その一部は以下のように説明されている。

と(一)〔格助〕②連用関係を表すもの。㊦引用を表わす。文あるいは文相当の語句や擬声語を承け、下の動詞（「思う」「言う」「聞く」などの場合が多い）の内容を表わす。㊧体言を承けてそれを状態性概念とし、また、擬態語を承けて状態性副詞を構成し、動作概念を修飾する。体言を承けた場合、比喩的修飾となることがある⁷⁴。

上記した「sembi」「seme」の定義には、いずれも、オノマトペと係るところがないが、「seme」には「引用の「と）」という用法がある。これは、日本語「と」の「引用を表わす」と一致する。即ち、満洲語でも、日本語でも、オノマトペの後ろに引用を示すものを伴うのが、一般的だと考えられる。

4. 2 「seme」を伴うオノマトペの下位分類

「seme」を伴うオノマトペは、大きく生物と無生物に分けられる。ここでいう生物は、人間、動物、植物をさす。人間が発する声と音、人間の行為と様態、動物の鳴き声と音、植物の音などを描写するオノマトペである。一方、無生物は、生物以外に、生命がない物をさす。物の他に、水および雨、風などの自然現象も含めている。

整理する方法に関しては、オノマトペごとにカテゴリー化した上で、「seme」を伴うオノマトペが所在しているところの日本語訳から抜粋し、括弧に書き添える。カテゴリーはゴシック体で示す。

(1)生物

①人間が発する声・音

『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）11集から抜け出した「seme」を伴うオノマトペのうち、人間の声・音を表すオノマトペとしては、以下の様なものがある。

- 叫ぶ** : ang seme (わあー、戦い、喧嘩の時の声)
泣く : ei seme (めそめそと泣き言を言う)
笑う : kaka kiki seme (子供達がケラケラと笑う)、kiki kaka seme (カッカと笑う)、kiyatar seme (からからと笑う)、kuku seme (クックと笑う)
吐く : ha seme (はーと息を吐く)、pei seme (ぺつと唾を吐く)
喘ぐ : fu fa seme (喘ぐ)
綴る : fior seme (つるつると綴る)。

②人間の行為の様態

『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』一研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）における「seme」を伴うオノマトペは、人間の行為の様態を描写するオノマトペは圧倒的に多い。

- 歩く** : cung seme (しゃむに歩く)、dihe hiye seme (運送と行く)、kūwas kis seme (ざっざと行く)
怒る : fotor seme (怒るさま)、hiyang seme (コラット叱る)
上げる : hiyor hiyar seme (頭をグッと上げる様)
喋る : kang seme (がやがやとしゃべる)
話す : lolo seme (たわいもない話が終わらない)、lulu seme (平凡に話す)
痩せる : kos seme (げっそりと痩せる)
立つ : kunggur seme (衆人がばたばたと立つ)、teng seme (毅然と立つ)
食べる : lab seme (がつつと食べる→戌・穴部 157-4)
泣く : sar seme (サメザメ泣き止まらない)
匂う : sur seme (鼻を打つような芳香があった)
行動する : ler seme (どっしりと行動する、静々と行動する)
激昂する : kantar seme (昂然と、激昂する)
怠ける : keleng kalang seme (のそりのそりと、ぶらりぶらりと)

③動物の鳴き声・音

ここで「動物」としたのは、主に馬、鹿、鳥、虫である。

- 馬** : kunggur seme (衆馬が走る音)
鹿 : meng mang seme (ケーン・ケーンと鹿が鳴く、呦呦と鹿が鳴く)

鳥 : pur seme (鳥がぱつと飛ぶ) 、 putur seme (大鳥がバサッと飛び立つ音)

虫 : kunggur seme (虫、バタバタと飛ぶ)

④植物

「植物」としたが、実際の例は草だけである。

草 : hūwasar seme (草に風は来てがさがさとする)

(2)無生物

①水

水 : hūwalar seme (さらさらと流れる) 、 hūwanggar seme (轟々と流れる) 、 jir jir seme (チョロチョロと水が流れる) 、 yar seme (水がさらさらと音を響かせている) 、 cib seme (水が肅然として清浄である)

②物

「物」としたのには、車、石、鐘、太鼓、金属、土、髪などがある。

車 : kunggur seme (衆車が動く音) 、 halar seme (車のガラガラと言う響き) ; 石 : kung seme (石のドスンと言う音) 、 kūwar seme (石がガタンと碎ける)

鐘、太鼓 : tung tang seme (カンカンドンドンと言う鐘や太鼓の音)

金属 : kalang killing seme (カラコロンと言う響き)

土 : fusur seme (ボロボロの土)

髪 : yar seme (髪の毛がさらさらとして美しい)

③自然現象

「自然現象」としたが、例は雨と風である。

雨 : ler seme (シトシトと雨が降る) 、 ser seme (しとしとと絶える事なく雨が降る) 、 šor seme (しとしとと雨が降る)

風 : hoo seme (ビュービューと風が吹く) 、 ler seme (そよそよと風が吹く) 、 seo seme (ヒューヒューと風が吹く)

(3)程度

生物・無生物が発する声や音、あるいは、外界の力による音の他に、物事の様態を修飾するのに使う程度を表すオノマトペもある。例えば、「一心に、専ら」を表すオノマトペ

hing seme、「深い白」を表すオノマトペ šar seme、「正しくする」を表すオノマトペ tob seme などである。

- 白さ : šar seme (深い白)
- 硬さ : katang seme (カチンカチンと硬い)
- 暑さ : ludur seme (むしむしと暑い)
- 速さ : cing seme (パッと火が点く様)
- 長さ : darang seme (ながながと)
- 大きさ : kolor seme (だぶだぶ)
- 確かさ : tob seme (正しく)
- 俄かさ : cik seme (突然/不意)
- 柔らかさ : kikūr seme (ふかふか)
- 細かさ : ser seme (細々と)
- 専ら : hing seme (一心に、専ら)
- 丈夫さ : fik seme (歯茎がしっかりと長している)

以上、『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』—研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）における「seme」を伴うオノマトペを分類して示した。この中では、人間の行為の様態を描写するオノマトペが多いのが分かった。また、水の流れる音、雨の音、風の吹く音などの使用頻度も極めて高い。たとえば、「小雨が降る」を表す「ser seme」というオノマトペは36例あり、「ビュービューと風が吹く」を表す「seo seme」というオノマトペは14例あった。

5 「sembi」を伴うオノマトペの下位分類

『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』—研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）における「sembi」を伴うオノマトペの延べ語数は360語であり、異なり語数は125語である。

「sembi」を伴うオノマトペの分類する方法は、「seme」と同様であるが、語数は「seme」の2倍あるため、表にまとめて、その文献内の所在と用例数も示す。

(1)生物

①人間の声・音

～sembi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	用例数
ai sembi	嘆く	嘆じる様、うーんと	辰・欠部 p178-8	2
ara sembi	驚く	おや、あらと言う	丑・口部 p7-9	1
ke sembi		オヤッと言う	辰・欠部 p181-6	1
cu sembi	嗷ける	しっ、犬や猫を追う声	丑・口部 p63-1	1

lele sembi		豚を呼ぶ時 lele と言う	丑・口部 p85-8	3
oyo oyo sembi		子犬を呼ぶとき oyo oyo と言う	巳・犬部 p226-2	1
ei ei sembi	泣く	オイオイと泣く	戌・音部 p212-7	1
kata kiti sembi	歩く	地を踏みカタカタと言う	酉・足部 p211-2	3
e o sembi	応答する	ええ、おうと言う	丑・口部 p44-3	1
ho ha sembi	吹き掛ける	寒い時に出す、はーはーと言う声	酉・言部 p35-1	1
pu sembi		ぷーと言う	丑・口部 p21-2	9
šung šang sembi	寝る	スウスウ、グウグウと言う寝息	戌・非部 p165-3	1
pei sembi	吐く	ペッペッと唾を吐く音	丑・口部 p22-5	3
bing sembi	すく	腹がグーッと言う	寅・工部 p116-9	1
gior sembi		腹を空かせてグウグウと言う	戌・食部 p268-1	1
kor sembi	かく	ぐうぐう、鼾の音	丑・口部 p63-2	1
jar sembi	掛け声	大勢がかけ声を出す、エンヤコラ	酉・言部 p56-2	1

②人間の行為の様態

～sembi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	頻度
bodor sembi	言う	くどくどと	丑・女部 p193-3	1
dur sembi		わいわいがやがや	丑・口部 p50-3	1
gejing sembi		くどくど言う	丑・口部 p47-6	2
cung sembi	歩く	向う見ずに、しゃにむに	酉・走部 p168-1	1
ek sembi	厭う	行くのを厭う	寅・尤部 p40-2	1
hiyang sembi	怒る	コラッと叱る	丑・口部 p59-5	4
gūlu gala sembi	話す	ひそひそ話す	酉・言部 p76-5	1
yar sembi		縷々話す	丑・口部 p88-9	1
tar sembi	驚く	心がハッと驚く	卯・心部 p32-5	4
sir sembi	泣く	涙がハラハラと出る	午・目部 p181-3	1
lab sembi	食べる	酒や飯をガバガバ飲み食いする	戌・食部 p257-4	1
ping sembi	膨れる	腹が張る	未・肉部 225-6	1
lolo sembi	喋る	たわいもない事をべらべらしゃべる	酉・言部 p43-9	1
kiyarkiya sembi		べちゃくちゃとしゃべる	酉・言部 p40-4	1
kang sembi		がやがやと高い声で話す	丑・口部 p68-6	2
jor sembi		わいわいがやがや言う	丑・口部 p13-1	1
ja ji sembi		わいわい言う	丑・口部 p17-5	4

keb sembi	親しむ	睦まじい	子・人部 p85-2	1
keb kab sembi		睦まじく、懇ろに	辰・欠部 p177-2	2
fak sembi	疲れる	体があがりしている、疲労でぐったりとした様	子・人部 p61-3	1
piyas pis sembi	狼狽える	おたおたする、行動が軽薄	寅・彳部 p203-4	2
kiyuk sembi	褒める	称賛する	酉・言部 p48-3	1
gujung sembi	専心する	せっせと	子・力部 p175-9	2
gib sembi	聞こえる	グワーンと耳が振動する様	未・耳部 p201-9	1
fer far sembi	無力	ひよろひよろと、ふにやふにやと	辰・欠部 p174-2	1

③動物の鳴き声・音

～sembi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	用例数
dze dze sembi	犬	犬が吠えてワンワンと鳴く	丑・口部 p22-4	1
gang gang sembi		犬がキャンキャン鳴く	丑・大部 p167-10	1
ger sembi		犬が吠える声	巳・犬部 p226-4	4
kur sembi		犬がグオーと吼える	巳・犬部 p225-4	11
h'o sembi	豚	豚がグウと鳴く声	申・艸部 p64-5	1
meng mang sembi	牛	牛がモーモーと鳴く	巳・牛部 p203-4	1
mung mang sembi		牛がモウモウと鳴く	丑・口部 p17-6	1
mung mang sembi	鹿	鹿がモウモウと鳴く	丑・口部 p17-6	1
miyar miyar sembi	羊	羊がメエメエ鳴く	申・艸部 p7-9	1
pur par sembi	鳥	鳥が急に飛ぶたつ音	未・羽部 179-1	1
or sembi	猛獣	ウォーと言う猛獣の声	巳・犬部 p258-8	2
kur sembi	虎	虎がウォーと怒る	申・虎部 p139-9	1
koko embi	鶏	鶏がコッコと鳴く	丑・口部 p49-6	1

④植物

～sembi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	用例数
sir siyar sembi	草・樹	草がさわさわと音を立てる	申・艸部 p45-1	3

(2)無生物

①液体

～sembi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	用例数
bur bur sembi	泉	ぶくぶくと沸き上がる様	巳・水部 p18-10	1

cir sembi	水	細く勢い良く噴き出す様、ピュッと	巳・水部 p25-5	1
cor sembi		水が絶え間なく噴き出る	巳・水部 p25-6	6
hūwalar sembi		水がさらさらと流れる様	巳・水部 p82-6	17
hūwanggar sembi		水が音を立てて流れる様	巳・水部 p6-6	11
hūwar sembi		水がさらさら流れる	巳・水部 p15-6	6
konggor sembi		ごうごうと急流が流れる様	巳・水部 p36-2	5
yar sembi		水がチョロチョロと流れる	巳・水部 p29-3	7
yonggor sembi		水が絶えず流れる様	巳・水部 p66-4	3
tor sembi		水がくるくると回るさま	巳・水部 p41-7	2
yumbu sembi	大水	大水が緩やかに流れる様	巳・水部 p51-10	5
yur sembi	細流	細い水の流れが絶え間なく流れる	巳・水部 p11-1	12
umburi cumburi sembi	波	波が押し寄せたり退いたりするさま、幾重にも層をなしている浪	巳・水部 p131-3	1
hoo sembi	川・水	河水が澎湃たる様	巳・水部 p72-6	5
hūwai sembi		大水洋洋たる様	巳・水部 p32-3	16
lur sembi	油	油がどろりとする様	巳・水部 p77-5	1

②物

～sempi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	用例数
holor sembi	鈴	鈴がジャランと鳴る	戌・金部 p47-2	2
kacar kicir sembi	砂利	砂をかむ様	午・石部 p249-6	1
kūwang cang sembi	銅鑼	どんちゃんする、銅鑼が一斉になる	丑・口部 p19-5	1
liyar sembi	飯	飯がやや粘る	寅・弓部 p184-1	1
kikūr sembi	車	がらがらと言う車の音	酉・車部 p238-9	13
kunggur kanggar sembi		車がゴロゴロと鳴る	酉・車部 p254-9	3
kunggur sembi		車のごとごと言う音	酉・車部 p245-10	6
šor sembi		車が疾駆する	酉・車部 p235-1	1
kiyak sembi	木	ぼきんと折れる音	未・竹部 p35-4	1
tak tik sembi		カーンカーンと木を切る音	辰・木部 p75-2	1
kung sembi	石	石の落ちてドスンと響く	午・石部 p219-8	16
patak sembi		石が落ちるゴトンと言う音	午・石部 p228-8	3
dung dung sembi	太鼓	鼓鳴、ドンドント言う太鼓の音	申・艸部 p133-9	1
tang sembi		太鼓がトンと鳴る	戌・門部 p92-11	1
ung sembi	鐘	鐘のゴーンと言う音	戌・金部 p12-7	4

yang sembi		鐘がゴーンと鳴る	戌・金部 p47-8	1
tung tang sembi	鐘・太鼓	ドンドンカンカンと鳴る	戌・革部 p179-7	1
tung tung sembi		鐘がカンカンと鳴る	戌・音部 p211-8	5

③自然現象

～sembi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	用例数
sor sar sembi	雪	雨雪がしんしんと降る	戌・雨部 p149-6	2
kunggur kanggar sembi	雷	雷が鳴る音、ゴロゴロと	午・石部 p215-11	3

(3)程度

～sembi	カテゴリー	抜粋した日本語訳	所在	用例数
cafur cifur sembi	滑らかさ	つるつる	未・肉部 p208-4	1
fur sembi	爽やかさ	顔が爽やか	未・色部 p290-8	2
fur fur sembi		爽やか、みずみずしい	丑・大部 p163-6	1
darang sembi	長さ	体が長い様	子・人部 p88-11	9
fik sembi	多さ	山が稠密である	寅・山部 p95-5	1
lar lir sembi		人が沢山いる様	巳・水部 p20-5	1
far sembi		うようよ群がる	子・人部 p64-2	1
fusur sembi	粗さ	肌のきめが粗い	未・肉部 237-5	1
kek sembi	愉快さ	気に入る、思い通りになる	卯・心部 p36-6	1
keng sembi	愉快さ	思い通りになる	卯・心部 p36-6	1
kiyab kib sembi	敏捷さ	きびきびと、てきぱきと	酉・走部 p169-8	1
kob sembi	確かさ	矢が命中した様	卯・手部 p192-2	1
tang sembi	頑丈さ	太鼓がトンと鳴る	戌・門部 p92-11	1
ser sembi	細かさ	細々、こまごま	子・人部 p37-4	8
ludur sembi	暑さ	むしむしと	巳・火部 p147-7	1
pocok sembi	重さ	どぼん、水中に物が落ちる音	巳・水部 p106-5	1
kalar sembi	和やかさ	和気藹々、仲睦まじい	申・艸部 p124-11	1
katang sembi	堅さ	地を踏むカタンと言う音	酉・足部 p200-2	3
kakūng sembi		ガタンと言う	子・力部 p173-12	1
hūr hūr sembi	強さ	火勢の音、パチパチ、ポー	巳・火部 p138-9	6
hūr sembi	俄かさ	炎の燃え上がるさま、ゴーゴ	巳・火部 p138-12	7
hūng sembi		火がポーっと起こる		

6 おわりに

本節は、「seme」、「sembi」を伴うオノマトペの下位分類を行い、基礎的な分析をした。語数から見れば、いずれも人間の行為の様態を表すオノマトペが多い。また、水の流れるさま、雨が降るさま、車の動く音、石が落ちる音を表すオノマトペの例も極めて多い。

しかし、満洲語のオノマトペには、「seme」「sembi」のいずれも伴わないオノマトペも存在する。「seme」「sembi」を伴うことによって、意味が変化するか否か、また、「seme」「sembi」を伴わないオノマトペの特徴についての検討は、今後の課題とする。

原典資料：

- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』子集-研究と翻刻・繙訳』
語学教育フォーラム-27-号 大東文化大学語学教育研究所 2013.01.18
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』丑集-研究と翻刻・繙訳』
語学教育フォーラム-29-号 大東文化大学語学教育研究所 2014.02.28
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』寅集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第1号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2014.10.01
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』卯集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第2号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015.05.30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』辰集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第3号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015.08.30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』巳集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第4号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015.12.25
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』午集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第5号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016.04.20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』未集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第6号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016.07.20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』申集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第7号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016.10.30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』酉集-研究と翻刻・繙訳』

「水門（みなと）会」特刊叢書—第8号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2017.03.31

・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』成集—研究と翻刻・繙訳』

「水門（みなと）会」特刊叢書—第9号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2017.07.20

第三節 満文『玉堂字彙』における語尾が b、k、ng で終わる単純形式のオノマトペ

1 はじめに

筆者は、寺村政男「満洲語注音・注釈『玉堂字彙』（子集～亥集）—研究と翻刻・繙訳—」の12集から抜き出した満洲語のオノマトペを、単純形式と双語形式に分けてみた。単純形式のオノマトペは、主に語尾が母音で終わるもの（～V）と、語尾が子音で終わるもの（～C）をさす。例えば、「cu」、「hoo」が母音「u」、「o」で終わるオノマトペであり、「cib」、「fik」が子音「b」、「k」で終わるオノマトペである。一方、双語形式のオノマトペは、二つの語がくみあわさったもの乃至一つの語を繰り返したものをさす。例えば、「per par」、「tang tang」などである。

本節では、満文『玉堂字彙』から抜き出した語尾が b, k, ng で終わる単純形式のオノマトペについて、満洲語のオノマトペの日本語訳（寺村訳）をもとにして、河内『満洲語辞典』を参考しながら、擬音と擬態という視点から再分類する。そして、唯一の先行研究暁春（2015）「満語擬声詞刍議」の分析を参考とし、その相違点をまとめる⁷⁵。

2 語尾が b で終わる単純形式のオノマトペ

この節では、満洲語の子音「b」で終わるオノマトペ「～b」について、満和辞書などに沿って、基礎的な分析を行う。満文『玉堂字彙』の12集から抜き出した「～b」の単純形式のオノマトペは、「cib」（ひっそり）、「gib」（がんと）、「keb」（睦まじい）、「kob」（びたり）、「lab」（がぶがぶ）、「tob」（正しい）が挙げられる。

2. 1 満洲語オノマトペ「gib」の満和対照

表 2-1

漢字	所在	満洲語の解釈	寺村訳
聒	未・耳部 201-9	gib sembi	グワーンと耳が振動する様

河内（2014）『満洲語辞典』

見出し語：gib seme⁷⁶

象徴詞。がんと。つんと。大音のためにしばらく耳が聞こえなくなった。耳震聲。

表 2-1 と『満洲語辞典』を照らし合わせたところ、共通するのは、寺村訳の「グワーンと」と『満洲語辞典』の「がんと」がほぼ一致するのが分かる。そして、「グワーンと耳が振動する様」から見ると、「gib」は擬態語だと思われる。次に、満和対照の視点から、「gib」は擬音語か擬態語に近いのを検討していきたい。『日本国語大辞典』では、「がん」の説明は以下のように書かれている。

- ①鐘、鉦などの音を表す語。また、物を強く打った音を表す語。
- ②転じて、手きびしく打撃を与えるさまを表す語。

つまり、「がん」は、擬音語でもあり、擬音語をもとにして派生した擬態語でもある。しかし、擬態語の場合は、「gib」の使用範囲とのずれが現れる。また、「gib」は、被修飾の対象が耳のみである。

2. 2 満洲語オノマトペ「keb」の満和対照

表 2-2

漢字	所在	満洲語の解釈	寺村訳
膏	子・人部 85-2	keb sembi	睦まじい

河内（2014）『満洲語辞典』

見出し語：keb seme⁷⁷

- ①象徴詞。極めて親密な貌。親近様。
- ②象徴詞。ぐったりと。非常に疲労した貌。乏極。
- ③象徴詞。ぱたりと。不意に物の倒れ落ちる貌。物忽落下。

つまり、『玉堂字彙』に出てくる「keb」の意味は、親密なさま以外に、疲れる様子と倒れ落ちるさまも含んでいる。そして、この三つの意味は、互いのむすびつきが見えにくい。また、親密さを表す場合、寺村訳は「睦まじい」であり、『満洲語辞典』は「極めて親密な貌」である。換言すれば、満洲語では「keb」が擬態語として定着され、日本語のオノマトペに直訳する傾向がみられない。

2. 3 満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「～b」の分類

満文『玉堂字彙』から抜き出した「～b」のオノマトペの延べ語数は、13語であり、異なり語数は、6語である。擬音語と擬態語に分けると、以下のようになる。

表 2-3 満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「～b」の分類

擬音語	gib グワーンと
擬態語	cib ひっそりと
	kob ぴたりと
	lab がつつと
類似オノマトペ	keb 睦まじい

	tob 正しい
多義オノマトペ	cib ひっそりと／さっと

この節で挙げたオノマトペは、同じく「～b」の単純形式のオノマトペであるが、意味上においては、はっきりとした共通点がみられない。しかし、暁春（2015）は、満洲語の子音「b」を語尾音としたオノマトペについて、以下のように書いている⁷⁸。

表示力度较大，但不太响亮的声音。（筆者訳：力強いが、あまり高らかではない音を表す）。

これは、暁春がもっぱら擬音語を対象として分析を行って導いた結論だと考えられる。そして、『玉堂字彙』に出てくる「～b」の単語形式のオノマトペは、殆ど擬態語である。「gib」（がんと）の方は、たしかに擬音語の意味も含んでいるが、暁春が出した結論は、寺村訳の「耳がグワーンと振動するさま。」、『満洲語辞典』による「大音のためにしばらく耳が聞こえなくなった。」との相違が現れる。

3 語尾がkで終わる単純形式のオノマトペ

満文『玉堂字彙』の12集から抜き出した「～k」の単純形式のオノマトペは、「cik」（ふと）、「ek」（ぞっと）、「fak」（がちり）、「fik」（もくもく）、「hak」（痰を吐く音）、「hiyuk」（称賛する）、「kek」（すっと）、「kiyak」（ぼきつ）、「pak」（ぱちん）、「patak」（ぼとん）、「pocok」（どぼん）の11語が挙げられる。『満洲語辞典』により、「fak」「fik」「hak」「kiyak」「pak」「patak」「pocok」が象徴詞（オノマトペ）として取り扱っている。そのうち、擬音語は、「hak」「kiyak」「patak」「pocok」であり、擬態語は、「fak」「fik」である。そして、擬音語と擬態語を兼ねるのは「pak」である。また、「hiyuk」は、『満洲語辞典』には収録されていない。

3. 1 多義オノマトペ「fak」

表3-1

漢字	所在	満洲語の解釈	寺村訳
偶	子・人部 61-3	fak sembi	体がちりちりしている、疲労でぐったりとした様

河内（2014）『満洲語辞典』

見出し語：fak seme⁷⁹

①象徴詞。がちりと。背は低いが頑丈な人を形容する言葉。敦實。

②象徴詞。どさりと。疲れて坐る貌。乏坐様。

③象徴詞。ぱったりと。(突然)人事不省に陥った貌。忽然迷倒。

「fak」というオノマトペは、満文『玉堂字彙』から抜き出した「~k」のうちに、唯一の多義語である。詳しくは、3. 2で分析を加えることにする。

3. 2 満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「~k」の分類

満文『玉堂字彙』から抜き出した「~k」のオノマトペの延べ語数は、19語であり、異なり語数は、11語である。以下は、その分類である。

表3-2 満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「~k」の分類

擬音語	hak 痰を吐く音。ぺっ、かあっ。
	kiyak 乾いた木の折れる音。ぼきんと
	pak 爆竹などが炸裂する音。ぽん。
	patak 石が落ちる音。ごとな。
	pocok 水に物が落ちる音。どぼん。
擬態語	fak ぐったり
	fik むくむくと
	pak かちかち
	cik ふと
類似オノマトペ	ek 人を嫌って合うのを恐れる様。
	kek 気に入る。思い通りになる。
多義オノマトペ	fak がっちり／どさりと／ぱったりと
辞書収録なし	hiyūk 称赞する

暁春(2015)は、満洲語の子音「k」で終わるオノマトペについて、以下のように書かれている⁸⁰。

表示在短时间内发生的声音。(筆者訳：短時間のうちに発する音を表す)。

この節で挙げた『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「~k」(擬音語のみ)の音の分布は、表3-2をもとにして、以下のようにまとめられる。

hak (痰を吐く音)

kiyak (乾いた木の折れる音)

pak (小さい爆竹の音／硬いものを地に投げた音)

patak (小さくて硬い物が地に落ちた音)

pocok (物が水中に落ちる音)

時間的に言えば、皆短い間に発した音である。そして、物の発する音が澄んでいる或いは冴えているという特徴も見られる。これは、清音「k」の影響に起因するかもしれない。しかし、暁春(2015)は、もっぱら擬音語を対象として分析を行ったため、「~k」の擬態語への関心が欠けている。ここで挙げた11語の中には、「fak」「fik」は擬態語とし、「pak」は擬音語と擬態語を兼ねるものとして扱われている。このうち、「fak」が多義語である。河内(2014)『満洲語辞典』による説明をまとめていうと、以下のようになる。

fak (①背は低いが頑丈な人を形容する言葉 ②疲れて坐る貌

③(突然)人事不省に陥った貌)

fik (草木の密生した貌)

pak (飯や肉がひどく乾いて硬くなり、食えないさま)

以上述べたように、満文『玉堂字彙』における「~k」の単純形式のオノマトペ(擬態語のみ)の特徴を、その日本語訳から導き出すのは難しい。しかし、これらのオノマトペの意味的な背景を吟味すれば、おそらく、「収縮する」または「エネルギーの消耗」というのが共通しているところだと考えられる。「fak」の方は、物事が縮んだり、エネルギーがなくなったりするという特徴をもっている。「fik」の方は、ばらばらになっていない状態を表す傾向がある。「pak」の方は、物が固まっているということの意味しているのではないかと考えられる。

4 語尾が ng で終わる単純形式のオノマトペ

4. 1 類似オノマトペ「keng」の満和対照

表 4-1

漢字	所在	満洲語の解釈	寺村訳
椽	丑・口部 59-9	keng	咳の音
衢	卯・心部 60-8	keng sembi	思い通りになる
衛	卯・心部 60-9	keng sembi	思い通りになる

河内(2014)『満洲語辞典』

見出し語：keng⁸¹

象徴詞。こんこん。咳をする聲。乾嗽聲。

見出し語：keng seme,-sembi⁸²

久別忽然遇惻心之意。

表4-1で示したように、「keng」は、咳の音を表すほか、「思い通りになる」という意味でもある。日本語オノマトペの「こんこん」には、それに相当する意味があるかを検証するため、『日本国語大辞典』にでてくる「こんこん」を調べた。仮名表記の「こんこん」には、咳の音、キツネの鳴き声、堅いものが打ち当たってたてる音、雨や雪、あられなどの降るさまなどの意味がある。いずれも、「思い通りになる」という意味に当てはまらない。

一方、漢字表記の「こんこん」には「昏昏・昏昏」、「滾滾・渾渾・混混」、「猷猷」、「懇懇・惓惓」という言葉がある。そして、河内（2014）『満洲語辞典』での見出し語「keng seme, -sembi」の意味は、「久別忽然遇惻心之意。」（筆者訳：久しぶりに出会って、心が慰む。）であるため、「懇懇・惓惓」という言葉には一致しないが、意味が近いのではないかと思われる。その意味は、『日本国語大辞典』では、以下のように書かれている。

形動タリ。心をこめたさま。また、親切に繰り返し言うさま⁸³。

以上述べたように、仮名表記の「こんこん」は、「keng」にある「思い通りになる」という意味とは異なるが、漢字表記の「懇懇・惓惓」に類似するのが分かった。

4. 2 満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「～ng」の分類

満文『玉堂字彙』から抜き出した「～ng」のオノマトペの延べ語数は、106語であり、異なり語数は、24語である。以下は、その分類である。

表4-2 満文『玉堂字彙』における単純形式のオノマトペ「～ng」の分類

擬音語	ang	戦い、喧嘩の時の音。
	bing	腹がグーッと言う。
	giyang	犬がきゃんきゃん吠える音。
	hung	火の燃えおこる音。ぱっと。
	keng	咳の音。こんこん。
	kung	大きなものが地に落ちる音。どかん。
	kutung	どたん、ずしん。
	kūwang	コーンという響き。
	tang	太鼓がトンと鳴る音。
	ung	鐘の響く音。ごーん
	yang	蚊などが飛ぶブンブンという音。

擬態語	cing	火のつく様。ぱっと。
	cung	しゃにむに歩く様。
	darang	体が長い様。だらりと。
	gejing	くどくどと
	gujung	こつこつと
	hiyang	こらっと
	kang	がやがやとしゃべる様
	kakūng	がたんと
	katang	物の硬い様。かちんかちん。
	ping	腹が張る様。ぴんと。
	suwarang	するりと
	teng	しっかりと
類似オノマトペ	hing	一心に、心を込めて。
	keng	思い通りになる。
辞書収録なし	bing	腹がグーッと言う。

曉春（2015）による「ng」を語尾音とした擬声語の特徴は、以下のように書いている。

表示较长而厚重的声音或强烈碰撞，穿透力较强的声音（筆者訳：長い且つ重々しい音、または激しく衝突したり、強く貫通したりする音を表す。）

確かに、「kutung」（どたん）、「kung」（どかん）、「ung」（ゴーン）のような擬音語は、重々しい音を表すのであるが、「keng」（咳の音）、「yang」（蚊の飛ぶ音）などは、曉春のまとめた特徴とのずれがみられる。また、「ng」で終わるオノマトペには、擬音語だけではなく、「gujung」（こつこつと）、「darang」（だらりと）、「gejing」（くどくど）などの擬態語もある。

5 おわりに

周知の通り、中国語には、擬態という概念が存在していない。しかし、日本語の擬態語に相当するものがないというわけではない。先行研究曉春（2015）では、満洲語のオノマトペをもっぱら擬音または擬声という視点から取り扱ったので、擬態語への関心が欠けている。また、曉春は、子音を語尾音としたオノマトペが持つ特徴を一文のみでまとめたので、満文『玉堂字彙』にでてくるオノマトペにすべてあてはまるとは言えない。したがって、筆者は、日本語オノマトペの持つ特徴と同様に、擬音語、擬態語に分類してみた。さらに、形態から見れば（「seme」がついている）、満洲語オノマトペと一致するが、意味としては、日本語には直訳しにくいものを、類似オノマトペに下位分類した。

原典資料：

- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』子集—研究と翻刻・繙訳—』
語学教育フォーラム—27—号 大東文化大学語学教育研究所 2013. 01. 18
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』丑集—研究と翻刻・繙訳—』
語学教育フォーラム—29—号 大東文化大学語学教育研究所 2014. 02. 28
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』寅集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第1号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2014. 10. 01
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』卯集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第2号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2015. 05. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』辰集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第3号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2015. 08. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』巳集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第4号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2015. 12. 25
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』午集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第5号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2016. 04. 20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』未集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第6号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2016. 07. 20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』申集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第7号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2016. 10. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』酉集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第8号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2017. 03. 31
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』戌集—研究と翻刻・繙訳—』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第9号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2017. 07. 20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』亥集—研究と翻刻・繙訳—附・部首別索引』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第10号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2017. 10. 15

第二章 『唐五代言語辞典』と『詩経』における漢語のオノマトペ

第一節 『唐五代言語辞典』における漢語のオノマトペ

1 はじめに

この章では、当時広く流通していたと考えられる中古漢語の語彙が日本古典語のオノマトペにどのように影響を与えていたかについて明らかにする。漢語のオノマトペの研究は主に現代語を対象としており、中世・近代漢語を対象とした研究は少ない。そこで、劉堅・江藍生（1997）『唐五代語言詞典』を資料として中国の中世・近代漢語のオノマトペについて検討する⁸⁴。

劉・江（1997）に挙げられている漢語のオノマトペは、「象声詞」という品詞名で呼ばれているが、それ以外に、「～貌」（さま、様子に相当する）のように、品詞名が記されていないものもある。形式的な分類に関する先行研究は、かなり進んでいるが、意味的な分類に関する研究は、管見の限り見当たらないので、以下では、これらについてその意味的な面を中心にして検討する。

さらに、漢語のオノマトペの中には、日本語の語彙に入っている「侃侃諤諤」、「興味津津」といったような、所謂、漢語オノマトペも存在しているが、これらについては、『日本国語大辞典』に収録されているかどうかについて調べることにする⁸⁵。

2 漢語のオノマトペについて

2. 1 漢語のオノマトペの品詞

漢語のオノマトペがいかなる品詞に属するかに関しては、様々な説がある。日本語のオノマトペは通常、副詞とされるが、漢語のオノマトペは副詞として取り扱われることもあれば、形容詞と見なされることもある。耿二玲（1986）によれば⁸⁶、副詞として見なしているものには、馬建忠（1898）『馬氏文通』、陳承澤（1922）『国文法草創』、黎錦熙（1923）『新著国語文法』、章士釗（1935）『中等国文典』などがあり、一方、形容詞としているものは、呂叔湘（1942-1944）『中国文法要略』、任銘善（1956）『語文短札』、史存直（1972）『語法三輪』、張静・張桁（1979）『古今漢語比較語法』、張静（1979）『現代漢語』、黄伯荣・廖序東（1979）『現代漢語』、呂叔湘（1980）『現代漢語八百詞』などがある。その他、感嘆詞、特殊詞、独立詞としているものもある。

2. 2 漢語のオノマトペの分類

2. 2. 1 現代漢語のオノマトペの分類

現代漢語のオノマトペについてのこれまでの研究は、形式的な分類を主としている。たとえば、馬天祥（1980）『略論漢語擬声詞的独立性』は、漢語のオノマトペを形式上「A」「AA」「AB」「ABB」「ABAB」「AABB」「ABCD」「AXAB」の8種類に分けている⁸⁷。

2. 2. 2 古典中国語のオノマトペの分類

劉玲（2015）は、古典中国語におけるオノマトペを、漢字一字からなるもの、漢字二字からなるもの、漢字三字からなるもの、漢字四字からなるものの4種類に分けている⁸⁸。そのうち、漢字二字を、接尾辞型、重言型（關關）、双声型（參差）、疊韻型（窈窕）に下位分類し、さらに、接尾辞型を虚辞型（～焉、～乎、～爾、～然）と接辞型（～若、～如）に分けている⁸⁹。

3 唐に見られる漢語のオノマトペ

3. 1 擬態語の割合

『唐五代語言詞典』に収録されている漢語のオノマトペは、318語ある。その中で、はっきり「象声詞」とされているものは、わずか29語である。それ以外は、前述の「～貌」（さま、様子に相当する）のような、人間の様子や心理状態を描写したりするものであり、全体の約90%を占めている。すなわち、唐における漢語のオノマトペは、ほぼ擬態語であるということになる。

3. 2 唐に見られる漢語の擬態語の分類

これまでの研究では、主に形式的な分類が行われてきた。この節では、意味的な観点から分類を行う。唐に見られる漢語のオノマトペは、ほとんどが擬態語なので、擬態語を対象として分類する。

意味分類を行う際に、大きく、人間に関するもの、動物に関するもの、物事に分けた上で、その下位分類を行う。例えば、人間にかかわる擬態語を、感覚、行為、心理状態などといったカテゴリーに分類する。そして、心理状態については、意気軒昂としているさまなどは「ポジティブ」なものとし、失意のさま、悩み憂えているさまなどを、「ネガティブ」なものとして、「ポジティブ」なものとして、「ネガティブ」なものとして下位分類する。

3. 2. 1 人間

表1 唐に見られる漢語の擬態語の下位分類（人間篇）

上位	下位	カテゴリー
感覚	痛み	寒風が骨にしみるさま。
行為	プラス	懇切丁寧であるさま、清新で優美であるさま、元気潑刺であるさま、こせこせしないさま、勇ましいさま、洞察するさま。
	マイナス	ぼうっとしているさま、乱暴で喧嘩しがちであるさま、酔っぱらってぼうっとしているさま、傲慢不遜であるさま、振る舞いが下品であるさま、遠慮がないさま。

	喜怒哀楽	むっとしているさま、笑うさま、喜ばしいさま、驚き怯えるさま、待ち望んでいるさま。
心理状態	ポジティブ	意気軒昂としているさま、血気盛んであるさま、誠意が感じられるさま、闊達なさま、毅然としているさま、心静かであるさま。
	ネガティブ	躊躇しているさま、悩み憂えているさま、失意のさま、憔悴しているさま、意気消沈しているさま、落ち込んでいるさま、尻込みするさま、物寂しいさま、(音)または心が乱れているさま。
身体	頭	禿げているさま、頭が丸くてすべすべとしているさま。
	髪	髪がグレーであるさま、髪が垂れ下がっているさま。
	口	咀嚼するさま、ぼかんと口を開けているさま、諄いさま。
	息	息を殺しているさま、息が弱々しいさま。
	顔	顔が真っ赤であるさま。
	手	琴を弾いているさま。
	足	よろめくさま、ぶらつくさま、ふらふらと歩いているさま、飛び上がりさま。
	全身	震えるさま、ゆったりしているさま、もがいているさま、ゆっくりと移動するさま。
その他	プラスの	艶めかしいさま、体格が堂々としているさま、利口であるさま、穏やかなさま、安穩としているさま、賑やかなさま、耳に快いさま。
	マイナスの	矮小なさま、醜いさま、太っているさま、ぼろぼろなさま、頭が混乱しているさま、愚かなさま、危篤であるさま、こせこせしないさま。
	中立的	痩せているさま、緩慢なさま、飢えているさま、じっとしているさま、慌ただしいさま、絶えず人が往来しているさま。

3. 2. 2 動物

動物に関するオノマトペは、非常に少ない。ここでは、表にせず、以下のようにまとめる。

鳥：羽ばたくさま、絨毛がぼうぼうと乱れて開いているさま。

馬：駆け回るさま。

3. 2. 3 物事

表2 唐に見られる漢語の擬態語の下位分類（物事篇）

上位	下位	カテゴリー
抽象的	明るさ	明るいさま、暗いさま、光り輝くさま。
	寒さ	ひんやりしているさま。
	きれいさ	整然としているさま。
	多さ	夥しいさま。
	速さ	速いさま。
	厳密さ	厳密であるさま。
	堅さ	堅いさま。
	静かさ	静まり返っているさま、ひっそりとしているさま。
	大きさ	巨大なさま。
	透明さ	透き通るさま、朦朧としているさま。
	易しさ	容易いさま。
具体的	色	鮮やかな色彩、雑色、むらがない、色のはっきりとしないさま、赤いさま、黒いさま、白いさま。
	山	高く切り立っているさま。
	水	水が滴るさま、満ちるさま。
	匂い	汗の臭いが衝くさま。
	雪	はらはらと落ちるさま。
	草木	草木が生い茂り、一面に広がっているさま、漂っているさま、草木が凋んで落ちているさま。
	煙	煙、埃が濃厚であるさま、煙が充満しているさま。
	雨	小糠雨が舞っているさま。
	音	微かであるさま。
	衣類	だぶだぶとしたさま。
	対義関係	遍く囲むさま、密集しているさま、群がって取り囲むさま、分散しているさま。

4 重言型のオノマトペ

唐に見られる漢語のオノマトペ 318 語の中で、著しく多いのは、重言型（一つの漢字を繰り返す漢字二字の AA 型）であり、113 語に上る。そのうち、42 語が日本語の語彙に入っており、『日本国語大辞典』にも収録されている。

この節では、『日本国語大辞典』⁹⁰と『唐五代語言詞典』に収録されている同一のオノマトペの意味と用例をいくつか取り上げ、それぞれの異同について検討する。

4. 1 『日本国語大辞典』に収録されている重言型のオノマトペ

唐に見られる重言型のオノマトペの中では、以下の42語が日本語の語彙に入っている。

惨惨、測測、草草、蒼蒼、楚楚、簇簇、滴滴、垂垂、憧憧、重重、刺刺、促促、的的、堆堆、分分、聒聒、浩浩、轟轟、交交、砣砣、離離、歴歴、瀝瀝、了了、漫漫、冪冪、喃喃、盤盤、蓬蓬、片片、悄悄、区区、確確、穰穰、颯颯、騷騷、稍稍、騰騰、帖帖、汪汪、惺惺、喧喧。

4. 2 重言型のオノマトペの和漢比較

次の例は、日本語では、寒さが身に沁みるという②の意味のほか、身にしみて感じるさまという①の意味もあるが、漢語では、ひんやりしているさまという、日本語の②に似た意味しか表していない。しかし、寒さに関する意味を表す例文は、両方とも「測測輕寒剪剪風」が挙げられており、「測測」の寒さに関する意味については、日本語の用法として存在するのか確認できない。

例1：「測測」

・日本語：ソクソク

①あわれみ悲しむさま。身にしみて感じるさま。

*長塚節歌集(1917)〈長塚節〉明治三八年

「其言測々として動かす」

②寒さなどの身にしむさま。

*韓偓一夜深詩

「測測輕寒剪剪風」

・漢語：cè cè

清寒的感觉。(筆者訳：ひんやりしているさま)

*韓偓『寒食夜』詩：

「測測輕寒翦翦風，杏花飄雪小桃紅」

*韋應物『再遊西山』詩：

「測測石泉冷，暖暖煙谷虛」

次の例は、日本語では「心身を責めさいなむさま」を表し、漢語では、「寒風が骨にしみるさま」「くどいさま」を表している。漢語の①の意味が、日本語の意味に通じるようにも思われるが、日本語ではより抽象的な意味に変わっている。

例2：「刺刺」

・日本語：シシ

心身を責めさいなむさま。

*浄瑠璃・天神記（1714）天尽し

「今、菅丞相が無実の罪に沈んで、恨みの念力、切切刺刺として切るが如く刺すが如し」

・漢語：cì cì

①寒風刺骨貌。（筆者訳：寒風が骨にしみるさま）

*李商隱『送千牛李將軍赴闕』詩：

「去程風刺刺，別夜漏丁丁。」

②言語繁多的様子。（筆者訳：くどいさま）

*韓愈『送殷員外序』

「持被入直三省，丁寧顧婢子，語刺刺不能休。」

次の例は、イメージ的に多少意味が通じているようにも感じられるが、異なる意味になっているとみたほうがいだろう。

例3：「堆堆」

・日本語：タイタイ

積み重なっているさま。

*中華若木詩抄（1520頃）

「紡車山のあたりには、雪が堆々とある也」

・漢語：duī duī

不動貌。（筆者訳：じっとしているさま）

*韓愈『路旁堠』詩：

「堆堆路旁堠，一雙復一隻，迎我出秦關，送我入楚澤。」

次の例は、日本語と漢語で意味が同じものである。ただし、日本語には「落ちつかないさま」という抽象的な意味が派生している。

例4：「憧憧」

・日本語：ショウショウ／ドウドウ／トウトウ

絶えまなく往き来するさま。また、落ちつかないさま。

*土井本周易抄(1477) 四

「まだ初心な程に、先づこちが感じて憧々として往来せうぞ。あちからは、まだ友はこまいぞ」

・漢語：chōng chōng

往來匆忙の様子。(筆者訳：絶えず行き来するさま)

*白居易『和大觜鳥』詩：

「慈烏而奚為，來往何憧憧，曉去先晨鼓，暮歸後昏鐘。」

次の例は、どちらも水滴が落ちるのに関する意味を表しているが、日本語では、滴るさまという擬態語とされているのに対し、漢語では、滴る音というように擬音語とされている。また、日本語では「水も滴る」で美男美女を形容したりするが、漢語には、それと似た意味が挙げられている。

例5：「滴滴」

・日本語：テキテキ

水のしづくなどが、したたり落ちるさま。水滴などが短い間隔をおいて続けて落ちるさま。

*正法眼蔵(1231-53) 行持下

「おつるなみだ滴滴こほる」

*山の力(1903) <国木田独歩>

「滴々として水の滴るのを聞くばかりです」〔令孤楚一賦山詩〕

・漢語：dī dī

①盈盈欲滴貌、形容嬌美。(筆者訳：艶めかしく美しい)

*張彦謙『留別』詩之二：

「野花紅滴滴、江燕語喃喃。」

②象声詞。状水滴声。(筆者訳：擬音語。水の滴る音に擬える)

*劉得仁『和鄭校書夏日遊鄭泉』

「來聞鳴滴滴、照竦碧沈沈。」

以上に取り上げた唐における漢語のオノマトペは、いずれも重言型であり、日本語に受容されているものである。意味的な面では、共通しているところもあれば、まったく異なる場合もある。また、日本語に受容されている漢語のオノマトペは、そのほとんどが擬態語である。

5 おわりに

本節の前半は、擬態語を中心とした意味的な分類を行い、唐に見られる漢語のオノマトペについての基礎的な検討をした。後半は、和漢比較の観点から、重言型のオノマトペを中心に、それぞれの異同について検討した。

唐にみられる漢語のオノマトペは、42語の重言型が日本語に受容され日本語として定着しているのを確認できた。重言型のオノマトペは、中国の最も古い詩集である『詩経』でも、大量に使用されている。

次に、『詩経』における漢語のオノマトペについて検討する。

第二節 『詩経』における動物を対象とした漢語のオノマトペ

1 はじめに

中国の最も古い詩集である『詩経』にみられる漢語オノマトペについて、その意味分類を行う。形態に関しては、疊韻連語（「窈窕」など）、双声連語（「参差」など）、「若」がつく形（「沃若」など）の3つのタイプがみられるが、「悠悠」「囂囂」「滔滔」などのような重言型が最も多く、日本文学作品における使用例も多数ある。目加田（1985）では漢語オノマトペについて、次のように書かれている⁹¹。

（前略）この二音節ずつ続ける音調の傾向は、又物の聲、貌を形容するに二音を重ねる場合多く、重言、双聲、疊韻もそのためことに屢ば用いられるのは自然である。

意味分類の仕方としては、『詩経』310篇にあるすべてのオノマトペをまず擬音語と擬態語に分け、それぞれ、動物、植物、人間、非生物（モノ）、自然現象、抽象的なものなどに下位分類する。そして、それぞれの具体的な様態などによってさらに細かく分けることにする。

たとえば、動物の下位分類である「鳥」を例にすると、擬音語→動物→鳥→鳴き声「關關（かんかん）」（のどかに鳴くさま）「啾啾（かいかい）」（なごやかに鳴くさま）、羽ばたき音（「交交（こうこう）」「肅肅（しゅくしゅく）」）というようになる。

また、植物に関わる擬態語は、擬態語→植物→草木→生い茂るさま「萋萋（せいせい）」、さかんに茂るさま「莫莫（ばくばく）」、木の葉がさかんに茂るさま「蓁蓁（しんしん）」、雑木のすくすくと伸びているさま「翹翹（ぎょうぎょう）」、木の葉が美しく茂るさま「猗猗（いはい）」、高く生い茂るさま「驕驕（きょうきょう）」、あおあおと盛んに茂るさま「菁菁（せいせい）」、木が勢いよく茂るさま「肺肺（はいはい）」というようになる。

2 『詩経』における漢語オノマトペの日本語への受容について

「関々（クワンクワン）」（「春の鶯関々（クワンクワン）として、花の本に滑か也」（源平盛衰記））や「啾啾」（「啾啾たる鳥は仏土妙音の響かとも聞へ」（俳諧・寛政三年紀行））のように、『詩経』の漢語オノマトペには日本語に受容されているものもある。その受容のされ方はさまざまなのだが、以下では、その受容レベルについてレベル1からレベル6に分けることにする。レベル1は受容度のもっとも低いものであり、レベル6は受容度のもっとも高いものである。

レベル1

- ・『日本国語大辞典』および『新選漢和辞典』には収録なし。

例：「訛訛」臯臯訛訛でガヤガヤと人を讒毀しあうありさま。

例：「嘆嘆」麀鹿はうごめく。

レベル 2

・『日本国語大辞典』は収録されていないが、『新選漢和辞典』は収録あり。

例：「躑躑」一、①強いさま。いさましいさま。②盛んなさま。二、きやくきやく つまらぬ人間が地位を得ていばるさま。

例：「蹠蹠」①つつしむさま。②すばやいさま。③恥じるさま。

レベル 3

・『日本国語大辞典』は収録されているが、使用例は『詩経』にしか見られない。

例：「諠諠」①盛んではげしいさま。②喜び楽しむさま。

レベル 4

・『日本国語大辞典』は収録されているが、使用例は漢文にしかない

例：「秩秩」①流れ行くさま。②知識のあるさま。また、知識を進めるさま。

「以才奥学之妙簡、明明**秩秩**之公心、所定置也」本朝文粹〔1060頃〕七・申請重弁定齊名所難学生同時棟詩状〈大江匡衡〉

例：「厭厭」①安らかで静かなさま。②植物などの盛んに茂るさま。

「**厭厭**然独迷花酒之下云爾」本朝文粹〔1060頃〕一〇・隔花遙勸酒詩序〈菅原輔昭〉

レベル 5

・『日本国語大辞典』は収録されており、和文と混ぜての使用例あり。

例：「綽綽」ゆったりとして、ゆとりのあるさま。落ち着いてあせらないさま。綽然。綽然。綽然。「土地狭小なりと謂ふと雖も、物質的の富力は**綽々**として之を現はし得るに足るに似たり」真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉日本人の任務・二

例：「緜緜」長く続いて、絶えないさま。どこまでも続いているさま。

「無意義だ、不可解だと叫ぶ間には、尚人生の意義に対する恋々の情が**綿々**絶えないでをるのではないか」予言の芸術〔1910〕〈姉崎嘲風〉

レベル 6

・『日本国語大辞典』は収録されており、和文と混ぜての使用例が多く、多義語として使用例もあり。

例：「肅肅」

①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。

「上帝英傑を下して国人を救ふと信じ、自ら慰め自ら楽しみ日夜**肅々**として之を俟てりき」
真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉日本人の任務・三

②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。

「わが血潮は、**肅々**（シュクシュク）と動くにも拘はらず音なくして寂定裏に形骸を土木視して」
虞美人草〔1907〕〈夏目漱石〉一

③ひきしまったさま。ととのったさま。

「各軍団**肅々**として山を下り或は右に赴き或は左に赴く」
経国美談〔1883～84〕
〈矢野龍溪〉後・一七

④おごそかなさま。厳肅なさま。

「師範学校の方は**肅肅**として進行を始めた」
坊っちゃん〔1906〕〈夏目漱石〉一〇

⑤松などの樹木に、風があたってもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。

例：「滔滔」

①水がさかんに流れるさま。多量の水を悠然とたたえているさま。洶洶。

「今日遊行見勝間田池、水影**濤々**蓮花灼々」
万葉集〔8C後〕一六・三八三五・左注

「是を受けて大なる鉄の桶に入れあつめれば、程なく十分に湛へて**滔滔**（タウタウ）たる事夕陽を浸せる江水の如也」
太平記〔14C後〕二〇・城入結道墮地獄事

②弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。

「書生は才力に誇ってみた見え、**滔滔**と古今の学芸を論じた」
侏儒の言葉〔1923～27〕
〈芥川龍之介〉貝原益軒

③おしなべて一様であるさま。また、世の風潮などが一つの方向に勢いよく移るさま。

「**滔滔**たる流俗に抗する万古不磨の穴の集合体であって」
吾輩は猫である〔1905～06〕
〈夏目漱石〉九

④広大なさま。無辺であるさま。かぎりなくひろがるさま。

3 『詩経』における動物を対象とした擬音語の意味分類

3.1 鳥

a. 鳥の鳴き声

原詩の抜粋と所在：

交交桑扈（節南山之詩・小宛）、交交黄鳥（秦風・黄鳥）、交交桑扈（甫田之什・桑扈）
・**交交**（こうこう）日本語の使用例なし。

鳥の鳴き声という意味で受容されていないが、『日本国語大辞典』では、「まじわるさま。行き交うさま。」と書かれている。「行を送り帰るを迎ふ、出船入船交々（コウコウ）たる、この夕風の涼しさに、暫は夏を萱草」
人情本・明鳥後正夢〔1821～24〕

四・一八回という例も挙げてある。『日本国語大辞典』には収録されている。原詩の意味とした使い方がみられないが、受容レベル3にする。

b. のどかに鳴くさま

原詩の抜粋と所在：

關關雉鳴〈周南・関雉〉

・**關關**（かんかん）

日本語の使用例：「春の鶯関々（クワンクワン）として、花の本に滑か也」源平盛衰記〔14C前〕一二・師長熱田社琵琶事。『日本国語大辞典』では、「鳥がのどかに鳴くさま。鳥が和らいだ声で鳴くさま。」と書かれている。このように、『日本国語大辞典』に収録されており、和文と混ぜての使用例もみられるので、受容レベル5に当たる。

c. なごやかに鳴くさま

原詩の抜粋と所在：其鳴啾啾〈周南・葛覃〉、鷄鳴喈喈〈鄭風・風雨〉、倉庚喈喈〈鹿鳴之什・出車〉、雝雝喈喈〈生民之什・卷阿〉

・**喈喈**（かいかい）

日本語の使用例：「喈喈たる鳥は仏土妙音の響かとも聞へ」俳諧・寛政三年紀行〔1791〕。「①鳥がなごやかに鳴くさま。②鈴や鐘の鳴るさま。」と『日本国語大辞典』に書かれているように、「喈喈」は、鳥の声でもあり、鈴や鐘の鳴る音でもある。そして、『詩経』における「喈喈」の意味も、以上取り上げた前者のほか、後者の例も存在する。鈴や鐘は非生物（モノ）の類であるため、後述することにする。このように、『日本国語大辞典』に収録されており、和文と混ぜての使用例もみられるので、受容レベル5に当たる。

d. 互いに鳴きあっているさま

原詩の抜粋と所在：

鳥鳴嚶嚶〈鹿鳴之什・伐木〉

・**嚶嚶**（おうおう）

『日本国語大辞典』から確認した日本語の使用例は、以下のようになる。
性霊集 - 二〔835頃〕沙門勝道上補陀洛山碑「綺花灼々 異鳥嚶々」
色葉字類抄〔1177～81〕「嚶々 アウ 鳥音也」
古活字本毛詩抄〔17C前〕九「其をとに驚て、鳥がわうわうとないたよ」
俳諧・暁台句集〔1809〕春「悲しい哉、客中鳥雀屋をめぐって其声嚶々」
湯島詣〔1899〕〈泉鏡花〉四三「いかなる名鳥か嚶々（アウアウ）として、三度、梓の胸に鳴いたのである」

挙げている例はすべて鳥の鳴き声として使用されているのがわかる。『性霊集』と『色葉字類抄』においては、漢文のみとなっているが、ほかの三例は和文と混ぜて使用されているため、「嚶嚶」は受容レベル5に当たる。

e. 羽ばたきの音

原詩の抜粋と所在：

肅肅鵠羽〈唐風・鵠羽〉、肅肅其羽〈鴻鴈之什・鴻鴈〉

・肅肅（しゅくしゅく）日本語の使用例なし。

前掲した受容レベルに関する例に触れたように、「肅肅」は以下のような意味として使用されている。「①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。ととのったさま。④おごそかなさま。厳肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたってもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。」（『日本国語大辞典』により）

『日本国語大辞典』における「肅肅」の解釈には、羽ばたきの音という意味が言及されていないが、『新選漢和辞典』の方は、「①つつしむさま。②静かなさま。③早いさま。④おごそかなさま。⑤松風や羽ばたきの形容。」と書かれている。このように、羽ばたきの音を形容する意味とした「肅肅」は、『日本国語大辞典』にはみられないが、『新選漢和辞典』には載っているため、受容レベル2に当たる。

しかし、『詩経』における「肅肅」の意味は、「羽ばたきの音」以外、「つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。」「おごそかなさま。厳肅なさま。」の例も見つかった。いずれも人間の様子を形容するのを表す擬態語であるため、本稿では触れないことにするが、和文と混ぜての使用例（使用例は受容レベル6に挙げた例を参照）も確認でき、且つ、多義語として受容れされているため、受容レベル6に当たることにした。

f. 鳳凰の羽音

原詩の抜粋と所在：

鳳凰于飛 翩翩其羽〈生民之什・卷阿〉

・翩翩（かいかい）日本語の使用例なし。

「翩翩」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』とも収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）では、「鳳凰のとぶ羽音」との注釈をつけてある⁹²。上述した「e. 羽ばたきの音」と同じく「翩翩」は羽音をも表すが、それと区別した理由としては、原詩における「翩翩」の使用対象は鳳凰のみである。

3. 2 虫

a. 虫の鳴き声

原詩の抜粋と所在：

嘒嘒草蟲〈召南・草蟲〉、嘒嘒草蟲〈鹿鳴之什・出車〉

・嘒嘒(ようよう) 日本語の使用例なし。

『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「虫の鳴く声」と書かれている。ゆえに、受容レベル2に当たる。

b. 虫の飛ぶ音

原詩の抜粋と所在：

蠡斯羽 薨薨兮〈周南・蠡斯〉、蟲飛薨薨〈齊風・鷄鳴〉

・薨薨(こうこう) 日本語の使用例なし。

「薨薨」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』とも収録されていないので、受容レベル1に当たる。また、原詩〈文王之什・緜〉にある「度之薨薨」の方は、虫の飛ぶ音ではなく、「土を築板の中に投げ入れる時の音。」と目加田誠(1960)の注釈に書かれている⁹³。つまり、もとの漢語は、虫の飛ぶ音を表すほか、土を投げる音をも表す多義語である。土は非生物(モノ)の類なので、別稿で触れることにする。

c. 蟬の鳴き声

原詩の抜粋と所在：

鳴蜩嘒嘒〈節南山之計・小弁〉

・嘒嘒(けいけい)

『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「①声のせわしいさま。②声がやわらいでいるさま。③声のかすかなさま。」と書かれている。ゆえに、「嘒嘒」は、受容レベル2に当たる。和文と混ぜた使用例は確認できなかったが、『新選漢和辞典』では、「残_レ声蟬嘒嘒(こえをのこしてせみけいけいたり)」(秋おそくまで声を残して鳴く蟬は、いかにも弱々しくかすかな声である。)〈橋在列(たちばなのありつら)・廻文詩〉という漢詩の例を挙げてある。そして、目加田(1983)は、「鳴蜩嘒嘒」を「ケイケイとなく蟬の声」に翻訳している。漢語の音読みのままとまっている。また、『詩経』における「嘒嘒」は、蟬の鳴き声を表すほか、鈴の音、笛を吹く音とした使い方も確認したが、鈴や笛は非生物(モノ)の類なので、別稿で検討することにする。

3. 3 鷄

鷄の鳴き声

原詩の抜粋と所在：

鷄鳴膠膠〈鄭風・風雨〉

・膠膠(こうこう) 日本語の使用例なし。

『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①鶏の鳴く声の形容。②騒ぎ乱れるさま。」と書かれている。ゆえに、「膠膠」は受容レベル2に当たる。受容レベルは低いが、日本語の音読み「こうこう」からみると、現代日本語の鶏の鳴き声である「こけこっこー」には多少相似しているように見える。

3. 4 馬

馬蹄のひびき

原詩の抜粋と所在：

載驅薄薄〈齊風・載駟〉

・薄薄（はくはく） 日本語の使用例なし。

『日本国語大辞典』には、和語である「薄薄（うすうす）」のほか、漢語の「薄薄（はくはく）」が収録されているが、意味は馬蹄のひびきを表すのではなく、「きわめて薄いさま」と書かれている。目加田（1960）では、「馬蹄のひびきポクポクと。」との注釈をつけてある⁹⁴。受容レベルに関しては、『日本国語大辞典』には収録されている意味と異なり、『新選漢和辞典』にも収録されていないため、受容レベル1にする。しかし、音韻上、漢語の音読みである「はくはく」と日本語の「ぼくぼく」はかなり似ており、は（ha）→ぼ（po）という母音交替の例になる。

3. 5 鹿

鹿の鳴き声

原詩の抜粋と所在：

呦呦鹿鳴〈鹿鳴之什・鹿鳴〉

・呦呦（ゆうゆう）日本語の使用例なし。

『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①鹿の鳴く声。②泣きむせぶ声。」と書かれている。ゆえに、「呦呦」受容レベル2に当たる。

3. 6 まとめ

以上は、『詩経』における動物を対象とした擬音語である。中には、鳥に関する漢語のオノマトペの種類が比較的が多い。

第二節の内容を簡潔に表で示すと、以下のようなになる。

表1 『詩経』における動物を対象とした擬音語

	動物を対象とした 擬音語	意味	日本語の 使用例	受容レベル	頻度
1	交交（こうこう）	鳥の鳴き声	×	レベル3	3
2	關關（かんかん）	のどかに鳴くさま	○	レベル5	1

3	啾啾 (かいかい)	なごやかに鳴くさま	○	レベル5	4
4	嚶嚶 (おうおう)	互いに鳴きあっているさま	○	レベル5	1
5	肅肅 (しゅくしゅく)	羽ばたきの音	×	レベル6	2
6	翾翾 (かいかい)	鳳凰の羽音	×	レベル1	1
7	嚶嚶 (ようよう)	虫の鳴き声	×	レベル2	2
8	藹藹 (こうこう)	虫の飛ぶ音	×	レベル1	2
9	嘒嘒 (けいけい)	蟬の鳴き声	○	レベル2	1
10	膠膠 (こうこう)	鶏の鳴き声	×	レベル2	1
11	薄薄 (はくはく)	馬蹄のひびき	×	レベル1	1
12	呦呦 (ゆうゆう)	鹿の鳴き声	×	レベル2	1

表1で示したように、『詩経』における動物を対象とした擬音語の異なり語数は12語である。もっとも頻度が高いのは「啾啾」である。また、表1からみると、受容レベルが高いのは「關關」「啾啾」「嚶嚶」「肅肅」の四語である。そして、この四語の対象はすべて鳥である。「肅肅」を除き、「關關」「啾啾」「嚶嚶」の三語は、日本語として使用されている例もみられる。

4 『詩経』における動物を対象とした擬態語の意味分類

4.1 鳥

a. 鳥の羽がつやつやしているさま

原詩の抜粋と所在：

白鳥嚶嚶〈文王之什・靈台〉

・嚶嚶 (かくかく) 日本語の使用例なし。

「嚶嚶」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』とも収録されていないので、受容レベル1に当たる。

b. 鳥が群れをなして飛ぶさま

原詩の抜粋と所在：

歸飛提提〈節南山之計・小弁〉

・提提 (しし) 日本語の使用例なし。

「提提」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①(ていてい) 安らかなさま。②(しし) 鳥が群れをなして飛ぶさま。」と書かれている。ゆえに、「提提」受容レベル2に当たる。意味によって、発音も異なる。

原詩の抜粋と所在：

振振驚〈駒之什・有駟〉

・**振振**（しんしん） 日本語の使用例は『詩経』にある例のみ。

「振振」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されているが、挙げてある例は、『詩経』にある例のみとなっているので、受容レベル3に当たる。

c. 鳥の羽が破れたさま

原詩の抜粋と所在：

予羽譙譙〈豳風・鴟鴞〉

・**譙譙**（しょうしょう） 日本語の使用例なし。

「譙譙」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「鳥の羽が破れたさま」と書かれているので、受容レベル2に当たる。また、目加田（1983）では、「予羽譙譙」を「翼やつれて」に翻訳し、「憔悴して羽がやせぬけること」との注釈をつけてある⁹⁵。

d. ゆるく翼を伸ばして飛ぶさま

原詩の抜粋と所在：

泄泄其羽〈邶風・雄雉〉

・**泄泄**（えいえい） 日本語の使用例は原詩の意味と異なる。

『日本国語大辞典』では、「たるんでしまりがいいこと。ゆるゆるとしているさま。」と書かれている。そして挙げてある例は、読史余論〔1712〕二・中世以来将帥の任世官世族となりし事「天のまきに蹶（うご）く時にしかく泄々する事なしと云事、まことなる哉」である。つまり、日本語として定着されているが、鳥の飛ぶさまというのを指していない。また、『新選漢和辞典』には収録されていない。本稿では、「泄泄」の受容レベル3にする。

e. 軽く飛び上がるさま

原詩の抜粋と所在：

翩翩者騅〈鹿鳴之什・四牡〉 翩翩者騅〈南有嘉魚之什・南有嘉魚〉

・**翩翩**（へんぺん） 日本語の使用例あり。

文華秀麗集〔818〕上・秋日別友人〈巨勢識人〉「林葉翩翩秋日、行人独向辺山雲」
米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一「飛翔翩翩として、紙の風に舞ひ落る如く、遠く望めば飛蝶に似たり」

「翩翩」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されており、和文と混ぜての使用例もあるので、且つ多義語として受容されている。受容レベル6に当たる。

4. 2 虫

虫のはねおどるさま

原詩の抜粋と所在：

趨趨阜螽〈召南・草蟲〉、趨趨阜螽〈鹿鳴之什・出車〉

・**趨趨**（てきてき） 日本語の使用例なし。

「趨趨」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「はねおどるさま」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

4. 3 魚

a. 魚のはねるさま

原詩の抜粋と所在：

鱸鮒發發〈衛風・碩人〉

・**發發**（はつはつ） 日本語の使用例なし。

「發發」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①風のはやいさま。②魚のはねるさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。また、目加田（1983）では、「發發はピチピチ」との注釈をつけてある⁹⁶。

b. 魚が勝手に出入りするさま

原詩の抜粋と所在：

其魚唯唯〈齊風・蔽笱〉

・**唯唯**（いい） 日本語の使用例は原詩と異なる。

「唯唯」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されているが、日本語として定着した意味は唯々諾々となっているので、原詩と異なる。受容レベル4にする。目加田（1983）は、「其魚唯唯」を「魚はきままに」と翻訳している⁹⁷。

c. 魚が楽しく泳ぐさま

①原詩の抜粋と所在：

南有嘉魚 烝然汕汕〈南有嘉魚之什・南有嘉魚〉

・**汕汕**（さんさん） 日本語の使用例なし。

「汕汕」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）は、「烝然汕汕」を「さわにみち ゆらに遊ぶも」と翻訳しており、注釈に「魚の楽しむ貌」と書いている⁹⁸。

②原詩の抜粋と所在：

南有嘉魚 烝然罩罩〈南有嘉魚之什・南有嘉魚〉

・**罩罩**（とうとう） 日本語の使用例なし。

「罩罩」は、「汕汕」と同じく、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）では、「魚が楽しげにゆらぎ遊いでいる形容として考えられる。」と書いてある⁹⁹。

4. 4 狐

尾を引いてブラブラ行くさま

原詩の抜粋と所在：

有狐綏綏〈衛風・有狐〉 雄狐綏綏〈齊風・南山〉

・**綏綏**（すいすい） 日本語の使用例なし。

「綏綏」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①つれだつて歩くさま。②雪などが降るさま。③ゆったりと落ち着いたさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

4. 5 牛

牛が耳を動かすさま

原詩の抜粋と所在：

其耳濕濕〈鴻鴈之什・無羊〉

・**濕濕**（しつしつ/しゅうしゅう） 日本語の使用例なし。

「濕濕」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①水面がゆれるさま。②家畜が耳を動かすさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

4. 6 馬

a. 馬が勇ましいさま

①原詩の抜粋と所在：

駟介旁旁〈鄭風・清人〉

・**旁旁** 日本語の使用例なし。

「旁旁」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。

②原詩の抜粋と所在：

駟介麇麇〈鄭風・清人〉

・**麇麇**（ひょうひょう） 日本語の使用例なし。

「麇麇」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①ただけしいさま。②盛んなさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

b. 馬が肥えているさま

原詩の抜粋と所在：

駟駟牡馬〈駒之什・駟〉

・駟駟（けいけい） 日本語の使用例なし。

「駟駟」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「馬のたくましく肥えているさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

c. 馬が休まずに走るさま

①原詩の抜粋と所在：

四牡駢駢〈鹿鳴之什・四牡〉、四牡駢駢〈甫田之什・車牽〉

・駢駢（ひひ） 日本語の使用例なし。

「駢駢」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①馬がどこまでも進むさま。②つかれる」と書かれているので、受容レベル2に当たる。受容レベルは低いが、目加田（1983）は、「四牡駢駢」を「四つ馬駢駢として」と翻訳している¹⁰⁰。おそらく、これは、「駢駢」の音読みと和語のオノマトペである「ひひ」が偶然に一致しているかと思われる。

②原詩の抜粋と所在：

四牡彭彭〈谷風之什・北山〉

・彭彭（ほうほう） 日本語の使用例は原詩と異なる。

稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」

「彭彭」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』には収録されているが、日本語として定着した意味は原詩と異なる。受容レベル3にする。

d. 馬がはやく走るさま

原詩の抜粋と所在：

駕彼四駟 載驟駸駸〈鹿鳴之什・四牡〉

・駸駸（しんしん） 日本語の使用例なし。

「駸駸」は、『新選漢和辞典』には収録されていないが、『日本国語大辞典』には収録されている。しかし、挙げてある例は、『詩経』にある例のみとなっているので、受容レベル3に当たる。目加田（1983）は、「駕彼四駟 載驟駸駸」を「車につけし四つの馬やまず馳せ馳せ馳せゆけば」と翻訳している¹⁰¹。

e. 馬が逞しいさま

①原詩の抜粋と所在：

四牡奕奕〈蕩之什・韓奕〉

・奕奕（えきえき） 日本語の使用例なし。

「奕奕」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』には収録されている。受容レベル2に当たる。

②原詩の抜粋と所在：

其馬躑躑〈駒之什・泮水〉、四牡躑躑〈蕩之什・崧高〉

・躑躑（きょうきょう）

「躑躑」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』には収録されている。受容レベル2に当たる。

f. 馬の美しいさま

原詩の抜粋と所在：

四驪濟濟〈齊風・載駟〉

・濟濟（せいせい/さいさい） 日本語の使用例は原詩と異なる。

「濟濟」は、『日本国語大辞典』には収録されているが、馬の美しいさまを形容する意味とは定着されていない。「数が多いさま、よく整い威儀を正しているさま、おごそかにしてつつしむさま、礼法の節度あるさま、多忙であるさま。」などの意味として受容されている。原詩との意味は異なるが、多義語として使用されているため、受容レベル5にした。

4. 7 まとめ

以上は、『詩経』における動物を対象とした擬態語である。中には、鳥と馬の様子を描写する漢語のオノマトペの種類が比較的が多い。

第三節の内容を簡潔に表で示すと、以下ようになる。

表2 『詩経』における動物を対象とした擬態語

	動物を対象とした 擬態語	意味	日本語の 使用例	受容レベル	頻度
1	翯翯（かくかく）	鳥の羽がつやつやしているさま	×	レベル1	1
2	提提（しし）	鳥が群れをなして飛ぶさま	×	レベル2	1
3	振振（しんしん）		×	レベル3	1
4	譙譙（しょうしょう）	鳥の羽が破れたさま	×	レベル2	1
5	泄泄（えいえい）	ゆるく翼を伸ばして飛ぶさま	△	レベル3	1
6	翩翩（へんぺん）	軽く飛び上がるさま	○	レベル6	2
7	趨趨（てきてき）	虫のはねおどるさま	×	レベル2	2
8	發發（はつはつ）	魚のはねるさま	×	レベル2	1

9	唯唯 (いい)	魚が勝手に出入りするさま	△	レベル4	1
10	汕汕 (さんさん)	魚が楽しく泳ぐさま	×	レベル1	1
11	罩罩 (とうとう)		×	レベル1	1
12	綏綏 (すいすい)	尾を引いてブラブラ行くさま	×	レベル2	1
13	濕濕 (しつしつ)	牛が耳を動かすさま	×	レベル1	1
14	旁旁	馬が勇ましいさま	×	レベル1	1
15	麋麋 (ひょうひょう)		×	レベル2	1
16	駟駟 (けいけい)	馬が肥えているさま	×	レベル2	1
17	駢駢 (ひひ)	馬が休まずに走るさま	×	レベル2	2
18	彭彭 (ほうほう)		×	レベル3	1
19	駉駉 (しんしん)	馬がはやく走るさま	×	レベル3	1
20	奕奕 (えきえき)	馬が逞しいさま	×	レベル2	1
21	驍驍 (きょうきょう)		×	レベル2	2
22	濟濟 (せいせい)	馬の美しいさま	△	レベル5	1

表2からみると、『詩経』における動物を対象とした擬態語の種類は22種であり、表1で示した擬音語の12種より多い。また、擬音語と同じく、鳥を対象としたものが多いほか、馬を対象とした擬態語の種類が豊富である。しかし、日本語として定着しているのはわずかである。また、受容レベルがもっとも高いのは鳥が軽く飛び上がるさまを表す「翩翩」である。

それに次ぐ「濟濟」は受容レベル5に至っており、多義語として和文と混ぜての使用例も確認できたが、原詩の馬の美しいさまを表す意味としては受容されていない。

5 おわりに

本節では、『詩経』における漢語のオノマトペ、主に動物を対象とした擬音語と擬態語について、それぞれの意味分類および受容レベル分けを行った。擬音語の異なり語数は12語であり、擬態語の異なり語数は22語である。異なり語数からすると、擬態語の方が多いが、日本語として定着しにくいのがわかった。つまり、『詩経』における動物を対象とした擬態語は、擬音語より受容されにくいと考えられる。

本節の冒頭で触れたように、『詩経』における漢語のオノマトペは、動物を対象としたもの以外に、植物、人間、非生物(モノ)、自然現象、抽象的なものそれぞれ擬音語・擬態語を大量に確認した。

第三節は、植物を対象とした漢語のオノマトペについて検討する。

第三節 『詩経』における植物を対象とした漢語のオノマトペ

1 『詩経』における植物を対象とした擬音語の意味分類

植物は動物のようにみずから音を発することができないが、ここでいう植物を対象とした擬音語とは、外力を受けることによって発した音をさす。『詩経』においては、わずか2語ある。

1. 1 きび

黍を刈り取る音

原詩の抜粋と所在：

黍稷茂止 穫之桎桎〈閔予小子之什・良耜〉

・桎桎（ちつちつ） 日本語の使用例なし。

「桎桎」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「稲などを刈り取る音。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。目加田（1983）は、「黍稷茂止 穫之桎桎」を「黍稷は茂る ざくざく刈りとり」と訳している¹⁰²。

1. 2 こめ

米をあらう音

原詩の抜粋と所在：

釋之叟叟 烝之浮浮〈生民之什・生民〉

・叟叟（しゅうしゅう） 日本語の使用例なし。

「叟叟」は、『日本国語大辞典』には収録されていないが、『新選漢和辞典』では「米をあらう音」と書かれているので、受容レベル2に当たる。目加田（1983）は、「釋之叟叟 烝之浮浮」を「さらさらと積ぎ ふつふつと蒸し」と訳している¹⁰³。

2 『詩経』における植物を対象とした擬態語の意味分類

『詩経』における植物を対象とした擬音語はわずか2語であるが、擬態語の異なり語は34語である。以下、植物の状態を修飾するこの34語の擬態語を、植物ごとに分け、分類を行う。そして、受容レベル、日本語の使用例の有無をはっきり確認できるため、表でまとめる。

2. 1 くず

生い茂るさま

①原詩の抜粋と所在：

維葉萋萋〈周南・葛覃〉

・萋萋（せいせい/さいさい）

『日本国語大辞典』で挙げてある日本語の使用例は以下のようになる。
文華秀麗集〔818〕上・江頭春暁〈嵯峨天皇〉「物候雖言陽和未、汀洲春草欲萋萋」
性靈集 - 一〔835頃〕遊山慕仙詩「纏愛如葛旋、萋萋山谷昌」
卜居集〔1793〕上・懷荏土故人「一水浮烟山漠々、満村過雨麦萋々」
あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〉一五「野草は萋萋として牧場を蔽ひ」

以上の例は「萋萋（せいせい）」であり、次の使用例は「萋萋（さいさい）」である。

葬列〔1906〕〈石川啄木〉「鐘声を載せ来る千古一色の暮風に立ち、涙を萋々（サイサイ）たる草裡に落したりし者」

「萋萋」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されており、和文と混ぜての使用例も確認できたので、受容レベル5に当たる。一方、『詩経』における「萋萋」の意味は生い茂るだけではなく、雲の行くさまでもある。「有滄萋萋〈甫田之什・大田〉」という例が挙げられる。「雲の行くさま」という意味は、『新選漢和辞典』には挙げてあるが、日本語としては定着されていない。つきましては、「萋萋」は多義語として受容されていないので、受容レベル6ではなく、レベル5にした。

②原詩の抜粋と所在：

維葉莫莫〈周南・葛覃〉

・**莫莫**（ばくばく） 日本語の使用例あり。

俳諧・俳諧三部抄〔1677〕上・夏「陰茂しはくはくとしてからす麦〈のふ祐〉」

「莫莫」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されており、和文と混ぜての使用例も確認でき、かつ多義語として『日本国語大辞典』に載っている。

- (1) 草木がさかんに茂るさま。茂り盛えるさま。
- (2) 勢いよくわき起こるさま。また、たちこめたり、たなびいたりするさま。漠漠。
- (3) 静かで慎みぶかいさま。ひっそりしたさま。

また、目加田（1983）は、「維葉莫莫」を「莫莫とその葉茂る」と訳している。

しかし、さかんに茂るさまを表すほかの意味として、日本語の使用例がない。そして、『詩経』における「莫莫」は、「ひっそりしたさま」という意味として使用されている。ここでは触れないことにする。したがって、「莫莫」は、両辞典に収録されており、多義語の意味も載っているが、日本語として使用されたのは、「さかんに茂るさま」を表すのみである。「莫莫」を受容レベル5にした。

2. 2 かずら

原詩の抜粋と所在：

莫莫葛藟〈文王之什・旱麓〉

説明：「莫莫」は、2.1②を参照。

2. 3 きび

a. 盛んに茂るさま

①原詩の抜粋と所在：

芄芄黍苗〈曹風・下泉〉、芄芄黍苗〈魚藻之什・黍苗〉

・芄芄（ほうほう） 日本語の使用例なし。

「芄芄」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「①芄芄（ほうほう）は、草木が盛んに茂るさま。②小動物の尾の毛が長いさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

②原詩の抜粋と所在：

黍稷彳彳〈谷風之什・信南山〉

・彳彳（いくいく） 日本語の使用例なし。

「彳彳」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「①茂るさま。②もようが美しいさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。また、目加田（1983）は、「黍稷彳彳」を「黍稷はふさふさ茂る」と訳している¹⁰⁴。

b. 垂れて茂るさま

①原詩の抜粋と所在：

我黍與與〈谷風之什・楚茨〉

・與與（よよ） 日本語の使用例なし。

「與與」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「草木の茂るさま。②動作がほどよく、礼にかなっているさま。③行ったり来たりするさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

②原詩の抜粋と所在：

彼黍離離〈王風・黍離〉

・離離（りり） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載っている用例である。

菅家文章〔900頃〕一・重陽侍宴、賦景美秋稼「靄靄皆和氣、離離半旅生」

本朝文粹〔1060頃〕一二・池亭記〈慶滋保胤〉「荒蕪眇眇、秀麥離離」

太平記〔14C後〕三三・飢人投身事

「離々（リリ）たる原上の草、墨々（るいり）たる白骨」

兩足院本毛詩抄〔1535頃〕四「離々は黍穂の秀盛な体ぞ。苗とは稷のまだ秀ぬを云ぞ」

人情本・春色辰巳園〔1833～35〕三・序「猶春艸の離々（リリ）たるを思ふ」

葬列〔1906〕〈石川啄木〉「尺もある雑草が離々として生ひ乱れて居る」

「離離」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されており、和文と混ぜての使用例も確認できたので、かつ、多義語として受容されているため、受容レベル6に当たる。

c. たくさん集まっているさま

原詩の抜粋と所在：

穫之栗栗〈関予小子之什・良耜〉

・**栗栗**（りりり） 日本語の使用例は原詩の意味と異なる。

以下は、『日本国語大辞典』に載っている用例である。

①駿台雑話〔1732〕二・春秋のあらそひ「武の楽は征伐より出づる故に、其の美の実、慄（リツ）々として厳なる方に勝れたり」

②報徳記〔1856〕七「身体栗々（リツリツ）として厳寒に歩するが如し」

「栗栗」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されているが、『日本国語大辞典』に挙げてある使用例の意味である恐れ慄くさま、寒さにふるえるさまと異なる。一方、『新選漢和辞典』では、「①たくさんあつまっているさま。②おののくさま。」と書かれているので、①の意味は原詩の意味と一致する。また、目加田（1983）は、「穫之栗栗」を「ぞくぞくと積みば」と訳しており¹⁰⁵、「密なること」との注釈をつけてある¹⁰⁶。

「栗栗」は、日本語として定着されており、多義語として使用されている例も確認できたので、受容レベル6に当たるが、原詩の意味である「たくさん集まっているさま」とした使用例が確認できなかったので、受容レベル5にした。

2. 4 あし

a. あしが茂るさま

原詩の抜粋と所在：

萑葦淠淠〈節南山之計・小弁〉

・**淠淠**（へいへい） 日本語の使用例なし。

「淠淠」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）では、「あしが茂るさま。」との注釈をつけてある¹⁰⁷。

また、『詩経』の「魚藻之什・采菽」における「其旂淠淠」は、茂るさまではなく、「旗のユラユラゆれる形容」と、目加田（1983）で注釈をつけてある¹⁰⁸。旗は、非生物（モノ）の類なので、ここでは触れない。

b. 長く伸び出ているさま

原詩の抜粋と所在：

葭茨揭揭〈衛風・碩人〉

・**掲掲**（けいけい） 日本語の使用例なし。

「掲掲」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「①長いさま。②高いさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。目加田（1983）は、「葭茨掲掲」を「芦荻も茂るめでたさに」と訳している¹⁰⁹。また、目加田（1960）では、「長く伸び出ている形容」との注釈をつけてある¹¹⁰。

c. あしの葉が茂るさま

①原詩の抜粋と所在：

蒹葭采采〈秦風・蒹葭〉

・**采采**（さいさい） 日本語の使用例は原詩と異なる。

本朝無題詩〔1 1 6 2～6 4頃〕二・聞大宋商人献鸚鵡〈大江佐国〉「隴西翅入漢宮深。采々麗容馴德音」

「采采」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されているが、『日本国語大辞典』に載っている「采采」の意味「美しく飾ったさま。彩りの美しいさま。」なので、原詩の意味である「あしの葉が茂るさま」と異なる。しかし、『詩経』の〈曹風・蜉蝣〉における「采采」は美しく飾ったさまという意味である。形容した対象は服なので、ここでは触れないことにする。したがって、受容レベルをレベル4にした。

②原詩の抜粋と所在：

蒹葭萋萋〈秦風・蒹葭〉

説明：「萋萋」は、2.1①を参照。

d. あしの葉があおあおと茂るさま

原詩の抜粋と所在：

蒹葭蒼蒼〈秦風・蒹葭〉

・**蒼蒼**（そうそう） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載っている用例である。

文華秀麗集〔8 1 8〕下・得澗底松〈嵯峨天皇〉「高声寂寂寒炎節、古色蒼蒼暗夕陽」

浮世草子・近代艶隠者〔1686〕一・四

「なをゆきむかふに、杣（すぎ）のむら立蒼々（ソウソウ）たる木陰に近づく」

最暗黒之東京〔1893〕〈松原岩五郎〉九

「蒼々（ソウソウ）たる故郷の山嶽、穰々たる田間の沃野を最後の樂園として」

「蒼蒼」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、和文と混ぜての使用例を確認できたので、かつ、「天のあおいさま」「月の色の青白いさま」「髪の毛が白くなりはじめたさま」「薄暗いさま」の多義語として定着されているので、受容レベル6に当たる。また、和語の「蒼蒼（あおあお）」と似ているが、「あおあお」の意味には「いかにもあおいさま」しかないので、使用範囲は、漢語の「そうそう」に劣るという一面が伺える。

2. 5 まめ

生い茂るさま

原詩の抜粋と所在：

荏菥旆旆〈生民之什・生民〉

・旆旆（はいはい） 日本語の使用例なし。

「旆旆」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「①旗のなびくさま。②草木の生い茂ったさま。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。

2. 6 うり

実の多いさま

原詩の抜粋と所在：

瓜瓞嗶嗶〈生民之什・生民〉

・嗶嗶（ほうほう） 日本語の使用例なし。

「嗶嗶」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「実の多いさま」と書かれているので、受容レベル2に当たる。目加田（1983）は、「瓜瓞嗶嗶」を「瓜瓞はごろごろとなった」と訳している¹¹¹。

2. 7 むぎ

生い茂るさま

①原詩の抜粋と所在：

麻麥幪幪〈生民之什・生民〉

・幪幪（もうもう） 日本語の使用例なし。

「幪幪」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「草木がおいしげるさま」と書かれているので、受容レベル2に当たる。そして、目加田（1983）は、「麻麥幪幪」を「麻麦もうもうと茂り」と、漢語の音読みで訳している¹¹²。「もうもう」は、現代日本語のオノマトペとして使用されているが、漢字表記は、「濛濛」または「朦朦」である。しかし、生い茂るさまという意味と異なる。

②原詩の抜粋と所在：

芄芄其麥〈鄘風・載馳〉

説明：「芄芄」は、2.3a①を参照。

2.8 いね

苗の美しいさま

原詩の抜粋と所在：

禾役稷稷〈生民之什・生民〉

・稷稷（すいすい） 日本語の使用例なし。

「稷稷」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「苗の美しいさま」と書かれているので、受容レベル2に当たる。また、目加田（1983）は、「禾役稷稷」を「禾はすいすいと列なり」と、漢語の音読みで訳している¹¹³。「すいすい」は、現代日本語のオノマトペであるが、苗の美しいさまという意味と異なる。

2.9 はぐさ

a. 高く伸び出るさま

原詩の抜粋と所在：

維莠桀桀〈齊風・甫田〉

・桀桀（けっけっ？） 日本語の使用例なし。読み方不明。

「桀桀」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）は、「維莠桀桀」を「莠ばかりが伸びしげる」と訳している¹¹⁴。

b. 生い茂るさま

原詩の抜粋と所在：

維莠驕驕〈齊風・甫田〉

・驕驕（きょうきょう？） 日本語の使用例なし。読み方不明。

「驕驕」は、「桀桀」と同じく、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）は、「維莠驕驕」を「莠ばかりが伸生い茂る」と訳している¹¹⁵。

2. 10 こくもつ

a. 穀物が豊かに実るさま

原詩の抜粋と所在：

豊年穰穰〈商頌・烈祖〉

・穰穰（じょうじょう） 日本語の使用例あり。

最暗黒之東京〔1893〕〈松原岩五郎〉九

「蒼々たる故郷の山嶽、穰々（ジャウジャウ）たる田間の沃野を最後の樂園として」

「穰穰」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、和文と混ぜての使用例が確認できたので、受容レベル5に当たる。目加田（1983）は、「豊年穰穰」を「年は豊かにみのりわたる」と訳している¹¹⁶。しかし、『詩経』〈清廟之什・執競〉における「降福穰穰」の「穰穰」は穀物が豊かに実るさまという意味ではない。目加田（1983）は、「降福穰穰」を「福を降しますこといと大いなり」と訳している¹¹⁷。そして、注釈に「毛伝に衆なり」とつけてある¹¹⁸。つまり、「降福穰穰」の「穰穰」は、多いさまを表すのである。多さは、程度を表すものであり、抽象的なものであるため、後述することにする。

b. 苗が生えそろったさま

原詩の抜粋と所在：

厭厭其苗〈閔予小子之什・載芟〉

・厭厭（えんえん） 日本語の使用例なし。

「厭厭」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されているが、「苗が生えそろったさま」として日本語の使用例は確認できなかった。『詩経』〈秦風・小戎〉における「厭厭良人」の「厭厭」は、安らかで静かなさまを表し、人間の様子を形容しているため、後述することにする。

2. 11 いばら

a. 茂るさま

原詩の抜粋と所在

楚楚者茨〈谷風之什・楚茨〉

・楚楚（そそ） 日本語の使用例なし。

「楚楚」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されているが、『日本国語大辞典』に載ってある用例は、この原詩の「楚楚者茨」のみ。したがって、「楚楚」は受容レベル3に当たる。また、『詩経』〈曹風・蜉蝣〉における「衣裳楚楚」の「楚楚」

は、あざやかなさまをも表すので、「楚楚」は多義語である。形容している対象は服（非生物）なので、後述することにする。

b. 盛んに茂るさま

原詩の抜粋と所在：

芄芄棫樸〈文王之什・棫樸〉

説明：「芄芄」は、2. 3a①を参照。

c. いばらの芽が若々しいさま

原詩の抜粋と所在：

棘心夭夭〈邶風・凱風〉

・夭夭（ようよう） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載ってある用例である。

異制庭訓往来〔14C中〕「夫芙蓉之眸夭夭。楊柳之粧嫋嫋」

太平記〔14C後〕三七・畠山入道々誓謀叛事

「秘して深窓に有りしかば、夭々（ヨウヨウ）たる桃花の暁の露を含んで、墻（かき）より余る一枝の霞に匂へるが如く也」

「夭夭」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、和文と混ぜての使用例も確認したので、受容レベル5に当たる。

2. 12 あおぎり

a. 垂れて茂るさま

原詩の抜粋と所在：

其桐其椅 其實離離〈南有嘉魚之什・湛露〉

説明：「離離」は、2. 3b②を参照。

b. 盛んに生い茂るさま

原詩の抜粋と所在：

梧桐生矣于彼朝陽 萋萋萋萋〈生民之什・卷阿〉

説明：「萋萋」は、2. 1①を参照。

2. 13 やなぎ

a. やなぎの葉がさかんに茂るさま

原詩の抜粋と所在：

東門之楊 其葉𦉰𦉰 〈陳風・東門之楊〉

・𦉰𦉰 (そうそう) 日本語の使用例なし。

「𦉰𦉰」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では「葉の盛んにしげるようす。」と書かれているので、受容レベル2に当たる。原詩では、柳の葉を形容している。

b. やなぎの木が茂るさま

原詩の抜粋と所在：

東門之楊 其葉肺肺 〈陳風・東門之楊〉

・肺肺 (はいはい) 日本語の使用例なし。

「肺肺」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田(1983)は、「東門之楊 其葉肺肺」を「東の門のやなぎの木こんもり茂ったその葉陰」と訳している¹¹⁹。

c. やなぎの枝がしなやかなさま

原詩の抜粋と所在：

楊柳依依 〈鹿鳴之什・采薇〉

・依依 (いい) 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載ってある用例である。

文華秀麗集〔818〕中・奉和春閨怨〈巨勢識人〉「閑庭点点蒼苔駁、暗牕依依綠柳低」

本朝文粹〔1060頃〕一・柳化為松賦〈紀長谷雄〉

「豈敢依依於陶令之種只須鬱鬱於秦皇之封」

中華若木詩抄〔1520頃〕下「楊柳依々綠映門〈略〉依々は、柳の自然の趣ぞ」

「依依」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、和文と混ぜての使用例を確認できたので、かつ「恋い慕うさま」「ほのかなさま」などの多義語として『日本国語大辞典』に載ってあるため、受容レベル6に当たる。

2. 14 しょうはく

すくすくと生い茂るさま

原詩の抜粋と所在：

松柏丸丸 〈商頌・殷武〉

・丸丸 (がんがん?) 日本語の使用例なし。読み方不明。

「丸丸」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）は、「松柏丸丸」を「松柏すくすくと生い立り」と訳している¹²⁰。

2. 15 とち

生い茂るさま

原詩の抜粋と所在：

維柞之枝 其葉蓬蓬〈魚藻之什・采菽〉

・蓬蓬（ほうほう） 日本語の使用例はあるが、草や葉を対象とした用例はなし。

以下は、『日本国語大辞典』に載ってある用例である。

玉塵抄〔1563〕三六「琰がかみもほうほうとしてはたして走て操が所えいて罪をゆるしてたまわれとこうたぞ」

思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉四・一一「六尺ゆたかの赤髯蓬々たる、併し人相のいい西洋人が」

人間嫌ひ〔1949〕〈正宗白鳥〉「ズボンの破れ目から尻の皮を露出してゐる頭髪蓬々（ホウホウ）とした一個のルンペンが虱を捻り潰してゐる」

『日本国語大辞典』における「蓬蓬」の意味は、「①草が生い茂るさま、また、髪やひげがのびて乱れているさま。②煙や蒸気が盛んに立ちのぼるさま。③風がはげしく吹くさま。」である。①の意味では、草が生い茂るさまと書かれているが、上記の用例は、髪が乱れているさまのみ。ここでは、「蓬蓬」を受容レベル5にした。

2. 16 もものき

盛んに茂るさま

原詩の抜粋と所在：

其葉藎藎〈周南・桃夭〉

・藎藎（しんしん） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載ってある用例である。

朝野群載〔1116〕二・沈春引〈惟宗孝仲〉「庭草荒兮藎々、砌石細兮磷々」

鳳啼集〔1654頃〕題画図「茅屋斜連南澗辺、陽坡青草自藎藎」

明六雑誌 - 一二号〔1874〕教門論・七〈西周〉「此園荒蕪藎々蔓々吾之を欲せず、汝墾闢して旧根を芟夷し以て此新種を播せよ」

葬列〔1906〕〈石川啄木〉「しんしんと生ひ茂った杉木立に囲まれて」

「藜藜」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、和文と混ぜての用例も確認できたので、受容レベル5に当たる。

2. 17 あかなし

a. 盛んに茂るさま

原詩の抜粋と所在：

有杖之杜 其葉涓涓〈唐風・杖杜〉

・涓涓（しょしょ？） 日本語の使用例なし。読み方不明。

「涓涓」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。目加田（1983）は、「有杖之杜 其葉涓涓」を「あかなしは ひと本立って 葉も繁くしげっているが」と訳しており¹²¹、「盛んに茂る形容」との注釈をつけてある¹²²。

b. 青く盛んに茂るさま

原詩の抜粋と所在：

有杖之杜 其葉菁菁〈唐風・杖杜〉

・菁菁（せいせい） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載ってある用例である。

あらくれ〔1915〕〈徳田秋声〉一〇四「夏草が菁菁（セイセイ）と生繁って」

上記のように、「菁菁」は和文と混ぜての使用例を確認できたので、受容レベル5に当たる。

2. 18 やぶ

高く伸びしげっているさま

原詩の抜粋と所在：

翹翹錯薪〈周南・漢広〉

・翹翹（ぎょうぎょう） 日本語の使用例は原詩と異なる。

以下は、『日本国語大辞典』に載ってある用例である。

日本詩史〔1771〕三「気骨雄雄。翹翹一時」

*米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一四「名工各其匠思を極め、図式を取立たる、其中に於て翹翹たるを選ぶに、尚五十名あり」

「翹翹」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されているが、上記のように、和文と混ぜての使用例の意味は、群をぬきんでるさまである。そして、「すくすく伸びているさま」に対する用例は『詩経』のみ。したがって、「翹翹」を受容レベル4にした。

2. 19 たけ

美しく茂るさま

原詩の抜粋と所在：

緑竹猗猗〈衛風・淇奥〉

・猗猗（いい） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載ってある用例である。

色葉字類抄〔1177～81〕「猗猗 イイ ウルハシ」

了幻集〔1392頃〕題画竹二首「清風葉々緑猗々。況在瀟湘夢覺時」

思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉三・三「千竿の緑竹猗々（キキ）として戦いで居る」

「猗猗」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、和文と混ぜての使用例も確認できたので、受容レベル5に当たる。

2. 20 いららぐさ

枝が若々しく潤いあるさま

原詩の抜粋と所在：

隰有萋萋 猗猗其枝 夭之沃沃〈檜風・隰有萋萋〉

・沃沃（よくよく） 日本語の使用例なし。

目加田（1983）は、「隰有萋萋 猗猗其枝 夭之沃沃」を「さわにはいらら 見事な枝よ若々しくてつややかな」と訳している¹²³。「沃沃」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。しかし、「～若」を接尾辞とした漢語のオノマトペの特徴の一つとされている「沃若」は、『詩経』〈鹿鳴之什・皇皇者華〉で使用されており、原詩の抜粋は「桑之未落 其葉沃若」である。「沃若」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では、「①つややかなさま。②従順でおとなしいさま。」と書かれている。そして、目加田（1983）は、「桑之未落 其葉沃若」を「桑の葉がまだ落ちぬとき その葉はつややかに潤っているか」と訳している¹²⁴。つまり、「沃沃」と「沃若」の意味は同じである。したがって、「沃沃」を受容レベル2にした。

2. 21 おはぎ

青く盛んに茂るさま

原詩の抜粋と所在：

菁菁者莪 在彼中阿 〈南有嘉魚之什・菁菁 者莪〉

説明：「菁菁」は 2. 17b を参照。

2. 22 くさぎ

茂るさま

原詩の抜粋と所在：

卉木萋萋 〈鹿鳴之什・出車〉、卉木萋萋 〈鹿鳴之什・杖杜〉

説明：「萋萋」は、2. 1①を参照。

2. 23 もものはな

a. 照り映えるさま

原詩の抜粋と所在：

桃之夭夭 灼灼其華 〈周南・桃夭〉

・灼灼（しゃくしゃく） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載っている用例である。

万葉集〔8 C 後〕一六・三八三五・左注「水影濤々蓮花灼々」

凌雲集〔8 1 4〕詠桃花〈平城天皇〉「春花百種何為艶、灼々桃花最可憐」

文華秀麗集〔8 1 8〕上・奉和春日江亭閑望〈巨勢識人〉「園林半灼灼、原野尽芊芊」

経国集〔8 2 7〕一一・奉和太上天皇春堂五詠〈坂田永河〉「御春堂、春堂灼々燈」

垂加文集〔1 7 1 4～2 4〕一・会津山水記「激灑兮水光、灼爍兮漁火、不堪遠望也」

漂荒紀事〔1 8 4 8～5 0 頃〕四「其籬内に入り、漸く深く進ば黑暗中、双眼灼々として明星の如なるを見る」

「灼灼」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、多々なる漢文の用例および和文と混ぜての使用例を確認できたので、かつ「盛んなさま」という多義語でもあるため、受容レベル6に当たる。

b. みずみずしいさま。

原詩の抜粋と所在：

桃之夭夭 有蕢其實 〈周南・桃夭〉

説明：「夭夭」は、2. 11c を参照。

2. 24 はな

はなやかなさま

原詩の抜粋と所在：

皇皇者華 于彼原隰 〈鹿鳴之什・皇皇者華〉

・皇皇（こうこう） 日本語の使用例あり。

以下は、『日本国語大辞典』に載っている用例である。

江戸繁昌記〔1832～36〕五・後序「其往く、済々、其還る、皇々」

「皇皇」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、上記のように、和文と混ぜての使用例を確認できたので、受容レベル5に当たる。目加田（1983）は、「皇皇者華 于彼原隰」を「照る花は 野にも沢にも」と訳している¹²⁵。

3 まとめ

以上の内容を簡潔にまとめると、以下のようになる。

表3 植物を対象とした擬態語

	擬態語	対象	意味	原詩の抜粋と所在	レベル	頻度
1	萋萋	くず	生い茂るさま	維葉萋萋 〈周南・葛覃〉	5	5
		あし	葉が茂るさま	蒹葭萋萋 〈秦風・蒹葭〉		
		くさぎ	茂るさま	卉木萋萋 〈鹿鳴之什・出車〉、 卉木萋萋 〈鹿鳴之什・杕杜〉		
		あおぎり	盛んに茂るさま	梧桐生矣于彼朝陽 萋萋萋萋 〈生民之什・卷阿〉		
2	莫莫	くず	生い茂るさま	維葉莫莫 〈周南・葛覃〉	5	2
		かずら		莫莫葛藟 〈文王之什・旱麓〉		
3	芄芄	きび	盛んに茂るさま	芄芄黍苗 〈曹風・下泉〉 芄芄黍 苗 〈魚藻之什・黍苗〉	2	4
		むぎ	生い茂るさま	芄芄其麥 〈鄘風・載馳〉		
		いばら	盛んに茂るさま	芄芄棫樸 〈文王之什・棫樸〉		
4	彳彳	きび	盛んに茂るさま	黍稷彳彳 〈谷風之什・信南山〉	2	1
5	與與	きび	垂れて茂るさま	我黍與與 〈谷風之什・楚茨〉	2	1
6	離離	きび	垂れて茂るさま	彼黍離離 〈王風・黍離〉	6	2
		あおぎり		其桐其椅 其實離離 〈南有嘉魚 之什・湛露〉		

7	栗栗	きび	沢山集まっているさま	穫之栗栗〈閔予小子之什・良耜〉	5	1
8	淠淠	あし	茂るさま	萑葦淠淠〈節南山之計・小弁〉	1	1
9	揭揭	あし	長く伸び出ているさま	葭茨揭揭〈衛風・碩人〉	2	1
10	采采	あし	葉が茂るさま	蒹葭采采〈秦風・蒹葭〉	4	1
11	蒼蒼	あし	葉があおあおと茂るさま	蒹葭蒼蒼〈秦風・蒹葭〉	6	1
12	旆旆	まめ	生い茂るさま	荏菽旆旆〈生民之什・生民〉	2	1
13	嗒嗒	うり	実の多いさま	瓜瓞嗒嗒〈生民之什・生民〉	2	1
14	幪幪	むぎ	生い茂るさま	麻麥幪幪〈生民之什・生民〉	2	1
15	稊稊	いね	苗の美しいさま	禾役稊稊〈生民之什・生民〉	2	1
16	桀桀	はぐさ	高く伸びるさま	維莠桀桀〈齊風・甫田〉	1	1
17	驕驕	はぐさ	生い茂るさま	維莠驕驕〈齊風・甫田〉	1	1
18	穰穰	こくもつ	豊かに実るさま	豊年穰穰〈商頌・烈祖〉	5	1
19	厭厭	こくもつ	苗が生えそろったさま	厭厭其苗〈閔予小子之什・載芟〉	3	1
20	楚楚	いばら	茂るさま	楚楚者茨〈谷風之什・楚茨〉	3	1
21	夭夭	いばら	芽が若々しいさま	棘心夭夭〈邶風・凱風〉	5	2
		もものはな	みずみずしいさま	桃之夭夭 有蕢其實〈周南・桃夭〉		
22	泱泱	やなぎ	葉が盛んに茂るさま	東門之楊 其葉泱泱〈陳風・東門之楊〉	2	1
23	肺肺	やなぎ	木が茂るさま	東門之楊 其葉肺肺〈陳風・東門之楊〉	1	1
24	依依	やなぎ	枝がしなやかなさま	楊柳依依〈鹿鳴之什・采芣〉	6	1
25	丸丸	しょうはく	すいすいと生い茂るさま	松柏丸丸〈商頌・殷武〉	1	1
26	蓬蓬	とち	生い茂るさま	維柞之枝 其葉蓬蓬〈魚藻之什・采芣〉	5	1
27	蓁蓁	もものき	盛んに茂るさま	其葉蓁蓁〈周南・桃夭〉	5	1
28	湄湄	あかなし	盛んに茂るさま	有杕之杜 其葉湄湄〈唐風・杕杜〉	1	1
29	菁菁	あかなし	青く盛んに茂るさま	有杕之杜 其葉菁菁〈唐風・杕杜〉	5	2
		おはぎ		菁菁者莪 在彼中阿〈南有嘉魚之什・菁菁者莪〉		
30	翹翹	やぶ	高く伸び茂っているさま	翹翹錯薪〈周南・漢廣〉	4	1

31	猗猗	たけ	美しく茂るさま	緑竹猗猗〈衛風・淇奥〉	5	1
32	沃沃	いららぐさ	枝が若々しく潤いあるさま	隰有萋萋 猗猗其枝 夭之沃沃 〈檜風・隰有萋萋〉	2	1
33	灼灼	もものはな	照り映えるさま	桃之夭夭 灼灼其華〈周南・桃夭〉	6	1
34	皇皇	はな	はなやかなさま	皇皇者華 于彼原隰〈鹿鳴之什・皇皇者華〉	5	1

表3から見ると、受容レベルがもっとも高い擬態語は、レベル6：離離、蒼蒼、依依、灼灼の4語であり、レベル5：萋萋、莫莫、栗栗、穰穰、夭夭、蓬蓬、蓁蓁、菁菁、猗猗、皇皇の10語である。つまり、この14語の擬態語は日本語として定着しやすいということである。

4 おわりに

この節で検討した対象は植物なので、擬音語の2語より擬態語の34語のほうは圧倒的に多い。そして、この34語のうち、受容レベルが高い語が14語であるのに対し、第二節の動物を対象とした擬態語の22語のうち、レベル5なし、レベル6に至る語わずか1語である。つまり、『詩経』における漢語の擬態語においては、日本語として受容しやすいのが、植物の状態を形容するものである。

第四節 『詩経』における自然現象を対象とした漢語のオノマトペ

1 はじめに

この節では、『詩経』における自然現象を対象とした漢語のオノマトペについて検討する。『詩経』における自然現象を描写する対象は、雨、雪、雷、雲、水、日の光、露、山である。擬音語と擬態語を分けただけで、意味分類を行うが、擬音語は川の流れる音の一種のみである。したがって、自然現象を対象とした擬態語を中心に意味分類を行う。

2 『詩経』における自然現象を対象とした擬音語

2. 1 川

川の流れる音

原詩の抜粋と所在：

北流活活〈衛風・碩人〉 guoguo huo hua

- ・活活（かつかつ？） 日本語の意味は原詩と異なる。

「活活」は、『新選漢和辞典』に収録されていないが、『日本国語大辞典』に収録されている。しかし、川の流れる音を表すのではなく、仮死状態にある人に気合いをかけ、生き返らせることとして使われているので、受容レベル1にした。また、和語の「いきいき」の漢字表記は「生き生き」または「活き活き」とされている。語形は、現代日本語オノマトペのABAB型（ぺらぺら、さらさらなど）に相似しているが、「活きる」という動詞を名詞化した「活き」の積み重ねとみなしているため、オノマトペとしない。

目加田（1983）は、原詩の「北流活活」を「北に流るる水の音」と訳している¹²⁶。

2. 2 雷

雷の轟き

原詩の抜粋と所在：

虩虩其轟〈邶風・終風〉

- ・虩虩（きき） 日本語の使用例なし。

3 『詩経』における自然現象を対象とした擬態語の意味分類

3. 1 雨

風雨が激しく寒冷なさま

原詩の抜粋と所在：

風雨淒淒〈鄭風・風雨〉、秋日淒淒〈谷風之什・四月〉

- ・淒淒（せいせい） 日本語の使用例あり。

『日本国語大辞典』に載っている用例は以下のようになる。

経国集〔827〕一三・夕次播州高砂〈淡海福良麻呂〉「凄凄抱霜雪、夜々宿波瀾」
蕉堅藁〔1403〕南山新居故人持筍茗見贈遂留之宿「虚閣空廊雲冉冉、疎烟小雨晚凄々」
交隣須知〔18C中か〕四・逍遙「凄凄 セイセイ ト シタ風霜ニ ドウシテ ユコウカ」
柳湾漁唱 - 一集〔1821〕秋柳二首「凄凄雨暗漢南路、凜凜霜飛灞上宮」
広益熟字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「凄々 セイセイ サムキ」

「凄凄」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されている。そして、和語の多い文章における使用例を確認したので、かつ「ものさびしいさま」「涼しいさま」という多義語として受容されているため、受容レベル6に当たる。

3. 2 雪

雪のさかんに降るさま

①原詩の抜粋と所在：

雨雪雰雰〈谷風之什・信南山〉

・**雰雰**（ふんぷん） 日本語の使用例なし。

「雰雰」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。しかし、においの強いさまを表す「芬芬」、おこるさま、いきどおるさまを表す「憤憤」、入りまじって乱れるさまを表す「紛紛」は、いずれも「ふんぷん」であり、日本語として定着している。言葉の意味はそれぞれ異なるが、その意味が示す程度は甚だしいというのが共通している。「芬芬」はにおいの強さを、「憤憤」は尋常ではないかきかき、「紛紛」は非常に乱れているようすを強調している。そして、原詩においては、雪のさかんに降るさまを描写している。「雰雰」は、日本語として定着されていないが、同じく雪や雨が降りしきるさまを表す「霏霏」は、日本語として定着されている。重言型である「霏霏」は、『詩経』にはみられないが、単一型である「霏」の使用例は、〈邶風・北風〉で確認できた。

②原詩の抜粋と所在：

雨雪瀼瀼〈魚藻之什・角弓〉

・**瀼瀼**（ひょうひょう） 日本語の使用例なし。

「瀼瀼」は、『日本国語大辞典』と『新選漢和辞典』に収録されていないので、受容レベル1に当たる。「瀼瀼」は、日本語として定着していないが、同じ「ひょうひょう」で

ある「飄飄」（風に吹かれて翻るさま→「落花飄飄」）と「颯颯」（風が激しく吹くさま→「疾風は颯颯として」）は、日本語として定着している。

3. 3 雲

a. 雲のさかんにおこるさま

興雨祁祁〈甫田之什・大田〉

・祁祁（きき） 日本語の使用例なし。

「祁祁」は、『日本国語大辞典』に収録されていないが、『新選漢和辞典』では「①静かでゆったりしたさま。②多いさま」と書かれている。受容レベル2に当たる。原詩では、雲の多いさまを描写している。

b. 雲の軽く明るいさま

原詩の抜粋と所在：

英英白雲〈魚藻之什・白樺〉

・英英（えいえい） 日本語の使用例あり。

『日本国語大辞典』に載ってある用例は以下のようになる。

浄瑠璃・姫山姥〔1712頃〕一

「空に紫の雲気たな引、斗牛の間に英々（エイエイ）たり」；

日本風景論〔1894〕〈志賀重昂〉三

「太平洋面より発上する水蒸気は、東南風と共に此の山脈に撞撃し、山脈以南一帯の処に英々浮動す」

3. 4 水

a. 水がみちあふれ流れるさま。

・瀾瀾（びび） 日本語の使用例なし。

・洋洋（ようよう）

「諸（これ）を水中に納（いる）れば、圍々洋洋（ヨウヨウ〈注〉ユラリ）として活潑たる魚と成り」造化妙々奇談〔1879～80〕〈宮崎柳条〉一三

b. 水勢の強く激しいさま。

・湯湯（しょうしょう/とうとう）滔々

「下枝に鳴く蟬の音（こゑ）滋く、前には湯々たる流水湛へて実相真如の月浮び」日蓮遺文 - 身延山御書〔1282〕

c. 水がさかんに流れるさま

・ **渙渙** (かんかん)

「この谷間に水音だけが**渙々** (カンカン) と響いて」冥府山水図 [1951] 〈三浦朱門〉

・ **滔滔** (とうとう)

「今日遊行見勝間田池、水影**濤々**蓮花灼々」万葉集 [8C後] 一六・三八三五・左注

「是を受て大なる鉄の桶に入れあつめたれば、程なく十分に湛へて**滔々** (タウタウ) たる事夕陽を浸せる江水の如也」太平記 [14C後] 二〇・城入結道墮地獄事

d. 水が清いさま

・ **粼粼** (りんりん) 日本語の使用例なし。

e. 流れ行くさま

・ **秩秩** (ちつちつ) 日本語の使用例あり。

日本風景論 [1894] 〈志賀重昂〉六「石狩の大江汪々として其間に曲折し、田疇墟落秩々として画くが如く」

f. 水のみなぎり広がっているさま (空間的にひろびろとしたさま)

・ **浩浩** (こうこう) 日本語の使用例あり。

経国集 [827] 一四・秋雲篇示同舎郎〈惟良春道〉「溪流兮浩浩。芳草兮萋々」；

太平記 [14C後] 二六・妙吉侍者事「雲の浪、烟の波最 (いと) 深く、風浩々 (カウカウ) として閑かならず、月華星彩蒼茫たり」；

十善法語 [1775] 八「浩々たる天地の間、この道時にしたがひ隠顕す」

3. 5 光

a. 明るいさま

・ **杲杲** (こうこう) 日本語の使用例あり。

「杲々と百合にさす日や朝掃除」妻木 [1904~06] 〈松瀬青々〉夏

b. 光り輝くさま

・ **煌煌** (こうこう) 日本語の使用例あり。

「五星煌煌 (クワウクワウ) として赤き事火の如く」源平盛衰記 [14C前] 一六・遷都事

c. 白白と光り輝くさま

・ **皎皎** (こうこう) 日本語の使用例あり。

万葉集 [8C後] 一五・三六六八・題詞「於時夜月之光皎々流照」；

読本・南総里見八犬伝〔1814～42〕八・八三回「皎皎（ケウケウ）たる頭の霜は、枯野の小草を紈（わが）ねし如く」；

自然と人生〔1900〕〈徳富蘆花〉自然に対する五分時・自然の色「其山々の間に越路の山の雪皎皎（ケウケウ）と白きを見よ」

d. 赤く照り輝くさま

・赫赫（かっかく）日本語の使用例あり。

日蓮遺文 - 開目抄〔1272〕「赫々たる日輪、明々たる月輪のごとく」；

和英語林集成（初版）〔1867〕「リョウガン kakukaku（カクカク）トシテ ニチリンノ ナラビイデタルゴトク

3. 6 露

露の多いさま

・濃濃（じょうじょう）日本語の使用例なし。

・濃濃（じょうじょう/のうのう）日本語の使用例あり。

南游稿〔1425頃〕荷露「濃々却恐成円重、碧玉盤傾碎水精」

・湛湛（たんたん）日本語の使用例あり。

凌雲集〔814〕九月九日侍謙神泉苑各賦一物得秋露、応製〈淳和天皇〉「謬忝恩筵何所賦、晞陽湛々被群黎」

3. 7 山

a. 山の大きく聳えるさま

・崔崔（さいさい）日本語の使用例あり。

「売ものは崔崔（サイサイ）として地にみち、山海の産物をここにつくすかと疑ひ」四時交加〔1799〕下・冬

b. 山や岩などが高くけわしく峙つさま

・巖巖（がんがん）日本語の使用例あり。

浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕一・山神想紀氏娘「東西南の三方（みかた）は山めぐり巖々（ガンガン）と高し」；

不如帰〔1898～99〕〈徳富蘆花〉上・五・一「此大山巖々（ガンガン）として物に動ぜぬ大器量の將軍をば」

以上取り上げたのは、『詩経』における自然現象のオノマトペである。第五節（人間の様子）、第六節（人間の心理状態）、第七節（抽象的なもの）それぞれ大量に確認したので、意味分類をした上で、用例とそれに対する日本語の用例のみ列挙することにする。

第五節 『詩經』における人間の様子を対象とした漢語のオノマトペ

①信義仁愛の厚いさま

- ・振振（しんしん）日本語の使用例なし。

②ひきしまったさま。ととのったさま

- ・肅肅（しゅくしゅく）

「各軍団肅々として山を下り或は右に赴き或は左に赴く」経国美談〔1883～84〕
〈矢野龍溪〉後・一七

③勇ましいさま。

- ・赳赳（きゅうきゅう）

「赳々（キウキウ）たる男爵の將軍忽ち産を揮って執達吏に押へられ」如是放語〔1898〕
〈内田魯庵〉

- ・麤麤（ひょうひょう）日本語の使用例なし。

- ・烈烈（れつれつ）

経国集〔827〕一・重陽節神泉苑賦秋可哀応制〈菅原清公〉「望朝露之团々、聴夕風之烈々」；戦陣訓〔1941〕一・二「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ断乎之を撃碎すべし」

- ・桓桓（かんかん）

浄瑠璃・用明天皇職人鑑〔1705〕一「冠もぎ捨て〈略〉どうど座してくんくんたる声をあげエエ無念至極せり」；

浄瑠璃・撰津国長柄人柱〔1727〕三「百官を押靡け、自然と我を高御座。桓桓（クワンクワン）と見下して」；長唄・江の島〔江戸後〕「海岸峨々たる巖上を、桓々として嚴重たり」

- ・矯矯（きょうきょう）

音訓新聞字引〔1876〕〈萩原乙彦〉「矯々 ケウケウ チカラヲイレル」；

黒い眼と茶色の目〔1914〕〈徳富蘆花〉二・三「高森さんがパウロと称するに対し、自ら矯々（ケウケウ）の気を負うてパウロの前名サウロを名乗って居た」

④つつしむさま

a. つつしみ敬うさま。

- ・肅肅（しゅくしゅく）

「上帝英傑を下して国人を救ふと信じ、自ら慰め自ら楽み日夜肅々として之を俟てりき」真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉

- ・翼翼（よくよく）

江戸繁昌記〔1832～36〕二・葬礼「恂々翼翼、鮑を辟て芝に居り、人を誨て倦ま
ず」；如是放語〔1898〕〈内田魯庵〉「且つ憐むべきは誠実律義なる賈人、純良無垢
なる青年、細心翼翼（ヨクヨク）たる循吏朴直一遍の農民」；
林檎の下の顔〔1971～73〕〈真継伸彦〉一「翼翼たる小心に翻弄されつづけなけれ
ばならぬ自分を変えたいからだった」

b. おごそかにしてつつしむさま

・濟濟（済済）（せいせい/さいさい）

菅家文草〔900頃〕一・仲春積奠、聴講孝経、同賦資事父事君「乃父乃兄、無虧燕毛於
觀学之後。濟濟焉、鏘鏘焉」

c. 控え目にするさま

・抑抑（よくよく）

一年有半〔1901〕〈中江兆民〉二「抑々進みて已まず、死に至る迄経営造作して休せ
ざる者は殆ど有ること莫し」

⑤ 冷静なさま

a. 落ち着いてゆったりとしているさま。

・棣棣（ていてい）

「抑判官儀暫可及給。為習棣棣之威儀也」明衡往来〔11C中か〕〈藤原明衡〉下本

・悠悠（ゆうゆう）

「風おもむろに浪あらそはず、悠々たる春光、其興いふばかりなし」俳諧・蕪村文集〔1
816〕

・晏晏（あんあん）「晏晏」の使用例がないが、「晏如」のほうはある。

「服装（なり）は必ず穢ない。生計（くらし）は屹度（きつと）貧乏である。さうして晏
如（アンジョ）としてゐる」

・優優（ゆうゆう）

懐風藻〔751〕侍宴〈山前王〉「優優沐恩者、誰不仰芳塵」；

狂歌・銀葉夷歌集〔1679〕一「優々と日もながしりに立春のととする方はしめの内

哉」；義血俠血〔1894〕〈泉鏡花〉四「馬は群る蠅と虻との中に優々（イウイウ）と
水飲み」

b. 落ち着いて焦らないさま

・綽綽（しゃくしゃく）

交隣須知〔18C中か〕四・逍遙「綽々 シャクシャクトル フウギ」；

真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉日本人の任務・二「土地狭小なりと謂ふと雖も、
物質的の富力は綽々として之を現はし得るに足るに似たり」

c. 安楽なさま

安安 (あんあん)

仮名草子・為愚痴物語〔1662〕一・四「佞人、悪人、愚痴、無智にしていたづらをたくみ、あんあんとくらすもの」

⑥しおれるさま

a. 元気を失ってしおれるさま。

・ **悄悄** (しょうしょう)

「恨を含し**悄悄**たる秋天の夕の雲」海道記〔1223頃〕木瀬川より竹の下

⑦のろのろして遅いさま

a. 物事の進み方が遅く、ゆったりしているさま。

・ **遅遅** (ちち)

「予は歌歴いたづらに長く、歩みの遅々たること牛の如しだ」驚〔1940〕〈川田順〉

巻末小記

b. 重々しくゆっくりとしたさま。

・ **哼哼** (とんとん) 日本語の使用例なし。

⑧起居動作のゆったりとしたさま

・ **委委** (いい) 日本語の使用例なし。

⑨美しいさま

a. ゆったりとして美しいさま。

・ **佗佗** (たた) 日本語の使用例なし。

b. 美しく威儀のあるさま

・ **穆穆** (ぼくぼく)

懐風藻〔751〕元日〈藤原史〉「済々周行士、穆々我朝人」

c. はなやかなさま

・ **皇皇** (こうこう)

江戸繁昌記〔1832～36〕五・後序「其往く、済々、其還る、皇々」

⑩男女の関係が乱れているさま

・ **奔奔** (ほんほん)

「鶉の奔々(ホンホン)たる多妻の醜を愧づると愧ぢざるとの界」福翁百話〔1897〕

〈福沢諭吉〉二五 自由奔放

⑪孤立するさま

- ・ **子子** (けっけつ/げつげつ) 日本語の使用例なし。

⑫背の高いさま すらり

- ・ **敖敖** (ごうごう) 日本語の使用例なし。

⑬丁寧で謙るさま

- ・ **蚩蚩** (しし)

「蚩々たる細民の国事に参与するが故に、見識足らずして法を行ふに弱し」明治月刊〔1868～69〕〈大阪府編〉一

⑭涙がとめどなく流れるさま

- ・ **漣漣** (れんれん)

「漣々(レンレン)たる涙を止めもあへず」連環記〔1940〕〈幸田露伴〉

⑮歩くさま

a. ゆっくり歩くさま

- ・ **靡靡** (びび) 「靡靡」の使用例がないが、「靡然」のほうがある。

「大風起って白雲飛び天下靡然(ヒゼン)として蕉門の風に随ふ」芭蕉〔1922〕〈吉田絃二郎〉

b. のんびり歩くさま

- ・ **施施** (しし) 日本語の使用例なし。

⑯得意のさま

- ・ **陽陽** (ようよう) 日本語の使用例なし

⑰驚いて見るさま

- ・ **瞿瞿** (くく) 「瞿瞿」はないが、「瞿然」はある。

「わたくしは始て読んで**瞿然**(クゼン)とした」伊沢蘭軒〔1916～17〕〈森鷗外〉一八〇

⑱行人の多いさま

- ・ **儻儻** (ひょうひょう?) 日本語の使用例なし。

⑲しとやかにゆったりしているさま

・提提（ていてい） 日本語の使用例なし。

⑳忙しいさま

a. 忙しく立ち回るさま

・蹶蹶（けつけつ？） 「蹶蹶」はなしが、「蹶然」はある。

「此時『ライネツケ』が姪の狸は蹶然（ケツゼン）として起立しつ」狐の裁判〔1884〕〈井上勤訳〉一

「帝国は今や自存自衛の為、蹶然起つて」米国及び英国に対する宣戦の詔書 - 昭和一六年〔1941〕一二月八日

b. あくせくするさま

・棲棲（せいせい）

本朝文粹〔1060頃〕一・織月賦〈菅原文時〉「猶恠攀桂枝於遲暮、独遑々而棲棲」；
作詩志發〔1783〕「唐詩選を矩とするときは、終身詩作に栖々しても、変化の妙を得ること能はず」

c. あわただしいさま

・艸艸（草草）（そうそう）

性靈集 - 七〔835頃〕菅平章事奉為四恩造功德願文「被限草々。久韞二手」；
俳諧・崑山集〔1651〕四・春「花と中そふそふなるかかへる鴈〈令巾〉」；
多情多恨〔1896〕〈尾崎紅葉〉前・一二「『それでは最一度考へて見ます』と草々に切揚げて別れたが」

㉑高慢な態度

a. 驕り高ぶるさま

・居居（きょきょ）日本語の使用例なし。

・究究（きゅうきゅう）日本語の使用例なし。

㉒痩せているさま

・欒欒（らんらん）日本語の使用例なし。

㉓知識があるさま

・秩秩（ちつちつ）

本朝文粹〔1060頃〕七・申請重弁定齊名所難学生同時棟詩状〈大江匡衡〉「以才奥学之妙簡、明明秩秩之公心、所定置也」

㉔舞うさま

・蹲蹲（しゅんしゅん）

柳湾漁唱 - 二集〔1831〕老松篇寿臥牛山人六十「蹲蹲醉舞作竜吟、舞罷称觴跪献寿」

・躍躍（やくやく）

雲は天才である〔1906〕〈石川啄木〉二「自分は僅か三秒か四秒の間にこの手紙を読んだ。そして此瞬間に、躍々たる畏友の面目を感じ」

②⑤功績、声望などがりっぱで目立つさま

・赫赫（かくかく）

翰林葫蘆集〔1518頃〕一二・悦岩忻公大禪定門活下火偈「赫赫威名奉將軍、塞垣草木也忻々」；

歩兵操典〔1928〕綱領「赫々たる伝統を有する国軍は」

②⑥おとなしいさま

・温温（おんおん）

足利本論語抄〔16C〕子張第十九「即君子近其体温々潤人不憎」；

米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉二・三三「言寡く温温たる老翁にて、容貌愚なるか如し」

②⑦喜ばしいさま

・欣欣（きんきん）

鹿苑日録 - 明応八年〔1499〕三月二四日「勢州有状、曰、昨日閑話欣々」；

其面影〔1906〕〈二葉亭四迷〉五三「面（かほ）は兔に角、内心はいつも欣々（キンキン）たる哲也で」

②⑧ねんごろなさま

・灌灌（かんかん）

空華日用工夫略集 - 応安三年〔1370〕二月五日「余乃歎々説話云」

②⑨乱れているさま

・蕩蕩（とうとう）

布令必用新撰字引〔1869〕〈松田成己〉「蕩々 タウタウ オキテカクヅレル」

③⑩丁寧に教え戒めるさま

・諄諄（じゅんじゅん）

三教指帰〔797頃〕上「豈思、諄諄之意、切於猶子、懃懃之思、重於比兒」；

悪魔〔1903〕〈国木田独歩〉八・八「淳々（ジュンジュン）として天に在（ましま）す父の愛を説き」；

異端者の悲しみ〔1917〕〈谷崎潤一郎〉四「直ぐ又句調を柔げて諄諄（ジュンジュン）と説き諭した」

⑩ 弁舌のよどみのないさま

・ 滔滔（とうとう）

滑稽本・浮世床〔1813～23〕初・上「その癖に、氣象たかく弁舌滔滔として高慢を吐くは素読指南の先生」；

侏儒の言葉〔1923～27〕〈芥川龍之介〉貝原益軒「書生は才力に誇ってゐたと見え、滔滔と古今の学芸を論じた」

第六節 『詩経』における人間の心理状態を対象とした漢語のオノマトペ

① 悲しいさま

a. うれい悲しむさま

- ・ **仲仲** (ちゅうちゅう)

「此の心の死し難き、之を思ふ毎に沖々たり」江戸繁昌記〔1832～36〕三・裏店

- ・ 殷殷 (いんいん) 日本語の意味と原詩の異なる。

b. 心を痛めるさま

- ・ **怛怛** (だつだつ) 日本語の使用例なし。

- ・ **惨惨** (さんさん)

広益熟字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「惨々 サンサン イタマシヒ」

c. 嘆き悲しむさま

- ・ **哀哀** (あいあい)

性霊集 - 一〔835頃〕喜雨歌「哀々、末世諸元々」；

星座〔1922〕〈有島武郎〉「眼を我れに挙げ、耳と尾とを動かして訴へてやまず。その哀々の状諦視するに堪へず」

② 不安

a. 心が安らかでないさま

- ・ **耿耿** (こうこう)

「百感かはるがはる脳裡に浮びて、転(うた)た**耿々**(コウカウ)と神すみ気さえ(略)眠りも得やらず」内地雑居未来之夢〔1886〕〈坪内逍遙〉一二

b. 心細いさま

- ・ **蠕蠕** (くく) 日本語の使用例なし。

c. 心配するさま

- ・ **惕惕** (てきてき) 日本語の使用例なし。

d. 思い悩むさま

- ・ **惛惛** (たんたん) 日本語の使用例なし。

③ 楽しいさま

- ・ **陶陶** (ようよう/とうとう)

「打見れば面目爽に、稍傲れる色有れど峻しくはあらず、而も今**陶陶然**として酒興を発し」

金色夜叉〔1897～98〕〈尾崎紅葉〉続・一

・**爰爰**（えんえん） 日本語の使用例なし。逍遙に近い。

④憂えるさま

・**切切**（とうとう） 日本語の使用例なし。

・**晔晔**（けいけい） 日本語の使用例なし。

・**悒悒**（えんえん）

「并州多故人、瞻望皆**悒悒**、遙思遼海上、莫似化鶴仙」詩聖堂詩集 - 三編〔1838〕

一・送奥山君鳳之秋田

⑤恐れるさま

・**惴惴**（ずいずい）

「奔馬常に狭少なる民吏の競場に**惴々**（ズイズイ）たるに過ぎざるなり」一種の攘夷思想〔1892〕〈北村透谷〉

・**戰戰**（せんせん）

読本・英草紙〔1749〕五・九「次郎左衛門**戰々**（センセン）懼懼（くく）として」；

広益熟字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「**戰々** センセン フルヒヲソル」；

経国美談〔1883～84〕〈矢野龍溪〉後・一四「已に**戰々**たる列国の委員を睨み廻はし」

・**兢兢**（きょうきょう）

菅家後集〔903頃〕叙意一百韻「**兢兢**馴鳳辰、慄々撫龍泉」；

敬齋箴講義〔17C後〕「**兢兢**は戒め慎むの貌也」；

国民精神作興に関する詔書 - 大正一二年〔1923〕十一月一〇日「朕、即位以来、夙夜**兢兢**として常に紹述を思ひしに」

・**業業**（ぎょうぎょう）

綱齋先生敬齋箴講義〔17C末～18C初〕「唐虞の廷、君臣、警戒**兢兢業々**、一日に万機あり」

⑥執着するさま

・**睭睭**（眷眷）（けんけん）

蔭涼軒日録 - 延徳三年〔1491〕十一月一六日「与月江和尚打話**眷眷**」；

独逸国に対する宣戦の詔書 - 大正三年〔1914〕八月二三日「恒に平和に**眷眷**たるを以てして、而かも竟（つひ）に戦を宣するの已（や）むを得ざるに至る」

第七節 『詩經』における抽象的なものを対象とした漢語のオノマトペ

①遠くはるかなさま

・悠悠（ゆうゆう）

「悠々三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」正倉院文書 - 天平勝宝八年〔756〕六月二一日・東大寺献物帳（寧楽遺文）

②長く続いて、絶えないさま

・繇繇（めんめん）

「無意義だ、不可解だと叫ぶ間には、尚人生の意義に対する恋々の情が綿々絶えないでをるのではないか」予言の芸術〔1910〕〈姉崎嘲風〉

・連連（れんれん）

三教指帰〔797頃〕下「花飄聯聯、燐燐爛爛、震震填填」；

太平記〔14C後〕一二・兵部卿親王流刑事「高氏卿を討ばやと、連（レン）々に思召立けれ共」；

人情本・仇競今様櫛〔1830～33〕初・三回「連々（レンレン）都合がわるいによって、其金をばちつとづつ受取て」

・繩繩（じょうじょう）

江戸繁昌記〔1832～36〕四・麴街「最後の一人、指、亀頭を挟んで、行々溺す。繩繩溺過して、絶えざること糸の如し」

③色

a. 青いさま

・青青（せいせい）

「小笹まぢりの春草青青（セイセイ）として、菫菜（すみれ）蒲公英（たんぽぽ）蓮華草なんどの花が咲いて」思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉二・二

b. 白いさま

・皓皓（こうこう）

「皎々（カウカウ）たる燈明の輝き初めるのを認めた」あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〉夏の海

④盛んなさま

・鑣鑣（ひょうひょう）日本語の使用例なし。

・彭彭（ほうほう）

「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上

・翼翼（よくよく）

本朝文粹〔1060頃〕一・風中琴賦（紀長谷雄）「翼翼洋洋、悪乎在而不応」

⑤長いさま

- ・ **掲掲** (けいけい) 日本語の使用例なし。

⑥りっぱに飾るさま

- ・ **孽孽** (げつげつ) 日本語の使用例なし。

⑦はっきりとしたさま。

- ・ **旦旦** (たんたん) 日本語の使用例なし。
- ・ **鑿鑿** (さくさく) 日本語の使用例なし。
- ・ **央央** (おうおう)

雲壑猿吟〔1 4 2 9 頃〕次韻竹隱藏主二首「玉輦日臨光耿々、翠華春動影央々」；浄瑠璃・信州川中島合戦〔1 7 2 1〕一「石公孫呉の兵術（ひゃうじつ）に通達し、其名央々（オウオウ）とかくれなく、近国他国の大名より招け共」

⑧静かさ

a. 静かでゆったりしたさま。空間の状態

- ・ **祁祁** (きき) 日本語の使用例なし。

b. 安らかで静かなさま

- ・ **厭厭** (えんえん)

「厭厭然独迷花酒之下云爾」本朝文粹〔1 0 6 0 頃〕一〇・隔花遙勸酒詩序〈菅原輔昭〉

⑨鮮やかなさま

- ・ **楚楚** (そそ) 「楚然」の使用例がある。

「緑りの枝を通す夕日を脊に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩どる中に、楚然として織り出されたる女の顔は」草枕〔1 9 0 6〕〈夏目漱石〉一〇

⑩彩りがの美しいさま

- ・ **采采** (さいさい)

本朝無題詩〔1 1 6 2～6 4 頃〕二・聞大宋商人献鸚鵡〈大江佐国〉「隴西翅入漢宮深。采々麗容馴德音」

⑪暗いさま

a. 奥深く暗いさま

- ・ **幽幽** (ゆうゆう)

宴曲・宴曲集〔1 2 9 6 頃〕五・遠玄「凌雲台の春の霞 波を凌ぎて幽々たり」；

明六雑誌 - 一九号〔1874〕人間公共の説・三〈杉亭二〉「惟々古昔の陳跡を畏敬して幽々冥々の中に感動せられ」

b. 仄暗いさま

・冥冥（めいめい）

菅家文草〔900頃〕二・傷巨三郎、寄北堂諸好事「我今収涙訴冥々、何不慙遺一後醒」；保元物語〔1220頃か〕中・為義降参の事「おつる涙にみちくれて、行前（ゆくさき）さらに冥々たり」；

日蓮遺文 - 松野殿御返事〔1276〕「鴛鴦の衾の下に枕を並て遊び戯る中なれども、彼冥途の旅には伴なふ事もなし。冥冥として独り行」

⑫鮮やかで美しいさま。（原詩：服を指す）

・粲粲（さんさん）

俳諧・本朝文選〔1706〕二・賦類・百花譜〈許六〉「十月一陽の気に、燦々（サンサン）たる江南の玉妃、まづえめるより」；

水の葬列〔1967〕〈吉村昭〉一「日光の燦々（サンサン）と降りそそぐ世界は、ただ私を苦しませるだけのものだということにも気がついた」

⑬明るいさま

・明明（めいめい）

法性寺関白御集〔1145か〕関河夜月明「明明夜月望方閑、皓色無嫌河与関」；

源平盛衰記〔14C前〕四一・義経拝賀御禊供奉「夜の月明々（メイメイ）として、水に移る影鎧の袖を照しけり」

⑭香るさま

・芬芬（ふんぶん）

性靈集 - 一〔835頃〕入山興「京城御。桃李紅。灼々芬々」；

信長公記〔1598〕一一「にはひ・焼物（たきもの）ふんふんと衣香当りを撥（はらつ）て四方に薫じ」；

浮世草子・花の名残〔1684〕四「袖にかほる空焼（そらだき）芬々（フンブン）としてえならぬさま」；

俳諧師〔1908〕〈高浜虚子〉八五「夜遅く酒気芬々（フンブン）として帰って来て」

⑮広いさま

・洋洋（ようよう）

性靈集 - 五〔835頃〕請越州節度使内外文書啓「氷霜留犢、五袴洋々」；

和漢朗詠集〔1018頃〕下・帝王「沙長じて巖となる頌 洋々として耳に満てり〈紀淑望〉」；米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・九「今市高俄（チカゴ）を發し、此州に至れば、野熟し林茂し、人烟稠密、已に洋々たる開明（シヴィル）の域なり」

・芒芒（ぼうぼう）（原詩は土地が広いのをいう）

菅家文草〔900頃〕二・仲春積奠、聴講左伝、賦懷遠以德「懷来惣作懷中物、四海茫茫尚一家」；

太平記〔14C後〕二四・依山門嗷訴公卿僉議事「鴨河の水漲出逆浪岸を浸し茫々（バウバウ）たり」；

国会論〔1888〕〈中江兆民〉叙「要するに茫々沙漠中の一小金塊たるに過ぎざるのみ」

⑩輝くさま

・煌煌（こうこう）

新撰朗詠集〔12C前〕上・螢「翠箔に燈籠りて秋耿々たり 碧雲に星透いて暁煌々たり〈一条院〉」；

源平盛衰記〔14C前〕一六・遷都事「五星煌煌（クワウクワウ）として赤き事火の如く」

⑪盛大なさま

・彭彭（ほうほう）

稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」

・濟濟（せいせい/さいさい）

天台大師和讃〔10C後～11C前〕「一日朝儀を止てぞ、王侯相将集りて、語黙の益を蒙者、濟々として有しかど、徒衆転た多くして」；

太閤記〔1625〕七・金賦之事「大臣小臣によらず金銀濟々持し人々を、猶富（とま）し給ふ事、実々虚々之患而已（うれひのみ）」

・蒸蒸日上（じょうじょう）（原詩は軍隊をさす）

江戸繁昌記〔1832～36〕二・葬礼「二氣蒸蒸、生々の理、万古竭きず」

⑫高く大きいさま

・屹屹（きつきつ）

屹然：

山や建物などの高くそびえ立つさま。

寛齋先生遺稿〔1821〕三・古銅爵「秋菌春蒲両屹然、為炉為注総無縁」；

虞美人草〔1907〕〈夏目漱石〉一「吹けば揺くかと怪しまるる程柔らかき中に屹然（キツゼン）として、どうする気かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる」

ii まわりの状況に影響されないで、ある状態をしっかり保っているさま。

日本外史〔1827〕九・足利氏正記「兩陣皆喪首領。猶屹然相對」；

真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉日本人の任務・二「欧州諸強国の兵備、整頓完具、屹然として動かす可らざるが如き勢あるは」

⑱ 艶やかなさま

・濯濯（たくたく）

杏陰集〔1722頃か〕春月勝秋月「濯濯深粧柳、溶溶淡白梨」

・澤澤（たくたく）

露団々〔1889〕〈幸田露伴〉九「襟には光沢々（タクタク）たる絹扇をさし」

⑳ 豊かなさま

・穰穰（じょうじょう）

菅家文草〔900頃〕一・九日侍宴、同賦天錫難老「穰穰景福、駟老彭以列周行」

㉑ 美しいさま

・奕奕（えきえき）

即興詩人〔1901〕〈森鷗外訳〉神曲、吾友なる貴公子「その岩石何ぞ峨々たる、その色彩何ぞ奕奕たる」；

江戸から東京へ〔1921〕〈矢田挿雲〉六・二「併し四体の龍を鐘樓の柱へ取付けるに至って甚五郎の龍は俄然として奕奕（エキエキ）たる神采（しんさい）を發揮した」

第三章 『萬葉集』から見た奈良時代のオノマトペ

第一節 AB型の擬態語について

1 はじめに

日本語で最も古いオノマトペは『古事記』にみられる。小野（2009）は、「許々袁々呂々」と「母由良邇」を例に挙げている¹²⁷。「こをろこをろ」は、「かわら」と同源であり、塩をかきならす時に発する音である¹²⁸。「もゆらに」は、「も」が接頭語であり、玉の触れ合って鳴るさまという意味である¹²⁹。そして、『萬葉集』にも「もゆら」と同じ意味を持つ「ゆら」という言葉がみられる。

本章では、奈良時代のオノマトペについて、『萬葉集』全四巻・4516首の和歌から、オノマトペやオノマトペを語源とする形容詞、形容動詞などを収集し、それらをその形態や意味の面から検討する。取り扱う資料は、『新編日本古典文学全集6～9』小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳の『萬葉集』である¹³⁰。形態上、『萬葉集』におけるオノマトペはAB型以外に、AB型を土台とした畳語型であるABB型、ABAB型なども存在する。異なり語数はさほど多くはないが、そのうち、AB型がもっとも多いので、それを中心に検討する。なお、以下で取り上げるAB型というのは、二文字（音節）で構成されるオノマトペをアルファベットで表したものである。即ち、ABは異なった二文字であることをさす。無論、AAの場合も存在する。但し、『萬葉集』にみられる二文字で構成したオノマトペは、すべて異なった二文字なので、本節ではABのみにした。

小野（2009）では、「もゆらに」の「に」というのは、オノマトペを載せる台のようなものであり、「に」でなく「と」の場合もあると述べられている¹³¹。古語辞典では、「もゆら」ではなく、「もゆらに」という項目で掲載されているが、『日本国語大辞典』では、「に」を取り除いて立項されている。筆者も「に」や「と」をオノマトペの語幹と見なさないので、以下で取り上げるオノマトペも、それを除いた形になっている。なお、表記方法に関しては、冒頭で挙げた『古事記』に出てくるオノマトペ「許々袁々呂々」のように、万葉仮名に読み下しを振る。前掲した「ゆら」は、まさにAB型のオノマトペである。「ゆら」のほかに、「かか」、「こご」、「こむ」、「さや」、「しの」、「そよ」、「とど」、「ひし」、「ほろ」、「ゆた」など11種がある。そして、この11種のAB型のオノマトペを擬音語と擬態語に分けた上で、それぞれに由来する単語群を『日本国語大辞典』に沿って並べる。以下では、擬音語に触れず、擬態語である「こご」、「ほろ」、「ゆた」、「しの」、「さや」の五語を中心に取り上げる。

2 研究方法

『萬葉集』にみられるAB型の擬態語は、「こご」、「ほろ」、「ゆた」、「しの」、「さや」の5種である。以下、万葉仮名、読み下し、口語訳という順で和歌を並べ、『全訳古語辞典』、『角川国語大辞典』、『日本国語大辞典』に載っている意味を確認する。

3 AB型の擬態語「ごご」

3.1 「ごご」の意味

「ごご」は、『萬葉集』巻十六・3880にある¹³²。万葉仮名で書くと、「古胡」になる。

- 万葉仮名：

かしまねの つくえのしまの しただみを いひりひもちき いしもち つつきやぶり はやかわに あらひすすぎ
 所聞多祢乃 机之嶋能 小螺乎 伊拾持来而 石以 都追伎破夫利 早川尔 洗濯
 からしほに ごごともみ たかつきにもり つくえにたてて はほにあへつや
 辛塩尔 古胡登毛美 高杯尔盛 机尔立而 母尔奉都也

- 読み下し：

かしまねの つくえの島の しただみを ひり持ち来て 石もち つつき破り 速川に
 洗ひ濯ぎ 辛塩に ごごと揉み たかつきにもり 机に立てて 母にあへつや

- 口語訳：

かしまねの つくえの島の しただみを 拾い取って来て 石で こつこつ殻を割り
 はやかわで 洗い清め 辛塩で ごしごし揉み たかつきにもり 台に載せて 母上に差し上
 げたかい

表1 「ごご」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
なし	副 擬声語。硬いものをもんだ り、かきまぜたりするとき、ぶつ かり合ったり、すれ合ったりして たてる音を表す。ごしごし。	副（多く「と」を伴って用い る） 手荒く揉むさまを表わす語。 ごしごしと。

表1で示したように、『角川古語大辞典』では、「ごご」は硬いものを揉んだりして立
 てる音を表すとされているが、『日本国語大辞典』では、手荒く揉むさまを表すと書かれ
 ている。つまり、「ごご」は擬音語とされたり、擬態語とされたりしている。両辞典で挙
 げられた例文は、何れも筆者が取り上げた『萬葉集』巻十六・3880の例であり、辛塩で
 ごしごしと揉む様子を表している。無論、揉む時に音が立つので、擬音語とされるのは理解
 できるが、原文では、「からしほに ごごともみ」（辛塩でごしごしと揉む）と書かれてい
 るので、やはり揉むさまを表していると思われるため、ここでは擬態語として扱うことにす
 る。また、「ごご」を含む単語群は、表2のようになる。

表2 「ごご」を含む単語

	「ごご」を含む単語	品詞	初出の時代	初出の文献
1	ごごう（ごごぶ）	動詞	720	『日本書紀』
2	ごご	副詞	8C 後	『萬葉集』

3	こごし	形容詞	8C 後	『萬葉集』
4	こごる	動詞	8C 後	『萬葉集』
5	こごむ	動詞	1508	『古今私秘聞』
6	こごなる	動詞	1563	『玉塵抄』

ここでは、「こごし」という単語に注目する。「こご」とよく似ている「こごし」という単語があり、この「こごし」も『萬葉集』にみられる。「こごし」は『萬葉集』卷十七・4003にある¹³³。万葉仮名で書くと、「許其志」になる。

- 万葉仮名：

伊尔之边遊 阿理吉仁家礼婆 許其志可毛 伊波能可牟佐備 多未伎波流
 伊久代経尔家牟

- 読み下し：

古ゆ あり来にければ こごしかも 岩の神さび たまきはる 幾代経にけむ

- 口語訳：

昔から ずっとこうあったので 岨々として 岩は神々しく (たまきはる) 幾代経たことであろうか

3.2 「こご」と「こごし」

表3 「こごし」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
岩がごつごつと重なり、険しい。	形シク ごつごつしているさま。険しいさま。こり固まっているさま。	山道などで、岩がごつごつと重なって険しい。

表3からみると、岩がごつごつしているさまというのが各辞書の説明における共通点である。「こごし」の意味は険しいさまと書かれており、「こご」の意味とは異なるようにも思われる。しかし、「こご」は、硬い物が擦れ合うのであり、「こごし」の、硬い物が重なっているというイメージにつながるように思われる。

「こごし」のみならず、表2で挙げた「こごう」「こごる」「こごむ」「こごなる」に共通している所は、物事の固まりを表すという点である。ただ、動詞である「こごう」(凍ふ)の初出は『萬葉集』ではなく、『日本書紀』である。

4 AB型の擬態語「ほろ」

4.1 「ほろ」の意味

「ほろ」は、『萬葉集』卷十九・4235にある¹³⁴。万葉仮名で書くと、「富呂」になる。

- 万葉仮名：

天雲乎 富呂尔布美安太之 鳴神毛 今日尔益而 可之古家米也母

- 読み下し：

天雲を ほろに踏みあだし 鳴る神も 今日にまさりて 恐けめやも

- 口語訳：

天雲を ばらばらに蹴散らして 鳴る雷でも今日以上に 恐れ多いことがございました
ようか

表4 「ほろ（に）」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
なし	副 ばらばらに、などの意の擬態語であろう。「ほど（ろ）・ばだ（ら）・ほの」などと共通性のある語か。	副 擬声語的なもので、ばらばらなさまを表わす語か。

各辞書による意味を見ると、「ほろ（に）」は、「ばらばら」と似ているようである。しかし、『角川古語大辞典』でも『日本国語大辞典』でも、「…であろう/…語か」のように推測という形で定義しており、その意味や擬態語は断定的なものが言えないようである。また、「ほろ」の後ろに「と」が付く場合は、「に」が付く場合と意味が異なる。ここでのオノマトペの扱いは、「に」や「と」を付けないままにしているが、上記の和歌では、「ほろに」となっているので、ここでいう「ほろ」の意味は、「ほろ（に）」を指す。「ほろ（と）」の意味は、表5で示す。

4.2 「ほろ（に）」と「ほろ（と）」

表5 「ほろ（と）」の意味

『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
副 ①擬態語。少し涙がこぼれるさま。少し泣くさま。ほろりと。②擬声語。山鳥、雉の鳴く声のさま。もとは、山鳥が涙を流して泣くさまの意であるが、それを鳴き声をと誤解し（山鳥はほとんど鳴き声を発しない）、近縁の雉の鳴き声にも類推した。	副（多く「と」を伴って用いる） ①雉子・山鳥・杜鵑などの鳴き声を表わす語。②涙を一滴こぼすさまを表わす語。

表4と表5を見ると、「ほろ（と）」の持つ意味は、「ほろ（に）」と異なる。「ほろ（と）」には、「ばらばら」という意味がないほか、「ほろ（に）」にはない山鳥などの鳴き声を表すという意味が「ほろ（と）」の特徴である。しかし、『角川古語大辞典』で

は、「もとは、山鳥が涙を流して泣くさまの意であるが」とあるので、「ほろ（と）」は、元々泣くさまを表す擬態語である。ちなみに、『萬葉集』では、「ほろ（と）」の例がない。「に」や「と」が付くことによって、「ほろ」の持つ意味が異なってくるのか、それとも、「ほろ」自体の意味が「ばらばらなさま」から「涙がこぼれるさま」に変わってきたのかは明らかではない。

4.3 「ほろ」を含む単語群

表6 「ほろ」を含む単語

	「ほろ」を含む単語	品詞	初出の時代	初出の文献
1	ほろ（に）	副詞	8C 後	『萬葉集』
2	ほろろ	副詞	905-914	『古今和歌集』
3	ほろほろ	副詞	974 頃	『蜻蛉日記』
4	ほほろぐ	動詞	1001-1014 頃	『源氏物語』
5	ほろく	副詞	1120 頃か	『今昔物語集』
6	ほろさ	名詞	1120 頃か	『今昔物語集』
7	ほろ（と）	副詞	1212	『方丈記』
8	さめほろ	副詞	1283	『米沢本沙石集』
9	ほろり	副詞	1430	『申楽談儀』
10	ほろける	動詞	室町中	『文明本節用集』
11	けんもほろろ	形容動詞	1593	『天草本伊曾保物語』
12	ほろりほろり	副詞	1603-1604	『日葡辞書』
13	ほろめく	動詞	1603-1604	『日葡辞書』
14	ほろほろなみだ	名詞	1638	『俳諧』
15	ほろほろあめ	名詞	1694	『俳諧』
16	ほろえう（爰ふ）	動詞	1707	『浄瑠璃』
17	ほろりっと	副詞	1711 頃	『浄瑠璃』
18	ほろっと	副詞	1723	『浄瑠璃』
19	ほろきたなし	形容詞	1738	『難波土産』
20	ほろにがい	形容詞	1745	『俳諧』
21	ほろろけんけん	副詞	1747	『浄瑠璃』
22	ほろろふる	動詞	1771 頃	『浄瑠璃』
23	ほろぬくい	形容詞	1797	『洒落本』
24	ほろよい	名詞	1809-1813	『滑稽本・浮世風呂』

25	ほろろげる	動詞	1886	『改正増補和英語林集成』
26	ほろい	形容詞	1960	『湯葉』
27	ほろあまい	形容詞	1964	『巷談本牧亭』
28	ほろぎり	名詞	不明	不明

5 AB型の擬態語「ゆた」

5.1 「ゆた」の意味

「ゆた」は、『萬葉集』巻七・1352、巻十一・2367、巻十二・2867、巻十四・3503の四箇所にある¹³⁵。以下、巻十二・2367を例に取り上げる。

- 万葉仮名：

かくばかり 将レ恋物其跡 知者 其夜者由多尔 有益物乎

- 読み下し：

かくばかり 恋ひむものそと 知らませば その夜はゆたに あらましものを

- 口語訳：

これほどに 恋しくなると 知っていたら あの晩ゆっくりして いたらよかったのに

表7 「ゆた」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
形動 ゆったりしたさま。	副 空間、時間、心情などに余裕があつてゆったりとしたさま。 「ゆたけし」「ゆたかなり」と語根を同じくする語。後世、良寛は「墨染の我が衣手のゆたならぼうき世の民におほはましものを」という形容動詞を用いている。	形動 空間や気持に余裕があつてゆったりしているさま。のんびりしたさま。ゆっくりと落ち着いているさま。

表7を見ると、「ゆた」は、ゆったりとしたさまという意味を表している。しかし、各辞書にも、はっきり「擬態語」とは書かれていない。ここでは、「ゆた」を擬態語として扱うが、それは、「ゆったり」「ゆたゆた」といったオノマトペと関連する可能性があると思われるからである。また、山口(2012)も「ゆた」を擬態語として扱っている¹³⁶。

5.2 「ゆた」を含む単語群

表8 「ゆた」を含む単語

	「ゆた」を含む単語	品詞	初見の時代	初見の文献
1	ゆたか	形容動詞	720	『日本書紀』
2	たゆたう (たゆたふ) 【寛】	動詞	720	『日本書紀』
3	ゆた	形容動詞	8C 後	『萬葉集』
4	ゆたにたゆた	不明	8C 後	『萬葉集』
5	しおひのゆたに	不明	8C 後	『萬葉集』
6	たゆたう (たゆたふ) 【揺蕩】	動詞	8C 後	『萬葉集』
7	ゆたのたゆた	不明	905-914	『古今和歌集』
8	ゆたう (たゆふ)	動詞	951-1007 頃	『猿丸集』
9	たゆたゆし	形容詞	1045-1068 頃	『夜の寝覚』
10	ゆたゆた	副詞	1275	『名語記』
11	ゆたむ	動詞	1275	『名語記』
12	ゆたやか	形容動詞	1667	『俳諧・玉海集追加』
13	ゆたぶる	動詞	1778	『洒落本・一事千金』
14	ゆたぶれる	動詞	1886	『改正増補和英語林集成』
15	ゆたり	副詞	1891	『春洒屋漫筆』
16	ゆたりゆたり	副詞	1929-1930	『浅草紅団』

5.3 「ゆた」と「たゆた」

ここで「ゆた」と「たゆた」との差異に少し触れたいと思う。「たゆた」は、「ゆた」と同じく『萬葉集』にみられる ABC 型のオノマトペである。「たゆた」を含む和歌は巻七・1352 にある。

- 万葉仮名：

わがこころ ゆたにたゆたに うきぬなは へにも おきにも よりかつましじ
吾情 湯谷絶谷 浮尊 辺毛奥毛 依勝益士

- 読み下し：

我が心 ゆたにたゆたに 浮き尊 へにも沖にも 寄りかつましじ

- 口語訳：

わたしの心は ゆったりしたり動揺したりで 浮き尊のように 岸にも沖にも 寄ってしまえそうにない

「たゆた」の意味は、『日本国語大辞典』では以下のように書かれている。

「たゆた」〔形動〕（中世「たゆだ」とも）気持がゆれて定まらないさま。心がゆれ動いて止まらないさま。多く「ゆたにたゆた」「ゆたのたゆた」の形で用いる。

また、小島憲之・木下正俊・東野治之（1994）『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6～9」の注釈では、「ゆたにたゆたに—ユタニはゆったりと安定したさま、タユタニはタユタフと同源で、動揺している状態を表す。」と書かれている¹³⁷。

つまり、「たゆた」の「動揺している状態」という意味は、「ゆた」の「落ち着いている状態」という意味とまったく逆になっている。一方、『萬葉集』における「たゆた」は上記の巻七・1352の一例しか見られない。そして、「たゆた」は、単独で使用せずに「ゆた」と組み合わせて使用される。言い換えれば、「ゆたにたゆたに」は、落ち着いたり、動揺したりという矛盾した気持ちを表すのに用いられるのである。また、『日本国語大辞典』は、「ゆたにたゆた」を一つの単語として立項し、次のように説明している。

（「たゆた」はゆれ動くさまの意）ゆったりと落ち着いたり、ゆらゆらと漂い動いたるさま。物についても気持についてもいう。ゆたのたゆた。

「たゆた」を一つのオノマトペと見なすべきかは再検討する必要がある。この点に関して、山口（2012）は「たゆた」を一種のオノマトペとして扱っている¹³⁸。本稿では、ABC型の擬態語とする。

6 AB型の擬態語「しの」

6.1 「しの」の意味

「しの」は、『萬葉集』巻三・266にある。

- 万葉仮名：

あふみのうみ ゆうなみちどり ながなげば こころもしの に いにしへおもほゆ
淡海乃海 夕波千鳥 汝鳴者 情毛思努尔 古所念

- 読み下し：

あふみ ゆうなみちどり な がなげば 心もしの に いにしへ
近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしの に 古思ほゆ

- 口語訳：

おうみ ゆうなみちどり
近江の海の 夕波千鳥よ おまえが鳴くと 胸がぎゅつとなるほど 昔のことが偲ばれる

表9 「しの」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
副 ①なよなよとなびいて。しおれて。また、心がしんみりとするさま。②しきりに。しげく。	副 ①「しなふ」「しのぐ」などとの関連が考えられる語で、草木などが押し伏せられたり、精神の鬱屈したさまを表す。ぐったり。②しきりに。	副 ①草木のしおれなびくさま。転じて、心のしおれるさまなどを表わす語。しおれなびいて。しおれて。ぐったりと。②数多く。しきりに。しげく。

6.2 「しの」と「しのの」

形態上「しの」とよく似ている「しのの」という ABB 型のオノマトペは『萬葉集』にもみられる。「しのの」は、『萬葉集』巻十・1831 と巻十・1977 にある。以下は、巻十・1831 を例として取り上げる。

- 万葉仮名：

朝霧あさぎりに 之努努しののぬ所に濡れて 喚よぶ小鳥こどり 三船みふねの山やま 喧渡なきわたる所み見ゆ

- 読み下し：

朝霧あさぎりに しののにぬに濡れて 呼よぶ子鳥こどり 三船みふねの山やまゆ 鳴なき渡わたる見みゆ

- 口語訳：

朝霧あさぎりに ぐっしょり濡ぬれて 呼よぶ小鳥こどりが 三船みふねの山やまを 泣なき渡わたっている

表10 「しのの」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
副 濡れそぼつさま。しっとり。びっしょりと。	副 「しのに」と同根。ひどくぬれたさまをいう。ぐっしょりと。	副 びっしょりと濡れるさまを表わす語。ぐっしょりと。じとじとに。しとどに。しぬぬに。

形態上、「しのの」は「しの」と派生的な関係があるように見えるが、「しのの」の「びっしょりと濡れるさま」という意味と、「しの」の「ぐったり」という意味とは異なるもののように思われる。そして、「しのの」には、「しきりに」という意味がない。

しかし、両者の意味は全くつながりがないかという点、そうとは言えない。「しの」は、草木のしおれなびくさまから転じて、心のしおれるさまをも表すという点から考えれば、「しのの」の「ぐっしょりぬれるさま」にある「ひどく濡れて元気ではない」という所は、「しの」の「しおれるさま」と共通しているのではないかと思われる。

7 AB型の擬態語「さや」

7.1 「さや」の意味

「さや」は、『萬葉集』にみられるオノマトペの中で最も多いと言える。巻一・15、巻二・133、巻二・135、巻七・1074、巻七・1159、巻八・1724、巻十一・2464、巻十四・3402、巻二十・4423、巻二十・4434の十箇所にもみられる。万葉仮名で書くと、「清」のほかには、「佐夜」とも書く。以下、巻二・133を例として取り上げる。

- 万葉仮名：

小竹之葉者 三山毛^清尔 乱友 吾者妹思 別来礼婆

- 読み下し：

笹の葉は み山もさやに さやげども 我は妹思ふ 別れ来ぬれば

- 口語訳：

笹の葉は 全山さやさやと 風に吹かれ乱れているが それでもわたしは妻のことを思う 別れて来たので

表11 「さや」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
副 擬声語。ざわめくようす。ざわざわ。さわさわ。	副 もと硬く薄いものが触れ合う音を表す擬声語。『古語拾遺』に「あなあやけ」に対して「竹葉声也」と注する。その音の澄みきった感じから、視覚的に混じりけのない清潔なさまを表す擬態語として用いられる。「さやし」「さやかなり」「さやけし」の語根。	副 (多く「に」を伴って用いられる) ①あざやかなさま、はっきりしているさまを表わす語。 ②清らかなさま、さっぱりしたさまを表わす語。 ③音が静寂を乱してひびくさま、木の葉などがざわめくさまを表わす語。ざわざわ。さらさら。 ④音色などの澄んでいるさま、また、澄んで快いさまを表わす語。

『角川古語辞典』による定義を見ると、「さや」は音の澄みきった感じから、混じりけのない清潔なさまにも用いられるというのが分かる。つまり、「さや」は擬声語でありつつ、擬態語に変わってきたということである。しかし、『古語拾遺』が出る前に『古事記』には、「さや」がすでにみられる。それに、『古事記』にみられる「さや」は、擬声語ではなく、擬態語として用いられている。

葦原の 穢しき小屋に 菅昼 弥^清敷きて 我が二人寝¹³⁹

現代語訳：葦原の中のきたない小屋に、菅の筵をいよいよ**すがすがしく**敷いて、私たち二人は寝たことよ

『古事記』中巻 神武天皇（七）皇后の選定

上記の『古事記』にみられる「さや」の例は、表1-1『日本国語大辞典』にも挙げられており、「清らかなさま、さっぱりしたさまを表す語」と説明されている。つまり、「さや」はもともと擬声語ではなく、擬態語として『萬葉集』にも『古語拾遺』にも早くから用いられていた。また、上記の『萬葉集』の巻二・133にみられる「さや」は、さっぱりしたさまを表す語ではなく、木の葉がざわめくさまを表す語である。このほか、はっきりしているさまを表す例も『萬葉集』にみられる。一方、AB型の「さや」が積み重なったABAB型の「さやさや」は『萬葉集』にはみられないが、『古事記』にはある。

7.2 「さや」を含む単語群

表1-2 「さや」を含む単語

	「さや」を含む単語	品詞	初出の時代	初出の文献
1	さや	副詞	712	『古事記』
2	さやぐ	動詞	712	『古事記』
3	さやさや	副詞	712	『古事記』
4	さやむ	動詞	720	『日本書紀』
5	さやか	形容動詞	720	『日本書紀』
6	さやりさやり	副詞	1275	『名語記』
7	さやす	動詞	1757	『洒落本・浪花色八卦』
8	さやらさやら	副詞	1925	『川のほとり』

表1-2を見ると、「さや」「さやさや」と同じく、「さやぐ」という動詞も『古事記』にみられる。

7.3 「さや」と「さやさや」

「さや」と「さやさや」はいずれも『古事記』にみられる。両者には共通点があるが、異なる部分もある。

表 1 3 「さやさや」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
副〔擬声語「さや」を重ねた語〕 物が軽くふれ合って鳴る音。また、物がゆらゆら揺れることにもいう。	副 擬声語。軽くて硬い物どうしが軽く触れ合う、清澄な音を表す。ただし、『記歌謡』の二例については、ゆらゆらと揺れ動くさまを擬態語的に表現したとも見られる。	副（「と」を伴う場合が多い）①物がすれ合って鳴る音を表す語。 ②物がゆれ動くさまを表す語。

表 1 2 と 1 3 を比べると、「さや」には、「硬いものが軽く触れ合って鳴る音」という意味が含まれているが、「物がゆらゆら揺れ動くさま」という意味がない。それに対して、「さやさや」には、「あざやかなさま、はっきりしているさま」「清らかなさま、さっぱりしたさま」「木の葉などがざわめくさま」という意味が含まれていない。

つまり、擬音語とした場合は、両者がほぼ一致する。一方、「さや」を擬態語とした使い方は「さやさや」より多いが、「さやさや」にある「揺れ動くさま」がない。この点に関しては、単純に「さや」は「さやさや」より意味が多いというわけではない。『古事記』における「さや」は、「清らかなさま、さっぱりしているさま」のみであり、「さやさや」は、「硬いものが軽く触れ合って鳴る音」のほか、同じ『古事記』で「物が揺れ動くさま」という意味もみられる。よって、時代の変遷に伴って、「さや」は「さやさや」より意味が変わりやすいと言える。ここから類推すると、AB 型のオノマトペは ABAB 型より意味が拡張しやすいかは、再検討することが必要である。そもそも「さやさや」は「さや」から派生した単語であるか、それとも「さや」は「さやさや」から省かれた単語であるかも断言できない。『全訳古語辞典』に書かれているように「さやさや」は「さや」を重ねた語とする。この重ねと伴って、擬音語が生まれおり、擬態語とした意味が変わるといった仮説を立てておきたい。少なくとも「さや」の初出文献の『古事記』では、擬音語とした例が見つからない。

8. おわりに

本節では、『萬葉集』にみられる AB 型のオノマトペについて（擬態語のみ）、基礎的な分析を行った。奈良時代の作品を代表する『萬葉集』におけるオノマトペは、量的には非常に少なく、わずかに擬音語 6 種と擬態語 5 種の 11 種しか見つからない。しかし、これら奈良時代のオノマトペに由来する語彙は、副詞から形容動詞や動詞などに派生しており、意味も拡張していつている。また、AB 型とそれに対する畳語型の ABAB 型、ABB 型などとの意味関係も論じた。例外も存在するが、多くは単一型から畳語型に変わることによって、意味も異なってくる場合もあるし、擬音語が擬態語に変化する場合もあるのである。

第二節 AB型の擬音語について

1 はじめに

本節では、『萬葉集』にみられるAB型の擬音語について検討する。形態上、『萬葉集』におけるオノマトペはAB型以外に、AB型を土台とした疊語型であるABB型、ABAB型なども存在する。異なり語数はさほど多くはないが、そのうち、AB型がもっとも多いので、それを中心に検討する。『萬葉集』にみられるAB型の擬音語は、「かか」、「こむ」、「そよ」、「とど」、「ひし」、「ゆら」の6種であるが、「かか」（鷺の鳴き声）と「こむ」（狐の鳴き声）については、派生語も少なく多義的でもなく、単純なものなので、省略することにする。

以下、万葉仮名、読み下し、口語訳という順で和歌を並べ、『全訳古語辞典』『角川国語大辞典』『日本国語大辞典』に載っている意味を確認する。

2 AB型の擬音語「そよ」

2.1 「そよ」の意味

『萬葉集』にみられる「そよ」を含む和歌は3例である。1例目は、卷十・2089にある¹⁴⁰⁾。ピックアップすると、以下のようになる。

- 万葉仮名

はたすすき もとはもそよに あきかぜの ふきくるよひに あまのがは しらなみしのぎ おちたぎつ
… 旗 芒 本葉裳具世丹 秋風乃 吹来夕丹 天河 白浪凌 落沸

- 読み下し

…はたすすき もとは 本葉もそよに あきかぜ ふきく よひ あま がわ しらなみしの
…はたすすき 本葉もそよに 秋風の 吹き来る夕に 天の川 白波凌ぎ

おちたぎ
落ち激つ

- 口語訳

…はたすすきの 本葉までそよがして 秋風が 吹き来る夜に 天の川の 白波を押し分け たぎり落ちる

1例目の「そよ」は、風が本葉をゆるがす時に発する音である。

次に、2例目は『萬葉集』卷十・2885にある¹⁴¹⁾。

- 万葉仮名

さよふけて いもをおもひいで しきたへの まくらもそよになげきつるかも
左夜深而 妹乎念出 布妙之 枕毛衣世二嘆鶴鴨

- 読み下し

さ夜更けて 妹を思ひ出で しきたへの 枕もそよに 嘆きつるかも

- 口語訳

夜が更けて あの娘を思い出し (しきたへの) 枕も響くほどに ため息をついた

『日本古典文学全集』の注釈では、2例目の「そよ」は、嘆きの息の激しさを誇張して言ったと書かれている¹⁴²⁾。

そして、3例目は『萬葉集』巻二十・4398にある¹⁴³⁾。

- 万葉仮名

たづがねの かなしくなけば はろぼろに いへをおもひで おひそやの そよ
多頭我衾乃 悲 鳴 婆 波呂婆呂尔 伊弊乎於毛比渥 於比曾箭乃 曾与

となるまで なげきつるかも
等奈流麻渥 奈気吉都流香母

- 読み下し

たづ かなしくなけば いへ おも で お そや なる
鶴がねの 悲しく鳴けば はろぼろに 家を思ひ出 負ひ征箭の そよと鳴るま

なげ
で 嘆きつるかも

- 口語訳

鶴が鳴く声が 悲しく聞えると 遥かに 家を思い出し 背負った矢がひゅうと共鳴するほどに 激しくため息をついてしまった

3例目の「そよ」は、矢が風に当たって鳴る音を形容している。各辞書による「そよ」の意味は、表1で示す。

表1 「そよ」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』 ¹⁴⁴⁾	『日本国語大辞典』
副 風の音や物の触れ合う音など、かすかな物事の形容。	副 擬声語。物が軽く触れ合って生じるかすかな音や、風が物に当る音などのさま。豊語で「そよそよ(と)」とも。「Soyoto 吹くく風がやわらかに、気持ちのよい音を立てて吹く>」〔日ポ〕	副 (多く「と」を伴って用いる) しずかに風の吹く音、また、物が触れあつてたてるかすかな音などを表す語。

つまり、「そよ」は、風の音や、物が触れ合って生じるかすかな音を表す。1例目は風が葉に当たる音であり、3例目は矢に当たる音である。いずれも大自然の風である。ただし、2例目の「そよ」は、大自然の風ではなく、溜め息をついた風が枕に当たる音である。

また、1例目と2例目の「そよ」とも、「そよに」の形で用いられているのに対し、3例目の「そよ」は、「そよと」の形となっている。そして、「そよに」の場合は、1例目の「本葉もそよに」や2例目の「枕もそよに」のように、「そよ」がかかっている動詞が続いていない。一方、「そよと」の場合は、3例目の「そよと鳴る」のように、「そよ」がかかっている動詞は続く。すなわち、「そよ」に「に」が付けば、後ろに来る動詞が省略されるという傾向があるのである。或いは、「そよに」だけで、「そよと鳴る」と同じ意味を表しているのではないかと思われる。

次に、「そよ」に由来する語彙を取り上げる。

2. 2 「そよ」を含む単語

現代語から見れば、AB型の「そよ」より、畳語である「そよそよ」というABAB型の方がこのオノマトペの自然な形と思われる。AB型は、奈良時代のオノマトペの特徴の一つと思われるが、『萬葉集』にも、ABAB型のオノマトペがないわけではない。

『日本国語大辞典』にしても、『角川古語大辞典』にしても、挙げてある最初の例文は、いずれも前掲の『萬葉集』の和歌である。つまり、「そよ」は、『萬葉集』においてはじめて使われたことが分かる。「そよ」から派生した語彙を調べるため、『日本国語大辞典』にある「そよ」にかかわる単語を、品詞名、初出の時代、初出の文献とともに表にすると、表2のようになる。

「そよぐ」「そよめく」という動詞や、「そよかぜ」「そよめき」という名詞の他、掛詞として用いられる「そよさらに」も挙げている。また、オノマトペである「そよそよ」「そよりそより」などは、『日本国語大辞典』にしたがって副詞とする。

表2 「そよ」を含む単語

	「そよ」を含む単語	品詞	初出年	初出の文献
1	そよ	副詞	8C 後	『萬葉集』
2	そよぐ	動詞	905～914	『古今和歌集』
3	そよめく	動詞	945 頃	『貫之集』
4	そよそよ	副詞	974 頃	『蜻蛉日記』
5	そよがす	動詞	983 頃	『順集』
6	そよろ	副詞	10C 終	『枕草子』
7	うちそよめく	動詞	1001～1014 頃	『源氏物語』

8	うちそよぐ	動詞	1005～1007 頃 か	『拾遺和歌集』
9	そよさらに	掛詞	1069～1077 頃 か	『狭衣物語』
10	そよめき	名詞	1105～1106 頃	『堀河百首』
11	そよりそより	副詞	1120 頃か	『今昔物語集』
12	そよさぞ	掛詞	1265	『続古今和歌集』
13	そよふく	動詞	1310 頃	『夫木和歌抄』
14	そよくる	動詞	1312	『玉葉和歌集』
15	そよぎ	名詞	1692	『俳諧・雑談集』
16	そより	副詞	1698	『俳諧・続猿蓑』
17	そよかぜ	名詞	1769	『俳諧・平安二十歌仙』
18	そよつく	動詞	1848	『雑俳・続太はし集-三』
19	そよめきたつ	動詞	1868	『志濃夫廼舎歌集』
20	そよだつ	動詞	1889	『婦女の鑑』
21	そよのかぜ	名詞	1896	『多情多恨』

3 AB型の擬音語「とど」

3. 1 「とど」の意味

「とど」は、『萬葉集』巻十一・2653 と巻十四・3467 にある¹⁴⁵⁾。万葉仮名で書くと、「跡杼」、「等杼」になる。

『萬葉集』巻十一・2653

- 万葉仮名

うまのおとの とど ともすれば まつかげに いでてそみつる けだしきみかと
馬 音之 跡杼 登毛 為者 松 陰尔 出 曾見鶴 若 君香

跡

- 読み下し

うま おと とど ともすれば まつかげ い けん きみ
馬の音の とどともすれば 松陰に 出でてそみつる けだし君かと

- 口語訳

馬の足音が どんどんと響くので 松陰に そっと出て見ました もしやあなたかと思っ

『萬葉集』巻十四・3467

- 万葉仮名

おくやまの まきのいたどを とどとして わがひらかむに いりきてなさね
 於久夜麻能 真木乃伊多度乎 等杼登之弓 和我比良可武尔 伊利伎弓奈左祢

- 読み下し

おくやま まき いたど わ ひら い き な
 奥山の 真木の板戸を とどとして 我が開かむに 入り来て寝さね

- 口語訳

(奥山の) まきづく いたど おして ひらけたら はいってきて
 真木造りの板戸を どんどんと押して わたしが開けたら 入って来て

ねて
 寝てよ

『萬葉集』巻十一・2653では、「とど」は馬の足音として使われ、『萬葉集』巻十四・3467では、板戸を叩く音とされているが、いずれも擬音語である。次に、辞書による語釈をあげる。

表3 「とど」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』 ¹⁴⁶⁾	『日本国語大辞典』
なし	副 擬声語。板戸をたたく音、馬の足音、橋を踏み鳴らす音などの形容。どんどん。とことこ。	副 (多く「と」を伴って用いる) ①戸をたたく音や馬の足音など、とどろき響く音を表す語。②よろめくさまを表す語。よたよたと。とぼとぼと。

『角川古語大辞典』では「とど」は擬音語とされているが、『日本国語大辞典』では、擬音語のほか、擬態語 (よろめくさま) ともされている。その例文は、次のようなものである。

「右の足を揚げて長尾をむずと踏む。ふまれて下りに弓長 (ゆんだけ) 三杖ばかりとど走りて倒れにけり」 (『源平盛衰記』 [14C 前] 二〇・石橋合戦事)

「とど」は、擬音語として用いられていたが、14Cに擬態語の用法が生じてきたことが分かる。また、『萬葉集』で「とど」を含む和歌は、挙げている二例のみである。擬態語が擬音語から生じてくるという一般的な傾向がここにも確認できるように思われる。

3. 2 「とど」から派生した単語

ここでは、「とど」から派生した単語を考察したいと思うが、調べた結果、「とどろ」「とどろとどろ」のみであり、いずれもオノマトペである。『萬葉集』におけるABC型のオノマトペは、ここでは取り上げない。また、「とどろとどろ」という単語については、『日本国語大辞典』に、次のような例が挙げられている。

「朝津の橋の 止止呂止止呂止 (トトロトトロト) 降りし雨の 古 (ふ) りにし我
を」

(『催馬楽』〔7C後～8C〕朝津)

この例文の出典を見ると、時代的には、『催馬楽』は平安時代の歌謡であり、『萬葉集』が出た前後であることが分かる。つまり、「とどろとどろ」という単語は、「とど」よりも先に用いられていた可能性もある。

4 AB型の擬音語「ひし」

4. 1 「ひし」の意味

「ひし」は、『萬葉集』卷十三・3270にある¹⁴⁷⁾。万葉仮名で書くと、「比師」になる。

- 万葉仮名：(ピックアップ)

ひるはしみにらに ぬばたまの よるはすがらに このとこの ひしとなるまで なげきつるがも
…昼者終尔 野干玉之 夜者須柄尔 此床乃 比師跡鳴左右 嘆 鶴 鴨
…
…

- 読み下し：

…昼はしみにらに ぬばたまの 夜はすがらに この床の ひしと鳴るまで 嘆きつる
かも…

- 口語訳：

…昼はひねもす (ぬばたまの) 夜は夜もすがら この床が びしっと鳴るほどに
ため息をついたことだ…

表4 「ひし」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』 ¹⁴⁸⁾	『日本国語大辞典』
①物の、押されて鳴る音。ぎしぎし	副 疊語で「ひしひし(と)」とも	①物がおされて鳴る音、みしみしと鳴る

<p>と。みしみしと。 ②すき間のないさま。びしりと。ぴったりと。③しっかりと。強く。 ④急に中断するさま。びたりと。ぱったりと。</p>	<p>①擬声語。㊦物がきしんで発する音を表す。びしと。㊦手を打つときに発する音を表す。ばしと。㊦手心を加えずに激しくたたき音を表す。びしと。「Fixito うつ <激しく殴りつける、または、くぎなどを打ち込む>」〔日ポ〕 ②擬態語。㊦対象物に密着し、力を入れて放さぬようにするさま。しっかりと。ぎゅと。㊦対象に密着してすきまなく押えるさま。㊦同種のもので一面にすきまもないほど多くあるさま。ぎしりと。びしりと。㊦行為にすきがなく、正確かつ厳密に行うさま。きっちりと。びしと。㊦完全に事になるさま。また、完全に当たるさま。びたつと。㊦自分の心に深く付いて離れないさま。多く、面影が寄り添うことや、何かの事が心にかかることやまた、心にかけることにいう。びたつと。</p>	<p>音を表す語。②ゆるみなくぴったりと密着するさま。しっかりと。③数多くのものがぎしりとすきまなく並んだりするさまを表す語。④深く食いこむように内部まで侵食するさまを表す語。⑤しっかりと厳格にことをなすさま、また、まさしくその状態になるさまを表す語。⑥激しくひどく行なうさまを表す語。</p>
---	---	---

4. 2 「ひし」を含む単語群

表5 「ひし」を含む単語

	「ひし」を含む単語	品詞	初出年	初出の文献
1	ひし	副詞	8C 後	『萬葉集』
2	ひしめく	動詞	10C 終	『能因本枕草子』
3	ひしひし	副詞	1001~1014 頃	『源氏物語』
4	ひしぐ	動詞	1220 頃か	『金刀比羅本保元物語』
5	ひしり	副詞	室町中か	『義経記』
6	ひしやぐ	動詞	1672	『咄本・一休関東咄』
7	ひしやり	副詞	1712 頃	『浄瑠璃・嬬山姥』
8	ひしにぎる	動詞	1890	『落語・宮戸川』

5 AB型の擬音語「ゆら」

5.1 「ゆら」の意味

「ゆら」は、『萬葉集』巻十・2065、巻十三・3223、巻十九・4154の3例である¹⁴⁹⁾。
万葉仮名で書くと、「由良」になる。ここでは、巻十・2065を例に挙げる。

- 万葉仮名

あしだまも ただまも ゆらに おるはたを まみが みけし に ぬひもあ れむかも
足 玉母 手 珠毛由良^ル 織 旗乎 公之御衣^ル 縫 将^レ堪 可聞

- 読み下し

あしだま ただま お はた きみ みけし ほう
足 玉も 手玉もゆらに 織る服を 君が御衣に 縫ひもあへむかも

- 口語訳

あしたま ただま なる おって ぬの きみ きもの ぬい
足 玉も 手玉も鳴るほどせつせと 織っている布を 君の着物に 縫いおおせる
だろうか

表6 「ゆら」の意味

『全訳古語辞典』	『角川国語大辞典』 ¹⁵⁰⁾	『日本国語大辞典』
なし	副 「に」と「と」を下接して用いる。擬声語。玉や鈴などが触れ合って立てる音。「ゆらく/ぐ」「ゆらかす」「ゆらら」などの語を派生する。	副（「に」「と」を伴って用いる）玉や鈴などの触れあつて鳴る音、硬い物がぶつかりあつて鳴る音などを表す語。

5.2 「ゆら」と「ゆらら」

「ゆら」に似ているオノマトペ「ゆらら」は、『萬葉集』巻十三・3243にある。

- 万葉仮名（ピックアップ）

てにまける たまも ゆららに しろたへの そでふるみれえつ あひおもふらしも
…手二卷流 玉毛湯良羅^ル 白栲乃 袖振所^レ見津 相思羅霜

- 読み下し

て まける たま しろ そでふるみえ あひおも
…手に巻ける 玉もゆららに 白たへの 袖振る見えつ 相思ふらしも…

- 口語訳

…手に巻いている 玉も揺れて鳴るほどに （白たへの）袖を振るのが見えた 気があるらしい…

『角川国語大辞典』の「ゆら」についての説明では、「ゆら」は「ゆらく/ぐ」「ゆらかす」「ゆらら」などの語を派生すると書かれている（表6参照）。「ゆら」も上記の「ゆらら」も「玉の触れ合って立てる音」を表す。つまり、両者とも擬音語である。『萬葉集』にみられる「ゆら」と「ゆらら」は擬音語であるが、「ゆらら」は擬態語でもある。これは、「ゆらら」と「ゆら」の異なる点と言えるだろう。

表7 「ゆらら」の意味

『全訳古語辞典』	『角川古語大辞典』	『日本国語大辞典』
なし	副「ゆら」の疊語の転か。 ①擬声語。玉などが触れ合って立てる音を表す。 ②擬態語。動作がゆっくりしているさま。ゆるりと。	副（多く「に」や「と」を伴って用いる） ①鈴や玉が触れ合って鳴る音を表わす語。 ②ゆとりがあってゆったりしているさまを表わす語。 ③ゆっくりゆれうごくさまを表わす語。

表7のように、「ゆらら」は、「ゆら」と同じく玉が触れ合って立てる音を表す擬音語であるとともに、動作がゆっくりしているさまを表す擬態語でもある。しかし、『萬葉集』にみられる「ゆらら」は擬音語の例のみである。形態上、「ゆらら」は「ゆら」の疊語と見なすことになるが、語尾の「ら」を繰り返す形になり、擬音語から擬態語に変わったのではないかと考えられる。

「ゆら」と「ゆらら」との関係によく似ている例は、「さや」と「さやさや」である。

擬音語の場合、「さや」と「さやさや」はどちらも「硬いものどうしが触れ合って鳴る音」を表す。対象は玉や鈴とは限らないが、澄んだ音を表す。そして、「ゆら」と「ゆらら」の方は、同じく「硬いものがぶつかりあって鳴る音」を表す。ただし、必ずしも澄んだ音ではない。また、疊語型である「さやさや」と「ゆらら」は擬音語だけではなく、擬態語でもある。擬態語の場合、両者とも物が揺れ動くさまを表すが、「ゆらら」の方は「ゆっくり揺れ動く」というニュアンスが見られる。

「さや—さやさや」や「ゆら—ゆらら」というペアは、擬音語から派生した疊語が擬態語になるという共通性を持つ。すなわち、「さや」の疊語である「さやさや」は、「さや」と同じく物が触れ合って鳴る擬音語を表すほかに、物が揺れ動くさまを表す擬態語でもある。そして、「ゆら」の疊語である「ゆらら」は、「ゆら」と同じく玉や鈴が触れ合って立てる音を表すほか、物がゆっくり揺れ動くさまを表す擬態語でもあるのである。

6 おわりに

本節では、『萬葉集』における AB 型の擬音語について基礎的な研究を行った。主に「そよ」「とど」「ひし」「ゆら」の4種の擬音語を中心に、意味とその派生語を確認した。「そよ」の3例とも「風がものに当たる時の音」を表すが、「に」が付くと、「そよ」がかかっていく動詞が後続しない傾向があることが分かった。そして、「そよ」から「そよそよ」が派生するという単純型から畳語型への流れは、「とど」にはみられない。畳語型である「とどろとどろ」の例は、「とど」より先に使用されていたことも分かった。また、擬態語が擬音語から生じてくるという一般的な傾向が「とど」にも確認できた。さらに、「ゆら」とその畳語型である「ゆらら」と比べた結果、形態上、単純型は畳語型に変わるとともに、意味も異なってくる。すなわち、その畳語型は音を表すだけでなく、状態をも表すようになるのである。

付章

日本文学の翻訳作品より見たオノマトペの日中比較—宮沢賢治の児童文学を中心に—

1 はじめに

翻訳は異文化コミュニケーションの手段であり、異なる言語文化の相互的影響にもつながる。また、時代や社会背景の変化につれ、異なる特徴を表している。1898年梁啓超による日本政治小説の翻訳を始め、日本の科学冒険小説や探偵小説などが漢語に訳されてきた¹⁵¹。今日に至って、数多くの日本文学作品は現代漢語に訳され、広範な読者に愛読されている。しかし、読者に作者の感情を原文通りに伝えられるのは容易なことではなく、両言語における言葉のニュアンスを飲み込むには、かなりの難関を越えなければならない。日本語のオノマトペがその難関の一つである。この点について、徐一平(2010)は、「日本語の擬音語・擬態語を中国語に訳すことは、大変困難な仕事である。難しいものにぶつかったら、かなり翻訳の経験を積んだベテランの人でもサジを投げるぐらいである。¹⁵²」と述べている。

本章は、宮沢賢治の児童文学を例に取り、賢治の童話作品におけるオノマトペとその中国語訳を照らし合わせることにより、適切に翻訳されているオノマトペと翻訳されていないオノマトペを分けて分析する。また翻訳されているオノマトペを直訳と意識に分けて検討する。さらに、宮沢賢治のオノマトペの特徴を列挙し、その現代漢語訳と比較することを試みる。宮沢賢治の童話作品を通じて、日中オノマトペの差異を明らかにすることを目的とする。

2 先行研究及び問題点

2.1 オノマトペに関する先行研究

これまでのオノマトペに関する研究は数多く行われ、音韻形態、統語範疇をはじめとした研究は着目点であるが、文学作品におけるオノマトペに関する研究は管見の限り、あまり多くは見られない。

2.1.1 日本語オノマトペについて

オノマトペの音韻形態に関しては、角岡賢一が著した『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』においてオノマトペを形態論的、音韻論的観点から論じられた¹⁵³。また、笈寿雄・田守育啓が編集した『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』という論文集においては、田守育啓はオノマトペを「一音節の語基を持つもの」と「二音節の語基を持つもの」に分けて述べている¹⁵⁴。

そして、オノマトペの統語範疇に関して、笈寿雄・田守育啓は『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』において、オノマトペを様態副詞、結果副詞、動詞、名詞、複合名詞、形容詞、形容動詞に分け、細かく論じている¹⁵⁵。

2. 1. 2 オノマトペの日中比較について

日中オノマトペの対照研究においては、文学作品に見られるオノマトペの日中比較が挙げられるが、オノマトペの音韻形態、統語的な研究には及ばない。

日中オノマトペの対照研究に関しては、徐一平・譙燕・呉川・施建軍が著した『日本語の擬音語・擬態語に関する研究』が系統的である¹⁵⁶。中にも、徐一平が日本語擬音語・擬態語の定義、分類、意味表徴をまとめ、オノマトペの中国語の翻訳上についての問題点などを指摘した。さらに、日本語のオノマトペを現代中国語に翻訳する方法を14種に分類している。

文学作品におけるオノマトペの日中比較研究の代表としては、呉川が著した『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』である¹⁵⁷。現代中国語におけるオノマトペ（象声詞）の特徴を構成、発音と声調、構文機能に分けて論じたほか、『女仙外史』、『新平妖傳』におけるオノマトペの特徴、主に重ね型の形容詞を中心とした日中比較の研究を行った。また、川端康成の『雪国』におけるオノマトペを日本語オノマトペの認知言語学の視点から論じ、『雪国』の原文から224個のオノマトペを例に取り、「人間の声、自然の音」、「心理状態」、「表情」、「物事の状態」4種に分類された上で、それぞれの割合を示した。さらに、『雪国』におけるオノマトペとその3種の現代漢語訳を付録資料として作った。このほか、漢語オノマトペの日中対照研究に関しては、呉川が森鷗外と夏目漱石の小説に出ている漢語のオノマトペについて検討し、音韻形態と意味による分類をまとめている。

王湘榕（2013）が小説『ノルウェイの森』とその三種の中国語訳を用いて、その翻訳状況を調べた上で、擬音語に相当するものを68例収集し、中国語のデータを品詞により分類した¹⁵⁸。王湘榕の分析により、中国語の象声詞が日本語の擬音語より数が少ない理由が判明した。しかし、日中両国語の擬音表現については検討したが、擬態語については言及していない。

2. 2 宮沢賢治のオノマトペに関する先行研究

窪温子（1995）「宮沢賢治のオノマトペの世界」で、新潮文庫に編集された宮沢賢治の30の作品を用いて、その中で使用されているオノマトペを全て抽出して分析した。作品ご

とに、延べ語数と異なり語数の両方を示し、異なりの語数の割合も示した。その結果「擬音語の範疇に属するオノマトペが 201 語あるのに対して、擬態語に属するオノマトペが、560 語になっている」¹⁵⁹と示した。

大坪併治が著した『擬声語の研究』においては、宮沢賢治、坪田譲治、志賀直哉、谷崎潤一郎、宮本百合子、林芙美子の六人の一定数の作品を取り上げ、オノマトペの異なり語数と作品の長さとの関係を述べた。大坪併治は他の五人の作家に比べると、宮沢賢治の作品におけるオノマトペの異なり語数は最も多いと示した。また、各作品において、現代小説にも辞典にも見出されないオノマトペを調べ、宮沢賢治が最も多く 26.8%と示した。このほか、オノマトペの長さ、オノマトペの反復回数、繰り返し型、組み合わせ型、繰り返し組み合わせ型などもそれぞれ統計した。さらに、オノマトペを「人に関するもの」、「自然に関するもの」、「植物に関するもの」、「動物に関するもの」、「事物に関するもの」、「その他」の計 19 種類に分類した¹⁶⁰。

田守育啓 (2009) 「宮沢賢治のオノマトペ-慣習的オノマトペから音韻変化より派生した非慣習的オノマトペ-」により、田守が一般的なオノマトペを「慣習的オノマトペ」として検討されるのに対し、宮沢賢治の作品における想像力に富んだオノマトペを「非慣習的オノマトペ」として取り扱っている。従来のオノマトペの形態を、音の交替、挿入、反復といった音韻現象によって変化させたものについて分析をした¹⁶¹。また、田守育啓が著した『賢治オノマトペの謎を解く』においては、賢治オノマトペの使い方を「動詞を修飾するオノマトペ」、「動詞になるオノマトペ」、「名詞になるオノマトペ」、「引用」、「独立用法」の 5 種類に分類された¹⁶²。同じく、田守育啓 (2011) 「宮沢賢治特有のオノマトペ：賢治独特の非慣習的用法」は、宮沢賢治の独特のオノマトペを以下のように 9 種類に分けている。「通常使われない動詞と一緒にになったオノマトペ」、「通常一緒に用いられている動詞と正反対の意味の動詞と一緒に使われるオノマトペ」、「通常使われない名詞（主体）と一緒にになったオノマトペ」、「通常使われない名詞（対象）と一緒にになったオノマトペ」、「通常使われない名詞および動詞と一緒にになったオノマトペ」、「比喩的に使ったオノマトペ」、「動詞として使われるオノマトペ」、「様態副詞のオノマトペを結果副詞的に使ったオノマトペ」、「動詞が省略されたオノマトペ」である¹⁶³。

2. 3 問題点

先述の先行研究は、日本語のオノマトペ、日中オノマトペの比較、宮沢賢治のオノマトペ等についての研究を取り上げたものであるが、宮沢賢治の童話作品におけるオノマトペの日中比較は、極めて少ない。管見の限り、王冠華 (2004) 「日本語の擬音語・擬態語の

中国語訳の表現について」しか見当たらない¹⁶⁴。タイトルには、宮沢賢治に関するキーワードがないが、その本論には、「賢治童話の中国語訳における表現と数字データ」という節がある。宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」を調査の対象として使用した。その作品にある擬態語 201 語、擬音語 20 語に対する中国語訳を品詞及び構文機能によってまとめられ、オノマトペの中国語訳上の問題点を指摘した。しかし、「銀河鉄道の夜」とその 1 種の中国語訳のみを宮沢賢治オノマトペの日中比較の研究対象としたものであり、全体的には説得力が欠けるのではないかと思われる。

2. 4 研究目的

本研究は、4 種の現代漢語訳がある宮沢賢治の童話作品を 12 本選び出し、原文からすべてのオノマトペを抽出した上で、作品ごとの対訳を表で示して分析する。これによって、宮沢賢治の童話作品におけるオノマトペの現代漢語訳の特徴を明らかにすることができると思われる。

3 調査資料

本論で取り扱う資料は、主に宮沢賢治の童話作品とその現代漢語訳である。宮沢賢治の童話作品に関しては、1986年に筑摩書房が刊行した『宮沢賢治全集』¹⁶⁵を日本語側の調査資料とする。一方、中国においては、『宮沢賢治全集』に対する中国語バージョンが未だに存在していないが、多数の童話作品が選集という形で翻訳されてきた。この点に関しては、3.2で詳述する。

3. 1 宮沢賢治の童話作品

本論で検討するのは、宮沢賢治の童話作品におけるオノマトペの日中比較であるため、作品ごとに4種の現代漢語訳がある童話を12本選び出すことにする。「貝の火」、「どんぐりと山猫」、「狼森と笹森、盗森」、「注文の多い料理店」、「雪渡り」、「水仙月の四日」、「雁の童子」、「虔十公園林」、「オツベルと象」、「グスコブドリの伝記」、「セロ弾きのゴーシュ」、「風の又三郎」である。また、宮沢賢治の童話作品を整列年代で整理するため、境忠一『評伝・宮沢賢治』¹⁶⁶、山内修『宮沢賢治・年表作家読本』¹⁶⁷、渡部芳紀『宮沢賢治大辞典』¹⁶⁸などを参照とする。以上、本稿で取り扱う十二本の童話を年代順に並べ、以下の表で示す。

本稿で取り扱う十二本の童話作品の整列年代

	作品名	執筆時期	発表時期	年齢 ¹⁶⁹
1	「貝の火」	1926年夏頃（大正十年）	生前未発表	25歳

	作品名	執筆時期	発表時期	年齢 ¹⁶⁹
2	「どんぐりと山猫」	1921年9月19日（大正十年）	1924年12月1日（大正十三年）	25歳
3	「狼森と笹森、盗森」	1921年11月10日（大正十年）	1924年12月1日（大正十三年）	25歳
4	「注文の多い料理店」	1921年11月10日（大正十年）	1924年12月1日（大正十三年）	25歳
5	「雪渡り」	1921年（大正十年）	1921年12月1日～1922年1月1日（大正十年～十一年）	25～26歳
6	「水仙月の四日」	1922年1月19日（大正十一年）	1924年12月1日（大正十三年）	26歳
7	「雁の童子」	1923年頃（大正十二年）	生前未発表	27歳
8	「虔十公園林」	1924年頃（大正十三年）	生前未発表	28歳
9	「オツベルと象」	不明	1926年1月（大正十五年）	30歳
10	「グスコブドリの伝記」	1926年頃（大正十五年）	1932年3月（昭和七年）	30歳
11	「セロ弾きのゴーシュ」	1931年～1933年頃（昭和六年から八年頃）	生前未発表	35歳
12	「風の又三郎」	1932年前後（昭和七年前後）	生前未発表	36歳

3. 2 宮沢賢治の童話作品の現代漢語訳

宮沢賢治の童話作品の中国語訳に関しては、王敏によれば、初訳は1930年代にさかのぼるとされている。魯迅の知人である錢稻孫が《不怕风雨》（「雨ニモマケズ」）と《风大哥》（「風の又三郎」）を翻訳し、初めて宮沢賢治の作品を中国に紹介したという¹⁷⁰。さらに、日本法政大学の教授である王敏は、1980年に、《花样翻新的饭店》（「注文の多い料理店」）を翻訳している。

現在まで中国において中国語版の『宮沢賢治全集』がまだ存在していないが、数多くの翻訳者が「銀河鉄道の夜」、「風の又三郎」など周知の作品をタイトルとして選集という形で刊行している。筆者が本稿で取り扱う現代漢語訳の資料は、騰瑞（1994）《宮沢賢治童話選》『宮沢賢治童話選』、王敏（2007）《宮沢賢治杰作選》（『宮沢賢治傑作選』）、周龍梅（2009）《水仙月四日》（『水仙月の四日』）、徐華瑛（2012）《风之又三郎》（『風の又三郎』）、王新禧（2012）《宮沢賢治的童话・银河铁道之夜》（『宮沢

賢治の童話・銀河鉄道の夜』)、顔翠(2015)《銀河鉄道之夜・宮澤賢治作品菁華集》(『銀河鉄道の夜・宮澤賢治作品菁華集』)である。

中でも、顔翠の『銀河鉄道の夜・宮澤賢治作品菁華集』には、「銀河鉄道の夜」、「風の又三郎」をはじめ、54本の作品が翻訳されている。また、2016年1月に周龍梅、彭懿が翻訳し、北京・清華大学出版社により刊行された『宮澤賢治最美作品集』は、今まで中国において最新の現代漢語訳集である。収録作品数は、顔翠の『銀河鉄道の夜・宮澤賢治作品菁華集』には及ばないが、イラストと文字を組み合わせた形であるため、児童文学としたイメージに相応しい。

本研究は、より多くの翻訳状況を把握するため、4種の現代漢語訳がある童話を12本収集した。さらに、これらの作品からピックアップしたオノマトペの延べ語数は1156であり、異なり語数は420である。詳細は、資料編「十二本の宮澤賢治の童話作品から抽出したオノマトペ・総表」によって、五十音順でまとめている。

4 直訳、意識および現代漢語訳の諸問題

4.1 直訳について

4.1で論じるのは、十二本の童話作品から抽出したオノマトペの直訳の特徴についてである。日本語のオノマトペ、特に擬音語の場合は、中国語の「象声詞」に訳するのが直訳の一種である。ここでは、日本語の擬音語に相当する「象声詞」に訳されているほか、借用動量詞「一+〜」という形で取り扱われているパターンに絞って詳述する。さらに、借用動量詞「一+〜」の形で訳されているオノマトペに関する数的分析について述べる。

4.1.1 借用動量詞「一+〜」に訳されているオノマトペ

「一声」、「一下」、「一阵」、「一片」、「一晃」、「一惊」、「一跳」、「一口」、「一把」、「一闪」のように、借用動量詞を使って訳するのが、日本語オノマトペの現代漢語訳の特徴の一つだと考えられる。興水・島田(2009)では、借用動量詞について以下のように書かれている。

動作量の表し方：名詞からの借用として、その動作行為に関連する身体の部分や、その動作行為に必要な工具などがある¹⁷¹。

また、「看一眼(ひと目見る)」「踢一脚(ひとけりする)」「打一拳(一発殴る)」「削一刀(ひとけずりする)」などの例も挙げられており、これらは「チラッと見る」「スパッと削る」などのように、擬態語を使って訳される¹⁷²。

この節では、「一声」を例に取り上げ、詳述する。

『中国語大辞典』により、中国語の「一声」というのは、「ひとこと。一声。」と書かれている¹⁷³。しかし、ここで指すのは、「一声かけて出かける」というような使い方では

なく、「カタッと」→「“当”地一声」、「ヒューと」→「“嗖”的一声」というような音が伴うオノマトペを中国語に翻訳する際に、その音の後ろにつく「一声」である。以下は作品ごとに、「一声」という形で翻訳されているオノマトペの日中対訳とその分析である。

(一)「貝の火」

(1)オノマトペ：「アッと」

原文：

「ホモイが入口でアッと云って倒れました。」¹⁷⁴

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鏜訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
76-2	アッと	啊	大叫 <u>一声</u>	“啊”的 <u>一声</u> 惨叫	啊了 <u>一声</u>

分析：

ここでは、徐華鏜が「アッと」というオノマトペを直訳はしておらず、「大叫」（「大声で叫ぶ」）という言葉で取り扱っている。他の三訳者たちが、いずれも「アッと」を「啊」と直訳している。それは、「アッと」の発音にある「a」と「啊」の発音「a」は一致するからである。そして、両者とも、驚く時に発する語を表す。

(2)オノマトペ：「カタッと」

原文：

「みんなは驚いてそっちへ行かうとしますと今度はそこらにピチピチピチと音がして煙がだんだん集まり、やがて立派ないくつかのかけらになり、おしまひにカタッと二つのかけらが組み合って、すっかり昔の貝の火になりました。」¹⁷⁵

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鏜訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
76-4a	カタッと	“当！”地 <u>一声</u>	卡塔 <u>一声</u>	“啪”的 <u>一声</u>	啪的 <u>一声</u>

分析：

ここでは、四訳者はいずれも「～+一声」という形で訳しているが、王新禧と顔翠は、「一声」の前の部分を「啪」と訳しているのに対し、他の二人はそれぞれ異なる。また、発音の面から考えれば、「カタッと」の発音にある「kata」と徐華鏜が訳した「卡塔」の発音「kata」が似ている。つまり、「カタッと」をそのまま音訳している¹⁷⁶。

(3)オノマトペ：「カチッと」

原文：

「ホモイのお父さんがたゞの白い石になってしまった貝の火を取りあげて、「もうこんな工合です。どうか沢山笑ってやって下さい。」と云ふとたん、貝の火は鋭くカチッと鳴って二つに割れました。」¹⁷⁷

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鏜訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
75-17	カチッと	一下子	一声清脆的声响	“轰” 一声巨响	なし

分析：

ここでは、徐華鏜と王新禧しか「一声」の形に訳していない。また、王新禧が訳した「“轰” 一声巨响」の方は、徐華鏜が訳した「一声清脆的声响」より、音のイメージが強い。それは「カチッと」という小さい物が打ち当たったときに出る音には相応しくないとされる。

(4)オノマトペ：「バツタリ」

原文：

「ホモイは葉を受けとって、「多分ひばりでせう。あゝ頭がぐるぐるする。お母さん。まはりが変に見えるよ。」と云ひながら、そのまゝバツタリ倒れてしまひました。」¹⁷⁸

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鏜訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
52-3	バツタリ	扑通一声	整个 (倒下了)	“砰” 的一声	直接 (倒了下去)

分析：

ここでは、騰瑞と王新禧が「一声」の形で訳している。ただし、「バツタリ」というオノマトペは擬音語ではなく、擬態語である。恐らく、訳者たちが、勢いよく倒れる時が伴う音を強調するため、象声詞である「扑通」、「砰」の後ろに「一声」を加えて、擬態語を擬音語として訳したのである。

(5)オノマトペ：「ヒューと」

原文：

「玉はまるで噴火のやうに燃え、夕日のやうにかゞやき、ヒューと音を立てて窓から外の方へ飛んで行きました。」¹⁷⁹

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鏜訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
76-5	ヒューと	“嗖”地一声	嗖的一声	嗖的一声	嗖的一声

分析：

ここでは、四種の訳文には、いずれも「一声」の訳し方が見られる。原文には「ヒューと音を立てて」という表現もあるので、「一声」をつけるのが一般的である。また、「嗖」という象声詞は、「ヒュー」に当てはまるので、訳のバリエーションが見られないわけである。

(6)オノマトペ：「わっと」

原文：

「ホモイはわっと泣きだしました。」¹⁸⁰

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鏜訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
66-9	わっと	哇地一声	哇地	“哇”的一声	哇地

分析：

ここでは、騰瑞と王新禧が「一声」の形で訳している。前述した「バツタリ」と同様に、「わっと」も急に声をあげて泣くさまという擬態語である。一方、「哇地」は中国語の象声詞である。擬音語に相当する「象声詞」で日本語の擬態語に訳すのは、擬態語に伴う音または勢いを反映させるためだと考えられる。また、「わっと」の発音にある「wa」と「哇」の発音「wa」は一致する。

(二)「どんぐりと山猫」

(7)オノマトペ：「しゅつと」

原文：

「一郎はびつくりして、「いいえ。」と言ひましたら、山ねこはおほやうにわらつて、「ふゝん、まだお若いから、」と言ひながら、マツチをしゅつと擦つて、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。」¹⁸¹

所在	原文	騰軍訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
23-5	しゅつと	唸的一声	唸地一下	“唸”	刺啦一声

分析：

ここでは、騰軍と顔翠が「一声」の形で訳している。異なるのが、この「一声」の前に付いている言葉である。いずれもマッチを擦る音として訳しているのであるが、顔翠が訳した「刺啦」の方は、マッチを擦る時の音に近いと思われる。

(三)「狼森と策森、盗森」

(8)オノマトペ：「どしんと」

原文：

「四人はそこよろこんで、せなかの荷物をどしんとおろして、それから来た方へ向いて、高く叫びました。」¹⁸²

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
30-15	どしんと	沉甸甸的	哐的一声	“咚” 一声	なし

分析：

ここでは、周龍梅と王新禧が「どしんと」を「一声」の形に訳しているが、「“咚” 一声」の方は「哐的一声」より、音が重い。一方、騰瑞が「どしんと」を「沉甸甸的」という形容詞に訳している。これは、「どしんと」というオノマトペを、重い物が落ちるさまという擬態語の視点から訳したと考えられる。

(四)「注文の多い料理店」

(9)オノマトペ：「がたりと」

原文：

「戸はがたりとひらき、犬どもは吸ひ込まれるやうに飛んで行きました。」¹⁸³

所在	原文	王敏訳 (1980)	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
50-13	がたりと	咣当一声	咣当一声	砰地一声	“砰” 地	啪的一声

分析：

ここでは、王新禧以外の四人とも「がたりと」を「一声」の形に訳している。顔翠が訳した「啪的一声」の他に、「咣当一声」と「砰地一声」は両方とも重い音であるが、王敏と騰瑞が訳した「咣当」の方は、戸が激しく開く音に近いのである。

(10)オノマトペ：「がたんと」

原文：

「二人はびつくりして、互いによりそつて、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。」¹⁸⁴

所在	原文	王敏訳 (1980)	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
44-16b	がたんと	なし	咯噔 <u>一声</u>	哐当 <u>一声</u>	なし	なし

分析：

「がたんと」は「がたりと」と同じく、戸を開ける音を表すオノマトペである。ニュアンスは、前項が「ん」音であり、後項が「り」音である。ここでは、騰瑞と周龍梅しか「がたんと」の翻訳を施していない。音の強さから見ると、「哐当一声」の方は、原文のイメージに近いのである。

(11)オノマトペ：「ぱちんと」

原文：

「二人はめがねをはづしたり、カフスポタンをとつたり、みんな金庫の中に入れて、ぱちんと錠をかけました。」¹⁸⁵

所在	原文	王敏訳 (1980)	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
46-4	ぱちんと	“叭”的 <u>一声</u>	“咣当” <u>一声</u>	咔嚓一下	“啪嚓” <u>一声</u>	なし

分析：

ここでは、顔翠以外の四人とも「一声」の形に訳している。ただし、騰瑞が訳した「“咣当”一声」の方は、前掲した「戸を激しく開く」という音に相応しいので、原文にある「錠をかける」という音には当てはまらないと思われる。また、「“啪嚓”一声」は、物が落ちたりぶつかったり、割れたりする音である。「“叭”的一声」は錠をかける時の音に近いと思われる。

(五)「雪渡り」なし

(六)「水仙月の四日」

(12)オノマトペ：「カタツ」

原文：

「東の遠くの海の方では、空の仕掛けを外したやうな、ちひさなカタツといふ音が聞え、いつかまつしろな鏡に変わってしまったお日さまの面を、なにかちひさなものがどンドンよこ切つて行くやうです。」¹⁸⁶

所在	原文	林少華訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
64-10	カタツ	“咔嚓”声	咔嚓 <u>一声</u>	“咔嚓”声	咔嚓 <u>一声</u>

分析：

ここでは、前述した「カタツと」というオノマトペと同様である。周龍梅と顔翠が「一声」の形で訳している。また、林少華が訳した「“咔嚓”声」の方は、「カタツ」の発音にある「kata」と「“咔嚓”」の発音「kada」が相似している。

(13)オノマトペ：「ぱちつ」

原文：「ぱちつ、雪童子の革むちが鳴りました。」¹⁸⁷

所在	原文	林少華訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
65-11	ぱちつ	“啪”的 <u>一声</u>	叭地（甩了一个响鞭）	“啪！”	啪的 <u>一声</u>

分析：

ここでは、林少華と顔翠が「一声」の形で訳している。また、「ぱちつ」に当てはまるのが、「“啪”」という象声詞である。「ぱちつ」の発音にある「pa」と「“啪”」の発音「pa」も一致する。

(14)オノマトペ：「ひゅうと」

原文：「雪童子はわらつて革むちを一つひゅうと鳴らしました。」¹⁸⁸

所在	原文	林少華訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
63-18	ひゅうと	“啪”的 <u>一声</u>	叭地（甩了） <u>二 声</u>	“啪” <u>一声</u>	嗖的 <u>一声</u>

分析：

ここでは、前掲した「ぱちつ」というオノマトペと同様に、革むちを鳴らす場面である。また、訳者四人とも「一声」の形で訳している。ただし、「一声」の前についている象声詞は「啪」、「叭」、「嗖」三種ある。周龍梅が「ぱちつ」と「ひゅうと」をすべて「叭」と訳している。そして、林少華と王新禧も同じくこの二つのオノマトペを「啪」と訳している。しかし、「ひゅうと」に当てはまるのは、顔翠が訳した「嗖」という象声詞である。勿論、「ぱちつ」と「ひゅうと」は両方とも、革むちを鳴らす時発する音である。異なるのは、前項が何か具体的なものとぶつかる時発する音であり、後項が何もぶつからずに、空気との摩擦することによって発する音だと考えられる。

(七)「雁の童子」なし。

(八)「虔十公園林」なし。

(九)「オツベルと象」なし。

(十)「グスコープドリの伝記」

(15)オノマトペ：「がちつと」

原文：

「模型はがちつと鳴って奇体な船のやうな形になりました。」¹⁸⁹

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鏜訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
250-9	がちつと	“喀哒” <u>一声</u>	“咔嚓”	咔的 <u>一声</u>	咔嚓 <u>一声</u>

分析：

ここでは、周龍梅以外の訳者たちが「一声」の形で訳している。また、四種の訳文は、「がちつと」に対する象声詞がそれぞれ異なる。発音は、「喀哒」→「kada」、「咔嚓」→「kacha」、「咔」→「ka」、「咔嚓」→「kada」である。勿論、それぞれの音が相似しているが、微妙な区別がある。『現代漢語大辞典』によると、以下のように述べられている¹⁹⁰。

「喀哒」の解釈は「象声詞」しか書かれていない。唯一の例文は、「喀哒一声，他把电话挂上了。（筆者訳：がちゃんと彼は受話器を置いた。）」である。「咔嚓」の解釈は「象声詞。形容东西断裂的声音。（筆者訳：象声詞。物が折れたりする音を形容する。）」である。「咔」の解釈は「象声詞。形容物体碰撞等的声音。（筆者訳：物が何かと打ち当たる時の音を形容する。）」である。「咔嗒」の解釈は「象声詞。形容东西碰击的响声。（筆者訳：象声詞。物が何かとぶつかる時の音を形容する。）」である。以上述べたように、「咔嚓」という「物が折れたりする音」の方は、他の三つの象声詞とはっきり区別できると考えられる。「喀哒」、「咔嗒」、「咔」いずれも物が何かと打ち当たる時の音である。このうち、「喀哒」と「咔嗒」の発音は同じく「kada」であるが、書き方が異なる。もしかすると、これは「がちつと」に対する翻訳のバリエーションが多くなる原因の一つだと考えられる。

(16) オノマトペ「ぱつと」

原文：

「その時教室に、ぱつと電燈がつけました。」¹⁹¹

所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鏜訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
251-7	ぱつと	忽然	一下子	啪的 <u>一声</u>	突然

分析：

ここでは、徐華鏜しか「一声」の形で訳していない。しかし、「ぱつと」というオノマトペは、擬音語ではなく、擬態語である。他の三種の訳文はいずれもその動作のすばやさを表している。恐らく、徐華鏜が「ぱつと」の発音にある「pa」と「一声」の前についている「啪」の発音「pa」と一致することにより、擬音語として訳されたと推測できる。

(十一) 「ゼロ弾きのゴーシュ」

(17) オノマトペ：「どんと」

原文：

「そしていきなりどんと扉へからだをぶっつけましたが扉があきませんでした。」¹⁹²

所在	原文	張哲訳 (2008)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
368-6	どんと	砰的 <u>一声</u>	猛地	“咚”	なし

分析：

ここでは、張哲が「一声」の形で訳している。しかし、「どんと」というオノマトペは擬音語ではなく、擬態語である。これは、前述した現象と同様である。日本語の擬態語を中国語の「象声詞」＋「一声」に翻訳されるという傾向がある。また、王新禧が訳した「咚」は象声詞であるが、「咚」の発音「dong」と「どんと」の発音にある「donn」と相似している。よって、擬態語である「どんと」を象声詞「砰」「咚」として翻訳した経緯も推測できる。

(18)オノマトペ：「ばたっと」

原文：

「そして硝子にはげしく頭をぶっつけてばたっと下へ落ちました。」¹⁹³

所在	原文	張哲訳 (2008)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
374-4	ばたっと	吧嗒一声	吧嗒一声	“吧嗒” 一声	なし

分析：

ここでは、顔翠以外の訳者たちは、「ばたっと」を「一声」の形で「吧嗒一声」に訳している。原文の文脈により、「セロ弾きのゴーシュ」にあるくわこうは主人公であるゴーシュに嫌われて、追い払われた場面である。つまり、くわこうが硝子に頭をぶっつけてばたっと下へ落ちたということである。「吧嗒」という象声詞も物が落下する時の音を形容する。また、三訳者がいずれも「吧嗒一声」と翻訳したのは、「ばたっと」の発音にある「bata」と「吧嗒」の発音「bada」が相似しているのだと考えられる。

(十二)「風の又三郎」

(19)オノマトペ：「ぐうっと」

原文：

「みんなが又あるきはじめてとき湧水は何かを知らせるやうにぐうっと鳴り、そこらの樹もなんだかざあっと鳴ったやうでした。」¹⁹⁴

所在	原文	王晓燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏜訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
318-2	ぐうっと	汨汨的响声	“咕嘟”	<u>一声</u> 巨响	咕咚 <u>一声</u>

分析：

「ぐうっと」というオノマトペの解釈は、『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』以下のように書かれている。

①空腹の時に大きく腹の鳴る音。ぐー。②呼吸がつまったり、ものがのどにつかえたりして苦しいときに発する声。苦しい状況に追いこまれたさま。③水などを勢いよくひと息に飲むさま。④力を込めて行うさま。強い勢いでものごとが行われるさま¹⁹⁵。

上記の解釈で示したように、原文にある「ぐうっと」というオノマトペに当てはまる解釈が見当たらない。一方、訳者四人とも水などが湧き上がるという擬音語として訳している。このうち、周龍梅、彭懿と顔翠の訳文では、「一声」の訳し方が見られる。また、徐華鏜が訳した「一声巨响」というのは、原文にある湧水がぐうっと鳴るといふ音にぴったり合う象声詞が見当たらずに、「一声」の後ろに「巨响」という高い音に訳したからだと考えられる。さらに、王晓燕が訳した「汨汨的响声」の発音にある「gu」、周龍梅、彭懿が訳した「咕啾」の発音にある「gu」、顔翠が訳した「咕咚一声」の発音にある「gu」と「ぐうっと」の発音にある「gu」は一致するので、音をもとにして翻訳されたわけだとも考えられる。

(20)オノマトペ：「ざぶんと」

原文：

「すると又三郎は、よっぽど怒ってゐたと見えて、「ようし、見てゐろよ。」と云ひながら、本気になって、ざぶんと水に飛び込んで、一生けん命、そっちの方へ泳いで行きました。」¹⁹⁶

所在	原文	王晓燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏜訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
347-4	ざぶんと	咕咚 <u>一声</u>	扑通 <u>一声</u>	(纵身)	(纵身)

分析：

ここでは、王晓燕と周龍梅、彭懿が「一声」の形で訳している。また、「一声」の前に付いている「咕咚」と「扑通」は、重いものが落ちる音を形容しているが、「扑通」の方は、水に落ちる時の音に重点を置いている。他の訳者は、擬音語の代わりに「纵身」という水に飛び込む直前の様子として訳している。「纵身」というのは、「勢いよく前または上へ飛び跳ねる」という意味である。つまり、徐華鏜と顔翠が「ざぶんと」というオノマトペを直接に象声詞として訳していないのである。

(21)オノマトペ：「どぶんと」

原文：

「一郎は、木の上で手を額にあてて、もう一度よく見きはめてから、どぶんと逆まに淵へ飛びこみました。」¹⁹⁷

所在	原文	王晓燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏢訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
339-9	どぶんと	“扑通” 一声	一头	扑通一声	なし

分析：

「どぶんと」は、前述した「ざぶんと」というオノマトペと同様に、水に飛び込む時の音である。ここでは、王晓燕と徐華鏢が「一声」の形で訳している。「一声」の前に付いている「扑通」は、まさに水に飛び込む時の音を形容する象声詞である。おそらく、訳者たちも、「どぶんと」と「ざぶんと」がよく似ているのを意識しながら、わざと異なる言葉遣いで訳したのではないかと思われる。周龍梅、彭懿が訳した「一头」というのは、「どぶんと」に対する象声詞ではなく、ただ淵へ飛び込む動作が速やかであることを強調している。

(22)オノマトペ：「どぶーんと」

原文：

「そして「落すぞ、一二三。」と云ひながら、その白い石をどぶーんと淵へ落しました。」

所在	原文	王晓燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏢訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
338-16	どぶーんと	咕咚 <u>一声</u>	咕咚 <u>一声</u>	扑通	扑通 <u>一声</u>

分析：

「どぶーんと」は、前述した「どぶんと」の「ぶ」を長音化したオノマトペである。ここでは、徐華鏢以外の訳者たちが「一声」の形で訳している。しかし、この長音化された「どぶーんと」と「どぶんと」のニュアンスは、それぞれの訳文から体现しかねる。

(23)オノマトペ：「どぼんと」

原文：

「すると又三郎も何だか始めて怖くなったと見えてさいかちの木の下からどぼんと水へはひってみんなの方へ泳ぎだしました。」¹⁹⁸

所在	原文	王晓燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鉄訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
348-9	どぼんと	咚的一声	扑通一声	なし	なし

分析：

「どぼんと」は、前述した「どぶんと」、「ざぶんと」と相似している。しかし、ニュアンスがないというわけではない。『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』によると、この二つのオノマトペの解釈は以下のように書かれている。

「どぼんと」

水に勢いよくはいるときの重くにぶい音。また、そのさま¹⁹⁹。

「どぶんと」

重いものなどが水中に落ちたり、人が水中に飛びこんだりする音。また、そのさま²⁰⁰。

「ざぶんと」

水に瞬間的に勢いよく飛びこんだり、ものを勢いよく水に投げこんだときの大きくひびく音。波がはげしく打ち寄せたりするときの水の音。また、そのさま。ざぶり²⁰¹。

つまり、「どぼん」と「ざぶん」は、両方とも勢いよく水に入る音であるが、「どぼん」の方は、音が重くにぶい。「ざぶん」の方は、瞬間的に水に飛び込んだり、投げ込んだりする時、音が大きく響く。一方、「どぶん」の方は、重いものが水に落ちるときの音をさす。ここでは、王晓燕と周龍梅、彭懿が「一声」の形で訳している。ただし、「扑通一声」にある象声詞「扑通」は「咚的一声」にある象声詞「咚」より、原文に相応しいと思われる。第一に、「咚」は、「物が落ちる時の音」をさすのに対し、「扑通」は、水に飛び込むときの音である。原文も又三郎が水に飛び込む様子を描写しているので、「扑通」の方は自然だと思われる。第二に、「扑通」の発音「putong」と「どぼん」の発音「dobonn」にも近いのではないかと考えられる。

まとめ：

各訳者は、原文の背景をもとにした音を、「象声詞」に切り替えた上で、その後ろに「一声」を加え、翻訳を施しているのである。『現代漢語大辞典』により、この「一声」

の「声」とは、「量詞。表示声音发出的次数。（筆者訳：助数詞。音声が発する回数を表す。）」である²⁰²。つまり、日本語の助数詞と同じ働きである。助数詞とは言え、象声詞の場合では、音の回数を表すのではなく、漢数字「一」と組み合わせて、素早い動作に伴う音を強調している。仮に「一声」をつけないとすれば、正しい文には成り立たないというわけではない。ただし、その動作の素早さが見えにくくなると思われる。

4. 1. 2 「一+～」の形で訳されているオノマトペに関する数的分析

『宮沢賢治全集』から選び出した十二本の童話作品に対する四種の現代漢語訳の中では、訳者二人ないし二人以上とも借用動量詞「一+～」の形で訳されているオノマトペの数は96例である。この内では、「ふと」、「はっと」、「しんと」、「どきっと」、「べたんと」というような「Aと」「Aっと」「ABと」「ABっと」「ABCと」の形で訳されているオノマトペの数は64例である。

すなわち、借用動量詞「一+～」の形で訳されているオノマトペには、「Aと」「Aっと」「ABと」「ABっと」「ABCと」が67%占めている。

また、『現代漢語大辞典』によると、漢数字「一」について、「表示动作为一次，或短暂，突然。（筆者訳：動作が一時的である。または、短く、いきなりである。）」との解釈が書かれている²⁰³。つまり、借用動量詞「一+～」の形で訳されているオノマトペの現代漢語訳においては、動作の素早さを表すのが多数である。これは「Aと」「Aっと」「ABと」「ABっと」「ABCと」というようなオノマトペが持つ性質が一致するのではないかと思われる。

4. 2 相似したオノマトペの現代漢語訳の境目について

十二本の童話作品におけるオノマトペの現代漢語訳から見ると、意味が相似しているオノマトペの現代漢語訳の境目がはっきりと見えない傾向がある。4.1.1で述べたように「水に飛び込む時の音」について、「ざぶんと」、「どぶんと」、「どぼんと」というような表現が相似したオノマトペが存在している。

のみならず、「ごくごく」と「がぶがぶ」という勢いよく飲むさま、「ぼちゃぼちゃ」と「ちゃぶちゃぶ」という水をかき回す音、「がくがく」と「がたがた」という体が震えるさま、などのようなオノマトペの現代漢語訳から見ると、それぞれの境目が見えにくいのが分かった。以下は、十二本の童話作品から抽出したオノマトペにある「震え」、「踉蹌めき」、「驚き」、「輝き」を項目別に分け、その現代漢語訳と比較する。

4. 2. 1 十二本の童話作品における「震え」を表すオノマトペと現代漢語訳

ここでは、十二本の童話作品における「震え」を表すオノマトペとその現代漢語訳の比較について述べる。主に「ぶるぶる」、「がたがた」、「がくがく」をめぐって、オノマトペごとに、一つの例文を取りあげた上で、それぞれの現代漢語訳を示し、分析する。

(1)オノマトペ：「ぶるぶる」

出典：「貝の火」51-10

原文：

「母親のひばりは、物も言へずにぶるぶる顫へながら、子供のひばりを強く強く抱いてやりました。」²⁰⁴

訳文：

①騰瑞訳：

云雀妈妈看到被救上来的宝宝，激动得直颤抖，连话也说不上来。她扑上去，把小云雀紧紧抱在怀里。

②徐華瑛訳：

不发一语的云雀妈妈只是颤抖着身子，把小云雀紧紧抱个满怀。

③王新禧訳：

云雀妈妈见到草地上被救的孩子，激动得浑身发抖，一言不发，将小云雀紧紧地抱在怀中。

④顔翠訳：

云雀妈妈浑身颤抖着，说不出任何话，只能紧紧地抱着小云雀。

対訳表 4-1：「ぶるぶる顫へる」

訳者	原文	訳文
騰瑞訳（1994）	ぶるぶる顫へる	颤抖
徐華瑛訳（2012）	ぶるぶる顫へる	颤抖
王新禧訳（2012）	ぶるぶる顫へる	浑身发抖
顔翠訳（2015）	ぶるぶる顫へる	浑身颤抖

(2)オノマトペ：「がたがた」

出典：「貝の火」51-5

原文：

「ひばりの子は草の上に倒れて、目を白くしてガタガタ顫へてゐます。」²⁰⁵

訳文：

①騰瑞訳：

小云雀躺在草地上眼珠翻白，浑身打着哆嗦。

②徐華瑛訳：

小云雀倒在草地上，双眼翻白，身体不住地打战。

③王新禧訳：

小云雀瘫在草地上，眼珠翻白，浑身不停地打着哆嗦。

④顔翠訳：

小云雀瘫倒在地上，眼珠翻白，不住地颤动着。

対訳表 4-2：「がたがた顫へる」

訳者	原文	訳文
騰瑞訳（1994）	がたがた顫へる	浑身打着哆嗦
徐華瑛訳（2012）	がたがた顫へる	不住地打战
王新禧訳（2012）	がたがた顫へる	浑身不停地打着哆嗦
顔翠訳（2015）	がたがた顫へる	不住地颤动

(3)オノマトペ：「がくがく」

出典：「風の又三郎」349-4

原文：

「又三郎は、気味悪さうに川のはうを見ましたが色のあせた唇をいつものやうにきつと噛んで「何だい。」と云ひましたが、からだはやはりがくがくふるってゐました。」²⁰⁶

訳文：

①王曉燕訳：

又三郎拉着脸，望着小河的方向，他像平时一样，紧咬着发白的嘴唇问：“你们要干嘛？”他的身体一直不停地发抖。

②周龍梅、彭懿訳：

风又三郎害怕地望了望河水，又像往常那样咬紧失去血色的嘴唇，自言自语道：“那是什么声音呢？”他全身仍在瑟瑟发抖。

③徐華瑛訳：

风之又三郎于是一脸惊慌地望向河中，惨白的嘴唇又习惯性得紧紧咬着。“搞什么嘛！”他嘴里嘟囔着，身子还是抖个不停。

④顔翠訳：

三郎胆战心惊地回头看了一眼河面，习惯性地咬着发白的嘴唇，哆哆嗦嗦地自言自语着：“那到底是什么东西啊……”

対訳表 4-3：「がくがくふるって」

訳者	原文	訳文
騰瑞訳（1994）	がくがくふるって	一直不停地发抖
徐華瑛訳（2012）	がくがくふるって	瑟瑟发抖
王新禧訳（2012）	がくがくふるって	抖个不停
顔翠訳（2015）	がくがくふるって	哆哆嗦嗦地

分析：

対訳表 4-1、4-2、4-3 で示したのは、「ぶるぶる顫へる」、「ガタガタ顫へる」、「がくがくふるって」それぞれの現代漢語訳である。「ぶるぶる」、「がたがた」、「がくがく」に関する使い分けは、『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』により、以下のように書かれている。

「寒くて体ががたがた震えた」は全体がゆれるようすを表すのに対して、がくがくは体の一部がはげしくゆれるようすや「怖くてひざががくがくした」のように、ひざが震えたり、歯の根が合わないようす。ぶるぶるはこきざみに震えるようす²⁰⁷。

つまり、「がたがた」は全体がゆれる様子であり、「がくがく」は一部がゆれる様子である。一方、「ぶるぶる」は、小刻みに震える様子である。しかし、対訳表 4-1 で示したように、王新禧と顔翠の訳文では、「顫へる」の訳の前についている「浑身」がからだ全体という意味である。すなわち、「ぶるぶる顫へる」を「がたがた顫へる」として訳されたと言える。「ぶるぶる」という「小刻み震える様子」が見えない。また、対訳表 4-3 で示したのは、「がくがく」の翻訳である。ここでは、四訳者たちは、「がくがく」という体の一部がはげしく震える様子の代わりに、「不停」「一直」など「絶えずに」という連用修飾語がついている。換言すると、体が絶えずに震えるということである。原文によると、又三郎はからだのがくがくふるっていた。しかし、これは、前述した「がくがく」の解釈と異なる。つまり、宮沢賢治が「がくがく」というオノマトペの使用範囲を拡大したと考えられる。よって、このような意味が相似しているオノマトペの現代漢語訳の境目はさらに見えにくくなる。

4. 2. 2 十二本の童話作品における「蹠踉めき」を表すオノマトペと現代漢訳

ここでは、十二本の童話作品における「蹠踉めき」を表すオノマトペとその現代漢語訳の比較について述べる。主に「ひよろひよろ」、「よろよろ」をめぐって、オノマトペごとに、一つの例文を取りあげた上で、それぞれの現代漢語訳を示し、分析する。

(1)オノマトペ：「ひよろひよろ」

出典：「雪渡り」129-9

原文：

「酔ってひよろひよろ太右衛門が去年、三十八、たべた。」²⁰⁸

訳文：

①王敏訳：

醉鬼太右卫门摇摇晃，去年三十八个肚里装。

②周龍梅訳：

喝醉了酒的太右卫门，东倒西歪，去年一口气吃掉了三十八个。

③王新禧訳：

酒鬼太右卫门晃呀晃，去年吃下三十八个。

④顔翠訳：

摇晃晃的醉鬼太右卫门啊，去年吃了三十八个！

対訳表 4-4：「ひよろひよろ」

訳者	原文	訳文
王敏訳 (2007)	ひよろひよろ	摇摇头
周龍梅訳 (2009)	ひよろひよろ	东倒西歪
王新禧訳 (2012)	ひよろひよろ	晃呀晃
顔翠訳 (2015)	ひよろひよろ	摇摇头

(2)オノマトペ：「よろよろ」

出典：「水仙月の四日」66-14

原文：

「峠の雪の中に、赤い毛布をかぶつたさつきの子が、風にかこまれて、もう足を雪から抜けなくなつてよろよろ倒れ、雪に手をついて、起きあがらうとして泣いてみたのです。」

209

訳文：

①林少華訳：

在山顶雪中裹着毛毯的那个小孩被风团团围住，脚已无法从雪中拔出，踉踉跄跄跌倒在地，正双手插在雪中哭着挣扎。

②周龍梅訳：

大雪中，刚才那个裹着红毯子的小孩被困在了山岭上，脚已经陷在雪地里拔不出来了，他东倒西歪，用手扒着雪，边哭边挣扎着想站起来。

③王新禧訳：

山岭上的雪地里，身裹红色毛毯的孩子经不住大风猛吹，双足深陷入雪堆无法自拔。他斜着身子，用手撑在雪地上，一面哭一面挣扎着想站起来。

④顔翠訳：

山腰中的雪堆中，那个裹着红毯子的小孩被四周的风吹倒了，双足陷在雪地里拔不出来。小孩双手撑着雪地，边哭边使劲想爬起来。

対訳表 4-5：「よろよろ」

訳者	原文	訳文
林少華訳 (2007)	よろよろ	踉踉跄跄

周龍梅訳 (2009)	よろよろ	东倒西歪
王新禧訳 (2012)	よろよろ	なし
顔翠訳 (2015)	よろよろ	なし

分析：

対訳表 4-4、4-5 で示したように、周龍梅が「ひよろひよろ」と「よろよろ」両方とも「东倒西歪」と訳している。まさに、「东倒西歪」というのは、よろめくさまを形容する熟語である。しかし、「ひよろひよろ」と「よろよろ」のニュアンスが見えない。『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』を調べたところ、共通するのが「体が揺れて倒れそうなさま」ということである。ただし、「ひよろひよろ」は「よろよろ」と共通する意味があるほかには、「細長く弱々しげにのびているさま。やせてひよわなさま。」とも解釈されている²¹⁰。また、「ひよろひよろ」にある原文の主語は「太右衛門」なので、もしかすると、宮沢賢治が「ひよろひよろ」で美人である「太右衛門」を形容している。美人でありながら、まんじゅうを三十八個食べたという誇張の手法で、まんじゅうの美味しさを強調するためだと考えられる。

4. 2. 3 十二本の童話作品における「驚き」を表すオノマトペと現代漢語訳

ここでは、十二本の童話作品における「驚き」を表すオノマトペとその現代漢語訳の比較について述べる。主に、「ぎくっと」、「ぎょっと」をめぐって、オノマトペごとに、一つの例文を取りあげた上で、それぞれの現代漢語訳を示し、分析する。

(1)オノマトペ：「ぎくっと」

出典：「オツベルと象」185-2a

原文：

「百姓どもはぎくつとし、オツベルもすこしぎよつとして、大きな琥珀のパイプからふつとけむりをはきだした。」²¹¹

訳文：

①騰瑞訳：

长工们都吓的够呛，奥贝路也有点胆颤。他从那琥珀大烟斗里，扑地吐了一大口烟。

②周龍梅訳：

农民们惊呆了，奥倍尔也有点慌了神，一口烟雾从大琥珀烟斗里冒了出来。

③王新禧訳：

雇工们都吓坏了，欧佩鲁也有些害怕，从琥珀烟斗里喷出一大口烟。

④顔翠訳：

农民们全都慌了神，奥兹贝鲁也有点儿害怕了，一口烟雾就从他那琥珀色的烟斗里骤然喷了出来。

対訳表 4-6：「ぎくつと」

訳者	原文	訳文
騰瑞訳 (1994)	ぎくつと	吓的够呛
周龍梅訳 (2009)	ぎくつと	惊呆了
王新禧訳 (2012)	ぎくつと	吓坏
顔翠訳 (2015)	ぎくつと	慌了神

(2)オノマトペ：「ぎよつと」

出典：「オツベルと象」185-2b

原文：

「百姓どもはぎくつとし、オツベルもすこしぎよつとして、大きな琥珀のパイプからふつとけむりをはきだした。」²¹²

訳文：

①騰瑞訳：

长工们都吓的够呛，奥贝路也有点胆颤。他从那琥珀大烟斗里，扑地吐了一大口烟。

②周龍梅訳：

农民们惊呆了，奥倍尔也有点慌了神，一口烟雾从大琥珀烟斗里冒了出来。

③王新禧訳：

雇工们都吓坏了，欧佩鲁也有些害怕，从琥珀烟斗里喷出一大口烟。

④顔翠訳：

农民们全都慌了神，奥兹贝鲁也有点儿害怕了，一口烟雾就从他那琥珀色的烟斗里骤然喷了出来。

対訳表 4-7：「ぎよつと」

訳者	原文	訳文
騰瑞訳 (1994)	ぎよつと	胆颤
周龍梅訳 (2009)	ぎよつと	慌了神
王新禧訳 (2012)	ぎよつと	害怕
顔翠訳 (2015)	ぎよつと	害怕

分析：

対訳表 4-6、4-7 で示したように、顔翠が「ぎくつと」を「慌了神」と訳している。同様に、周龍梅が「ぎよつと」を「慌了神」とも訳している。『擬音語・擬態語 4500 日本

語オノマトペ辞典』によると、「ぎくつと」と「ぎょつと」について、以下のように書かれている。

「ぎくつと」：①一瞬強く驚きおそれるさま。②急に折れ曲がるさま。また、急に強い衝撃を感じるさま²¹³。

「ぎょつと」：突然、強く胸に迫るほど、驚きおそれるさま²¹⁴。

解釈から見ると、「ぎょつと」の方は、驚愕の程度が「ぎくつと」の方より強いのが分かった。この点に関しては、対訳表 4-7 で騰瑞が「ぎょつと」を「胆顫」と訳している。この「胆顫」は肝を潰すほどの恐ろしさを形容している。これは、「ぎょつと」の方に相応しいのではないかと思われる。

4. 2. 4 十二本の童話作品における「輝き」を表すオノマトペと現代漢語訳

ここでは、十二本の童話作品における「輝き」を表すオノマトペとその現代漢語訳の比較について述べる。主に、「きらきら」、「ちらちら」をめぐって、オノマトペごとに、一つの例文を取りあげた上で、それぞれの現代漢語訳を示し、分析する。

(1)オノマトペ：「きらきら」

出典：「貝の火」76-18

原文：

「窓の外では霧が晴れて鈴蘭の葉がきらきら光り、つりがねさうは「カン、カン、カンカエコカンコカンコカン。」と朝の鐘を高く鳴らしました。」²¹⁵

訳文：

①騰瑞訳：

窗外的雾气已散，铃兰的叶子在阳光下闪闪发光，倒挂金钟花又响起了清晨的钟声：“叮——当，叮——当，叮——当……。”

②徐華瑛訳：

窗外雾气已散，铃兰叶显得闪闪发亮，风铃草也高声敲响晨钟——“当，当，当叮当丁……”

③王新禧訳：

窗外雾已散尽，太阳出来了。铃兰的叶片在阳光照耀下闪闪发光，钟花又敲响了晨钟：“叮叮当……叮叮当……叮叮当……”

④顔翠訳：

窗外雾气散去，铃兰的叶子闪闪发光，风铃草的晨钟声丁零丁零地响起来了。

対訳表 4-8：「きらきら」

訳者	原文	訳文
騰瑞訳 (1994)	きらきら光る	闪闪发光
徐華瑛訳 (2012)	きらきら光る	闪闪发亮
王新禧訳 (2012)	きらきら光る	闪闪发光
顔翠訳 (2015)	きらきら光る	闪闪发光

(2)オノマトペ：「ちらちら」

出典：「虔十公園林」403-6b

原文：

「風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はもううれしくうれしくてひとりだけで笑へて仕方がないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立ってゐるのです。」²¹⁶

訳文：

①周龍梅訳：

每当狂风呼啸，水青冈的树叶闪闪发亮时，虔十就会高兴得不知如何是好，可他还是强忍着，拼命张大嘴呼哧呼哧地喘着气，来掩饰自己抑制不住的喜悦。虔十就这样，一直站在那里，久久地仰望着那颗水青冈。

②徐華瑛訳：

风沙沙地吹，把山毛榉叶吹得一闪一闪发光，虔十心中狂喜不已，忍不住就要大笑起来，只好张大嘴巴，哈哈地吐出气来强忍着，然后就一直站在原地望着那颗山毛榉，久久不动一下。

③王新禧訳：

每到大风劲吹，山毛榉的叶片闪着亮光时，虔十就大为兴奋。但他会拼命忍住笑，呼哧呼哧地大口大口喘着气，以此来遮掩自己内心的欣喜。他就这样直直地伫立在那儿，仰头凝视着山毛榉，许久许久。

④顔翠訳：

每当风吹来，山毛榉的叶子闪闪发亮时，虔十总会开心得不知如何是好。可他还是拼命地忍着，拼命地张大嘴，大口大口地喘着气，以此来掩饰自己遏制不住的喜悦心情。虔十就那样一直站在那里，久久地仰望着那颗山毛榉。

対訳表 4-9：「ちらちら」

訳者	原文	訳文
周龍梅訳 (2009)	チラチラ光る	闪闪发亮
徐華瑛訳 (2012)	チラチラ光る	一闪一闪
王新禧訳 (2012)	チラチラ光る	闪着亮光

顔翠訳 (2015)	チラチラ光る	闪闪发亮
------------	--------	------

分析：

対訳表 4-8、4-9 で示したように、「きらきら」と「ちらちら」を両方とも「闪闪」と訳されているのが多数である。『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』によると、「きらきら」と「ちらちら」が「光る」と係る解釈以下のように書かれている。

「きらきら」：明るくまぶしく光り輝くさま²¹⁷。

「ちらちら」：弱い光が断続的に光るさま²¹⁸。

解釈から見ると、「きらきら」の方は、眩しいほど光り輝くので、「ちらちら」より程度が高い。しかし、「きらきら」と「ちらちら」を両方とも「闪闪」と訳されている。この「闪闪」は、『現代漢語大辞典』により、「光亮四射；闪烁不定。（筆者訳：光が四方に放射する。きらめく）」という意味である²¹⁹。よって、「きらきら」に相応しいと思われる。一方、「ちらちら」という断続的に光るさまに当てはまる訳文は対訳表 4-9 で徐華瑛が訳した「一闪一闪」である。「一闪一闪」は、点滅的に光るというイメージが強いので、「ちらちら」に相応しいと思われる。

まとめ：

このような相似したオノマトペの現代漢語訳の境目が見えにくいパターンが他にもある。前掲した四つの項目以外に、「ごくごく」と「がぶがぶ」、「どっかり」と「べたん」となどのパターンも挙げられる。勿論、このような些細なニュアンスを扱置こうとも、文脈の粗筋に大きな障害はしない。ただし、このようなニュアンスこそ、訳のバリエーションに起因するのではないかと考えている。

4. 3 意識について

十二本の童話作品から抽出したオノマトペの意識の特徴は、オノマトペとその後ろに付く動詞をペアとして、中国語の動詞に訳されている。この節では、主に「オノマトペ+動詞」を中国語の動詞に訳されているオノマトペについて詳述する。訳者たちは、オノマトペの翻訳を施していないというわけではない。ただし、通常どおりに訳すのではなく、オノマトペ、特に日本語の擬態語で描写した勢い、雰囲気、臨場感などの様子を表すために、そのイメージを含めた他の動詞によって意識するということである。

「オノマトペ+動詞」を中国語の動詞に訳されているオノマトペ

(1)オノマトペ：「ゆっくり」

出典：「虔十公園林」403-1

原文：

「虔十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいてみるのでした。」²²⁰

訳文：

- ①周龍梅訳：虔十总是腰力系着一条绳子，笑呵呵地在森林和田里面走。
- ②徐華瑛訳：虔十总是绑着根绳子当腰带，笑嘻嘻地在树林里或田间悠闲地走着。
- ③王新禧訳：虔十总喜欢在腰间绑一条绳子，微笑着在树林和田野中踱步。
- ④顔翠訳：虔十总是在腰上系一根绳子，然后笑呵呵地行走在森林里和田野间。

対訳表 4-10：「ゆっくりあるいて」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
周龍梅訳（2009）	<u>ゆっくり</u> あるいて	なし
徐華瑛訳（2012）	<u>ゆっくり</u> あるいて	<u>悠闲地</u> 走着
王新禧訳（2012）	<u>ゆっくり</u> あるいて	<u>踱步</u>
顔翠訳（2015）	<u>ゆっくり</u> あるいて	なし

分析：

対訳表 4-10 で示したように、周龍梅と顔翠は「ゆっくり」の翻訳を施していないのに対し、徐華瑛は「ゆっくり」を「悠闲地」という副詞に直訳している。また、王新禧は「ゆっくりあるいて」を「踱歩」という一つの動詞として取り扱っている。

(2)オノマトペ：「どしどし」

出典：「グスコーブトリの伝記」256-6

原文：

「今度爆発すれば、多分山は三分の一、北側をはねとぼして、牛や卓子ぐらゐの岩は熱い灰や瓦斯といつしよに、どしどしサンムトリ市に落ちてくる。」²²¹

訳文：

①騰瑞訳：

火山要是爆发了，大概山的三分之一会向北倾塌，那时象牛或桌子那么大的岩石将随着滚烫的熔岩、火山灰、瓦斯一起泻向桑母利豆市。

②周龍梅訳：

这次倘若爆发，就会把三分之一，也就是把山的北坡掀开，像牛或桌子一样大的岩石将同热灰瓦斯一起泻到萨姆特力市。

③徐華瑛訳：

这次要是爆发的话，山的三分之一大概都会喷到北边去，像牛或桌子般大小的岩块也会混在炽热的火山灰和瓦斯中，一齐冲向山姆托利市。

④顔翠訳：

如果真的火上喷发，大概整座山的三分之一都会往北塌陷，山上像牛和桌子大小的岩石肯定会跟着热灰和气体一起降落到桑姆特力市。

対訳表 4-11：「どしどし落ちてくる」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
騰瑞訳 (1994)	<u>どしどし落ちてくる</u>	泻
周龍梅訳 (2007)	<u>どしどし落ちてくる</u>	泻
徐華瑛訳 (2012)	<u>どしどし落ちてくる</u>	冲
顔翠訳 (2015)	<u>どしどし落ちてくる</u>	なし

分析：

対訳表 4-11 で示したように、顔翠以外の訳者三人は「どしどし」というオノマトペを訳しているのであるが、直訳ではない。日本語側では、「どしどし」は副詞として「落ちる」を修飾しているが、中国語側では、「どしどし」と後ろに来る「落ちる」と一緒にペアとして、「泻」または「冲」という中国語の動詞に訳されている。

「落ちる」を中国語の「落」、「掉」などの動詞に扱えば一般的である。しかし、あえて「泻」、「冲」などの表現に翻訳されたのは、「どしどし」というオノマトペを含めて岩が落ちてくる勢いを強調するのである。

(3)オノマトペ：「カサカサ」

出典：「雁の童子」159-1

原文：

「冬が近くて、天山はもうまっ白になり、桑の葉が黄いろに枯れてカサカサ落ちました頃、ある日のこと、童子が俄かに帰っておいでです。」²²²

訳文：

①騰瑞訳：

冬天快到了，天山已是白雪覆盖，桑树枯黄飘凌，叶落纷纷。有一天，童子突然逃学回来。

②徐華瑛訳：

冬天近了，天山上已是一片雪白，正是桑叶变黄枯萎而飒飒掉落的时分。又一天，童子突然跑回来。

③王新禧訳：

转眼寒冬将至。天山已是白雪皑皑，桑树黄叶凋零。某天，雁童子忽然从学校跑了回来。

④顔翠訳：

临近冬天，天上已是白雪皑皑，桑树黄叶飘零。一天，童子突然跑回家来。

対訳表 4-12：「カサカサ落ちました」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
騰瑞訳 (1994)	<u>カサカサ</u> 落ちました	飘凌
徐華瑛訳 (2012)	<u>カサカサ</u> 落ちました	<u>飒飒</u> 掉落
王新禧訳 (2012)	<u>カサカサ</u> 落ちました	凋零
顔翠訳 (2015)	<u>カサカサ</u> 落ちました	飘零

分析：

対訳表 4-12 で示したように、徐華瑛訳が「カサカサ」を「飒飒」という「象声詞」に訳しているのに対し、他の三訳者たちが「カサカサ落ちました」を「飘凌」、「凋零」、「飘零」という動詞に訳している。これらの動詞は字面が統一されていないが、その「枯れた桑の葉が落ちる」という冷たさ、かつ寂しさが強調されている。

(4)オノマトペ：「ぎくぎく」

出典：「雁の童子」149-7

原文：

「私はしばらくその老人の、高い咽喉仏のぎくぎく動くのを、見るともなしに見てみました。」²²³

訳文：

①騰瑞訳：我无意中看到那老大爷的喉节在叽里咕噜地转动。

②徐華瑛訳：我漫不经心地看着老人那突出而抖动不停的喉结好一会儿。

③王新禧訳：我不经意间瞥见老人的喉结在蠕动。

④顔翠訳：我心不在焉地注视着老人高高凸起，不断上下滑动的喉头。

対訳表 4-13：「ぎくぎく動く」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
騰瑞訳 (1994)	<u>ぎくぎく</u> 動く	<u>叽里咕噜地</u> 转动
徐華瑛訳 (2012)	<u>ぎくぎく</u> 動く	<u>抖动不停</u>
王新禧訳 (2012)	<u>ぎくぎく</u> 動く	<u>蠕动</u>
顔翠訳 (2015)	<u>ぎくぎく</u> 動く	<u>不断上下滑动</u>

分析：

対訳表 4-13 で示したように、騰瑞が、「ぎくぎく」を「叽里咕噜地」という「象声詞」に訳しているほか、他の三訳者たちが、「ぎくぎく動く」をそれぞれ「抖动」「蠕動」「滑动」という一つの動詞に訳している。中にも、王新禧は、「ぎくぎく動く」を「蠕動」という「蚯蚓が這って進むように動くさま」²²⁴（筆者訳）に訳しているのが簡潔であり、読者にも印象を深めるのではないかと考えられる。

(5)オノマトペ：「ちらちら」

出典：「雁の童子」154-9

原文：

「それから果樹がちらちらゆすれ、ひばりはそらですきとほった波をたてまする。」²²⁵

訳文：

- ①騰瑞訳：果树随风起舞，沙沙作响，云雀在清澈透明的天空中婉转歌唱。
- ②徐華瑛訳：果树微微地晃动，云雀凌空站在清澈透明的波浪中。
- ③王新禧訳：果树随风起舞，百灵鸟在澄清的碧空中唱着动听的歌。
- ④顔翠訳：果树在风中婆婆起舞，云雀在空中掀起澄清的声浪。

対訳表 4-14：「ちらちらゆすれる」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
騰瑞訳（1994）	<u>ちらちらゆすれる</u>	<u>起舞</u>
徐華瑛訳（2012）	<u>ちらちらゆすれる</u>	<u>微微地</u> 晃动
王新禧訳（2012）	<u>ちらちらゆすれる</u>	<u>起舞</u>
顔翠訳（2015）	<u>ちらちらゆすれる</u>	<u>婆婆起舞</u>

分析：

対訳表 4-14 で示したように、徐華瑛が「ちらちら」を、「わずかに」を表す「微微地」という副詞に訳している。「ゆすれる」は、中国語の動詞「晃动」、「揺動」に訳されているの一般的である。その代わりに、他の三訳者が、いずれも「ちらちらゆすれる」をペアとして「起舞」という動詞に訳している。ここでは、「果樹がちらちらゆすれる」というイメージを失わないように、「ちらちら」を含め、後ろに付く動詞と組み合わせて「晃动」、「揺動」を「起舞」に扱われたというわけである。また、「起舞」は「踊りはじめる。広く、ダンスをするのをさす。²²⁶」（筆者訳）という意味なので、果樹を人間に擬えるというのも推測できる。つまり、擬人化である。

(6)オノマトペ：「ぐんぐん」

出典：「風の又三郎」324-5

原文：

「冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が切れ切れになって目の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。」²²⁷

訳文：

- ①王曉燕訳：冷風掠过草丛，一片片的云和雾从眼前飘过。
- ②周龍梅、彭懿訳：一阵冷风掠过草丛，云雾从头顶滚了过去。
- ③徐華瑛訳：冰凉的风开始扫过草面，似云似雾的氤氲断断续续地飘过眼前。
- ④顔翠訳：凛冽的风吹过草丛，云朵和雾气也断断续续地从他的眼前飘过。

対訳表 4-15：「ぐんぐん通り過ぎる」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
王曉燕訳 (2007)	<u>ぐんぐん通り過ぎる</u>	<u>飘过</u>
周龍梅、彭懿訳 (2009)	<u>ぐんぐん通り過ぎる</u>	<u>滚</u>
徐華瑛訳 (2012)	<u>ぐんぐん通り過ぎる</u>	<u>飘过</u>
顔翠訳 (2015)	<u>ぐんぐん通り過ぎる</u>	<u>飘过</u>

分析：

対訳表 4-15 で示したように、4種の訳文では、周龍梅、彭懿訳以外に、いずれも「ぐんぐん通り過ぎる」を「飘过」という動詞に訳されている。しかし、この「飘过」は、雲と霧が漂っていく様子しか表せないのである。これに対し、周龍梅、彭懿が「ぐんぐん」という勢いを含めて、後ろにつく「通り過ぎる」をペアとして「滚」という勢いが強く動詞に訳している。

(7)オノマトペ：「ぶつぶつ」

出典：「虔十公園林」405-18

原文：

「すると虔十の兄さんが、「平二さん、お早うがす。」と云って向ふに立ち上がりましたので平二はぶつぶつ云ひながら又のっそりと向ふへ行ってしまうひました。」²²⁸

訳文：

①周龍梅訳：

这时，虔十的哥哥在远处起了身，喊了一声：“平二，早上好。”于是平二嘟嘟囔囔着，又逛逛荡荡地走开了。

②徐華瑛訳：

于是虔十的哥哥开口了。“平二先生，早啊！”说着便挡在他的面前，平二才嘀咕着慢慢地走开。

③王新禧訳：

幸好虔十的兄长在土坑旁挺起身子，喊道：“平二，早安。”平二知道虔十的兄长不好惹，只好嘴里嘀咕着，悻悻地离开了。

④顔翠訳：

这时，虔十的哥哥在远处直起身子朝着平儿喊了一声：“平儿，早啊！”平二嘟嘟囔囔，慢吞吞地走回了自己的田里。

対訳表 4-16：「ぶつぶつ云ひながら」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
周龍梅訳（2009）	<u>ぶつぶつ云ひながら</u>	<u>嘟嘟囔囔</u>
徐華瑛訳（2012）	<u>ぶつぶつ云ひながら</u>	<u>嘀咕</u>
王新禧訳（2012）	<u>ぶつぶつ云ひながら</u>	<u>嘀咕</u>
顔翠訳（2015）	<u>ぶつぶつ云ひながら</u>	<u>嘟嘟囔囔</u>

分析：

対訳表 4-16 で示したように、訳者 4 人とも「ぶつぶつ云ひながら」をペアとして一つの述語に訳している。ただし、訳文を見ると、周龍梅と顔翠が一致し、徐華瑛と王新禧のほうが一致するのが分かった。いずれの意味が原文に相応しいのである。ただし、周龍梅と顔翠が「ぶつぶつ言う」を表す中国語の「嘟嘟囔囔」を繰り返し、「嘟嘟囔囔」に訳している。原文では、「ぶつぶつ」の後ろに「云ふ」という動詞がついている一方、訳文の方はすべて動詞である。この点に関して、現代漢語訳の方は、動詞として訳されているが、その動詞にはオノマトペの意味も含んでいると考えられる。

(8)オノマトペ：「**ピクピク**」

出典：「虔十公園林」403-12

原文：

「なるほど遠くから見ると虔十は口の横わきを搔いてゐるか或いは欠伸でもしてゐるかのやうに見えましたが近くではもちろん笑つてゐる息の音も聞えましたが唇がピクピク動いてゐるのもわかりましたから子供らはやっぱりそれもばかにして笑ひました。」²²⁹

訳文：

①周龍梅訳：

远远望过去，虔十的确是在挠嘴巴或是在打哈欠，但走近了，就会听到他夹杂着喘息中的欢笑声，也可以看到他的嘴巴在抽动，所以孩子们还是照样取笑他。

②徐華瑛訳：

如此一来，远远看来，虔十就像是在搔着嘴边或是打着哈欠，然而，靠近一看便可以听到他忍住笑的气息声，嘴唇更是一颤一颤地抽动着，孩子们还是讥笑着他。

③王新禧訳：

如果仅从远处瞧他，他那副模样还真像是在揉嘴角或是在打哈欠。可是一旦靠近他，便能听到他潜藏在喘息声下的欢笑声，还可以看到他的嘴唇笑意而抽动。为此，孩子们见了仍然取笑他。

④顔翠訳：

虽然远远望去，虔十的确在挠嘴巴或者在打哈欠，但是走近了就能听到他欢笑时的喘息声，也可以看到他嘴唇忍不住颤动的模样。所以其他孩子们依然如故地嘲笑他。

対訳表 4-17：「ピクピク動いてゐる」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
周龍梅訳（2009）	<u>ピクピク動いてゐる</u>	<u>抽动</u>
徐華瑛訳（2012）	<u>ピクピク 動いてゐる</u>	<u>一颤一颤地 抽动</u>
王新禧訳（2012）	<u>ピクピク動いてゐる</u>	<u>抽动</u>
顔翠訳（2015）	<u>ピクピク動いてゐる</u>	<u>颤动</u>

分析：

対訳表 4-17 で示したように、周龍梅、王新禧、顔翠が「ピクピク動いてゐる」を中国語の動詞「抽动」、「颤动」に訳している。この「ピクピク」というオノマトペの意味は、「抽」または「颤」に反映している。また、徐華瑛訳には、「抽动」の前に「一颤一颤地」がついている。この「一颤一颤地」が「小刻みに震える」という意味を表し、後ろの「抽动」と呼応している。

(9)オノマトペ：「**どうっと**」

出典：「風の又三郎」349-15

原文：

「一郎はすばやく帯をしてそして下駄をはいて土間を下り馬屋の前を通って潜りをあけましたら風がつめたい雨の粒と一緒にどうっと入って来ました。」²³⁰

訳文：

①王曉燕訳：

一郎手脚麻利地系好腰带，穿上木屐，走到屋檐下，穿过马棚，打开了边门，一股劲风夹裹着冷飕飕的雨点迎头刮来。

②周龍梅、彭懿訳：

一郎迅速系好衣袋，蹬上木屐走出堂屋，他绕过马棚，刚一打开后屋的便门，就有一股狂风夹杂着冰冷的雨点迎面扑了上来。

③徐華瑛訳：

一郎迅速地系上腰带，穿上木屐下了地，穿过马厩打开边门，迎面扑来的是冰冷的雨珠夹杂着狂风。

④顔翠訳：

一郎迅速地系好安全带，穿上木屐下了床。他走到屋外，经过马厩，打开门，一阵冷风夹杂着雨滴迎面扑来。

対訳表 4-18：「どうっと入ってくる」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
王曉燕訳（2007）	<u>どうっと入ってくる</u>	<u>刮</u>
周龍梅、彭懿訳（2009）	<u>どうっと入ってくる</u>	<u>扑</u>
徐華瑛訳（2012）	<u>どうっと入ってくる</u>	<u>扑</u>
顔翠訳（2015）	<u>どうっと入ってくる</u>	<u>扑</u>

分析：

対訳表 4-18 で示したように、四種の訳は、いずれも「どうっと」という風の強さを表すオノマトペを直訳していない。ただし、その後ろについている「入ってくる」をペアとして、中国語の動詞「刮」または「扑」と訳している。通常、「風が吹いてくる」を「吹」という動詞を使用するのに対し、ここでは、「どうっと」というオノマトペの意味を含めて「刮」、「扑」と扱っている。中でも、「扑」の方は、飛びかかるというような勢いを表している。

ここで取り上げたのは、「オノマトペ+動詞」を中国語の動詞に訳しているパターンである。特に、この節で取り扱った擬態語を中国語に翻訳する際に、直訳する代わりに、その擬態語が強調するものを中国語の動詞を通じて訳すという傾向があると言える。つまり、日本語の擬態語は、音象徴を以って一般的な動詞と組み合わせるという特徴がある。一方、中国語においては、動詞で擬態語のイメージを含めて物事の様子を描写するという特徴がある。

4. 4 宮沢賢治の独特のオノマトペとその現代漢語訳の問題点について

宮沢賢治の童話作品においては、既存のオノマトペが全く異なる意味で使用される傾向がある。「すばすばタバコを吸う」を「すばすば歩く」、「馬がぼくりぼくり歩く」を「ぼくりぼくり芝を起こす」のように使うのが宮沢賢治のオノマトペの独自性である。

4. 4. 1 では、この独特のオノマトペとその現代漢語訳の問題点を分析する。また、「馬が

のっこり立つ」、「霧がポシャポシャ降る」というような、ほとんど使われないオノマトペとその現代漢語訳の比較を列挙する。

(1)オノマトペ：「ぼくりぼくり」

出典：「虔十公園林」405-2

原文：

「そして納屋から唐鍬を持ち出してぼくりぼくりと芝を起こして杉苗を植ゑる穴を掘りはじめました。」²³¹

訳文：

①周龍梅訳：

回到家里，他从仓房里拿出一把铁锄头，吭哧吭哧地翻起草地，挖起种杉树苗的坑来了。

②徐華瑛訳：

接着，他从仓库里拿出锄头，迅速地翻开草地，开始挖种杉苗的洞来。

③王新禧訳：

他从家里的仓库中取出一柄铁锄头，呼哧呼哧地跑到屋后开始挖栽种杉树的土坑。

④顔翠訳：

他从库房里找出一把铁锄头，吭哧吭哧地翻起了草地挖起种杉树的坑来。

対訳表 4-19：「ぼくりぼくりと」

訳者	オノマトペ	訳文
周龍梅訳 (2009)	<u>ぼくりぼくり</u> と	<u>吭哧吭哧地</u>
徐華瑛訳 (2012)	<u>ぼくりぼくり</u> と	<u>迅速地</u>
王新禧訳 (2012)	<u>ぼくりぼくり</u> と	<u>呼哧呼哧地</u>
顔翠訳 (2015)	<u>ぼくりぼくり</u> と	<u>吭哧吭哧地</u>

分析：

対訳表 4-19 で示したように、周龍梅と顔翠が「ぼくりぼくりと」を「吭哧吭哧地」という中国語の擬音語に訳している。王新禧訳には、別の擬音語「呼哧呼哧地」がある。徐華瑛は、「ぼくりぼくり」を擬音語として施していないが、「迅速地」という「スピードが早い」を表す副詞に取り扱っている。しかし、「ぼくりぼくり」というオノマトペは擬音語のみではない。同様に、『大辞林』、『大辞泉』などの国語辞書には掲載されていないが、『日本国語大辞典 第二版』により、「ぼくりぼくり」は以下のように述べてある²³²。

「ぼくぼく」のさらにゆっくりした感じを表す語」。*暗夜行路（1921-37）〈志賀直哉〉三・一「天気続きにポクリポクリほこりのたつ白い道を」*一家（1938）〈寺崎浩〉「牛乳馬車がぼくりぼくりと過ぎてゆく位だ」

「ぼくぼく」は、「ゆっくりと歩く足音、また、その様子を表す語。」と解釈されている²³³。また、「ぼくりぼくり」の意味に関しては、『賢治オノマトペの謎を解く』と『宮沢賢治のオノマトペ集』にも解釈されている。

田守育啓説：

「ぼくりぼくり」は馬がゆっくりと規則正しく歩く様を描写するのに用いられる。馬が歩く動作と鍬で芝を掘り起こす動作がいずれもゆっくりと規則正しく行われるという点でよく似ているので、賢治は馬の歩く動作を描写する「ぼくりぼくり」を鍬で芝を掘り起こす動作に当てはめたと考えられないだろうか²³⁴。

栗原敦説：

ひとからは知恵が足りないといわれている虔十が家の裏の野原に杉の木を植えようと思立ち、さっそく作業をしています。おっとりとした印象のオノマトペはスローペースながらも虔十が着実に穴を掘る様子が浮かんできます²³⁵。

つまり、ここでは、四種の訳はいずれも誤訳だと判断できる。中でも、徐華瑛は「ぼくりぼくり」を「迅速地」と訳している。それは「ぼくりぼくり」の意味と正反対である。他の3種の訳は、恐らく「虔十が唐鍬で芝を起こす」という場面の臨場感を読者に与える為に、「呼哧呼哧地」、「吭哧吭哧地」というような擬音語によって、唐鍬で芝を起こす時の音を反映させるのではないかと推測できる。これも誤訳になりかねない原因の一つだと考えられる。

一方、宮沢賢治が「ぼくりぼくり」という「ゆっくりと歩くさま」のオノマトペを「芝を起こす」時の様子に活用したのも、宮沢賢治の独特の使い方だと思われる。ここから見ると、宮沢賢治はオノマトペをその対象外の動作にも使用するという傾向がある。

(2)オノマトペ：「**のっこり**」

出典：「風の又三郎」323-15

原文：

「嘉助は笑ひました。そして（ふん。なあに、馬何処かで、こはくなつてのっこり立ってるさ。）と思いました。」²³⁶

訳文：

①王曉燕訳：

嘉助笑了，他想：“嘿！说不定马害怕了，呆呆地就站在什么地方呢。”

②周龍梅、彭懿訳：

嘉助欣慰地笑了。他心想：哼，马也会害怕的，他肯定不敢走远，说不定就藏在什么地方等着我们呢！

③徐華瑛訳：

嘉助笑了起来，他心想：哼！那马现在一定吓得呆站在附近吧。

④顔翠訳：

嘉助笑了，心想：“哼哼，马一定是害怕了，正站在哪里等着呢。”

対訳表 4-20：「のっこり」

訳者	オノマトペ	訳文
王曉燕訳（2007）	のっこり	呆呆地
周龍梅、彭懿訳（2009）	のっこり	なし
徐華瑛訳（2012）	のっこり	呆
顔翠訳（2015）	のっこり	なし

分析：

「のっこり」は、本章で抽出した12本の童話作品において、一回しか使われていないオノマトペである。「のっこり」の意味を調べたところ、『大辞林』、『大辞泉』などの国語辞書には掲載されていないが、『江戸語大辞典』と『日本国語大辞典』では、以下のようになっている。

『江戸語大辞典』

のっこりと《副》のんきで無頓着なさま。のほほんと。明和八年・遊婦多数寄-「我ハのっこりと懐手して口車斗で」²³⁷

『日本国語大辞典』

のっこり《副》（「と」を伴って用いることもある）。のんきに落ち着いているさまを表す語。*談義本・遊婦多数寄（1771）-「衣類道具までを質に入れさせ、我はのっこりと懐手して口車斗で」*医師高間房一氏（1941）<田畑修一郎>-二「その時道平がのっこりと診察室に上って来た」方言①物の量の多いさまを表す語。たくさん。どっさり。【のっこら】青森県津軽「田んぼに稲がのっこらど残っていますね」方言②粘りけのあるものなどが付いて見苦しいさまを表す語。べっとり。【のっけら】青森県津軽「顔に墨がのっけらとついてますぜ」²³⁸

つまり、方言を除き、前掲した「のっこり」の解釈については「のんきで無頓着なさま」または「のんきに落ち着いているさま」という意味である。また、『賢治オノマトペの謎を解く』の「足が関わっている動作」において、田守も「のっこり立っている」を「のんきに立っている」として考えている²³⁹。

対訳表 4-20 で示したように、王晓燕訳と徐華瑛訳では、「のっこり」を「呆呆」、「呆」に訳されている。しかし、この「呆呆」または「呆」というのは、「ぼんやりとしている」という意味である。よって、「のんきに落ち着いているさま」とのずれが見られる。

(3) オノマトペ：「すばすば」

出典：「風の又三郎」304-2

原文：

「先生はびかびか光る呼子を右手にもってもう集れの支度してゐるのですが、そのすぐうしろから、さっきの赤い髪の子が、まるで権現さまの尾っぱ持ちのやうにすまし込んで白いシャッポをかぶって先生についてすばすばとあるいて来たのです。」²⁴⁰

訳文：

① 王晓燕訳：

老师从门口走了进来，右手拿着锒亮锒亮的哨子，招呼大家集中。刚才的那个红发男孩，身穿一件白衬衫，像跳狮子舞时专门拿狮子屁股的人一样，一本正经地大踏步走在老师身后。

② 周龍梅、彭懿訳：

老师右手拿着一只锒亮的哨子，示意大家集合。让人简直不敢相信的是，老师身后竟是刚才那个红发少年。只见他头上戴了一顶白帽子，像是一个帮舞狮子的人提尾巴的人似的，跟着老师从容不迫地向这边走来。

③ 徐華瑛訳：

老师右手拿着个亮晶晶的哨子，好像准备过来叫大家集合。紧跟在他身后，戴了顶白帽子像菩萨爷身后随从亦步亦趋的，居然就是刚刚那个红发孩子。

④ 顔翠訳：

老师右手拿着一只亮晶晶的哨子，正准备叫大家集合。忽然，老师的身后出现了一个人影，正是方才还在教室里面的红发小孩。他戴着一顶白色的帽子，跟在老师的身后，亦步亦趋。

対訳表 4-21：「すばすば」

訳者	オノマトペ	訳文
王晓燕訳 (2007)	すばすば	<u>一本正经</u>

周龍梅、彭懿訳 (2009)	すばすば	<u>从容不迫</u>
徐華瑛訳 (2012)	すばすば	<u>亦歩亦趨</u>
顔翠訳 (2015)	すばすば	<u>亦歩亦趨</u>

分析：

一見すれば、おそらく日本語母語話者にとっては、頭に浮かぶのが「タバコをすばすばと吸う」かもしれない。通常、「すたすた歩く」という言い方が一般的である。しかし、ここで「すばすば」の後ろについているのも、「歩く」という動詞である。原文により、新しく転校して来た又三郎が先生の後ろについて歩く様子である。

『日本国語大辞典』では、「すばすば」について、「さかんにタバコを吸うさまを表す語。」の他に、「たやすく、またはためらわずに、物事を行なうさまを表す語。」との解釈が述べてある²⁴¹。また『宮沢賢治のオノマトペ集』では、栗原がこの例文について以下のように述べている。

急に姿が見えなくなった転校生の三郎が、先生の後ろについて歩いてくるのが見えました。みんなの視線を気にする様子もなく、すまして歩く転校生は、不思議な存在感を示しているようです²⁴²。

「みんなの視線を気にする様子もなく、すまして歩く」から見ると、前掲した「すばすば」に対する解釈の「たやすく、またはためらわずに、物事を行なうさま」と相似しているのではないかと思われる。

また、『賢治オノマトペの謎を解く』では、田守が以下のように述べている。

「すばすば切る」の場合のように、切れ味がよく何の抵抗もなく切れることを表す「すばすば」本来の意味から連想される「スムーズな動作」を利用したためである。軽快で小気味よく気取って歩く姿が想像できる²⁴³。

四種の訳文では、王曉燕が「すばすば」を「一本正经」に訳している。「一本正经」は、「まじめくさっている。しかつめらしい」という意味である²⁴⁴。この訳は、又三郎が小学生でありながら、大人びるというイメージを伝えていると考えられる。周龍梅、彭懿が、「すばすば」を「从容不迫」に訳している。「从容不迫」というのは、「悠揚迫らぬさま。落ち着きはらってあわてない様子」という意味である²⁴⁵。この訳は、又三郎が新しく転校してきたが、落ち着いているという意味を強調している。王曉燕と周龍梅、彭懿の訳文は言葉の意味は異なるが、いずれも又三郎という人物が、大人びる、落ち着くという性格を強調しているのである。ただし、前者の訳は、やや風刺的である。

一方、徐華瑛と顔翠が二人とも「すばすば」を「亦歩亦趨」と訳している。「亦歩亦趨」は、『日中辞典』により、以下のように述べてある。

師匠が歩けば弟子も歩き、師匠が走れば弟子も走る。＜喩＞定見がない；何もかも人に同調して機嫌をとる。人の尻馬に乗る²⁴⁶。

つまり、この「亦歩亦趨」は比喩的に、定見がないという意味である。しかし、これは先述した二人の訳とのずれが見られる。栗原説を基準とすれば、「みんなの視線を気にする様子もなく、すまして歩く」に近い訳は、周龍梅、彭懿訳の「从容不迫」だと考えらる。一方、田守説を基準とすれば、「軽快で小気味よく気取って歩く」に近い訳は、王曉燕訳の「一本正经」だと考えられる。

(4)オノマトペ：「のしりのしり」

出典：「虔十公園林」409-12

原文：

「すると平二も少し気味が悪くなったと見えて急いで腕を組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまひました。」²⁴⁷

訳文：

①周龍梅訳：

这时，平二也觉得害怕了，连忙交叉双臂，迈着大步消失在浓雾中了。

②徐華瑛訳：

平二眼见情势不对，连忙抱着胸偷偷地往雾中走去。

③王新禧訳：

平二见此情形，开始感到害怕，急忙缩回手，两臂抱在胸前，在大雾中疾步离去。

④顔翠訳：

这时，平二也感到有些害怕了，急忙抄起胳膊，大步流星地消失在浓雾之中。

対訳表 4-22：「のしりのしりとあるいて」

訳者	オノマトペ+動詞	訳文
周龍梅訳 (2009)	<u>のしりのしり</u> とあるいて	<u>迈着大步</u>
徐華瑛訳 (2012)	<u>のしりのしり</u> とあるいて	<u>偷偷地</u> 走着
王新禧訳 (2012)	<u>のしりのしり</u> とあるいて	<u>疾步</u>
顔翠訳 (2015)	<u>のしりのしり</u> とあるいて	<u>大步流星地</u>

分析：

「のしりのしり」の解釈に関しては、『大辞林』、『大辞泉』などの国語辞書には掲載されていないが、『日本国語大辞典 第二版』により以下のように述べてある²⁴⁸。

力強くゆっくりゆっくりと歩くさまを表す語。のっしのっし。のしのみ。*良人の自白(1904-06)〈木下尚江〉続・二・二「与三は顧み勝ちにノシリノシリと表庭へと歩を運んだ」

しかし、ここでは、「のしりのしりとあるいて」の翻訳を見ると、訳者4人とも「力強くゆっくりゆっくりと歩く」という意味に訳していない。周龍梅、王新禧、顔翠の三人は、いずれも「すたすた歩く」というように訳している。また、徐華瑛は「こそこそ歩く」という意味で取り扱っている。

(5)オノマトペ：「ばしゃばしゃ」

出典：「風の又三郎」320-7

原文：

「向ふのの少し小高いところにてかてか光る茶いろの馬が七疋ばかり集ってしっぽをゆるやかにばしゃばしゃふつてゐるのです。」²⁴⁹

訳文：

①王曉燕訳：

不遠處的坡上，七匹身上油亮亮的茶褐色的馬正悠閑地甩着尾巴。

②周龍梅、彭懿訳：

里面的小山坡上有七匹駿馬正在悠閑地甩動着尾巴，棕色的馬毛油光靚亮。

③徐華瑛訳：

前方的緩坡上，有大约七匹披着油亮棕毛的馬聚在一起，悠閑地甩動着尾巴。

④顔翠訳：

只見前方高坡上聚集着七匹高頭大馬，棕色的毛皮油光發亮，馬正悠閑地甩動着尾巴。

対訳表 4-23：「ばしゃばしゃ」

訳者	オノマトペ	訳文
王曉燕訳(2007)	ばしゃばしゃ	悠閑地
周龍梅、彭懿訳(2009)	ばしゃばしゃ	悠閑地
徐華瑛訳(2012)	ばしゃばしゃ	悠閑地
顔翠訳(2015)	ばしゃばしゃ	悠閑地

分析：

『日本国語大辞典』では、「ばしゃばしゃ」について「(1)水面などをたてつづけにたたいたり、水が物に打ち当たって飛び散ったりする音を表す語。(2)陽気だけたましい様を表す語。²⁵⁰」と書かれている。また、『賢治オノマトペの謎を解く』では、田守が「馬がしっぽをばしゃばしゃふる」について、「馬が尻尾を振ったときの動きが、何かが水面に打ち当たったり、水がものに打ち当たったりしたときに飛び散る水飛沫によく似ている。²⁵¹」と解釈している。

つまり、宮沢賢治は「水面を叩く」という様子を「馬がしっぽをふる」に比喩的に用いたということである。「ばしゃばしゃ」という水面を叩く音は、中国語の象声詞「吧唧吧唧地」と対応している²⁵²。宮沢賢治は比喩的に「ばしゃばしゃ」で「馬がしっぽをふる」様子を描写したことが想像できる。しかし、「ばしゃばしゃ」に対する中国語の「吧唧吧唧地」で「馬がしっぽをふる」様子に用いるのなら、正しい表現にはならない。対訳表4-23で示したように、四人とも「ばしゃばしゃ」を「悠閑地」と訳している。この「悠閑地」は、「生活、表情などがゆったりしている。のんびりしている²⁵³」という意味である。おそらく、訳者たちは、馬がしっぽをふる様子を「のんびりしている」と考えているので、意識で施されたというわけである。ここから見ると、日本語オノマトペは、作者の想像力に応じて、同じオノマトペで多様な物事の様子を描写することができるという傾向がある。通常の対象と異なりながらも、日本語母語話者には、特別な感覚を与え、印象深くさせると思われる。一方、中国語の象声詞では、対象が異なると修飾しかねる。使用する範囲も限られる。多様性に欠けると言える。

(6)オノマトペ：「もにやもにや」

出典：「風の又三郎」311-14

原文：

「それはみんなは先生にはいつでも「お早うございます」といふやうに習ってゐたのですがお互いに「お早う」なんて云つたことがなかつたのに又三郎にさう云はれても一郎や嘉助はあんまりにはかたがた又勢がいののでたうとう臆せてしまつて一郎も嘉助も口の中でお早うといふかほりにもにやもにやと云つてしまつたのでした。」²⁵⁴

訳文：

①王曉燕訳：

原因很简单，虽然大家见到老师时都说“老师早”，但互相之间并没有这样的习惯，又三郎的招呼打得太突然了。孝一和嘉助虽然口中也想说声“早”，但是胆子不够大，只发出了一些嘟嘟囔囔的声音。

②周龍梅、彭懿訳：

虽然大家都学过上向老师道“早上好”，但同学们之间却从未这样打过招呼。现在被风又三郎突然精神抖擞地这么一说，一郎和嘉助都措手不及了，他们也想说“早上好”，可又说不出口，嘴里嘟嘟囔囔地不知说了些什么。

③徐華瑛訳：

因为大家都只学到要随时和老师道早安问好，彼此间却从来不曾说过“早安”。被风之又三郎突然这么精神十足的一喊，一郎和嘉助反倒怯场了。原本的“早安”两个字于是变成了两人含糊不清的口中呢喃。

④顔翠訳：

其实大家不是故意不搭理他，而是虽然大家每天都会向老师道早安，但是同学之间从来没有这样打过招呼。所以三郎突然跟他们道早安，一郎和嘉助也愣住了，害臊得只能在嘴巴里咕哝着，那句“早安”却怎么也说不出口。

対訳表 4-24：「もにやもにや」

訳者	オノマトペ	訳文
王曉燕訳（2007）	もにやもにや	嘟嘟囔囔
周龍梅、彭懿訳（2009）	もにやもにや	嘟嘟囔囔
徐華瑛訳（2012）	もにやもにや	含糊不清的口中呢喃
顔翠訳（2015）	もにやもにや	咕哝

分析：

「もにやもにや」というオノマトペは、『日本国語大辞典』にも収録されていない。『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』では「口の中で小さく何かよく聞きとれないことをつぶやき続けるさま。むにやむにや。にやもにやも。²⁵⁵」と書かれている。また、『賢治オノマトペの謎』では、田守が「風の又三郎」にある「もにやもにや」を例文として説明していないが、同じく宮沢賢治の童話作品である「祭の夜」において、「もにやもにや云う」という使い方を以下のように解釈している。

賢治独特の「もにやもにや」は慣習的な「むにやむにや」から「む」を「も」に、つまり母音「う」を「お」に変える法則によって派生したと仮定できる。「むにやむにや」も「もにやもにや」も不明瞭な話し方を描写する。……賢治は「非常に不明瞭な話し方であること」を強調したいがために、あえて「もにやもにや」という非慣習的なオノマトペを使ったと推察される²⁵⁶。

つまり、「もにやもにや」は「むにやむにや」に近いということである。ただし、後者より、語気が強い。原文により、一郎と嘉助は「お早う」と又三郎に言おうとしたが、慣れていないこともあり、いきなり挨拶されたので、結局、はっきりとした声が出せなかったという場面である。対訳表 4-24 で示したように、王曉燕と周龍梅、彭懿が「もにやもにや」を「嘟嘟囔囔」と訳している。この「嘟嘟囔囔」というのは、中国語の動詞である「嘟囔」を重ね、訳文では形容詞として、声を修飾している。「嘟囔」は「続け様に独り言を言う。²⁵⁷（筆者訳）」という意味である。顔翠が「もにやもにや云う」を「咕哝」と訳している。この「咕哝」も中国語の動詞であり、意味は「小声で呟く²⁵⁸（筆者訳）」で

ある。一方、徐華瑛が「もにやもにや」を「含糊不清的口中呢喃」と訳している。この訳文はフレーズによっての意識であるが、「呢喃」という言葉は中国語の擬声語である。

『現代漢語辞典 第六版』により、「呢喃」は「(1)形容燕子的叫聲。(筆者訳：ツバメの鳴き声) (2)〈書〉形容小声说话的声音。(筆写訳：書き言葉。小声で話すさま)²⁵⁹」という意味である。従って、「もにやもにや」に対する四種の訳文はいずれも、はっきりとした話し方ではないのが分かった。しかし、「嘟嘟囔囔」の方は、続け様というのを強調するので、むしろ、「ぶつぶつ」というオノマトペに相応しいのではないかと思われる。

(7)オノマトペ：「ざくざく」

出典：「風の又三郎」351-1

原文：

「それから金だらひを出して顔をぶるぶる洗ふと戸棚から冷たいごはんと味噌をだしてまるで夢中でざくざく喰べました。」²⁶⁰

訳文：

①王曉燕訳：

拿出脸盆洗完脸，然后从橱柜里拿出凉米饭和酱汤，闷头吃了起来。

②周龍梅、彭懿訳：

又用铜盆里的水稀里哗啦地洗了把脸，然后就从橱柜里拿出冰凉的米饭狼吞虎咽地吃了起来。

③徐華瑛訳：

接着又取出铝脸盆，匆匆洗把脸后便拿出菜厨里的冷饭和味噌，埋头狼吞虎咽起来。

④顔翠訳：

然后他拿出一只铝制面盆，胡乱洗了把脸，又从橱柜里头取出冷掉的米饭和味噌汤，梦游般吃了起来。

対訳表 4-25：「ざくざく」

訳者	オノマトペ	訳文
王曉燕訳 (2007)	ざくざく	なし
周龍梅、彭懿訳 (2009)	ざくざく	狼吞虎咽地
徐華瑛訳 (2012)	ざくざく	狼吞虎咽
顔翠訳 (2015)	ざくざく	なし

分析：

『日本国語大辞典』によると、「ざくざく」は(副詞の場合)「(1)刻んだり、踏みつけたりする力強い音、粗い粉状のものが多く集まって触れあう音にいう。(2)金などがたくさんあるさまを表す語。」²⁶¹と書かれている。通常、擬音語として使われるのであるが、ここは、「ざくざく喰べる」という使い方である。食事する様子を修飾している。『賢治オ

『オノマトペの謎を解く』では、「ざくざく」について、田守が「たくさんのご飯を一気にかき込む動作を描写している。」²⁶²と述べている。また、山形県南置賜郡、米沢市の方言として、「よく煮えていない豆を食べるときの歯触り。」²⁶³という解釈もある。

対訳表 4-25 で示したように、王晓燕と顔翠二人とも「ざくざく」の翻訳を施していない。それに対し、周龍梅、彭懿と徐華瑛は、「ざくざく」を「狼吞虎咽」と訳している。「狼吞虎咽」というのは、「食事を大急ぎでがつつかきこむさま。」²⁶⁴という意味である。これは、田守説と一致する。しかし、この「ざくざく」は、ご飯をかきこむ様子を強調するか、方言と同様に、原文にある「冷たいごはんを喰べる」時の歯触りを形容するかが、はっきりと判断できない。一方、ご飯を盛んにかきこむ様子を描写する日本語のオノマトペには、「がつつ」「むしゃむしゃ」、「もりもり」、「ぱくぱく」などがある。大抵意味が相似しているが、細かく説明すれば、それぞれ異なる。しかし、中国語においては、盛んに食べるさまを、この「狼吞虎咽」という熟語で形容するのが一般的である。

ここから見ると、日本語オノマトペ、特に擬態語の場合は、細くありのままに描写するという写実的な傾向がある。さらに、宮沢賢治の独特の使い方から見ると、臨場感を与えるために、使用する範囲を越えようとも、ありのままに伝えるという特徴があるのではないかと思われる。

5 おわりに

本章では、『宮沢賢治全集』から、四種の現代漢語訳がある童話作品を十二本選び出し、作品ごとにすべてのオノマトペを抽出した上で、直訳、意識それぞれの特徴及び翻訳上の問題点について、日中オノマトペの比較を試みた。

直訳の特徴には、日本語の擬音語に相当する中国語の「象声詞」で翻訳するほか、日本語オノマトペの「A と」、「A っと」、「AB と」、「AB っと」、「ABC と」を漢数字「一＋～」の形で翻訳することが多い。これは、漢数字「一＋～」の形で構成した言葉は、時間の短さ、動作の素早さという性質を持っているからである。本論では、「～＋一声」と「一声＋～」の形で翻訳されているオノマトペに絞って、日中対照の視点から詳述した。

また、相似したオノマトペの現代漢語訳の境目を調査するため、十二本の童話作品から「震え」、「蹠踉めき」、「驚き」、「輝き」を表すオノマトペを項目別に抽出した。そして、オノマトペごとに、一文ずつを例に取り上げ、それぞれの日中対訳表を作った。さらに、意味が相似しているオノマトペのニュアンスを明らかにした上で、その現代漢語訳が如何なる表現で反映させているかについて、分析してみた。その結果、意味が相似したオノマトペにある微妙な区別が、全体的な文脈には大きな障害を与えない。ただし、これらのニュアンスを疎かにしたことこそ、訳のバリエーションが生じやすいのに起因すると考えられる。

本章の後半では、主に「オノマトペ+動詞」をペアとして中国語の動詞に翻訳したパターンについて、意識の視点から論じてみた。特に、擬態語が強調するものを中国語の動詞を通じて翻訳するという傾向がある。品詞的に言えば、副詞となった擬態語は、中国語の動詞でそのイメージを伝える。すなわち、中国語においては、動詞で擬態語のイメージを含めて物事の様子を描写するという特徴があると言える。

さらに、「すばすば吸う」→「すばすば歩く」、「馬がぼくりぼくりと歩く」→「ぼくりぼくりと芝を起こす」などというような、対象外にも使用する宮沢賢治の独特のオノマトペとその現代漢語訳の比較について、その翻訳上の問題点を具体的な例に取り上げ、分析してみた。その結果、日本語オノマトペ、特に擬態語の場合は、細くありのままに描写するという写実的な傾向がある。さらに、宮沢賢治の場合は、比喩的な手法で、同一のオノマトペで他の対象に擬えるという特徴があると言える。

今後の課題としては、「ぐるぐる」→「ぐるぐるぐる」、「がやがや」→「がやがやがやがや」などのような、通常オノマトペを重複したオノマトペに対する現代漢語訳がいかん表現されているのかについて検討する。また、「雲がぎらぎら輝く」→「ぎらぎらの雲」というような、通常副詞となったオノマトペを名詞として使われる場合、その現代漢語訳はいかん反映している。実際、このような構文機能は中国語の連体修飾語の語順と案外一致する。むしろ、このような特別な使い方こそ中国語に訳しやすいと言える。

終章

本論文では、以下のことが明らかになった。

序章では、研究の意義、取り扱う資料、研究方法について説明した。

第一節において、日本語、漢語、満洲語三言語のオノマトペの定義について検討した。

日本語のオノマトペに関しては、これまで出版された日本語オノマトペ辞典および日本語学辞典・言語学辞典などの定義を参考にし、「オノマトペとは」についてまとめた。これまで、オノマトペに関する研究においては、擬音語、擬声語、擬態語、象徴詞などの名称が用いられているが、天沼（1974）は、擬音語と擬態語の区別がはっきりと付けにくいいため、それらをいっしょに「擬音語・擬態語」としている。それに対し、金田一（1978）は、擬態語をさらに、無生物の状態を表す擬容語と、人間の心の状態を表す擬情語に下位分類している。また、天沼（1974）『擬音語・擬態語辞典』は、漢語由来のオノマトペや、古語や方言のオノマトペなどはとりあげられていない。

山口（2003）『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』も「擬音語・擬態語辞典」という書名になっているが、小野（2007）『擬音・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』からは「オノマトペ辞典」という名前がつけられている。名称の変遷に関しては、『日本語学大辞典』で、「音まね語」「模写語」「擬声語」「象徴辞」「象徴詞」「音象徴語」「象徴音」とこれまでさまざまな名称が提案されてきたことや、どれも定着するには至らなかったことなどが指摘されている。現在はオノマトペという用語が定着しているようだが、あえて外来語のオノマトペにしたのは、モダリティやテンスなどの用語の外来語化の一般的な傾向とともに、おそらく、オノマトペそのものの語源の意味を考慮した一面が窺える。直接的にはフランス語からの借用語であるオノマトペは、おおもとはギリシア語にさかのぼり、「名付ける」「造語する」という意味であったという面から考えてみれば、擬音語・擬態語、象徴詞などよりも、オノマトペという用語のほうがふさわしいように思われる。また、各辞典の立項を見ると、『国語学大辞典』（1980年）、『言語学大辞典 術語篇』（1995年）、『日本語大事典』（1995年）、『日本語学大辞典』（2018年）のうち、「オノマトペ」という項目を立てているのは、『日本語学大辞典』のみであった。『国語学大辞典』と『言語学大辞典 術語篇』は「擬声語」「擬態語」を立項しており、『日本語大事典』では「象徴詞」のみを見出しとしている。

漢語のオノマトペに関しては、擬音語に相当する「象声詞」という用語があるが、野口（1995）が指摘しているように、擬態語にあたる用語は中国語の文法用語としては特にないようである。しかし、「热乎乎（ほかほかしている）」、「滑溜溜（つるつるしている）」など ABB 型の形容詞は一種の擬態語とされている。呂（2015）も「象声詞」を形容

詞の一つの類として扱ってよいと述べている。「象声詞」は形容詞として使用されるのが一般的であるというのは、現代語の場合をさす。『言語学大辞典』では、伝統的に「連語」とよばれていたものが擬態語に当たると書かれている。形態的に畳音のみの「皎皎」、韻を合わせた形である「朦朧」は「畳韻連語」と呼ばれ、頭の子音は同じであるが、韻を変化させている「参差」は「双声連語」と呼ばれる。なお、本論の第二章で検討した『詩経』にみられる漢語のオノマトペの形態はほとんど単純な畳音のAA型であった。

満洲語のオノマトペは、季永海・劉憲景・屈六生（1986）では、「摹擬詞」と呼ばれている。また、序章で述べたように、形態的な面からすると、満洲語のオノマトペは、日本語のオノマトペと似ている。「はっきりと」「ぐるぐると」のように、日本語のオノマトペは、後ろに「と」がつく場合がある。満洲語のオノマトペも同じように、「kos seme（げっそりと瘦せる）」「kang seme（がやがやと喋る）」など、日本語の「と」に相当する「seme」がつくのが満洲語のオノマトペの特徴の一つとされている。

第二節は、日本語オノマトペの研究史についてまとめた。

第三節においては、これまで行われてきた日本語オノマトペの分類を紹介した。

天沼（1974）は、現代日本語のオノマトペを一拍、二拍、三拍、四拍のものに分け、それぞれ異なる拍をX、Y、Z、Wで表し、そして、特殊音は、促音をt、リ音をr、撥音をn、長音を：で示し、計31の型に分類している。田守（1999）は、オノマトペを「1モーラを基本形に持つもの」と「2モーラの語基を持つもの」に大きく分け、そして、Cを子音、Vを母音、Qを促音、Nを撥音、「り」を「ri」で表して、簡潔に7つの型に分類している。浅野・金田一（1978）『擬音語・擬態語辞典』では、漢語由来の言葉もオノマトペとした上で、漢字一字のもの、漢字二字のものなどの11種類の型に細かく分けている。

次に、第一章では、満文『玉堂字彙』から見た満洲語のオノマトペを中心に、その形態的な分類および特徴について検討した。

第一節において、満文『玉堂字彙』におけるオノマトペを形態的に大きく「単純形式」と「双語形式」の2種類に分け、それぞれの分布状況をグラフで示した。また、満洲語のオノマトペの形態上の大きな特徴と見なされている「seme」「sembi」について、それらの違いを明らかにした上で、「と」との類似性を検討した。

第二節においては、「seme」「sembi」を伴うオノマトペを中心に、その意味分類を行った。大きく生物と無生物に分けられるのだが、前者の生物は、さらに、人間、動物、植物に分けられ、人間が発する声と音、人間の行為と様態、動物の鳴き声と音、植物の音

などを描写するオノマトペがある。一方、無生物は、生物以外の、生命がない物をさし、物のオノマトペの他に、水や雨、風などの自然現象のオノマトペがあげられる。

第三節においては、満文『玉堂字彙』から抜き出した語尾が b, k, ng で終わる単純形式のオノマトペについて、満洲語のオノマトペの日本語訳（寺村訳）をもとにして、河内『満洲語辞典』を参考しながら、擬音と擬態という視点から再分類した。そして、唯一の先行研究である暁春（2015）「満語擬声詞刍議」の分析を参考とし、その相違点をまとめた。また、日本語オノマトペの持つ特徴と同様に、擬音語、擬態語に分類し、さらに、形態から見れば（「seme」がついている）、満洲語オノマトペのようだが、意味的には日本語には直訳しにくいものを、「類似オノマトペ」に下位分類した。

第二章では、『唐五代言語辞典』『詩経』における漢語のオノマトペについて、漢和比較の観点から、重言型のオノマトペを主とし、意味的な分類を行った。そして、『詩経』における漢語のオノマトペがどれほど日本語の語彙として定着しているかを確認し、受容しやすいか否かを受容レベルで示した。

第一節は、当時広く流通していたと考えられる中古漢語の語彙が日本古典語のオノマトペに影響を与えたのではないかという視点からの基礎研究である。漢語には、「象声詞」という日本語の擬音語、または狭義の擬声語に相当するものはあるが、擬態という概念はない。しかし、日本語の擬態語に相当するものがないというわけではない。これまで行われてきた研究は、主に現代語を対象としており、中世・近代漢語を対象とした研究は少なかった。前半は、擬態語を中心とした意味的な分類を行うことによって、唐に見られる漢語のオノマトペの基礎研究を試みた。後半は、和漢比較の観点から、重言型のオノマトペを検討した。

第二節においては、中国の最も古い詩集である『詩経』にみられる漢語オノマトペについて、その意味分類を行った。形態に関しては、疊韻連語（「窈窕」など）、双声連語（「参差」など）、「若」がつく形（「沃若」など）の3つのタイプがみられるが、「悠悠」「囁囁」「滔滔」などのような重言型がもっとも多く、日本文学作品における使用例も多数ある。そこで、『詩経』310篇にあるすべてのオノマトペをまず擬音語と擬態語に分け、それぞれ、動物、植物、自然現象に下位分類した。『詩経』では漢語の重言型のオノマトペが多数確認できたため、動物、植物、自然現象を逐語的に分析し、受容レベルを確認した。第二節は、動物を対象とした漢語のオノマトペを検討したものである。

第三節においては、植物を対象とした漢語オノマトペについて検討した。それを擬音語と擬態語に分け、植物の種類にしたがって分類した。受容レベルを確認した上で、日本語としてもっとも定着しやすい漢語のオノマトペをとりだした。

第四節においては、風や雷といった自然現象を対象とした漢語のオノマトペについて検討した。

第三章では、奈良時代を代表する日本の文学作品である『萬葉集』における古語のオノマトペについて検討した。日本語で、もっとも古いオノマトペは、『古事記』にみられるが、『萬葉集』にも「ゆら」「ゆた」「さや」といった AB 型の古語オノマトペを確認できたので、『萬葉集』全四巻・4516 首の和歌からオノマトペを集め、その意味分類を行った。

第一節においては、主に「こご」「ほろ」「ゆた」「しの」「さや」の五語を中心に取上げ、『萬葉集』における AB 型の擬態語について検討した。『全訳古語辞典』『角川古語大辞典』『日本国語大辞典』によりそれらの意味を確認し、各語を含む単語群を表で示した。「こご」を例にすると、その単語群は「こごふ」「こごし」「こごる」「こごむ」「こごなる」である。この章では、AB 型を中心に検討してきたが、「ゆた」に対する ABA 型の「たゆた」との差異についても触れた。「しの」と ABB 型の「しのの」、「さや」と ABAB 型の「さやさや」なども同様である。

第二節においては、『萬葉集』における AB 型の擬音語について検討した。主に「そよ」「とど」「ひし」「ゆら」の 4 語を中心に、それぞれの意味、派生した単語を確認した。また、この章の第一節と同様に、「ゆら」に似ている ABB 型の「ゆらら」との差異についても検討した。

第一章、第二章、第三章は、満洲語、漢語、日本語の古語のオノマトペを中心に検討したものである。付章では、古語ではなく、辞典にも載っていないオノマトペを多数使用する宮沢賢治の童話作品に見られるオノマトペを日中比較の観点から検討した。オノマトペの語源であるギリシア語の「造語する」という名にふさわしい宮沢賢治の特殊なオノマトペが、どのように現代漢語に訳されているかを確認し、その現代漢語の特徴について検討した。また、「ざぶんと」「どぶんと」「どぼんと」といったような、意味が相似しているオノマトペの現代漢語訳を確認し、その問題点を指摘した。

宮沢賢治の児童文学を例に取り、賢治の童話作品におけるオノマトペとその中国語訳を照らし合わせることにより、翻訳されているオノマトペを直訳と意識に分けて検討した。また、宮沢賢治の童話作品を通じて日中オノマトペの差異を明らかにすることを目的として、宮沢賢治のオノマトペの特徴を列挙し、その現代漢語訳と比較することを試みた。調査資料と研究方法に関しては、4 種の現代漢語訳がある宮沢賢治の童話作品を 12 本選出し、原文からすべてのオノマトペを抽出した上で、作品ごとの対訳を表で示して分析した。これによって、宮沢賢治の童話作品におけるオノマトペの現代漢語訳の特徴を明らかにすることができた。前半は、主に直訳と意識に分けて分析を行い、それぞれの特徴をまとめた。直訳の特徴には、日本語の擬音語に相当する中国語の「象声詞」に対応するほ

か、日本語オノマトペの「Aと」「Aっと」「ABと」「ABっと」「ABCと」は、漢数字「一十～」の形に翻訳することが多い。これは、漢数字「一十～」の形からなる言葉が、時間の短さ、動作の素早さという性質を持っているからである。そして、意味が似ているオノマトペのニュアンスを明らかにした上で、そうしたニュアンスの違いがどのような現代漢語訳で表現されているかを分析した。その結果、意味の似ているオノマトペの微妙な違いは、全体的な文脈には大きな障害を与えない。ただし、これらのニュアンスを疎かにしたことこそ、訳のバリエーションが生じやすいのに起因すると考えられる。後半は、主に日本語オノマトペが「オノマトペ+動詞」の組み合わせによって中国語に翻訳されているものについて、意識の視点から論じた。中国語では、動詞に擬態語のイメージを含め、物事の様子を描写するという特徴があると言える。

本論文は、日本語、満洲語、漢語、三言語のオノマトペを中心とした言語接触の基礎研究である。主に、満和比較、漢和の比較の視点から、満文『玉堂字彙』、漢文『詩経』、和文『萬葉集』および宮沢賢治の童話作品におけるオノマトペについて検討した。

古代から現代に至るまで、日本語のオノマトペは音韻上でも、形態上でも絶えず変化し、使用する対象（意味）も変わってきた。「さらさら」を例にすれば、「風が葉っぱをサラサラと鳴らす」「川がサラサラと流れる」「お茶漬けをサラサラと食べる」「紙にサラサラと書く」「サラサラとした髪」などさまざまな意味用法がある。しかし、「さらさら」は、最初から多義語ではないはずだと思われる。どれが先駆けて使用されたのかに関しては、文献を遡り、一つ一つ確認しないと断言しかねる。最初は音声の描写として生まれたのち、物事の状態としても使用され始めたと思われるが、新たなオノマトペが生まれる際に、その背景または原点とされるものが唯一である。そこから、物事の状態など使用範囲が徐々に広がり、原点と似たような場面でも使われ始めるのではないかと思われる。

今後は、本論文を、オノマトペを中心とした言語接触の研究を土台にし、さらに幅広く資料を収集した上で、よりいっそう精密な分析を行っていきたいと思う。

注

- 1 小野正弘(2017)『擬音・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 株式会社小学館 p7
- 2 那須昭夫(2008)「特集：おのまとペ 新しく生まれるオノマトペ-新造語の音韻特徴-」
『国文学：解釈と教材の研究』14号 學燈社編 p80
- 3 寺村政男(2007)『東アジアにおける言語接触の研究』p529
- 4 寺村政男(2007)『東アジアにおける言語接触の研究』p529
- 5 河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)『満洲語文語入門』p137
- 6 小野正弘(2009)『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』平凡社 pp139~161
- 7 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)『言語学大辞典第6巻術語篇』p267
- 8 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)『言語学大辞典第6巻術語篇』p267
- 9 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)『言語学大辞典第6巻術語篇』p271
- 10 国語学会(1980)『国語学大辞典』p214
- 11 国語学会(1980)『国語学大辞典』p214
- 12 佐藤武義・前田富祺(2014)『日本語大事典(上)』p1081
- 13 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p86
- 14 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p86
- 15 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 pp86~87
- 16 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p87
- 17 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p87
- 18 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p87
- 19 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p87
- 20 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p87
- 21 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p87
- 22 日本語学会(2018)『日本語学大辞典』 株式会社 東京堂出版 p87
- 23 野口宗親(1995)『中国語擬音語辞典』 株式会社 東方書店 pix
- 24 呂淑湘(2015)『現代漢語八百詞 増訂本』 商務印書館出版社
- 25 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)『言語学大辞典第6巻術語篇』p272
- 26 季永海・劉憲景・屈六生(1986)『満語語法』民族出版社 pp277~280
- 27 鈴木朗著(1816)『言語四種論 雅語音聲考・希雅』小島俊夫・坪井美樹(1979)解説
pp39~53
- 28 小林(1941)『国語学の諸問題』「音義説と音聲象徴」岩波書店 p93
- 29 小林好日(1941)『国語学の諸問題』「音義説と音聲象徴」岩波書店 p95
- 30 小嶋孝三郎(1972)『現代文学とオノマトペ』pp33~34
- 31 小林好日(1941)『国語学の諸問題』「音義説と音聲象徴」岩波書店 p105
- 32 金田一春彦(1951)「コトバの旋律」『国語学V』p54
- 33 金田一春彦(1951)「コトバの旋律」『国語学V』p55
- 34 金田一春彦(1951)「コトバの旋律」『国語学V』pp55~57
- 35 小野正弘(2017)『擬音・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 株式会社小学館 p7
- 36 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1989)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』
p1058
- 37 津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20講』p1
- 38 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1992)『言語学大辞典 第4巻 世界言語編 下-2』
p204
- 39 曉春(2015)「満語擬声詞刍議」『満語研究 MANCHU STUDIES』2015年第1号
2015.02.11

- 40 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p1012 (šor : 雨がさっさ
っさと降る音。)
- 41 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p894 (pes pas : ぺかぼ
か。)
- 42 暁春 (2015) 「満語擬声詞刎議」『満語研究 MANCHU STUDIES』2015 年第 1 号 p20
- 43 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p542
- 44 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』大学書林 p68
- 45 ここでいう『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』-研究と翻刻・繙訳』は、子集から戌集ま
での 11 集を指す。「原典資料」を参照。
- 46 『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』亥集-研究と翻刻・繙訳』は未発行なので、対象外と
する。
- 47 C : consonat 子音をさす。
- 48 V : vowel 母音をさす。
- 49 暁春 (2015) 「満語擬声詞刎議」『満語研究 MANCHU STUDIES』2015 年第 1 号 p20
- 50 河内良弘・清瀬儀三郎則府 (2002) 『満洲語文語入門』(文法篇 : 象徴詞) p136
- 51 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』p68
- 52 羽田亨 (1972) 『満和辞典』国書刊行会 p365
- 53 福田昆之 (2008) 『補訂満洲語文語辞典』pp709~710
- 54 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』pp929~930
- 55 日本国語大辞典編集部 (2001) 『日本国語大辞典 第二版 第九卷』小学館 pp875~
876
- 56 満洲語の日本語訳は、寺村政男による訳である。
- 57 O_満 : 満洲語のオノマトペをさす。
- 58 O_日 : 日本語のオノマトペをさす。
- 59 V_日 : 日本語の動詞をさす。
- 60 V_満 : 満洲語の動詞をさす。
- 61 河内良弘・清瀬儀三郎則府 (2002) 『満洲語文語入門』「満洲語について」p viii
- 62 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』「満洲語とは」p1
- 63 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』「第 10 講-2 副詞」p68
- 64 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』「第 10 講-2 副詞」p68
- 65 河内良弘・清瀬儀三郎則府 (2002) 『満洲語文語入門』「文法篇 18-象徴詞」p136
- 66 寺村政男著『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』-研究と翻刻・繙訳』(子集~戌集) 原典
資料を参照。
- 67 暁春 (2015) 「満語擬声詞刎議」(筆者訳 : 「満州語の擬声語についての卑見」)
- 68 愛新覺羅瀛生 (2004) 『満語雑識』p120
- 69 愛新覺羅瀛生 (2014) 『満語口語音典』p28
- 70 ここでの「kab」の日本語訳は、河内良弘『満洲語辞典』p697 に参照。
- 71 羽田亨 (1972) 『満和辞典』国書刊行会 p365
- 72 福田昆之 (2008) 『補訂満洲語文語辞典』pp709~710
- 73 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』pp929~930
- 74 日本国語大辞典編集部 (2001) 『日本国語大辞典 第二版 第九卷』小学館 pp875~
876
- 75 暁春 (2015) 「満語擬声詞刎議」『満語研究 MANCHU STUDIES』2015 年第 1 号
- 76 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p452
- 77 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p712
- 78 暁春 (2015) 「満語擬声詞刎議」『満語研究 MANCHU STUDIES』2015 年第 1 号 p20
- 79 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p353
- 80 暁春 (2015) 「満語擬声詞刎議」『満語研究 MANCHU STUDIES』2015 年第 1 号 p20

-
- 81 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p717
- 82 河内良弘 (2014) 『満洲語辞典』松香堂書店 2014.06.30 p717
- 83 本稿で用いた『日本国語大辞典』は、Japan Knowledge バージョンである。
<https://japanknowledge.com/lib/search/basic/>
- 84 劉堅・江藍生 (1997) 『唐五代語言詞典』上海教育出版社出版 1997.11
- 85 ここで言う「漢語オノマトペ」は、中国から借用した日本語のオノマトペを指し、本稿で取り扱う「漢語のオノマトペ」は、中国語における固有のオノマトペを指す。
- 86 耿二玲 (1986) 『漢語擬声詞』湖北教育出版社出版 1986.12 pp21-26
- 87 耿二玲 (1986) 『漢語擬声詞』湖北教育出版社出版 1986.12 p26
- 88 劉玲 (2015) 『漢語オノマトペの受容について』学苑出版社出版 2015.1 p31
- 89 劉玲 (2015) 『漢語オノマトペの受容について』学苑出版社出版 2015.1 p32
- 90 本稿で用いた『日本国語大辞典』は、Japan Knowledge バージョンである。
<https://japanknowledge.com/lib/search/basic/>
- 91 目加田誠 (1985) 『詩経研究』目加田誠著作集第一巻 pp155~156
- 92 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p71 注釈 13
- 93 目加田誠 (1960) 『詩経・楚辞』p230 注釈八
- 94 目加田誠 (1960) 『詩経・楚辞』p90 注釈
- 95 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p306 注釈 8
- 96 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p141 注釈 12
- 97 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p213
- 98 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p350 注釈 4
- 99 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p350 注釈 3
- 100 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p486
- 101 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p324
- 102 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p177
- 103 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p52
- 104 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p468
- 105 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p177
- 106 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p178 注釈 8
- 107 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p427 注釈 13
- 108 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p496 注釈 7
- 109 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p141
- 110 目加田誠 (1960) 『詩経・楚辞』p59 注釈 13
- 111 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p51
- 112 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p51
- 113 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p51
- 114 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p210
- 115 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p210
- 116 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p208
- 117 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p154
- 118 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p154 注釈 6
- 119 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p274
- 120 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (下)・楚詞訳注』p218
- 121 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p239
- 122 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p239 注釈 2
- 123 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p285
- 124 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p143
- 125 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』p325

-
- 126 目加田誠 (1983) 『詩経訳注 (上)』 p141
- 127 小野正弘 (2009) 『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』 平凡社 pp139~161
- 128 「かわら」『副』 (多く「と」を伴って用いる) 堅い物が触れ合う音を表す語。からから。(『日本国語大辞典』)
- 129 「もゆらに」の意味は『全訳古語辞典 第四版』による。
- 130 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 131 小野正弘 (2009) 『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』 平凡社 p161
- 132 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館 1994. 4
- 133 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館 1994. 4
- 134 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館 1994. 4
- 135 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館 1994. 4
- 136 山口仲美 (2012) 「奈良時代の擬音語・擬態語」 『明治大学国際日本学研究』 第4巻 第1号 p4
- 137 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館 1994. 4 卷七 p259
- 138 山口仲美 (2012) 「奈良時代の擬音語・擬態語」 『明治大学国際日本学研究』 第4巻 第1号 p3
- 139 山口佳紀・神野志隆光 (1997) 『新編 日本古典文学全集 1』『古事記』 卷中 pp160~161
- 140 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 141 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 142 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 143 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 144 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤彦 (1994) 『角川古語大辞典』 第四巻 角川書店 p713
- 145 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 146 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤彦 (1994) 『角川古語大辞典』 第五巻 角川書店 p44
- 147 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 148 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤彦 (1994) 『角川古語大辞典』 第五巻 角川書店 p44
- 149 小島憲之・木下正俊・東野治之 (1994) 『萬葉集』「新編日本古典文学全集 6~9」 小学館
- 150 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤彦 (1994) 『角川古語大辞典』 第五巻 角川書店 p813
- 151 張迪 「近代中国における日本書籍の翻訳と紹介-19世紀末から20世紀初頭の概況とその特徴-」 (『言葉と文化』 10号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻 2009. 03)
- 152 徐一平・譙燕・呉川・施建軍 『日本語の擬音語・擬態語に関する研究』 (学苑出

- 版社 2010.03.01 pp36)
- 153 角岡賢一 『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』 (株式会社くろしお 2007.2.28)
- 154 笈寿雄・田守育啓 『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』 (株式会社勁草書房 1993.9.30)
- 155 笈寿雄・田守育啓 『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』 (株式会社勁草書房 1993.9.30)
- 156 徐一平・漁燕・呉川・施建軍 『日本語の擬音語・擬態語に関する研究』 (学苑出版社 2010.03.01)
- 157 呉川 『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』 (白亭社 2005.03.25)
- 158 王湘榕 「日中両国語における擬音語の対照研究：小説『ノルウェイの森』とその三種の中国語訳本を中心に」 (『人間文化創成科学論叢』15号 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 2012)
- 159 窪温子 「宮沢賢治のオノマトペの世界」 (『神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要』34号 神戸海星女子学院大学 1995 pp18)
- 160 大坪併治 『擬声語の研究』 ()
- 161 田守育啓 「宮沢賢治のオノマトペー慣習的オノマトペから音韻変化より派生した非慣習的オノマトペー」 (『人文論集』44号 兵庫県立大学 2009.03.25)
- 162 田守育啓 『賢治オノマトペの謎を解く』 (株式会社大修館書店 2010.09.15)
- 163 田守育啓 「宮沢賢治特有のオノマトペ：賢治独特の非慣習的用法」 (『人文論集』46号 兵庫県立大学 2011.03.29)
- 164 王冠華 「日本語の擬音語・擬態語の中国語訳の表現について」 (『経営研究』17号 愛知学泉大学 2004.03)
- 165 『宮沢賢治全集』(株式会社 筑摩書房 1986年)
- 166 境 忠一 『評伝・宮沢賢治』 (株式会社 桜楓社 昭和四十三年四月二十日)
- 167 山内 修『宮沢賢治 年表作家読本』 (株式会社 河出書房新社 一九八九年九月二十八日)
- 168 渡部芳紀『宮沢賢治大辞典』 (勉誠出版(株) 平成十九年八月十日)
- 169 年齢は、執筆時の年齢を指す。
- 170 王敏『宮沢賢治傑作選』 (中国社会科学出版社 2007年4月 pp9)
- 171 輿水優・島田亜実(2009)『中国語わかる文法』p123
- 172 輿水優・島田亜実(2009)『中国語わかる文法』p123
- 173 大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』 (株式会社 角川書店 1994年3月10日 pp3658)
- 174 『宮沢賢治全集5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp76)
- 175 『宮沢賢治全集5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp76)
- 176 翻訳の解決策：「カタ」は音訳であり、中国語の象声詞として定着されていない。その発音「kata」に近い象声詞は「咔嗒」または「咔哒」、「喀哒」である。発音はいずれも「kada」である。ここでは、「カタット」という堅いものが軽く触れ合う音に応じて、「味」(発音：「ka」)という一文字の象声詞に扱った方がいいのではないと思われる。
- 177 『宮沢賢治全集5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp75)
- 178 『宮沢賢治全集5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp52)
- 179 『宮沢賢治全集5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp76)
- 180 『宮沢賢治全集5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp66)
- 181 『宮沢賢治全集8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp23)
- 182 『宮沢賢治全集8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp30)
- 183 『宮沢賢治全集8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp50)

- 184 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp50)
- 185 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp46)
- 186 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp64)
- 187 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp65)
- 188 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp63)
- 189 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp250)
- 190 『現代漢語大辞典』 (上海辞書出版社 2009年12月)
- 191 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp251)
- 192 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp23)
- 193 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp374)
- 194 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp318)
- 195 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp83)
- 196 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp347)
- 197 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp339)
- 198 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp348)
- 199 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp303)
- 200 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp302)
- 201 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp153)
- 202 『現代漢語大辞典』 (上海辞書出版社 2009年12月)
- 203 『現代漢語大辞典』 (上海辞書出版社 2009年12月)
- 204 『宮沢賢治全集 5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp51)
- 205 『宮沢賢治全集 5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp51)
- 206 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp349)
- 207 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp24)
- 208 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp129)
- 209 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp66)
- 210 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp379)
- 211 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp185)
- 212 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp185)
- 213 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp60)
- 214 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp74)
- 215 『宮沢賢治全集 5』 (株式会社 筑摩書房 1986年3月25日 pp76)
- 216 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp403)
- 217 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp76)
- 218 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(株式会社 小学館 2007年10月31日 pp264)
- 219 『現代漢語大辞典』 (上海辞書出版社 2009年12月)
- 220 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp403)
- 221 『宮沢賢治全集 8』 (株式会社 筑摩書房 1986年1月28日 pp256)

- 222 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp159)
- 223 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp149)
- 224 『現代漢語辞典 第六版』 (商務印書館出版社 2012年6月 pp1105)
- 225 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp154)
- 226 『現代漢語辞典 第六版』 (商務印書館出版社 2012年6月 pp1024)
- 227 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp324)
- 228 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp405)
- 229 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp403)
- 230 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp349)
- 231 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp405)
- 232 『日本国語大辞典 第二版』第十二卷 (株式会社 小学館 2001年10月20日 pp64)
- 233 『日本国語大辞典 第二版』第十二卷 (株式会社 小学館 2001年10月20日 pp61)
- 234 田守育啓『賢治オノマトペの謎を解く』 (株式会社 大修館書店 2010年9月15日 pp210)
- 235 栗原敦監修、杉田淳子編『宮沢賢治のオノマトペ集』 (株式会社 筑摩書房 2014年12月10日 pp260)
- 236 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp323)
- 237 前田勇『江戸語大辞典 新装版』 (株式会社講談社 2003年4月25日 pp786)
- 238 『日本国語大辞典 第二版』第十卷 (株式会社 小学館 2001年10月20日 pp823)
- 239 田守育啓『賢治オノマトペの謎を解く』 (株式会社 大修館書店 2010年9月15日 pp221)
- 240 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp304)
- 241 『日本国語大辞典 第二版』第七卷 (株式会社 小学館 2001年7月20日 pp1018)
- 242 栗原敦監修、杉田淳子編『宮沢賢治のオノマトペ集』 (株式会社 筑摩書房 2014年12月10日 pp129)
- 243 田守育啓『賢治オノマトペの謎を解く』 (株式会社 大修館書店 2010年9月15日 pp9)
- 244 『中日辞典 第二版』 (株式会社小学館 2003年11月1日 pp1745)
- 245 『中日辞典 第二版』 (株式会社小学館 2003年11月1日 pp251)
- 246 『中日辞典 第二版』 (株式会社小学館 2003年11月1日 pp1775)
- 247 『宮沢賢治全集 6』 (株式会社 筑摩書房 1986年5月27日 pp409)
- 248 『日本国語大辞典 第二版』第十卷 (株式会社 小学館 2001年10月20日 pp807)
- 249 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp320)
- 250 『日本国語大辞典 第二版』第十卷 (株式会社 小学館 2001年10月20日 pp1107)
- 251 田守育啓『賢治オノマトペの謎を解く』 (株式会社 大修館書店 2010年9月15日 pp179)
- 252 『日中辞典 第二版』 (株式会社小学館 2003年11月1日 pp1526)
- 253 『中日辞典 第二版』 (株式会社小学館 2003年11月1日 pp1809)
- 254 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp311)
- 255 小野正弘『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』 (株式会社 小学館 2007年10月31日 pp490)
- 256 田守育啓『賢治オノマトペの謎を解く』 (株式会社 大修館書店 2010年9月15日

pp59～60)

²⁵⁷ 『現代漢語辞典 第六版』 (商務印書館出版社 2012年6月 pp319)

²⁵⁸ 『現代漢語辞典 第六版』 (商務印書館出版社 2012年6月 pp462)

²⁵⁹ 『現代漢語辞典 第六版』 (商務印書館出版社 2012年6月 pp942)

²⁶⁰ 『宮沢賢治全集 7』 (株式会社 筑摩書房 1986年12月4日 pp351)

²⁶¹ 『日本国語大辞典 第二版』 第五卷 (株式会社 小学館 2001年5月20日

pp1430)

²⁶² 田守育啓 『賢治オノマトペの謎を解く』 (株式会社 大修館書店 2010年9月15日

pp228)

²⁶³ 『日本国語大辞典 第二版』 第五卷 (株式会社 小学館 2001年5月20日

pp1430)

²⁶⁴ 『中日辞典 第二版』 (株式会社小学館 2003年11月1日 pp860)

文献目録

・満洲語オノマトペの部

原典資料：

- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』子集-研究と翻刻・繙訳』
語学教育フォーラム-27-号 大東文化大学語学教育研究所 2013. 01. 18
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』丑集-研究と翻刻・繙訳』
語学教育フォーラム-29-号 大東文化大学語学教育研究所 2014. 02. 28
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』寅集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第1号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2014. 10. 01
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』卯集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第2号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015. 05. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』辰集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第3号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015. 08. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』巳集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第4号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2015. 12. 25
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』午集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第5号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016. 04. 20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』未集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第6号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016. 07. 20
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』申集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第7号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2016. 10. 30
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』酉集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第8号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2017. 03. 31
- ・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』戌集-研究と翻刻・繙訳』
「水門（みなと）会」特刊叢書-第9号- 「水門（みなと）会-言葉と歴史」編集部
2017. 07. 20

・寺村政男『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』亥集—研究と翻刻・繙訳—附・部首別索引』
「水門（みなと）会」特刊叢書—第10号— 「水門（みなと）会—言葉と歴史」編集部
2017.10.15

羽田亨（1972）『満和辞典』国書刊行会

季永海・劉憲景・屈六生（1986）『満語語法』

亀井孝・河野六郎・千野栄一（1989）『言語学大辞典 第2巻 世界言語編（中）』

河内良弘・清瀬儀三郎則府（2002）『満洲語文語入門』

津曲敏郎（2002）『満洲語入門20講』 「満洲語とは」

河内良弘・清瀬儀三郎則府（2002）『満洲語文語入門』

愛新覺羅瀛生（2004）『満語雑識』

福田昆之（2008）『補訂満洲語文語辞典』

愛新覺羅瀛生（2014）『満語口語音典』

河内良弘（2014）『満洲語辞典』

暁春（2015）「満語擬声詞刍議」（筆者訳：「満州語の擬声語についての卑見」）

・漢語オノマトペの部

目加田誠（1960）『詩経・楚辞』

耿二玲（1986）『漢語擬声詞』

野口宗親（1995）『中国語擬音語辞典』

劉堅・江藍生（1997）『唐五代語言詞典』

呉川（2005）『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』

王湘榕（2012）「日中両国語における擬音語の対照研究：小説『ノルウェイの森』とその三種の中国語訳本を中心に」

大東文化大学中国語大辞典編纂室『中国語大辞典』

劉玲（2015）『漢語オノマトペの受容について』

呂淑湘（2015）『現代漢語八百詞 増訂本』 商務印書館出版社

『現代漢語辞典 第六版』 商務印書館出版社 2012.6

・日本語オノマトペの部

鈴木朗著（1816）『言語四種論 雅語音聲考・希雅』小島俊夫・坪井美樹（1979）解説

小林好日（1941）『国語学の諸問題』 「音義説と音聲象徴」

金田一春彦（1951）「コトバの旋律」『国語学V』

小野正弘（2009）『オノマトペがあるから日本語は楽しい 擬音語・擬態語の豊かな世界』

小島憲之・木下正俊・東野治之（1994）『萬葉集』 「新編日本古典文学全集 6～9」

-
- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤彦（1994）『角川古語大辞典』
- 山口仲美（2012）「奈良時代の擬音語・擬態語」 『明治大学国際日本学研究』 第4巻第1号
- 山口佳紀・神野志隆光（1997）『新編 日本古典文学全集1』 『古事記』 卷中
- 那須昭夫（2008）「特集：おのまとぺ 新しく生まれるオノマトペ-新造語の音韻特徴-」
『國文学：解釈と教材の研究』 14号
- 張迪「近代中国における日本書籍の翻訳と紹介-19世紀末から20世紀初頭の概況とその特徴-」
- 徐一平・譙燕・呉川・施建軍 『日本語の擬音語・擬態語に関する研究』
- 日本国語大辞典編集部（2001）『日本国語大辞典 第二版』
- 天沼寧（1974）『擬音語・擬態語辞典』
- 浅野鶴子・金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』
- 浜野祥子（2014）『日本語のオノマトペ—音象徴と構造—』
- 小野正弘（2007）『擬音・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』
- 角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』 笈寿雄・田守育啓（1993）『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』
- 窪温子（1995）「宮沢賢治のオノマトペの世界」
- 大坪併治（2006）『擬声語の研究』
- 田守育啓（2009）「宮沢賢治のオノマトペ -慣習的オノマトペから音韻変化より派生した非慣習的オノマトペ-」
- 田守育啓（2010）『賢治オノマトペの謎を解く』
- 田守育啓（2011）「宮沢賢治特有のオノマトペ：賢治独特の非慣習的用法」
- 王冠華（2004）「日本語の擬音語・擬態語の中国語訳の表現について」
『宮沢賢治全集』 筑摩書房 1986
- 境忠一（1968）『評伝・宮沢賢治』
- 山内修（1989）『宮沢賢治 年表作家読本』
- 渡部芳紀（2007）『宮沢賢治大辞典』
- 王敏（2007）『宮沢賢治傑作選』
- 興水優・島田亜実（2009）『中国語わかる文法』

付表1：満洲語注音・注釈『玉堂字彙』におけるオノマトペの満和对訳表

	漢字	所在	満洲語の解釈	満洲語の日本語訳
1	枳	丑・口部 p51-5	a ta	鶏雀など鳥を追う声
2	擠	丑・口部 p40-6	ai	おや、ああ
3	殃	丑・口部 p62-10	ai	ああ、嘆きの声
4	糅	辰・欠部 p178-8	ai sembi	嘆じる様、うーんと
5	蘭	巳・父部 p190-1	ai sembi	あーと言う歎息の声
6	猗	巳・犬部 p242-1	ai sere asuki	アアと言う声
7	淆	丑・口部 p70-1	ai sere jilgan	ああと言う声
8	嘆	丑・口部 p70-2	ai sere jilgan	ああと言う声
9	獸	丑・口部 p84-8	ai sere jilgan	アイと言う声
10	癸	丑・口部 p93-6	ai sere jilgan	アアと言う声
11	絨	辰・欠部 p180-9	ai sere jilgan	ウーンと言う声、嘆息の声
12	吁	丑・口部 p7-4	ai sere mudan	ああ、おやと言う声
13	恚	丑・口部 p26-5	ang seme	わあー、戦い、喧嘩の時の声
14	擻	丑・口部 p59-6	ar	あっと
15	噢	丑・口部 p7-9	ara sembi	おや、あらと言う
16	庖	子・勹部 p183-1	ara sere gisun	オヤと言う言葉
17	萊	子・卜部 p197-7	ara sere gisun	間投詞、あらと言う言葉
18	觸	卯・心部 p65-2	ara sere mudan	あーっと言う声
19	於	卯・心部 p97-3	bekte bakta	うろたえて、驚いて
20	咸	寅・工部 p116-9	bing sembi	腹がグーッと言う
21	隈	丑・女部 p193-3	bodor sembi	くどくどと
22	澀	酉・言部 p73-8	bubu baba	口が回らない、どもりながら
23	諒	酉・言部 p83-3	bubu baba	口が回らない、どもりなが
24	角	巳・水部 p18-10	bur bur sembi	ぶくぶくと沸き上がる様
25	俛	辰・日部 p35-1	buru bara	茫々たる光
26	埒	辰・木部 p57-11	buru bara	茫々たる光
27	眩	午・目部 p158-11	buru bara	もうろうとして、茫々たり
28	瞶	午・目部 p187-10	buru bara	朦朧として
29	癸	辰・日部 p38-10	buru bara	日が朦朧としている
30	僵	辰・日部 p37-11	buru bara	日の色が朦朧としている

31	靦	酉・見部 p15-7	buru bara	視界が朦朧としている
32	靦	酉・見部 p16-4	buru bara	視界が朦朧としている
33	矚	午・目部 p199-11	buru bara	目に見えるものが、朦朧としている
34	昉	午・目部 p159-3	buru bara	朦朧ぼんやりと見えた
35	庖	丑・口部 p91-6	buru butu	曖昧模糊
36	縵	巳・水部 p44-3	busu busu agambi	しとしとと雨が降る
37	肴	巳・水部 p67-8	busu busu agambi	しとしとと雨が降る
38	雪	巳・水部 p109-5	busu busu agambi	しとしとと雨が降る
39	霰	戌・雨部 p161-2	busu busu agambi	シトシトと雨が降る
40	胸	巳・水部 p39-7	busu busu -i agambi	しとしとと雨が降る
41	肫	未・肉部 208-4	cafur cifur sembi	肉の口当たりが良い、つるつる
42	臙	丑・口部 p14-3	cang cang	鐘の音
43	壤	巳・水部 p98-2	cib seme	水が肅然として清浄である
44	陀	子・彡部 p136-3	cik seme	突然の寒さ
45	鎗	子・彡部 p133-6	cik seme	不意の寒さ
46	凜	子・彡部 p135-6	cik seme	突然の寒さ
47	刃	巳・水部 p107-2	cik seme	俄かに寒くなる
48	凜	午・疒部 p122-2	cik sere sukdun	寒気にゾクッとすする
49	鳶	巳・火部 p147-3	cing seme	パッと火が点く様
50	統	巳・火部 p144-3	cing sere	パッと点いた火
51	法	巳・火部 p175-9	cing sere yaha	パッと付いた炭火
52	泡	巳・火部 p175-10	cing sere yaha	パッと付いた炭火
53	憾	巳・水部 p25-5	cir sembi	細く勢い良く噴き出す様、ピュッと
54	艶	未・色部 290-8	fur sembi	顔が爽やか
55	眇	未・色部 290-11	fur sembi	顔が爽やか
56	岌	巳・水部 p60-8	cor sembi	絶え間なく噴き出る
57	敢	巳・水部 p25-6	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る
58	紅	巳・水部 p59-7	cor sembi	水が絶えず噴き出す様
59	講	巳・水部 p60-10	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る
60	僣	巳・水部 p79-1	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る
61	秋	巳・水部 p85-10	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る

62	警	丑・口部 p63-1	cu sembi	しっ、犬や猫を追う声
63	疣	丑・口部 p90-8	cu sere jilgan	ちゅと言う声
64	歛	丑・口部 p61-5	cucu caca	ひそひそと
65	漆	酉・言部 p79-5	cucu caca	ひそひそと
66	趨	酉・走部 p168-1	cung sembi	向う見ずに、しゃにむに
67	盼	寅・彳部 p201-3	cung seme	しゃにむに行く
68	磅	寅・彳部 p204-9	cung seme	しゃにむに歩く
69	趁	酉・走部 p161-2	cung seme	しゃにむに歩いてゆく
70	趨	酉・走部 p170-8	cung seme	しゃにむに歩いてゆく
71	良	子・人部 p88-11	darang sembi	体が長い様
72	俚	子・人部 p104-3	darang sembi	体が長い様
73	竣	子・人部 p112-11	darang sembi	体が長い様
74	眇	酉・身部 p222-3	darang sembi	体が長々としたさま
75	胤	酉・身部 p224-10	darang sembi	体が長々としたさま
76	鄉	酉・身部 p226-1	darang sembi	体が長々としたさま
77	躄	酉・身部 p226-4	darang sembi	体が長々としたさま
78	趾	戌・長部 p73-5	darang sembi	長々と、のびのびと
79	犛	酉・見部 p22-10	darang sembi	牛の両角が長い様
80	粹	辰・欠部 p178-4	darang seme	ながながと
81	巖	丑・口部 p19-1	dede dada	そわそわしている
82	困	丑・女部 p212-8	dede dada	媚びる、そわそわする
83	叛	寅・山部 p64-1	derden dardan	ぶるぶる震える
84	顛	戌・頁部 p237-5	dere seme	顔の様が肥えていて大きい
85	遑	酉・辵部 p279-3	diye hiye seme	迅速と行く
86	敞	丑・口部 p43-4	dudu dada	子供の口が回らないさま
87	唾	丑・口部 p46-8	dudu dada	子供の口が回らない様
88	鐘	申・艸部 p133-9	dung dung sembi	鼓鳴、ドンドント言う太鼓の音
89	档	丑・口部 p50-3	dur sembi	わいわいがやがや
90	伯	丑・口部 p22-4	dze dze sembi	犬が吠えてワンワンと鳴く
91	肯	子・人部 p84-7	e i seme	めそめそと泣き言を言う
92	謔	酉・言部 p82-1	e i seme	痛いと呼ぶ
93	啊	丑・口部 p44-3	e o sembi	ええ、おうと言う

94	娣	丑・口部 p10-4	e sere jilgan	ええと言う声
95	屎	丑・口部 p16-7	e sere jilgan	えと言う音
96	乙	卯・心部 p98-7	ederi tederi	あちこちと、ああでもないこうでもない
97	噫	戌・音部 p212-7	ei ei sembi	オイオイと泣く
98	鳶	寅・尢部 p40-2	ek sembi	行くのを厭う
99	晃	子・人部 p82-3	en jen	整然としている
100	眈	寅・彳部 p201-4	eyeri hayari	飄々と
101	趯	酉・走部 p167-7	eyeri hayari	飄々と、軽快に
102	趯	酉・走部 p170-3	eyeri hayari	飄々と、軽快に
103	蹠	酉・足部 p178-2	eyeri hayari	飄々と、飄然と
104	蹠	酉・足部 p206-3	eyeri hayari	飄々と、軽快に
105	蹠	酉・足部 p212-8	eyeri hayari	飄々と、軽快に
106	偶	子・人部 p61-3	fak sembi	体ががっちりしている、疲労でぐったりとした様
107	群	子・人部 p64-2	far sembi	うようよ群がる
108	簷	辰・欠部 p176-4	fer far	ひよろひよろ、ふにやふにや
109	簷	辰・欠部 p174-2	fer far sembi	ひよろひよろと、ふにやふにやと
110	予	寅・山部 p95-5	fik sembi	山が稠密である
111	躑	酉・足部 p197-1	fik seme	歯莖がとしっかりと長している
112	粽	辰・欠部 p178-6	fior seme ukiyembi	つるつると啜る
113	翠	辰・欠部 p188-4	fior seme ukiyembi	つるつると啜る
114	篋	辰・欠部 p174-3	fotor seme	怒るさま
115	珈	丑・口部 p85-3	fu fa seme	喘ぐ
116	夭	丑・大部 p163-6	fur fur sembi	爽やか、みずみずしい
117	篋	辰・欠部 p174-4	fur sembi	晴れ晴れと、爽やかに
118	篋	辰・欠部 p175-8	fur sembi	晴れ晴れと、爽やかに
119	蕪	丑・口部 p22-8	fur sembi	花の香りが爽やかであることを言う
120	繡	辰・欠部 p184-2	fusu fasa	只管忙しい
121	醉	未・肉部 237-5	fusur sembi	肌のきめが粗い
122	貅	丑・土部 p148-2	fusur seme	緩やかに土が落ちる

123	膩	丑・土部 p119-11	fusur seme	ボロボロの土
124	壤	丑・土部 p154-9	fusur sere boihon	柔らかい土
125	逖	丑・土部 p155-8	fusur sere boihon	柔らかい土
126	囿	午・田部 p80-7	fusur sere boihon	ふわふわとした土
127	廻	丑・大部 p167-10	gang gang sembi	犬がキャンキャン鳴く
128	啗	丑・口部 p23-7	gar	緊急時に叫ぶ声
129	癡	丑・口部 p92-5	gar gir	わいわいがやがや
130	榘	丑・口部 p55-8	gar gir	ワイワイがやがや云う
131	踳	酉・足部 p183-4	gebge gabga	よちよちと
132	蹕	酉・足部 p208-8	gebge gabga	幼児がよちよちあるく
133	躑	酉・足部 p218-6	gebge gabga	よちよちと
134	况	辰・日部 p40-5	gehun gahūn	明亮
135	冽	辰・日部 p40-6	gehun gahūn	明亮
136	枅	丑・口部 p47-6	gejing sembi	くどくど言う
137	歿	丑・口部 p63-3	gejing sembi	くどくど言う
138	鮎	卯・心部 p86-5	gelere goloro gese	怖がる如し、びくびくしているよう
139	齖	寅・彳部 p193-3	gengge gangga	孤独に
140	趺	酉・足部 p174-4	gengge gangga	孤独に、よろよろとして
141	踽	酉・足部 p179-3	gengge gangga	孤独に、一人ぼっちで
142	躑	酉・足部 p200-8	gengge gangga	孤独に、ひとりぼっちで
143	梓	丑・口部 p50-2	ger	犬が怒って吼える声
144	淙	丑・口部 p70-9	ger	犬が吠える声
145	呶	丑・口部 p20-6	ger gar	がやがや争う声
146	獠	巳・犬部 p255-6	ger sembi	吠える声
147	宦	巳・犬部 p226-4	ger sembi	犬が吠える声
148	宸	巳・犬部 p226-5	ger sembi	犬が吠える声
149	狻	巳・犬部 p227-10	ger sembi	犬が吠える声
150	禪	卯・心部 p62-4	geri fari	恍惚と、うっとりして
151	華	卯・心部 p100-9	geri fari	恍惚と、うっとりして
152	蕁	卯・心部 p49-9	geri fari	恍惚と、ぼうっとして
153	明	辰・日部 p11-7	geri gari	ほのかに、かすかに

154	峯	辰・日部 p12-4	geri gari	ほのかに、かすかに
155	昭	辰・日部 p15-7	geri gari	ほのかに、かすかに
156	棉	辰・日部 p21-6	geri gari	星がほのかに瞬く
157	昧	辰・日部 p14-10	gersi fersi	明け方、黎明
158	聒	未・耳部 201-9	gib sembi	グワーンと耳が振動する様
159	筧	戌・食部 p268-1	gior sembi	腹を空かせてグウグウと言う
160	簣	辰・欠部 p175-3	giyan fiyan	整然と、仔細に
161	爪	卯・段部 p220-5	giyan fiyan	順序に従い、整然と
162	壓	卯・段部 p227-6	giyan fiyan	順序に従い、整然と
163	難	卯・段部 p233-9	giyan fiyan	順序に従い、整然と
164	嫫	巳・犬部 p223-7	giyang	犬がきゃんきゃん吠える
165	獐	巳・犬部 p237-11	giyang	犬がきゃんきゃん鳴く
166	獠	巳・犬部 p254-5	giyang	犬がきゃんきゃん鳴く
167	獠	巳・犬部 p254-6	giyang	犬がきゃんきゃん鳴く
168	恫	丑・口部 p27-7	gu gu	鶏を呼ぶ声
169	梳	丑・口部 p49-10	gugu	人が鶏を呼ぶ声
170	父	子・力部 p175-9	gujung sembi	せっせと
171	坼	子・力部 p179-4	gujung sembi	せっせと
172	決	寅・山部 p109-7	gukdu gakda	山谷が凸凹している
173	洑	寅・山部 p109-8	gukdu gakda	山谷が凸凹している
174	養	寅・山部 p98-3	gukdu gakda	凸凹した山路
175	劫	寅・山部 p111-1	gukdu gakda	凸凹している
176	勁	寅・山部 p112-9	gukdu gakda	凸凹である
177	暝	寅・彳部 p202-8	gukdu gakda	凸凹の路
178	猝	辰・木部 p149-5	gukdu gakda	山道の険しい様、凸凹
179	郝	酉・邑部 p305-11	gukdu gakda	山道の凸凹して険しい
180	鏗	戌・金部 p40-1	gukdu gakda	山道が険しく凸凹している
181	砮	午・石部 p215-2	gukdu gakda	石が凸凹している
182	礪	午・石部 p220-2	gukdu gakda	石が凸凹している
183	礪	午・石部 p253-2	gukdu gakda	石が凸凹している
184	礪	午・石部 p238-5	gukdu gakda	凸凹した岩
185	恂	丑・口部 p27-5	gūlu gala	ひそひそ
186	諛	酉・言部 p89-8	gūlu gala	ひそひそ話す

187	譚	酉・言部 p91-4	gūlu gala	ひそひそ声
188	諫	酉・言部 p76-5	gūlu gala sembi	ひそひそ話す
189	陽	丑・口部 p34-9	gūwar gūwar	鴨やカエルの泣き声
190	嘗	酉・言部 p61-1	gūwar gūwar	鴨がガアガアと鳴く
191	薤	申・艸部 p64-5	h'o sembi	豚がグウと鳴く声
192	咄	丑・口部 p22-2	ha	息を吹きかける音
193	愁	丑・口部 p30-9	ha	吐く息
194	斷	丑・口部 p44-5	ha	息をハッと吹きかける
195	簞	辰・欠部 p176-3	ha seme sukdu sembi	は一と息を吐く
196	躑	酉・足部 p206-1	hahi cahi	大急ぎの、火急の
197	拐	丑・口部 p47-9	hak	痰を吐く音
198	鉞	戌・金部 p18-2	halar seme	車のガラガラと言う響き
199	舜	子・人部 p112-12	hao hio sembi	狭い様
200	褻	丑・土部 p137-11	hao hio sembi	ホッとする
201	贊	卯・心部 p73-12	hao hio sembi	ふっと溜め息をつく
202	初	子・人部 p113-8	heihedeme haihadame	千鳥足で歩く
203	艦	子・人部 p40-6	heihari haihari	千鳥足
204	礦	寅・彳部 p203-10	heihari haihari	千鳥足で行く、歩く
205	蹠	酉・足部 p200-5	heihari haihari	よろよろと、千鳥足で
206	蹠	酉・足部 p210-6	heihari haihari	よろよろと、千鳥足で
207	蹠	酉・足部 p218-9	heihari haihari	よろよろと、千鳥足で
208	躡	酉・足部 p219-3	heihari haihari	よろよろと、千鳥足で
209	嘴	子・又部 p217-5	her har	気にする、気を付ける
210	嫂	丑・口部 p9-11	her har	喉の鳴る音、ごろごろ
211	拜	丑・口部 p37-6	her har	喉がごろごろなる
212	挺	丑・口部 p51-3	her har	ごろごろ喉の鳴る音
213	橙	丑・口部 p58-2	her har	喉の鳴る音
214	瀾	丑・口部 p78-2	her har	痰が絡まって、ぐるぐると喉が鳴る
215	啖	丑・口部 p87-7	her har	ごろごろ喉の鳴る音
216	痲	丑・口部 p91-2	her har	ごろごろ喉の鳴る声
217	緯	辰・欠部 p183-1	her har	ゴロゴロ喉の鳴る音

218	奄	卯・心部 p94-10	hing sembi	心を込めた、誠心誠意
219	侍	子・人部 p101-8	hing sembi	一心に、評を参照
220	衽	卯・心部 p56-1	hing sembi	心を込めて、一心に
221	蠶	卯・心部 p59-11	hing sembi	心を込めて、一心に
222	慥	卯・心部 p70-10	hing sembi	心を込めて、一心に
223	忒	卯・段部 p234-2	hing sembi	心を込める、一心に
224	篤	未・竹部 p40-5	hing sembi	心を込めて、一心に
225	肫	未・肉部 212-5	hing sembi	心を込めて
226	孜	寅・子部 p7-1	hing seme	一心に、もっぱら
227	感	卯・心部 p61-1	hing sere be acinggiyambi	一心さに感動する
228	禋	午・示部 p263-7	hing sere unenggi be wecembi	誠心誠意祭祀を行う
229	禴	午・示部 p261-1	hing sere unenggi -i hūturi isibumbi	一心に真の福を与える
230	喝	丑・口部 p54-2	hiyang sembi	ヒャンと嘶きの声
231	櫃	丑・口部 p59-5	hiyang sembi	コラッと叱る
232	犹	丑・口部 p81-7	hiyang sembi	コラットと叱る
233	讒	酉・言部 p75-1	hiyang sembi	コラッと叱る声
234	尹	丑・口部 p16-3	hiyang seme	こらっと叱責する事
235	涅	丑・口部 p68-8	hiyang seme	コラット叱る
236	歌	丑・大部 p166-5	hiyang seme	こらっと叱る
237	叱	丑・口部 p5-8	hiyang seme	こらっと怒って叱る
238	頤	戌・頁部 p215-2	hiyor hiyar seme	頭をグッと上げる様
239	誓	酉・言部 p48-3	hiyūk sembi	称赞する
240	湫	丑・口部 p71-10	ho ha	はっは、寒い時に息を吐く音
241	詈	酉・言部 p35-1	ho ha sembi	寒い時に出す、はーはーと言 う声
242	鐻	戌・金部 p47-2	holor sembi	鈴がジャランと鳴る
243	鐻	戌・金部 p61-3	holor sembi	鈴ががらんがらんと鳴る
244	蚕	巳・水部 p72-6	hoo sembi	河水が澎湃たる様
245	切	巳・水部 p108-7	hoo sembi	水が澎湃たる様
246	莊	巳・水部 p118-8	hoo sembi	河が澎湃と流れる
247	卓	巳・水部 p123- 11	hoo sembi	水が澎湃たる様
248	技	巳・水部 p33-5	hoo sembi	早瀬が轟々と流れる様

249	颯	戌・風部 p243-11	hoo seme	ビュービューと風が吹く
250	颯	戌・風部 p246-3	hoo seme	ビュービューと風が吹く
251	颯	戌・風部 p247-3	hoo seme	ビュービューと風が吹く
252	颯	戌・風部 p250-9	hoo seme	ビュービューと風が吹く
253	颯	戌・風部 p251-2	hoo seme	ビュービューと風が吹く
254	颯	戌・風部 p251-10	hoo seme	ビュービューと風が吹く
255	颯	戌・風部 p253-2	hoo seme	ビュービューと風が吹く
256	飄	戌・風部 p254-3	hoo seme	ビュービューと風が吹く
257	褰	申・虫部 p262-8	hū hū sere etuku asuki	衣の翻る音
258	薙	申・艸部 p97-3	hūji	草木の風になびく音
259	定	巳・火部 p137-5	hūng sembi	火がボーっと起こる
260	埋	巳・火部 p180-2	hūng sembi	火がボーっと起こる
261	潰	巳・火部 p136-5	hūng sembi	火がボーっと起こる
262	柘	巳・火部 p136-2	hūng sere tuwa	ボーっと火が起こる
263	訇	戌・音部 p210-10	hūng sere uran	ゴーと言う響き
264	廂	丑・口部 p21-8	hūr har	馬の苛立つさま
265	泥	巳・火部 p138-9	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー
266	摘	巳・火部 p138-10	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー
267	曇	巳・火部 p148-5	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー
268	輩	巳・火部 p155-3	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー
269	箸	巳・火部 p157-5	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー
270	塙	巳・火部 p159-4	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー
271	滴	巳・火部 p138-12	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴー
272	童	巳・火部 p146-4	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴー
273	縄	巳・火部 p149-9	hūr sembi	火勢の音、ゴウゴウ、ぼー
274	農	巳・火部 p152-10	hūr sembi	火勢の音、ゴウゴウ、ぼー
275	弼	巳・火部 p164-1	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴー

276	箆	巳・火部 p164-4	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴ ー
277	穀	酉・赤部 p149- 11	hūr sembi	火の様、ごうごう
278	眼	巳・水部 p27-9	hūwai	洋洋と、澎湃と
279	笋	巳・水部 p32-3	hūwai sembi	大水洋洋たる様
280	芒	申・艸部 p9-4	hūwai sembi	大河が澎湃と流れる様
281	苳	申・艸部 p9-5	hūwai sembi	大河が澎湃と流れる様
282	郭	巳・水部 p19-2	hūwai sembi	澎湃と、洋洋と
283	承	巳・水部 p93-4	hūwai sembi	澎湃たる様
284	暢	巳・水部 p133-1	hūwai sembi	澎湃と、洋洋と
285	艶	丑・土部 p123-2	hūwai sembi	水の洋々とした
286	歌	巳・水部 p10-10	hūwai sembi	水が澎湃たる様
287	居	巳・水部 p35-10	hūwai sembi	水が澎湃たる様
288	漁	巳・水部 p36-10	hūwai sembi	水が澎湃たる様
289	梗	巳・水部 p58-5	hūwai sembi	水が澎湃たる様
290	堺	巳・水部 p67-5	hūwai sembi	水が澎湃たる様
291	集	巳・水部 p87-6	hūwai sembi	水が澎湃たる様
292	曙	巳・水部 p87-9	hūwai sembi	水が澎湃たる様
293	遡	巳・水部 p115-1	hūwai sembi	水が澎湃たる様
294	茫	申・艸部 p25-2	hūwai sembi	水が澎湃たる様
295	主	巳・水部 p82-6	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
296	迅	巳・水部 p101-4	hūwalar sembi	さらさらと流れる様
297	晏	丑・口部 p46-4	hūwalar sembi	船櫂を漕ぐ時ザブザブ言う事
298	雁	巳・水部 p28-3	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
299	戟	巳・水部 p49-2	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
300	溝	巳・水部 p59-1	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
301	皇	巳・水部 p59-3	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
302	昆	巳・水部 p65-8	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
303	守	巳・水部 p82-8	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
304	請	巳・水部 p108-5	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
305	煎	巳・水部 p111-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
306	挿	巳・水部 p116-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
307	陀	巳・水部 p121-8	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
308	知	巳・水部 p129-6	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様

309	注	巳・水部 p131-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
310	槻	巳・水部 p135-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様
311	寒	巳・水部 p24-2	hūwalar seme eyembi	さらさらと流れる
312	艶	巳・水部 p6-6	hūwanger sembi	水が音を立てて流れる様
313	貨	巳・水部 p12-5	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様
314	回	巳・水部 p14-7	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様
315	攪	巳・水部 p18-2	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様
316	先	巳・水部 p110-2	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様
317	格	巳・水部 p18-4	hūwanger sembi	轟々と流れる様
318	鋤	巳・水部 p44-4	hūwanger sembi	大水が轟々と流れる
319	桑	巳・水部 p44-5	hūwanger sembi	大水が轟々と流れる
320	姿	巳・水部 p74-5	hūwanger sembi	大水が轟々と流れる
321	商	巳・水部 p91-9	hūwanger sembi	大水が轟々と流れ
322	壮	巳・水部 p115-8	hūwanger sembi	高台から水が轟々と流れる
323	過	巳・水部 p12-7	hūwanger seme	水が轟々と流れ驚かされる
324	電	戌・雨部 p143-1	hūwanger seme agambi	土砂降りの雨が降る
325	霽	戌・雨部 p143-9	hūwanger seme agambi	土砂降りの雨が降る
326	霽	戌・雨部 p148-4	hūwanger seme agambi	土砂降りの雨が降る
327	霽	戌・雨部 p153-10	hūwanger seme agambi	土砂降りの雨が降る
328	霽	戌・雨部 p159-6	hūwanger seme agambi	土砂降りの雨が降る
329	鍾	巳・水部 p96-11	hūwanger seme eyembi	轟々と流れる
330	巖	丑・口部 p18-1	hūwar sembi	船を漕ぎ曳く時に言う
331	奥	巳・水部 p7-9	hūwar sembi	水が激しく流れる
332	懷	巳・水部 p15-6	hūwar sembi	水がさらさら流れる
333	豎	巳・水部 p126-7	hūwar sembi	水がさらさら流れる
334	臺	卯・斤部 p242-4	hūwar sembi	谷間の水の流れがさらさらと音を立てる
335	皮	卯・斤部 p243-1	hūwar sembi	谷間の水の流れがさらさらと音を立てる
336	芑	申・艸部 p37-9	hūwasa hisa	がさがさ、かさかさ
337	躑	酉・足部 p198-12	hūwasa hisa	がさがさ
338	飴	子・人部 p86-8	hūwasar seme	かさかさ
339	鯖	子・人部 p96-2	hūwasar seme	草に風は来てがさがさとする

340	湮	丑・口部 p71-4	ja ja	鳥が捉えられて鳴く声
341	雀	丑・口部 p14-2	ja ja	子供や野獣を脅かす声、捕ま えられた鳥の鳴く声
342	𪔐	丑・口部 p21-1	ja ji	わいわいがやがや言う
343	惠	丑・口部 p29-2	ja ji	わいわいがやがや
344	𪔑	丑・口部 p34-3	ja ji	わいわいがやがや
345	𪔒	丑・口部 p87-9	ja ji	わいわいがやがや
346	𪔓	丑・口部 p102-3	ja ji	わいわいがやがや
347	𪔔	丑・口部 p17-5	ja ji sembi	わいわい言う
348	𪔕	酉・言部 p87-1	ja ji sembi	わいわいがやがや言う
349	𪔖	酉・言部 p87-10	ja ji sembi	わいわいがやがや言う
350	𪔗	戌・音部 p211-7	ja ji sembi	がやがや言う
351	𪔘	丑・口部 p20-5	jaji	騒がしい様子
352	𪔙	丑・口部 p74-4	jang jing	楽器の発する音、鳥などが呼 び合う声
353	𪔚	丑・口部 p62-4	jar	えんやこら
354	𪔛	丑・口部 p93-2	jar	虫の鳴く声
355	𪔜	丑・口部 p52-2	jar jar	チンチロリ、虫の鳴き声
356	𪔝	丑・口部 p54-3	jar jar	チロリン、虫の鳴き声
357	𪔞	丑・口部 p54-4	jar jar	チロリン、虫の鳴き声
358	𪔟	辰・欠部 p179-4	jar jar	ちんちろりん、虫が鳴くさま
359	𪔠	酉・言部 p56-2	jar sembi	大勢がかけ声を出す、エンヤ コラ
360	𪔡	丑・口部 p62-9	je ja	えんやこーら
361	𪔢	丑・口部 p24-7	jingjing jangjang	鳥の鳴き声
362	𪔣	丑・口部 p55-2	jingjing jangjang	ピーチクパーチク、鳥の鳴き 声
363	𪔤	丑・口部 p86-7	jingjing jangjang	群鳥が鳴く声
364	𪔥	丑・口部 p98-8	jingjing jangjang	群鳥の鳴き声
365	𪔦	寅・ㄩ部 p114-1	jir jir seme eyembi	チョロチョロと水が流れる
366	𪔧	寅・ㄩ部 p114-2	jir jir seme eyembi	チョロチョロと水が流れる
367	𪔨	丑・口部 p29-8	jor	掛け声
368	𪔩	丑・口部 p33-5	jor	掛け声、えんやこら
369	𪔪	丑・口部 p64-6	jor jar	わいわいがやがや
370	孩	丑・口部 p13-1	jor sembi	わいわいがやがや言う

371	炳	丑・口部 p79-4	juju jaja	ひそひそ
372	簾	丑・口部 p106-1	kacar kicir	じゃりじゃり、砂を噛む様
373	紆	丑・口部 p108-10	kacar kicir	砂を噛むさま
374	硯	午・石部 p215-6	kacar kicir	石がじゃりじゃりと
375	磧	午・石部 p249-6	kacar kicir sembi	砂をかむ様
376	罨	辰・欠部 p186-5	kaka kiki	ケラケラと笑う
377	褌	辰・裙部 p214-6	kaka kiki	呵々と笑う
378	羔	辰・欠部 p187-8	kaka kiki seme	子供達がケラケラと笑う
379	錨	子・力部 p173-12	kakūng sembi	ガタンと言う
380	琿	午・玉部 p29-6	kalang kiling	玉を佩びてカランコロンと響く
381	璫	午・玉部 p32-6	kalang kiling	玉を佩びてカランコロンと響く
382	玎	午・玉部 p6-8	kalang kiling	カランコロン、玉佩の触れる音
383	玠	午・玉部 p7-1	kalang kiling	カランコロン、玉佩の触れる音
384	玲	午・玉部 p10-10	kalang kiling	カランコロン、玉佩の触れる音
385	珣	午・玉部 p16-12	kalang kiling	カランコロン、玉佩の触れる音
386	琤	午・玉部 p23-8	kalang kiling	カランコロン、玉佩の触れる音
387	璠	午・玉部 p28-11	kalang kiling	カランコロン、玉佩の触れる音
388	璫	午・玉部 p29-7	kalang kiling	カランコロン、佩玉のふれる音
389	璠	午・玉部 p31-8	kalang kiling	カランコロン、玉佩の触れる音
390	鐃	戌・金部 p54-10	kalang kiling	銅、鉄、玉の類が響く音、カランコロン
391	錚	戌・金部 p34-9	kalang kiling seme	カランコロンと言う響き

392	藹	申・艸部 p124-11	kalar sembi	和気藹々、仲睦まじい
393	濤	丑・口部 p68-6	kang sembi	がやがやと高い声で話す
394	羶	辰・欠部 p187-10	kang sembi	声高に言う
395	侃	子・人部 p55-2	kang seme	がやがやとしゃべる
396	峽	子・人部 p55-3	kang seme	がやがやとしゃべる
397	幸	子・人部 p80-7	kang seme	がやがやと話すこと
398	鈇	戌・金部 p18-4	kanggir kinggir	鈴がジャランジャランと鳴る
399	砢	午・石部 p217-2	kanggūr	石が落ちる時のドスンと言う音
400	芋	丑・遺部 p159-2	kantar seme	昂然と、激昂する
401	蹙	酉・足部 p211-2	kata kiti sembi	地を踏みカタカタと言う
402	蹙	酉・足部 p214-7	kata kiti sembi	地を踏んでカタカタと足音を立てる
403	躡	酉・足部 p216-10	kata kiti sembi	地を踏みがたがたと言う
404	喃	子・又部 p216-3	katak kitik sembi	物が上から落ちてガチャンと言う
405	甌	午・瓦部 p57-9	katak sembi	擬声語、カタカタ
406	躡	酉・足部 p200-2	katang sembi	地を踏むカタンと言う音
407	鞣	戌・革部 p193-1	katang sembi	皮がカチンカチンに硬い
408	鞣	戌・革部 p197-5	katang sembi	皮がカチンカチンに硬い
409	鞣	戌・革部 p182-6	katang seme	カチンカチンに硬い
410	鞣	戌・革部 p184-1	katang seme	カチンカチンに硬い
411	絢	辰・欠部 p181-6	ke sembi	オヤツと言う
412	籟	辰・欠部 p177-2	keb kab sembi	睦まじく、懇ろに
413	蠢	卯・心部 p59-8	keb kab sembi	むつまじく、ねんごろに
414	膏	子・人部 p85-2	keb sembi	睦まじい
415	膽	卯・心部 p36-6	kek sembi	気に入る、思い通りになる
416	羣	丑・土部 p114-9	kekta kakta	凸凹、高低
417	羣	丑・土部 p130-4	kekta kakta	凸凹、高低
418	踣	酉・足部 p196-1	kekta kakta	凸凹、高低不平
419	膾	丑・土部 p119-1	kekta kakta	凸凹、高低
420	跣	丑・土部 p151-4	kekta kakta	凸凹、高低

421	邸	寅・宀部 p43-2	kekete kakta	凸凹、高い低い
422	碯	午・石部 p225-10	kekete kakta	高低凸凹している
423	碯	午・石部 p230-9	kekete kakta	高低凸凹
424	却	未・未部 186-10	kekete kakta	凸凹、高低
425	阨	戌・阜部 p100-5	kekete kakta	でこぼこ、高低
426	陀	戌・阜部 p101-7	kekete kakta	でこぼこ、高低
427	陔	戌・阜部 p101-8	kekete kakta	でこぼこ、高低
428	贍	丑・土部 p149-5	kekete kakta	丘が凸凹している
429	詁	辰・裙部 p218-5	keleng kalang seme	のそりのそりと、ぶらりぶらりと
430	欒	丑・口部 p59-9	keng	咳の音
431	衢	卯・心部 p60-8	keng sembi	思い通りになる
432	衛	卯・心部 p60-9	keng sembi	思い通りになる
433	縑	未・糸部 138-10	kikūr seme	ギュッと細かい
434	毳	戌・阜部 p98-9	kiki kaka seme	カッカと笑う
435	軋	酉・車部 p238-9	kikūr sembi	がらがらと言う車の音
436	輦	酉・車部 p248-9	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
437	輶	酉・車部 p249-1	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
438	輶	酉・車部 p249-2	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
439	輶	酉・車部 p251-6	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
440	輶	酉・車部 p256-3	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
441	輶	酉・車部 p256-7	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
442	輶	酉・車部 p257-4	kikūr sembi	がらがらと言う車の音
443	輶	酉・車部 p258-6	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
444	輶	酉・車部 p259-4	kikūr sembi	がらがらと言う車の音
445	輶	酉・車部 p249-9	kikūr sembi	車のぎいぎいと言う音
446	輶	酉・車部 p253-3	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音
447	輶	酉・車部 p257-6	kikūr sembi	車のぎいぎいと言う音
448	縑	未・糸部 p124-10	kikūr seme	ギュッと細かい
449	縑	未・糸部 p105-3	kikūr seme	ふかふかとした絹、厚い絹
450	縑	未・糸部 p111-5	kikūri fisin	絹がふかふかとぶ厚い
451	趯	酉・走部 p165-4	kiyab kib	きびきびと、てきぱきと
452	躑	酉・足部 p206-7	kiyab kib	てきぱきと

453	趨	酉・走部 p169-8	kiyab kib sembi	きびきびと、てきぱきと
454	筧	未・竹部 p35-4	kiyak sembi	ぼきんと折れる音
455	淺	丑・口部 p70-8	kiyarkiya	べちやくちゃと
456	訖	酉・言部 p40-4	kiyarkiya sembi	べちやくちゃとしゃべる
457	幘	丑・口部 p20-4	kiyatar seme	からからと笑う
458	哈	丑・口部 p23-4	kiyatar seme	からからと笑う
459	啞	丑・口部 p24-5	kiyatar seme	からからと笑う
460	精	卯・手部 p192-2	kob sembi	矢が命中した様
461	糊	丑・口部 p49-6	koko sembi	鶏がコッコと鳴く
462	寬	丑・大部 p172-11	kolor seme	だぶだぶ
463	拒	巳・水部 p36-2	konggor sembi	ごうごうと急流が流れる様
464	士	巳・水部 p74-2	konggor sembi	ごうごうと急流が流れる様
465	孜	巳・水部 p75-3	konggor sembi	ごうごうと急流が流れる様
466	汁	巳・水部 p88-5	konggor sembi	ごうごうと
467	錠	巳・水部 p99-4	konggor sembi	ごうごうと
468	扛	丑・口部 p35-6	kor	ぐうぐう、鼾の声
469	歹	丑・口部 p63-2	kor sembi	ぐうぐう、鼾の音
470	挾	子・人部 p55-8	kos seme	げっそりと痩せる
471	𨔵	寅・彳部 p203-7	koskon kaskan	せかせか忙しく走り回る
472	趨	酉・走部 p168-2	koskon kaskan	せかせか、あくせく
473	鞣	戌・革部 p192-6	kotong sere sukū	カチカチ硬い皮
474	𧣾	辰・欠部 p177-8	kuku seme	クックッと笑う
475	𨔵	午・石部 p219-8	kung sembi	石の落ちてドスンと響く
476	𨔵	午・石部 p220-4	kung sembi	石の落ちてドスンと響く
477	𨔵	午・石部 p221-6	kung sembi	石の落ちてドスンと響く
478	𨔵	午・石部 p221-9	kung sembi	石が落ちてドスンと響く
479	𨔵	午・石部 p223-9	kung sembi	石が落ちてドスンと響く
480	𨔵	午・石部 p225-6	kung sembi	石が落ちてドスンと響く
481	𨔵	午・石部 p227-4	kung sembi	石がドスンと響く
482	𨔵	午・石部 p233-6	kung sembi	石が落ちてドスンと響く
483	𨔵	午・石部 p214-8	kung sembi	石が落ちてドスンと響く
484	𨔵	午・石部 p220-9	kung sembi	石が落ちてドスンと音を立てる

485	碓	午・石部 p220-10	kung sembi	石が落ちてドスンと音を立てる
486	砧	午・石部 p224-6	kung sembi	石が落ちてドスンと響く
487	碓	午・石部 p236-10	kung sembi	石がドシンと落ちる音
488	磅	午・石部 p237-9	kung sembi	石がドシンと落ちる音
489	礮	午・石部 p246-7	kung sembi	石がドシンと落ちる音
490	砵	午・石部 p217-8	kung sembi	石がドシンと落ちる音
491	礮	午・石部 p240-7	kung sembi	石の落ちてドスンと響く
492	僂	子・尸部 p203-12	kung seme	石のドスンと言う音
493	輶	酉・車部 p237-9	kunggur	車のごとごとと音を立てる
494	輶	酉・車部 p242-1	kunggur	車のごとごとと音を立てる
495	輶	酉・車部 p247-9	kunggur	車のごとごとと言う音
496	輶	酉・車部 p247-10	kunggur	車のごとごとと言う音
497	輶	酉・車部 p248-2	kunggur kanggar	ごろごろと言う音
498	輶	酉・車部 p256-8	kunggur kanggar	車のごとごとと言う音
499	轟	酉・車部 p256-10	kunggur kanggar	車のごとごとと言う音
500	輶	酉・車部 p259-3	kunggur kanggar	車のごとごとと言う音
501	砵	午・石部 p215-11	kunggur kanggar sembi	雷が鳴る音、ゴロゴロと
502	輶	酉・車部 p231-1	kunggur kanggar sembi	車や雷などがゴロゴロと鳴る
503	輶	酉・車部 p254-9	kunggur kanggar sembi	車や雷などがゴロゴロと鳴る
504	輶	酉・車部 p233-10	kunggur sembi	車のごろごろと言う音、馬のパカパカ行く音
505	輶	酉・車部 p239-8	kunggur sembi	車のごろごろと言う音、馬のパカパカ行く音
506	輶	酉・車部 p245-10	kunggur sembi	車のごとごとと言う音
507	輶	酉・車部 p235-9	kunggur sembi	車のごとごとと言う音
508	輶	酉・車部 p241-4	kunggur sembi	車のごとごとと言う音
509	輶	酉・車部 p247-1	kunggur sembi	車のごとごとと言う音

510	激	丑・口部 p78-5	kunggur seme	衆馬が走る音、びっしり人が集まる様子、衆車は動く音
511	牲	午・生部 p67-5	kunggur seme	衆人がばたばたと立つ
512	蟻	申・虫部 p201-2	kunggur seme	虫、バタバタと飛ぶ
513	淤	丑・口部 p70-11	kur	猛獣の声
514	孚	巳・犬部 p225-4	kur sembi	犬がグオーと吼える
515	玃	丑・口部 p85-5	kur sembi	熊虎の吼えるを言う
516	虤	申・虎部 p139-9	kur sembi	虎がウオーと怒る
517	虤	申・虎部 p141-5	kur sembi	虎がウオーと怒る
518	虤	申・虎部 p143-1	kur sembi	虎がウオーと怒る
519	虤	酉・谷部 p99-12	kur sembi	虎がうおーと吼える
520	虤	卯・斤部 p240-9	kur sembi	虎がウオーと吼える
521	虤	申・虎部 p139-4	kur sembi	虎がウオーと吼える
522	虤	申・虎部 p140-7	kur sembi	虎がウオーと吼える
523	虤	申・虎部 p144-10	kur sembi	虎がウオーと吼える
524	虤	申・虎部 p144-11	kur sembi	虎がウオーと吼える
525	潜	丑・口部 p74-1	kutung	どたん、大きなものが落ちる音
526	奚	丑・口部 p8-1	kūwak cak	棍棒で打ち合う音
527	鉤	戌・金部 p40-6	kūwang cang	鐘や太鼓がどんだんがんと鳴り響く
528	韻	戌・音部 p211-5	kūwang cang	鐘鼓のドンチャンドンチャン鳴る音
529	昏	丑・口部 p19-5	kūwang cang sembi	どんちゃんする、銅鑼が一斉になる
530	訇	酉・言部 p38-7	kūwang sembi	大声でがんがん言う
531	諠	酉・言部 p69-6	kūwang sembi	大声でがんがん言う
532	樓	辰・裙部 p215-6	kūwang sere uran	コーンと言う響き
533	砉	午・石部 p215-3	kūwar sembi	グワッと言う音
534	砉	午・石部 p228-2	kūwar sembi	ビリビリと言う音
535	砉	午・石部 p221-2	kūwar sembi	石が砕ける音
536	砉	午・石部 p223-10	kūwar sembi	石が割れる音

537	磧	午・石部 p236-2	kūwar sembi	石が砕ける音
538	礧	午・石部 p245-9	kūwar sembi	石が割れる音
539	玃	午・石部 p213-1	kūwar seme	石がガタンと砕ける
540	躑	酉・足部 p213-6	kūwas kis seme	ざっざっと行く
541	礧	午・石部 p224-2	kūwata kiti sere uran	ガタンと言う響き
542	飡	戌・食部 p257-4	lab sembi	酒や飯をガバガバ飲み食いする
543	饗	午・穴部 p311-10	lab seme	がつがつと食べる
544	梶	巳・水部 p20-5	lar lir sembi	人が沢山いる様
545	嗶	寅・巾部 p119-10	lekde lakda	衣服がボロボロで垂れ下がった様
546	將	寅・巾部 p133-4	lekde lakda	服などが破れてだらりと下がっている
547	弋	寅・巾部 p141-1	lekde lakda	服などが破れてだらりと下がっている
548	睿	寅・彳部 p202-3	lekde lakda	服などが破れてだらりと下がっている
549	碾	寅・彳部 p204-7	lekde lakda	服などが破れてだらりと下がっている
550	緞	未・糸部 p122-7	lekde lakda	だらりと
551	珀	丑・口部 p85-8	lele sembi	豚を呼ぶ時 lele と言う
552	𪔐	丑・口部 p87-10	lele sembi	豚を呼ぶ時 lele と言う
553	𪔑	丑・口部 p95-5	lele sembi	豚を呼ぶ時 lele と言う
554	隗	子・人部 p86-1	ler sembi	どっしりと
555	枷	丑・口部 p47-7	ler sembi	どっしりと、しみじみと
556	皇	丑・女部 p209-11	ler sembi	ひらりと、しみじみと
557	𪔒	酉・言部 p59-4	ler sembi	穏やかに
558	霽	戌・雨部 p157-4	ler seme	シトシトと雨が降る
559	躑	酉・足部 p216-6	ler seme	どっしりと行動する、静々と行動する
560	颯	戌・風部 p249-2	ler seme	そよそよと風が吹く
561	邐	酉・辵部 p283-10	ler seme	ゆっくりと行く

562	姉	子・人部 p97-6	lete lata	続々と
563	溜	寅・弓部 p184-1	liyar sembi	飯がやや粘る
564	訕	酉・言部 p43-9	lolo sembi	たわいもない事をべらべらし ゃべる
565	譏	酉・言部 p59-10	lolo seme	たわいもない話が終わらない
566	瀨	巳・火部 p147-7	ludur sembi	むしむしと
567	鞞	戌・韋部 p204-8	ludur seme	むしむしと暑い
568	渭	丑・口部 p71-3	lulu lala	ぐずぐずだらだら
569	嚙	丑・口部 p92-4	lulu seme	平凡に話す
570	誌	巳・水部 p77-5	lur sembi	油がどろりとする様
571	辨	巳・牛部 p203-4	meng mang sembi	牛がモーモーと鳴く
572	籃	辰・欠部 p176-8	meng mang seme	ケーン・ケーンと鹿が鳴く、 呦呦と鹿が鳴く
573	咩	丑・口部 p25-1	miyang ming	鹿や子羊がメエメエ鳴く
574	咪	丑・口部 p25-2	miyang ming	鹿や子羊がメエメエ鳴く
575	養	丑・口部 p34-10	miyang miyang	羊や小児の鳴き声
576	漣	丑・口部 p73-7	miyang miyang	羊の泣く声
577	帑	丑・口部 p19-8	miyar miyar	乳を求めて子供達が泣く
578	呆	丑・口部 p23-3	miyar miyar	乳児の泣く声
579	𦍋	申・艸部 p7-9	miyar miyar sembi	羊がメエメエ鳴く
580	溶	丑・口部 p66-1	mung mang	もうもう、牛鹿の鳴く声
581	嶮	丑・口部 p17-6	mung mang sembi	鹿、牛がモウモウと鳴く
582	參	巳・牛部 p207-4	mung mang sembi	牛がモーモーと鳴く
583	叔	丑・女部 p230-7	ningning niyangniyang	女性の嫺やかな様子
584	吟	丑・口部 p22-3	o	おう、応答の声
585	孱	丑・口部 p16-10	o sere jilgan	オと言う声
586	癩	丑・口部 p93-4	or	猛虎の鳴く声
587	𧈧	辰・日部 p40-9	or	猛虎の声
588	拏	丑・口部 p37-1	or ir	ラマ僧、僧侶の読経の声
589	獠	巳・犬部 p258-8	or sembi	ウォーと言う猛獣の声
590	獠	酉・豸部 p127-1	or sembi	ウォーと吼える
591	狄	巳・犬部 p226-2	oyo oyo sembi	子犬を呼ぶとき oyo oyo と言う
592	眞	丑・口部 p95-6	pak	爆竹等が炸裂する音、硬い物 を地面に投げた音
593	鑷	戌・金部 p71-5	patak sembi	ポトンと落ちる音

594	磬	午・石部 p228-8	patak sembi	石が落ちるゴトンと言う音
595	炭	午・石部 p236-5	patak sembi	石が落ちてポトンと音がする
596	杏	丑・口部 p22-5	pei sembi	ペッペッと唾を吐く音
597	音	丑・口部 p22-6	pei sembi	ペッペッと唾を吐く音
598	筥	丑・口部 p104-8	pei sembi	ペツと言う
599	憫	丑・口部 p31-7	pei seme	ペツと唾を吐く
600	脬	未・肉部 225-6	ping sembi	腹が張る
601	矜	寅・彳部 p203-4	piyas pis sembi	おたおたする、行動が軽薄
602	趨	酉・走部 p165-9	piyas pis sembi	行動の軽佻なさま、うろうろ おたおた
603	進	巳・水部 p106-5	pocok sembi	どぼん、水中に物が落ちる音
604	吩	丑・口部 p13-2	pu	物を吹く音、ぷー
605	呬	丑・口部 p21-2	pu sembi	ぷーと言う
606	戌	丑・口部 p34-2	pu sembi	ぷつと言う、息を吹きかける
607	扎	丑・口部 p35-3	pu sembi	プツという
608	攘	丑・口部 p41-8	pu sembi	プツと言う
609	柞	丑・口部 p48-6	pu sembi	プツと言う
610	檣	丑・口部 p57-6	pu sembi	ぷつと言う
611	殲	丑・口部 p64-7	pu sembi	プツと言う
612	桐	辰・欠部 p177-10	pu sembi	プっと、物を吹く音
613	耙	辰・欠部 p187-11	pu sembi	プツと吹く
614	愷	丑・口部 p57-1	pu sere tucire sukdu	ぷつと吐く出す息
615	矣	丑・口部 p97-4	pu sere tucire sukdu	ぷつと外に出る息
616	齧	戌・香部 p290-11	pu sere wa sain	齧醇と香りが良い
617	翯	未・羽部 180-6	pur par	鳥が急に飛ぶたつ
618	翯	未・羽部 180-10	pur par	鳥が急に飛ぶたつ
619	翯	未・羽部 179-1	pur par sembi	鳥が急に飛ぶたつ音
620	隳	未・羽部 179-2	pur par sembi	鳥が急に飛ぶたつ音
621	岨	子・彳部 p129-4	pur seme	鳥がぱつと飛ぶ
622	綜	子・彳部 p132-8	pur seme	ぱつと飛ぶ
623	脩	未・羽部 176-2	pur seme	バタバタと羽音をたてて飛ぶ
624	翮	未・羽部 183-1	pur seme	バタバタと羽音をたてて飛ぶ

625	翾	未・羽部 183-7	pur seme	バタバタと羽音をたてて飛ぶ
626	磔	午・石部 p227-6	putu pata	小石碎石がポトポト落ちる
627	翹	未・羽部 179-4	putur seme	大鳥がバサッと飛び立つ音
628	游	丑・口部 p73-1	šakšari	にっこりと
629	皜	午・白部 p135-4	šar sembi	鳥の羽毛が白い
630	霽	戌・雨部 p154-2	šar sembi	霜雪が真っ白な
631	則	子・彳部 p134-4	šar sembi	霜や雪が白く積もる
632	走	子・彳部 p133-4	šar sembi	霜や雪で霏々と真っ白になる
633	散	巳・水部 p72-2	šar sembi	霜雪が真っ白
634	霏	戌・雨部 p144-2	šar sembi	白雲或いは積雪が白々として いる
635	皤	午・白部 p129-5	šar sembi	草花が真っ白
636	皤	午・白部 p132- 12	šar sembi	白鳥を慈しむ
637	皤	午・白部 p134-3	šar sembi	白っぽい様
638	皤	午・白部 p135-3	šar sembi	白っぽい様
639	皤	午・白部 p135-9	šar sembi	白っぽい様
640	皤	戌・面部 p171-2	šar seme	顔がぬけるように白い
641	悍	丑・口部 p27-10	sar seme	サメザメ泣き止らない
642	皤	午・白部 p130-9	šar seme	深い白
643	皤	午・白部 p133-3	šar seme	深い白
644	皓	午・白部 p131-2	šar seme	深い白
645	璿	午・玉部 p42-4	šar sere šanyan	玉の色が心に滲みる
646	璿	午・玉部 p31-9	šar sere šanyan boco gu	心に滲みるほどの白玉
647	皤	午・白部 p129-1	šar sere šeyen	深い白
648	蟻	申・虫部 p197-3	serben sarban	虫がうじゃうじゃいる
649	洵	辰・木部 p132-3	šari siri	草がさらさらと靡く
650	毳	辰・木部 p128-3	šari siri	パッと花が咲く様
651	皖	辰・木部 p160-4	šari siri	パッと花が咲く
652	評	卯・方部 p246-6	šari siri	大小の旗が風になびく
653	夫	卯・方部 p247- 10	šari siri	大小の旗が風になびく
654	符	卯・方部 p249-1	šari siri	大小の旗が風になびく
655	負	卯・方部 p249-5	šari siri	大小の旗が風になびく
656	武	卯・方部 p250-2	šari siri	大小の旗が風になびく

657	粘	申・衣部 p234-10	šari širi	着物がぱっと動く
658	蝕	巳・水部 p100-6	sebe saba agambi	ポツリポツリと雨が降る
659	零	戌・雨部 p144-3	sebe saba agambi	ポツリポツリと雨が降る
660	頤	戌・頁部 p219-2	šehun šahūn	顔が明るく輝く
661	颯	戌・風部 p244-9	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
662	颯	戌・風部 p245-8	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
663	颯	戌・風部 p247-11	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
664	颯	戌・風部 p248-2	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
665	颯	戌・風部 p248-5	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
666	颯	戌・風部 p251-9	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
667	颯	戌・風部 p252-2	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
668	颯	戌・風部 p253-6	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く
669	慣	子・人部 p37-4	ser sembi	細々、こまごま
670	蚺	寅・小部 p35-11	ser sembi	細々と
671	恁	寅・彡部 p144-4	ser sembi	区々とした、細かい
672	微	寅・彡部 p202-7	ser sembi	微細な、細々と
673	礪	寅・彡部 p204-2	ser sembi	微細な、細々と
674	縵	未・糸部 p118-8	ser sembi	細々と、かすかに
675	霰	戌・雨部 p159-11	ser sembi	シトシト
676	鞮	戌・革部 p192-9	ser sembi	細々と、かすかに
677	泚	丑・口部 p72-1	ser seme	細々と
678	癩	丑・口部 p93-1	ser seme	細々と
679	积	巳・水部 p81-8	ser seme	しとしとと絶える事なく雨が降る
680	馥	戌・香部 p289-8	ser seme	香の香りがほのかに香る
681	索	巳・水部 p69-3	ser seme agambi	小雨が降る
682	札	巳・水部 p70-3	ser seme agambi	小雨が降る
683	暫	巳・水部 p73-1	ser seme agambi	小雨が降る
684	酢	巳・水部 p101-9	ser seme agambi	小雨が降る
685	奪	巳・水部 p126-2	ser seme agambi	小雨が降る
686	霰	戌・雨部 p142-11	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る

687	霰	戌・雨部 p143-2	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
688	霏	戌・雨部 p146-12	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
689	霂	戌・雨部 p147-2	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
690	霃	戌・雨部 p148-7	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
691	霄	戌・雨部 p149-5	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
692	霅	戌・雨部 p153-7	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
693	霆	戌・雨部 p153-8	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
694	霈	戌・雨部 p155-1	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
695	霑	戌・雨部 p158-8	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
696	霒	戌・雨部 p159-2	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
697	飭	戌・雨部 p160-3	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
698	霽	戌・雨部 p162-6	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
699	霽	戌・雨部 p162-8	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る
700	颯	戌・風部 p243-4	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
701	颯	戌・風部 p244-2	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
702	飜	戌・風部 p244-7	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
703	颯	戌・風部 p245-5	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
704	颯	戌・風部 p245-6	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
705	颯	戌・風部 p245-7	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
706	颯	戌・風部 p245-10	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
707	颯	戌・風部 p245-11	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
708	颯	戌・風部 p246-11	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
709	颯	戌・風部 p247-1	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
710	颯	戌・風部 p249-9	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
711	颯	戌・風部 p250-10	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
712	颯	戌・風部 p254-8	ser seme dambi	そよそよと風が吹く
713	么	寅・么部 p144-1	ser sere ba	区々たる場所、小さな場所
714	銹	戌・金部 p39-10	ser sere hangga	わずかな銹

715	郭	卯・戈部 p105-4	serben sarban	うようよと、多くの虫が動くさま
716	暉	午・目部 p181-3	sir sembi	涙がハラハラと出る
717	灼	寅・巾部 p128-3	sir siyar	手巾が風に合わせて、ひらひらと舞う
718	薹	申・艸部 p45-1	sir siyar sembi	草がさわさわと音を立てる
719	簦	未・竹部 p41-3	sir siyar sembi	樹や草がざわざわと音を立てる
720	葦	申・艸部 p101-3	sir siyar sembi	サワサワ、ザワザワ
721	俵	子・人部 p68-6	son son	ばらばらに宿衛する、ばらばらに立つ
722	霏	戌・雨部 p149-6	sor sar sembi	雨雪がしんしんと降る
723	霏	戌・非部 p166-1	sor sar sembi	毛がバラバラと乱れる
724	霏	戌・雨部 p143-8	sor sar seme	しんしんと雪が降る
725	諠	酉・言部 p74-10	sor sembi	甚だ多い
726	軫	酉・車部 p235-1	šor sembi	車が疾駆する
727	霂	巳・水部 p31-9	šor seme	しとしとと雨が降る
728	霂	巳・水部 p122-6	šor seme	しとしとと雨が降る
729	霂	巳・水部 p129-8	šor seme	しとしとと雨が降る
730	霂	戌・雨部 p142-4	šor seme	シトシトと雨が降る
731	霂	戌・雨部 p142-12	šor seme	シトシトと雨が降る
732	霂	戌・雨部 p147-5	šor seme	シトシトと雨が降る
733	霂	戌・雨部 p147-9	šor seme	シトシトと雨が降る
734	霂	戌・雨部 p147-10	šor seme	シトシトと雨が降る
735	霂	戌・雨部 p150-8	šor seme	シトシトと雨が降る
736	霂	戌・雨部 p153-3	šor seme	シトシトと雨が降る
737	霂	戌・雨部 p153-11	šor seme	シトシトと雨が降る
738	霂	戌・雨部 p154-1	šor seme	シトシトと雨が降る
739	霂	戌・雨部 p163-2	šor seme	シトシトと雨が降る
740	軫	酉・車部 p237-4	šor seme sejen	パカパカと進む車
741	齁	丑・口部 p65-5	šung šang	ぐうぐう、眠り声

742	啡	戌・非部 p165-3	šung šang sembi	スウスウ、グウグウと言う寝息
743	齡	戌・香部 p288-8	sur seme	鼻を打つような芳香があった
744	糲	丑・口部 p108-6	šuwak sik	ピシッと鞭を当てた音
745	鯉	巳・水部 p21-6	tab tib	水が地にぼたぼた落ちる
746	嶝	辰・木部 p75-2	tak tik sembi	擬声語、カーンカーンと木を切る音
747	闐	戌・門部 p92-11	tang sembi	太鼓がトンと鳴る
748	鑼	戌・音部 p212-2	tang tang sembi	鐘がゴーンと鳴る
749	聿	卯・心部 p32-5	tar sembi	心がハッと驚く
750	員	卯・心部 p90-5	tar sembi	心にハッと驚く
751	臀	卯・心部 p36-8	tar sembi	気後れする
752	舁	卯・心部 p38-3	tar sembi	気後れする
753	趨	酉・走部 p170-9	tebke tabka	よちよち歩く様
754	誣	酉・言部 p54-2	teng sembi	毅然と、しっかりと
755	罈	午・白部 p133-8	teng sembi	固い、毅然と、強く
756	磴	午・石部 p223-6	teng seme ilimbi	毅然と立つ
757	磴	午・石部 p240-2	teng seme ilimbi	毅然と立つ
758	肱	未・肉部 218-4	tob sembi	体をシャキリとさせる
759	全	卯・手部 p198-9	tob seme	正に矢を射んとする
760	闔	戌・門部 p89-6	tob seme	正しく開かない
761	眦	戌・青部 p163-10	tob seme	正視する
762	僅	巳・水部 p41-7	tor sembi	水がくるくると回るさま
763	好	巳・水部 p56-3	tor sembi	水がくるくる回る様
764	鑿	戌・金部 p70-11	tung tang	鐘の音がトントン鳴る
765	闐	戌・門部 p92-6	tung tang	鐘太鼓がカンカントントン
766	鉞	丑・口部 p94-7	tung tang	鐘太鼓の音
767	鞞	戌・革部 p179-7	tung tang sembi	鐘太鼓の音、ドンドンカンカンと鳴る
768	鞞	戌・革部 p190-7	tung tang seme	カンカンドンドンと言う鐘や太鼓の音
769	誅	辰・裙部 p218-6	tung tung	太鼓の音、とんとん
770	鑿	戌・金部 p54-5	tung tung	太鼓の響き、ドンドン
771	韻	戌・音部 p211-8	tung tung sembi	鐘がカンカンと鳴る

772	鑿	戌・金部 p63-7	tung tung sembi	太鼓がトントンとなる
773	鞞	戌・革部 p192-10	tung tung sembi	太鼓がトントンと鳴る
774	鋒	戌・音部 p211-1	tung tung sembi	太鼓がトントンと鳴る
775	鏜	戌・音部 p212-1	tung tung sembi	太鼓がトントンと鳴る
776	鏜	戌・金部 p52-11	tung tung tang tang	鐘の音、ゴーンドーン
777	譎	酉・言部 p89-9	ulu wala	言葉が聞き取りにくい
778	譎	酉・言部 p94-4	ulu wala	あいまいな、聞き取りにくい
779	宙	巳・水部 p131-3	umburi cumburi sembi	波が押し寄せたり退いたりするさま、幾重にも層をなしている浪
780	鈇	戌・金部 p12-7	ung sembi	鐘のゴーンと言う音
781	鎗	戌・金部 p39-11	ung sembi	鐘がゴーンとなる
782	鎗	戌・金部 p45-7	ung sembi	鐘のゴーンと言う音
783	鏐	戌・金部 p64-11	ung sembi	鐘のゴーンと言う音
784	吼	丑・口部 p15-9	ung wang	鼻音、吼える音
785	彪	丑・口部 p16-1	ung wang	鼻音、吼える音
786	擗	丑・口部 p59-7	ung wang	鼻音
787	睥	寅・彳部 p202-2	urhuri haihari	ぶらりぶらりと
788	矚	寅・彳部 p203-1	urhuri haihari	ぶらりぶらりと
789	迤	酉・辵部 p268-5	urhuri haihari	ぶらりぶらりと
790	透	酉・辵部 p278-5	urhuri haihari	ぶらぶらと行く
791	働	丑・口部 p29-4	wer wer	犬を呼ぶ声
792	簇	辰・欠部 p175-6	wer wer	犬を呼ぶ声
793	粵	辰・欠部 p177-6	wer wer	犬を呼ぶ声
794	鍤	戌・金部 p47-8	yang sembi	鐘がゴーンと鳴る
795	謔	酉・言部 p74-5	yang sere asuki	蚊などが飛ぶブンブンと言う音
796	碓	午・石部 p231-3	yang yang	大鐘がゴーンゴーンと響く
797	嚙	子・人部 p35-1	yar sembi	毛、頭髪が長い事を言う
798	奇	巳・水部 p29-3	yar sembi	水がチョロチョロと流れる
799	給	巳・水部 p35-5	yar sembi	水がチョロチョロと流れる
800	穀	巳・水部 p63-6	yar sembi	水がチョロチョロ流れる
801	失	巳・水部 p77-12	yar sembi	水がちよろちよろ流れる
802	射	巳・水部 p79-9	yar sembi	水がちよろちよろ流れる

803	侘	丑・口部 p88-9	yar sembi	縷々話す
804	異	辰・毛部 p234-7	yar seme	髪の毛がさらさらとして美しい
805	睡	戌・長部 p74-11	yar seme	髪がサラリとして美しい
806	検	巳・水部 p52-3	yar seme	水がさらさらと音を響かせている
807	匏	寅・ㇿ部 p113-9	yar seme eyembi	さらさらと流れる
808	良	巳・水部 p66-4	yonggor sembi	水が絶えず流れる様
809	捨	巳・水部 p79-11	yonggor sembi	水が絶えず流れる様
810	酒	巳・水部 p83-7	yonggor sembi	絶えず流れる様
811	拳	巳・水部 p51-10	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様
812	源	巳・水部 p54-8	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様
813	貢	巳・水部 p60-11	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様
814	況	巳・水部 p39-3	yumbu sembi	洋洋たる、大水がゆったりと流れる様
815	社	巳・水部 p80-3	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様
816	警	巳・水部 p48-6	yur sembi	雲が絶えず湧き起こる
817	霽	戌・雨部 p155-4	yur sembi	雲がもくもくと湧く
818	企	巳・水部 p28-7	yur sembi	大きな溝の水が休みなく流れる様
819	河	巳・水部 p11-1	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる
820	伎	巳・水部 p28-8	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる
821	嬉	巳・水部 p29-4	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる
822	亀	巳・水部 p32-7	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる
823	禽	巳・水部 p42-6	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる
824	賞	巳・水部 p96-7	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる
825	象	巳・水部 p96-8	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる

826	仁	巳・水部 p106-10	yur sembi	細い水の流りが絶え間なく流れる
827	逝	巳・水部 p108-6	yohoron muke hūwar sembi	細い水の流りが絶え間なく流れる

付表2：

『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』—研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）における「sembi」を伴うオノマトペ

	漢字	所在	満州語の解釈	満州語の日本語訳	分類
1	糶	辰・欠部 p178-8	ai sembi	嘆じる様、うーんと	聲
2	蘭	巳・父部 p190-1	ai sembi	あーと言う歎息の声	聲
3	奂	丑・口部 p7-9	ara sembi	おや、あらと言う	聲
4	咸	寅・工部 p116-9	bing sembi	腹がグーッと言う	音
5	隈	丑・女部 p193-3	bodor sembi	くどくどと	様
6	角	巳・水部 p18-10	bur bur sembi	ぶくぶくと沸き上がる様	音・様
7	肱	未・肉部 208-4	cafur cifur sembi	肉の口当たりが良い、つるつる	様
8	憾	巳・水部 p25-5	cir sembi	細く勢い良く噴き出す様、ピュッと	音・様
9	艶	未・色部 290-8	fur sembi	顔が爽やか	様
10	眇	未・色部 290-11	fur sembi	顔が爽やか	様
11	岌	巳・水部 p60-8	cor sembi	絶え間なく噴き出る	音
12	敢	巳・水部 p25-6	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る	音
13	紅	巳・水部 p59-7	cor sembi	水が絶えず噴き出す様	音
14	講	巳・水部 p60-10	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る	音
15	偲	巳・水部 p79-1	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る	音
16	秋	巳・水部 p85-10	cor sembi	水が絶え間なく噴き出る	音
17	警	丑・口部 p63-1	cu sembi	しっ、犬や猫を追う声	聲
18	趨	酉・走部 p168-1	cung sembi	向う見ずに、しゃにむに	様
19	良	子・人部 p88-11	darang sembi	体が長い様	様
20	偲	子・人部 p104-3	darang sembi	体が長い様	様
21	竣	子・人部 p112-11	darang sembi	体が長い様	様
22	眇	酉・身部 p222-3	darang sembi	体が長々としたさま	様
23	胤	酉・身部 p224-10	darang sembi	体が長々としたさま	様
24	卿	酉・身部 p226-1	darang sembi	体が長々としたさま	様
25	躡	酉・身部 p226-4	darang sembi	体が長々としたさま	様
26	跼	戌・長部 p73-5	darang sembi	長々と、のびのびと	様

27	幫	酉・見部 p22-10	darang sembi	牛の両角が長い様	様
28	藿	申・艸部 p133-9	dung dung sembi	鼓鳴、ドンドント言う太鼓の音	音
29	档	丑・口部 p50-3	dur sembi	わいわいがやがや	様
30	伯	丑・口部 p22-4	dze dze sembi	犬が吠えてワンワンと鳴く	鳴き声
31	啊	丑・口部 p44-3	e o sembi	ええ、おうと言う	聲
32	讙	戌・音部 p212-7	ei ei sembi	オイオイと泣く	聲
33	蔦	寅・尤部 p40-2	ek sembi	行くのを厭う	? 動詞?
34	偶	子・人部 p61-3	fak sembi	体ががっちりしている、疲労でぐったりとした様	様
35	群	子・人部 p64-2	far sembi	うようよ群がる	様
36	箴	辰・欠部 p174-2	fer far sembi	ひよろひよると、ふにやふにやと	様
37	予	寅・山部 p95-5	fik sembi	山が稠密である	様
38	夭	丑・大部 p163-6	fur fur sembi	爽やか、みずみずしい	様
39	篔	辰・欠部 p174-4	fur sembi	晴れ晴れと、爽やかに	様
40	篔	辰・欠部 p175-8	fur sembi	晴れ晴れと、爽やかに	様
41	廡	丑・口部 p22-8	fur sembi	花の香りが爽やかであることを言う	様
42	醉	未・肉部 237-5	fusur sembi	肌のきめが粗い	様
43	廻	丑・大部 p167-10	gang gang sembi	犬がキャンキャン鳴く	鳴き声
44	枳	丑・口部 p47-6	gejing sembi	くどくど言う	様
45	歿	丑・口部 p63-3	gejing sembi	くどくど言う	様
46	獮	巳・犬部 p255-6	ger sembi	吠える声	鳴き声
47	宦	巳・犬部 p226-4	ger sembi	犬が吠える声	鳴き声
48	宸	巳・犬部 p226-5	ger sembi	犬が吠える声	鳴き声
49	狻	巳・犬部 p227-10	ger sembi	犬が吠える声	鳴き声
50	聒	未・耳部 201-9	gib sembi	グワーンと耳が振動する様	音・様
51	筧	戌・食部 p268-1	gior sembi	腹を空かせてグウグウと言う	音
52	父	子・力部 p175-9	gujung sembi	せっせと	様
53	塤	子・力部 p179-4	gujung sembi	せっせと	様
54	諛	酉・言部 p76-5	gūlu gala sembi	ひそひそ話す	様
55	蕤	申・艸部 p64-5	h'o sembi	豚がグウと鳴く声	鳴き声

56	舜	子・人部 p112-12	hao hio sembi	狭い様	?
57	褻	丑・土部 p137-11	hao hio sembi	ホッとする	?
58	贛	卯・心部 p73-12	hao hio sembi	ふっと溜め息をつく	?
59	奄	卯・心部 p94-10	hing sembi	心を込めた、誠心誠意	様
60	侍	子・人部 p101-8	hing sembi	一心に、評を参照	様
61	衽	卯・心部 p56-1	hing sembi	心を込めて、一心に	様
62	蠶	卯・心部 p59-11	hing sembi	心を込めて、一心に	様
63	慥	卯・心部 p70-10	hing sembi	心を込めて、一心に	様
64	忒	卯・段部 p234-2	hing sembi	心を込める、一心に	様
65	篤	未・竹部 p40-5	hing sembi	心を込めて、一心に	様
66	肫	未・肉部 212-5	hing sembi	心を込めて	様
67	喝	丑・口部 p54-2	hiyang sembi	ヒャンと嘶きの声	鳴き声
68	櫃	丑・口部 p59-5	hiyang sembi	コラッと叱る	様
69	犹	丑・口部 p81-7	hiyang sembi	コラッと叱る	様
70	讒	酉・言部 p75-1	hiyang sembi	コラッと叱る声	様
71	習	酉・言部 p48-3	hiyūk sembi	称赞する	?
72	沃	酉・言部 p35-1	ho ha sembi	寒い時に出す、は一は一と言 う声	聲
73	錄	戌・金部 p47-2	holor sembi	鈴がジャランと鳴る	音
74	鐵	戌・金部 p61-3	holor sembi	鈴ががらんがらんと鳴る	音
75	蚕	巳・水部 p72-6	hoo sembi	河水が澎湃たる様	様
76	切	巳・水部 p108-7	hoo sembi	水が澎湃たる様	様
77	莊	巳・水部 p118-8	hoo sembi	河が澎湃と流れる	様
78	卓	巳・水部 p123-11	hoo sembi	水が澎湃たる様	様
79	技	巳・水部 p33-5	hoo sembi	早瀬が轟々と流れる様	様
80	定	巳・火部 p137-5	hūng sembi	火がボーっと起こる	様
81	埋	巳・火部 p180-2	hūng sembi	火がボーっと起こる	様
82	潰	巳・火部 p136-5	hūng sembi	火がボーっと起こる	様
83	泥	巳・火部 p138-9	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー	音
84	摘	巳・火部 p138-10	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー	音
85	曇	巳・火部 p148-5	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー	音

86	輩	巳・火部 p155-3	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー	音
87	箸	巳・火部 p157-5	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー	音
88	塙	巳・火部 p159-4	hūr hūr sembi	火勢の音、パチパチ、ボー	音
89	滴	巳・火部 p138-12	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴ ー	様
90	童	巳・火部 p146-4	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴ ー	様
91	繩	巳・火部 p149-9	hūr sembi	火勢の音、ゴウゴウ、ぼー	様
92	農	巳・火部 p152-10	hūr sembi	火勢の音、ゴウゴウ、ぼー	様
93	弼	巳・火部 p164-1	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴ ー	様
94	筆	巳・火部 p164-4	hūr sembi	炎の燃え上がるさま、ゴーゴ ー	様
95	穀	酉・赤部 p149-11	hūr sembi	火の様、ごうごう	様
96	筓	巳・水部 p32-3	hūwai sembi	大水洋洋たる様	様
97	芒	申・艸部 p9-4	hūwai sembi	大河が澎湃と流れる様	様
98	苳	申・艸部 p9-5	hūwai sembi	大河が澎湃と流れる様	様
99	郭	巳・水部 p19-2	hūwai sembi	澎湃と、洋洋と	様
100	承	巳・水部 p93-4	hūwai sembi	澎湃たる様	様
101	暢	巳・水部 p133-1	hūwai sembi	澎湃と、洋洋と	様
102	艶	丑・土部 p123-2	hūwai sembi	水の洋々とした	様
103	歌	巳・水部 p10-10	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
104	居	巳・水部 p35-10	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
105	漁	巳・水部 p36-10	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
106	梗	巳・水部 p58-5	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
107	堺	巳・水部 p67-5	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
108	集	巳・水部 p87-6	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
109	曙	巳・水部 p87-9	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
110	遡	巳・水部 p115-1	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
111	茫	申・艸部 p25-2	hūwai sembi	水が澎湃たる様	様
112	主	巳・水部 p82-6	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
113	迅	巳・水部 p101-4	hūwalar sembi	さらさらと流れる様	音
114	晏	丑・口部 p46-4	hūwalar sembi	船櫂を漕ぐ時ザブザブ言う事	音

115	雁	巳・水部 p28-3	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
116	戟	巳・水部 p49-2	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
117	溝	巳・水部 p59-1	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
118	皇	巳・水部 p59-3	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
119	昆	巳・水部 p65-8	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
120	守	巳・水部 p82-8	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
121	請	巳・水部 p108-5	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
122	煎	巳・水部 p111-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
123	挿	巳・水部 p116-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
124	陀	巳・水部 p121-8	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
125	知	巳・水部 p129-6	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
126	注	巳・水部 p131-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
127	槻	巳・水部 p135-9	hūwalar sembi	水がさらさらと流れる様	音
128	艶	巳・水部 p6-6	hūwanger sembi	水が音を立てて流れる様	様
129	貨	巳・水部 p12-5	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様	様
130	回	巳・水部 p14-7	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様	様
131	攪	巳・水部 p18-2	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様	様
132	先	巳・水部 p110-2	hūwanger sembi	水が轟々と流れる様	様
133	格	巳・水部 p18-4	hūwanger sembi	轟々と流れる様	様
134	欽	巳・水部 p44-4	hūwanger sembi	大水が轟々と流れる	様
135	桑	巳・水部 p44-5	hūwanger sembi	大水が轟々と流れる	様
136	姿	巳・水部 p74-5	hūwanger sembi	大水が轟々と流れる	様
137	商	巳・水部 p91-9	hūwanger sembi	大水が轟々と流れ	様
138	壯	巳・水部 p115-8	hūwanger sembi	高台から水が轟々と流れる	様
139	巖	丑・口部 p18-1	hūwar sembi	船を漕ぎ曳く時に言う	音
140	奥	巳・水部 p7-9	hūwar sembi	水が激しく流れる	様
141	懐	巳・水部 p15-6	hūwar sembi	水がさらさら流れる	様
142	豎	巳・水部 p126-7	hūwar sembi	水がさらさら流れる	様
143	墓	卯・斤部 p242-4	hūwar sembi	谷間の水の流れがさらさらと音を立てる	様
144	皮	卯・斤部 p243-1	hūwar sembi	谷間の水の流れがさらさらと音を立てる	様
145	蕪	丑・口部 p17-5	ja ji sembi	わいわい言う	様
146	誠	酉・言部 p87-1	ja ji sembi	わいわいがやがや言う	様
147	謹	酉・言部 p87-10	ja ji sembi	わいわいがやがや言う	様

148	齶	戌・音部 p211-7	ja ji sembi	がやがや言う	様
149	訶	酉・言部 p56-2	jar sembi	大勢がかけ声を出す、エンヤ コラ	聲
150	孩	丑・口部 p13-1	jor sembi	わいわいがやがや言う	様
151	磧	午・石部 p249- 6	kacar kicir sembi	砂をかむ様	音
152	錨	子・力部 p173- 12	kakūng sembi	ガタンと言う	?
153	藹	申・艸部 p124- 11	kalar sembi	和気藹々、仲睦まじい	様
154	濤	丑・口部 p68-6	kang sembi	がやがやと高い声で話す	様
155	羶	辰・欠部 p187- 10	kang sembi	声高に言う	様
156	蹙	酉・足部 p211-2	kata kiti sembi	地を踏みカタカタと言う	音
157	蹙	酉・足部 p214-7	kata kiti sembi	地を踏んでカタカタと足音を 立てる	音
158	蹣	酉・足部 p216- 10	kata kiti sembi	地を踏みがたがたと言う	音
159	喃	子・又部 p216-3	katak kitik sembi	物が上から落ちてガチャンと 言う	音
160	甌	午・瓦部 p57-9	katak sembi	擬声語、カタカタ	音
161	躡	酉・足部 p200-2	katang sembi	地を踏むカタンと言う音	音
162	鞣	戌・革部 p193-1	katang sembi	皮がカチンカチンに硬い	様
163	鞣	戌・革部 p197-5	katang sembi	皮がカチンカチンに硬い	様
164	絢	辰・欠部 p181-6	ke sembi	オヤツと言う	聲
165	籟	辰・欠部 p177-2	keb kab sembi	睦まじく、懇ろに	様
166	蠢	卯・心部 p59-8	keb kab sembi	むつまじく、ねんごろに	様
167	膏	子・人部 p85-2	keb sembi	睦まじい	様
168	膽	卯・心部 p36-6	kek sembi	気に入る、思い通りになる	様
169	衢	卯・心部 p60-8	keng sembi	思い通りになる	様
170	衛	卯・心部 p60-9	keng sembi	思い通りになる	様
171	軋	酉・車部 p238-9	kikūr sembi	がらがらと言う車の音	音
172	輦	酉・車部 p248-9	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音
173	輓	酉・車部 p249-1	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音
174	輓	酉・車部 p249-2	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音

175	輶	酉・車部 p251-6	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音
176	輶	酉・車部 p256-3	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音
177	輶	酉・車部 p256-7	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音
178	輶	酉・車部 p257-4	kikūr sembi	がらがらと言う車の音	音
179	輶	酉・車部 p258-6	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音
180	輶	酉・車部 p259-4	kikūr sembi	がらがらと言う車の音	音
181	輶	酉・車部 p249-9	kikūr sembi	車のぎいぎいと言う音	音
182	輶	酉・車部 p253-3	kikūr sembi	ぎいぎいと言う音	音
183	輶	酉・車部 p257-6	kikūr sembi	車のぎいぎいと言う音	音
184	趨	酉・走部 p169-8	kiyab kib sembi	きびきびと、てきぱきと	様
185	筭	未・竹部 p35-4	kiyak sembi	ぼきんと折れる音	音
186	詰	酉・言部 p40-4	kiyarkiya sembi	べちやくちやとしゃべる	様
187	精	卯・手部 p192-2	kob sembi	矢が命中した様	様
188	糊	丑・口部 p49-6	koko sembi	鶏がコッコと鳴く	鳴き声
189	拒	巳・水部 p36-2	konggor sembi	ごうごうと急流が流れる様	音・様
190	士	巳・水部 p74-2	konggor sembi	ごうごうと急流が流れる様	音・様
191	攷	巳・水部 p75-3	konggor sembi	ごうごうと急流が流れる様	音・様
192	汁	巳・水部 p88-5	konggor sembi	ごうごうと	音・様
193	錠	巳・水部 p99-4	konggor sembi	ごうごうと	音・様
194	歹	丑・口部 p63-2	kor sembi	ぐうぐう、軒の音	音
195	硲	午・石部 p219-8	kung sembi	石の落ちてドスンと響く	音
196	硲	午・石部 p220-4	kung sembi	石の落ちてドスンと響く	音
197	硲	午・石部 p221-6	kung sembi	石の落ちてドスンと響く	音
198	砧	午・石部 p221-9	kung sembi	石が落ちてドスンと響く	音
199	砧	午・石部 p223-9	kung sembi	石が落ちてドスンと響く	音
200	礪	午・石部 p225-6	kung sembi	石が落ちてドスンと響く	音
201	礪	午・石部 p227-4	kung sembi	石がドスンと響く	音

202	礮	午・石部 p233-6	kung sembi	石が落ちてドスンと響く	音
203	砧	午・石部 p214-8	kung sembi	石が落ちてドスンと響く	音
204	砧	午・石部 p220-9	kung sembi	石が落ちてドスンと音を立てる	音
205	砧	午・石部 p220-10	kung sembi	石が落ちてドスンと音を立てる	音
206	砧	午・石部 p224-6	kung sembi	石が落ちてドスンと響く	音
207	碯	午・石部 p236-10	kung sembi	石がドシンと落ちる音	音
208	磅	午・石部 p237-9	kung sembi	石がドシンと落ちる音	音
209	礮	午・石部 p246-7	kung sembi	石がドシンと落ちる音	音
210	砧	午・石部 p217-8	kung sembi	石がドシンと落ちる音	音
211	礮	午・石部 p240-7	kung sembi	石の落ちてドスンと響く	音
212	砧	午・石部 p215-11	kunggur kanggar sembi	雷が鳴る音、ゴロゴロと	音
213	軋	酉・車部 p231-1	kunggur kanggar sembi	車や雷などがゴロゴロと鳴る	音
214	麟	酉・車部 p254-9	kunggur kanggar sembi	車や雷などがゴロゴロと鳴る	音
215	軋	酉・車部 p233-10	kunggur sembi	車のごろごろと言う音、馬のパカパカ行く音	音
216	軋	酉・車部 p239-8	kunggur sembi	車のごろごろと言う音、馬のパカパカ行く音	音
217	軋	酉・車部 p245-10	kunggur sembi	車のごとごとと言う音	音
218	軋	酉・車部 p235-9	kunggur sembi	車のごとごとと言う音	音
219	軋	酉・車部 p241-4	kunggur sembi	車のごとごとと言う音	音
220	軋	酉・車部 p247-1	kunggur sembi	車のごとごとと言う音	音
221	孚	巳・犬部 p225-4	kur sembi	犬がグオーと吼える	鳴き声

222	玠	丑・口部 p85-5	kur sembi	熊虎の吼えるを言う	鳴き声
223	虓	申・虎部 p139-9	kur sembi	虎がウォーと怒る	鳴き声
224	虓	申・虎部 p141-5	kur sembi	虎がウォーと怒る	鳴き声
225	虓	申・虎部 p143-1	kur sembi	虎がウォーと怒る	鳴き声
226	虓	酉・谷部 p99-12	kur sembi	虎がうおーと吼える	鳴き声
227	虓	卯・斤部 p240-9	kur sembi	虎がウォーと吼える	鳴き声
228	虓	申・虎部 p139-4	kur sembi	虎がウォーと吼える	鳴き声
229	虓	申・虎部 p140-7	kur sembi	虎がウォーと吼える	鳴き声
230	虓	申・虎部 p144-10	kur sembi	虎がウォーと吼える	鳴き声
231	虓	申・虎部 p144-11	kur sembi	虎がウォーと吼える	鳴き声
232	昏	丑・口部 p19-5	kūwang cang sembi	どんちゃんする、銅鑼が一斉になる	音
233	訇	酉・言部 p38-7	kūwang sembi	大声でがんがん言う	様
234	誼	酉・言部 p69-6	kūwang sembi	大声でがんがん言う	様
235	砉	午・石部 p215-3	kūwar sembi	グワッと言う音	音
236	砉	午・石部 p228-2	kūwar sembi	ビリビリと言う音	音
237	砉	午・石部 p221-2	kūwar sembi	石が砕ける音	音
238	砉	午・石部 p223-10	kūwar sembi	石が割れる音	音
239	砉	午・石部 p236-2	kūwar sembi	石が砕ける音	音
240	砉	午・石部 p245-9	kūwar sembi	石が割れる音	音
241	飡	戌・食部 p257-4	lab sembi	酒や飯をガバガバ飲み食いする	様
242	梶	巳・水部 p20-5	lar lir sembi	人が沢山いる様	様
243	珀	丑・口部 p85-8	lele sembi	豚を呼ぶ時 lele と言う	聲
244	𪔐	丑・口部 p87-10	lele sembi	豚を呼ぶ時 lele と言う	聲
245	𪔐	丑・口部 p95-5	lele sembi	豚を呼ぶ時 lele と言う	聲
246	隗	子・人部 p86-1	ler sembi	どっしりと	様

247	枷	丑・口部 p47-7	ler sembi	どっしりと、しみじみと	様
248	皇	丑・女部 p209-11	ler sembi	ひらりと、しみじみと	様
249	闇	酉・言部 p59-4	ler sembi	穏やかに	様
250	溜	寅・弓部 p184-1	liyar sembi	飯がやや粘る	様
251	訥	酉・言部 p43-9	lolo sembi	たわいもない事をべらべらしやべる	様
252	瀨	巳・火部 p147-7	ludur sembi	むしむしと	様
253	誌	巳・水部 p77-5	lur sembi	油がどろりとする様	様
254	辨	巳・牛部 p203-4	meng mang sembi	牛がモーモーと鳴く	鳴き声
255	𦍋	申・艸部 p7-9	miyar miyar sembi	羊がメエメエ鳴く	鳴き声
256	嶮	丑・口部 p17-6	mung mang sembi	鹿、牛がモウモウと鳴く	鳴き声
257	參	巳・牛部 p207-4	mung mang sembi	牛がモーモーと鳴く	鳴き声
258	獠	巳・犬部 p258-8	or sembi	ウォーと言う猛獣の声	鳴き声
259	獬	酉・豸部 p127-1	or sembi	ウォーと吼える	鳴き声
260	狄	巳・犬部 p226-2	oyo oyo sembi	子犬を呼ぶとき oyo oyo と言う	鳴き声
261	鑼	戌・金部 p71-5	patak sembi	ポトンと落ちる音	音
262	磬	午・石部 p228-8	patak sembi	石が落ちるゴトンと言う音	音
263	炭	午・石部 p236-5	patak sembi	石が落ちてポトンと音がする	音
264	杏	丑・口部 p22-5	pei sembi	ペッペッと唾を吐く音	聲
265	音	丑・口部 p22-6	pei sembi	ペッペッと唾を吐く音	聲
266	筥	丑・口部 p104-8	pei sembi	ペッと言う	聲
267	脬	未・肉部 225-6	ping sembi	腹が張る	様
268	矜	寅・彳部 p203-4	piyas pis sembi	おたおたする、行動が軽薄	様
269	趨	酉・走部 p165-9	piyas pis sembi	行動の軽佻なさま、うろうろおたおた	様
270	進	巳・水部 p106-5	pocok sembi	どぼん、水中に物が落ちる音	音
271	呬	丑・口部 p21-2	pu sembi	ぷーと言う	音
272	戌	丑・口部 p34-2	pu sembi	ぷっと言う、息を吹きかける	音
273	扎	丑・口部 p35-3	pu sembi	プツという	音
274	攘	丑・口部 p41-8	pu sembi	プツと言う	音
275	柞	丑・口部 p48-6	pu sembi	プツと言う	音
276	檣	丑・口部 p57-6	pu sembi	ぷっと言う	音

277	殲	丑・口部 p64-7	pu sembi	プツと言う	音
278	桐	辰・欠部 p177-10	pu sembi	プツと、物を吹く音	音
279	耙	辰・欠部 p187-11	pu sembi	プツと吹く	音
280	鴞	未・羽部 179-1	pur par sembi	鳥が急に飛ぶたつ音	音
281	鴞	未・羽部 179-2	pur par sembi	鳥が急に飛ぶたつ音	音
282	皜	午・白部 p135-4	šar sembi	鳥の羽毛が白い	様
283	霏	戌・雨部 p154-2	šar sembi	霜雪が真っ白な	様
284	則	子・彡部 p134-4	šar sembi	霜や雪が白く積もる	様
285	走	子・彡部 p133-4	šar sembi	霜や雪で霏々と真っ白になる	様
286	散	巳・水部 p72-2	šar sembi	霜雪が真っ白	様
287	霏	戌・雨部 p144-2	šar sembi	白雲或いは積雪が白々として いる	様
288	皜	午・白部 p129-5	šar sembi	草花が真っ白	様
289	皜	午・白部 p132-12	šar sembi	白鳥を慈しむ	様
290	皜	午・白部 p134-3	šar sembi	白っぽい様	様
291	皜	午・白部 p135-3	šar sembi	白っぽい様	様
292	皜	午・白部 p135-9	šar sembi	白っぽい様	様
293	慣	子・人部 p37-4	ser sembi	細々、こまごま	様
294	蚘	寅・小部 p35-11	ser sembi	細々と	様
295	恁	寅・彡部 p144-4	ser sembi	区々とした、細かい	様
296	微	寅・彡部 p202-7	ser sembi	微細な、細々と	様
297	礪	寅・彡部 p204-2	ser sembi	微細な、細々と	様
298	縵	未・糸部 p118-8	ser sembi	細々と、かすかに	様
299	霏	戌・雨部 p159-11	ser sembi	シトシト	様
300	鞞	戌・革部 p192-9	ser sembi	細々と、かすかに	様

301	暉	午・目部 p181-3	sir sembi	涙がハラハラと出る	様
302	菀	申・艸部 p45-1	sir siyar sembi	草がさわさわと音を立てる	音
303	箠	未・竹部 p41-3	sir siyar sembi	樹や草がざわざわと音を立てる	音
304	藎	申・艸部 p101-3	sir siyar sembi	サワサワ、ザワザワ	音
305	霏	戌・雨部 p149-6	sor sar sembi	雨雪がしんしんと降る	様
306	毳	戌・非部 p166-1	sor sar sembi	毛がバラバラと乱れる	様
307	諠	酉・言部 p74-10	sor sembi	甚だ多い	様
308	軋	酉・車部 p235-1	šor sembi	車が疾駆する	様
309	啡	戌・非部 p165-3	šung šang sembi	スウスウ、グウグウと言う寝息	音
310	嶝	辰・木部 p75-2	tak tik sembi	擬声語、カーンカーンと木を切る音	音
311	闐	戌・門部 p92-11	tang sembi	太鼓がトンと鳴る	音
312	籛	戌・音部 p212-2	tang tang sembi	鐘がゴーンと鳴る	音
313	聿	卯・心部 p32-5	tar sembi	心がハッと驚く	様
314	員	卯・心部 p90-5	tar sembi	心にハッと驚く	様
315	臀	卯・心部 p36-8	tar sembi	気後れする	様
316	舁	卯・心部 p38-3	tar sembi	気後れする	様
317	誣	酉・言部 p54-2	teng sembi	毅然と、しっかりと	様
318	皦	午・白部 p133-8	teng sembi	固い、毅然と、強く	様
319	肱	未・肉部 218-4	tob sembi	体をシャキリとさせる	様
320	僅	巳・水部 p41-7	tor sembi	水がくるくると回るさま	様
321	好	巳・水部 p56-3	tor sembi	水がくるくる回る様	様
322	鞀	戌・革部 p179-7	tung tang sembi	鐘太鼓の音、ドンドンカンカンと鳴る	音
323	韻	戌・音部 p211-8	tung tung sembi	鐘がカンカンと鳴る	音
324	鞀	戌・金部 p63-7	tung tung sembi	太鼓がトントンとなる	音
325	鞀	戌・革部 p192-10	tung tung sembi	太鼓がトントンと鳴る	音
326	鞀	戌・音部 p211-1	tung tung sembi	太鼓がトントンと鳴る	音
327	鞀	戌・音部 p212-1	tung tung sembi	太鼓がトントンと鳴る	音

328	宙	巳・水部 p131-3	umburi cumburi sembi	波が押し寄せたり退いたりするさま、幾重にも層をなしている浪	様
329	鉦	戌・金部 p12-7	ung sembi	鐘のゴーンと言う音	音
330	鎗	戌・金部 p39-11	ung sembi	鐘がゴーンとなる	音
331	鎗	戌・金部 p45-7	ung sembi	鐘のゴーンと言う音	音
332	鑠	戌・金部 p64-11	ung sembi	鐘のゴーンと言う音	音
333	鐃	戌・金部 p47-8	yang sembi	鐘がゴーンと鳴る	音
334	嚙	子・人部 p35-1	yar sembi	毛、頭髮が長い事を言う	様
335	奇	巳・水部 p29-3	yar sembi	水がチョロチョロと流れる	様
336	給	巳・水部 p35-5	yar sembi	水がチョロチョロと流れる	様
337	穀	巳・水部 p63-6	yar sembi	水がチョロチョロ流れる	様
338	失	巳・水部 p77-12	yar sembi	水がちよろちよろ流れる	様
339	射	巳・水部 p79-9	yar sembi	水がちよろちよろ流れる	様
340	侘	丑・口部 p88-9	yar sembi	縷々話す	様
341	良	巳・水部 p66-4	yonggor sembi	水が絶えず流れる様	様
342	捨	巳・水部 p79-11	yonggor sembi	水が絶えず流れる様	様
343	酒	巳・水部 p83-7	yonggor sembi	絶えず流れる様	様
344	拳	巳・水部 p51-10	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様	様
345	源	巳・水部 p54-8	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様	様
346	貢	巳・水部 p60-11	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様	様
347	況	巳・水部 p39-3	yumbu sembi	洋洋たる、大水がゆったりと流れる様	様
348	社	巳・水部 p80-3	yumbu sembi	大水が緩やかに流れる様	様
349	警	巳・水部 p48-6	yur sembi	雲が絶えず湧き起こる	様
350	霽	戌・雨部 p155-4	yur sembi	雲がもくもくと湧く	様
351	企	巳・水部 p28-7	yur sembi	大きな溝の水が休みなく流れる様	様
352	河	巳・水部 p11-1	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様
353	伎	巳・水部 p28-8	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様
354	嬉	巳・水部 p29-4	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様

355	亀	巳・水部 p32-7	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様
356	禽	巳・水部 p42-6	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様
357	賞	巳・水部 p96-7	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様
358	象	巳・水部 p96-8	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様
359	仁	巳・水部 p106-10	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様
360	逝	巳・水部 p108-6	yur sembi	細い水の流れが絶え間なく流れる	様

付表3：『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』—研究と翻刻・繙訳』（子集～戌集）における「seme」を伴うオノマトペ

	漢字	所在	満洲語の解釈	満洲語の日本語訳	分類
1	恚	丑・口部 p26-5	ang seme	わあー、戦い、喧嘩の時の声	聲
2	壞	巳・水部 p98-2	cib seme	水が肅然として清浄である	様
3	陀	子・彳部 p136-3	cik seme	突然の寒さ	様
4	鎗	子・彳部 p133-6	cik seme	不意の寒さ	様
5	凜	子・彳部 p135-6	cik seme	突然の寒さ	様
6	刃	巳・水部 p107-2	cik seme	俄かに寒くなる	様
7	鳶	巳・火部 p147-3	cing seme	パッと火が点く様	様
8	盼	寅・彳部 p201-3	cung seme	しゃにむに行く	様
9	磅	寅・彳部 p204-9	cung seme	しゃにむに歩く	様
10	趁	酉・走部 p161-2	cung seme	しゃにむに歩いてゆく	様
11	趨	酉・走部 p170-8	cung seme	しゃにむに歩いてゆく	様
12	粹	辰・欠部 p178-4	darang seme	ながながと	様
13	顛	戌・頁部 p237-5	dere seme	顔の様が肥えていて大きい	？
14	遶	酉・辵部 p279-3	diye hiye seme	逡遶と行く	様
15	肯	子・人部 p84-7	e i seme	めそめそと泣き言を言う	聲
16	謔	酉・言部 p82-1	e i seme	痛いと叫ぶ	聲
17	躓	酉・足部 p197-1	fik seme	歯莖がとしっかりと長して いる	様
18	粽	辰・欠部 p178-6	fior seme ukiyembi	つるつると啜る	様
19	翠	辰・欠部 p188-4	fior seme ukiyembi	つるつると啜る	様
20	篋	辰・欠部 p174-3	fotor seme	怒るさま	様
21	珈	丑・口部 p85-3	fu fa seme	喘ぐ	音・様 (人間)
22	貅	丑・土部 p148-2	fusur seme	緩やかに土が落ちる	様
23	膩	丑・土部 p119- 11	fusur seme	ボロボロの土	様

24	簞	辰・欠部 p176-3	ha seme sukdun sembi	は一と息を吐く	音 (人間)
25	鉞	戌・金部 p18-2	halar seme	車のガラガラと言う響き	音
26	孜	寅・子部 p7-1	hing seme	一心に、もっぱら	様
27	尹	丑・口部 p16-3	hiyang seme	こらっと叱責する事	様
28	涅	丑・口部 p68-8	hiyang seme	コラット叱る	様
29	歌	丑・大部 p166-5	hiyang seme	こらっと叱る	様
30	叱	丑・口部 p5-8	hiyang seme	こらっと怒って叱る	様
31	頤	戌・頁部 p215-2	hiyor hiyar seme	頭をグッと上げる様	様
32	飈	戌・風部 p243-11	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
33	飈	戌・風部 p246-3	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
34	飈	戌・風部 p247-3	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
35	飈	戌・風部 p250-9	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
36	飈	戌・風部 p251-2	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
37	飈	戌・風部 p251-10	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
38	飈	戌・風部 p253-2	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
39	飄	戌・風部 p254-3	hoo seme	ビュービューと風が吹く	様
40	寒	巳・水部 p24-2	hūwalar seme eyembi	さらさらと流れる	音
41	過	巳・水部 p12-7	hūwanggar seme	水が轟々と流れ驚かされる	音
42	電	戌・雨部 p143-1	hūwanggar seme agambi	土砂降りの雨が降る	音
43	雩	戌・雨部 p143-9	hūwanggar seme agambi	土砂降りの雨が降る	音
44	霈	戌・雨部 p148-4	hūwanggar seme agambi	土砂降りの雨が降る	音
45	霽	戌・雨部 p153-10	hūwanggar seme agambi	土砂降りの雨が降る	音
46	霽	戌・雨部 p159-6	hūwanggar seme agambi	土砂降りの雨が降る	音
47	鍾	巳・水部 p96-11	hūwanggar seme eyembi	轟々と流れる	音
48	甌	子・人部 p86-8	hūwasar seme	かさかさと	音

49	鯖	子・人部 p96-2	hūwasar seme	草に風は来てがさがさとする	音
50	匱	寅・㐁部 p114-1	jir jir seme eyembi	チョロチョロと水が流れる	様
51	匱	寅・㐁部 p114-2	jir jir seme eyembi	チョロチョロと水が流れる	様
52	羔	辰・欠部 p187-8	kaka kiki seme	子供達がケラケラと笑う	聲
53	錚	戌・金部 p34-9	kalang kiling seme	カランコロンと言う響き	音
54	侃	子・人部 p55-2	kang seme	がやがやとしゃべる	様
55	峽	子・人部 p55-3	kang seme	がやがやとしゃべる	様
56	幸	子・人部 p80-7	kang seme	がやがやと話すこと	様
57	芋	丑・遺部 p159-2	kantar seme	昂然と、激昂する	様
58	棘	戌・革部 p182-6	katang seme	カチンカチンに硬い	音・様
59	肇	戌・革部 p184-1	katang seme	カチンカチンに硬い	音・様
60	詬	辰・裙部 p218-5	keleng kalang seme	のそりのそりと、ぶらりぶらりと	様
61	縹	未・糸部 138-10	kihūr seme	ギュッと細かい	?
62	陔	戌・阜部 p98-9	kiki kaka seme	カッカと笑う	聲
63	縹	未・糸部 p124-10	kikūr seme	ギュッと細かい	様
64	緋	未・糸部 p105-3	kikūr seme	ふかふかとした絹、厚い絹	様
65	幘	丑・口部 p20-4	kiyatar seme	からからと笑う	聲
66	哈	丑・口部 p23-4	kiyatar seme	からからと笑う	聲
67	啞	丑・口部 p24-5	kiyatar seme	からからと笑う	聲
68	寬	丑・大部 p172-11	kolor seme	だぶだぶ	様
69	挾	子・人部 p55-8	kos seme	げっそりと痩せる	様
70	糝	辰・欠部 p177-8	kuku seme	クックツと笑う	聲・様
71	僥	子・厂部 p203-12	kung seme	石のドスンと言う音	音
72	澗	丑・口部 p78-5	kunggur seme	衆馬が走る音、びっしり人が集まる様子、衆車は動く音	音
73	牲	午・生部 p67-5	kunggur seme	衆人がばたばたと立つ	音・様
74	蟬	申・虫部 p201-2	kunggur seme	虫、バタバタと飛ぶ	音・様
75	砢	午・石部 p213-1	kūwar seme	石がガタンと砕ける	音

76	躑	酉・足部 p213-6	kūwas kis seme	ざっざっと行く	音
77	窳	午・穴部 p311-10	lab seme	がつがつと食べる	様
78	霽	戌・雨部 p157-4	ler seme	シトシトと雨が降る	音
79	躑	酉・足部 p216-6	ler seme	どっしりと行動する、静々と行動する	様
80	颯	戌・風部 p249-2	ler seme	そよそよと風が吹く	音
81	邊	酉・辵部 p283-10	ler seme	ゆっくりと行く	様
82	譔	酉・言部 p59-10	lolo seme	たわいもない話が終わらない	様
83	鞞	戌・韋部 p204-8	ludur seme	むしむしと暑い	様
84	嚕	丑・口部 p92-4	lulu seme	平凡に話す	?
85	籃	辰・欠部 p176-8	meng mang seme	ケーン・ケーンと鹿が鳴く、呦呦と鹿が鳴く	鳴き声
86	憫	丑・口部 p31-7	pei seme	ペッと唾を吐く	聲
87	岨	子・彳部 p129-4	pur seme	鳥がぱっと飛ぶ	音
88	綜	子・彳部 p132-8	pur seme	ぱっと飛ぶ	音
89	脩	未・羽部 176-2	pur seme	バタバタと羽音をたてて飛ぶ	音
90	翹	未・羽部 183-1	pur seme	バタバタと羽音をたてて飛ぶ	音
91	翹	未・羽部 183-7	pur seme	バタバタと羽音をたてて飛ぶ	音
92	翹	未・羽部 179-4	putur seme	大鳥がバサッと飛び立つ音	音
93	皚	戌・面部 p171-2	sar seme	顔がぬけるように白い	?
94	悍	丑・口部 p27-10	sar seme	サメザメ泣き止らない	様
95	皚	午・白部 p130-9	šar seme	深い白	様
96	皚	午・白部 p133-3	šar seme	深い白	様
97	皓	午・白部 p131-2	šar seme	深い白	様
98	颯	戌・風部 p244-9	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音
99	颯	戌・風部 p245-8	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音
100	颯	戌・風部 p247-11	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音
101	颯	戌・風部 p248-2	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音

102	颼	戌・風部 p248-5	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音
103	颼	戌・風部 p251-9	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音
104	颼	戌・風部 p252-2	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音
105	颼	戌・風部 p253-6	šeo seme	ヒューヒューと風が吹く	音
106	泝	丑・口部 p72-1	ser seme	細々と	様
107	瘧	丑・口部 p93-1	ser seme	細々と	様
108	积	巳・水部 p81-8	ser seme	しとしとと絶える事なく雨が降る	様
109	馥	戌・香部 p289-8	ser seme	香の香りがほのかに香る	様
110	索	巳・水部 p69-3	ser seme agambi	小雨が降る	様
111	札	巳・水部 p70-3	ser seme agambi	小雨が降る	様
112	暫	巳・水部 p73-1	ser seme agambi	小雨が降る	様
113	酢	巳・水部 p101-9	ser seme agambi	小雨が降る	様
114	奪	巳・水部 p126-2	ser seme agambi	小雨が降る	様
115	霰	戌・雨部 p142-11	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
116	霰	戌・雨部 p143-2	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
117	霰	戌・雨部 p146-12	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
118	霰	戌・雨部 p147-2	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
119	霰	戌・雨部 p148-7	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
120	霰	戌・雨部 p149-5	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
121	霰	戌・雨部 p153-7	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
122	霰	戌・雨部 p153-8	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
123	霰	戌・雨部 p155-1	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
124	霰	戌・雨部 p158-8	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
125	霰	戌・雨部 p159-2	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
126	飭	戌・雨部 p160-3	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
127	霰	戌・雨部 p162-6	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
128	霰	戌・雨部 p162-8	ser seme agambi	シトシトと細かな雨が降る	様
129	颼	戌・風部 p243-4	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
130	颼	戌・風部 p244-2	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
131	燂	戌・風部 p244-7	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
132	颼	戌・風部 p245-5	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様

133	颯	戌・風部 p245-6	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
134	颯	戌・風部 p245-7	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
135	颯	戌・風部 p245-10	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
136	颯	戌・風部 p245-11	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
137	颯	戌・風部 p246-11	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
138	颯	戌・風部 p247-1	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
139	颯	戌・風部 p249-9	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
140	颯	戌・風部 p250-10	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
141	颯	戌・風部 p254-8	ser seme dambi	そよそよと風が吹く	様
142	霽	戌・雨部 p143-8	sor sar seme	しんしんと雪が降る	様
143	霽	巳・水部 p31-9	šor seme	しとしとと雨が降る	様
144	霽	巳・水部 p122-6	šor seme	しとしとと雨が降る	様
145	霽	巳・水部 p129-8	šor seme	しとしとと雨が降る	様
146	霽	戌・雨部 p142-4	šor seme	シトシトと雨が降る	様
147	霽	戌・雨部 p142-12	šor seme	シトシトと雨が降る	様
148	霽	戌・雨部 p147-5	šor seme	シトシトと雨が降る	様
149	霽	戌・雨部 p147-9	šor seme	シトシトと雨が降る	様
150	霽	戌・雨部 p147-10	šor seme	シトシトと雨が降る	様
151	霽	戌・雨部 p150-8	šor seme	シトシトと雨が降る	様
152	霽	戌・雨部 p153-3	šor seme	シトシトと雨が降る	様
153	霽	戌・雨部 p153-11	šor seme	シトシトと雨が降る	様
154	霽	戌・雨部 p154-1	šor seme	シトシトと雨が降る	様
155	霽	戌・雨部 p163-2	šor seme	シトシトと雨が降る	様
156	軋	酉・車部 p237-4	šor seme sejen	パカパカと進む車	音
157	𩇑	戌・香部 p288-8	sur seme	鼻を打つような芳香があった	様
158	𩇑	午・石部 p223-6	teng seme ilimbi	毅然と立つ	様
159	𩇑	午・石部 p240-2	teng seme ilimbi	毅然と立つ	様

160	全	卯・手部 p198-9	tob seme	正に矢を射んとする	?
161	闔	戌・門部 p89-6	tob seme	正しく開かない	?
162	訛	戌・青部 p163-10	tob seme	正視する	?
163	鞞	戌・革部 p190-7	tung tang seme	カンカンドンドンと言う鐘や太鼓の音	音
164	異	辰・毛部 p234-7	yar seme	髪の毛がさらさらとして美しい	様
165	睡	戌・長部 p74-11	yar seme	髪がサラリとして美しい	様
166	検	巳・水部 p52-3	yar seme	水がさらさらと音を響かせている	音
167	匏	寅・ㄹ部 p113-9	yar seme eyembi	さらさらと流れる	音

付表4：満洲語『玉堂字彙』におけるオノマトペの形態上の分類

I 単語形式				II 双語形式																				
	~r	~ng	~C	~V	~r~r	~ng~ng	~n~n	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	CV	その他	
1	ar	kiwatar	ang	ch	ai	bur bur	hing bing	šan siri	derden dardan	fu fa	bu bu	baba baba	keb kab	bekte bakta	katak kitik	hao hio								a ta
2	boor	kolor	bing	ch	ara	cahu cifu	gang cang	eden tederi	en jen	gu gu	bu ru	bara bara	tab tib	gehge gabga										e i
3	ci	konggor	cng	ek	cu	fer far	deng deng	eyer hayari	gehun gahun	ho ha	bu ru	butu butu	taik tik	gekto kakta										heh edeme hah adame
4	oor	kor	cung	fak	dene	fu fur	dang dang	geesi fensi	gyan fyán	hū hū	bu su	busu busu		kekto kakta										geenge gangga hah adame
5	dur	kungur	dawang	fik	e	gar gar	gang gang	hehen hahari	koskon kaskan	ja ja	cau caa			lekde lakda										hūwasa jisa
6	for	kur	gejing	gab	ha	ger ger	jang jing	umburi cumburi	son son	ja ji	dele dada			tebke tabka										hūwasa jisa
7	foto	kūwar	gyang	hak	hoo	gūwar gūwar	jangjing	urhuri hahari	šanben šarban	je ja	diye hiye													kyab kib
8	fur	kiwatar	gujung	hyak	h'o	her har	kalang kiling		to so		dudu dada													kiwak cak
9	fusur	ler	hajung	katak	huji	hyor hyar	keleng kalang				fusu fasa													kūwas kis
10	gar	lyar	hing	keb	hūwai	hār har	kūwang cang				gei fari													kūwata kin
11	gor	ludur	hyang	kek	jaji	hār hār	meng mang				gei gari													pyas pis
12	gor	hur	hūng	kiyak	ke	jar jar	myang ming				gdu gala													šuwak sik
13	halar	or	kang	kob	kyarkiya	jir jir	myang myang				hahi cahi													tung tung
14	holor	pur	kakūng	kos	ko ko	jar jar	mung mang				juu jia													tang tang
15	hūr	putur	katang	lab	kuku	kaer kior	ninjing nyangnyang				kaka kiki													
16	hūwalār	sar	keng	pak	lele	kangar kin gar	šung šang				kata kiti													
17	hūwanggar	ser	kung	patak	lolo	kangar kangar	tang tang				kiki kaka													
18	hūwar	sir	kutung	peok	ulu	kungur kangar	tung tang				lete lata													
19	hūwasar	sor	kutung	toh		lar lir	tung tung				ulu lala													
20	jar	sar	kūwang			myar myar	ung wang				putu pata													
21	jar	šar	ping			or ir					sebe saba													
22	kalar	šor	šuwarang			per par					ulu wala													
23	kanggūr	tar	tang			pur par																		
24	kantar	tor	teng			sir syar																		
25	keser	yar	ung			sor sar																		
26	kikūr	yonggor	yang			wer wer																		
27	kikūr	yur																						

註：

1C : consonant 子音という意味。

2V : vowel 母音という意味。

3.この分類は、「seme」「sempi」を付けずにしたものである。

付表6：唐・五代の漢語にみられるオノマトペ

	所在	オノマトペ	読み方	品詞	意味
1	1—4	阿瘥瘥	ā huì huì	なし	体肤疼痛时所呼之声。
2	2—2	阿刺刺	ā là là	なし	吵闹声。
3	6—10	媿媿	ān ē	なし	犹豫不决貌。
4	7—5	敖曹	áo cáo	なし	轩昂壮伟貌。
5	7—6	敖嘈	áo cáo	なし	状声音纷乱，嘈杂。
6	8—9	拔刺	bá là	象声詞	状鸟禽振翅声或鱼尾摆动声。
7	9—9	跔跔	bà qiǎ	なし	矮小貌。
8	10—8	白地	bái dì	なし	忽地，陡然。
9	1—12	斑斓	bān lán	なし	色彩错杂鲜明。
10	20—3	𪔑𪔑仆仆	bī bī pǔ pǔ	象声詞	见“𪔑𪔑膊膊”。
11	22—6	毕逋拨刺	bì pū bō là	象声詞	状鸟翅扑打的声音。
12	22—11	𪔑𪔑膊膊	bì bì bó bó	象声詞	见“𪔑膊”。
13	22—12	𪔑膊	bì bó	象声詞	多状禽鸟翅膀扑打声。又叠作“𪔑𪔑膊膊”“𪔑𪔑仆仆”。
14	23—2	躑躑	bì bì	なし	行走艰难貌。
15	25—9	蹙蹙	bié xiē	なし	旋行盘桓貌。
16	26—5	波波	bō bō	なし	①奔波，比喻辛劳困苦。 ②打寒颤声
17	26—7	波吒	bō zhā	なし	地狱中受苦忍寒之声，又泛指人死后在地狱所受的痛苦，折磨。
18	27—3	拨刺	bō là	なし	①来回波动琴弦的动作。 ②鸟禽振翅状，鱼尾摆动状。
19	27—8	剥落	bō luò	なし	见“驳落”。
20	27—10	趵趵	bō bō	なし	蹄声。
21	27—11	𪔑𪔑	bō bō	なし	鱼摆尾跳跃貌。
22	28—1	驳落	bó luò	なし	①杂色不齐貌。②贬斥，斥退。

23	28—2	驳萃萃	bó luò luò	象声詞	例文のみ（羯鼓を叩く音）
24	28—11	博啜	bó jiē	なし	见“博啜”
25	28—12	博接	bó jiē	なし	见“博啜”
26	28—14	嚼啜	bó jiē	なし	咀嚼出声貌
27	29—4	薄落	bó luò	なし	①斑驳不均，同“驳落”。②失意困顿。
28	42—3	参谭	cān tán	なし	见“趲趲”。
29	42—7	骏驪	cān diàn	なし	见“趲趲”。
30	42—8	趲趲	cān diàn	なし	马奔跑貌。
31	43—6	惨惨	cǎn cǎn	なし	①忧愁貌。②通“黦”字，昏暗不明貌。
32	43—9	惨悴	cǎn cuì	なし	憔悴，愁苦貌。
	43—10	惨地	cǎn		暗然失色地。“惨”借作“黦”，暗色。
33	44—4	惨然	cǎn rán	なし	暗然失色地。“惨”借作“黦”，暗色。
34	44—6	苍苍	cāng cāng	なし	①指鬓发灰白。②色不分明状。③匆促，急迫。
		苍茫			
35	46—1	嘈嘈	cáo cáo	象声詞	状喧嚣，纷繁的声音。
36	46—2	嘈囋	cáo zá	象声詞	状声音繁杂。
37	46—5	草草	cǎo cǎo	なし	①匆忙，不从容。②辛劳的样子。③纷乱的样子。④心绪不宁的样子。
38	47—5	测测	cè cè	なし	轻寒的感觉。
39	47—8	策策	cè cè	象声詞	状细碎的声音。
40	47—9	阒然	cè rán	なし	全然，一律。
41	47—11	参差	cēn cī	なし	①事情乖违，不如人意。相当于“蹉跎”“错失”。②表示估量的副词，相当于“大概”“几乎”。③顷刻，马上。

42	48—4	蹭蹬	cèng dèng	なし	①脚步疲乏困顿，踉跄不稳状。②喻人困顿失意。③闲逛，游荡。
43	48—7	叉牙	chā yá	なし	高低长短不齐貌
44	49—2	差池	chā chí	なし	①不齐貌。②差错。又作“差驰”“差使”。③蹉跎，失意。
45	49—3	差驰	chā chí	なし	见“差池”。
46	55—6	嘲啞	cháo zhé	象声詞	①状鸟鸣声。②状方言古怪难懂。
47	55—7	嘲啁	cháo zhōu	象声詞	状纷繁之声。
48	56—1	掣拔	chè bō	なし	左右扯拽，指贪食无厌貌。
49	58—10	枱枱	chéng chéng	象声詞	状琴弦声。
50	61—4	赤烘（烘）	chì hōng	なし	色红貌
51	62—2	赤燂燂	chì tún tún	なし	红盛貌
52	62—11	憧憧	chōng chōng	なし	往来匆忙的样子
53	63—2	重重	chóng chóng	なし	频频，屡屡，反复
54	63—4	熯熯	chóng chóng	なし	旱热熏人貌
55	63—10	惆怅	chóu chàng	なし	①惊恐。②担心，忧虑。
56	65—5	楚楚	chǔ chǔ	なし	①整齐貌。②凄苦貌。
57	66—12	枹枹	chuāng chuāng	象声詞	状拨琴弦的声音。纷多貌。
58	67—6	垂垂	chuí chuí	なし	渐渐
59	68—9	差差	cī cī	なし	不齐貌
60	70—3	刺刺	cì cì	なし	①寒风刺骨貌。②言语繁多的样子。
61	71—1	丛丛	cōng cōng	なし	众多纷多的样子。又作“叢叢”

62	71—2	匆匆	cōng cōng	なし	又作“忪忪” “恩恩” “聪聪”。①气盛貌。 ②焦急，急迫貌。
63	71—3	忪忪	cōng cōng	なし	见“匆匆”
64	71—4	叢叢	cōng cōng	なし	见“丛丛”
65	71—5	恩恩	cōng cōng	なし	见“匆匆”
66	71—6	聪聪	cōng cōng	なし	见“匆匆”
67	73—2	促促	cù cù	なし	①短貌。②匆匆。③局 促，小心的样子。又作 “齷齷”。
68	73—3	齷齷	cù cù	なし	见“促促”③
69	73—7	簇簇	cù cù	なし	丛聚，簇拥貌。
70	74—8	攢玩	cuán wán	なし	见“巘巘”②
71	74—10	攢沅	cuán yuán	なし	见“巘巘”①
72	74—11	攢巘	cuán yuán	なし	见“巘巘”②
73	74—12	巘巘	cuán wán	なし	①山峰峻峭耸列貌，引申 指面容难看。又“攢沅” 作。②聚足不前貌，引申 为局缩，沮丧貌。
74	74—13	催催	cuī cuī	なし	液体盈满下滴貌。又作 “摧摧”。
75	75—1	摧摧	cuī cuī	なし	见“催催”
76	76—11	错莫	cuò mò	なし	①交错，不齐貌。②烦 乱，失意貌。
77	80—1	打腾腾	dǎ téng téng	なし	原地跃起不进貌。
78	85—4	当当密密	dāng dāng mì mì	なし	对当严密。
79	87—10	刀刀	dāo dāo	なし	指言语啰嗦。
80	89—4	得得	dé dé	なし	特特，特地。
81	91—3	滴滴	dī dī	なし・ 象声词	①盈盈欲滴貌，形容娇 美。②象声词，状水滴 声。

82	93—4	的的	dì dì	なし	①明亮貌。②的确，语气副词。③情意真切貌。形容词。④多而盛貌。
83	93—5	的历	dì lì	なし	晶莹剔透貌。即“的白乐”。
84	96—12	丁当	dīng dāng	象声詞	又作“丁瑯”
85	96—13	丁瑯	dīng dāng	象声詞	见“丁当”
86	96—14	丁丁	dīng dīng	なし	雄健貌
87	96—15	丁东	dīng dōng	象声詞	又作“丁冬”
88	96—16	丁冬	dīng dōng	象声詞	见“丁东”
89	96—17	丁泠	dīng líng	象声詞	状滴水声
90	98—3	冬冬	dōng dōng	象声詞	状敲门声
91	98—5	鼕鼕鼓	dōng dōng gǔ	なし	唐时设在街头的禁鼓，早晚敲击，报时戒行。
92	99—3	洞然	dòng rán	なし	深邃貌
93	99—5	哆哆	dōu duō	なし	说话絮烦
94	100—5	逗讷	dòu nù	なし	说话迟钝
95	102—5	端然	duān rán	なし	安然不动貌
96	104—1	堆堆	duī duī	なし	不动貌。又作“敦敦”
97	107—4	俄俄	é é	なし	体魄高大强壮貌
98	120—9	肥没忽	fēi mò hū	なし	肥胖貌
99	121—8	分方	fēn fāng	なし	纷乱貌
100	121—9	分非	fēn fēi	なし	见“芬菲”
101	121—10	分分	fēn fēn	なし	犹“纷纷”，形容下落的东西多而乱。
102	123—3	芬葩	fēn bā	なし	即“纷葩”，繁多貌。
103	123—4	芬泊	fēn bó	なし	见“纷泊”
104	123—5	芬芳	fēn fāng	なし	见“分方”
105	123—6	芬菲	fēn fēi	なし	纷乱貌
106	123—7	芬霏	fēn fēi	なし	见“芬菲”
107	123—8	纷泊	fēn bó	なし	纷乱盛多貌，又作“芬泊”
108	123—9	纷芸	fēn yún	なし	纷乱。也以指战事，社会动荡等。

109	124—1	纷纭	fēn yún	なし	纷乱，比喻言语相争。
110	133—1	嘎嘎	gā gā	なし	鸟鸣声。又作“戛戛”
111	138—6	各各	gè gè	なし	①各自。②分散貌。
112	139— 13	公然	gōng rán	なし	①明目张胆，无顾忌。②公开，不掩饰。③当然，自然。
113	140— 10	喷喷	gǒng gǒng	なし	向前，向上，形容努力，奋力。
114	143—5	汨汨	gǔ gǔ	なし	①盛多貌。②不安貌。
115	143—9	骨崖崖	gǔ yá yá	なし	瘦骨嶙峋貌。
116	143— 12	故故	gù gù	なし	①屡次，常常。②故意，特地。
117	149—3	咕	guō	なし	声音嘈杂，吵闹。
118	149—4	活活	guō guō	象声詞	多状水声。参看“聒聒” ②
119	149—7	聒聒	guō guō	なし・ 象声詞	①嘈杂吵嚷。②流水声。
120	152—2	哈哈	hāi hāi	なし	笑貌。又作“咳咳”“该该”
121	152—3	咳咳	hāi hāi	なし	即“哈哈”。喜笑貌。
122	155—2	好好	hǎo hǎo	なし	努力，认真。
123	156—4	浩浩	hào hào	なし	喧闹吵嚷貌
124	156—8	合合	hé hé	なし	繁多貌
125	156—9	合合杂杂	hé hé zá zá	なし	繁多貌。即“合杂”的重叠。参看“合杂”。
126	157—5	合杂	hé zá	なし	繁多杂乱貌。也重叠作“合合杂杂”。
127	160—5	迥匝	hé zá	なし	①密集貌。②一周，周遍。
128	160—6	齧邓邓	hé dèng dèng	なし	强力貌。
129	160—8	闾	hé	象声詞	开关门扇时的响声。
130	160— 12	黑没焮地	hēi mò qū dì	なし	犹“黑忽忽地”，形容漆黑一团。
131	161—1	轰轰	hōng hōng	なし	热闹貌

132	161—2	烘	hōng	なし	纷乱貌
133	161—8	泓然	hóng rán	なし	泓，借作“洵”。清凉，寒冷貌。
134	162—7	忽地	hū dì	なし	忽然。地，结构助词。
135	162—8	忽尔	hū ěr	なし	①轻易，随便。又作“忽而”。②突然。③假如，倘若。
136	163—3	忽肆	hū lù	なし	勇猛貌，形容猛地窜出。又作“鹞肆”。
137	163—6	忽然	hū rán	なし	①迅速，出人意料。②如果，假若。
138	164—10	鹞肆	hū lù	なし	见“忽肆”
139	165—8	划然	huà rán	なし	①突然。②分明貌。
140	168—4	恍忽	huǎng hū	なし	见“恍惚”
141	168—5	恍惚	huǎng hū	なし	惊慌不安。也作“恍忽”
142	172—4	豁豁	huò huò	なし	豁达，胸怀磊落。
143	172—5	豁落	huò luò	なし	犹“豁豁”
144	173—7	唧唧	jī jī	象声詞	①状鸟虫鸣声。②叹息声。
145	174—1	唧唧力力	jī jī lì lì	なし	抖动，颤动貌。
146	174—2	唧溜	jī liū	なし	聪明伶俐
147	174—8	倏栗	jí lì	なし	①耸动，振作貌。又作“倏僈”。②发抖，颤抖。
148	174—9	倏僈	jí lì	なし	见“倏栗”。
149	174—10	赳赳	jī jī	なし	跳动貌。
150	176—3	戢戢	jí jí	なし	①众头聚动貌。②整齐貌。
151	182—2	监监	jiān jiān	なし	明察貌。
152	186—5	交交	jiāo jiāo	なし	鸟鸣声又作“
153	186—6	交交加加	jiāo jiāo jiā jiā	なし	纷扰，啰里啰唆。

154	187— 15	皎然	jiǎo rán	なし	①洁白貌。②分明貌。
155	189— 12	揭	jiē	なし	声调高昂。
156	190—7	劫劫	jié jié	なし	①急切追求貌。②世世代代，指时间极其长远。
157	196—2	啾唧	jiū jí	なし	①状禽鸟鸣叫声。②状吵闹之声。
158	198—7	居然	jū rán	なし	①安然，稳貌。②分明，确实。③竟然。
159	199—7	举举	jǔ jǔ	なし	指举止端雅。
160	205—2	匝匝	kē zā	なし	遍布环绕貌。
161	205—6	榼榼	kē kē	象声詞	碰击之声。
162	205—9	磕匝	kē zā	なし	见“匝匝”。
163	211—5	涇涇	kōng kōng	なし	愚昧无知貌。涇，借作“控”。“控”义为实，诚，引申为呆痴。
164	212—3	口悱悱	kǒu fěi fěi	なし	言语纷多貌。
165	213—4	矻矻	kū kū	なし	辛苦不懈貌。
166	213—5	矻矻波波	kū kū bō bō	なし	辛劳营求貌。
167	214—7	款款	kuǎn kuǎn	なし	①迟缓貌。②从容。
168	219—1	拉飒	lā sà	なし	衰朽，褴褛。
169	221—5	斓斑	lán bān	なし	见“斓斑”
170	221—6	斓斑	lán bān	なし	色彩错杂鲜明鲜明错综复杂，也作“斓斑”。
171	223—7	劳嘈	láo cāo	なし	声音嘈杂。
172	225—7	儡儡	lěi lěi	なし	魁梧，高大貌。
173	225— 10	楞曾	léng céng	なし	见“棱层②”
174	225— 12	棱层	léng céng	なし	①山峰高峻。②形容面容躯体消瘦难看貌。
175	226—4	离离	lí lí	なし	累累。繁多貌。
176	227—7	历历	lì lì	なし	①清晰，分明。②光明貌。

177	227—8	沥沥	lì lì	象声詞	形容声音悦耳动听。
178	232—3	了了	liǎo liǎo	なし	清楚，明白。
179	232—4	了然	liǎo rán	なし	清楚，明白。
180	234— 13	泠然	líng rán	なし	①通彻无碍貌。②傲然貌。
181	235—1	玲珑	líng lóng	なし	灿烂貌。也作“玲珑”。
182	235—2	玲珑	líng lóng	なし	见“玲珑”。
183	237— 11	喽喽	lóu lóu	なし	①喽，借作遑，往来不绝貌。②清楚，明白。
184	238— 10	砗兀	lù wū	なし	高峻，突出貌。也作“砗砒”。
185	240—6	略略	lüè lüè	なし	①轻缓。②丝毫。副词。
186	242—6	落然	luò rán	なし	冷落萧条貌。
	243—2	麻麻	má chá	なし	模糊不清貌。
187	244—6	慢慢	màn màn	なし	容光焕发貌。慢，借作“曼”。也作“漫漫”“墦墦”。
188	245—2	漫漫	màn màn	なし	见“慢慢”。
189	245—5	墦墦	màn màn	なし	见“慢慢”。
190	245—9	茫然	máng rán	なし	急忙，赶快。
191	245— 12	惛然	máng rán	なし	惧怕。
192	249—1	蒙笼	méng lóng	なし	不分明，引申为糊涂。
193	250—1	冪冪	mì mì	なし	浓厚貌。
194	252—4	命转然	mìng zhuǎn rán	なし	性命危殆
195	253—6	磨罗	mó luó	なし	见“磨罗”
196	253—8	磨罗	mó luó	なし	见“磨罗”
197	253—9	磨罗	mó luó	なし	①面红赤貌。②引申为害羞貌。
198	253— 10	磨罗	mó luó	なし	惭愧。又作“磨罗”。
199	254—3	没忽	mò hū	なし	肥胖貌。又作“磨越”。

200	254—4	頹顛	mò hè	なし	见“没忽”。
201	258—2	纳纳	nà nà	なし	广大包容貌。
202	259— 11	喃喃	nán nán	象声詞	形容人低语或鸟鸣。
203	269—1	讴哑	ōu yā	なし	见“呕哑”③
204	269—2	讴鸦	ōu yā	なし	见“呕哑”③
205	269—3	呕轧	ōu yā	なし	见“呕哑”③
206	269—4	呕哑	ōu yā	なし	①小孩学语声。②管弦声。③摇橹声，车行声。又作“呕轧”“讴鸦”。
207	270— 10	怕怕	pà pà	なし	充满貌。
208	274—6	盘盘	pán pán	なし	曲折回环貌。
209	274—8	盘珊	pán shān	なし	①盘旋，又作“盘跚”。②婆娑貌。
210	274—9	盘跚	pán shān	なし	见“盘珊”。
211	275—5	盼盼	pàn pàn	なし	目光热切依恋貌。
212	275— 14	霏霏	páng pèi	なし	本指雨水充沛，唐时又指酒肉食物丰盛。
213	276— 10	毵毵	péi sāi	なし	①羽毛蓬松张开貌。②抖擞，迸发。
214	277—4	膨亨	péng hēng	なし	饱满，膨胀貌。又作“膨脝”。
215	277—6	膨脝	péng hēng	なし	见“膨脝”。
216	277—8	蓬蓬	péng péng	象声詞	状鼓声。
217	277—9	鬅髻	péng sēng	なし	头发披散貌。
218	280—8	片片	piàn piàn	なし	见“片”。量词，用于薄而平之物。又重叠作“片片”。
219	281—3	瞥瞥	piē piē	なし	飘动或浮动貌。
220	281—4	瞥然	piē rán	なし	①迅疾，突然貌。②转眼。形容时间之短暂。
221	285—2	陂陀	pō tuó	なし	见“坡陀”①。倾斜貌。

222	285—4	坡陀	pō tuó	なし	①倾斜貌。②色红貌。
223	285—7	泼刺	pō là	なし	状鱼跃拔水声。
224	285— 11	婆娑	pó suō	なし	①闲适，舒展貌。②行步蹒跚貌。
225	285— 13	叵我	pǒ wǒ	なし	又作“髮髻”、“駮駮”。①摇动不定貌。②傲慢不敬貌。
226	286—1	駮駮	pǒ wǒ	なし	见“叵我”。
227	286—6	髮髻	pǒ wǒ	なし	见“叵我”。
228	288— 10	扑扑	pū pū	なし	繁盛弥满貌。
229	290—4	璞璞	pú pú	なし	纷多貌。
230	290—7	扑簌	pū sù	なし/ 象声词	①纷纷落下貌。②象声词，状飞禽扑打翅膀的声音。
231	294—7	洽洽	qià qià	なし	密集，遍布貌，又作“恰恰”。
232	294— 10	恰恰	qià qià	なし	见“洽洽”。
233	300—5	悄悄	qiǎo qiǎo	なし	寂静貌。
234	300—6	悄然	qiǎo rán	なし	①寂静貌。②依然。
235	300—8	峭然	qiào rán	なし	“峭”借作“悄”，不声不响貌。
236	301—6	切切	qiè qiè	なし	①形容声音轻微。②确实，确凿。③恳切貌。
237	302—4	噤噤	qiè qiè	なし	形容细碎轻微的声音。一般作“切切”。
238	303—4	侵侵	qīn qīn	なし	交叠貌。
239	308—4	区区	qū qū	なし	奔波辛苦貌。同“驱驱”。
240	308— 10	驱驱	qū qū	なし	辛苦忙碌貌。字又作“駮駮”。
241	308— 11	駮駮	qū qū	なし	见“驱驱”。

242	314—6	确确	què què	なし	①坚硬貌。②确实，的确。
243	316—1	穰穰	ráng ráng	なし	①纷多貌。②纷乱貌。
244	316—3	攘攘	rǎng rǎng	なし	众多纷乱貌。
245	316—4	壤壤	rǎng rǎng	なし	众多纷乱貌。
246	319—7	𠵽𠵽	réng réng	なし	唠叨不休貌。字书作“訥”。
247	325—7	飒然	sà rán	なし	突然，迅疾貌。又作“搔然”。
248	325—8	飒飒	sà sà	象声詞	①象声词，状风声或雨声。②迅疾貌。③衰颓貌。④凉爽或寒凉貌。
249	326—1	搔然	sà rán	なし	见“飒然”。
250	326—8	毳毳	sǎn sǎn	なし	形容毛发或枝叶细长纷披貌。
251	326—9	毳毳	sǎn shā	なし	纷披貌。
252	326—10	毳珊	sǎn shān	なし	毛发细长下垂貌。
253	326—11	毳娑	sǎn suō	なし	见“毳毳”。
254	326—12	鬖鬖	sǎn suō	なし	见“毳娑”。
255	327—5	骚骚	sāo sāo	象声詞	①象声词，状风雨声等。②骚乱貌。
256	327—6	骚屑	sāo xiè	象声詞	①象声词，状风吹枝叶摇动声。②烦忧。
257	332—2	稍稍	shāo shāo	なし	见“稍稍①”。
258	332—4	稍稍	shāo shāo	なし	①萧森貌。②与“稍”义同，分别有“甚”“深”义，“才”“仅”义，“而已”义。
259	348—6	飗飗	sōu qì	象声詞	风声，象声词。
260	348—9	苏噜苏噜	sū lū sū lū	なし	语言反复，犹今“啰嗦”。

261	353—14	檀檀	tán tán	なし	通“僴僴”。举动舒展从容貌。
262	354—12	腾腾	téng téng	なし・象声詞	①昏沉迷糊貌。②象声词，状鼓声。
263	355—1	腾腾兀兀	téng téng wù wù	なし	昏沉迷糊貌。
264	357—7	帖然	tiē rán	なし	①安静。②顺从折服貌。
265	357—8	帖帖	tiē tiē	なし	安静貌。又作“贴贴”。
266	357—9	贴贴	tiē tiē	なし	见“帖帖”。
267	359—3	侗侗	tǒng tǒng	なし	肥大一团貌。又作“统统”。
268	359—4	统统	tǒng tǒng	なし	犹“侗侗”。
269	361—3	徒特	tú tè	なし	徒然。
270	365—3	宛然	wǎn rán	なし	①分明可见貌。②依然，仍然。③全然。
271	365—4	宛转	wǎn zhuǎn	なし	①形容歌声曲折悠扬。②挣扎貌。③悠游貌。
272	366—6	睨然	wàn rán	なし	睁大眼睛貌。
273	366—7	汪汪	wāng wāng	なし	液体充盈貌。又作“炷炷”。
274	366—8	炷炷	wāng wāng	なし	见“汪汪”。
275	370—7	嗛喙	wēn lún	なし	即“愠愉”，见该条。以话语相纠缠。
276	370—8	膾膾	wēn dūn	なし	柔软丰满貌。
277	375—9	兀雷	wù léi	なし	光头貌。
278	375—10	兀碌	wù lù	なし	头圆滚光滑貌。
279	375—11	兀兀	wù wù	なし	①静止貌。②呆钝貌，昏沉貌。
280	375—12	杌杌	wù wù	なし	犹“兀兀②”，昏昧貌。
281	378—3	翕然	xī rán	なし	①本指敛住呼息，收缩，引申阻塞貌。②全都，一致。

282	379—3	呀呀	xiā xiā	なし	张口貌。也作“啞啞”。
283	379—4	啞啞	xiā xiā	なし	见“呀呀”。
284	386— 10	萧然	xiāo rán	なし	清静，冷落。
285	386— 11	萧洒	xiāo sǎ	なし	①清静冷落。②清丽，清爽。③自然，有韵致，不呆板。④细雨飘洒貌。
286	387—1	噉然	xiāo rán	なし	饥饿貌。借作“枵”。
287	391—8	惺惺	xīng xīng	なし	①聪明。②清静。
288	396—8	喧喧	xuān xuān	なし	形容声音或心绪纷乱。
289	397—1	旋旋	xuán xuán	なし	①慢慢，缓缓。②渐渐。③迅即，随即。
290	397—9	熏熏	xūn xūn	なし	气盛貌，勃怒貌。
291	397—3	呀呀	yā yā	なし・ 象声詞	①伸张貌。②象声词。
292	400—6	牙牙	yá yá	なし	小儿学语声。
293	400— 12	齟齬	yá qiā	なし	齿不平，喻言语泼辣好斗。
294	401—1	轧	yà	象声詞	なし
295	401—2	娅姹	yà chà	なし	娇娆貌。
296	404—2	彘彘	yàn yàn	なし	见“嚙嚙”。
297	404—3	嚙嚙	yàn yàn	なし	力争貌；坚忍貌。又作“彘彘”。
298	405— 14	窈窕	yǎo tiáo	なし	①曲折，婉转。又作“窈窕”。②形容漫游，漫行貌。
299	406—1	窈窕	yǎo tiáo	なし	见“窈窕”。
300	408—9	歔歔	yè yè	なし	气息微弱貌。
301	413—3	迤迤	yí lì	なし	渐渐，渐次。表示动作的逐步推移。
302	417— 12	嫫嫫	yíng míng	なし	细视貌。
303	424—2	跃跃	yuè yuè	なし	喜悦貌。
304	425—4	匝匝	zā kē	なし	环绕遍布貌。

305	427—5	遭遭簇簇	zāo zāo cù cù	なし	形容密集状。
306	430— 10	吒叉	zhā chā	なし	见“吒沙”。
307	430— 11	吒沙	zhā shā	なし	张开貌。字又作“吒叉” “沙觮”等。
308	430— 12	吒嘍	zhā xiā	なし	𡗗 巨大貌。
309	430— 13	沙觮	zhā shā	なし	见“吒沙”。
310	441—2	𡗗 挣才从	zhēng chuāng	象声詞	①象声词。见“琤”。 ②奋发，振作。
311	441—4	琤	zhēng cóng	象声詞	𡗗 象声词，形容声音清 脆。
312	441—4	挣才从	zhēng chuāng	象声詞	见“挣才从”。
313	441—5	铮钏	zhēng cóng	象声詞	见“琤”。
314	451—4	啁啾	zhōu jiū	象声詞	象声词，状鸟鸣，乐器等 细碎的声音。
315	458—7	灼然	zhuó rán	なし	确实；显然。又作“酌 然”。
316	458— 10	酌然	zhuó rán	なし	见“灼然”。
317	461—2	趑趄	zī jū	なし	①行不稳貌。②指品行不 端貌。
318	464—9	醉慢慢	zuì màn màn	なし	酒醉昏沉沉的样子。

付表7：『詩経』における漢語オノマトペ

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
1 国風/周南・関雉	關關	かんかん	鳥がのどかに鳴くさま。鳥が和らいだ声で鳴くさま。	源平盛衰記〔14C前〕一二・師長熱田社琵琶事「春の鶯関々（クワンクワン）として、花の本に滑か也」
2	萋萋	せいせい	草木などの生い茂るさま。萋然。さいさい。	あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〉一五「野草は萋萋として牧場を蔽ひ」
3 周南・葛覃	喈喈①	かいかい	①鳥がなごやかに鳴くさま。②鈴や鐘の鳴るさま。	俳諧・寛政三年紀行〔1791〕「喈喈々たる鳥は仏土妙音の響かとも聞へ」
4	莫莫①	ばくばく	①草木がさかんに茂るさま。茂り盛えるさま。②勢いよくわき起こるさま。また、たちこめたり、たなびいたりするさま。漠漠。③静かで慎みぶかいさま。ひっそりしたさま。	俳諧・俳諧三部抄〔1677〕上・夏「陰茂しはくはくとしてからす麦（のふ祐）」
5 周南・卷耳	なし			
6 周南・樛木	なし			
7	喈喈		なし	
8 周南・蟋蟀	振振②	しんしん	①盛んなさま。盛大なさま。②信義仁愛の厚いさま。③鳥などのむらがり飛ぶさま。	なし
9	萋萋	こうこう？	なし	
10	蠚蠚	はいはい？	なし	
11	揖揖	ゆうゆう？	なし	
12	蟄蟄	？	なし	
13 周南・桃夭	夭夭①	ようよう	①若々しく美しいさま。みずみずしいさま。若い勢いが盛んにあふれ出るさま。②「ようようじょ（夭夭如）」に同じ。顔の和らいで血色のよいさま。容貌ののびのびしているさま。喜ばしいさま。	太平記〔14C後〕三七・畠山入道々誓謀叛事「秘して深窓に有りしかば、夭々（ヨウヨウ）たる桃花の暁の露を含んで、墻（かき）より余の一枝の霞に匂へるが如く也」
14	灼灼①	しゃくしゃく	①明るく照り輝くさま。光のほか、花が照り映えるさまにもいう。灼然。②盛んなさま。③なまめかしい色のさま。	万葉集〔8C後〕一六・三八三五・左注「水影濤々蓮花灼々」
15	蓁蓁	しんしん	木の葉などが盛んに茂るさま。	葬列〔1906〕〈石川啄木〉「しんしんと生ひ茂った杉木立に囲まれて」
16 周南・兔置	肃肃③	しゆくしゆく	①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。とどったさま。④おごそかなさま。厳肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたつてもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。	経国美談〔1883～84〕〈矢野龍溪〉後・一七「各軍団肅々として山を下り或は右に赴き或は左に赴く」
17	丁丁①（杭を打つ音）	ちようちよう	（多く「と」を伴って用いるが、古くは「ちようちようど」と濁音になる）①金属などがぶつかり合うかん高い音が、続いて響くさまを表わす語。また、いきおいよく打ち続けたり、切り続けたりするさまにもいう。②物事がきちんきちんと的確に行なわれるさま。	古今著聞集〔1254〕一六・五五一「此尼持仏堂にて、かねをあまたたびちやうちやうと物さわがしげにうちて」
18	赳赳	きゆうきゆう	勇ましいさま。つよいさま。	如是放語〔1898〕〈内田魯庵〉「赳々（キウキウ）たる男爵の將軍忽ち産を揮って執達吏に押へられ」
19 周南・采芣苢	なし			

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
20	周南・漢広	翹翹①	ぎょうぎょう	①雑木のすくすくと伸びているさま。②群をぬきんでるさま。	①なし②米欧回覧実記（1877）〈久米邦武〉一・一四「名工各其匠思を極め、図式を取立たる、其中に於て翹翹たるを選ぶに、尚五十名あり」
21	周南・汝墳	なし			
22	周南・麟之趾	振振②	しんしん	①盛んなさま。盛大なさま。②信義仁愛の厚いさま。③鳥などのむらがり飛ぶさま。	なし
23	召南・鵲巢	なし			
24		僮僮	どうどう？	なし	
25	召南・采芣	祁祁①	きき	なし。①静かでゆったりしたさま。②多いさま。（新選漢和辞典Web版）	
26		嚶嚶	ようよう	虫の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）	
27		趨趨	てきてき	はねおどるさま。（新選漢和辞典Web版）	
28	召南・草蟲	仲仲	ちゅうちゅう	うれい悲しむさま。安心がえられず、心を痛め思いなやむさま。	江戸繁昌記（1832～36）三・裏店「此の心の死し難き、之を思ふ毎に冲々たり」
29		憊憊	？	なし	
30	召南・采蘋	なし			
31	召南・甘棠	なし			
32	召南・行露	なし			
33	召南・羔羊	なし			
34	召南・殷其雷	振振②	しんしん	①盛んなさま。盛大なさま。②信義仁愛の厚いさま。③鳥などのむらがり飛ぶさま。	なし
35	召南・標有梅	なし			
36	召南・小星	肅肅①	しゆくしゆく	①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。ととのったさま。④おごそかなさま。厳肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたつてもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。	真善美日本人（1891）〈三宅雪嶺〉日本人の任務・三「上帝英傑を下して国人を救ふと信じ、自ら慰め自ら楽み日夜蕭々として之を俟てりき」
37	召南・江有汜	なし			
38	召南・野有死麋	脱脱	だつだつ？	なし	
39	召南・何彼穠矣	なし			
40	召南・騶虞	なし			
41	邶風・柏舟	耿耿②	こうこう	①光の明るいさま。きらきら光っているさま。②心が安らかでないさま。かたく思っていることがあって忘れられないさま。また、思っていることがあって、寝られないさま。	内地雑居未来之夢（1886）〈坪内逍遙〉一二「百感かはるがはる脳裡に浮びて、転（うた）た耿耿（コウカウ）と神すみ気さえ（略）眠りも得やらず」
42	邶風・柏舟	棣棣（威儀のゆたかに備わるさま）	ていてい	落ち着いてゆったりとしていること。物事になれていること。また、そのさま。	明衡往来（111C中か）〈藤原明衡〉下本「抑判官儀暫可及給。為習棣棣之威儀也」
43	邶風・柏舟	悄悄①	しょうしょう	①元気を失ってしおれるさま。心をいためてしずむさま。しおしお。すごすご。②静かなさま。ものさびしいさま。また、副詞的に用いて、ひそかに。こっそりと。	海道記（1223頃）木瀬川より竹の下「恨を含し悄悄たる秋天の夕の雲」
44	邶風・緑衣	なし			
45	邶風・燕燕				
46	邶風・日月	なし			

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
47 萩風・終風	悠悠②	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。② <u>ゆったりとおちついたさま</u> 。③数の多いさま。	①菅家文章（900頃）五・牡丹「朗詠叢辺立、悠々忘日斜」；俳諧・蕪村文集（1816）夢説「風おもむるに浪あらそはず、悠々たる春光、其興いふばかりなし」
48	噎噎	なし		
49	虺虺	きき	なし	なし
50 萩風・擊鼓	なし			
51 萩風・凱風	夭夭①	ようよう	①若々しく美しいさま。みずみずしいさま。若い勢いが盛んにあふれ出るさま。②「ようようじょ（夭夭如）」に同じ。顔の和らいで血色のよいさま。容貌ののびのびしているさま。喜ばしいさま。	太平記〔14C後〕三七・畠山入道々誓謀叛事「秘して深窓に有りしかば、 夭々 （ヨウヨウ）たる桃花の暁の露を含んで、牆（かき）より余る一枝の霞に匂へるが如く也」
52 萩風・雄雉	泄泄A（ゆるく翼を伸ばして飛ぶさま）	えいえい	たるんでしまりがいいこと。ゆるゆるとしているさま。	読史余論〔1712〕二・中世以来将帥の任世官世族となりし事「天のまさに蹶（うご）く時にしかく泄々する事なしと云事、まことなる哉」
53	悠悠②	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。② <u>ゆったりとおちついたさま</u> 。③数の多いさま。	正倉院文書-天平勝宝八年（756）六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「 悠々 三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」
54 萩風・鶉有苦葉	雛雛	ようよう	①やわらぎ楽しむさま。②鳳凰の鳴く声。③鳥の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）； 車の鈴もなごやかに 。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p150訳	
55 萩風・谷風	習習（重なるさま『学研漢和大辞典』p1033）	しゅうしゅう	風のそよそよと吹くさま。風がなごやかに吹くさま。	自然と人生（1900）〈徳富蘆花〉湘南雑筆・夏「青畳敷く相模灘の上を 習々 （シウシウ）として渡り来る風の涼しさを聞かずや」
56	遲遲①	ちち	① 物事の進み方がおそく、ゆったりしているさま。のろのろして遅いさま 。②一日がゆったりとのどかで長いさま。春の日についていう。	懐風藻〔751〕春日於左僕射長宅宴〈大津首〉「飽徳良為酔、伝盞莫遲遲」；鶯〔1940〕〈川田順〉巻末小記「予は歌歴いたづらに長く、歩みの遅々たること牛の如しだ」
57 萩風・式微	なし			
58 萩風・旄丘	なし			
59 萩風・簡兮	俣俣（容貌の大なること）	なし		
60 萩風・泉水	悠悠②	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。② <u>ゆったりとおちついたさま</u> 。③数の多いさま。	①菅家文章（900頃）五・牡丹「朗詠叢辺立、悠々忘日斜」；俳諧・蕪村文集（1816）夢説「風おもむるに浪あらそはず、悠々たる春光、其興いふばかりなし」
61 萩風・北門	殷殷A（憂え悲しむさま）	いんいん	①雷、鐘、車、大砲などの音が大きく鳴り響くようす。②多いさま。さかんなさま。	①太平記〔14C後〕二五・自伊勢進宝剣事「殷殷（インイン）たる梵音（ぼんおん）は、本地三身の高聴（かうちやう）にも達し」②ヒューマニチー〔1896〕〈田岡嶺雲〉「葡萄の美酒、血紅殷々（インイン）朱門の膳羞に上（のぼ）れども」
62 萩風・北風	霏（雪がさかんに降るさま）	なし		
63 萩風・北風	霏	なし（但し、「霏霏」あり）	① 雨や雪などが、しきりに降るさま 。②雲や霧、かすみなどが一面にたちこめるさま。③物事が続いて絶えないさま。	①懐風藻〔751〕望雪〈紀古麻呂〉「落雪霏霏一嶺白」；休暇〔1974〕〈吉村昭〉二「誘蛾灯に、霏々と舞う雪片のようなおびただしい昆虫が」

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
64	邶風・北風	喞	なし（但し、「喞喞」あり）	①たくさんの鳥が声を合わせて鳴く声。「喞喞（かいかい）」②やわらぐ。③鐘の音。④泣き声。⑤風雨の強いさま。（新選漢和辞典Web版）	
65	邶風・静女	なし			
66	邶風・新台	瀾瀾	びび？	①水がみちあふれ流れるさま。②ものが多くみちあふれるさま。さかなさま。（新選漢和辞典Web版）；いよいよ。ますます。（『日本国語大辞典』）	
67		洸洸（水が平らに流れるさま）	なし		
68	邶風・二子乗舟	汎汎①	はんぱん	①浮かびただようさま。②河水などの広々と流れるさま。また、満ちて流れるさま。③かるがるしいさま。凡庸なさま。また、そのこと。	①文華秀麗集〔818〕下・神泉苑九日落葉篇〈嵯峨天皇〉「随波泛泛流不已」；西国立志編〔1870～71〕〈中村正直訳〉八・九「足下汎々浮々の生涯、庶くは定りて」
		養養	ようよう？	原詩：不安で落ち着かないさま	
69	邶風・柏舟	なし			
70	邶風・牆有茨	なし			
71	邶風・君子偕老	委委	いい	起居動作のゆったりとしたさま。（新選漢和辞典Web版）	
72		佻佻	たた	ゆったりとして美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
73	邶風・桑中	なし			
74	邶風・鶉之奔奔	奔奔	ほんぼん	（「詩經邶風・鶉之奔奔」の「鶉之奔奔、鶉之彊彊」により、元来、鳥の雌雄の仲のよいことをいう語だが、この詩が、衛の宣公の未亡人宣姜の不倫をそしめる詩と解されているところから） 鳥の雌雄、転じて、男女の関係が乱れて定まらないさま。	福翁百話〔1897〕〈福沢諭吉〉二五「鶉の奔々（ホンホン）たる多妻の醜を愧づると愧ぢざるとの界」
75		彊彊	きょうきょう？	なし	
76	邶風・定之方中	なし			
77	邶風・蟋蟀	なし			
78	邶風・相鼠	なし			
79	邶風・干旄	子子①	けつけつ/げつけつ	①孤立するさま。②傑出するさま。③小さいさま。	
80	邶風・載馳	悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書・天平勝宝八年〔756〕六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」
81		芄芄	ほうほう	①芄芄（ほうほう）は、草木が盛んに茂るさま。②小動物の尾の毛が長いさま。（新選漢和辞典Web版）	
82		猗猗	いい	木の葉の美しく茂るさま。	色葉字類抄〔1177～81〕「猗猗イウルハシ」；思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉三・三「千竿の緑竹猗々（㊦㊦）として戦いで居る」
83	衛風・淇奥	青青①	せいせい	①色が青いさま。おおあおとしているさま。②髪の毛のくろぐろとしたさま。③顔色が青いさま。生気を失っているさま。	①性霊集 - 一〔835頃〕喜雨歌「青青草木珠莊葉、浩々陂池湛如瑠」；思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉二・二「小笹まぢりの春草青青（セイセイ）として、董菜（すみれ）蒲公英（たんぽぽ）蓮華草などの花が咲いて」
84	衛風・考槃	なし			

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
85	敖敖（背の高いことを形容）	ごうごう	背が高いさま。（新選漢和辞典Web版）	
86	鑣鑣	ひょうひょう	盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）	
87	洋洋①	ようよう	①水が満ちあふれるさま。また、広々としたさま。ゆったりしたさま。限らないさま。漾漾（ようよう）。洋洋乎。②物事の盛んなさま。③希望に満ちているさま。	①経国集〔827〕一・春江賦（嵯峨天皇）「望春江兮驕目、観清流之洋洋」；造化妙々奇談〔1879～80〕〈宮崎柳条〉一三「諸（これ）を水中に納（いる）れば、圍々洋々（ヨウヨウ〈注〉ユラリ）として活潑たる魚と成り」
88	衛風・碩人 活活（水が流れる音）	かつかつ？	いきいき：（「と」を伴う場合が多い）生気があふれて勢いのよいさま。活気にみちたさま。新鮮なさま。	
89	濺濺	かつかつ	あみを打つ音。（新選漢和辞典Web版）	
90	發發②	はつはつ	①風のはやいさま。②魚のはねるさま。（新選漢和辞典Web版）	
91	掲掲	けいけい	①長いさま。②高いさま。（新選漢和辞典Web版）；長く伸びている形容（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p59注釈十三）	
92	孽孽	げつげつ	①りっぱに飾るさま。②いまにもこわれそうなさま。（新選漢和辞典Web版）	
93	蚩蚩①	しし	①丁寧でへりくだるさま。②おろかなさま。③乱れたさま。	①なし②六如庵詩鈔・二編〔1797〕六・織田士猛篆刻「其余蚩蚩媚時目、心手雖至氣索然」；明治月刊〔1868～69〕〈大阪府編〉一「蚩々たる細民の国事に参与するが故に、見識足らずして法を行ふに弱し」
94	漣漣①	れんれん	①涙のとめどなく流れるさま。②さざなみのたつさま。	①三教指帰〔797頃〕下「哽咽悽愴、涕泣漣漣」；連環記〔1940〕〈幸田露伴〉「漣々（レンレン）たる涙を止めもあへず」②了幻集〔1392頃〕春江「東風吹水碧漣漣、日暮誰家一釣船」
96	衛風・氓 湯湯	しょうしょう/とうとう	沓しょうしょう：（「湯（しょう）」は水の流れるさま）水勢の強くはげしいさま。また、流れのはげしいさま。沓とうとう：①広大なさま。広々としているさま。強大なさま。②平坦なさま。たいらかでやすらかなさま。③さかんに水の流れるさま。④おだやかなさま。また、心がゆったりとしているさま。⑤みだれているさま。法度（はつと）のやぶれすたれるさま。⑥「とうとう（滔滔）(2)」に同じ。弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。	沓：性霊集・一〔835頃〕遊山慕仙詩「定恵澄心海、无縁毎湯々」；日蓮遺文・身延山御書〔1282〕「下枝に鳴く蟬の音（こゑ）滋く、前には湯々たる流水湛へて実真相如の月浮び」沓：③本朝麗藻〔1010か〕下・与諸文友泛船於宇治川聊以逍遙〈藤原伊周〉「波勢湯湯巴峡路、風声嫋嫋洞庭天」；浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕三・連歌明月影「満（みつる）時は朱（あけ）の玉垣の最中（もなか）迄波蕩々（トウトウ）としろくいろどり」
97	晏晏	あんあん	やすらかなさま。晏如（あんじょ）：（現代では多く「晏如として」の形で用いられる）やすらかなさま。落ち着いているさま。安然（あんぜん）。晏然（あんぜん）：「あんじょ（晏如）」に同じ。	晏如（あんじょ）：常山文集〔1718〕二〇・梅里先生碑陰「有則隨有而楽胥、無則任無而晏如」；三四郎〔1908〕〈夏目漱石〉四「服装（なり）は必ず穢ない。生計（くらし）は屹度（きつと）貧乏である。さうして晏如（アンジヨ）としてある」
98	旦旦③	たんたん	①毎朝。②毎日。③はっきりとしたさま。	なし
99	衛風・竹竿 籊籊	てきてき	竹竿の細く長いさま。（新選漢和辞典Web版）	なし

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
100		悠悠	ゆうゆう？	なし（ひたひたと波打つさま）	
101	衛風・芴蘭	なし			
102	衛風・河広	なし			
103	衛風・伯兮	杲杲	こうこう	日の光の明るいさま。	羅山先生詩集〔1662〕五・日光六百言示向陽「杲杲日出処、東方君子国」；妻木〔1904～06〕〈松瀬青々〉夏「杲々と百合にさす日や朝掃除」
104	衛風・有狐	綏綏	すいすい	①つれだって歩くさま。②雪などが降るさま。③ゆったりと落ち着いたさま。（新選漢和辞典Web版）；行くこと遅き形容。プラプラと尾を垂れて歩く形。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p63注釈一）	
105	衛風・木瓜	なし			
106		離離①	りり	①穀物の穂がみのって垂れ下がるさま。また、草木の繁茂するさま。②散らばるさま。③雲などが長く続くさま。	①菅家文章〔900頃〕一・重陽侍宴、賦景美秋稼「霏霏皆和氣、離離半旅生」；葬列〔1906〕〈石川啄木〉「尺もある雑草が離々として生ひ乱れて居る」
107	王風・黍離	靡靡	びび	①なびくさま。②声が細く美しいさま。③ゆっくり歩くさま。（新選漢和辞典Web版）靡然（ひぜん/びぜん）：①風に草木などがなびくさま。たなびくさま。②転じて、ある勢力になびき従うさま。	靡然：①海道記〔1223頃〕豊河より橋本「薄き煙靡然となびきて」②本朝文粹〔1060頃〕六・申弁官左右衛門権佐大学頭等状〈大江匡衡〉「礼楽儒雅之林、靡然向風」；芭蕉〔1922〕〈吉田絃二郎〉「大風起って白雲飛び天下靡然（ヒゼン）として蕉門の風に随ふ」
108		悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書-天平勝宝八年（756）六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」；南海先生文集〔1784〕一・古詩「悠悠天地間、禍福何為也」
109	王風・君子于役	なし			
110		陽陽②	ようよう	①りっぱなようす。②得意のさま。③ゆったりとしているさま。（新選漢和辞典Web版）	
111	王風・君子陽陽	陶陶（ようよう①）	ようよう/とうとう	ようよう：①なごやかに楽しいさま。うっとりとするさま。こころよく酔うさま。②とうとう、馬を走らせるさま。	①本朝文粹〔1060頃〕九・遠念賢士風詩序〈菅原文時〉「醉眼陶陶、不弁花也也。懽心、猶迷鳥獸調賦」；金色夜叉〔1897～98〕〈尾崎紅葉〉続・一「打見れば面目爽に、稍傲れる色有れど峻しくはあらず、而も今陶陶然として酒興を発し」
112	王風・揚之水	なし			
113	王風・中谷有蓷	なし			
114	王風・兔爰	爰爰	えんえん	ゆるやかなさま。（新選漢和辞典Web版）	
115	王風・葛藟	緜緜	めんめん	長く続いて、絶えないさま。どこまでも続いているさま。	文華秀麗集〔818〕上・在辺贈友〈小野岑守〉「綿綿千累路、帛素寄双飛」；予言の芸術〔1910〕〈姉崎嘲風〉「無意義だ、不可解だと叫ぶ間には、尚人生の意義に対する恋々の情が綿々絶えないでをるのではないか」
116	王風・采芣	なし			
117		檻檻	かんかん？	なし。車輪がきしむ音。	
118	王風・大車	哼哼	とんとん	重々しくゆっくりとしたさま。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
119 王風・丘中有麻	施施	しし	①行きなやむさま。②とくいがるさま。よろこぶさま。（新選漢和辞典Web版）施施然：①なかなか進まないさま。進みにくく徐行するさま。②自ら満足し、よろこぶさま。；目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p171 注釈三：ブラブラ来ること。	
120 鄭風・緇衣	なし			
121 鄭風・将仲子	なし			
122 鄭風・叔于田	なし			
123 鄭風・大叔于田	なし			
124	旁旁	なし	馬が遅しく元気であるさま。	
125	麋麋	ひょうひょう	①ただけしいさま。②盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）	
126 鄭風・清人	陶陶（とうとう②）	ようよう/とうとう	ようよう：①なごやかに楽しいさま。うっとりとするさま。こころよく酔うさま。②とうとう、馬を走らせるさま。	五山堂詩話〔1807～16〕二「尽日陶陶有何碍、不比世間行路難」
128 鄭風・羔裘	なし			
129 鄭風・遵大路	なし			
130 鄭風・女日鷄鳴	なし			
131 鄭風・有女同車	將將	しょうしょう/そうそう	①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
132 鄭風・山有扶蘇	なし			
133 鄭風・蓀兮	なし			
134 鄭風・狡童	なし			
135 鄭風・褰裳	なし			
136 鄭風・丰	なし			
137	淒淒（淒淒）③	せいせい	①ものさびしいさま。わびしく悲しいさま。②涼しいさま。③寒く冷たいさま。風雨が激しく寒冷なさま。④雨雲のわくさま。	③経国集〔827〕一三・夕次播州高砂（淡海福良麻呂）「淒淒抱霜雪、夜々宿波瀾」；交隣須知〔18C中か〕四・逍遙「淒淒セイセイトシタ風霜ニドウシテユコウカ」
138 鄭風・風雨	喈喈①	かいかい	①鳥がなごやかに鳴くさま。②鈴や鐘の鳴るさま。	俳諧・寛政三年紀行〔1791〕「喈喈たる鳥は仏土妙音の響かとも聞へ」
139	瀟瀟	しょうしょう	風雨のはげしいさま。	続狂雲詩集〔1481頃〕題画「山寺長松風颯々、水亭脩竹雨瀟々」
140	膠膠	こうこう	①鶏の鳴く声の形容。②騒ぎ乱れるさま。（新選漢和辞典Web版）	
141	青青①	せいせい	①色が青いさま。あおあおとしているさま。②髪の毛のくろぐろとしたさま。③顔色が青いさま。生気を失っているさま。	①性霊集・一〔835頃〕喜雨歌「青青草木珠莊葉、浩浩陂池湛如瑠」；思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉二・二「小笹まぢりの春草青青（セイセイ）として、董菜（すみれ）蒲公英（たんぽぽ）蓮華草などの花が咲いて」
142 鄭風・子衿	悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書-天平勝宝八年（756）六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」；南海先生文集〔1784〕一・古詩「悠悠天地間、禍福何為也」
143	悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書-天平勝宝八年（756）六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」；南海先生文集〔1784〕一・古詩「悠悠天地間、禍福何為也」
144 鄭風・揚止水	なし			

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
145	鄭風・出其東門	なし			
146	鄭風・野有蔓草	瀼瀼	じょうじょう？	瀼：露の多いさま。（新選漢和辞典Web版）	
147	鄭風・溱洧	渙渙	かんかん	水がさかんに流れるさま。	冥府山水図〔1951〕〈三浦朱門〉 「この谷間に水音だけが渙々（カンカン）と響いて」
148	齊風・鷄鳴	藹藹	こうこう？	虫がブンブンと	
149	齊風・還	なし			
150	齊風・著	なし			
151	齊風・東方之日	なし			
152	齊風・東方未明	瞿瞿	くく	「瞿瞿」：驚きあわてるさま。そわそわするさま。また、きよろきよろするさま。「瞿然」：驚いて見るさま。驚いて顔色を変えるさま。	「瞿瞿」なし。「瞿然」正倉院文書・天平宝字二年〔758〕六月一日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「先帝之玩好、遺在篋笥、追感瞿然、謹以奉献」；伊沢蘭軒〔1916～17〕〈森鷗外〉一八〇「わたくしは始めて読んで瞿然（クゼン）とした」
153		崔崔	さいさい	山の大きくそびえるさま。また、山のように積み重なっているさま。	四時交加〔1799〕下・冬「売ものは崔崔（サイサイ）として地にみち、山海の産物をここにつくすかと疑ひ」
154	齊風・南山	綏綏	すいすい	①つれだって歩くさま。②雪などが降るさま。③ゆったりと落ち着いたさま。（新選漢和辞典Web版）；尾を引いてブラブラ行くこと。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p88注釈二）	
155		驕驕	きょうきょう？	高く生いしげる形容。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p89注釈一）	
156	齊風・甫田	切切	とうとう？	憂勞の形容。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p89注釈二）	
157		桀桀	けつけつ？	高く伸び出る形容。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p89注釈三）	
158		怛怛	だつだつ	かなしみ、心を痛めるさま。	なし
159	齊風・盧令	なし			
160	齊風・蔽芾	唯唯	いい？	魚は勝手に出たり入ったりする。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p89注釈五）異なる意味：①かしこまって承諾する時の応答のことば。はい。②（多く「唯唯として」の形で用いる）他人のことばに少しもさからわずに従うさま。他人の言うがままになるさま。唯々諾々（いいたくたく）。	①太平記〔14C後〕一六・正成下向兵庫事「正成重ねて申けるは『衆愚之愕々たるは、一賢之唯々（イイ）には如かず』と申候へば」；花柳春話〔1878～79〕〈織田純一郎訳〕三三「テンブルトン曰く、唯々（イイ）」②読本・椿説弓張月〔1807～11〕後・二〇回「『人に異（あやし）ま）れざる間（はし）に、とくとく』といそがし給へば、時員（ときかず）唯々（イイ）として別を告（つげ）」；酒中日記〔1902〕〈国木田独歩〉「唯々（中々）として自分は此命令を奉じて居た」
161		薄薄	はくはく？	馬蹄のひびきボクボクと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p90注釈	
162		濟濟	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③おごそかにしてつつしむさま。礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。；美しく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p90訳	
163		瀾瀾	びび	多いさま。水がみちたさま。（新選漢和辞典Web版）；ゆらゆらと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p90訳	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
164 齊風・載駟	湯湯	しょうしょう/とうとう	沓しょうしょう：（「湯（しょう）」は水の流れるさま）水勢の強くはげしいさま。また、流れのはげしいさま。沓とうとう：①広大なさま。広々としているさま。強大なさま。②平坦なさま。たいらかでやすらかなさま。③さかんに水の流れるさま。④おだやかなさま。また、心がゆったりとしているさま。⑤みだれているさま。法度（はつと）のやぶれずたれるさま。⑥「とうとう（滔滔）(2)」に同じ。弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。	沓：性靈集・一（835頃）遊山慕仙詩「定恵澄心海、无縁毎湯々」；日蓮遺文・身延山御書〔1282〕「下枝に鳴く蟬の音（こゑ）滋く、前には湯々たる流水湛へて実相真如の月浮び」沓：③本朝麗藻〔1010か〕下・与諸文友泛船於宇治川聊以逍遙（藤原伊周）「波勢湯湯巴峡路、風声嫋嫋洞庭天」；浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕三・連歌明月影「満（みつる）時は朱（あけ）の玉垣の最中（もなか）迄波蕩々（トウトウ）としろくいろどり」
165	彭彭	ほうほう	多く盛んなさま。盛大なさま。	稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」
166	滔滔①	とうとう	①水がさかんに流れるさま。多量の水を悠然とたたえているさま。洶洶。②弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。③おしなべて一様であるさま。また、世の風潮などが一つの方向に勢いよく移るさま。④広大なさま。無辺であるさま。かぎりなくひろがるさま。	①万葉集〔8C後〕一六・三八三五・左注「今日遊行見勝間田池、水影濤々蓮花灼々」；太平記〔14C後〕二〇・城入結道墮地獄事「是を受けて大なる鉄の桶に入れあつめれば、程なく十分に湛へて滔々（タウタウ）たる事夕陽を浸せる江水の如也」
167	儻儻	?	行人の多い形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p90訳	
168	齊風・猗嗟	なし		
169	糾糾	きゅうきゅう	もつれあうさま。また、物が古くくたびれたさま。	風流伝〔1889〕〈幸田露伴〉九・下「心糾々（きうきう）気昂々（かうかう）、抑幾年の学びたる力一杯鍛ひたる腕一杯の経験修錬」
170	摻摻	さんさん	女の手のしなやかなさま。（新選漢和辞典Web版）	
171 魏風・葛屨	提提①	ていてい	①安らかなさま。②鳥が群れをなして飛ぶさま。（新選漢和辞典Web版）；しとやかにゆったり。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p92注釈四	
172	宛然	えんぜん	そっくりそのままであるさま。よく似ているさま。よく当てはまるさま。；①あたかも。ちょうど。まるで。②そっくりそのまま。依然。③譲り避けるさま。へりくだるさま。（新選漢和辞典Web版）；宛然は宛然。古は右を尊ぶから、人に謙って左にさける。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p92注釈五	経国集〔827〕一四・奉和清凉殿画壁山水歌〈都腹赤〉「名山大水宛然是、咫尺能分千万里」；吾輩は猫である〔1905～06〕〈夏目漱石〉一「宛然たる列仙伝中の人物だね」
173	魏風・汾沮洳	なし		
174	魏風・園有桃	なし		
175	魏風・陟岵	なし		
176	魏風・十畝之間	泄泄	たるんでしまりがいいこと。ゆるゆるとしているさま。；のびのびと気安く楽しいさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p94注釈四	読史余論〔1712〕二・中世以来将帥の任世官世族となりし事「天のまさに蹶（うご）く時にしかく泄々する事なしと云事、まことなる哉」
177	魏風・伐檀	坎坎	「咽咽坎坎」：鼓の音の鳴るさまをいう。①力をいれて木を伐る音。②鼓をうつ音。③なやみ苦しむさま。④喜ぶさま。；坎坎と。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p95訳	

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
178	魏風・碩鼠	なし			
179		瞿瞿	くく	「瞿瞿」：驚きあわてるさま。そわそわするさま。また、きよろきよろするさま。「瞿然」：驚いて見るさま。驚いて顔色を変えるさま。； 油断なく左右をかえり見る 。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p97注釈五	
180	唐風・蟋蟀	蹶蹶	なし	「蹶然」（けつぜん）：はねおきるさま。力強くたちあがるさま。蹶起（けつき）するさま。また比喩的に、力強く事を始めるさま。副詞的にも用いる。； 動いて事に敏なり。忙しく立ちまわるさま 。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p97注釈七	「蹶然」：狐の裁判〔1884〕〈井上勤訳〉—「此時『ライネツケ』が姪の狸は蹶然（ケツゼン）として起立しつ」；米国及び英国に対する宣戦の詔書・昭和一六年〔1941〕—二月八日「帝国は今や自存自衛の為、蹶然起って」
181	唐風・山有樞	なし			
182		鑿鑿②	さくさく	①ことばがあざやかなさま。ことばのたくみなさま。② あきらかなさま。はっきりとしているさま 。；鑿鑿は鮮明の貌、激流にさらされる白い石。	①随筆・山中人饒舌〔1813〕上「世称鑿賞精覈者、引証古今、鑿々弁証」；佳人之奇遇〔1885～97〕〈東海散士〉六「巖公の論鑿々として皆肯綮に中る」②なし
183	唐風・揚止水	皓皓①	こうこう	① 白々と光り輝くさま 。きょうきょう。②潔白なさま。また、清らかなさま。③むなく広いさま。なにもなく広がっているさま。転じて、おらかなさま、ひろびろとして大きいさまにもいう。	①経国集〔827〕—三・奉試賦得隴頭秋月明〈藤原令緒〉「皎々含氷白。輝々入鏡澄」；あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〉夏の海「皎々（カウカウ）たる燈明の輝き初めるのを認めた」②なし。③吾輩は猫である〔1905～06〕〈夏目漱石〉—「余る所は皎々冽々たる空霊の気丈になる」
184		粼粼	りんりん	① 水が清く、石の見えるさま 。②月光のすんでいるさま。（新選漢和辞典Web版）	
185	唐風・椒聊	なし			
186	唐風・綢繆	なし			
187		涓涓	しょしょ?	なし。； 盛んに茂る形容 。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p100注釈二	
188		蝓蝓	くく	なし。；親しむ人もなく、ただ一人ゆく心細い形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p100注釈三	
189	唐風・杕杜	菁菁	せいせい	草や木のおおおと盛んに茂るさま。	あらくれ〔1915〕〈徳田秋声〉—〇四「夏草が菁菁（セイセイ）と生繁って」
190		震震	けいけい	なし。「震」：①驚いて見つめる。②たよるところがない。③うれえる。（新選漢和辞典Web版）； 依る所なき也 。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p101注釈八	
191	唐風・羔裘	居居	きよきよ	なし。「倨倨」：① おごりたかぶるさま 。②ごろごろ寝てばかりいて考えないさま。（新選漢和辞典Web版）；居居は毛伝に、悪を懐いて相親しまぬことという。居は倨であろう。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p101注釈二	
192		究究	きゅうきゅう	なし。①憎みあうさま。②とまることがないさま。（新選漢和辞典Web版）；毛伝に居居のごとし。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p101注釈五	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
193 唐風・鴉羽	肅肅	しゆくしゆく	①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。ととのったさま。④おごそかなさま。厳肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたつてもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。；①つつしむさま。②静かなさま。③早いさま。④おごそかなさま。⑤松風や羽ばたきの形容。（新選漢和辞典Web版）；肅はシュッシュという鳥の羽音。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p101注釈一	
194	悠悠①	ゆうゆう	①遠くはらかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書-天平勝宝八年（756）六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」；南海先生文集（1784）一・古詩「悠悠天地間、禍福何為也
195	唐風・無衣	なし		
196	唐風・有杖之杜	なし		
197	唐風・葛生	なし		
198	唐風・采芣	なし		
199	秦風・車鄰	鄰鄰	「鱗鱗/隣隣」波や雲などが魚のうろこのように相連なるさま。また、鱗のように鮮やかで美しいさま。；①多くの車が鳴りきする音。②あとからついてくるさま。（新選漢和辞典Web版）	「鱗鱗/隣隣」東京新繁昌記〔1874～76〕〈服部誠一〉二・京橋煉化石「葦瓦鱗々巨楹比々、一棟の長さ二十間」；自然と人生〔1900〕〈徳富蘆花〉写生帖・夏の興「海的面鱗々（リンリン）と鯪立ちぬ」
200	秦風・駟驥	なし		
201	秦風・小戎	厭厭①	①安らかで静かなさま。②植物などの盛んに茂るさま。	①本朝文粹〔1060頃〕一〇・隔花遙勸酒詩序（菅原輔昭）「厭厭然独迷花酒之下云爾」
202		秩秩②	①流れ行くさま。②知識のあるさま。また、知識を進めるさま。	②本朝文粹〔1060頃〕七・申請重弁定齊名所難学生同時棟詩状（大江匡衡）「以才奥学之妙簡、明明秩秩之公心、所定置也」
203	秦風・蒹葭	蒼蒼②	①おおおとしたさま。まっさおなさま。また、天のおおいさま。②草木がおおおと茂るさま。③月の色の青白いさま。④髪の毛の白くなりはじめたさま。老いたさま。⑤うす暗いさま。	②文華秀麗集〔818〕下・得潤底松（嵯峨天皇）「高声寂寂寒炎節、古色蒼蒼暗夕陽」；最暗黒之東京〔1893〕〈松原岩五郎〕九「蒼々（ソウウ）たる故郷の山嶽、穰々たる田間の沃野を最後の樂園として」
204		萋萋	草木などの生い茂るさま。萋然。さいさい。	あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〕一五「野草は萋萋として牧場を蔽ひ」
205		采采	美しく飾ったさま。彩りの美しいさま。；茂り茂りて。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p108訳	本朝無題詩〔1162～64頃〕二・聞大宋商人献鸚鵡（大江佐国）「隴西翅入漢宮深。采々麗容馴德音」
206	秦風・終南	將將	①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
207		交交	まじわるさま。行き交うさま。；鳥の声。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p109注釈一	人情本・明烏後正夢〔1821～24〕四・一八回「行を送り帰るを迎ふ、出船入船交々（コウコウ）たる、この夕風の涼しさに、暫は夏を萱草」

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
208	秦風・黄鳥	惴惴	ずいずい	おそれるさま。びくびくするさま。「惴惴然」：びくびくとおそれるさま。	明衡往来〔11C中か〕下本「臨深蹈薄。惴惴于心而已」；一種の攘夷思想〔1892〕（北村透谷）「奔馬常に狭少なる民吏の競場に惴々（ズイズイ）たるに過ぎざるなり」；「惴惴然」：米欧回覧実記〔1877〕（久米邦武）一・六「英国の無頼無行の徒は、みな逃て塩湖に徒（うつ）る、天下悪党の叢なりと、惴惴然と懼れたり」
209	秦風・晨風	欽欽②	きんきん	①鐘の音。②うれえるさま。③つつしむさま。（新選漢和辞典Web版）	
210	秦風・無衣	なし			
211	秦風・渭陽	悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書-天平勝宝八年（756）六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壮」；南海先生文集〔1784〕一・古詩「悠悠天地間、禍福何為也」
212	秦風・權輿	渠渠	きよきよ	①深く広いさま。②落ち着かないさま。（新選漢和辞典Web版）	
213	陳風・宛丘	なし			
214	陳風・東門之枌				
215	陳風・衡門	洋洋①	ようよう	①水が満ちあふれるさま。また、広々としたさま。ゆったりしたさま。限りないさま。漾漾（ようよう）。洋洋乎。②物事の盛んなさま。③希望に満ちているさま。	①経国集〔827〕一・春江賦（嵯峨天皇）「望春江兮馳目、觀清流之洋洋」；造化妙々奇談〔1879～80〕（宮崎柳条）一三「諸（これ）を水中に納（いる）れば、圍々洋洋（ヨウヨウ）（注）ユラリ）として活潑たる魚と成り」
216	陳風・東門之池	なし			
217		翬翬	そうそう	葉の盛んにしげるようす。（新選漢和辞典Web版）	
218	陳風・東門之楊	煌煌	こうこう	光り輝くさま。きらきら光るさま。	新撰朗詠集〔12C前〕上・螢「翠筍に燈籠りて秋耿々たり 碧雲に星透いて暁煌々たり（一条院）」；源平盛衰記〔14C前〕一六・遷都事「五星煌煌（クウウクウ）として赤き事火の如く」
219		肺肺	はいはい	樹木が勢よく茂るさま。（新選漢和辞典Web版）	
220		皙皙	せきせき（せいせい）	光りかがやく。（新選漢和辞典Web版）	
221	陳風・墓門	なし			
222	陳風・防有鵲巢	切切	とうとう？	落ち着かぬ。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p116訳）	
223		惕惕②	てきてき	①恐れるさま。不安なさま。②心配するさま。（新選漢和辞典Web版）	
224	陳風・月出	なし			
225	陳風・株林	なし			
226	陳風・沢陂	悒悒	えんえん	憂え悲しむさま。；くよくよ。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p118訳	詩聖堂詩集・三編〔1838〕一・送奥山君鳳之秋田「并州多故人、瞻望皆悒悒、遙思遼海上、莫似化鶴仙」
227	檜風・羔裘	切切	とうとう？	憂いはてる。（目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p119訳）	
228	檜風・素冠	樂樂	らんらん	体のやせたさま。（新選漢和辞典Web版）	
229		博博	たんたん	思いなやむさま。新選漢和辞典Web版）	
230	檜風・隰有萋楚	沃沃	？	若々しくつややかな。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p120訳	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
231 檜風・匪風	なし			
232 曹風・蜉蝣	楚楚①	そそ	①あざやかなさま。楚然。②清らかなさま。清らかで美しいさま。女性について、清らかで控え目な美しさを感じさせるさまにもいう。③いばらの茂るさま。	草枕〔1906〕〈夏目漱石〉一〇「緑りの枝を通す夕日を脊に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩るの中に、楚然として織り出されたる女の顔は」
233	采采	さいさい	美しく飾ったさま。彩りの美しいさま。；うるわしき。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p121訳	本朝無題詩〔1162～64頃〕二・聞大宋商人献鸚鵡〈大江佐国〉「隴西翹入漢宮深。采々麗容馴徳音」
234 曹風・候人	なし			
235 曹風・鴉鳩	なし			
236 曹風・下泉	芄芄①	ほうほう	①芄芄（ほうほう）は、草木が盛んに茂るさま。②小動物の尾の毛が長いさま。（新選漢和辞典Web版）	
237 豳風・七月	遲遲②	ちち	①物事の進み方がおそく、ゆったりしているさま。のろろして遅いさま。②一日がゆったりとどかで長いさま。春の日についていう。	②万葉集〔8C後〕一九・四二九二・左注「春日遅々鶉鷓正啼」；梁塵秘抄口伝集〔12C後〕一〇「ちちたる春の日は、枝に開け庭に散る花を見」
238	祁祁②	きき	なし。①静かでゆったりしたさま。②多いさま。（新選漢和辞典Web版）	
239	譙譙	しょうしょう	なし。鳥の羽の破れたさま。（新選漢和辞典Web版）；憔悴して羽がやせぬけること。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p129注釈八	
240 豳風・鴝鵒	翛翛	しょうしょう	なし。①草木が風にゆれるさま。②雨の音のさま。③まじりあうさま。（新選漢和辞典Web版）；尾の散れた形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p129注釈九	
241	翹翹	ぎょうぎょう	①雑木のすくすくと伸びているさま。②群をぬきんでるさま。；危うい形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p129注釈十	①なし②米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一四「名工各其匠思を極め、図式を取立たる、其中に於て翹翹たるを選ぶに、尚五十名あり」
242	嘒嘒	ぎょうぎょう	なし。恐れる。恐れて声を発する。（新選漢和辞典Web版）	
243 豳風・東山	惓惓①	とうとう	なし。①久しいさま。②みだれるさま。（新選漢和辞典Web版）	
244 豳風・破斧	なし			
245 豳風・伐柯	なし			
246 豳風・九罭	なし			
247 豳風・狼跋	几几①	きき	なし。①くつの飾りのさま。②盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）；几几は毛伝に絢ある貌。あるいはくつの音とする人もある。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p132注釈六	
248 小雅・鹿鳴之什・鹿鳴	呦呦①	ゆうゆう	①鹿の鳴く声。②むせび泣く声。（新選漢和辞典Web版）	
249	駉駉①	ひひ	①馬がどこまでも進むさま。②つかれる。（新選漢和辞典Web版）	
250	嘽嘽①	たんたん	①牛馬などのあえぐさま。②盛んなさま。③多いさま。④ゆとりのあるさま。（新選漢和辞典Web版）	
251 鹿鳴之什・四牡	翩翩①	へんべん	①ひるがえるさま。軽くとびあがるさま。軽やかなさま。②軽々しくて落ち着きのないさま。③才気のみなざるさま。風流なさま。	①文華秀麗集〔818〕上・秋日別友人〈巨勢識人〉「林葉翩翩秋日、行人独向辺山雲」；米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一「飛翔翩翩として、紙の風に舞ひ落る如く、遠く望めば飛蝶に似たり」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
252		駉駉①	しんしん	〔形動タリ〕①馬がはやく走るさま。②時間、年月がはやく進むさま。③物事のはやく進むさま。進歩のはやいさま。；〔副〕物事のはやく進むさまを表わす語。どんどん。すらすら。	なし
253	鹿鳴之什・皇皇者華	皇皇①	こうこう	①美しく盛んなさま。きらびやかなさま。はなやかなさま。②大きなさま。③さまようさま。また、心の不安定なさま。④忙しいさま。あわただしいさま。遑遑。；皇皇は毛伝に煌々。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p137注釈一（「煌々」：光り輝くさま。きらきら光るさま。）	江戸繁昌記〔1832～36〕五・後序「其往く、済々、其還る、皇々」
255	鹿鳴之什・常棣	鞞鞞	いい	①光り輝きまばゆいさま。②花の盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）	
256		丁丁①	ちょうちょう	（多く「と」を伴って用いるが、古くは「ちょうちょうど」と濁音になる）①金属などがぶつかり合うかん高い音が、続いて響くさまを表わす語。また、いきおいよく打ち続けたり、切り続けたりするさまにもいう。②物事がきちんきちんと的確に行なわれるさま。；ちょーんちょーんと木を伐る音。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p139注釈一	①古今著聞集（1254）一六・五五一「此尼持仏堂にて、かねをあまたたびちやうちやうと物さわがしげにうちて」；虞美人草（1907）〈夏目漱石〉五「切っ立った山の遙かの上に、鉦（なた）の音が丁々（チャウチャウ）とする」
257	鹿鳴之什・伐木	嚶嚶	おうおう	鳥が互いに鳴きあっているさま。	性霊集・二〔835頃〕沙門勝道上補陀洛山碑「綺花灼々 異鳥嚶々」；湯島詣〔1899〕〈泉鏡花〉四三「いかなる名鳥か嚶々（アウアウ）として、三度、梓の胸に鳴いたのである」
258		許許	ここ	大勢で力を合わせる時のかけごえ。（新選漢和辞典Web版）；毛伝に木の皮を削る形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p140注釈三	
259		坎坎②	かんかん	「咽咽坎坎」：鼓の音の鳴るさまをいう。①力をいれて木を伐る音。②鼓をうつ音。③なやみ苦しむさま。④喜ぶさま。；坎坎と。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p140訳	
260		蹲蹲	しゅんしゅん	舞うさま。	柳湾漁唱・二集〔1831〕老松篇寿臥牛山人六十「蹲蹲醉舞作竜吟、舞罷称觴跪献寿」
261	鹿鳴之什・天保	なし			
262		烈烈	れつれつ	激しいさま。勢いが激しくさかんなさま。；原詩：心配で気が気でない。筆者訳	経国集〔827〕一・重陽節神泉苑賦秋可哀応制（菅原清公）「望朝露之団々、聴夕風之烈々」；戦陣訓〔1941〕一・二「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振り断乎之を撃碎すべし」
263		駉駉	きき？	「駉」：①馬の元気なさま。②馬が威儀をもって進む。（新選漢和辞典Web版）；たけりいさむ。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p143訳	
264		業業	ぎょうぎょう	①あやぶみ恐れるさま。②さかんなさま。りっぱなさま。；たくましく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p143訳	
265	鹿鳴之什・采芣	翼翼②	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。②整っているさま。美しいさま。③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。；足並そろい。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p143訳	②詩聖堂詩集・三編〔1838〕九・有年行「与与翼翼黍稷蕃、積之崇又櫛比」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
266	依依①	いい	①枝のしなやかなさま。一説に、盛んに茂るさま。②離れるに忍びないさま。恋い慕うさま。③遠くてぼんやりしているさま。ほのかなさま。	①文華秀麗集〔818〕中・奉和春閨怨〈巨勢識人〉「閑庭点点蒼苔駁、暗牖依依綠柳低」；中華若木詩抄〔1520頃〕下「楊柳依依綠映門〈略〉依々は、柳の自然の趣ぞ」
267	遲遲①	ちち	①物事の進み方がおそく、ゆったりしているさま。のろのろして遅いさま。②一日がゆったりとのどかで長いさま。春の日についていう。	懷風藻〔751〕春日於左僕射長王宅宴〈大津首〉「飽徳良為酔、伝蓋莫遲遲」；鶯〔1940〕〈川田順〉巻末小記「予は歌歴いたづらに長く、歩みの遅々たること牛の如しだ」
268	旆旆	はいはい	①旗のなびくさま。②草木の生い茂ったさま。（新選漢和辞典Web版）	
269	悄悄①	しょうしょう	①元気を失ってしおれるさま。心をいためてしずむさま。しおしお。すすご。②静かなさま。ものさびしいさま。また、副詞的に用いて、ひそかに。こっそりと。	海道記〔1223頃〕木瀬川より竹の下「恨を含し悄悄たる秋天の夕の雲」
270	彭彭	ほうほう	多く盛んなさま。盛大なさま。	檜本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあはれ」
271	央央	おうおう	鮮明なさま。はっきりと現われているさま。	雲壑猿吟〔1429頃〕次韻竹隱蔵主二首「玉輦日臨光耿々、翠華春動影央々」；浄瑠璃・信州川中島合戦〔1721〕—「石公孫呉の兵術（ひょうじつ）に通達し、其名央々（オウオウ）とかくれなく、近国他国の大名より招け共」
272	鹿鳴之什・出車 赫赫②	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	②翰林葫蘆集〔1518頃〕一二・悦岩忻公大禪定門活下火燭「赫赫威名奉將軍、塞垣草木也忻々」；步兵操典〔1928〕綱領「赫々たる伝統を有する国軍は」
273	嚶嚶	ようよう	虫の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）	
274	趨趨	てきてき	はねおどるさま。（新選漢和辞典Web版）	
275	忡忡	ちゅうちゅう	こころをいためるさま。（新選漢和辞典Web版）	
276	遲遲②	ちち	①物事の進み方がおそく、ゆったりしているさま。のろのろして遅いさま。②一日がゆったりとのどかで長いさま。春の日についていう。	②万葉集〔8C後〕一九・四二九二・左注「春日遅々鶴鷗正啼」；梁塵秘抄口伝集〔12C後〕一〇「ちちたる春の日は、枝に開け庭に散る花を見」
277	萋萋	せいせい	草木などの生い茂るさま。萋然。さいさい。	あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〉一五「野草は萋萋として牧場を蔽ひ」
278	喈喈①	かいかい	①鳥がなごやかに鳴くさま。②鈴や鐘の鳴るさま。	俳諧・寛政三年紀行〔1791〕「喈喈々たる鳥は仏土妙音の響かとも聞へ」
279	祁祁②	きき	なし。①静かでゆったりしたさま。②多いさま。（新選漢和辞典Web版）	
280	萋萋	せいせい	草木などの生い茂るさま。萋然。さいさい。	
281	鹿鳴之什・杖杜 嶺嶺	?	毛伝、敝る貌。説文に車の破れたこと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p146注釈五	
282	瘡瘡	かんかん	疲れるさま。（新選漢和辞典Web版）	
283	鹿鳴之什・魚麗	なし		

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
284	罩罩	とうとう？	ゆらに揺らめく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p148訳	
285	汕汕	さんさん？	説文に魚が水を泳ぐ形容。魚の楽しむ貌。『詩経・楚辞』p148訳	
286	南有嘉魚之什・南有嘉魚 翩翩①	へんぺん	①ひるがえるさま。軽くとびあがるさま。軽やかなさま。②軽々しくて落ち着きのないさま。③才気のみなざるさま。風流なさま。	①文華秀麗集〔818〕上・秋日別友人〈巨勢識人〉「林葉翩翩秋日、行人独向辺山雲」；米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・一「飛翔翩翩として、紙の風に舞ひ落る如く、遠く望めば飛蝶に似たり」
287	南有嘉魚之什・南山有臺	なし		
288	灑灑	じょうじょう？	「灑」：露の多いさま。（新選漢和辞典Web版）	
289	南有嘉魚之什・蓼蕭 泥泥	でいでい	よろめくさま。よろよろするさま。取り乱して前後を失うさま。；原文：露の多いさま。	①玉葉・安元元年〔1175〕一月二八日「凡奉行人、皆以泥泥、違乱事太多云々」；大観本謡曲・三笑〔1595頃〕「かなたこなたへ足もとは泥々泥々と苔むす橋を、よろめき給へば」
290	濃濃	じょうじょう/のうのう	露の多いさま。	南游稿〔1425頃〕荷露「濃々却恐成円重、碧玉盤傾碎水精」
291	雝雝	ようよう	①やわらぎ楽しむさま。②鳳凰の鳴く声。③鳥の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）；車の鈴もなごやかに。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p150訳	
292	湛湛③	たんたん	①水などが深く満ちたえられているさま。②転じて、内容がゆたかで落ち着いたさま。重厚なさま。③露の多いさま。溥溥。	凌雲集〔814〕九月九日侍讌神泉苑各賦一物得秋露、応製〈淳和天皇〉「謬忝恩筵何所賦、睇陽湛々被群黎」
293	南有嘉魚之什・湛露 厭厭	えんえん	①安らかで静かなさま。②植物などの盛んに茂るさま。；和悦の貌とする。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p151注釈二	
294	離離①	りり	①穀物の穂がみのって垂れ下がるさま。また、草木の繁茂するさま。②散らばるさま。③雲などが長く続くさま。	①菅家文草〔900頃〕一・重陽侍宴、賦景美秋稼「露露皆和気、離離半旅生」；葬列〔1906〕〈石川啄木〉「尺もある雑草が離々として生ひ乱れて居る」
295	南有嘉魚之什・彤弓	なし		
296	菁菁	せいせい	草や木のあおあおと盛んに茂るさま。	あらくれ〔1915〕〈徳田秋声〉一〇四「夏草が菁菁（セイセイ）と生繁って」
297	南有嘉魚之什・菁菁者莪 汎汎①	はんばん	①浮かびただようさま。②河水などの広々と流れるさま。また、満ちて流れるさま。③かるがるしいさま。凡庸なさま。また、そのこと。	①文華秀麗集〔818〕下・神泉苑九日落葉篇〈嵯峨天皇〉「随波泛泛流不已」；西国立志編〔1870～71〕〈中村正直訳〉八・九「足下汎々浮々の生涯、庶くは定りて」
298	南有嘉魚之什・六月 棲棲	せいせい	忙しいこと。あくせくすること。落ち着かないこと。また、そのさま。違違（こうこう）。	本朝文粹〔1060頃〕一・織月賦〈菅原文時〉「猶恠攀桂枝於遲暮、独違々而棲棲」；作詩志發〔1783〕「唐詩選を矩とするときは、終身詩作に栖々しても、変化の妙を得ること能はず」
299	駉駉	きき？	「駉」：①馬の元気なさま。②馬が威儀をもって進む。（新選漢和辞典Web版）；たけりいさむ。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p143訳	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
300	翼翼②	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。 ②整っているさま。美しいさま。③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。；足並そろい。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p143訳	
301	瑤瑤	そうそう	玉の鳴る音。（新選漢和辞典Web版）	
302	央央	おうおう	鮮明なさま。はっきりと現われているさま。	雲壑猿吟〔1429頃〕次韻竹隱蔵主二首「玉輦日臨光耿々、翠華春動影央々」；浄瑠璃・信州川中島合戦〔1721〕—「石公孫呉の兵術（ひょうじつ）に通達し、其名央々（オウオウ）とかくれなく、近国他国の大名より招け共」
303	南有嘉魚之什・采芑 淵淵	えんえん	奥深く広いさま。；太鼓どんどん。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p156訳	仮名草子・ぬれぼとけ〔1671〕序「天はくうくうゑんゑんと、まどかにしてすみわたる、此平金（ひやうきん）がこきやうなり」
304	闐闐②	てんてん	①盛んなさま。②鼓の音。③車馬の音。④雷の音。⑤群れがり行くさま。（新選漢和辞典Web版）；太鼓じゃんじゃん。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p156訳	
305	嘽嘽	たんたん	①牛馬などのあえぐさま。②盛んなさま。③多いさま。④ゆとりのあるさま。（新選漢和辞典Web版）；いくさ車はとんとんと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p156訳	
306	焯焯	とんとん/たいたい	①うすぐらい。光に弱いさま。（とんとん）②勢いの盛んなようす。（たいたい）；衆車の音。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p156注釈十六	
307	龐龐	ろうろう	みちみちたさま。充実したさま。（新選漢和辞典Web版）；肥えてたくましいこと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p157注釈三	
308	轟轟	ごうごう/ぎょうぎょう	①（一する）人などがさわぐこと。また、声や音などがやかましいさま。喧喧轟轟（けんけんごうごう）。ぎょうぎょう。②さとりきって無欲なさま。自分の分に安んじて他を願わないさま。	①談義本・田舎莊子〔1727〕跋「与彼智術小技之冊、轟々追時好者亦有別」；落梅集〔1901〕〈島崎藤村〉利根川だより「轟々とめぐりひびく器械に」
309	南有嘉魚之什・車攻 奕奕②?	えきえき	①光り輝くさま。②美しいさま。；よくそろう。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p157訳	②即興詩人〔1901〕〈森鷗外訳〉神曲、吾友なる貴公子「その岩石何ぞ峨々たる、その色彩何ぞ奕奕たる」；江戸から東京へ〔1921〕〈矢田挿雲〉六・二「併し四体の龍を鐘樓の柱へ取付けるに至って甚五郎の龍は俄然として奕奕（エキエキ）たる神采（しんさい）を發揮した」
310	蕭蕭②	しょうしょう	①ものさびしいさま。②雨や風や川の流れの音、また鳴き声などのさびしいさま。；原文：馬が長く鳴く声。	②菅家文草〔900頃〕六・九日後朝待宴朱雀院同賦秋思入寒松「蕭々自被風高簸。藹々応縁日下春」；開化の殺人〔1918〕〈芥川龍之介〉「車蓋の上に蕭々たる夜雨の音を聞きつつ、新富座を去る事甚遠からずして」
311	悠悠②	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①菅家文草〔900頃〕五・牡丹「朗詠叢辺立、悠悠忘日斜」；俳諧・蕪村文集〔1816〕夢説「風おもむるに浪あらそはず、悠悠たる春光、其興いふばかりなし」
312	麤麤	ぐぐ	獣が群がり集まるさま。	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
313 南有嘉魚之什・吉日	儻儻	ひょうひょう	毛伝、いそぎ走るときは儻儻。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p158注釈八	
314	俟俟	しし	毛伝、ゆっくり行くとくは俟俟。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p158注釈八	
315 鴻雁之什・鴻雁	肅肅	しゅくしゅく	①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。とどのつたさま。④おごそかなさま。厳肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたってもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。；①つつしむさま。②静かなさま。③早いさま。④おごそかなさま。⑤松風や羽ばたきの形容。（新選漢和辞典Web版）；肅はシュッシュュツという雁の羽音。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p159注釈一	
316	將將	しょうしょう/そうそう	①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
317	晰晰	せきせき	光りかがやく。（新選漢和辞典Web版）；光のすこししらんださま。	
318 鴻雁之什・庭燎	噦噦	かいかい	①鳥の声。②ゆっくりとリズムのある音。（新選漢和辞典Web版）；毛伝に徐行節ある也。多くの鈴の音がシャンシャンと調子よく響く形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p160注釈七	
319 鴻雁之什・沔水	湯湯	しょうしょう/とうとう	沔しょうしょう：（「湯（しょう）」は水の流れるさま）水勢の強くはげしいさま。また、流れのはげしいさま。式とうとう：①広大なさま。広々としているさま。強大なさま。②平坦なさま。たいらかでやすらかなさま。③さかんに水の流れるさま。④おだやかなさま。また、心がゆったりとしているさま。⑤みだれているさま。法度（はつと）のやぶれずたれるさま。⑥「とうとう（滔滔）(2)」に同じ。弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。	沔：性靈集 - 一（835頃）遊山慕仙詩「定恵澄心海、无縁毎湯々」；日蓮遺文 - 身延山御書〔1282〕「下枝に鳴く蟬の音（こゑ）滋く、前には湯々たる流水湛へて実相真如の月浮び」式；③本朝麗藻〔1010か〕下・与諸文友泛船於宇治川聊以逍遙（藤原伊周）「波勢湯湯巴峡路、風声嫋嫋洞庭天」；浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕三・連歌明月影「満（みつる）時は朱（あけ）の玉垣の最中（もなか）迄波蕩々（トウトウ）としろくいろどり」
320 鴻雁之什・鶴鳴	なし			
321 鴻雁之什・祈父	なし			
322 鴻雁之什・白駒	皎皎①	きょうきょう	①白々と光り輝くさま。光を反射させるさま。こうこう。②潔白なさま。	①万葉集〔8C後〕一五・三六六八・題詞「於時夜月之光皎々流照」；読本・南総里見八犬伝〔1814~42〕八・八三回「皎皎（ケウケウ）たる頭の霜は、枯野の小草を執（わが）ねし如く」；自然と人生〔1900〕〈徳富蘆花〉自然に対する五分時・自然の色「其山々の間に越路の山の雪皎皎（ケウケウ）と白きを見よ」
323 鴻雁之什・黄鳥	なし			
324 鴻雁之什・我行其野	なし			
325	秩秩①	ちつちつ	①流れ行くさま。②知識のあるさま。また、知識を進めるさま。；水の清く流れるさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p165注釈一	日本風景論〔1894〕〈志賀重昂〉六「石狩の大江汪々として其間に曲折し、田疇墟落秩々として画くが如く」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
326	幽幽	ゆうゆう	奥深く暗いさま。	①宴曲・宴曲集〔1296頃〕五・遠玄「凌雲台の春の霞波を凌ぎて幽々たり」；明六雑誌・一九号〔1874〕人間公共の説・三（杉亨二）「惟々古昔の陳跡を畏敬して幽々冥々の中に感動せられ」
327	闇闇	かっかく	蛙の鳴き声のさま。；板をつんでゆく形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p166注釈八	自然と人生〔1900〕〈徳富蘆花〉湘南雑筆・蒼々茫々の夕「耳傾くれば、蛙声（あせい）独り闇々（カクカク）また々」
328	轟轟	たくたく	杵（きぬた）でたたく音。（新選漢和辞典Web版）；杵うつ音タクタク。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p166注釈九	
329	噲噲	かいかい？	「噲然」：ひろびろとして気持ちよいさま。（新選漢和辞典Web版）；明るく晴れやかなさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p167注釈十七	
330	噉噉	かいかい	①鳥の声。②ゆっくりとリズムのある音。（新選漢和辞典Web版）；毛伝に徐行節ある也。光りかがやくこと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p167注釈十九	
331	嚙嚙	こうこう？	「嚙」：①こどもの泣きわめく声。②いかる。③鐘や太鼓などの楽器がひびわたる。④やかましい。；赤ん坊がわあんわあんとたくましい大声で泣くこと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p167注釈二十三	
332	澌澌	しゅうしゅう	①やわらぐさま。②集まり、休息するさま。（新選漢和辞典Web版）；羊の群が仲よく角をあつめているさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p167注釈三	
333	濕濕	しつしつ/しゅうしゅう	①水面がゆれるさま。②家畜が耳が動かすさま。（新選漢和辞典Web版）	
334	矜矜	きょうきょう	つつしんで自重するさま。（新選漢和辞典Web版）；丈夫で強く。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p168訳	
335	兢兢	きょうきょう	おそれつつしむさま。安んじないさま。びくびくするさま。；①心をはらはらさせて、戒めつつしむさま。恐恐。②堅く強いさま。（新選漢和辞典Web版）	
336	溱溱	しんしん	多いさま。さかなさま。（新選漢和辞典Web版）	
337	巖巖①	がんがん	①山や岩などが高くけわしくそばだつさま。②人の気性のけだかいさま。人格の高尚なさま。	①浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕一・山神想紀氏娘「東西南の三方（みかた）は山めぐり巖々（ガンガン）と高し」；不如帰〔1898～99〕〈徳富蘆花〉上・五・一「此大山巖々（ガンガン）として物に動ぜぬ大器量の將軍をば」
338	蹙蹙	しゅくしゅく/せきせき	物がちぢこまってるびないさま。	日本外史〔1827〕五・新田氏前記「朝廷蹙蹙如被束縛」
339	京京	けいけい	心配の去らないさま。（新選漢和辞典Web版）	
340	愈愈	ゆゆ	忝__①どンドンひどくなる。②かなしみ、うれえる。忝__いよいよ、ますます。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
341	惇惇	けいけい	うれえるさま。（新選漢和辞典Web版）	
342	夢夢	ぼうぼう	思い乱れる。（新選漢和辞典Web版）；茫々として。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p172訳	
343	仇仇	きゅうきゅう	おごりたかぶるさま。（新選漢和辞典Web版）	
344	節南山之計・正月 赫赫②	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	②翰林葫蘆集〔1518頃〕一二・悦岩忻公大禪定門活下火燭「赫赫威名奉將軍、塞垣草木也忻々」；歩兵操典〔1928〕綱領「赫々たる伝統を有する国軍は」
345	慘慘①	さんさん	①いたましく悲しいさま。心を痛めるさま。②暗いさま。	①広益熟字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「慘々 サンサン イタマシヒ」
346	慙慙	いんいん?	「慙」：①心がいたむ。②ねんごろ。れいねい。（新選漢和辞典Web版）	
347	比比	ひひ?	原文：身分が低い、卑しい。；毛伝に小也。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p174注釈三十	
348	簌簌	そくそく	いやしきものが貴くなる。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p174注釈三十一	
349	燂燂	ようよう?	はためく ^{いかずちいなずま} 雷電に。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p175訳	
350	節南山之計・十月之交 囂囂	ごうごう/ぎょうぎょう	①（一する）人などがさわぐこと。また、声や音などがやかましいさま。喧喧囂囂（けんけんごうごう）。ぎょうぎょう。②さとりきっていて無欲なさま。自分の分に安んじて他を願わないさま。；「囂」：①うれえるさま。②皆が悪口をいうさま。③山のくぼみ。（新選漢和辞典Web版）	①談義本・田舎荘子〔1727〕跋「与彼智術小技之冊、囂々追時好者亦有別」；落梅集〔1901〕〈島崎藤村〉利根川だより「囂々とめぐりひびく器械に」
351	悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書-天平勝宝八年（756）六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」；南海先生文集〔1784〕一・古詩「悠悠天地間、禍福何為也」
352	節南山之計・雨無正 浩浩	こうこう	空間的にひろびろとしたさま。特に水のみなぎり広がっているさま。	経国集〔827〕一四・秋雲篇示同舍郎〈惟良春道〉「溪流兮浩浩。芳草兮萋々」；太平記〔14C後〕二六・妙吉侍者事「雲の浪、烟の波最（いと）深く、風浩々（カウカウ）として閑かならず、月華星彩蒼茫たり」；十善法語〔1775〕八「浩々たる天地の間、この道時にしたがひ隠顕す」
353	慄慄	?	原文：憂い。；憂い。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p178訳	
354	滄滄	きゅうきゅう	おおぜいの人があいづちをうつさま。（新選漢和辞典Web版）	
355	訖訖	?	そし訖りあったり。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p179訳	
356	節南山之計・小旻 戰戰	せんせん	おそれおののくさま。おそれつつしむさま。	読本・英草紙〔1749〕五・九「次郎左衛門戦々（センセン）懼懼（くく）として」；広益熟字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「戦々 センセン フルヒヨソル」；経国美談〔1883～84〕〈矢野龍溪〉後・一四「已に戦々たる列国の委員を睨み廻はし」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
357	兢兢	きょうきょう	おそれつつしむさま。安んじないさま。びくびくするさま。	菅家後集〔903頃〕叙意一百韻「兢々馴鳳辰、懐々撫龍泉」；敬齋歲講義〔17C後〕「兢々は戒め慎むの貌也」；国民精神作興に関する詔書・大正一二年〔1923〕一月一日「朕、即位以来、夙夜兢々として常に紹述を思ひしに」
358	交交	こうこう	まじわるさま。行き交うさま。；さえずる。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p181訳	人情本・明烏後正夢〔1821～24〕四・一八回「行を送り帰るを迎ふ、出船入船交々（コウコウ）たる、この夕風の涼しさに、暫は夏を萱草」
359	温温①	おんおん	①性質のやさしく、おとなしいさま。②あたたかいさま。	①足利本論語抄〔16C〕子張第十九「即君子近其体温々潤人不憎」；米欧回覧実記〔1877〕（久米邦武）二・三三「言寡く温温たる老翁にて、容貌愚なるか如し」
360	節南山之計・小宛 惴惴	ずいずい	おそれるさま。びくびくするさま。「惴惴然」：びくびくとおそれるさま。	明衡往来〔11C中か〕下本「臨深蹈薄。惴惴于心而已」；一種の攘夷思想〔1892〕（北村透谷）「奔馬常に狭少なる民吏の競場に惴々（ズイズイ）たるに過ぎざるなり」；「惴惴然」：米欧回覧実記〔1877〕（久米邦武）一・六「英国の無頼無行の徒は、みな逃て塩湖に徒（うつ）る、天下悪党の叢なりと、惴惴然と懼れたり」
361	戦戦	せんせん	おそれおののくさま。おそれつつしむさま。	読本・英草紙〔1749〕五・九「次郎左衛門戦々（センセン）懼懼（くく）として」；広益熟字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「戦々センセンフルヒヤソル」；経国美談〔1883～84〕〈矢野龍溪〉後・一四「已に戦々たる列国の委員を睨み廻はし」
362	兢兢	きょうきょう	おそれつつしむさま。安んじないさま。びくびくするさま。	菅家後集〔903頃〕叙意一百韻「兢々馴鳳辰、懐々撫龍泉」；敬齋歲講義〔17C後〕「兢々は戒め慎むの貌也」；国民精神作興に関する詔書・大正一二年〔1923〕一月一日「朕、即位以来、夙夜兢々として常に紹述を思ひしに」
363	提提②	ていてい	①安らかなさま。②鳥が群れをなして飛ぶさま。（新選漢和辞典Web版）	
364	踽踽	てきてき	平らかなさま。（新選漢和辞典Web版）；坦々たる。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p182訳	
365	節南山之計・小弁 嚙嚙	けいけい	①声のせわしいさま。②声がやわらいでいるさま。③声のかすかなさま。（新選漢和辞典Web版）；ケイケイと鳴く。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p183訳	③「残レ声蟬嚙嚙（こえをのこしてせみけいけいたり）」（秋おそくまで声を残して鳴く蟬は、いかにも弱々しくかすかな声である。）〈橘在列（たちばなのありつら）・廻文詩〉（新選漢和辞典Web版）
366	漘漘	？	原詩：草木がさかんに茂るさま。	
367	伎伎	きき	ゆっくり歩くさま。（新選漢和辞典Web版）；原詩：速く走るさまという説もある。；つれ立って走り。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p183訳	
368	悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書・天平勝宝八年〔756〕六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠悠三界猛火常流、杳々五道毒網是仕」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
380	谷風之什・谷風	習習	しゅうしゅう	風のそよそよと吹くさま。風がなごやかに吹くさま。；重なるさま。『学研漢和大辞典』p1033）；①風のそよ吹くさま。②飛び動くさま。（新選漢和辞典Web版）；連続絶えぬさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p188注釈一	自然と人生（1900）〈徳富蘆花〉湘南雑筆・夏「青畳敷く相模灘の上を習々（シウシウ）として渡り来る風の涼しきを聞かずや」
381		蓼蓼	りくりく	長くのびたさま。（新選漢和辞典Web版）	
382		哀哀	あいあい	嘆き悲しむさま。悲しく哀れなさま。	性霊集 - 一（835頃）喜雨歌「哀々、末世諸元々」；星座（1922）〈有島武郎〉「眼を我れに挙げ、耳と尾とを動かして訴へてやまず。その哀々の状諦視するに堪へず」
383		烈烈	れつれつ	激しいさま。勢いが激しくさかんなさま。；原詩：山の風が強いさま。筆者訳。；けわしくて。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p188訳	経国集（827）一・重陽節神泉苑賦秋可哀応制〈菅原清公〉「望朝露之団々、聴夕風之烈々」；戦陣訓（1941）一・二「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ断乎之を撃碎すべし」
384	谷風之什・蓼莪	發發①	はつはつ	①風のはやいさま。②魚のはねるさま。（新選漢和辞典Web版）	
385		律律	りつりつ	あふれ出るさま。絶えずわき出るさま。；原詩：山の風が強いさま。筆者訳。；きびしくて。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p188訳	玩鷗先生詠物百首（1783）豆腐「瓊液津津出布囊」；東京年中行事（1911）〈若月紫蘭〉九月曆「頗る凝った茶味津々（シンシン）たるもの」；読書放浪（1933）〈内田魯庵〉読書放浪・一「之だけ纏まったものは初めて紹介されたので、仔細に点検する時は歴史的興味が津々として湧く」
386		弗弗	ふつふつ	①はげしく速いさま。②賛同しないさま。（新選漢和辞典Web版）	
387		契契	けいけい	うれえるさま。（新選漢和辞典Web版）	
388	谷風之什・大東	粲粲	さんさん	あざやかで美しいさま。きらきらと輝いて美しいさま。	俳諧・本朝文選（1706）二・賦類・百花譜〈許六〉「十月一陽の氣に、燦々（サンサン）たる江南の玉妃、まづえめるより」；水の葬列（1967）〈吉村昭〉「日光の燦々（サンサン）と降りそそぐ世界は、ただ私を苦しませるだけのものだということにも気がついた」
389		鞞鞞	けんけん	腰に下げる宝玉のさま。（新選漢和辞典Web版）	
390		糾糾	きゅうきゅう	もつれあうさま。また、物が古くくたびれたさま。	風流仏（1889）〈幸田露伴〉九・下「心糾々（きうきう）氣昂々（かうかう）、抑幾年の学びたる力一杯鍛ひたる腕一杯の経験修練」
391		淒淒（淒淒）③	せいせい	①ものさびしいさま。わびしく悲しいさま。②涼しいさま。③寒く冷たいさま。風雨が激しく寒冷なさま。④雨雲のわくさま。	③経国集（827）一三・夕次播州高砂〈淡海福良麻呂〉「淒淒抱霜雪、夜々宿波瀾」；交隣須知（18C中か）四・逍遙「淒淒セイセイトシタ風霜ニドウシテユコウカ」
392		烈烈	れつれつ	激しいさま。勢いが激しくさかんなさま。；寒さきびしく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p192訳	経国集（827）一・重陽節神泉苑賦秋可哀応制〈菅原清公〉「望朝露之団々、聴夕風之烈々」；戦陣訓（1941）一・二「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ断乎之を撃碎すべし」
393	谷風之什・四月	發發①	はつはつ	①風のはやいさま。②魚のはねるさま。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
394	滔滔①	とうとう	①水がさかんに流れるさま。多量の水を悠然とたたえているさま。洶洶。②弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。③おしなべて一様であるさま。また、世の風潮などが一つの方向に勢いよく移るさま。④広大なさま。無辺であるさま。かぎりなくひろがるさま。	①万葉集〔8C後〕一六・三八三五・左注「今日遊行見勝間田池、水影濤々蓮花灼々」；太平記〔14C後〕二〇・城入結道墮地獄事「是を受けて大なる鉄の桶に入れあつめたれば、程なく十分に漣へて滔々（タウタウ）たる事夕陽を浸せる江水の如也」	
395	偕偕	かいかい	強壮なさま。つよくさかん。（新選漢和辞典Web版）		
396	彭彭	ほうほう	多く盛んなさま。盛大なさま。；盛んに馳せてゆく形容。	稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」	
397	谷風之什・北山	傍傍	ぼうぼう？	やすみなし。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p194訳	
398	燕燕②	えんえん	①つばめ。また、特に二羽のつばめをさすこともある。②「えんえん（宴宴）」に同じ。安んじ憩うさま。ゆったりとするさま。		
399	惨惨①	さんさん	①いたましく悲しいさま。心を痛めるさま。②暗いさま。	①広益熱字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「惨々 サンサン イタマシヒ」	
400	谷風之什・無将大軍	冥冥	めいめい/みょうみょう	①暗いこと。ほの暗いさま。うす暗くて、事物がはっきりと見えないさま。暗暗。みょうみょう。②奥深く筋道をはかり知ることができないこと。はっきりしないで、わかりにくいこと。また、そのさま。③混沌として見通しが立たないこと。また、そのさま。④自然に心に感じること。心が外界の事物に接して無意識に感応するさま。	①菅家文草〔900頃〕二・傷巨三郎、寄北堂諸好事「我今収涙訴冥々、何不愁遣一後醒」；保元物語〔1220頃か〕中・為義降参の事「おつる涙にみちくれて、行前（ゆくさき）さらに冥々たり」；日蓮遺文・松野殿御返事〔1276〕「鴛鴦の衾の下に枕を並て遊び戯る中なれども、彼冥途の旅には伴なふ事もなし。冥冥として独り行」
401	谷風之什・小明	明明	めいめい	①たいそう明るいさま。②はっきりしていて、疑わしい点が少しもないさま。はっきりと示すさま。また、心が晴れ晴れとしているさま。気にかかる点が少しもないさま。明白。明明白白。	①法性寺関白御集〔1145か〕関河夜月明「明明夜月望方閑、皓色無嫌河与関」；源平盛衰記〔14C前〕四一・義経拜賀御禊供奉「夜の月明々（メイメイ）として、水に移る影籠の袖を照しけり」
402	谷風之什・小明	睽睽（眷眷）①	けんけん	①物事を恋い慕うさま。また、ひたすら執着するさま。②憐んで目をかけるさま。	①蔭涼軒日録・延徳三年〔1491〕十一月一六日「与月江和尚打話眷々」；独逸国に対する宣戦の詔書・大正三年〔1914〕八月二三日「恒に平和に眷眷たるを以てして、而かも竟（つひ）に戦を宣するの已（や）むを得ざるに至る」
403	將將	しょうしょう/そうそう	①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）		
404	谷風之什・鼓鐘	湯湯	しょうしょう/とうとう	①性靈集・一〔835頃〕遊山慕仙詩「定恵澄心海、无縁毎湯々」；日蓮遺文・身延山御書〔1282〕「下枝に鳴く蟬の音（こゑ）滋く、前には湯々たる流水漣へて実相真如の月浮び」；③本朝麗藻〔1010か〕下・与諸文友泛船於宇治川聊以逍遙（藤原伊周）「波勢湯湯巴峡路、風声嫋嫋洞洞天」；浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕三・連歌明月影「満（みつる）時は朱（あけ）の玉垣の最中（もなか）迄波蕩々（トウトウ）としろくいろどり」	

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
405		啾啾②	かいかい	①鳥がなごやかに鳴くさま。②鈴や鐘の鳴るさま。	三教指帰〔797頃〕下「振鈴鈴之金錫。馳之玉啾啾声」
406		涇涇	かいかい	涇：水がさかんに流れるさま。（新選漢和辞典Web版）	肅肅
407		欽欽①	きんきん	①鐘の音。②うれえるさま。③つつしむさま。（新選漢和辞典Web版）	
408		楚楚③	そそ	①あざやかなさま。楚然。②清らかなさま。清らかで美しいさま。女性について、清らかで控え目な美しさを感じさせるさまにもいう。③ いばらの茂るさま。	楚然：草枕〔1906〕〈夏目漱石〉一〇「緑りの枝を通す夕日を脊に、暮れんとする晩春の蒼黒く巖頭を彩る中に、楚然として織り出されたる女の顔は」
409		與與（与与）	よよ	① 草木の茂るさま。 ②動作がほどよく、礼にかなっているさま。③行ったり来たりするさま。（新選漢和辞典Web版）	
410		翼翼②	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。② 整っているさま。美しいさま。 ③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。；よく栄えた。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p198訳	②詩聖堂詩集・三編〔1838〕九・有年行「与与翼翼黍稷蕃、積之崇又櫛比」
411	谷風之什・楚茨	濟濟（濟濟）③	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③ おごそかにしてつつしむさま。 礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。	菅家文草〔900頃〕一・仲春積糞、聴講孝経、同賦資事父事君「乃父乃兄、無虧燕毛於観学之後。濟濟焉、鏘鏘焉」；
412		蹢躅	そうそう	①動くさま。動きまわるさま。また、舞うさま。おどるさま。②堂々としたさま。動作に威儀のあるさま。また、のびやかなさま。鏘鏘（そうそう）。③よろめくさま。蹢躅。；つつしんで。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p198訳	
413		蹢蹢	せきせき	① つつしむさま。 ②すばやいさま。③恥じるさま。（新選漢和辞典Web版）	
414		莫莫	ばくばく	①草木がさかんに茂るさま。茂り盛えるさま。②勢いよくわき起こるさま。また、たちこめたり、たなびいたりするさま。漠漠。③ 静かで慎みぶかいさま。ひっそりしたさま。	
415		昉昉	いんいん	耕されたさま。（新選漢和辞典Web版）；昉昉（うんうん）：土地を均しく開墾した貌である。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p200注積三	
416		霏霏	ふんぶん	①霜がおりているさま。② 雪のさかんに降るさま。 （新選漢和辞典Web版）；雪が霏霏と降る。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p200訳	
417		翼翼②	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。② 整っているさま。美しいさま。 ③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。；端正な形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p201注積十一	②詩聖堂詩集・三編〔1838〕九・有年行「与与翼翼黍稷蕃、積之崇又櫛比」
418	谷風之什・信南山	彘彘	いくいく	① 茂るさま。 ②もようが美しい。（新選漢和辞典Web版）	
419		苾苾	ひつひつ	かんばしい。かおる。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
420	芬芬	ふんぶん	（「ふんぶん」とも）芳気の高くかおるさま。また、広く悪臭の漂うさまをもう。	性霊集・一〔835頃〕入山興「京城御。桃李紅。灼々芬々」；信長公記〔1598〕——「にほひ・焼物（たきもの）ふんふんと衣香当りを撥（はらつ）て四方に薫じ」；浮世草子・花の名残〔1684〕四「袖にかほる空焼（そらだき）芬々（フンフン）としてえならぬさま」；俳諧師〔1908〕〈高浜虚子〉八五「夜遅く酒気芬々（フンフン）として帰って来て」	
421	甫田之什・甫田	蕤蕤	ぎぎ	茂るさま。（新選漢和辞典Web版）	
422	甫田之什・大田	萋萋	せいせい	草木などの生い茂るさま。萋然。さいさい。；雲行く貌。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p203注釈九	あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〉一五「野草は萋萋として牧場を蔽ひ」
423		祁祁	きき	①静かでゆったりしたさま。②多いさま。（新選漢和辞典Web版）；雲の盛んにおこる形容。『詩経・楚辞』p203注釈十	
424	甫田之什・瞻彼洛矣	泱泱	おうおう	①奥深く広々としたさま。②音が途切れずに続くさま。③雲のわき立つさま。④旗のひらめくさま。（新選漢和辞典Web版）；洋々と。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p204訳	
425		裳裳	しょうしょう	美しく盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）	
427	甫田之什・桑扈	交交	こうこう	まじわるさま。行き交うさま。；恐らくこれは鳴き声の形容だろう。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p205注釈一	人情本・明烏後正夢〔1821～24〕四・一八回「行を送り帰るを迎ふ、出船入船交々（コウコウ）たる、この夕風の涼しさに、暫は夏を萱草」
428	甫田之什・鴛鴦	なし			
429	甫田之什・頰弁	奕奕③	えきえき	①光り輝くさま。②美しいさま。；①美しいさま。②大きいさま。③憂えるさま。④光り輝くさま。（新選漢和辞典Web版）	
430		恹恹	？	憂いの盛んに満ちる形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p207注釈四	
431	甫田之什・車牽	駢駢①	ひひ	①馬がどこまでも進むさま。②つかれる。（新選漢和辞典Web版）	
432	甫田之什・青蠅	營營	えいえい	①足しげく往来するさま。また、一所に落ち着かず、あちこち行き来するさま。②あくせくするさま。また、せっせと働くようす。一心にこつこつと行なうさま。；蠅のブンブン飛びまわる音の形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p209注釈一	
433	434	秩秩	ちつちつ	①流れ行くさま。②知識のあるさま。また、知識を進めるさま。；①水の流れるさま。②うやうやしく慎むさま。③知恵のあるさま。④清らかなさま。⑤順序正しいさま。（新選漢和辞典Web版）；秩秩と礼儀正しいくつつしむこと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p210注釈一	
434		逸逸（繹繹）	いついつ？/えきえき	連なって絶えないさま。一説によく走るさま。；毛伝に、往来序あること。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p210注釈六	
435		温温①	おんおん	①性質のやさしく、おとなしいさま。②あたたかいさま。	①足利本論語抄〔16C〕子張第十九「即君子近其体温々潤人不憎」；米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉二・三三「言寡く温温たる老翁にて、容貌愚なるか如し」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
436	甫田之什・賓之初筵 幡幡②	はんばん	①しきりにひるがえるさま。②威厳のないさま。（新選漢和辞典Web版）；	
437	僂僂①	せんせん	①軽く舞うさま。②立ったりすわったりするさま。	
438	反反	？	つつしみ深いさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p211注釈二十三	
439	抑抑	よくよく	つつしむさま。ひかえ目にするさま。	一年有半〔1901〕〈中江兆民〉二「抑々進みて已まず、死に至る迄経営造作して休せざる者は殆ど有ること莫し」
440	怱怱	ひつひつ	しまりのないさま。軽々しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
441	傲傲	？	足もふらふら舞いおどる。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p211訳	
442	傴傴	ささ	酔って舞うさま。（新選漢和辞典Web版）	
443	魚藻之什・魚藻	なし		
444	淠淠	？	旗のヒラヒラゆれる形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p213注釈七	
445	嚶嚶	けいけい	①声のせわしいさま。②声がやわらいでいるさま。③声のかすかなさま。（新選漢和辞典Web版）；鈴の音。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p213注釈八	③「残レ声蟬嚶嚶（こえをのこしてせみけいけいたり）」（秋おそくまで声を残して鳴く蟬は、いかにも弱々しくかすかな声である。）〈橘在列（たちばなのありつら）・廻文詩〉（新選漢和辞典Web版）
446	魚藻之什・采芣	蓬蓬	①草が生い茂るさま、また、髪やひげがのびて乱れているさま。②煙や蒸気が盛んに立ちのぼるさま。③風がはげしく吹くさま。	①玉塵抄〔1563〕三六「瑛がかみもほうほうとしてはたして走て操が所えて罪をゆるしてたまわれとこうたぞ」；思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉四・一「六尺ゆたかの赤髯蓬々たる、併し人相のいい西洋人が」；人間嫌ひ〔1949〕〈正宗白鳥〉「ズボンの破れ目から尻の皮を露出してゐる頭髪蓬々（ホウホウ）とした一個のルンペンが虱を捻り潰してゐる」
447	平平	へいへい	①たいらなさま。平平坦坦。②事もなく穏やかなさま。③公平なさま。④平凡なさま。平平凡凡。	
448	汎汎	はんばん/はんはん	①浮かびただようさま。②河水などの広々と流れるさま。また、満ちて流れるさま。③かるがるしいさま。凡庸なさま。また、そのこと。	①文華秀麗集〔818〕下・神泉苑九日落葉篇〈嵯峨天皇〉「随波泛泛流不已」；西国立志編〔1870～71〕〈中村正直訳〉八・九「足下汎々浮々の生涯、庶くは定りて」
449	駢駢	せいせい？	弓の調法便利な形容か。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p214注釈一	
450	魚藻之什・角弓	綽綽	ゆったりとして、ゆとりのあるさま。落ち着いてあせらないさま。綽然。綽綽然。	交隣須知〔18C中か〕四・逍遙「綽々シャクシャクタルフウギ」；真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉日本人の任務・二「土地狭小なりと謂ふと雖も、物質的の富力は綽々として之を現はし得るに足るに似たり」
451	瀟瀟	ひょうひょう	原詩：雪が盛んに降るさま。（筆者訳）	
452	浮浮	ふふ	ふわふわと動いて行くさま。；原詩：雪が盛んに降るさま。（筆者訳）	六如庵詩鈔・二編〔1797〕六・峩山松蘿歌「帰来満籃香浮浮、此味可向城市求」；自然と人生〔1900〕〈徳富蘆花〉自然に対する五分時・香山三日の雲「濁れる白雲〈略〉浮々（フフ）として西に向ふて飛ぶ」

	出典	単なる疊音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
453	魚藻之什・菀柳	なし			
454	魚藻之什・都人士	黄黄	?	黄色い	
455	魚藻之什・采緑	なし			
456	魚藻之什・黍苗	芄芄①	ほうほう	①芄芄（ほうほう）は、草木が盛んに茂るさま。②小動物の尾の毛が長いさま。（新選漢和辞典Web版）	
457		悠悠①	ゆうゆう	①遠くはるかなさま。限りないさま。長く久しいさま。②ゆったりとおちついたさま。③数の多いさま。	①正倉院文書・天平勝宝八年〔756〕六月二日・東大寺献物帳（寧楽遺文）「悠々三界猛火常流、杳々五道毒網是壯」
458		肅肅④	しゆくしゆく	①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。ととのったさま。④おごそかなさま。嚴肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたつてもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。；①つつしむさま。②静かなさま。③早いさま。④おごそかなさま。⑤松風や羽ばたきの形容。（新選漢和辞典Web版）	④夜行巡査〔1895〕〈泉鏡花〉五「更に冷然として一定の足並を以て肅々（シュクシュク）と歩出せり」；坊っちゃん〔1906〕〈夏目漱石〉一〇「師範学校の方は肅肅として進行を始めた」
459		烈烈	れつれつ	激しいさま。勢いが激しくさかんなさま。；武武し。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p218訳	経国集〔827〕一・重陽節神泉苑賦秋可哀応制（菅原清公）「望朝露之団々、聴夕風之烈々」；戦陣訓〔1941〕一・二「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ断乎之を撃碎すべし」
460	魚藻之什・隰桑	なし			
461	魚藻之什・白樺	英英	えいえい	雲の鮮やかで、しっとりとしているさま。また、雲の軽く明るいさま。	浄瑠璃・嬬山姥〔1712頃〕一「空に紫の雲気たな引、斗牛の間に英々（エイエイ）たり」；日本風景論〔1894〕〈志賀重昂〉三「太平洋面より発上する水蒸気は、東南風と共に此の山脈に撞撃し、山脈以南一帯の処に英々浮動す」
462		燥燥	そうそう	不安で、おちつかないさま。（新選漢和辞典Web版）	
463		邁邁	まいまい	①いい顔をしないさま。②気をかけないさま。（新選漢和辞典Web版）；毛伝に悦ばぬこと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p220注釈九	
464	魚藻之什・緜蛮	なし			
465	魚藻之什・瓠瓠	幡幡①	はんぱん	①しきりにひるがえるさま。②威厳のないさま。（新選漢和辞典Web版）；	
466		漸漸	ぜんぜん	一、副詞。順次に。段々と。徐々に。二、①次第に進みいくさま。順をおってなされるさま。②岩石の高峻なるさま。③涙が流れるさま。	
467	魚藻之什・苕之華	青青①	せいせい	①色が青いさま。あおあおとしているさま。②髪の中のくろぐろとしたさま。③顔色が青いさま。生気を失っているさま。	①性霊集 - 一〔835頃〕喜雨歌「青青草木珠莊葉、浩浩陂池湛如瑠」；思出の記〔1900~01〕〈徳富蘆花〉二・二「小笹まぢりの春草青青（セイセイ）として、董菜（すみれ）蒲公英（たんぽぽ）蓮華草などの花が咲いて」
468	魚藻之什・何艸不黄	なし			
469	大雅、文王之什・文王	廌廌	びび	①熱心につとめるさま。②進みゆくさま。③走るさま。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
470	翼翼③	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。 ②整っているさま。美しいさま。③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。	③江戸繁昌記〔1832～36〕二・葬礼「恂々翼翼、鮑を辟て芝に居り、人を誨て倦まず」；如是放語〔1898〕〈内田魯庵〕「且つ憐むべきは誠実律義なる賈人、純良無垢なる青年、細心翼翼（ヨクヨク）たる循吏朴直一遍の農民」；林檎の下の顔〔1971～73〕〈真継伸彦〕—「翼翼たる小心に翻弄されつづけなければならぬ自分を変えたいからだった」
471	濟濟	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③おごそかにしてつつしむさま。礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。	
472	穆穆	ぼくぼく	①むつまじいさま。なごやかで親しいさま。②うやうやしいさま。敬いつつしむさま。③美しく威儀のあるさま。④静かなさま。	③懐風藻〔751〕元日〈藤原史〕「濟々周行士、穆々我朝人」
473	文王之什・大明	明明	①たいそう明るいさま。②はっきりしていて、疑わしい点が少しもないさま。はっきりと示すさま。また、心が晴れ晴れとしているさま。気にかかる点が少しもないさま。明白。明明白白。	①法性寺関白御集〔1145か〕関河夜月明「明明夜月望方閑、皓色無嫌河与閑」；源平盛衰記〔14C前〕四一・義経拜賀御禊供奉「夜の月明々（メイメイ）として、水に移る影鑑の袖を照しけり」
474	赫赫②	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	②翰林葫蘆集〔1518頃〕一二・悦岩忻公大禪定門活下火偈「赫赫威名奉將軍、塞垣草木也忻々」；步兵操典〔1928〕綱領「赫々たる伝統を有する国軍は」
475	翼翼②	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。 ②整っているさま。美しいさま。③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。	③江戸繁昌記〔1832～36〕二・葬礼「恂々翼翼、鮑を辟て芝に居り、人を誨て倦まず」；如是放語〔1898〕〈内田魯庵〕「且つ憐むべきは誠実律義なる賈人、純良無垢なる青年、細心翼翼（ヨクヨク）たる循吏朴直一遍の農民」；林檎の下の顔〔1971～73〕〈真継伸彦〕—「翼翼たる小心に翻弄されつづけなければならぬ自分を変えたいからだった」
476	洋洋②	ようよう	①水が満ちあふれるさま。また、広々としたさま。ゆったりしたさま。限りないさま。漾漾（ようよう）。洋洋乎。②物事の盛んなさま。③希望に満ちているさま。；ひろびろ。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p228訳	②性霊集・五〔835頃〕請越州節度使内外文書啓「氷霜留懐、五袴洋々」；和漢朗詠集〔1018頃〕下・帝王「沙長じて巖となる頌洋々として耳に満てり〈紀淑望〉」；米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〕一・九「今市高俄（チカゴ）を發し、此州に至れば、野熟し林茂し、人烟稠密、已に洋々たる開明（シヴィル）の域なり」
477	煌煌	こうこう	光り輝くさま。きらきら光るさま。	新撰朗詠集〔12C前〕上・蚩「翠箔に燈籠りて秋耿々たり 碧雲に星透いて暁煌々たり〈一条院〉」；源平盛衰記〔14C前〕一六・遷都事「五星煌煌（クウウクウ）として赤き事火の如く」
478	彭彭	ほうほう	多く盛んなさま。盛大なさま。；①多いさま。②盛んなさま。③盛んに進むさま。④車の多いさま。（新選漢和辞典Web版）；きおい立つ。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p228訳	稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
479 文王之什・絲	絲絲	めんめん	長く続いて、絶えないさま。どこまでも続いているさま。	文華秀麗集〔818〕上・在辺贈友（小野岑守）「綿綿千累路、帛素寄双飛」；予言の芸術〔1910〕（姉崎嘲風）「無意義だ、不可解だと叫ぶ間には、尚人生の意義に対する恋々の情が綿々絶えないでをるのではないか」
480	臚臚	ぶぶ	美しい。（新選漢和辞典Web版）；肥美なること。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p230注釈八	
481	翼翼②	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。 ②整っているさま。美しいさま。③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。	②詩聖堂詩集・三編〔1838〕九・有年行「与与翼翼黍稷蕃、積之壙崇又楡比」
482	陬陬②	じょうじょう	①多いさま。②かきねをきずく声。（新選漢和辞典Web版）	
483	藹藹	こうこう？	土を築板の中に投げ入れる時の音。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p230注釈十四	
484	登登②	とうとう	①どこまでも高くつづいているさま。次第にのぼって行くさま。②力をいれるためのかけ声を形容した語。	
485	馮馮①	ひょうひょう	①かきねのでぼこをたたきかためる音。②満ちているさま。③馬の速いさま。④天地の根本の気。	
486	將將②	しょうしょう/そうそう	①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
487 文王之什・穢穢	芄芄①	ほうほう	①芄芄（ほうほう）は、草木が盛んに茂るさま。②小動物の尾の毛が長いさま。（新選漢和辞典Web版）	
488	濟濟②	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③おごそかにしてつつしむさま。礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。	
489	峨峨	がが	山、岩などが、高く角（かど）だつてそびえているさま。；盛壮也。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p232注釈六	色葉字類抄〔1177～81〕「峨々カカ」；愚管抄〔1220〕六・土御門「山水池水峨々たる事にめでたくして」；浄瑠璃・国性爺合戦〔1715〕九仙山「水遠くして山ながく、根ざき茅原（かやはら）檣檜原（まきひばら）、峨々とそびへし崔嵬（さいくはい）の山路に」
490	勉勉	べんべん	努めてやまないさま。励み努めるさま。孜孜（しし）。汲汲（きゅうきゅう）。	
491 文王之什・旱麓	濟濟①	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③おごそかにしてつつしむさま。礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。	
492	莫莫①	ばくばく	①草木がさかんに茂るさま。茂り盛えるさま。②勢いよくわき起こるさま。また、たちこめたり、たなびいたりするさま。漠漠。③静かで慎みぶかいさま。ひっそりしたさま。	俳諧・俳諧三部抄〔1677〕上・夏「陰茂しはくはくとしてからす麦（のふ祐）」
493 文王之什・思齊	雝雝①	ようよう	①やわらぎ楽しむさま。②鳳凰の鳴く声。③鳥の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
494	肅肅①	しゅくしゅく	①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。ととのったさま。④おごそかなさま。厳肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたってもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。；①つつしむさま。②静かなさま。③早いさま。④おごそかなさま。⑤松風や羽ばたきの形容。（新選漢和辞典Web版）	①真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉日本人の任務・三「上帝英傑を下して国人を救ふと信じ、自ら慰め自ら楽み日夜肅々として之を俟てりき」	
495	文王之什・皇矣	閑閑②	かんかん	①心しずかに落ち着いているさま。のんびりしているさま。②車などがゆっくり動くさま。	
496		言言	げんげん	一つ一つのことば。一語一語。；高大也。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p237注釈三十六	
497		連連	れんれん	①引き続いて絶えることのないさま。しきりにするさま。副詞的にも用いられる。②つらなるさま。	①三教指帰〔797頃〕下「花飄聯聯、燐燐爛爛、震震填填」；太平記〔14C後〕一二・兵部卿親王流刑事「高氏卿を討ばやと、連（レン）々に思召立けれ共」；人情本・仇競今様櫛〔1830～33〕初・三回「連々（レンレン）都合がわるいによって、其金をばちつとづつ受取て」
498		安安	あんあん	安楽なさま。気楽なさま。；しずしずとの意か。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p237注釈三十八	仮名草子・為愚痴物語〔1662〕一・四「佞人、悪人、愚痴、無智にしていたづらをたくみ、あんあんとするもの」
499		蕪蕪	ふつふつ?	すさまじく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p236訳	
500		屹屹②	きつきつ	一、①いさましくさかなさま。屹然。②高く大きいさま。二、ごつごつ船のゆれ動くさま。（新選漢和辞典Web版）	屹然：①山や建物などの高くそびえ立つさま。寛齋先生遺稿〔1821〕三・古銅爵「秋菌春蒲両屹然、為炉為注総無縁」；虞美人草〔1907〕〈夏目漱石〉一「吹けば揺くかと怪しまる程柔らかき中に屹然（キツゼン）として、どうする気かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる」②まわりの状況に影響されないで、ある状態をしっかり保っているさま。日本外史〔1827〕九・足利氏正記「兩陣皆喪首領。猶屹然相對」；真善美日本人〔1891〕〈三宅雪嶺〉日本人の任務・二「欧州諸強国の兵備、整頓完具、屹然として動かす可らざるが如き勢あるは」
501	文王之什・靈台	濯濯②	たくたく	①つややかなさま。美しい光沢を放っているさま。②楽しみ遊ぶさま。③山野の荒廃したさま。草や木のないさま。はげているさま。；肥えてつややかなさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p238注釈四	
502		鶯鶯	かくかく	鳥が肥えて、羽のつやつやしているさま。（新選漢和辞典Web版）	
503		逢逢①	ほうほう	①太鼓をうつ音。②雲や煙が起こるさま。また、盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）	
504	文王之什・下武	なし			
505	文王之什・文王有聲	なし			

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
506	生民之什・生民	旆旆②	はいはい	①旗のなびくさま。②草木の生い茂ったさま。（新選漢和辞典Web版）	
507		穉穉	すいすい	苗の美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
508		幪幪	もうもう	草木がおいしげるさま。（新選漢和辞典Web版）	
509		啍啍	ほうほう	実の多いさま。（新選漢和辞典Web版）	
510		叟叟	しゅうしゅう	米をあらう音。（新選漢和辞典Web版）；さらさらと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p242訳	
511		浮浮	ふふ	ふわふわと動いて行くさま。；①雨や雪が盛んにふるさま。② 気の立ちのぼるさま 。③流れゆくさま。（新選漢和辞典Web版）；ふつふつと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p242訳	
512	生民之什・行葦	泥泥	でいでい	よろめくさま。よろよろするさま。取り乱して前後を失うさま。；①露にぬれているさま。② やわらかく、つやのあるさま 。（新選漢和辞典Web版）	①玉葉・安元元年〔1175〕一月二八日「凡奉行人、皆以泥泥、違乱事太多云々」；大観本謡曲・三笑〔1595頃〕「かなたこなたへ足もとは泥々泥々と苔むす橋を、よろめき給へば」
513	生民之什・既醉	なし			
514	生民之什・鳧鷖	熏熏	くんくん	①和らぎよろこぶさま。② 多いさま 。③あたたかいさま。（新選漢和辞典Web版）	
515		欣欣	きんきん	① よろこぶさま。また、よろこばしいさま 。②得意になってうぬぼれるさま。	①鹿苑日録・明応八年〔1499〕三月二四日「勢州有状、日、昨日閑話欣々」；其面影〔1906〕〈二葉亭四迷〉五三「面（かほ）は兎に角、内心はいつも欣々（キンキン）たる哲也で」
516		芬芬	ふんぶん	（「ふんぶん」とも）芳気の高くかおるさま。また、広く悪臭の漂うさまをもういう。	性霊集・一〔835頃〕入山興「京城御。桃李紅。灼々芬々」；信長公記〔1598〕一一「にほひ・焼物（たきもの）ふんふんと衣香当りを撥（はら）つて四方に薫じ」；浮世草子・花の名残〔1684〕四「袖にかほる空焼（そらだき）芬々（フンフン）としてえならぬさま」；俳諧師〔1908〕〈高浜虚子〉八五「夜遅く酒気芬々（フンフン）として帰って来て」
517	生民之什・仮楽	穆穆②	ぼくぼく	①むつまじいさま。なごやかで親しいさま。② うやうやしいさま。敬い つつしむさま。③美しく威儀のあるさま。④静かなさま。	②性霊集・六〔835頃〕弘仁太上奉為桓武帝講御礼法花経達「四門穆々、多士濟々；三国伝記〔1407～46頃か〕一一・八「四門穆穆（ホクホク）として六芸併々たり」
518		皇皇①	こうこう	① 美しく盛んなさま。きらびやかなさま。はなやかなさま 。②大きなさま。③さまようさま。また、心の不安定なさま。④忙しいさま。あわただしいさま。遑遑。（「煌々」：光り輝くさま。きらきら光るさま。）	江戸繁昌記〔1832～36〕五・後序「其往く、濟々、其還る、皇々」
519		抑抑	よくよく	つつしむさま。ひかえ目にするさま。	一年有半〔1901〕〈中江兆民〉二「抑々進みて已まず、死に至る迄経営造作して休せざる者は殆ど有ること莫し」
520		秩秩	ちつちつ	①流れ行くさま。② 知識のあるさま 。また、知識を進めるさま。；常有る也。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p247注釈五	日本風景論〔1894〕〈志賀重昂〉六「石狩の大江汪々として其間に曲折し、田疇墟落秩々として画くが如く」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
521 生民之什・公劉	處處	しょしょ	ところどころ。あちこち。ここかしこ。方々。；①ところどころ。②いる場所。（新選漢和辞典Web版）；処々は語を重ねたもの。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p249注釈十	懐風藻〔751〕幽棲（民黒人）「泉石行々異、風烟処処同」；浮世草子・日本永代蔵〔1688〕四・四「利介相はてて後、所所（ショショ）の間屋をめぐり、年年の売掛を取こそふしぎなれ」；一年有半〔1901〕〈中江兆民〉二「其為す所浅薄にして、十二分の処所に透徹すること能はず」
522	言言	げんげん	一つ一つのことば。一語一語。	
523	語語	ごご	一語一語。ひとことひとこと。一つ一つのことば。	火の柱〔1904〕〈木下尚江〕九・四「言々は是れ涙、語々（ゴゴ）は是れ血と云ふのは多分此の如きものであらうと」
524	踳踳②	そうそう	①動くさま。動きまわるさま。また、舞うさま。おどるさま。②堂々としたさま。動作に威儀のあるさま。また、のびやかなさま。鏘鏘（そうそう）。③よろめくさま。踳踳。	
525	濟濟②	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③おごそかにしてつしむさま。礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。	②懐風藻〔751〕元日（藤原史）「濟濟周行士、穆穆我朝人」；御湯殿上日記・大永八年〔1528〕五月二十七日「あり春この月の御きたうせいせいとはたして」
526 生民之什・洞酌	なし			
527 生民之什・卷阿	顛顛	ぎょうぎょう	①温和なさま。②慕うさま。③波が高いさま。（新選漢和辞典Web版）	
528	卯卯	こうこう	卯は高く仰ぐ意あり、尊厳なるさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p252注釈十三	
529	翩翩	かいかい	翩：①鳥の羽ばたく音。②飛ぶ。（新選漢和辞典Web版）	
530	藹藹②	あいあい	①草木の茂っているさま。②多くて盛んなさま。③穏やかなさま。もの柔らかかなさま。多く、「和氣藹藹」の形で用いられる。④うすぐらいさま。	
531	萋萋	ほうほう	草木が茂るさま。また、実が多くなっているさま。散乱しているさま。（新選漢和辞典Web版）	
532	萋萋	せいせい	草木などの生い茂るさま。萋然。さいさい。	あめりか物語〔1908〕〈永井荷風〕一五「野草は萋萋として牧場を蔽ひ」
533	雛雛	ようよう	①やわらぎ楽しむさま。②鳳凰の鳴く声。③鳥の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）	
534	啾啾①	かいかい	①鳥がなごやかに鳴くさま。②鈴や鐘の鳴るさま。	俳諧・寛政三年紀行〔1791〕「啾啾々たる鳥は仏土妙音の響かとも聞へ」
535 生民之什・民勞	なし			
536 生民之什・板	板板	はんばん	そむく。道に反する。また、道理に反して乱れたさま。＝版版（新選漢和辞典Web版）	
537	管管	かんかん？	依る所のないこと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p254注釈二	
538	憲憲	けんけん	①さかんなさま。②よろこぶさま。（新選漢和辞典Web版）；意気揚々と得意なさま。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p254注釈四	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
539	泄泄	えいえい	たるんでしまりがいいこと。ゆるゆるとしているさま。；心のびのびと楽しむさまか。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p254注釈五	読史余論〔1712〕二・中世以来将帥の任世官世族となりし事「天のまさに蹶（うご）く時にしかく泄々する事なしと云事、まことなる哉」
540	囂囂	ごうごう/ぎょうぎょう	①（一する）人などがさわぐこと。また、声や音などがやかましいさま。喧喧囂囂（けんけんごうごう）。ぎょうぎょう。②さとりきって無欲なさま。自分の分に安んじて他を願わないさま。；人の言を聞き入れぬこと。	①談義本・田舎荘子〔1727〕跋「与彼智術小技之冊、囂々追時好者亦有別」；落梅集〔1901〕〈島崎藤村〉利根川だより「囂々とめぐりひびく器械に」
541	灌灌	かんかん	①水の流れがさかんなさま。②ねんごろなさま。③うれえてうったえるところのないさま。④伝説上の鳥の名。鳩の類。（新選漢和辞典Web版）「款款」：①忠実なさま。純一なさま。②心をこめるさま。うちとけるさま。③「かんかん（緩緩）」に同じ。ゆっくりとしたさま。いそがないさま。のどかなさま。ゆるゆる。そろそろ。款款。	空華日用工夫略集 - 応安三年〔1370〕二月五日「余乃歎々説話云」
542	蹻蹻	きょうきょう	一、①強いさま。いさましいさま。②盛んなさま。二、きやくきやくつまらぬ人間が地位を得ていばるさま。（新選漢和辞典Web版）	
543	譁譁	ぎやくぎやく	①盛んではげしいさま。②喜び楽しむさま。	
544	焯焯	かくかく	火の盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）	
545	蕩之什・蕩	とうとう	①広大なさま。広々としているさま。強大なさま。②平坦なさま。たいらかでやすらかなさま。③さかんに水の流れるさま。④おだやかなさま。また、心がゆったりとしているさま。⑤みだれているさま。法度（はつど）のやぶれすたれるさま。⑥「とうとう（滔滔）(2)」に同じ。弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。	⑤布令必用新撰字引〔1869〕〈松田成己〉「蕩々 タウタウ オキテカクツレル」
546	蕩之什・抑	抑抑	つつしむさま。ひかえ目にするさま。	一年有半〔1901〕〈中江兆民〉二「抑々進みて已まず、死に至る迄経営造作して休せざる者は殆ど有ること莫し」
547	繩繩	じょうじょう	長く続いて絶えないさま。	江戸繁昌記〔1832～36〕四・麴街「最後の一人、指、亀頭を挟んで、行々溺す。繩繩溺過して、絶えざること糸の如し」
548	温温①	おんおん	①性質のやさしく、おとなしいさま。②あたたかいさま。	①足利本論語抄〔16C〕子張第十九「即君子近其体温々潤人不憎」；米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉二・三三「言寡く温温たる老翁にて、容貌愚なるか如し」
549	夢夢	ぼうぼう	思い乱れる。（新選漢和辞典Web版）；茫茫として。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p172訳	
550	慘慘①	さんさん	①いたましく悲しいさま。心を痛めるさま。②暗いさま。	①広益熱字典〔1874〕〈湯浅忠良〉「慘々 サンサン イタマシヒ」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
551	諄諄①	じゅんじゅん	①よくわかるように、繰り返し話して聞かせるさま。懇切丁寧に教えいましめるさま。②まじめでつつしみぶかいさま。	①三教指帰〔797頃〕上「豈思、諄諄之意、切於猶子、勲勲之思、重於比兒」；悪魔〔1903〕〈国木田独歩〉八・八「淳々（ジュンジュン）として天に在（ましま）す父の愛を説き」；異端者の悲しみ〔1917〕〈谷崎潤一郎〉四「直ぐ又句調を柔げて諄諄（ジュンジュン）と説き諭した」	
552	藐藐	びょうびょう？	①美しいさま。②人の教えが心にはいらぬさま。③広大なさま。（新選漢和辞典Web版）「藐然」はあるが、意味が異なる。はるかに遠いさま。とても及びそうもないさま。		
553	蕩之什・桑柔	騃騃②	きき？	「騃」：①馬の元気なさま。②馬が威儀をもって進む。（新選漢和辞典Web版）；馳せやまず。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p143訳	
554		愍愍	いんいん？	「愍」：①心がいたむ。②ねんごろ。れいねい。（新選漢和辞典Web版）	
555	蕩之什・雲漢	蟲蟲	ちゅうちゅう	ひどいむしあつたさま。（新選漢和辞典Web版）	
556		兢兢	きょうきょう	おそれつつしむさま。安んじないさま。びくびくするさま。；①心をはらはらさせて、戒めつつしむさま。恐恐。②堅く強いさま。（新選漢和辞典Web版）	敬齋箴講義〔1770後）「兢兢は戒め慎むの貌也」；国民精神作興に関する詔書・大正一二年〔1923〕一月一日「朕、即位以来、夙夜兢兢として常に紹述を思ひしに」
557		業業①	ぎょうぎょう	①あやぶみ恐れるさま。②さかんなさま。りっぱなさま。	綱齋先生敬齋箴講義〔1770末～1800初）「唐虞の廷、君臣、警戒兢兢業々、一日に万機あり」
558		赫赫①	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	①日蓮遺文・開目抄〔1272〕「赫々たる日輪、明々たる月輪のごとく」；和英語林集成（初版）〔1867〕「リョウガン kakukaku（カクカク）トシテ ニチリンノ ナラビイデタルゴトク」
559		炎炎③	えんえん	①火の盛んに燃え上がるさま。②盛んに燃える炎のように勢いのよいさま。③熱気の強いさま。ひどく暑いさま。	③艸山集〔1674〕一九・夏日作「夏日炎炎無奈長、手揮団扇到斜陽」
560		滌滌①	できでき	①日照りで山も川もかわいたさま。②しだいにあたたかくなるさま。（新選漢和辞典Web版）	
561	蕩之什・崧高	臙臙	びび	①熱心につとめるさま。②進みゆくさま。③走るさま。（新選漢和辞典Web版）	
562		藐藐	びょうびょう？	①美しいさま。②人の教えが心にはいらぬさま。③広大なさま。（新選漢和辞典Web版）「藐然」はあるが、意味が異なる。はるかに遠いさま。とても及びそうもないさま。	
563		蹻蹻①	きょうきょう	一、①強いさま。いさましいさま。②盛んなさま。二、ぎやくぎやくつまらぬ人間が地位を得ていばるさま。（新選漢和辞典Web版）	
564		濯濯①	たくたく	①つややかなさま。美しい光沢を放っているさま。②楽しみ遊ぶさま。③山野の荒廃したさま。草や木のないさま。はげているさま。	杏陰集〔1722頃か）春月勝秋月「濯濯深粧柳、溶溶淡白梨」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
565	番番	ばんばん	つぎつぎに順をおって、その事にあたること。順番。； 勇武の貌 。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p269注釈十八	
566	嘩嘩③	たんたん	①牛馬などのあえぐさま。②盛んなさま。③ 多いさま 。④ゆとりのあるさま。（新選漢和辞典Web版）；衆也。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p269注釈十九	
567	蕩之什・烝民	翼翼③	よくよく ①物事のさかんなさま。多いさま。②整っているさま。美しいさま。③ 敬いつつしむさま 。また、びくびくするさま。	③江戸繁昌記〔1832～36〕二・葬礼「恂々翼翼、鮑を辟て芝に居り、人を誨て倦まず」；如是放語〔1898〕〈内田魯庵〉「且つ憐むべきは誠実律義なる賈人、純良無垢なる青年、細心翼翼（ヨクヨク）たる循吏朴直一遍の農民」；林檎の下の顔〔1971～73〕〈真継伸彦〉—「翼翼たる小心に翻弄されつづけなければならぬ自分を変えたいからだだった」
568		肅肅④	しゆくしゆく ①つつしみうやまうさま。うやうやししくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。ととのったさま。④ おごそかなさま 。肅肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたってもものさびしい音をたてるさま。また、風がひややかに吹くさま。；①つつしむさま。②静かなさま。③早いさま。④おごそかなさま。⑤松風や羽ばたきの形容。（新選漢和辞典Web版）	④夜行巡查〔1895〕〈泉鏡花〉五「更に冷然として一定の足並を以て肅々（シュクシュク）と歩出せり」；坊っちゃん〔1906〕〈夏目漱石〉一〇「師範学校の方は肅肅として進行を始めた」
569		業業	ぎょうぎょう ①あやぶみ恐れるさま。②さかんなさま。りっぱなさま。；たくましく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p271訳	
570		捷捷	しょうしょう？ はやりつつ。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p271訳	
571		彭彭	ほうほう 多く盛んなさま。盛大なさま。；①多いさま。②盛んなさま。③盛んに進むさま。④車の多いさま。（新選漢和辞典Web版）；足並みそろえて。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p271訳	稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」
572		將將	しょうしょう/そうそう ①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）；シャンシャンと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p271訳	
573		駉駉②	きき？ 「駉」：①馬の元気なさま。② 馬が威儀をもって進む 。（新選漢和辞典Web版）；たくましく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p271訳	
574		喑喑②	かいかい ①鳥がなごやかに鳴くさま。② 鈴や鐘の鳴るさま 。；鈴の声チャラチャラと。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p271訳	俳諧・寛政三年紀行〔1791〕「喑喑たる鳥は仏土妙音の響かとも聞へ」
575	蕩之什・韓奕	奕②	えきえき ①光り輝くさま。②美しいさま。；①美しいさま。② 大きいさま 。③憂えるさま。④光り輝くさま。（新選漢和辞典Web版）；大いなる。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p272訳	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
576	奕奕	えきえき	①光り輝くさま。②美しいさま。； ①美しいさま。②大きいさま。③憂えるさま。④光り輝くさま。（新選漢和辞典Web版）；馬たくましく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p272訳		
577	彭彭	ほうほう	多く盛んなさま。盛大なさま。	稽本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」	
578	鏘鏘	しょうしょう/そうそう	「しょうしょう」：①高いさま。山などが高くそびえるさま。②「そうそう（鏘鏘）」に同じ。；「そうそう」①鳳凰の鳴く声のさま。②玉や金属などがふれあって高く鳴りひびくさま。とくに、天子の乗物の鈴の鳴る音のさま。また、音、声の高く美しいさま。鏘然。③盛んなさま。④「そうそう（躊躇）(2)」に同じ。堂々としたさま。動作に威儀のあるさま。また、のびやかなさま。鏘鏘（そうそう）。	「そうそう」②三教指帰〔797頃〕上「移孝竭主。流涕接僚。佩干将以鏘鏘」；授業編〔1783〕三「佩玉鏘々（サウサウ）の註に鏘々（サウサウ）は金玉の声なりと」；雪中梅〔1886〕〈末広鉄腸〉下・一「水声鏘々（サウサウ）として溪間に鳴り」；廬山〔1971〕（秦恒平）「橋は腹に響くような容赦のない一枚岩で、鏘々（ソウソウ）と溪流が鳴っているが」	
579	訶訶	くく	広大なさま。（新選漢和辞典Web版）		
580	甫甫	ほほ	多い。（新選漢和辞典Web版）		
581	嘯嘯	くく？	麋鹿はうごめく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p273訳		
582	蕩之什・江漢	浮浮	ふふ	ふわふわと動いて行くさま。；①雨や雪が盛んにふるさま。②気の立ちのぼるさま。③流れゆくさま。（新選漢和辞典Web版）；滔々は流れの広大なこと。浮浮は彊（つよ）い形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p274注釈一	
583		滔滔②	とうとう	①水がさかんに流れるさま。多量の水を悠然とたたえているさま。洶洶。②弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。③おしなべて一様であるさま。また、世の風潮などが一つの方向に勢いよく移るさま。④広大なさま。無辺であるさま。かぎりなくひろがるさま。	②滑稽本・浮世床〔1813～23〕初・上「その癖に、氣象たかく弁舌滔滔として高慢を吐くは素読指南の先生」；侏儒の言葉〔1923～27〕〈芥川龍之介〉貝原益軒「書生は才力に誇ってゐたと見え、滔滔と古今の学芸を論じた」
584		湯湯	しょうしょう/とうとう	沓しょうしょう：（「湯（しょう）」は水の流れるさま）水勢の強くはげしいさま。また、流れのはげしいさま。沓とうとう：①広大なさま。広々としているさま。強大なさま。②平坦なさま。たいらかでやすらかなさま。③さかんに水の流れるさま。④おだやかなさま。また、心がゆったりとしているさま。⑤みだれているさま。法度（はつと）のやぶれずたれるさま。⑥「とうとう（滔滔）(2)」に同じ。弁舌のよどみのないさま。次々とよどみなく話すさま。蕩蕩。	沓：性霊集・一〔835頃〕遊山慕仙詩「定恵澄心海、无縁毎湯々」；日蓮遺文・身延山御書〔1282〕「下枝に鳴く蟬の音（こゑ）滋く、前には湯々たる流水湛へて実相真如の月浮び」沓：③本朝麗藻〔1010か〕下・与諸文友泛船於宇治川聊以逍遙〈藤原伊周〉「波勢湯湯巴峡路、風声嫋嫋洞庭天」；浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕三・連歌明月影「満（みつる）時は朱（あけ）の玉垣の最中（もなか）迄波蕩々（トウトウ）としろくいろどり」
585		洶洶①	こうこう	①勇ましいさま。②大水のさま。水が涌き返り逆巻くさま。③水がわき出るさま。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
586	明明	めいめい	①たいそう明るいさま。②はっきりして、疑わしい点が少しもないさま。はっきりと示すさま。また、心が晴れ晴れとしているさま。気にかかる点が少しもないさま。明白。明明白白。；明明是勉強。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p275注釈十九。「勉強」：努めてやまないさま。励み努めるさま。孜孜（しし）。汲汲（きゅうきゅう）。	
587 蕩之什・常武	赫赫②	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	②翰林葫蘆集〔1518頃〕一二・悦岩忻公大禪定門活下火燭「赫赫威名奉將軍、塞垣草木也忻々」；歩兵操典〔1928〕綱領「赫々たる伝統を有する国軍は」
588	明明	めいめい	①たいそう明るいさま。②はっきりして、疑わしい点が少しもないさま。はっきりと示すさま。また、心が晴れ晴れとしているさま。気にかかる点が少しもないさま。明白。明明白白。；明らけく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p275訳	
589	赫赫②	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	②翰林葫蘆集〔1518頃〕一二・悦岩忻公大禪定門活下火燭「赫赫威名奉將軍、塞垣草木也忻々」；歩兵操典〔1928〕綱領「赫々たる伝統を有する国軍は」
590	業業②	ぎょうぎょう	①あやぶみ恐れるさま。②さかんなさま。りっぱなさま。	
591	嘩嘩②	たんたん	①牛馬などのあえぐさま。②盛んなさま。③多いさま。④ゆとりのあるさま。（新選漢和辞典Web版）	
592	緜緜	めんめん	長く続いて、絶えないさま。どこまでも続いているさま。	文華秀麗集〔818〕上・在辺贈友〈小野岑守〉「綿綿千累路、帛素寄双飛」；予言の芸術〔1910〕〈姉崎嘲風〉「無意義だ、不可解だと叫ぶ間には、尚人生の意義に対する恋々の情が綿々絶えないでをるのではないか」
593	翼翼②	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。②整っているさま。美しいさま。③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。；足並そろい。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p143訳	②詩聖堂詩集・三編〔1838〕九・有年行「与与翼翼黍稷蕃、積之崇又櫛比」
594 蕩之什・瞻印	藐藐	びょうびょう？	①美しいさま。②人の教えが心にはいらぬさま。③広大なさま。（新選漢和辞典Web版）「藐然」はあるが、意味が異なる。はるかに遠いさま。とても及びそうもないさま。	
595 蕩之什・召旻	皐皐	こうこう	がんこで道理を知らないさま。	
596	訛訛	？	皐皐訛訛でガヤガヤと人を譏毀しあうありさま。	
597	兢兢	きょうきょう	おそれつつしむさま。安んじないさま。びくびくするさま。	菅家後集〔903頃〕叙意一百韻「兢々馴鳳辰、懐々撫龍泉」；敬齋箴講義〔17C後〕「兢々は戒め慎むの貌也」；国民精神作興に関する詔書・大正一二年〔1923〕十一月一日「朕、即位以来、夙夜兢々として常に紹述を思ひしに」
598	業業①	ぎょうぎょう	①あやぶみ恐れるさま。②さかんなさま。りっぱなさま。	綱齋先生敬齋箴講義〔17C末～18C初〕「唐虞の廷、君臣、警戒兢々業々、一日に万機あり」

出典	単なる疊音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
599 頌/周頌/清廟之什・清廟	濟濟	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③おごそかにしてつづむさま。礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。	①天台大師和讃（10C後～11C前）「一日朝儀を止てぞ、王侯相将集りて、語黙の益を蒙者、濟々として有しかど、徒衆転た多くして」；太閤記（1625）七・金賦之事「大臣小臣によらず金銀濟々持し人々を、猶富（とま）し給ふ事、実々虚々之患而已（うれひのみ）」
600 周頌/清廟之什・維天之命	なし			
601 周頌/清廟之什・烈文	なし			
602 周頌/清廟之什・天作	なし			
603 周頌/清廟之什・旻天有成命	なし			
604 周頌/清廟之什・我将	なし			
605 周頌/清廟之什・時邁	なし			
606 周頌/清廟之什・執競	喤喤③	こうこう？	「喤」：①こどもの泣きわめく声。②いかる。③鐘や太鼓などの楽器がひびわたる。④やかましい。；赤ん坊がわあんわあんとたくましい大声で泣くこと。	
607	將將	しょうしょう/そうそう	①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	
608	穰穰②	じょうじょう	①穀物が豊かにみのるさま。②豊かなさま。多いさま。多くて盛んなさま。	②菅家文草（900頃）一・九日侍宴、同賦天錫難老「穰穰景福、駟老彭以列周行」
609	反反	？	威儀もうるわしく。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p286訳	
610	簡簡	かんかん	なし。大いなり。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p286訳；「悠悠簡簡」：気長にかまえていること。ゆとりのあるさま。	
611 周頌/臣工之什・臣工	嗟嗟	ああ	①感嘆して発する声。②嘆き悲しむ声。③海中の怪物の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）	
612 周頌/臣工之什・噫嘻	なし			
613 周頌/臣工之什・振鷺	なし			
614 周頌/臣工之什・豊年	なし			
615 周頌/臣工之什・有瞽	喤喤③	こうこう？	「喤」：①こどもの泣きわめく声。②いかる。③鐘や太鼓などの楽器がひびわたる。④やかましい。；赤ん坊がわあんわあんとたくましい大声で泣くこと。	
616 周頌/臣工之什・潜	なし			
617 周頌/臣工之什・雝雝	雝雝	ようよう	①やわらぎ楽しむさま。②鳳凰の鳴く声。③鳥の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）	
618	肅肅①	しゅくしゅく	①つつしみうやまうさま。うやうやしくするさま。②静かでひっそりしたさま。ものさびしいさま。寂々（せきせき）。蕭々（しょうしょう）。③ひきしまったさま。ととのったさま。④おごそかなさま。厳肅なさま。⑤松などの樹木に、風があたってもものさびしい音をたてるさま。また、風がひやかに吹くさま。；①つつしむさま。②静かなさま。③早いさま。④おごそかなさま。⑤松風や羽ばたきの形容。（新選漢和辞典Web版）	①真善美日本人（1891）〈三宅雪嶺〉日本人の任務・三「上帝英傑を下して国人を救ふと信じ、自ら慰め自ら楽み日夜肅々として之を俟てりき」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
619	穆穆②	ぼくぼく	①むつまじいさま。なごやかで親しいさま。②うやうやしいさま。敬い つつしむさま。③美しく威儀のある さま。④静かなさま。	②性霊集・六〔835頃〕弘仁太上奉 為桓武皇帝講御札法花経達「四門 穆々、多士濟々；三国伝記〔1407 ～46頃か〕一一・八「四門穆穆（ホ クホク）として六芸併々たり」	
620	周頌/臣工之什・載見 央央	おうおう	鮮明なさま。はっきりと現われている さま。；和鈴なごやかに。目加田 誠（1960）『詩経・楚辞』p291訳	雲壑猿吟〔1429頃〕次韻竹隱蔵主 二首「玉輦日臨光耿々、翠華春動影 央々」；浄瑠璃・信州川中島合戦〔1 721〕—「石公孫呉の兵術（ひやう じつ）に通達し、其名央々（オウオ ウ）とかくれなく、近国他国の大名よ り招け共」	
621	周頌/臣工之什・有客	なし			
622	周頌/臣工之什・武	なし			
623	周頌/閔予小子之什・ 閔予小子	嬛嬛	けんけん/けいけい	①しなやかでうつくしい。②孤独の さま。ひとりぼっち。たよる所のな いさま。「嬛嬛（けいけい）」（新 選漢和辞典Web版）	
624	周頌/閔予小子之什・ 訪客	なし			
625	周頌/閔予小子之什・ 敬之	なし			
626	周頌/閔予小子之什・ 小姦	なし			
627	周頌/閔予小子之什・ 載芟	澤澤	たくたく	つやつやとしてかがやいているさ ま。濯々。；ざくざくと。目加田誠 （1960）『詩経・楚辞』p295訳	露団々〔1889〕〈幸田露伴〉九 「襟には光沢々（タクタク）たる絹扇 をさし」
628		驛驛	えきえき？	すきまもなく。目加田誠（1960） 『詩経・楚辞』p296訳	
629		厭厭②	えんえん	①安らかで静かなさま。②植物など の盛んに茂るさま。	
630		緜緜	めんめん	長く続いて、絶えないさま。どこま でも続いているさま。	文華秀麗集〔818〕上・在辺贈友 〈小野岑守〉「綿綿千累路、帛素奇双 飛」；予言の芸術〔1910〕〈姉崎 嘲風〉「無意義だ、不可解だと叫ぶ間 には、尚人生の意義に対する恋々の情 が綿々絶えないでをるのではないか」
631		濟濟	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。 勢勢。さいさい。②よく整い威儀を 正しているさま。③おごそかにしてつ つしむさま。礼法の節度あるさま。 ④多忙であるさま。	①天台大師和讃〔10C後～11C 前〕「一日朝儀を止てぞ、王侯相将集 りて、語黙の益を蒙者、濟々として有 しかど、徒衆転々多くして」；太閤記 〔1625〕七・金賦之事「大臣小臣 によらず金銀濟々持し人々を、猶富 （とま）し給ふ事、実々虚々之患而已 （うれひのみ）」
632	周頌/閔予小子之什・ 良耜	叟叟	しょくしょく	鋭いすきで深く耕すさま。（新選漢 和辞典Web版）；そくそくと。目加 田誠（1960）『詩経・楚辞』p297 訳；測測のごとし、耜の音。目加田 誠（1960）『詩経・楚辞』p297注釈 一	
633		桎桎	ちつちつ	叟（新選漢和辞典Web版）；ざくざ くと刈りとり。目加田誠（1960） 『詩経・楚辞』p297訳	
634		栗栗（慄慄）	りつりつ	①おそれおののくさま。慄然。②寒 さにふるえるさま。；①たくさんあ つまっているさま。②おののくさ ま。（新選漢和辞典Web版）；密な ること。目加田誠（1960）『詩経・ 楚辞』p297注釈七	①駿台雑話〔1732〕二・春秋のあ らそひ「武の樂は征伐より出づる故 に、其の美の実、慄（リツ）々として 嚴なる方に勝れたり」②報徳記〔18 56〕七「身体栗々（リツリツ）とし て嚴寒に歩するが如し」
635	周頌/閔予小子之什・ 絲衣	俅俅	きゅうきゅう	うやうやしいさま。	

	出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
636	周頌/閔予小子之什・酌	なし			
637	周頌/閔予小子之什・桓	桓桓	かんかん	強いさましいさま。威のあるさま。	浄瑠璃・用明天皇職人鑑〔1705〕 一「冠もぎ捨て〈略〉どうぞ座してくんくんたる声をあげエエ無念至極せり」；浄瑠璃・摂津国長柄人柱〔1727〕三「百官を押靡け、自然と我を高御座。桓桓（クワンクワン）と見下して」；長唄・江の島〔江戸後〕「海岸峨々たる巖上を、桓々として嚴重たり」
638	周頌/閔予小子之什・賚	なし			
639	周頌/閔予小子之什・般	なし			
640	魯頌/駒之什・駟	駟駟	けいけい	馬のたくましく肥えているさま。 （新選漢和辞典Web版）	
641		彭彭	ほうほう	多く盛んなさま。盛大なさま。；①多いさま。②盛んなさま。③ 盛んに進むさま 。④車の多いさま。（新選漢和辞典Web版）；おお躍る。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p302訳	檜本・東海道中膝栗毛〔1802～09〕八・上「ほどなく、天満宮の御社にいたるに、まことに神徳の彭々（ホウホウ）たるは、参詣の人どよみにあらはれ」
642		逸逸（繹繹）	いついつ？/えきえき	連なって絶えないさま。一説によく走るさま。；①よく走るさま。②続くさま。③盛んなさま。④高いさま。（新選漢和辞典Web版）	
643		祛祛	きよきよ	強いさま。（新選漢和辞典Web版）	
644	魯頌/駒之什・有駟	明明	めいめい	①たいそう明るいさま。②はっきりして、疑わしい点が少しもないさま。はっきりと示すさま。また、心晴れ晴れとしているさま。気にかかる点が少しもないさま。明白。明明白白。；勉勉。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p303注釈二	
645		咽咽	いんいん/えんえん	「咽咽坎坎」：鼓の音の鳴るさまをいう。；つづみの音の遠くまで響く様子。（新選漢和辞典Web版）	浄瑠璃・天鼓〔1701頃〕五「立より打てば此鼓、咽々坎坎（インインカンカン）と、心耳も妙に是やこの、蕭鼓（しゃうこ）天に聒（かまびすく）楼台に殷たりと云ひしも、かくやと思ふ斗の声出て、響は感を催せり」
646		振振③	しんしん	①盛んなさま。盛大なさま。②信義仁愛の厚いさま。③ 鳥などのむらがり飛ぶさま 。；①盛んなさま。②鳥がむらがって飛ぶさま。③人がらのりっぱなさま。④思いあがった、得意げなさま。（新選漢和辞典Web版）	
647	魯頌/駒之什・泮水	萋萋	はいはい	ととのうさま。（新選漢和辞典Web版）；ゆらゆら。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p303訳；旖旎。旖旎のゆらめく形容。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p305注釈四	
648		噦噦①	かいかい	①鳥の声。②ゆっくりとリズムのある音。（新選漢和辞典Web版）	
649		躑躅①	きょうきょう	一、① 強いさま。いさましいさま 。②盛んなさま。二、きやくきやくつまらぬ人間が地位を得ていばるさま。（新選漢和辞典Web版）	
650		昭昭	しょうしょう	あきらかなさま。また、あきらかに輝くさま。；馬にのって来る音であろう。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p305注釈八	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
651	穆穆	ぼくぼく	①むつまじいさま。なごやかで親しいさま。②うやうやしいさま。敬いつつしむさま。③美しく威儀のあるさま。④静かなさま。	③懐風藻〔751〕元日〈藤原史〉「済々周行士、穆々我朝人」
652	明明	めいめい	①たいそう明るいさま。②はっきりしていて、疑わしい点が少しもないさま。はっきりと示すさま。また、心が晴れ晴れとしているさま。気にかかる点が少しもないさま。明白。明明白白。	
653	矯矯	きょうきょう	勇壮なさま。勇ましい様子。	音訓新聞字引〔1876〕〈萩原乙彦〉「矯々ケウケウチカラヲイレル」；黒い眼と茶色の目〔1914〕〈徳富蘆花〉二・三「高森さんがパウロと称するに對し、自ら矯々（ケウケウ）の氣を負うてパウロの前名サウロを名乗って居た」
654	濟濟	せいせい/さいさい	①多く盛んなさま。数が多いさま。勢勢。さいさい。②よく整い威儀を正しているさま。③おごそかにしてつつしむさま。礼法の節度あるさま。④多忙であるさま。	①天台大師和讃〔100後～110前〕「一日朝儀を止てぞ、王侯相將集りて、語黙の益を蒙者、済々として有しかど、徒衆転た多くして」；太閤記〔1625〕七・金賦之事「大臣小臣によらず金銀済々持し人々を、猶富（とま）し給ふ事、実々虚々之患而已（うれひのみ）」
655	桓桓	かんかん	強くいさましいさま。威のあるさま。	浄瑠璃・用明天皇職人鑑〔1705〕一「冠もぎ捨て〈略〉どうど座してくんくんたる声をあげエエ無念至極せり」；浄瑠璃・摂津国長柄人柱〔1727〕三「百官を押靡け、自然と我を高御座。桓桓（クワンクワン）と見下して」；長唄・江の島〔江戸後〕「海岸峨々たる巖上を、桓々として嚴重たり」
656	蒸蒸①	じょうじょう	①盛んに起こるさま。盛んなさま。②だんだんと進んで行くさま。③蒸気やけむりなどの立ちのぼるさま。④志を得ないさま。ぐずぐずしているさま。	江戸繁昌記〔1832～36〕二・葬礼「二氣蒸々、生々の理、万古竭きず」
657	皇皇①	こうこう	①美しく盛んなさま。きらびやかなさま。はなやかなさま。②大きなさま。③さまようさま。また、心の不安定なさま。④忙しいさま。あわただしいさま。遑遑。	江戸繁昌記〔1832～36〕五・後序「其往く、済々、其還る、皇々」
658	魯頌/駒之什・闕宮	實實	じつじつ	毛伝に、実実は広大。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p306注釈三
659		枚枚	まいまい	こまかく密なさま。（新選漢和辞典Web版）
660	赫赫①	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	①日蓮遺文・開目抄〔1272〕「赫々たる日輪、明々たる月輪のごとく」；和英語林集成（初版）〔1867〕「リョウガン kakukaku（カクカク）トシテ ニチリンノ ナラビイデタルゴトク」
661	皇皇②	こうこう	①美しく盛んなさま。きらびやかなさま。はなやかなさま。②大きなさま。③さまようさま。また、心の不安定なさま。④忙しいさま。あわただしいさま。遑遑。	
662	將將②	しょうしょう/そうそう	①鐘・鈴・玉などの鳴る音の形容。②高大で雄壮なさま。③立派で美しいさま。（新選漢和辞典Web版）	

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例	
663	洋洋	ようよう	①水が満ちあふれるさま。また、広々としたさま。ゆったりしたさま。限りないさま。漾漾（ようよう）。洋洋乎。②物事の盛んなさま。③希望に満ちているさま。；① 広々としたさま 。②満ちあふれるさま。「其喜洋洋（そのよろこびようようたり）」③ゆったりとして美しいさま。（新選漢和辞典Web版）		
664	耳耳	じじ	盛んなさま。（新選漢和辞典Web版）		
665	増増①	ぞうぞう	① 数の多いさま 。②ますます。いやましに。さらに。いよいよ。（新選漢和辞典Web版）		
666	巖巖①	がんがん	①山や岩などが高くけわしくそばだつさま。②人の気性のけだかいさま。人格の高尚なさま。	①浮世草子・宗祇諸国物語〔1685〕一・山神想紀氏娘「東西南の三方（みかた）は山めぐり巖々（ガンガン）と高し」；浄瑠璃・姫山姥〔1712頃〕四「草木しげって、がんがんたる岨陰よこおれし」；不如帰〔1898～99〕〈徳富蘆花〉上・五・一「此大山巖々（ガンガン）として物に動ぜぬ大器量の將軍をば」	
667	奕奕②	えきえき	①光り輝くさま。②美しいさま。；よくそろう。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p157訳	②即興詩人〔1901〕〈森鷗外訳〉神曲、吾友なる貴公子「その岩石何ぞ峨々たる、その色彩何ぞ奕奕たる」；江戸から東京へ〔1921〕〈矢田挿雲〉六・二「併し四体の龍を鐘樓の柱へ取付けるに至って甚五郎の龍は俄然として奕奕（エキエキ）たる神采（しんさい）を發揮した」	
668	商頌・那	簡簡	かんかん	原詩：鼓を叩く音。（筆者訳）	
669		淵淵	えんえん	奥深く広いさま。；原詩：鼓の音。（筆者訳）	仮名草子・ぬればとけ〔1671〕序「天はくうくうゑんゑんと、まどかにしてすみわたる、此平金（ひやうきん）がこきやうなり」
670		嚶嚶	けいけい	①声のせわしいさま。②声がやわらいでいるさま。③声のかすかなさま。（新選漢和辞典Web版）；原詩：笛を吹く音。（筆者訳）	③「残レ声蟬嚶嚶（こえをのこしてせみけいけいたり）」（秋おそくまで声を残して鳴く蟬は、いかにも弱々しくかすかな声である。）〈橘在列（たちばなのありつら）・廻文詩〉（新選漢和辞典Web版）
671		穆穆	ぼくぼく	①むつまじいさま。なごやかで親しいさま。②うやうやしいさま。敬いつつしむさま。③ 美しく威儀のあるさま 。④静かなさま。	③懐風藻〔751〕元日〈藤原史〉「濟々周行士、穆々我朝人」
672	商頌・烈祖	嗟嗟	ああ	①感嘆して発する声。②嘆き悲しむ声。③海中の怪物の鳴く声。（新選漢和辞典Web版）	
673		鶻鶻	しょうしょう	玉や金属がぶつかり発するさわやかな音の形容。また、和らぐさま。＝瑒瑒・鎗鎗・鏘鏘。（新選漢和辞典Web版）	
674		穰穰①	じょうじょう	① 穀物が豊かにみゆるさま 。②豊かなさま。多いさま。多くて盛んなさま。	①最暗黒之東京〔1893〕〈松原岩五郎〉九「蒼々たる故郷の山嶽、穰々（ジャウジャウ）たる田間の沃野を最後の楽園として」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
675 商頌・玄鳥	芒芒	ぼうぼう	①広々としてはるかなるさま。特に、水面が遠く広がる湖や海のさまについていう。②見たようすがぼんやりとしてはいはっきりとしないさま。かすかなさま。③風や波の音などの激しいさま。④草や髪などが多く乱雑に生えているさま。苞苞。⑤物事に対する気構えや考え方がぼんやりするさま。ぼうっとしているさま。茫然。	①菅家文章〔900頃〕二・仲春積奠、聴講左伝、賦懐遠以德「懐来惣作懐中物、四海茫茫尚一家」；太平記〔14C後〕二四・依山門嗽訴公卿會議事「鴨河の水漲出逆浪岸を浸し茫々（パウパウ）たり」；国会論〔1888〕〈中江兆民〉叙「要するに茫々沙漠中の一小金塊たるに過ぎざるのみ」
676	祁祁②	きき	なし。①静かでゆったりしたさま。②多いさま。（新選漢和辞典Web版）	
677 商頌・長発	芒芒	ぼうぼう	①広々としてはるかなるさま。特に、水面が遠く広がる湖や海のさまについていう。②見たようすがぼんやりとしてはいはっきりとしないさま。かすかなさま。③風や波の音などの激しいさま。④草や髪などが多く乱雑に生えているさま。苞苞。⑤物事に対する気構えや考え方がぼんやりするさま。ぼうっとしているさま。茫然。	①菅家文章〔900頃〕二・仲春積奠、聴講左伝、賦懐遠以德「懐来惣作懐中物、四海茫茫尚一家」；太平記〔14C後〕二四・依山門嗽訴公卿會議事「鴨河の水漲出逆浪岸を浸し茫々（パウパウ）たり」；国会論〔1888〕〈中江兆民〉叙「要するに茫々沙漠中の一小金塊たるに過ぎざるのみ」
678	烈烈	れつれつ	激しいさま。勢いが激しくさかんなさま。；①寒さや性質の激しいさま。②勇ましいさま。③山の高いさま。④水や風や火の盛んなさま。盛大なさま。⑤（新選漢和辞典Web版）；かがやかに。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p313訳	経国集〔827〕一・重陽節神泉苑賦秋可哀応制（菅原清公）「望朝露之団々、聴夕風之烈々」；戦陣訓〔1941〕一・二「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ断乎之を撃砕すべし」
679	遲遲②	ちち	①物事の進み方がおそく、ゆったりしているさま。のろのろして遅いさま。②一日がゆったりとのどかで長いさま。春の日についていう。；①ゆったりとおちついたさま。②ゆっくり行くさま。③のどかなさま。日長のようなさま。④事のはかどらないさま。⑤おそいさま。時間のたたないさま。（新選漢和辞典Web版）	②万葉集〔8C後〕一九・四二九二・左注「春日遅々鶴鳴正啼」；梁塵秘抄口伝集〔12C後〕一〇「ちちたる春の日は、枝に開け庭に散る花を見」
680	優優	ゆうゆう	①みやびやかなさま。しとやかなさま。②ゆったりとしたさま。悠然としたさま。	②懐風藻〔751〕侍宴（山前王）「優優沐恩者、誰不仰芳塵」；狂歌・銀葉夷歌集〔1679〕一「優々と日もながしりに立春のととする方はしめの内哉」；義血侠血〔1894〕（泉鏡花）四「馬は群の蠅と虻の中に優々（イウイウ）と水飲み」
681	烈烈	れつれつ	激しいさま。勢いが激しくさかんなさま。；①寒さや性質の激しいさま。②勇ましいさま。③山の高いさま。④水や風や火の盛んなさま。盛大なさま。⑤（新選漢和辞典Web版）	経国集〔827〕一・重陽節神泉苑賦秋可哀応制（菅原清公）「望朝露之団々、聴夕風之烈々」；戦陣訓〔1941〕一・二「苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ断乎之を撃砕すべし」
682 商頌・殷武	翼翼①	よくよく	①物事のさかんなさま。多いさま。②整っているさま。美しいさま。③敬いつつしむさま。また、びくびくするさま。；おごそかに。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p315訳	①本朝文粹〔1060頃〕一・風中琴賦（紀長谷雄）「翼翼洋洋、悪乎在而不応」
683	赫赫②	かっかく	①光り輝くさま。赤く照り輝くさま。②勢威、功績、声望などがりっぱで目立つさま。	②翰林葫蘆集〔1518頃〕一二・悦岩忻公大禪定門活下火燭「赫赫威名奉將軍、塞垣草木也忻々」；歩兵操典〔1928〕綱領「赫赫たる伝統を有する國軍は」

出典	単なる畳音	読み方	意味（『日本国語大辞典』）	日本文学作品における使用例
684	濯濯①	たくたく	①つややかなさま。美しい光沢を放っているさま。②楽しみ遊ぶさま。③山野の荒廃したさま。草や木のないさま。はげているさま。	杏陰集〔1722頃か〕春月勝秋月 「濯濯深粧柳、溶溶淡白梨」
685	丸丸	?	すくすくと生い茂ること。目加田誠（1960）『詩経・楚辞』p316注釈十一	

付表 8 : 『萬葉集』におけるオノマトペ

延べ語数	異なり語数	読み下し	原文	所在	頻度
1	一	ああ	嗟乎	卷十七・3972	1
2	二	あさらか	浅	卷十二・2966	2
3		あさらか	浅	卷十二・2970	
4	三	あやにあやに	安也尔阿夜尔	卷十四・3497	1
5	四	ありあり	在有	卷十二・3113	1
6	五	いい	依依	卷十七・3966	1
7	六	うつらうつら	宇都良宇都良	卷二十・4449	1
8	七	うらうら	宇良宇良	卷十九・4292	1
9	八	さゑさゑ	佐恵佐恵	卷十四・3481	1
10	九	おとどろ	音杼呂	卷十一・2805	1
11	十	おぼろか	於煩呂加	卷二十・4466	1
12	十一	ぎらぎらしき	端正	卷八・1738	1
13	十三	くれくれ	久礼久礼	卷五・854	2
14		くれくれ	久礼久礼	卷十三・3237	
15	十四	くわいぜん	快然	卷五・814	1
16	十五	けうけう	皎皎	卷十五・3668	1
17	十六	こご	古胡	卷十六・3880	1

18	十七	こごし	許其志	卷十七・ 4003	1
19	十八	さや	清	卷一・15	19
20		さや	清	卷二・133	
21		さや	清	卷二・135	
22		さや	清	卷七・1074	
23		さや	清	卷七・1159	
24		さや	清	卷八・1724	
25		さや	清	卷十一・ 2464	
26		さや	佐夜	卷十四・ 3402	
27		さや	佐夜	卷二十・ 4423	
28		さや	佐夜	卷二十・ 4434	
29		さや (けくは)	清	卷十二・ 3007	
30		さやか	清	卷一・79	
31		さやか	清	卷十・2225	
32		さやか	清	卷十二・ 2855	
33		さやか	佐夜可	卷二十・ 4424	
34		さやか	左夜加	卷二十・ 4474	
35		さやけし	清潔之	卷一・61	
36		さやに	清	卷七・1082	
37		さやに	清	卷九・1753	
38		十九	さらさら	更更	
39	さらさら		更更	卷十二・ 2870	
40	さらさら		佐良左良	卷十四・ 3373	

41	二十	しく	敷	卷十一・ 2457	2
42		しく	布	卷十一・ 2735	
43	二十一	しくしく	敷布	卷二・206	21
44		しくしく	敷布	卷四・698	
45		しくしく	敷布	卷六・931	
46		しくしく	布敷	卷七・1206	
47		しくしく	敷布	卷七・1236	
48		しくしく	敷布	卷八・1440	
49		しくしく	敷布	卷八・1659	
50		しくしく	敷布	卷十・2234	
51		しくしく	布布	卷十一・ 2427	
52		しくしく	敷敷	卷十一・ 2437	
53		しくしく	益益	卷十一・ 2456	
54		しくしく	敷及	卷十一・ 2552	
55		しくしく	数	卷十二・ 3026	
56		しくしく	敷布	卷十二・ 3200	
57		しくしく	敷布	卷十三・ 3243	
58		しくしく	数数	卷十三・ 3256	
59		しくしく	思久思久	卷十七・ 3974	
60		しくしく	志苦思苦	卷十七・ 3989	
61		しくしく	及及	卷十九・ 4187	

62		しくしく	之久之久	卷二十・ 4411	
63		しくしく	之久之久	卷二十・ 4476	
64	二十二	しこり	思許理	卷十二・ 2870	1
65	二十三	しじ	四時	卷六・907	3
66		しじ	思自	卷六・920	
67		しじ	密	卷九・1790	
68	二十四	しのに	思努尔	卷三・266	1
69	二十五	しなの	之努努	卷十・1831	2
70		しなの	小竹野	卷十・1977	
71	二十六	しみみ	思美弥	卷三・460	6
72		しみみ	思美三	卷十・2124	
73		しみみ	四美三	卷十一・ 2529	
74		しみみ	四美見	卷十一・ 2748	
75		しみみ	繁	卷十二・ 3062	
76		しみみ	志美弥	卷十三・ 3324	
77	二十七	しやくしやく	灼灼	卷十六・ 3835	2
78		しやくしやく	灼灼	卷十七・ 3966	
79	二十八	せうえう	逍遥	卷五・852	2
80		せうえう	逍遥	卷十七・ 3972	
81	二十九	そほ	曾保	卷十六・ 3883	1
82	三十	そよ	曾与	卷二十・ 4398	1

83	三十一	たうぜん	陶然	卷十八・ 4132	1
84	三十二	たうたう	濤濤	卷十六・ 3835	1
85	三十三	たかたか	高高	卷四・758	8
86		たかたか	高高	卷十一・ 2804	
87		たかたか	高高	卷十二・ 2997	
88		たかたか	高高	卷十二・ 3005	
89		たかたか	高高	卷十二・ 3220	
90		たかたか	高高	卷十三・ 3337	
91		たかたか	高高	卷十五・ 3692	
92		たかたか	高高	卷十八・ 4107	
93	三十四	たづたづ	多豆多頭	卷四・709	2
94		たづたづし	多豆多都之	卷十八・ 4062	
95	三十五	たゆら	多由良	卷十四・ 3392	1
96	三十六	たよら	多欲良	卷十四・ 3368	1
97	三十七	たわたわ	多和多和	卷十・2315	1
98	三十八	たんぜん	淡然	卷五・814	1
99	三十九	ちち	遲遲	卷十九・ 4292	1
100	四十	つばら	委曲	卷一・17	1
101	四十一	つばらか	都婆良可	卷十九・ 4152	1
102	四十二	つばらつばら	曲曲	卷三・333	2

103		つばらつばら	都波良都婆良	卷十八・4065	
104	四十三	つらつら	都良都良	卷一・54	3
105		つらつら	都良都良	卷一・56	
106		つらつら	都良都良	卷二十・4481	
107	四十四	つらら	都良良	卷十五・3627	1
108	四十五	とくとく	急急	卷十・2108	1
109	四十六	とど	等杼	卷十四・3467	1
110	四十七	とどろ	響動	卷十一・2717	6
111		とどろ	動響	卷十一・2840	
112		とどろ	動動	卷十三・3232	
113		とどろ	動動	卷十三・3233	
114		とどろ	等杼呂	卷十四・3392	
115		とどろ	登杼呂	卷十五・3617	
116	四十八	とをを	十緒	卷十・1896	3
117		とをを	等乎乎	卷十・2315	
118		とをを	十遠	卷十三・3223	
119	四十九	なかなか	中中	卷九・1792	1
120	五十	ながながし	長永	卷十一・2802	1
121	五十一	なほなほ	奈保奈保	卷五・801	2
122		なほなほ	奈保那保	卷十四・3364	
123	五十二	なみなみ	凡浪	卷十一・2471	2

124		なみなみ	波波	卷十六・ 3798	
125	五十三	にこよか	尔故余漢	卷十一・ 2762	2
126		にこよか	尔古余可	卷二十・ 4309	
127	五十四	にふぶ	二布夫	卷十六・ 3817	2
128		にふぶ	尔不夫	卷十八・ 4116	
129	五十五	ぬるぬる	奴流奴流	卷十四・ 3378	2
130		ぬるぬる	奴流奴留	卷十四・ 3501	
131	五十六	ねもころごろ	惻隱	卷十二・ 2857	1
132	五十七	のど	能杼	卷二・197	2
133		のど	和	卷十三・ 3339	
134	五十八	はつはつ	波都波都	卷四・701	5
135		はつはつ	小端	卷七・1306	
136		はつはつ	小端	卷十一・ 2411	
137		はつはつ	端端	卷十一・ 2461	
138		はつはつ	波都波都	卷十四・ 3537	
139	五十九	はらら	波良良	卷二十・ 4360	1
140	六十	はろはろ	波漏波漏	卷五・866	6
141		はろはろ	遥遥	卷十二・ 3171	
142		はろはろ	波呂波呂	卷十五・ 3588	

143		はろはろ	遥遥	卷十九・ 4207	
144		はろはろ	波呂波呂	卷二十・ 4408	
145		はろばろ	波呂婆呂	卷二十・ 4398	
146	六十一	ひし	比師	卷十三・ 3270	1
147	六十二	びしびし	毗之毗之	卷五・892	1
148	六十三	ふつま	布都麻	卷十八・ 4081	1
149	六十四	ほとほと	殆	卷八・1565	6
150		ほとほと	保等穂跡	卷十・1979	
151		ほとほと	保等保等	卷十五・ 3772	
152		ほとほと	殆	卷十七・ 3962	
153		ほとほとしく	殆	卷七・1403	
154		ほとほとに	殆	卷三・331	
155	六十五	ほどろほどろ	保杼呂保杼 呂	卷八・1639	1
156	六十六	ほのか	髣髴	卷二・210	6
157		ほのか	髣髴	卷八・1526	
158		ほのか	髣髴	卷十二・ 3037	
159		ほのか	髣髴	卷十二・ 3085	
160		ほのか	髣髴	卷十三・ 3344	
161		ほのか	髣髴	卷七・1152	
162	六十七	ほろ	富呂	卷十九・ 4235	1
163	六十八	めいてい	酪酏	卷十七・ 3972	1

164	六十九	やくやく	漸漸	卷五・904	2
165		やくやく	漸漸	卷七・1205	
166	七十	ゆくゆく	由久遊久	卷二・130	2
167		ゆくゆく	由久遊久	卷二・135	
168	七十一	ゆくらか	湯椀干	卷十二・ 3174	1
169	七十二	ゆくらゆくら	行莫行莫	卷十三・ 3272	5
170		ゆくらゆくら	往良行羅	卷十三・ 3274	
171		ゆくらゆくら	行良行良	卷十三・ 3329	
172		ゆくらゆくら	由久良由久 良	卷十七・ 3962	
173		ゆくらゆくら	由久良由久 良	卷十九・ 4220	
174	七十三	ゆた	由多	卷十一・ 2367	3
175		ゆた	由多	卷十二・ 2867	
176		ゆた	由多	卷十四・ 3503	
177	七十四	ゆたにたゆたに	湯谷絶谷	卷七・1352	1
178	七十五	ゆなゆな	由奈由奈	卷九・1740	1
179	七十六	ゆら	由良	卷十・2065	3
180		ゆら	由良	卷十三・ 3223	
181		ゆら	由良	卷十九・ 4154	
182	七十七	ゆらら	湯良羅	卷十三・ 3243	1
183	七十八	ゑらゑら	恵良恵良	卷十九・ 4266	1
184	七十九	りんらう	琳琅	卷十七・ 3973	1

185	八十	れいてい	愍徠	卷十七・ 3976	1
186	八十一	をさをさ	乎佐乎左	卷十四・ 3529	1
187	八十二	をを	唯唯	卷五・852	2
188		をを	唯唯	卷十六・ 3791	
189	八十三	ををし	雄雄志	卷一・13	1

付表9：「貝の火」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鎮訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	76-2	アッと	啊	大叫一声	“啊”的一声惨叫	啊了一声
2	52-7	うっとり	出神儿	出神	出神地	着迷地
3	63-11	うっとり	出了神	出了神	呆呆出神	陶醉地
4	70-8	うんと	更	更	更	なし
5	75-15	オホン、オホン	咳……咳……	用力地（咳了几声）	（咳嗽两声）	假（咳着）
6	70-3	カアんと	余音袅袅	丁	なし	なし
7	51-5	ガタガタ	浑身打着哆嗦	不住地	浑身不停地打着哆嗦	不住地
8	76-4a	カタッと	“当！”地一声	卡塔一声	“啪”的一声	啪的一声
9	75-17	カチッと	一下子	一声清脆的声响	“轰”一声巨响	なし
10	56-11	カン、カン、カン カエコ、カンコカ ンコカン	叮叮当……叮叮 当……	丁、丁、当当丁、丁 当丁当	叮叮当、叮叮当……	丁零丁零地
11	77-1	カン、カン、カン カエコカンコカン コカン	叮——当，叮—— 当——，叮—— 当……	当，当，当当当 丁……	叮叮当……叮叮 当……叮叮当……	丁零丁零地
12	70-2	カンカンカンカエ コカンコカンコカ ン	叮当、叮当……叮 当……	丁、丁、当当丁、丁 当丁当	なし	丁零丁零
13	61-16	きゃっきゃっ	高高兴兴地	七嘴八舌地	なし	吱吱吱地
14	50-13	ぎょっと	猛地惊住	心头一紧	大吃一惊	吓得
15	49-2	きらきら	亮光闪闪	闪闪发亮	闪亮	闪烁着晶莹的光
16	55-7	きらきら	闪光耀眼的	なし	耀眼的	闪闪的
17	76-18	きらきら	闪闪发光	闪闪发亮	闪闪发光	闪闪发光
18	59-14	くるくる	（转了）好几个圈 儿）	なし	なし	来回（转了）几圈
19	52-2	ぐるぐる	真晕	好晕	晕	好晕
20	68-1	くるくると	几个转儿	なし	なし	团团
21	68-4	ぐんぐん	又拉又拽地	なし	なし	用力
22	63-3	こそこそ	一个一个（溜走）	悄悄地	一个接一个（溜走）	偷偷地
23	73-11a	こはこは	战战兢兢地	小心翼翼地	提心吊胆地	提心吊胆地
24	49-11a	こぼんこぼんと	小河潺潺，水流缓 缓	轰隆（作响）	潺潺	なし
25	55-2	コロリと	一下	なし	翻身	一下子

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鉄訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
26	50-9	しっかり	使劲儿	紧紧地	使劲	牢牢地
27	50-17	しっかり	坚持	绝对不会把 (前脚) 松开的	坚持	绝不会撒手
28	67-18	シッシッ	嘘……嘘……	嘘嘘地	走！走！	嘘嘘地
29	50-7	じっと	紧紧盯着	焦虑地	目不转睛地	なし
30	62-17	じっと	悄悄地	なし	なし	盯着
31	69-14b	じっと	なし	なし	なし	一动不动地
32	73-3	じっと	直盯盯地	盯着不放	なし	一动不动地
33	76-14	じっと	沉 (思)	静静地	沉 (思)	一动不动地
34	69-14a	ジメジメ	让人讨厌的 (雾 气)	湿漉漉的 (雾气)	(笼罩在雾气中)	雾气 (源源不断地)
35	49-6	しゃりんしゃり んと	一丝颤微微的美妙 的小曲儿	丁丁的声响	丁零零的动听声响	沙沙的声响
36	63-15	しゃりんしゃり んと	なし	丁丁地	载歌载舞	丁零丁零地
37	75-11	しょんぼり	垂头丧气地	垂头丧气地	垂头丧气地	无精打采地
38	76-7	じろじろ	咕噜咕噜转着大眼 珠	四处 (张望)	转着眼珠 (扫视)	四处 (打量着)
39	64-15	しんと	一片沉默	静下来	静悄悄的	なし
40	52-4	すっかり	なし	完全	なし	完全
41	50-13	すっかり	全	漂亮的	なし	完全
42	56-6	すっかり	(洗得) 干干净净	好好地	(洗得) 干干净净	(洗) 干净
43	61-18	すっかり	(眉飞色舞地)	(满心欢喜)	(喜出望外)	彻底
44	71-4	すっかり	なし	(架) 好	なし	全都
45	76-4b	すっかり	なし	(一摸一样)	なし	なし
46	57-1	せらせら	(鼻子) 发酸	阻塞	(鼻子) 发酸	抽着 (鼻子)
47	54-4	そっと	轻手轻脚地	轻轻地	轻手轻脚地	小心地
48	63-7	そっと	轻轻	轻轻	轻轻	悄悄地
49	73-11b	そっと	なし	なし	なし	悄悄地
50	51-8	ぞっと	吓了一跳	吓得	吓了一跳	吓了一跳
51	75-10	ぞろぞろ	一个跟一个	一直接着一只	一只只	一个接一个地
52	61-11	ちよるちよる	なし	探头探脑	蹦了出来	刺溜刺溜地

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鉄訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
53	53-6	ちらちら	烧得正旺	燃着閃耀的火花	なし	跳动燃烧着
54	69-15	ちらっと	一动	なし	一动	なし
55	54-2	ちらりちらり	熊熊燃烧的	熊熊地(燃起)	熊熊燃烧的(火焰)	跳动燃烧的
56	72-1	どきどき	吓得魂飞魄散	扑通扑通地跳个不停	吓坏的	怦怦地紧张的跳个不停
57	67-11	とんとん	なし	踩来又踩去	なし	なし
58	50-18	どンドン	(冲出)很远	越(冲)越(远)	なし	慢慢地
59	67-14	どンドン	踩着(脚)	一再地	なし	跺踩(脚)
60	50-15	にこにこ	笑嘻嘻地	笑了笑	笑着	微笑着
61	75-12	のっそり	なし	缓慢地	なし	なし
62	61-9	ばたばた	踩着(脚)	不住地踩(脚)	凶巴巴地踩(脚)	吧嗒吧嗒地点着(脚)
63	71-8	ばたばた	扑楞扑楞着	乱窜着	扑棱着翅膀跳来跳去	扑棱扑棱地扇动着翅膀
64	50-5b	ばたばたばたばた	吧嗒吧嗒	拼命(挣扎着)	なし	扑棱着翅膀
65	65-8	パチパチ	眨巴着(眼睛)	眨眨(眼)	不住地眨着(眼睛)	眨巴着(眼睛)
66	76-1	パチパチパチッと	噼啪噼啪	噼啪的	噼里啪啦地	啪嚓啪嚓啪嚓
67	52-3	バツァリ	扑通一声	整个(倒下了)	“砰”的一声	直接(倒了下去)
68	68-11	パツと	转瞬	一下子	刹那间	忽然
69	56-10	バラバラと	纷纷(滚落)	一一(吹落)	纷纷(滚落)	扑簌簌地
70	49-5b	パリパリ	够气派	香脆爽口	又美又香	开得很灿烂
71	49-11b	ピカピカ	(放出)璀璨的光	耀眼夺目	闪闪发光	闪闪发光
72	60-13	びくびく	战战兢兢地	战战兢兢地	战战兢兢地	战战兢兢地
73	76-3	ピチピチピチと	劈劈啪啪	扑哧扑哧声	なし	啪嚓啪嚓啪嚓地
74	51-2	ピチャピチャ	噼噼叭叭	忽闪着	噼噼啪啪地	一下一下地
75	50-10	びっくり	惊恐万状的	受了惊吓	惊恐	吓了一跳
76	51-13	びっくり	吃了一惊	吓了一跳	吃惊	吓了一跳
77	57-7	びっくり	吓得	吓得	吓得	惊(跳)
78	58-15	びっくり	愣住	吓得	大吃一惊	吓了一跳
79	62-12	びっくり	惊讶地	なし	惊动	吓了一跳
80	68-8	びっくり	大吃一惊	吓坏	惊讶无比	惊呆了
81	69-12	びっくり	吓得	吓得	吓得	害怕极了

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鉄訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
82	70-7	びっくり	吓坏了	吓了一跳	吓坏了	吓死
83	72-18	びっくり	なし	吓了一跳	なし	吓了一跳
84	73-14	びっくり	惊(醒)	吓得	惊(醒)	吓了一跳
85	62-10	ひっそりと	死一般寂静	一片寂静	寂静无声	沉寂了下来
86	51-9	ヒュウと	なし	なし	なし	なし
87	76-5	ヒューと	“嗖”地一声	嗖的一声	嗖的一声	嗖的一声
88	61-12	びよこびよこ	(恭恭敬敬)	拼命	(毕恭毕敬地)	纷纷
89	58-11	びよんと	なし	跳着	快速地	蹦蹦跳跳地
90	49-7	びよんびよん	手舞足蹈地	なし	欢快地	跳来跳去
91	56-12	びよんびよん	一蹦一跳地	なし	蹦蹦跳跳	一蹦一跳地
92	49-4	ぴんぴん	なし	不停上下(蹦跳)	蹦蹦跳跳地	蹦蹦跳跳
93	72-4	フッフッと	なし	呼呼地	なし	なし
94	51-10	ぶるぶる	直(颤抖)	なし	浑身发抖	浑身颤抖着
95	58-13	ぶるぶる	一个劲儿哆嗦	不住地(颤抖着)	直哆嗦	浑身打战
96	67-12	ぶるぶる	瑟瑟发抖	なし	瑟瑟发抖	哆哆嗦嗦地
97	50-4a	ブルルル、パイ、パイ、パイ	一阵尖厉的叫声	噗噜噜噜、啵、啵、啵	唧唧唧、噗噗噗	扑噜噜噜——啵——啵——啵——啵
98	50-4b	ブルルル、パイ、パイ、パイ	一阵尖厉的叫声	噗噜噜噜、啵、啵、啵……	唧唧唧、噗噗噗	扑噜噜噜——啵——啵——啵——啵
99	52-8	ブルルルッと	なし	噗噜噜	なし	なし
100	49-5a	ふん	なし	嗯——	啊	哇
101	60-4	ふん	なし	嗯——	唉	嗯
102	49-8	ほくほく	得意洋洋地	喜形于色地	得意洋洋地	掩饰不住喜悦
103	74-8	ポシャポシャ	雾幕低垂	不断地	雾气浓重	雾气若隐若现
104	76-9	ホッホ	なし	呵呵	嘿嘿	吼吼
105	76-10	ホッホ	なし	呵呵	嘿嘿	吼吼
106	56-17	ボロボロ	热泪直流	抽抽嗒嗒地	なし	なし
107	57-5	ぼんやり	呆愣愣地	呆(立)	默默地	迷迷糊糊地
108	66-8	むちゃくちゃ	(踩个)粉碎	(踩个)稀碎	踩成了(碎末)	不管三七二十一
109	50-12	もくもく	象熔岩一样	なし	なし	なし

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鎮訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
110	60-6	もくもく	蠕动	冒了出来	蠕动	动了起来
111	64-4	もくもく	松软香喷	圆滚滚的	软绵绵、香喷喷的	松松软软的
112	50-5a	もじゃもじゃ	(黒) 茸茸的	一团毛茸茸	毛茸茸的	乱蓬蓬的
113	51-16	もじゃもじゃ	(黒) 茸茸的	毛茸茸的	毛茸茸的	乱蓬蓬的
114	51-18	もじゃもじゃ	黑茸茸的	毛茸茸的	毛茸茸的	乱蓬蓬的
115	51-6	よろよろ	迈不开步子	なし	踉踉跄跄	摇摇晃晃的
116	74-16	よろよろ	一拐一拐	なし	踉跄了几步	东倒西歪的
117	59-3	わくわく	心跳	雀跃不已	心花怒放	兴奋得不行
118	66-9	わっと	哇地一声	哇地	“哇”的一声	哇地

付表10：「どんぐりと山猫」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	騰軍訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
1	18-2	うるうる	(巨石) 突兀	像刚从地下隆起似的	像从地下破土而出似的	像刚从土里头蹦出来的
2	17-7	がさがさ	斑斑	なし	低劣の墨汁脱落后	低劣の墨迹也斑驳脱落
3	24-16	がやがやがやがや	(你一嘴我一嘴) 吵吵嚷嚷的	哇啦哇啦哇啦哇啦地 (吵个不停)	嗡嗡嗡、嗡嗡嗡	你一言我一语…… 叽叽喳喳
4	25-8	がやがやがやがや	叽叽喳喳、叽叽喳喳	哇啦哇啦、哇啦哇啦	叽里呱啦、嘀嘀咕咕、吵吵闹闹……	なし
5	25-13	がやがやがやがや	叽叽喳喳、叽叽喳喳	哇啦哇啦哇啦哇啦	叽里呱啦、嘀嘀咕咕、吵吵闹闹……	叽叽喳喳
6	23-18a	がらんがらんがらんがらんと	当啷当啷地	当啷当啷当啷当啷地	叮叮当地	丁零丁零地
7	23-18b	がらんがらんがらんがらんと	当啷当啷地	清脆地 (回响着)	なし	なし
8	21-3	ぎよつと	不禁一怔	暗吃一惊	觉得奇怪	吃了一惊
9	23-17a	ぎらぎら	金光 (闪闪的)	亮晶晶的	(闪) 光的	油光发亮的
10	28-8	ぐらぐら	飘过	滚滚 (升腾)	なし	なし
11	18-15	ごうごう	哗哗地	哗啦哗啦地	轰隆隆的 (流水)	なし
12	19-6	こどつてこどつてこと	咚咚哐哐地	叮叮咚咚地	“叮叮咚咚地”	咚咚咚地
13	19-14	こどつてこどつてこと	咚咚哐哐地	叮叮咚咚地	なし	なし
14	18-5a	ざあつと	(一阵清风) 袭来	清新的 (风)	迎面吹拂	迎面扑来
15	23-15	ざつとざつと	唰唰地	なし	なし	咔嚓咔嚓
16	20-10	ざわざわ	沙沙	(风吹草) 动	沙沙	沙沙
17	26-9a	しいんと	一个也不做声	一下子安静下来	静静地	顿时静默了
18	26-9b	しいんと	鸦雀无声	なし	なし	なし
19	23-6b	しゃんと	笔直地 (站着)	なし	なし	なし
20	23-5	しゅつと	哧的一声	哧地一下	“嚓”	刺啦一声
21	18-1	すつかり	大 (亮)	大 (亮)	(天光) 大 (白)	大 (亮了)
22	25-16b	そつと	悄悄地	轻声	低声	悄悄地
23	20-9b	ちくつと	刺 (眼)	一阵刺痛	光芒刺 (眼)	刺 (眼)
24	20-4	ちらつと	(闪现出) 一道	(闪动了) 一下	微微	(闪了闪)
25	22-8	どうと	呼呼的一阵 (风响)	一阵狂 (风) 刮 (来)	一阵 (旋风)	一阵 (狂风)
26	22-2	にたにたにたにた	嘿嘿地狞 (笑)	傻笑着	なし	なし

	所在	原文	騰軍訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
27	17-10	にやあと	“喵、喵”	喵喵叫的	喵喵 (脸)	喵喵的 (脸)
28	21-1	にやつと	冷 (笑)	抿嘴一 (笑)	なし	なし
29	21-5	にやにや	冷笑	嬉皮笑脸地	大声笑道	笑意更深了
30	21-11	はあはあ	粗粗地 (喘着气)	直喘粗气	呼吸急促	呼吸声变粗了
31	28-1	ばたばた	拍打着	哗啦哗啦	(迎风) 摆动	(随风) 飞舞着
32	23-9a	パチパチ	劈劈啪啪	劈劈啪啪的	噼啪声	噼里啪啦
33	27-3	ぱちぱち	眨巴眨巴	眨了眨 (眼)	不停地眨 (眼)	转了转 (眼睛)
34	20-9a	ぱつと	突然	突然	眼前一 (亮)	豁然 (开朗)
35	18-5b	ばらばらと	噼里啪啦地	噼里啪啦地	哗啦啦	啪啦啪啦地
36	18-12	ばらばらと	噼里啪啦地	なし	哗啦啦地	啪啦啪啦地
37	18-18	ぴーぴー	嘀里嘀里地	嗒嗒地	嗒嗒地	“嘟——嘟——”地
38	23-10	ぴかぴか	(闪着) 金光	(闪闪发亮的) 金色 (圆球)	(闪着) 金光的	金光 (闪闪的)
39	24-5	ぴかぴか	金光闪闪	油光闪亮	闪着金光	晶莹闪烁
40	20-15	びくびく	不停地	不住地抽 (动)	上下 (滚动着)	不断地 (抽搐着)
41	20-14	びつくり	吓了一跳	不禁吃惊地	猛地吓了一跳	不禁大吃一惊
42	23-3	びつくり	吓了一跳	吃了一惊	吓了一跳	吓了一跳
43	23-9b	びつくり	吃惊地	惊奇地	惊讶地	吓了一跳
44	28-7	ひゆう、ぱちつ	嗖- 啪	嗖！啪！	驾！驾！驾！	嗖！嗖！嗖！
45	24-4	ひゆうぱちつ、ひゆう、ぱちつと	啪、啪	嗖、啪、嗖、啪地 (甩了)	“啪啪啪” (猛甩)	嗖嗖地
46	26-12	ひゆうぱちつ、ひゆうぱちつ、ひゆうひゆうぱちつと	啪啪啪地	嗖！啪！嗖！啪！嗖！嗖！啪！……	“啪啪啪”地 (连甩)	嗖嗖嗖地
47	25-2	ひゆうぱちつと	啪的一声	嗖、啪地	“啪”地	嗖地
48	25-11a	ひゆうぱちつと	啪地	嗖、啪地	“啪”地	嗖地
49	25-16a	ひゆうぱちつと	啪地	嗖、啪地	“啪”地	嗖地
50	22-12	びよこつと	微微地	敏捷地	なし	(点了点头)
51	19-15	びよんと	轻轻地	窜来窜去	蹦蹦跳跳的	蹦蹦跳跳的
52	22-15	ぴんと	(捋) 直	(绷) 直 (了)	(捻) 直	竖了起来
53	25-3	ぴんと	(捋得) 笔直	(绷) 直 (了)	なし	なし
54	25-11b	ぴんと	(捋) 直了	(捋) 直 (了)	なし	なし

	所在	原文	騰軍訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
55	23-6a	ふうと	浓浓地	(吐了) 一口	(吐出) 一口	(喷出) 一口
56	20-8	ほとほと	吧嗒吧嗒地	汗流浹背地	大汗淋漓	大汗淋漓地
57	23-7	ぼるぼる	吧嗒吧嗒地	扑簌扑簌	なし	滚滚地
58	22-18	ゆつくり	好好(休息)	(休息) 一下	(歇) 会儿	好好(休息一下)
59	23-12	わあわあわあ	吵吵嚷嚷的	哇啦哇啦地(吵)	哇哇地(叫嚷着)	哇哇(乱叫)
60	23-17b	わあわあわあ	吵吵嚷嚷的	哇啦哇啦地(吵个不停)	哇哇地(吵闹着)	叽叽喳喳地(争吵着)

付表 1 1 : 「狼森と箕森、盗森」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	36-4	あつはあつはと	哈哈 (大笑)	哈哈 (大笑着)	开怀大笑	哈哈 (笑着)
2	34-7	うんと	不少	好多	许多	很多
3	36-15	がっかり	灰心丧气	垂头丧气	垂头丧气的	失望极了
4	39-8a	がやがや	熙熙攘攘地	熙熙攘攘地	なし	熙熙攘攘地
5	34-3	きよるきよる	(犹豫了一会)	东张西望	左张又望	左看看右看看
6	30-1	くつきり	清清楚楚地	鲜明地	清晰地	清晰地
7	33-7	くるくるくる	(围着火转着圈子)	(围着火堆)	(绕着火焰)	(围绕着火堆转着圈)
8	36-2	くると	猛地一 (转身)	なし	急忙 (转身)	なし
9	33-14	ころころばちばち	(栗子) 圆圆, 噼啪噼啪	(栗子) 骨碌碌, 噼啪	(栗子) 咕噜噜, 噼噼	(栗子) 啪啪地烧烤着
10	33-15	ころころばちばち	(栗子) 甜甜, 噼啪噼啪	(栗子) 骨碌碌, 噼啪	(栗子) 咕噜噜, 噼噼	(栗子) 啪啪地烧烤着
11	37-18	さつぱり	很 (清廉)	如此 (清廉)	(可见一斑)	なし
12	29-12	さらさら	(发出) 沙沙声	沙沙	沙沙	沙沙
13	34-1	しいんと	なし	静了下来	寂静无声	なし
14	31-15	しんと	不言不语的	一言不发的	沉默无言的	安静地
15	29-6a	ずうつと	很久很久 (以前)	古 (时候)	(很久) 以前	很久很久 (以前)
16	29-4	すつかり	なし	なし	(知道其中的) 原委	(知道) 详情的
17	29-6b	すつかり	全都	一切全都	全部	なし
18	39-12	すつかり	全部	好 (朋友)	十分 (要好)	全都
19	33-3	すつと	(迎面扑来)	(扑鼻而来)	(迎面袭来)	(朝他们袭来)
20	35-3	ぞろぞろ	一个接一个	一个跟着一个	一个紧接一个	一个跟着一个
21	39-8b	ちやんと	好好地	完好无缺地	全	好好地
22	30-15	どしんと	沉甸甸的 (行李)	哐的一声	“咚”一声	なし
23	33-12	どろどろばちばち	(篝火) 熊熊, 噼啪噼啪	(篝火) 熊熊, 噼啪噼啪	(火焰) 熊熊, 呼呼呼	なし
24	33-13	どろどろばちばち	(烈焰) 升腾, 噼啪噼啪	(篝火) 熊熊, 噼啪噼啪	(火焰) 熊熊, 呼呼呼	(火堆) 熊熊地燃烧着

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
25	37-7	にやにや	笑嘻嘻地	笑嘻嘻地	(笑道)	默默地
26	30-3	のつしのつし	一步一个脚印地迈着坚定的步伐	迈着稳健的步伐	步履沉稳	步履沉重地
27	35-13	バアと	嗷嗷	哇哇(乱叫)	da	(大吼)
28	33-5	パチパチ	劈劈啪啪的	噼噼啪啪	噼噼啪啪的	奇怪的
29	38-17	はつきり	清清楚楚地	清脆的	清晰的	清晰
30	32-2	ピカリピカリ	亮光闪闪	闪亮的	锃亮的	なし
31	33-18	びつくり	吃了一惊	吃了一惊	大吃一惊	吓了一大跳
32	37-3	フツと	一下子(笑起来)	扑哧地	(笑道)	扑哧一声
33	31-16	ぽかぽか	啪啪地	啪啪地	“噼啪啪”地	轻轻地
34	34-2	わあと	哇地	哇的一声	“哇”地	“哇”地
35	31-1	わいわい	哼唷、哼唷地	叽叽喳喳	吵吵闹闹地	哇哇地(嚷嚷着)

付表12: 「注文の多い料理店」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	王敏訳 (1980)	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	40-2	かさかさ	沙沙作响的	沙沙声	沙沙地	沙沙作响的	沙沙作响
2	41-12c	かさかさ	哗啦哗啦地	哗啦哗啦地	哗啦哗啦	哗哗	沙沙作响
3	51-2c	かさかさ	哗啦啦地	哗啦哗啦地	哗啦呼啦	哗哗作响	沙沙作响
4	50-17b	がさがさ	稀里哗啦地	撕嚼声	沙沙的声响	沙沙的声音	沙沙声
5	48-12	がたがたがたがた	浑身发抖	咔哒咔哒, 咔哒、 咔哒	哆哆嗦嗦地	发抖	全身哆哆嗦嗦个不停
6	48-14	がたがた	哆哆嗦嗦地	颤抖着	哆嗦着	惊慌失措地	全身哆哆嗦嗦个不停
7	48-10	がたがたがたがた	浑身发抖	咔哒咔哒, 咔哒、 咔哒	哆哆嗦嗦地	浑身颤抖	全身哆哆嗦嗦个不停
8	49-5	がたがたがたがた	吓得如同一堆烂泥	咔哒、咔哒	哆嗦着	浑身抖个不停	哆哆嗦嗦
9	49-6	がたがたがたがた		咔哒、咔哒	哆嗦着	浑身抖个不停	瑟瑟发抖
10	50-13	がたりと	咣当一声	咣当一声	砰地一声	“砰”地	啪的一声
11	44-16b	がたんと	心神不安地	咯噔一声	眶当一声	推(开)	哆嗦着
12	44-8	きちんと	整理好	梳好	梳理整齐	梳好	梳理
13	48-3	ぎよつと	なし	なし	惊愕地	有些不妥	惊悚万分
14	49-3	きよろきよろ	恶狠狠地盯着	咕噜咕噜地	滴溜乱转	滴溜溜地	骨碌碌地(打着转)
15	50-2	くしゃくしゃ	なし	揉皱了的	揉皱了的	被揉皱的	苍白的如同白纸
16	40-6	くるくる	打滚儿(挣扎)	打着滚儿(挣扎)	骨碌碌连(转)	晃晃悠悠地(挣扎转圈)	团团(转)几个圈
17	50-12	くるくる	转来转去	窜来窜去	转了几圈	转了数圈	转来转去
18	49-8	こそこそ	叽咕叽咕	鬼鬼祟祟	窃窃	叽叽咕咕的	窃窃(私语声)
19	46-15	こつそり	偷偷地	偷偷地	偷偷地	偷偷地	偷偷摸摸地
20	41-12d	ごんごん	なし	怒(吼)	咔咔的响声	咔咔地	不住地
21	51-3	ごんごん	なし	怒(吼)	咔咔的响声	轰轰地	随风摇晃着
22	50-17a	ごろごろ	咕噜咕噜	なし	呜-	呜呜呜……	咕噜咕噜
23	41-12b	ざわざわ	沙沙地	刷刷地	沙沙	沙沙	沙沙作响
24	41-17	ざわざわ	なし	刷刷(作响的)	沙沙作响的	沙沙响的	沙沙作响
25	51-2b	ざわざわ	沙沙地	刷刷地	沙沙作响	沙沙	沙沙作响

	所在	原文	王敏訳 (1980)	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
26	51-9	ざわざわ	丛生的杂草	刷刷地	なし	杂(草)	唰唰地
27	41-3	じつと	なし	直町町地	盯着	盯着	盯着
28	40-1a	すつかり	从头到脚	简直就象	俨然是一幅	なし	一身
29	46-8	すつかり	なし	全	好好地	均匀	(涂) 满
30	43-9	ずんずん	なし	迅速地	一直	直向前走	なし
31	40-5	タンタアーンと	砰砰叭叭地	乒乒乓乓	砰砰地	‘砰、砰’地	乒乒地
32	45-15	ちゃんと	开着的	开着	敞开着	开着	贴心地敞开着
33	44-15	どうつと	突然	呼呼地	なし	呼呼地	突然
34	41-12a	どうと	呼呼地	呼呼地	一下子	狂(风) 骤起	(刮起) 一阵大风
35	51-2a	どうと	呼呼地	呼呼地	一下子	寒(风) 凛冽	嗖嗖地
36	40-7	どたつと	扑通一声	扑通	扑通一声	扑通	扑通一声
37	50-14	にやあお、くわあ	咪儿……哇……	嗷……嗷……	喵——嗷——	喵……汪……	喵——嗷——
38	47-12	ばちやばちや	争先恐后地	立刻	哗哗地	なし	赶紧
39	46-4	ばちんと	“叭”的一声	“咣当”一声	咔嚓一下	“啪嚓”一声	なし
40	40-1b	びかびか	锃亮的	锃光发亮	锃亮锃亮的	锃亮的	亮闪闪的
41	44-16a	びつくり	大吃一惊	大吃一惊	打了一个寒战	惊讶异常	大吃一惊
42	51-4	ふうと	なし	汪汪	なし	低(吼着)	呜咽着
43	50-4	ふつつと	似笑似叫	传出一阵说笑声	扑哧扑哧地	嘻嘻的(笑声)	一阵嗤笑声
44	41-18	ふと					
45	50-3	ぶるぶる	吓得屁滚尿流	吓得屁滚尿流, 魂不附体……瑟瑟发抖	吓得魂不附体……浑身发抖	浑身战栗	吓得魂不附体……打着战, 哆哆嗦嗦地
46	50-18	ぶるぶる	赤条条地	打哆嗦	浑身发抖	瑟瑟发抖	瑟瑟发抖
47	45-11	べたべた	昂然	轻手轻脚地	吧嗒吧嗒地	光着脚	光着脚
48	44-14	ぼうつと	模模糊糊地	时隐时现地	なし	透明如薄雾	逐渐变得透明

付表13：「雪渡り」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	王敏訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	134-12	エヘンエヘンと	なし	喀喀地	なし	咳咳地
2	126-8b	かんかん	梆梆	叮叮当	邦邦硬	呼啦啦地飞
3	136-18	カンカン	漫天灿烂阳光	烈日炎炎	阳光灿烂	阳光光灿灿
4	137-5	カンカン	漫天灿烂阳光	烈日炎炎	阳光灿烂	阳光光灿灿
5	137-10	カンカン	漫天灿烂阳光	烈日炎炎	阳光灿烂	阳光光灿灿
6	126-8c	キシリキシリ	吱吱地	咯吱咯吱地	なし	咯吱咯吱地
7	136-6	キック、キック、キック、キック、トン、トン、トン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咚咚、咯吱 咯吱、咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚咚
8	129-15c	キック、キック、キック、キック、トントントン	なし	咯吱咯吱、咯吱咯 吱、噼噼	なし	踢踏踢踏咚咚咚
9	130-6c	キック、キック、キック、キックトントントン	なし	咯吱咯吱、咯吱咯 吱、噼噼	なし	なし
10	129-15a	キック、キック、トントン	咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱、噼噼	跳啊蹦啊、咯吱咯 吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚
11	129-15b	キック、キック、トントン	咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱、噼噼	跳啊蹦啊、咯吱咯 吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚
12	130-6a	キック、キック、トントン	咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱、噼噼	跳啊蹦啊、咯吱咯 吱、咚咚叭	なし
13	130-6b	キック、キック、トントン	咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱、噼噼	跳啊蹦啊、咯吱咯 吱、咚咚叭……	なし
14	137-4	キック、キックトントン、キック、キックトントン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咚咚、咯吱 咯吱咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚咚、踢 踏踢踏咚咚咚
15	125-7	キックキックキック	咯吱咯吱地	咯吱咯吱地	蹦蹦跳跳地	咯吱咯吱地
16	135-12	キックキックキックキックトントントン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咯吱咯吱咚咚 咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚咚
17	136-1	キックキックトントン、キックキック、トントン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咚咚、咯吱 咯吱咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏咚、踢踏咚
18	136-17	キックキックトントン、キックキック、トントン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咚咚、咯吱 咯吱咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚咚、踢 踏踢踏咚咚咚
19	137-9	キックキックトントン、キックキックトントン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咚咚、咯吱 咯吱咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚咚、踢 踏踢踏咚咚咚
20	137-14	キックキックトントン、キックキックトントン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咚咚、咯吱 咯吱咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚咚、踢 踏踢踏咚咚咚
21	129-4	キックキックトントンキックキックトントン	咚叭咚叭、咚咚 咚、咚啪咚啪、咚 咚咚	咯吱咯吱、噼噼、咯 吱咯吱、噼噼地	咯吱咯吱、咚咚叭、 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏踢踏咚咚咚地

	所在	原文	王敏訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
22	135-7	キックキックトントンキ ックキックトントン	咚叭咚叭、咚咚咚 咚叭咚叭、咚咚咚	咯吱咯吱咚咚，咯吱 咯吱咚咚	咯吱咯吱、咚咚叭， 咯吱咯吱、咚咚叭	踢踏咚，踢踏咚
23	130-4	きゃんきゃんきゃん	哎呀哎呀哟呀哟	哎呀呀	哇哇叫啊哇哇叫	哇哇叫啊哇哇叫
24	138-12	きゃんきゃんきゃん	哎呀哎呀哟呀哟	哎呀呀	哇哇叫啊哇哇叫	哇哇叫啊哇哇叫
25	126-10 a	ぎょっと	一怔	一愣	愣了愣	愣了一下
26	134-14	キラキラ	なし	亮晶晶的	闪亮	闪闪发光
27	138-18 b	キラキラ	(闪动着泪花)	(闪动着) 晶莹的 (泪花)	(闪着泪花)	晶莹的(泪珠滚落脸庞)
28	125-4	ぎらぎら	闪闪发光	闪闪发光	亮闪闪的	闪闪发光
29	126-1	キラキラキラキラ	闪呀闪，闪呀闪	一闪一闪地	不断闪着亮光	一闪一闪的
30	127-10	くるくる	なし	なし	なし	なし
31	130-1	こんこんばたばたこん こん	叭哒叭哒叭叭叭	咣咣，吧嗒吧嗒，咣 咣咣	咚咚叭咚咚叭	铛铛啪啪丁零咚
32	138-2	こんこんばたばたこん こん	啪哒啪哒啪叭叭	咣咣，吧嗒吧嗒，咣 咣咣	咚咚叭咚咚叭	铛铛啪啪丁零咚
33	126-7	しいんと	一片静谧	没有什么声音	静悄悄的，没有回音	一片寂静
34	126-10 b	しっかり	用力	(站) 稳	(站) 稳	(站) 稳
35	126-8a	しんしん	铛铛	硬邦邦	咚咚冻	硬邦邦地下
36	134-13	しんと	鸦雀无声	静了下来	鸦雀无声	安静了下来
37	131-4	ずうっと	なし	なし	なし	遥(远)
38	125-1	すっかり	なし	なし	なし	なし
39	129-14	すっかり	なし	完全	深深	完全
40	136-9	すっかり	很	很	なし	很
41	138-17	すっかり	なし	彻底	彻底	绝对
42	126-18	そっと	小声	悄声	低声	小声
43	131-16	そっと	小声	悄声	小声	悄声地
44	135-1b	そっと	悄声	悄声	小声	悄悄地
45	135-13	そっと	悄悄	悄悄	小声	悄悄地
46	138-5	そっと	偷偷地	悄悄	低声	铛铛啪啪丁零咚
47	131-15	チカチカ	泛着(青光)	泛着(一层青光)	闪着晶亮的(青光)	晶莹地闪烁着(青光)
48	127-15	ちゃんと	なし	なし	なし	なし

	所在	原文	王敏訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
49	137-1	ツンツン	满地皎洁月光	月光皓皓	月光皎洁	月光亮晶晶
50	137-6	ツンツン	满地皎洁月光	月光皓皓	月光皎洁	月光亮晶晶
51	137-11	ツンツン	满地皎洁月光	月光皓皓	月光皎洁	月光亮晶晶
52	130-16 b	どうどう	潇潇	萧萧	飐飐	呜呜
53	131-6	どうどうどっこどっこ	潇潇, 潇潇潇	萧萧, 萧萧	飐飐, 飐飐飐	呜呜飞啊飞
54	128-4	ばたばた	拍打起	吧嗒吧嗒	啪啪地	拍了拍
55	133-4	パチパチ	眨巴几下眼睛	眨了眨眼	眨着眼睛	眨巴着眼睛
56	134-10	パチパチ	呱呱呱地	噼里啪啦	拼命地	なし
57	135-1a	パチパチ	噼里啪啦的 (掌声)	噼里啪啦	噼里啪啦地热烈 (鼓掌)	雷鸣般的 (掌声)
58	132-10	ははあ	啊	哈哈	哈哈	哈哈
59	134-11	ピーと	啱——	嚙——	“啱”一声	“啱——”
60	135-3	ピーと	啱——	嚙——	“啱”……	“啱——”
61	137-16	ピーと	啱——	嚙——	“啱”……	“啱——”
62	138-13	ピーと	なし	嚙——	长响	なし
63	130-16 a	びいびい	呼呼	呼呼	呼呼	呼呼
64	131-5	びいびい、かんこかんこ	呼呼, 呼呼呼	呼呼, 叮当当, 叮当当	呼呼, 呼呼呼	呼呼吹啊吹
65	125-5	ぴかぴか	亮晶晶的	亮晶晶的	晶晶亮、亮晶晶	亮晶晶的
66	136-12	ひそひそ	交头接耳地	交头接耳地	交头接耳	交头接耳
67	130-9	ピッカリピッカリと	点点光亮	一闪一闪的	闪着点点微光	闪着点点亮光
68	133-14	びっくり	吃了一惊	吃了一惊	なし	吓了一跳
69	129-9	ひよるひよる	摇摇头	东倒西歪	晃呀晃	摇晃晃的
70	129-13	ひよるひよる	摇摇头	东倒西歪	晃呀晃	摇晃晃的
71	135-10	ひよるひよる	摇摇头	东倒西歪	晃呀晃	摇晃晃的
72	136-4	ひよるひよる	摇摇头	东倒西歪	晃呀晃	摇晃晃的
73	126-12	ピンと	なし	なし	なし	なし
74	129-12	ホッホッホ	热又香	热乎乎	香喷喷来热乎乎	香呀香喷喷
75	129-8	ポッポッポ	热又香	热乎乎	热乎乎来香喷喷	香呀香喷喷
76	135-9	ぼっぼっぼ	热又香	热乎乎	热乎乎来香喷喷	香呀香喷喷

	所在	原文	王敏訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
77	136-3	ぼっぼっぼ	热又香	热乎乎	香喷喷来热乎乎	香呀香喷喷
78	134-3	ゆるりと	なし	なし	なし	慢慢
79	138-18 a	フーッと	“喇”的一下	哇地	なし	なし

付表14: 「水仙月の四日」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	林少華訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	64-10	カタツ	“咔嚓”声	咔嚓一声	“咔嚓”声	咔嚓一声
2	63-7	がちがち	咯吱咯吱地	咔嚓一下	咔嚓一口	なし
3	65-17	きちつと	(咬) 紧	紧(咬)	紧(咬)	紧(咬)
4	62-11	きつきと	(快快摇响)	咯吱咯吱	嘎吱嘎吱地	咯吱咯吱咯吱
5	63-17b	きよるきよる	慌慌张张	东张西望	呆呆地	楞楞地
6	63-11	きらきら	亮晶晶的	粼粼的	粼粼波光	波光粼粼
7	61-2b	ぎらぎら	光闪闪的	耀眼的	耀眼夺目的	刺眼的
8	65-16	ぎらぎら	光闪闪的	闪闪发光的	闪光的	闪闪发光的
9	70-11	キラキラ	璀璨夺目	灿烂的	耀眼的	灿烂的
10	62-15	ぎらつと	闪闪耀眼的	耀眼的	点点闪烁跳跃的	耀眼的
11	62-14	くつきり	清晰	清晰地	清晰地	安安静静
12	65-6b	ぐづぐづ	磨蹭	磨蹭	偷懒	磨磨蹭蹭
13	65-7	ぐづぐづ	磨蹭	磨蹭	磨磨蹭蹭	偷什么懒
14	61-8	くつくくつと	咕嘟咕嘟	慢慢地咕嘟咕嘟地	咕嘟咕嘟地	咕嘟咕嘟
15	70-9	ぐつたり	なし	疲倦地	なし	なし
16	70-1	ぐるぐるぐる	一圈圈	骨碌骨碌	滴溜溜地	咕噜咕噜
17	62-7	くるりと	一圈圈	(兜了个) 圈儿	一圈	(兜了个) 圈儿
18	64-14	さらさらさらさら	窸窣窸窣	沙沙地	沙沙沙地	簌簌地
19	65-13b	しつかり	挺住	好好(干)	认真(干活)	好好(干)
20	65-14a	しつかり	好好(打起精神)	好好(干)	加油(干)	努力(干活儿)
21	65-14b	しつかり	拿出干劲来	好好(干)	加油	快(干活儿)
22	67-10b	しつかり	なし	好好(干)	用力	好好(干活儿)
23	68-12	しつかり	なし	好好干	加油干	好好干
24	63-2	しゅうしゅうと	嗞嗞	呼呼地	扑哧扑哧地	呼呼地
25	61-10a	ずうつと	很远很远的	远远的	なし	遥远
26	62-13b	ずうつと	很远很远的	老远的	なし	なし
27	66-7	ずうつと	很远很远的	最	最	最
28	64-15b	すつかり	(灰蒙蒙) 一片	一片(灰暗)	彻底	(灰暗) 无比

	所在	原文	林少華訳（2007）	周龍梅訳（2009）	王新禧訳（2012）	顔翠訳（2015）
29	64-17	すつかり	（漫天）皆（白）	（白茫茫的）一片	（雪白）一片	完全
30	68-5	すつかり	整张	严严实实地	（盖）好	严严实实地
31	69-5b	すつかり	一片（晴朗）	放（晴）	なし	雪霁天晴
32	61-5	せかせか	急匆匆	急匆匆地	匆忙	匆匆地
33	67-14	そつと	轻声	悄声	悄悄地	悄声
34	68-18	そろそろ	なし	马上	なし	差不多
35	67-17	ちらちら	一闪一露	不时地	时隐时现	なし
36	63-5	ちらつと	なし	一闪	一闪	一闪
37	66-11	ちらつと	隐约	不时地	隐隐约约	时不时
38	71-3	ちらつと	一闪	一角	一角	一角
39	71-5	ちらつと	轻轻	一下	（动了动）	一下
40	61-10b	どしどし	熊熊（燃烧）	源源不断地	不停地	源源不断地
41	64-11	どンドン	迅速	なし	不断地	なし
42	65-15b	どンドン	迅猛	なし	从不停	なし
43	69-3a	ばさばさ	乱糟糟的	一头乱发	蓬松的	乱糟糟的
44	65-11	ぱちつ	“啪”的一声	叭地（甩了一个响鞭）	“啪！”	啪的一声
45	64-15a	ぱつと	忽地	突然	なし	突然
46	67-6	びくびく	抽动着	抽动着	颤抖着	なし
47	69-3b	びくびく	抽动着	抖动着	抿着（嘴唇）	抖动着
48	63-17a	びつくり	吃惊地	吓了一跳	吃了一惊	吓了一跳
49	61-12	ひっそり	静悄悄的	静悄悄的	寂静无声的	寂静无声的
50	65-6a	ひゆう	なし	呼！	呼！	呼！
51	65-9	ひゆう	なし	呼！	呼！	呼！
52	65-14c	ひゆう	なし	呼！	呼！	呼！
53	66-9b	ひゆう	なし	呼！	呼！	呼！
54	66-16	ひゆう	なし	呼！	呼——！	呼
55	67-1	ひゆう	なし	呼！	呼——	呼
56	67-4	ひゆう	なし	呼！	呼！	呼
57	67-10a	ひゆう	なし	呼！	呼！	呼

	所在	原文	林少華訳 (2007)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
58	67-10c	ひゆう	なし	なし	呼！	呼！
59	65-8	ひゆう、ひゆう	なし	呼呼……	呼！呼！	呼，呼
60	65-13a	ひゆう、ひゆう	喂喂	呼！呼！	呼！呼！	呼，呼
61	65-13c	ひゆう、ひゆう	なし	呼！呼！	呼！呼！	呼，呼
62	66-10	ひゆう、ひゆう、ひゆう、ひゆうひゆう	呼、呼、呼呼（下巴）	呼，呼呼……	呼！呼！呼！呼呼呼！	呼，呼，呼呼！
63	68-13	ひゆう、ひゆうひゆう、ひゆうひゆう	呼、呼、呼呼……	呼！呼！呼……	呼！呼呼！呼呼呼！	呼，呼呼，呼呼！
64	63-18	ひゆうと	“啪”的一声	叭地（甩了一声）	“啪”一声	嗖的一声
65	66-9a	ひゆうひゆう	喂喂	呼！呼！	呼！呼！	呼，呼
66	65-6c	ひゆうひゆうひゆう、ひゆうひゆう	呼呼呼，呼啸着	なし	呼呼呼！呼呼呼！	呼呼呼，呼呼
67	67-18	ひゆうひゆうひゆう、ひゆうひゆう	呼、呼、呼呼……	呼呼，呼，呼呼！	呼呼呼！呼呼呼！	呼呼，呼呼！
68	63-15	ぶいつと	一把	嗖地一下	なし	なし
69	61-6	ふうふうと	呼呼	呼地	呼呼	呼呼地
70	66-3	ふと	忽然	就在这时	なし	なし
71	70-2	ふわふわ	酥软酥软	松松软软的	松软的	松松软软的
72	62-2	べるべる	なし	なし	なし	呼哧呼哧地
73	62-13c	べるべる	なし	なし	なし	なし
74	68-15	ぼさぼさ	なし	なし	なし	なし
75	69-5a	ほつと	舒了口气	松了一口气	长舒了一口气	松了一口气
76	61-2a	ぼやぼや	蓬松	蓬乱的	散乱的	乱糟糟
77	62-4	ぼやぼや	凄迷的	软绵绵的	扬起的	松松软软的
78	65-15a	ぼやぼや	乱蓬蓬	蓬乱	蓬松	乱糟糟
79	65-3	ぼんやり	影影绰绰	影影绰绰地	模模糊糊地	影影绰绰地
80	67-11	ぼんやり	隐约	隐隐约约	隐约	隐约
81	68-3	ぼんやり	なし	一片昏暗	一片昏暗	なし
82	62-6	ゆつくり	一步步慢慢	缓缓	缓步（而行）	慢慢地
83	69-1	ゆつくり	慢慢	好好	好好	好好

	所在	原文	林少華訳（2007）	周龍梅訳（2009）	王新禧訳（2012）	顔翠訳（2015）
84	70-12	ゆらゆらと	一晃一晃的	随风摇曳	摇曳（燃烧的）	随风摇曳着
85	66-14	よろよろ	踉踉跄跄	东倒西歪	なし	なし
86	62-13a	わくわくと	滚滚涌来	翻滚（而落）	波浪般	层层地翻滚（而落）

付表15: 「雁の童子」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鉄訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	159-1	カサカサ	飘凌	飒飒	凋零	飘零
2	159-10	ガサガサ	(累成了这样)	粗糙	糙裂	粗糙无比
3	149-7	ぎくぎく	叽里咕噜地	抖动不停的	蠕动	不断上下滑动
4	157-2	ぐっすり	(睡得) 很香	沉沉地	一下子(睡了过去)	呼呼(大睡)
5	157-12	くるっと	一下子	忽然	猛然	突然
6	158-2	ぐんぐん	なし	用力地	なし	径直(牵走了)
7	151-14	じっと	一直	直(望着)	目不转睛地	紧盯着
8	156-1	じっと	なし	なし	凝视	一动不动地
9	157-10	じっと	一直	静静地	紧盯着	紧紧地
10	159-15	しょんぼり	无精打采地	垂头丧气地	垂头丧气地	垂头丧气地
11	153-18	しんと	なし	一片寂静	なし	なし
12	161-10	ずうっと	一片大(沙漠)	遍地的(尘沙)	(眼前的沙漠)一望无际	一望无际的(沙子)
13	153-8	すっかり	なし	完全	なし	なし
14	156-4	すっかり	实在是太(累了)	十分(疲倦)	十分(疲惫)	(疲惫)不堪
15	156-16	すっかり	(豁然开朗)	完全	なし	なし
16	154-9	ちらちら	随风起舞	微微地(晃动)	随风起舞	婆娑起舞
17	158-4	ちらっと	无意中一眼看见(母马那褐色的充满痛苦的眼睛)	瞄了(母马茶褐色地瞳孔)一眼	(在一旁见到母马充满悲伤的褐色)眼眸	瞥见了(母马茶色的)眼眸
18	160-4	どきっと	担心起来	心头一惊	(他的心不由得)一紧	心里咯噔了一下
19	161-13	どきっと	心慌起来	心头一震	心头一阵恐惧	心里顿时咯噔了一下
20	155-5	どっと	哈哈大笑	哄笑起来	哄堂大笑	哄笑了起来
21	163-6	とぼとぼ	步履蹒跚地	脚步蹒跚地	步履蹒跚	一步一步地
22	155-11	にこにこ	嘻嘻地	笑嘻嘻的	(脸上)挂着微笑	面带微笑
23	160-16	ばたばた	なし	展翅	展翅高飞	展翅高飞
24	154-6	はっきりと	なし	清晰地	清晰地	清晰地
25	161-14	ばったり	一下子	なし	一下子	重重地
26	155-9	ばらばら	三五成群地	一个个	纷纷	纷纷

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	徐華鉄訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
27	158-1	びっくり	なし	吓了一跳	なし	惊恐地
28	154-12	ひらひらと	翩翩 (飞舞)	纷纷 (飞过)	(飞舞)	忽地 (飞过)
29	149-10	ふと	猛然	突然	忽然	忽然
30	156-10	ふと	忽然	忽然	忽然	突然
31	156-5	ぶるぶる	(震颤)	微微地 (颤动)	(荡来荡去)	(飘过来荡过去)
32	151-3	ぼおっと	一片白茫茫	一片朦胧的白	灰蒙蒙的	一片朦胧灰白
33	159-18	ぼんやり	发愣	呆呆地	默默地	呆呆地
34	153-10	ぼんやりと	呆呆地	呆呆地	呆 (站)	呆 (立)
35	161-8	ぼんやりと	含含糊糊地	心不在焉地	随口 (应到)	随口 (答道)

付表16：「慶十の公園林」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	周龍梅訳 (2009)	徐華鏞訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
1	406-18	がらんと	空旷	宽广	开阔	なし
2	407-2	がらんと	冷冷清清	空旷	空荡荡的	光秃秃的
3	404-10a	きらきら	闪亮的	亮晶晶的	锃亮的	闪闪发光的
4	408-6	さらさらと	哗啦啦地	哗啦啦地	哗啦啦	哗啦啦地
5	404-10b	じっと	凝视	直盯着	注视着	凝视着
6	406-16	すっかり	全	全都	都	全
7	407-7	すっかり	全都	所有	一一	一一
8	410-1	すっかり	已	なし	なし	已经
9	410-16a	すっかり	一模一样	一点也（没变）	一点儿也（没变样）	一点儿也（没变）
10	410-16b	すっかり	一如既往	一模一样	依然是	一如既往
11	408-1	ずんずん	很快	很快地	不多久	很快
12	409-16	ずんずん	なし	加快脚步	なし	なし
13	409-18	ずんずん	不断地	逐渐	なし	慢慢地
14	405-8	チーチクチーチク	叽叽喳喳地（叫个不停）	啾啾地（叫着）	叽叽喳喳地（欢唱）	叽叽喳喳
15	403-6b	チラチラ	闪闪发亮	一闪一闪（发光）	闪着亮光	闪闪发亮
16	403-6a	どうと	（狂风）呼啸	沙沙地	（大风）劲吹	なし
17	409-9	どしりどしりと	一阵噼里啪啦的（耳光）	重重的一记（耳光）	一顿劈头盖脑的（耳光）	一连串噼里啪啦的（耳光）
18	407-13a	どっと	猛然	突然	突然	突然
19	405-9	にこにこ	なし	なし	微笑着	傻笑着
20	409-12	のしりのしりと	迈着大步	偷偷地	疾步	大步流星地
21	406-1	のっそりと	なし	漫漫地	悻悻地	慢吞吞地
22	403-7	はあはあ	呼哧呼哧地	哈哈地	呼哧呼哧地	大口大口地
23	403-9	はあはあ	呼哧呼哧	哈着气	呼哧呼哧的	大口大口
24	408-3	はあはあ	开心地	哈哈地	高兴地	开心地
25	408-11	はあはあ	呼呼地	なし	呼哧呼哧地	呼呼地
26	411-10	はあはあ	笑呵呵的	笑呵呵的	咧开嘴笑	呵呵地

	所在	原文	周龍梅訳 (2009)	徐華鏜訳 (2012)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
27	403-2	パチパチ	眨巴眼	眼睛眨个不停	直眨眼	直眨吧眼睛
28	406-14	ぱちぱち	噼里啪啦地	咔嚓咔嚓地	なし	噼里啪啦地
29	403-12	ピクピク	抽动	一颤一颤地抽动着	抽动	忍不住颤动
30	407-13b	びっくり	吃惊地	吓了一跳	なし	惊讶
31	405-18	ぶつぶつ	嘟嘟囔囔着	嘀咕着	嘀咕着	嘟嘟囔囔
32	405-2	ぼくりぼくりと	吭哧吭哧地	迅速地	呼哧呼哧地	吭哧吭哧地
33	408-10	ポタリポタリと	滴滴答答地	扑簌扑簌地	滴答滴答地	滴滴答答地
34	412-7	ポタリポタリと	滴滴答答地	扑簌扑簌地	滴答滴答地	滴滴答答地
35	407-5	ぼんやり	发愣	なし	垂头丧气	呆 (立)
36	404-15	もぢもぢ	扭扭捏捏地	なし	怯怯地	羞愧地
37	405-16	もぢもぢ	扭扭捏捏的	手足无措	不知所措	扭扭捏捏
38	403-1	ゆっくり	なし	悠闲地	踱步	なし
39	409-11	よろよろ	踉踉跄跄地	脚步开始不稳	身子也摇摇晃晃, 无法站稳	身体摇摇晃晃, 站立不住

付表17: 「オツベルと象」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	192-12	うるうる	到处乱转	团团乱转	なし	团团转
2	185-18b	がたがた	“得……得……得”	不禁浑身激烈地 (颤抖起来)	浑身禁不住 (颤抖着)	直 (打战)
3	185-2a	ぎくつと	吓得够呛	惊呆了	吓坏了	慌了神儿
4	184-9b	ぎよつと	吓了一大跳	吓了一跳	吓了一大跳	吓了一跳
5	184-9c	ぎよつと	吓一大跳	吓了一跳	v	吓一跳
6	184-15	ぎよつと	大吃一惊	掩饰不住惊愕的神情	惊怕了	一惊
7	185-2b	ぎよつと	胆颤	慌了神	害怕	怕了
8	188-8	ぎよつと	吃一惊	一愣	不由得一愣	惊讶
9	186-3	くしゃくしゃ	(脸上的褶子) 皱成一团	喜形于色地	满脸堆笑	なし
10	193-2b	くしゃくしゃ	(被踩成了) 肉酱	(被压) 扁了	(被大象们) 踩成了肉酱	(被压) 扁了
11	192-5a	ぐらぐらと	(颤抖)	(颤抖)	(震动)	(颤动)
12	190-17	グラアガア、 グラアガア	“冲啊！冲啊！”	“呜啦呜啦、呜啦呜啦！”	“冲啊！”	“嗷噜——嗷噜——”
13	190-18	グラアガア、 グラアガア	“冲啊……冲啊……”	轰轰隆隆地	なし	なし
14	191-5	グラアガア、 グラアガア	“冲啊！冲啊！……”	なし	“轰隆隆，轰隆隆！”	“嗷噜——嗷噜—— 嗷噜——”
15	192-6	グラアガア、 グラアガア	“冲啊！冲啊……”	呜啦呜啦、呜啦呜啦	なし	“嗷噜——嗷噜—— 嗷噜——”
16	192-9a	グラアガア、 グラアガア	“冲啊！冲啊……”	呜啦呜啦、呜啦呜啦地	なし	“嗷噜——嗷噜—— 嗷噜——”
17	193-3a	グラアガア、 グラアガア	“冲啊！冲啊！”	呜啦呜啦、呜啦呜啦	なし	“嗷噜——嗷噜—— 嗷噜——”
18	192-2	ぐるぐる	一道一道地	一层又一层地	一层层地	一圈又一圈地
19	192-9b	ぐるぐる	绕着	不停地 (转来转去)	绕着	转来转去
20	191-2	グワア グワア グワア グワア	“冲啊……冲啊……”	嗷嗷——嗷嗷——	冲啊，冲啊！	“嗷噜——嗷噜—— 嗷噜——”
21	186-1	けるりと	漫不经心地	泰然自若地	毫不在乎地	毫无所觉地
22	188-3	さつぱり	浑身清爽	神清气爽	浑身舒坦	神清气爽
23	190-7	しくしくしく く	抽抽嗒嗒地	抽抽嗒嗒地	なし	低声 (抽泣起来)

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
24	191-17	しつかり	打起精神来	振作起来	鼓起勇气	打起精神来
25	189-12	じつと	直町町地	死死地 (盯着)	愤怒地	死死地 (盯着)
26	185-17	ずうつと	一直	一直	留	一直
27	184-2b	すつかり	(腹中) 空空	(饥肠) 辘辘	(饥肠) 辘辘	なし
28	188-13	せいせい				
29	184-13	ちらつと	扫了一眼	瞥 (见)	瞥了一眼	一眼就
30	184-17	ちらつと	瞄了 (白象) 一眼	瞥了一眼	瞥了一眼	瞥了一眼
31	192-15	ドーン、グララ アガア、ドーン、 グララアガア、 ドーン、グララアガア	“当!”“冲 啊!”“当!”“冲 啊!”“当!”“冲啊!”	当! 呜啦呜啦。当! 呜啦 呜啦。当! 呜啦呜啦。	“砰砰砰”	“乒——”“嗷 ——”“乒——”“嗷 ——”
32	188-18	どきつと	吃一惊	一愣	一愣	紧张起来
33	193-3b	どしどし	争先恐后地	なし	争先恐后地	なし
34	193-2a	どつと	一块儿	一齐	一起	一齐
35	192-13	にゆうと	终于	毫不客气地	なし	なし
36	185-5	のこのこ	大模大样地	大模大样地	大摇大摆地	大模大样地
37	189-1a	のそのそ	なし	なし	なし	なし
38	184-2a	のんのんのんの ん	“隆……隆……隆”	轰轰隆隆地	“轰隆隆”的 (巨响)	轰隆隆, 轰隆隆
39	184-5	のんのんのんの ん	“隆隆……隆隆”	轰轰隆隆地	轰隆隆声	轰隆隆地
40	183-3	のんのんのんの んのんのん	“隆……隆……隆”	轰隆隆的 (巨响)	“轰隆隆”的 (巨响)	轰隆隆地
41	192-5b	ばしやばしや	黑压压地	劈劈啪啪地响着	なし	咚咚咚的响声
42	185-7	パチパチ	噼噼啪啪	噼噼啪啪地	噼里啪啦地	狠狠地
43	192-17	ぱちぱち	啪嗒啪嗒	噼噼啪啪	噼里啪啦	噼噼啪啪地
44	185-13	パチパチパチパ チ	噼噼啪啪	噼噼啪啪	噼里啪啦的	なし
45	191-10	ぱつちりと	なし	(睁) 大	なし	なし
46	185-18a	はつと	大吃一惊	一愣	大吃一惊	吓了一跳
47	185-3a	ふうと	扑地	なし	なし	骤然
48	184-7	ぶらつと	信步	漫无目的地	信步而行	一不小心
49	190-1	ふらふら	踉踉跄跄	晃晃悠悠地	なし	摇摇晃晃地

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
50	183-10	ぶらぶら	来来回回	(走来走去)	来来回回地	来来回回地
51	189-1b	べたんと	一屁股	一屁股	“呼”一下	なし
52	183-7	ぼうつと	なし	なし	なし	なし
53	184-4	ほくほく	(狼呑虎咽地)	香噴噴热乎乎的	热腾腾的	美美地
54	191-1	めちやめちや?				
55	185-10	やつと	终于	终于	なし	终于
56	184-9a	ゆつくり	悠然自得地	缓缓地	慢慢地	小心翼翼地
57	185-3b	ゆつくり	晃悠悠地	悠然地	自顾自	慢悠悠地
58	188-9	ゆつくり	(迈着) 优雅の歩子	缓缓	(迈着) 优雅の步伐	慢悠悠地

付表18: 「グスコブドリの伝記」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鏞訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	243-4	あつ	“啊!”的一声	“啊”地 (大叫) 一声	“哇”地 (大叫) 一声	(惊叫一声)
2	263-12b	うつとり	入了神	陶醉	沉醉地	入了迷
3	233-3	うろうろ	なし	转来转去	漫无目的地	转来转去
4	241-7	うんと	(那么) 多	(那么) 多	(那么) 多	(这么) 多
5	234-3b	おゝほいほい	哎唷	なし	哦哦……嘿哟嘿哟……	なし
6	234-4	おゝほいほい	哎唷	なし	なし	なし
7	244-2	おろおろ	抽抽泣泣地	抽抽嗒嗒地	呜咽	呜呜地
8	250-9	がちつと	“喀哒”一声	“咔嚓”	咔的一声	咔嚓一声
9	250-10	がちつと	“喀哒”一声	なし	咔地	なし
10	231-16	がっかり	大失所望	无精打采地	失望	なし
11	267-10b	がっかり	失望	失望	失望难过地	失望
12	245-9b	がぶがぶ	径直	“咕咚”一声	なし	哗啦哗啦地
13	238-11	がらがらがら	喀啦喀啦地	嘎啦嘎啦地	なし	嘎达嘎达
14	265-4	がらんと	なし	空地	空荡无一物的	なし
15	245-9a	かんかん	非常 (生气)	怒气冲天	怒气冲冲	なし
16	257-8	ぎしぎし	吱吱吱吱	嘎吱嘎吱地	嘎吱嘎吱地	咯吱咯吱地
17	253-15	きちんと	なし	なし	なし	なし
18	239-7	ぎつしり	なし	なし	なし	密密地
19	241-15	ぎつしり	挤得满满的	なし	茂密	浓密的
20	250-5	ぎつしり	坐满	坐满	挤满	挤满
21	241-17	ぎよつと	吓了一跳	惊讶地	突然	吓了一跳
22	261-3	きらきら	闪闪发光的	光闪闪地	なし	汨汨地
23	244-12	ぎらぎら	一闪一闪的	浑浊的	亮亮的	闪闪发光的
24	249-18	ぎらりと	闪闪发光	闪闪发亮	なし	なし
25	244-6	ぐう	好好 (睡)	呼呼 (大睡)	(睡个) 过瘾	安稳 (觉)
26	231-9	ぐしゃぐしゃ	なし	なし	なし	なし
27	253-11	くつきり	なし	十分鲜明	显眼的	十分显眼
28	264-16	ぐつすり	酣然	酣然	沉沉地	沉沉地

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鉄訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
29	251-18	ぐつと	なし	紧 (贴)	なし	一下子
30	238-10	ぐらぐら	哗哗	なし	なし	なし
31	258-13	ぐらぐら	山揺地动	なし	隆隆地	なし
32	261-5a	ぐらぐら	なし	なし	なし	なし
33	239-15	ぐらぐらつと	天揺地动	なし	晃动	摇摇晃晃的
34	261-2a	ぐらぐらつと	忽拉忽拉	剧烈 (摇晃)	なし	なし
35	251-17	ぐんぐん	终于	一个接一个	很快	很快
36	271-16	ぐんぐん	突然	渐渐	迅速地	なし
37	260-8	げつそり	瘦了许多	明显消瘦	塌陷	凹陷
38	265-15	げらげら	插科打诨地	连喊带叫地	张着嘴 (笑着)	哈哈大笑
39	261-5b	ごうつ	一声巨响	“轰隆”一声巨响	一声轰然巨响	一声巨响
40	252-2	こくつと	なし	贪婪地 (吸了一口 气)	意犹未尽地 (吞了吞口 水)	深深地
41	230-4	ごしつごしつと	吱吱声	“嚓嚓”	嘎吱嘎吱的	なし
42	254-10	ことつと	なし	“啍”地	なし	なし
43	233-16	こはごは	战战兢兢地	提心吊胆地	战战兢兢地	犹犹豫豫地
44	263-9b	ざあざあ	刷刷	大雨如注	下个不停	哗啦哗啦
45	231-1	ざあざあざあざあ	啪嗒啪嗒	叭叭喳喳	なし	なし
46	250-15	さつさつと	飞快	沙沙地	一下子	拼命
47	242-3	さつさと	匆匆	なし	快步	なし
48	244-8	さつさと	匆匆	なし	迅速	なし
49	247-17	さつぱり	一直	(滴雨未降)	(没下过一滴雨)	(没下过一滴雨)
50	254-7	ジーと	なし	なし	唧唧地	なし
51	263-7	ジーと	噤——噤——地	なし	なし	丁零丁零地
52	264-10	ジーと	噤——噤——	なし	なし	丁零丁零地
53	254-16	しつかり	なし	なし	好好	用功
54	255-1	しつかり	努力	なし	努力	努力
55	232-8	じつと	一直	なし	好长一段时间	很久很久
56	233-17	じつと	盯着	一直	一直	目不转睛地
57	255-7	じつと	なし	安宁平静的	沉静的	沉静的

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鉄訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
58	243-11	しほしほと	无精打采地	なし	拖着沉重的步伐	萎靡不振
59	241-6	しよんぼりと	垂头丧气地	垂头丧气地	寂寞地	垂头丧气地
60	250-17	じろじろ	目光炯炯地	死死盯着	静静地	なし
61	251-5	じろじろ	转着眼珠	审视	直 (盯着)	仔细地打量着
62	234-6	ずうつと	なし	なし	なし	なし
63	239-16a	ずうつと	很 (远的)	なし	なし	なし
64	261-4	ずうつと	なし	なし	なし	なし
65	268-2	ずうつと	满 (可以)	(富裕) 多	挺 (好的)	很 (不错)
66	237-1	すたすた	急急忙忙	なし	快步地	大步
67	245-13	すたすた	急急忙忙	三步并作两步地	轻快地	大踏步
68	258-15	すたすたと	快步	快步	急忙	大步
69	231-18	すつかり	なし	なし	なし	なし
70	232-2	すつかり	完全	なし	全	完全
71	232-14	すつかり	なし	なし	全	通 (亮)
72	235-12	すつかり	全部	なし	なし	全都
73	239-13	すつかり	完全	なし	なし	なし
74	242-14a	すつかり	全都	全	全	所有的
75	243-18	すつかり	完全	完全	一摸一样	一摸一样
76	245-12	すつかり	完全	なし	なし	なし
77	246-14a	すつかり	完全	なし	なし	なし
78	246-15	すつかり	なし	なし	满满的	(长) 满
79	255-2b	すつかり	なし	なし	好好	好好
80	258-17	すつかり	仔细	仔细	仔细	仔细地
81	260-3	すつかり	一切	一切	なし	なし
82	260-6	すつかり	なし	一一 (安排好)	なし	完全
83	260-7	すつかり	なし	なし	なし	全都
84	263-9a	すつかり	完全	一切	なし	(妥当)
85	267-10a	すつかり	なし	(破烂) 不堪	なし	なし
86	268-4	すつかり	なし	十足的	なし	なし

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鉄訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
87	271-13	すつかり	一切	一切	全部	一切
88	251-2	そつと	乘机	悄声	悄悄地	悄声
89	251-15	そつと	なし	轻松地	战战兢兢地	なし
90	268-11	そつと	悄悄地	默默	迅速	悄悄
91	246-9	ちやんと	なし	好好的	好好的	好好的
92	233-4	ちらちら	一闪一闪的光	眨着眼睛	一闪一闪地	一闪一闪
93	261-6	どうつと	狂(风)	狂(风)扑来	阵阵	一阵狂(风)
94	239-16b	どーん	“咚——”一声巨响	“轰隆”一声巨响	一声巨响	轰鸣声
95	256-6	どしどし	なし	なし	なし	なし
96	250-2	どつと	哄堂(大笑)	一阵哄(笑)	一阵哄(笑声)	哄堂(大笑)
97	265-10a	どつと	哈哈(大笑)	开心地(大笑)	なし	哄堂(大笑)
98	242-14b	どろどろ	粘粘糊糊的	黏糊糊的	黏稠的	(被翻垦完毕)
99	241-5	どんどん	匆匆	(跑)光	(跑得)不见踪影	渐渐地
100	246-14b	どんどん	很快地	なし	渐渐	很快
101	250-14	どんどん	なし	迅速	迅速	不停地
102	261-15	どんどん	なし	不断地	迅速	不断地
103	249-2	どんどんどんどん	咣铛咣铛	飞速	逐渐	なし
104	249-9b	どんより	阴沉沉的	浑浊的	混浊的	混浊的
105	239-3	にやにや	嬉皮笑脸地	皮笑肉不笑地	怪异的笑容	なし
106	258-9	にやにや	笑嘻嘻地	なし	なし	微笑
107	245-10	にやりと	嘻嘻	抿嘴(一笑)	咧嘴(一笑)	抿嘴(一笑)
108	244-10	のろのろ	慢吞吞地	慢吞吞地	なし	慢悠悠地
109	249-9a	のんのん	轰隆隆轰隆隆的	轰响	なし	隆隆声
110	237-2	はあはあ	上气不接下气儿	气喘吁吁	喘不过气来	气喘吁吁
111	241-9	ばさばさ	忽拉忽拉	哗哗啦啦地	沙沙地	呼啦呼啦地
112	230-9	ばさばさ	蓬蓬松松的	乱蓬蓬的	蓬松的	毛茸茸的
113	239-17	ばさばさばさばさ	哗啦哗啦	哗哗啦啦地	沙沙地	呼啦呼啦地
114	251-11b	ばたばた	啪嗒啪嗒	啪嗒啪嗒地	手忙脚乱地	陆陆续续
115	243-2b	はつきり	很清楚地	分明	なし	分明

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鉄訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
116	263-4	はつきり	明显	清晰	なし	清晰
117	234-8	ばつたり	一下子	一头	なし	なし
118	251-7	ぱつと	忽然	一下子	啪的一声	突然
119	261-2b	ぱつと	なし	(腾空而起)	なし	蹿(起)
120	263-12a	パツパツと	なし	忽閃忽閃地	なし	闪烁着
121	261-9	ばらばらばらばら	噼啪、噼啪、噼啪	噼里啪啦地	啪啦啪啦地	噼里啪啦地
122	242-8	びしやつと	なし	なし	なし	なし
123	253-5b	びつくり	大吃一惊	惊愕地	吓了一跳	吓了一大跳
124	261-1	ひっそり	なし	寂然	なし	静悄悄地
125	258-6	ひらりと	纵身	なし	轻巧地	轻巧地
126	259-13	ひらりと	なし	迅速	迅速地	轻巧地
127	234-3a	ぶいつと	匆匆	なし	突然	一把
128	253-5a	ピツと	嗖地一下	纵身一跃	嗖地	转身
129	265-10b	ぶいつと	扭头	扭头	转身	转身
130	234-10	ふつと	なし	猛然	なし	なし
131	264-13	ぶつぶつぶつぶつ	隆——隆——	细碎的嘈杂声	扑哧扑哧地	轰隆轰隆的响声
132	258-2	ふと	忽然	蓦地	突然	突然
133	236-12	ふにやふにや	软瘫瘫的德行	软弱	扭扭捏捏的	软蛋
134	234-13	ぶらぶら	溜溜达达地	なし	晃着	挥来挥去
135	236-11	ぶりぶり	大(怒)	气呼呼地	怒气冲冲地	なし
136	230-7	ぼう、ぼう	咕……咕	なし	啾啾的	なし
137	244-16	ほうと	深深地	深深	なし	深
138	249-10	ぼうと	茫然	呆(立)	呆(站)	呆愣
139	258-16	ぼかぼか	一闪一闪的	忽闪忽闪地	なし	扑哧扑哧地
140	267-1	ぼつぼつと	なし	なし	慢慢地	一点点地
141	253-9	ぼろつと	なし	倏地	头也不回地	转身
142	258-11	ぼろぼろ	纷纷	なし	なし	不断
143	238-13	ぼろぼろぼろぼろ	翩翩起舞	扑棱棱地	许许多多的	一只只
144	233-14	ぼんと	なし	嗖地	茫然地	浑浑噩噩地

	所在	原文	騰瑞訳 (1994)	周龍梅訳 (2007)	徐華鉄訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
145	233-11	ぼんやり	なし	迷迷糊糊地	恍恍惚惚地	恍恍惚惚地
146	239-4	ぼんやり	昏头昏脑地	孤零零	不知所措地	茫然地
147	243-2a	ぼんやり	なし	なし	なし	朦胧的
148	243-5	ぼんやり	六神无主	楞楞地	呆 (立)	楞楞地
149	264-5	ぼんやり	朦朦胧胧	なし	昏暗的	朦胧的
150	264-9	ぼんやり	呆呆地	如醉如痴地	呆呆地	忘我地
151	256-1	むくむく	なし	震动	なし	なし
152	237-12	むしゃむしゃ	狼吞虎咽地	狼吞虎咽地	狼吞虎咽地	大口大口
153	244-3	むつくり	突然	一下子	突然	霍地
154	254-14	もぢもぢ	手足无措	畏畏缩缩	扭捏不安	扭捏的
155	255-2a	ゆつくり	好好	好好	好好	好好地
156	258-14	ゆつくり	剧烈地	なし	慢慢	缓缓地
157	242-13	ゆつくりゆつくり	悠哉悠哉地	缓缓	悠闲地	悠哉悠哉地
158	247-13	ゆらゆら	一阵阵 (波浪)	徐缓的 (稻浪)	なし	一层层 (波浪)
159	232-10	よろよろ	踉踉跄跄地	踉踉跄跄地	拖着不稳的脚步	踉踉跄跄地
160	232-16	よろよろ	踉踉跄跄地	步履蹒跚地	拖着衰弱的身子	脚步蹒跚地
161	251-11a	わあと	大喘一口气	“哇”地	哇地	惨叫一阵
162	259-3	わくわく	十分激动	一阵激动	热血沸腾	雀跃不已
163	234-5	わつと	“哇”地	なし	哇地	哇地一声

付表19：「セロ弾きのゴーシュ」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	張哲訳 (2008)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	377-12	うとうと	迷迷糊糊地打了个盹儿	昏昏欲睡	迷迷糊糊地	打起瞌睡
2	364-18	がさがさ	稀里哗啦的	干巴巴的	干巴巴的	鬼样子
3	374-7	がたがた	摇晃	咣咣地	使劲儿推动	努力地推
4	365-8	かっきり	准(时)	准(时)	准(时)	なし
5	384-2	がぶがぶ	咕咚咕咚	大口大口地	大口大口地	灌
6	374-16	がらんと	(窗洞) 大开	敞开的(窗口)	なし	空荡荡的
7	379-10	ギウギウト	なし	咯吱咯吱	蹦蹦地	なし
8	375-8	きちんと	端(坐)	端端正正地	老老实实地	なし
9	368-3	ぎっしり	严严实实地	严严实实地	严严实实地	严严实实地
10	382-5	きつと	一脸严肃地	沉着脸	严肃地	なし
11	377-18	きよるきよる	四下窥摸着	四下张望了一下	东张西望	四下张望着
12	381-1	きよるきよる	四处窥摸着	四下望了望	四下张望一番	四下望了望
13	381-11	ぐうぐう	呼噜呼噜香甜地	呼呼地	呼呼地	呼呼地
14	375-12	くたくたと	咕嘟咕嘟	なし	なし	なし
15	372-17	くっ	“咕”地	深深地	长(出一口气)	长(出一口气)
16	369-15	ぐっすり	香香甜甜地	酣然	酣然	酣然
17	369-4	ぐっと	なし	なし	动了真(怒)	(火)大了起来
18	368-18	ぐるぐる	转得头晕	头晕眼花	头晕眼花	转得晕乎了
19	368-16	ぐるぐるぐるぐる	滴溜溜地	不停地(转圈)	不停(转圈)	咕噜咕噜地
20	369-17	ぐんぐん	吱吱拉拉地	狠命地	仍未停止	なし
21	369-2	けるりと	不以为然地	立刻恢复了原状	摆出一幅若无其事的样子	立刻恢复了原状
22	370-1	ごうごう	なし	昏头昏脑	全身心投入	なし
23	379-9	ごうごう	铮铮的(声音)	嗡嗡声	なし	なし
24	380-4	ごうごうがあが あ	铮铮嗡嗡地	轰轰隆隆地	轰轰隆隆地	吱吱呀呀地
25	366-4	ごうごうごうご う	不停地	嗡嗡地(拉个不停)	(琴声)不绝于耳	一遍一遍地(拉个不停)
26	378-16	ごうごうと	铮铮铮地	嗡嗡地	なし	(拉个)不停

	所在	原文	張哲訖 (2008)	周龍梅訖 (2009)	王新禧訖 (2012)	顏翠訖 (2015)
27	365-18	ごくごく	咕嘟咕嘟	咕咚咕咚	痛痛快快地	咕咚咕咚地
28	369-16	ごくごく	咕咚咕咚	咕嘟咕嘟地	咕嘟咕嘟	咕噜咕噜
29	365-17	ごつごつ	なし	笨重的	破旧的	粗糙的
30	370-1	こっこつと	咯吱咯吱 (的敲击声)	咚咚地	“叩”、“叩”	嘭嘭的响声
31	375-3	こつこつと	当当地	なし	“叩叩”地	嘭嘭的 (敲门) 声
32	377-13	こつこつと	当当地	なし	“叩叩”地	嘭嘭的 (敲门) 声
33	372-14	こんこん	一个劲儿地	哈腰央求道	不断鞠躬央求	不断地鞠躬哀求
34	371-7	さっさと	立马	痛痛快快地	立刻	立马
35	383-7	さっさと	快 (步)	匆匆	快 (步)	匆匆
36	365-4	さっぱり	什么也 (没有)	根本	完全	根本
37	365-6	しっかり	加劲	好好	努力	努力
38	374-10	じっと	凝 (视)	直直地	盯着	凝 (视)
39	383-6	じっと	呆木 (而坐)	你瞪着我, 我瞪着你	面面相觑	眼睛 (发直地)
40	369-8	シュッと	刺拉用力 (一划)	嚓地	なし	なし
41	363-11	しんと	なし	安静下来	鸦雀无声	なし
42	383-1	しんと	鸦雀无声	鸦雀无声	静默无声	鸦雀无声
43	366-9	すうと	なし	なし	なし	なし
44	367-12	すっかり	涨 (红了脸)	满 (脸通红)	涨 (红了脸)	面红耳赤
45	368-10	すっかり	十分 (有趣)	兴致 (来了)	興味盎然	津津 (有味)
46	372-9	すっかり	实在	(气) 坏了	再也不能 (忍受)	实在是 (忍无可忍)
47	380-10	すっかり	紧紧	紧	紧	紧
48	382-17	すっかり	なし	彻底	なし	完全
49	374-6	するする	一 (推) 就……	容易	(难)	一 (推) 就……
50	369-17	そっくり	如同	和 (昨晚) 一样	照旧	像
51	365-18	そっと	轻轻	なし	轻手轻脚地	なし
52	381-14	ぞろぞろ	一个跟着一个	鱼贯地	次第	鱼贯
53	378-1	ちゃんと	虔诚地	恭恭敬敬地	恭恭敬敬地	恭恭敬敬地

	所在	原文	張哲訖 (2008)	周龍梅訖 (2009)	王新禧訖 (2012)	顏翠訖 (2015)
54	377-16	ちよろちよると	出溜出溜地	哧溜哧溜地	哧溜哧溜	一摇一摆地
55	376-10	ちらちら	盯着(它)看	不是地偷(看)	偷(瞥)	偶尔(瞥它几眼)
56	364-13	どきっと	心头一惊	(糟了)	心头一惊	心里一震
57	373-8	どしんと	なし	なし	当头一棒	挨了一棍
58	381-11	どっかり	なし	扑通一下	一头	なし
59	383-7	どっかり	一屁股	一屁股	一屁股	一屁股
60	364-17	どんと	なし	狠狠(跺了一下)	使劲儿	なし
61	368-6	どんと	砰的一声	猛地	“咚”	なし
62	369-10a	どんと	砰的一声	なし	拼命	拼命地
63	369-10b	どんと	なし	なし	なし	用力地
64	375-6	どんと	咚地	猛地	猛地	忽然
65	366-8	とんとん	咚咚咚地	咚咚地	咚咚地	嘭嘭地
66	377-4	とんとん	咚咚咚地	咚咚咚地	咚咚咚地	咚咚咚地
67	367-3	にやにや	满脸堆笑地	咧开嘴微笑着	呵呵	嘴角微微笑
68	381-16	のそのそ	悠悠然	なし	缓缓地	悠闲地
69	374-4	ぱたっと	吧嗒一声	吧嗒一声	“吧嗒”一声	なし
70	363-11	ぱたっと	用力(一拍)	啪地	“啪”地	突然
71	364-12	ぱたっと	“啪”地	啪地	“啪”地	拍掌声
72	371-9	ぱたぱた	扑扑拉拉(拍打)	啪啪地	吧嗒吧嗒	拍
73	379-17	ぱたぱた	叭哒叭哒蹬着脚	扑腾着	なし	挥舞着手脚
74	368-8	ぱちぱち	乱(冒金星)	噼噼啪啪地	直(冒火星)	(冒出火花)
75	382-1	ぱちぱち	なし	噼噼啪啪地	持续不断	(回响个)不停
76	383-2	ぱちぱち	噼噼	(火星)四迸	冒出(火星)	迸出(火星)
77	368-5	パチパチパチッと	吧嗒吧嗒使劲	眨巴了几下	拼命地眨(眼睛)	(眼珠)飞转
78	377-8	ぱちんと	仔细	牢牢地	牢牢	(贴)牢
79	376-17	はっと	恍然一惊	吃了一惊	大吃一惊	心里一惊
80	374-7	ぱっと	一头	なし	なし	なし
81	374-15	ぱっと	猛(踹)	一脚	なし	なし

	所在	原文	張哲訳 (2008)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
82	364-4	ぱっと	“啪”地	なし	“啪”地	なし
83	368-6	ぱっと	猛地	嗖地一下	撒腿(冲向)	嗖的一声
84	374-11	ぱっと	なし	なし	なし	なし
85	381-14	ぱっと	なし	なし	なし	なし
86	378-13	ははん	哈哈	なし	苦笑	なし
87	365-4	びたっと	なし	なし	(总比别人慢)	(总是跟不上)
88	378-17	びたっと	立刻(停下)	一……就……	一……就……	刚好
89	363-11	びたりと	戛然	一下子	立即	顿时
90	373-7	びたりと	戛然	一下子	戛然	忽然
91	374-3	びっくり	大吃一惊	受惊了	受了惊吓	被恐吓住了
92	379-1	びっくり	惊	惊	大吃一惊	惊
93	381-1	びっくり	吃惊地	惊恐地	吃惊地	吓了一跳
94	383-6	ひっそり	闐无一声	一声不吭地	静静地	呆
95	381-2	ふくふく	暄暄乎乎	松软	松软	又松又软
96	373-4	ふっと	竟然	なし	なし	竟
97	373-8	ふらふらっと	なし	晃了几下	东倒西歪	晃了晃
98	380-10	ぶるぶるぶるぶる	浑身不停地(颤抖着)	浑身打着哆嗦	浑身打着哆嗦	浑身(还在)打战
99	380-12	ぶるぶるぶるぶる	筛糖似的(打哆嗦)	不住地(发抖)	打着哆嗦	浑身瑟瑟发抖
100	369-7	ペロリと	なし	なし	なし	なし
101	373-16	ぼうっと	朝霞显现	泛出了鱼肚白	泛出朦胧的鱼肚白	出现了鱼肚白
102	377-6	ぼうと	蒙蒙	发亮	黎明时分	泛白
103	363-8	ポーポーと	嗡嗡地	嘟嘟地	嗡嗡地	在一旁伴奏
104	364-3	ほっと	なし	松口气	悬着的心刚放下	松了一口气
105	365-10	ぼろぼろ	なし	なし	直流	なし
106	370-3	ぼろんと	扑楞楞	噗地	“扑棱”	扑通一声
107	371-8	ポロンポロンと	波棱波棱地	嗡嗡地	嗡嗡地	叮叮咚咚
108	376-11	ぼんぼん	咚咚咚地	咚咚咚地	咚咚咚	咚咚咚地
109	375-8	ぼんやり	茫然地	好像一无所知	一脸茫然	茫然地

	所在	原文	張哲訳 (2008)	周龍梅訳 (2009)	王新禧訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
110	377-10	ぼんやり	木然愣了 (一会儿)	呆	呆	愣了 (一会儿)
111	366-16	むしゃくしゃ	火气	(憋了一天的) 火气	(白天憋的) 一肚子 怒气	(憋了一整天的) 怒气
112	373-3	むしゃくしゃ	漫不经心地	(无心演奏) 乱 (拉 一气)	并未用心	心烦意乱
113	378-4	むっと	不快	气冲冲地	生气地	不快地
114	369-10c	よろよろ	踉踉跄跄	摇摇晃晃地	摇摇晃晃地	东倒西歪
115	369-10d	よろよろ	跌跌撞撞	なし	摇摇晃晃地	なし
116	369-11	よろよろ	なし	なし	なし	なし
117	363-9	りんと	鼓 (嘴)	紧绷着 (嘴唇)	抿紧 (嘴唇)	抿着 (嘴唇)
118	382-15	わあと	高声 (尖叫)	大 (叫)	欢呼	大声

付表20：「風の又三郎」におけるオノマトペと現代漢語訳

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏞訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
1	337-5	うとうと	打盹	打瞌睡	昏昏沉沉的	犯困
2	301-10	うんと	なし	なし	なし	なし
3	331-4	うんと	なし	なし	(罵)死	なし
4	346-8	うんと	なし	なし	なし	狠狠地
5	324-1	おう	“哎——！”	“哎——”	“喂！”	
6	323-18	おうい	“哎——”地	“哎——”	“喂！”	
7	349-4	がくがく	一直不停地	瑟瑟发抖	抖个不停	哆哆嗦嗦地
8	329-5	ガサガサガサガサ	嘎嘎作响	滴滴答答地响个不停	滴滴答答地响个不停	沙沙声
9	302-6b	がたがた	嘎达嘎达的响声	咯嗒咯嗒地	嘎吱嘎吱	哗啦哗啦
10	303-2b	がたがた	嘎达嘎达的声响	咯嗒咯嗒	嘎吱嘎吱	哗啦(作响)
11	310-4	がたがた	嘎达嘎达的响声	咯嗒咯嗒	嘎吱嘎吱	哗啦哗啦
12	348-17	がたがた	浑身哆嗦地	浑身颤抖着	不住地抖着	打着哆嗦
13	353-3	がたがた	嘎达嘎达	咯嗒咯嗒的响声	嘎吱嘎吱地	哗啦哗啦
14	325-13	がっかり	很失望	绝望	失望透顶	失望透顶
15	301-4	がやがや	叽叽喳喳地	你一言我一语地	七嘴八舌地	你一言我一语叽叽喳喳地
16	345-18	がやがや	叽叽喳喳地	七嘴八舌地嚷嚷	忍不住地骚动(起来)	你一言我一语地嚷嚷
17	306-1b	がやがやがやがや	叽叽喳喳	乱了起来	吵	叽叽喳喳
18	302-1	がやがやがやがや	叽叽喳喳地说开了	七嘴八舌地	你一言、我一语地	你一言我一语地
19	316-5	がりがり	嚓嚓地	咯吱咯吱地	挥笔	沙沙的声响
20	323-11	カンカン	眶当当的响声	轰隆隆的(雷鸣)	一阵巨响	呼呼作响
21	337-2	かんかん	灿烂	炎炎	灿烂夺目	露出笑脸
22	325-16	キンキンと	尖利、刺耳的声音	电闪雷鸣	轰轰的低沉声响	电闪雷鸣
23	340-4b	きいと	刺耳的铃声	一阵刺耳的爆炸声	一阵刺耳的声音	在四周回响了一阵子
24	302-5b	きちんと	一动不动	一动不动地	端	纹丝不动地
25	313-1a	きちんと	排好了队	排好	认真地	排列好
26	345-12	きちんと	一直	なし	なし	なし
27	317-7b	きっと	抿着		抿着	紧抿着
28	327-1a	きっと	抿着	紧(闭着)	紧抿着	紧紧地抿着
29	327-7a	きっと	紧紧抿着	咬着	紧抿着	紧抿着
30	327-16b	きっと	紧紧抿着	咬着嘴唇	紧抿着	紧抿着
31	329-15	きっと	紧紧抿着	咬着嘴唇	紧抿着	紧抿着

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏊訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
32	342-3	きっと	なし	咬着 (嘴唇)	咬着 (嘴唇)	咬着 (嘴唇)
33	349-3	きっと	紧咬	咬紧	紧紧	咬着
34	307-14	ぎょっと	吓了一跳	吓了一跳	心头一惊	吃惊地
35	301-13	きよるきよる	来回打量	眨眼环 (视)	瞪大眼睛	なし
36	302-5a	きよるきよる	睁大眼睛望着	眨眼	怯生生地	时不时地转头
37	311-3	きらきら	闪着波光	(闪着光)	闪亮亮地	波光粼粼
38	329-12	きらきら	亮晶晶的	なし	缓缓	簌簌 (滚落)
39	327-2a	キラキラ	闪闪	一闪闪地	(闪烁着) 耀眼夺目的光芒	闪闪
40	314-7	きりきり	恨得牙齿痒痒的	(牙齿咬得) 咯咯响	嗒嗒	咬着牙
41	312-9	きりきりと	打着旋	转了几个圈	打着转	打着旋儿
42	311-17a	きろきろ	盯着看	不时地	偷偷地	投去好奇的目光
43	312-6	きろきろ	睁大眼睛	偷偷张望	好奇地	时不时地
44	318-2	ぐうっと	汩汩的响声	“咕嘟”	一声巨响	咕咚一声
45	341-16	ぐちゃぐちゃ	乱	なし	(搅) 个不停	一通乱 (捅)
46	333-3	くつくつ	扑哧扑哧地	偷偷地	哧哧地	哧哧
47	333-10	くつくつ	扑哧扑哧的 (笑声)	嗤嗤的	嘻嘻的 (窃笑声)	哧哧的笑声
48	334-10	くつくつ	扑哧扑哧地	嗤嗤	哧哧地	哧哧
49	341-12	ぐったり	无精打采, 叶子发蔫	枯萎了	无精打采	蔫蔫儿的
50	316-8a	くるくる	なし	なし	なし	なし
51	323-8	ぐるぐる	天地旋转	天旋地转	不住地打转	天旋地转
52	323-10	ぐるぐる	旋转着	旋转地不停	旋转着	旋转着
53	347-17	ぐるぐる	来回转	なし	绕了 (四五圈)	甩了 (四五圈)
54	326-2a	くるくるくるっと	旋转	(白光) 闪闪	一直打转	不断地
55	305-5	ぐるっと	绕过	绕了一圈	绕过	走过
56	311-8	ぐるっと	绕过	なし	绕过	绕过
57	311-16	ぐるっと	滴溜溜地	(环视)	骨碌碌地	(环视了操场) 一圈
58	322-8	ぐるっと	转过	なし	绕过	绕了一圈
59	325-9	ぐるっと	兜着圈子	蜿蜒曲折	原地打转	绕圈
60	319-2	ぐんぐん	なし	大踏步	快步	一马当先地
61	324-5	ぐんぐん	なし	なし	なし	断断续续地
62	325-7	ぐんぐん	飞快地	连忙 (往前追去)	快步	快步
63	350-17b	ぐんぐん	なし	使劲儿地	使劲地	なし
64	345-10	こちこち	东敲敲、西打打地	砰砰地	四处 (敲啊敲的)	なし

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏊訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
65	351-7	こちこち	三下五除二地	三下两下	胡乱地	唰唰地
66	352-17	ごとごと	类似东西煮沸般的声音	咣当咣当的响声	咚咚的响声	なし
67	350-7a	ごんごん	阵阵怒涛声	轰隆隆的巨响	隆隆乱鸣	轰隆声
68	325-18	こはごは	胆战心惊地	小心翼翼地	战战兢兢地	提心吊胆地
69	317-15	こぼこぼ	なし	不断	不断	なし
70	347-18	ごほごほ	不停地	なし	咳声连连	咕噜咕噜地
71	299-8	ごぼごぼ	汨汨地	咕嘟咕嘟地	なし	なし
72	327-8	ごろごろ	轰鸣	隆隆的(雷声)	隆隆的(雷声)	阵阵(雷鸣)
73	348-5	ごろごろごと	轰隆隆的	なし	隆隆的(雷声)	阵阵(雷鸣)
74	312-8c	さあっと	扬起一阵尘土	一股飞尘	满天的飞尘	尘土飞扬
75	320-18b	さあっと	嗖地	迅速	马上	瞬间
76	312-8a	ざあっと	哗哗地	(山风)四起	刷的一声	狂(风)
77	318-3	ざあっと	なし	“哗啦啦”地	沙沙地	沙沙地
78	333-8a	ざあっと	一大盆水	“倾盆大雨”	淋了(耕助)一身	全淋在了(耕助的头上)
79	351-1	ざくざく	なし	狼吞虎咽地	狼吞虎咽	なし
80	348-11	ざっこざっこ	哗啦啦	哗哗下	沙沙的	哗哗
81	348-14	ざっこざっこ	哗啦啦	哗哗下	沙沙的	哗哗
82	301-5b	さっさと	一溜烟地	快步	快步	快步
83	329-10b	さっと	突	なし	刷地	流泻而出
84	332-17	ざっと	稀里哗啦	なし	なし	稀里哗啦地
85	350-7b	ざっと	なし	なし	沙沙作响	なし
86	340-16	さっぱり	なし	一(条)……也……	なし	怎么都没什么(收获)
87	345-15a	さっぱり	……都……不……	根本……没有	根本就(抓不到鱼)	(一条鱼)也没有
88	345-17	さっぱり	就是没……	哪里有	还是不(见一条鱼)	なし
89	351-15	ざぶざぶ	一片汪洋	なし	嗒嗒的	全泡在水里
90	347-4	ざぶんと	咕咚一声	扑通一声	纵身	纵身
91	316-6	さらさら	哗啦哗啦地	(溪水)潺潺	潺潺	哗哗地
92	324-9b	さらさら	古怪的声响	飒飒(作响)	沙沙地	沙沙作响
93	350-10a	さらさらと	柔波	层层波澜	层层浪花	波浪阵阵
94	312-8b	ざわざわ	细碎的	沙沙地	窸窣窸窣地	沙沙声
95	325-1	ざわざわざわつと	哗哗的声响	沙沙直响	沙沙地低鸣	沙沙作响
96	304-3	しいんと	不由得屏住了呼吸	一声不吭	鸦雀无声	安静

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏞訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
97	307-9	しいんと	怯生生	默不作声	静静地	沉默地
98	307-18	しいんと	静了下来	不敢出声了	安静	闭上了嘴巴
99	310-12	しいんと	安安静静的	空荡荡的	一片寂静	安安静静的
100	324-14	シインと	一片寂静	死一般寂静	一片死寂	なし
101	326-9	しいんと	安静	死寂	沉寂	非常静谧
102	331-13b	しいんと	静悄悄的	なし	静得（不像有人住）	安安静静的
103	345-8b	しいんと	静静地	全神贯注地	静默不语	静悄悄地
104	345-13	しいんと	没人开口说话	安静地	大气不敢出地	なし
105	351-14	しいんと	静悄悄的，空无一人	空无一人	空无一人	一个人都没有
106	321-16	しうと	吆喝着	“驾驾”地	嘴里嘘嘘作响地	轻轻地
107	301-5a	しっかり	(夹)紧	(夹)紧	(夹)紧	(夹)紧
108	306-11	しっかり	好好(学习)	好好(学习)	努力	努力
109	323-1	しっかり	连忙	猛地	紧紧	なし
110	301-2b	じっと	专注地	凝(视)	直盯	目不转睛地盯着
111	304-13	じっと	盯着看	一个劲儿地张(望)	好奇地	好奇地
112	305-8	じっと	盯着看	紧(盯)	直盯着	把目光紧紧地锁定在
113	309-4	じっと	なし	なし	なし	认真地盯着
114	311-2	じっと	不停地	なし	なし	なし
115	311-4	じっと	なし	张(望)	专注地	目不转睛地
116	311-15	じっと	なし	不动	なし	なし
117	314-18b	じっと	なし	なし	一直	默(读)
118	315-9	じっと	一直	凝神注(视)着	注意	细心地
119	339-2a	じっと	一直盯着	一直看着	一直专心地	一直
120	350-9	じっと	なし	凝视着	静静地	凝视着
121	350-10b	じっと	なし	なし	静静地	一动不动地凝视着
122	350-17a	じっと	なし	注视着	なし	なし
123	317-4	じめじめ	潮湿阴暗	泥泞(难行)	潮湿的	湿漉漉的
124	337-1a	じめじめ	湿气很重	雾气弥漫	阴霾的	大(雾)
125	300-17	しゃんと	一本正经地	端(坐)	正襟危坐的	安安静静(坐着)
126	303-5	しょんぼり	干巴巴地	垂头丧气地	万分沮丧地	なし
127	304-10	じろじろ	两眼滴溜溜地	好奇地张(望)	直盯着	なし
128	341-2	じろじろ	上下打量着	上下打量着	盯着	上下打量着
129	348-4	しんしんと	直立不动、阴森可怕	なし	一片(漆黑)	一片(昏暗)
130	300-7	しんと	寂静的	静悄悄的	安静无声的	静悄悄的

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏞訳 (2012)	顔翠訳 (2015)
131	300-18	しんと	なし	静悄悄的	静	鸦雀无声
132	306-1a	しんと	安静了一会儿	安静了一下	安静	安静
133	306-6	しんと	静了下来	安静下来	安静	静下来
134	350-12a	しんと	静静地	なし	和煦	なし
135	308-11	ずうっと	なし	なし	なし	なし
136	317-3	ずうっと	很小	远远地	那么遥远	なし
137	319-10	ずうっと	很	なし	なし	なし
138	320-12	ずうっと	なし	(伸) 长	一直	呼哧呼哧地
139	309-5	すたすた	大步地	匆匆	急急地	匆忙
140	312-14	すたすた	大步流星地	大步流星地	自顾自地快步	自顾自地一步步
141	301-7	すっかり	なし	鼓起了勇气	兴致勃勃地	精神振奋地
142	304-7	すっかり	なし	なし	なし	なし
143	304-16	すっかり	对齐	(排) 好	なし	(排得) 笔直
144	319-18	すっかり	なし	(飘) 满了	多	布满了
145	321-2	すっかり	なし	面红耳赤	涨红	涨红
146	324-10	すっかり	(湿) 透	なし	(浸) 透	打(湿)
147	327-13	すっかり	(湿) 透	(湿) 透	全身都(湿)透	全身都(湿)透
148	330-3	すっかり	完全	放晴了	渐渐转晴	终于
149	333-11	すっかり	火冒三丈	怒气冲冲地	惹急	彻底(火了)
150	336-11	すっかり	なし	なし	(豁达地)	完全
151	342-5	すっかり	なし	なし	なし	なし
152	345-1a	すっかり	なし	なし	なし	なし
153	347-7	すっかり	越来越	なし	不寒而栗	なし
154	350-16	すっかり	なし	都	なし	なし
155	336-6	ずっと	大部分	更(多的时候)	大部分	大多数
156	304-2	すばすばと	一本正经地大踏步	紧紧地	亦步亦趋的	亦步亦趋
157	343-5	すばすばと	哑了哑嘴	なし	为难地	“老烟枪”
158	338-15	するする	噌噌地	敏捷地	なし	麻利地
159	323-12	せかせか	喘着粗气	急切地	气吁吁地	喘着气
160	317-7a	せかせかと	不由得加快脚步	匆匆地	赶集似的拼命	赶紧
161	330-5	そっと	悄悄	悄声	偷偷地	悄声
162	332-2	そっと	小心翼翼地	悄悄地	轻轻地	轻轻地
163	344-5	そっと	蹑手蹑脚地	なし	悄悄地	小心翼翼地
164	344-14	そっと	蹑手蹑脚地	なし	なし	なし
165	322-18a	そろそろど	悄悄	漫漫	轻轻	悄悄地

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏞訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
166	322-18b	そろそろど	悄悄地	なし	轻轻地	悄悄地
167	345-6	ぞろっと	站成一圈	なし	なし	なし
168	322-1b	だあ	走	“驾”地	“吓！”	“驾！”
169	322-5	だあだ	走	“驾！驾！”	连声	“驾——驾”
170	337-14	だあんだあんと	啪啪地	使劲儿	なし	なし
171	301-15	だぶだぶ	松垮垮的	肥	大得出奇的	肥大
172	307-16a	だぶだぶ	宽宽大大的	宽大的	宽松的	宽大的
173	308-14	だぶだぶ	宽大的	宽大的	宽松	なし
174	338-9	だぶだぶ	噼里啪啦地	拼命地	(打得) 那么响	用力地
175	345-8a	ぢゃぶぢゃぶ	哗里哗啦地	なし	なし	哗啦呼啦地
176	300-8	ちゃんと	なし		なし	なし
177	301-2a	ちゃんと	笔直地	一动不动地	一本正经地	安静地
178	301-14	ちゃんと	整整齐齐地	端(放)	端正地	纹丝不动地
179	302-16	ちゃんと	已经	已经	已经	なし
180	304-18	ちゃんと	なし	十分	齐	很(懂得)
181	308-6	ちゃんと	带好(东西)	好好	好	一定要
182	313-1b	ちゃんと	なし	なし	听话地	站好
183	313-3	ちゃんと	齐	なし	齐	齐
184	313-16	ちゃんと	なし	端端正正地	好	已经
185	314-6	ちゃんと	なし	从头到尾地看了个一清二楚	把这一切看在眼里	全都
186	314-18a	ちゃんと	なし	端端正正地	なし	严肃地
187	345-4	ちゃんと	なし	站好	なし	なし
188	328-9	チョロチョロ	红彤彤的火	有一堆红红的篝火	微弱的(火苗)	徐徐
189	312-17a	ちらっと	看了一眼	瞟了一眼	看了……一眼	扫了一眼
190	323-9	ちらっと	隐约之中	隐隐约约地	なし	なし
191	347-8	つるつる	非常	光溜溜的	滑溜溜的	湿滑湿滑的
192	307-16b	てかてか	亮亮的	亮	亮	发亮的
193	320-6	てかてか	油亮亮的	油光锃亮	油亮的	油光发亮
194	349-15	どうっと	迎头	迎面扑了上来	迎面扑来	迎面扑来
195	300-1	どうと	怒涛般的狂吼	阵阵	呼呼地	阵阵
196	302-6a	どうと	鸣！	猛地	突然	猛地
197	303-2a	どうと	呜呜！	猛地	嗖嗖地	狂(风)
198	322-12	どうどうどうどう	停！停！	“吁——吁——”	“吁吁吁”	“吁！吁！吁吁！”

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏢訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
199	350-11	どかどか	巨浪	不禁狂跳起来	扑通扑通地	波涛汹涌
200	324-8	どきどき	怦怦地	七上八下	(嘉助の心) 狂跳不已	怦怦直跳
201	348-12	どっこどっこ	呼啦啦	呼呼刮	隆隆的	呼呼
202	348-15	どっこどっこ	呼啦啦	呼呼刮	隆隆的	呼呼
203	307-8	どっと	红的一声	哄然(大笑)	忍不住哈哈大笑	哈哈(大笑)
204	333-14	どっと	哄笑	一阵哄笑	不由得大笑	哄笑
205	333-16	どっと	一声哄笑	一阵哄笑	哄堂大笑	哄笑
206	339-3	どっと	哄堂大笑	哄堂大笑	哈哈大笑	哄堂大笑
207	341-3	どっと	哄笑	开心地	哄笑	顿时笑翻了天
208	349-10	どっどど どど う どどうど どどう	咚! 咚咚咚咚啞啞! 咚咚啞! 咚咚!	咚, 咚咚, 咚咚—— 咚咚——咚, 咚咚 ——	咚, 咚咚, 咚隆隆, 咚隆隆, 咚隆隆隆隆;	呼! 呼呼! 呼隆! 呼隆!
209	299-2	どっどど どど う どどうど どどう	咚! 咚咚咚咚啞啞! 咚咚啞! 咚咚!	咚, 咚咚, 咚咚—— 咚咚——咚, 咚咚 ——	咚, 咚咚, 咚隆隆, 咚隆隆, 咚隆隆隆隆;	呼! 呼呼! 呼隆! 呼隆!
210	299-5	どっどど どど う どどうど どどう	咚! 咚咚咚咚啞啞! 咚咚啞! 咚咚!	咚, 咚咚, 咚咚—— 咚咚——咚, 咚咚 ——	咚, 咚咚, 咚隆隆, 咚隆隆, 咚隆隆隆隆;	呼! 呼呼! 呼隆! 呼隆!
211	349-6	どっどど どど う どどうど どどう	咚! 咚咚咚咚啞啞! 咚咚啞! 咚咚!	咚, 咚咚, 咚咚—— 咚咚——咚, 咚咚 ——	咚, 咚咚, 咚隆隆, 咚隆隆, 咚隆隆隆隆;	呼! 呼呼! 呼隆! 呼隆!
212	349-9	どっどど どど う どどうど どどう	咚! 咚咚咚咚啞啞! 咚咚啞! 咚咚!	咚, 咚咚, 咚咚—— 咚咚——咚, 咚咚 ——	咚, 咚咚, 咚隆隆, 咚隆隆, 咚隆隆隆隆;	呼! 呼呼! 呼隆! 呼隆!
213	338-16	どぶーんと	咕咚一声	咕咚一声	扑通	扑通一声
214	339-2b	どぶんと	一个猛子扎到	“扑通”一声	なし	一头
215	339-9	どぶんと	“扑通”一声	一头	扑通一声	なし
216	343-17	どぶんと	咕咚一声	なし	なし	扑通一声
217	337-13	どぶんどぶんと	扑通扑通地	一个接着一个地	纵身	扑通扑通地
218	348-9	どぼんと	咚的一声	扑通一声	なし	なし
219	300-14	どやどや	相继	蜂拥	一拥	陆陆续续
220	311-9	どんどん	なし	なし	なし	眨眼间
221	315-18	どんどん	(唱得) 很带劲		なし	(唱得) 很起劲
222	322-11	どんどん	越跑越快		越跑越快	渐渐
223	330-4	どんどん	不停地	なし	不断地	疾速地
224	332-7	どんどん	なし	跑光了	越走越远	越走越远
225	326-18	どんどんどんどん	呼呼地	越刮越猛	(风) 一阵阵越吹越大	(风) 阵阵袭来

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏞訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
226	350-6	どんだんどん ん	不停地	なし	不断地	なし
227	350-12b	どんだんどん ん	なし	なし	奔驰而去	暴虐地
228	346-6	ぬるぬる	なし	湿漉漉的	滑溜的	泥泞
229	323-15	のっこり	呆呆地	なし	呆	なし
230	327-4	のっそりと	静静地	なし	呆	伫(立)
231	350-14	はあ、はあ、	长长地吸了口气	吸了一大口气	呼吸也急促起来	呼吸也变得急促
232	350-2	はあと	长吁了一口气	なし	吐了一大口气	使劲地(吐出一口气)
233	316-9	はあはあ	气喘吁吁	气喘吁吁	气喘吁吁	气喘吁吁
234	317-9	はあはあ	上气不接下气	上气不接下气	喘着气	上气不接下气
235	322-7	はあはあ	喘粗气	喘息了(一阵)	直喘气	气喘吁吁
236	339-16	ぱくぱく	吞云吐雾	吧嗒吧嗒地	大口大口地	なし
237	320-7	ばしゃばしゃ	悠闲地	悠闲地	悠闲地	悠闲地
238	347-6	ばしゃばしゃ	乱蓬蓬的	なし	乱	なし
239	350-1a	ばたっと	なし	なし	砰然	なし
240	307-12	ばたばた	噼里啪啦地	啪哒啪哒	纷纷	啪嗒啪嗒
241	347-13	ばたばた	遮遮挡挡	慌忙	乱了手脚	左躲右闪
242	326-11a	ばたばた	なし	なし	耀眼地	电光翻腾
243	324-9a	パチパチ	古怪的声响	噼噼啪啪	刷刷地	なし
244	334-6	パチパチ	眨了眨	眨巴着	眨了眨	眨了眨
245	326-11b	パチパチパチッ と	激烈的	噼噼啪啪地	噼里啪啦的(火花)	噼里啪啦的(火花)
246	311-10	はっきり	大声	大声地	相当爽朗的	高声
247	326-8	はっきり	清楚地	清晰的	如此清晰(入耳)	清晰地
248	319-11	ぱっと	一下子	普照(大地)	忽然	突然
249	326-2b	バラッと	唰的一下	哗哗地	啪地(甩掉一身的露珠)	啪嗒啪嗒
250	303-17	ぴかぴか	锃亮锃亮的	锃亮的	亮晶晶的	亮晶晶的
251	345-15b	びくっと	哆嗦了一下	なし	吓了一跳	晃动了一下
252	322-1a	ぴしゃんと	“啪”的一声	“啪”地	用力	突然用力
253	344-11a	ひそひそ	交头接耳	悄声	叽叽咕咕地	小声地
254	344-11b	ひそひそ	轻声	なし	なし	なし
255	347-12	ひそひそ	悄悄地	窃窃私语	唧唧喳喳地	交头接耳
256	342-7	びちゃびちゃ	呱呱呱呱地	啪嚓啪嚓地	哗啦哗啦地	なし
257	300-5	びっくり	吓得		吓得	吓了一跳

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鏞訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
258	327-16a	びっくり	吓坏	吓坏	吓坏	吓坏
259	331-2	びっくり	吓了一跳	一惊	吓坏	吓了一跳
260	333-8b	びっくり	吓了一跳	吓了一跳	吓得	吓了一跳
261	343-1	びっくり	惊讶地	吓了一跳	吓得	吓了一跳
262	349-12	びっくり	猛地惊醒	惊醒	猛然惊醒	惊醒
263	313-11	ぴったり	紧	严严实实地	紧	紧紧地
264	328-12	ひひんと	嘶鸣着	长鸣了一声	嘶嘶地(哀叫)	嘶嘶地(鸣叫)
265	316-8b	ひゅうひゅう	嗖嗖地	なし	耍	なし
266	348-6	ひゅうひゅう	吹着哨子呼啸而过	暴风骤雨席卷而来	风也吹得好大好急	狂风大作
267	341-8	ぴょんぴょん	なし	欢蹦乱跳	なし	又蹦又跳
268	327-1b	ひらっと	忽悠悠地	猛地	轻飘飘地	なし
269	313-7	ひらりと	噌地	なし	突然	以迅雷不及掩耳之势
270	304-5	ピルルと	吹响了清脆的哨子	嘀嘀地	尖利的声音	“嘘——”
271	304-6	ピルルルと	低低地回响着	低沉地	低沉的哨音	低低地(反弹了回来)
272	339-1	ふうと	なし	なし	突然间	阵阵(雾一样的水花)
273	348-7	ぶちぶち	水柱	一串串碗大的水泡	滴滴答答地水花四溅	无数浪花
274	329-10a	ふっと	骤然	なし	刹那间	突然
275	350-15	ふっと	猛地	舒了一口气	吐出一口气	深呼吸一口气
276	327-2b	ふと	猛地	猛地	突然	蓦然
277	300-6	ぶるぶる	なし	浑身不禁发起抖来	なし	浑身瑟瑟发抖
278	327-7b	ぶるぶる	不住地	不由得全身发起抖来	不由自主地全身抖了起来	浑身颤抖
279	350-18	ぶるぶる	なし	稀里哗啦地	匆匆	胡乱
280	319-7	ぶるぶる	呼哧呼哧地	几声嘶鸣	噗噗地	翕动着嘶叫
281	350-1b	ぶるると	不停地呼哧着	一声嘶鸣	噗噜噜地	喷着鼻息嘶叫
282	312-17b	プルルッと	嘀——的一声	嘀嘀地	“哗——”	嘘的一声
283	320-18a	べろりと	なし	なし	なし	なし
284	324-4	ぼうっと	なし	雾蒙蒙的	一下子朦胧起来	模糊不清
285	340-3	ぼお	轰隆一声	“轰隆”一声巨响	一声巨大的声响	沉闷的巨响
286	302-17	ぽかんと	不相信自己的眼神	目瞪口呆	愣住	大吃一惊
287	324-15	ポタリポタリと	なし	滴答滴答的声响	就像是在耳边一样清晰	露珠滴落的声音
288	347-11	ぼちゃぼちゃ	不停地划着水	なし	哗啦哗啦地	奋力
289	347-15	ぼちゃんぼちゃん	なし	なし	扑通、扑通地	なし

	所在	原文	王曉燕訳 (2007)	周龍梅、彭懿訳 (2009)	徐華鐸訳 (2012)	顏翠訳 (2015)
290	328-2	ほっと	なし	缭绕在雾中	缓缓	轻(烟)
291	317-11	ホッホウ	呼哧呼哧地	“呼——”	“哈哈”地	“呼啊呼啊”
292	317-1	ぼやっと	太阳钻到云里去了	模糊	模糊	暗下去
293	313-17	ぼろぼろ	なし	流出两串泪水	滚出豆大的泪珠	なし
294	310-13	ぼんやり	一道道擦抹后的白印子	一道道白花花的	灰	留下的白色印迹
295	318-7	ぼんやり	浮现	隐约	缥缈的	なし
296	325-10	ぼんやり	なし	なし	不明显的	なし
297	337-1b	ぼんやり	朦朦胧胧	朦胧的	灰蒙蒙	轮廓
298	340-4a	むくっと	掀起了一股水浪	掀起万丈波澜	老(高)	骤然(炸开)
299	345-1b	むくむく	(山峰压阵)	(壮观云峰)	团团地	层层
300	314-1	むっくり	腾的一下	心花怒放地	马上	なし
301	344-15	むっと	なし	なし	呛鼻	散发着
302	331-13a	もうもうと	雾蒙蒙的	雾腾腾的	烟雾弥漫的	热浪腾腾的
303	332-9	もくもく	一团一团浓密的	果实累累的	一大串一大串的	一丛(葡萄藤)
304	305-2	もぢもぢ	坐立不安	不住地扭动着身子	不停地扭动着身体	不停地扭来扭去
305	308-12	もぢもぢ	坐立不安	迟迟不肯离去	磨磨蹭蹭的	磨磨蹭蹭的
306	311-17b	もぢもぢ	不好意思	なし	なし	なし
307	321-3	もぢもぢ	蘑菇了一阵子	不自在	忸怩	扭捏
308	311-14	もにやもにやと	嘟嘟囔囔的声音	嘟嘟囔囔地	含糊不清的口中呢喃	咕哝着
309	301-3	ゆっくり	なし	なし	悠闲地	慢悠悠地
310	339-15	ゆっくり	慢悠悠地	漫漫悠悠地	悠闲地	慢悠悠地
311	343-13	ゆっくり	慢吞吞地	慢吞吞地	放慢脚步	慢腾腾地
312	300-10	りんと	(睁)大	(睁)大	(睁)大	(睁)大
313	309-2	りんと	なし	水灵灵的大(眼睛)	水灵灵的大(眼睛)	なし
314	300-16	わあと	なし	哇的一声	哇哇	哇的一声
315	340-9	わあわあ	开心得大叫起来	欢天喜地	大吼大叫着	手舞足蹈
316	346-18	わあわあ	哇哩哇啦地	哇啦哇啦地	なし	哇哇(大叫)
317	338-4	わくわく	浑身直打哆嗦	哆哆嗦嗦地	なし	哆哆嗦嗦地

2 1 補足資料

『萬葉集』におけるオノマトペの出典と抜粋

1. 「都良都良」

萬葉集卷一・54

- 原文：

巨勢山乃 列列椿 都良都良 尔 見乍思奈 許湍乃春野乎

- 読み下し：

巨勢山の つらつら椿 つらつらに 見つつ俣はな 巨勢の春野を

- 口語訳：

巨勢山の つらつら椿 つらつらと 見ながら俣ぼうよ 巨勢野の春景を

萬葉集卷一・56

- 原文：

河上乃 列列椿 都良都良 尔 雖レ見安可受 巨勢能春野者

- 読み下し：

河上の つらつら椿 つらつらに 見れども 飽かず 巨勢の春野は

- 口語訳：

川ベリの つらつら椿 つらつらと 見て見飽さない 巨勢野の春景は

2. 「清」

萬葉集卷一・79

- 原文：(ピックアップ)

…衣乃上従 朝月夜 清 尔見者 栲乃穗尔…

- 読み下し：

…衣の上^{ころも うえ}ゆ 朝月夜^{あさづくよ} さやかに見れば たへのほに…

- 口語訳：

…わたしの衣越しに照らす 朝月の光で はっきり見ると 真っ白に…

3. 「清^{さや}」

萬葉集卷二・133

- 原文：

小竹之葉者^{ささの はは} 三山毛清^{みやまも さやに} 乱友^{さやげども} 吾者妹思^{あれは いもおもふ} 別来礼婆^{わかれきぬれば}

- 読み下し：

笹^{ささ}の葉は み山もさやに さやげども 我は妹思ふ、 別来^{わか}来ぬれば

- 口語訳：

笹^{ささ}の葉は 全山さやさやと 風に吹かれ乱れているが それでもわたしは妻のことを思
う 別れて来たので

萬葉集卷二・135

4. 「清^{さやに}尔」

- 原文：(ピックアップ)

…大舟^{おほふねの}之 渡乃山之 黄葉之 散之乱尔 妹袖 清^{さやに}尔毛不_レ見…

- 読み下し：

…大船の 渡の山の もち葉の 散りのまがひに 妹が袖 さやにも見えず…

- 口語訳：

…大船の 渡のもみじ葉が 散り乱れて 妻の袖も はっきりとは見えず…

5. 「由久遊久^{ゆくゆく}」

萬葉集卷二・130

- 原文：

丹生乃川^{にふのかは} 瀬者不_レ渡而 由久遊久^{ゆくゆくと} 恋痛^{こひいたし}吾弟^{わがせ} 乞^{いで}通^{かよひ}来^こ来^ね来^ね

- 読み下し：

丹生の川 瀬は渡らずて ゆくゆくと 恋痛し我が背 いで通ひ来ね

- 口語訳：

丹生の川の 瀬など渡らずに 真っすぐに 恋しくてならない弟よ さあ通^{かよ}ってきておくれ

6. 「能杼」

萬葉集巻二・197

- 原文：

明日香川 しがらみわたし せかませば ながるみづも のどにかあらまし
 明日香川 しがらみわたし せかませば ながるみづも 能杼尔賀有万思

- 読み下し：

明日香川 しがらみ渡し 塞かませば 流るる水も のどにかあらまし

- 口語訳：

明日香川に しがらみをかけ渡して せき止めでもしていたら 流るる水も ゆったりとあつたろうに

7. 「敷布」

萬葉集巻二・206

- 原文：

神楽浪之 しがさざれなみ しくしくに つねにときみが おもほえたりける
 神楽浪之 しがさざれなみ 敷布尔 常丹跡君之 所念有計類

- 読み下し：

楽浪の 志賀さざれ波 しくしくに 常にと君が 思ほえたりける

- 口語訳：

楽浪の 湖のさざれ波のように 絶え間なく 皇子のご長命を 念じ申し上げておりましたのに

萬葉集巻四・698

- 原文：

かすがのに あきあるくの しくしくに あほこひまさる つきにひにけに
春日野尔 朝居雲之 敷布二 吾者恋益 月二日二異二

- 読み下し：

かすがの 朝居る雲の しくしくに 我は恋増さる 月に日に異に

- 口語訳：

春日野に 朝たなびいている雲のように しきりに わたしは恋がつのります 月日を
追ってだんだんと

8. 「殆」

萬葉集卷三・331

- 原文：

わがさかり またをちめやも ほとほとに ならみやこそ み ずかなりなむ
吾盛 復将_レ変八方 殆 寧樂京乎 不_レ見與將_レ成

- 読み下し：

- 我が盛り またをちめやも

ほとほとに 奈良の都を 見ずかなりなむ

- 口語訳：

わたしの元気だった頃が また戻って来ることがあろうか ひょっとして 奈良の都を
見ずに終わるのではなからうか

9. 「曲曲」

萬葉集卷三・333

- 原文： 浅茅原 曲々二 物念者 故郷之 所_レ念可聞

- 読み下し：

浅茅原 つばらつばらに 物思へば 古りにし里し 思ほゆるかも

- 口語訳：

(浅茅原) つくづくと 物思いに沈んでいると 明日香の 古京が 思い出されるなあ

10. 「思美弥」

萬葉集卷三・460

- 原文：(ピックアップ)

…^{おほきみの}大皇之 ^{しきますくに}敷座国尔 ^{うちひさす}内日指 ^{みやこし}京 ^{みみ}思美弥尔 ^{さといへは}里家者 ^さ佐波尔 ^に雖 ^{ども}在 ^{いかさまに}何方尔 ^{おもひけめかも}念鷄目鴨

…

- 読み下し：

…^{おほきみ}大君の ^敷敷きます国に ^{うちひさす}うちひさす ^都しみにに ^{さと}里家は ^ささはにあれども ^{いかさ}いかさまに ^思思ひけめかも…

- 口語訳：

…天皇の 治められる国に (うちひさす) 都でもぎっしりと 里や家は たくさんあるのに どのように 思われたのか…

11. 「波都波都」

萬葉集卷四・701

- 原文：

^{はつ}波都 ^{はつ}波都尔 ^{ひとを}人乎 ^{あひみて}相見而 ^{いかに}何 ^{あらむ}将 ^{いづれの}有 ^ひ何 ^{にか}日二 ^{またよ}箇 ^{そに}又外二 ^み将 ^む見

- 読み下し：

はつはつに 人を相見て ^{いかに}いかにあらむ ^{いづれの}いづれの日にか ^{また外}また外に見む

- 口語訳：

ちらとだけ お目にかかって ^{いったい}いったい ^{いつにな}いつになったら ^{またよ}またよそながらお目にかかれるでしょうか

12. 「多豆多頭」

萬葉集卷四・709

- 原文：

^{ゆふ}夕闇者 ^{みち}路 ^{たづ}多豆 ^{たづ}多頭四 ^{つき}待 ^{まち}月而 ^{いませ}行 ^{わが}吾背子 ^{その}其間尔 ^も母 ^み将 ^む見

- 読み下し：

^{ゆふ}夕闇は ^道たづたづし 月待ちて ^{いませ}いませ ^{わが}我が ^せ背子 ^{その}その間にも見む

- 口語訳：

宵闇は 道が分かりにくうございます 月の出を待って お帰りくださいあなた その間だけでも あなたのお顔を見てみましょう

13. 「^{たかたか}高高」

萬葉集卷四・758

- 原文：

しらくもの たなびくやまの たかたかに あがおむいもを みむよしもがも
白雲之 多奈引山之 高々二 吾念妹乎 将レ見因毛我母

- 読み下し：

しらくもの たなびく山の たかたかに あが思ふ妹を 見むよしもがも

- 口語訳：

白雲の たなびく山のように 高く伸び上がって 待ち望んでいるあなたに 逢う機会はないのでしょうか

14. 「^{なほなほ}奈保奈保」

萬葉集卷五・801

- 原文：

ひさかたの あまぢはとほし なほなほに いへにかへりて なりをしまさに
比佐迦多能 阿麻遲波等保斯 奈保奈保尔 伊弊尔可弊利提 奈利乎斯麻佐尔

- 読み下し：

ひさかたの あまぢは遠し なほなほに いへに帰って なりをしまさに

- 口語訳：

(ひさかたの) あまぢは遠い おとなしく 家に帰って 家業をするがよい

15. 「^{たんぜん}淡然」

萬葉集卷五・814

- 原文：(ピックアップ)

…淡然自放、快然自足。…

- 読み下し：

…淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。…

- 口語訳：

…さっぱりとして各自気楽に振舞い、愉快になって各自満ち足りた思いでいる。

16. 「快然」

萬葉集卷五・814

- 原文：(ピックアップ)

…淡然自放、快然自足。…

- 読み下し：

…淡然に自ら放し、快然に自ら足りぬ。…

- 口語訳：

…さっぱりとして各自気楽に振舞い、愉快になって各自満ち足りた思いでいる。

17. 「逍遙」

萬葉集卷五・852

- 原文：(ピックアップ)

余以暫往_二松浦之_一逍遙、聊臨_二玉嶋之_一潭_二遊覽、忽值_二釣_レ魚女子等_一也。

- 読み下し：

余、暫に松浦の_二逍遙に往きて、聊かに玉島の潭に臨みて遊覽するに、忽ちに

魚を釣る女子等に値ひぬ。

- 口語訳：

わたしは、たまたま松浦の地に行つて逍遙し、ちょっと玉島川の淵に臨んで遊覧したところ

ろが、はからずも魚を釣っている娘たちに出逢つた。

18. 「唯唯」

萬葉集卷五・852

- 原文：(ピックアップ)

下官対日、唯々、敬奉_二芳命_一。

- 読み下し：

下官対へて曰く、「唯々、敬^をみて芳命^を奉^{うけたま}はらむ」といふ。

- 口語訳：

わたしは答えた、「はいはい、謹んで仰せに従いましょう」と。

19. 「波漏波漏」

萬葉集卷五・866

- 原文：

波漏波漏 於忘方由流可母 志良久毛能 知弊仁辺多天留 都久紫能君仁波

- 読み下し：

はろはろに 思ほゆるかも 白雲の 千重に隔てる 筑紫の国は

- 口語訳：

遙かに遠く 思われることです 白雲が重に立ちはだかっております 筑紫の国は

20. 「久礼久礼」

萬葉集卷五・888

- 原文：

都祢斯良農 道乃長手袁 久礼久礼等 伊可尔可由迦牟 可利弓波奈斯尔 一云、

可例比波奈之尔

- 読み下し：

常知らぬ 道の長手を くれくれと いかにか行かむ 糧はなしに<一>に云ふ、「干飯はなし

に」>

- 口語訳：

行き馴れぬ 遠い旅路を 暗い心で どうして行けばよいか 食糧も持たずに<また「乾飯も持たずに」>

21. 「毗之毗之」

萬葉集卷五・892

- 原文：(ピックアップ)

かぜまじり あめふるよの あめまじり ゆきふるよの すべもなく さむくしあれば かたしほを とりつづし
風雑 雨布流欲乃 雨雑 雪布流欲波 為部母奈久 寒乃安礼婆 堅塩乎 取都豆之

ろひ かすゆぎけ うちすすろひて しはぶかひ はなびしびしに しかとあらぬ
呂比 糟湯酒 宇知須須呂比弓 之叵夫可比 鼻毗之毗之尔 志可登阿良農

- 読み下し：

かぜま 雨交じり 雨降る夜の 雨交じり 雪降る夜は すべもなく 寒くしあれば 堅塩を

取りつづしろひ かすゆぎけ 糟湯酒 うちすすろひて しはぶかひ 鼻びしびしに 然とあらぬ

- 口語訳：

風に交じって 雨が降る晩 雨に交じって 雪の降る晩 どうしようもないほど 寒い
ので 堅塩を 少しずつつまんで口に入れ 糟湯酒をちびちびすすって 咳き込んで
鼻水をすすり ろくに生えてもない

22. 「髻髻」

萬葉集卷七・1152

- 原文：

かちのおとそ ほのかにすなる あまをとめ おきつもかりに ふなですらしも 一云、ゆうさればかちのおとすなり
梶之音曾 髻髻為鳴 海未通女 奥藻刈尔 舟出為等思母 一云、暮去者梶之音為奈利

- 読み下し：

かち おとそ ほのかにすなる 海人娘子 沖つ藻刈りに ふなで 舟出すらしも<一に云ふ、「夕されば

梶の音すなり」>

- 口語訳：

梶の音が ほのかにしている 海人おとめたちが 沖の藻刈りに 舟を漕ぎ出すのだろ

う<また「夕方になると 梶の音がする」>

23. 「湯谷絶谷」

萬葉集卷七・1352

- 原文：

わがこころ 湯谷絶谷 浮尊 辺毛奥毛 依勝益士

- 読み下し：

我が心 ゆたにたゆたに 浮き尊 辺にも沖にも 寄りかつましじ

- 口語訳：

わたしの心は ゆったりしたり動揺したりで 浮き尊のように 岸にも沖にも 寄って
しまえそうにない

24. 「保杼呂保杼呂」

萬葉集卷八・1639

- 原文：

あわゆき 保杼呂保杼呂 零敷者 平城京師 所思念可聞

- 読み下し：

沫雪の ほどろほどろに 降り敷けば 奈良の都し 思ほゆるかも

- 口語訳：

沫雪が うっすら地面に 降り積ると 奈良の都が 思い出される

25. 「端正」

萬葉集卷九・1738

- 原文：(ピックアップ)

しながとり あほにつぎたる あづさゆみ すゑのたまなは わなわけの ひろきわぎも こしほその すがるをとめの そのかほ

の 端正 如花 咲而立者……

- 読み下し：

しなが鳥 安房に継ぎたる 梓弓 末の珠名は 胸別の 広き我妹 腰細の すがる

娘子の その姿の きらぎらしきに 花のごと 笑み立てれば……

- 口語訳：

(しなが鳥) 安房あはの地続き (梓弓) 末の珠名は 胸幅むなばの 広い女で 腰細こしほその すがる

おとめだが その容姿が 小綺麗こぎれいなうえに 花のように にこにこして立っていると……

26. 「由奈由奈」

萬葉集卷九・1740

- 原文：(ピックアップ)

由奈由奈ゆなゆなは いきさへたえて 後遂のちつひに 命死いのちしにける

- 読み下し：

ゆなゆなは 息さへ絶えて 後遂に 命死にける

- 口語訳：

そのあとは 呼吸も絶えて あげくの果てには 死んでしまったという

27. 「之努努」

萬葉集卷十・1831

- 原文：

朝霧あさぎりに 之努努しのの尔所にぬ濡れて 喚よぶ小鳥こどり 三船みふね山やま従ゆ 喧渡なきわた所み見ゆ

- 読み下し：

朝霧あさぎりに しののに濡ぬれて 呼よぶ子鳥こどり 三船みふねの山やまゆ 鳴き渡る見ゆ

- 口語訳：

朝霧に ぐっしょり濡ぬれて 呼よぶ小鳥こどりが 三船みふねの山やまを 泣き渡なっている

萬葉集卷十・1977 (しのの)

28. 「由良」

萬葉集卷十・2065

- 原文：

あしだまも ただまも ゆらに おるはたを まみがみけしに ぬひもあむかも
足玉も 手珠毛ゆらに 織る服を 君が御衣に 縫ひもあへむかも

- 読み下し：

あしだま ただま ゆらに おるはたを まみがみけしに ぬひもあむかも
足玉も 手玉もゆらに 織る服を 君が御衣に 縫ひもあへむかも

- 口語訳：

足玉も 手玉も鳴るほどせつせと 織っている布を 君の着物に 縫いおおせるだろうか

29. 「急急」

萬葉集卷十・2108

- 原文：

あきかぜは とくとくふきこ はぎのはな ちらまくをしみ きほひたむみむ
秋風者 急急吹来 萩の花 散らまく惜しみ 競ひ立たむ見む

- 読み下し：

秋風は とくとく吹き来 萩の花 散らまく惜しみ 競ひ立たむ見む

- 口語訳：

秋風よ さっさと吹いて来い 萩の花が 散るのを惜しんで かぶりを振っているさまを見よう

30. 「響動」

萬葉集卷十一・2717

- 原文：

あきごちに むでこすなみの よそめにも あはぬものゆゑ たきもとどろに
朝東風尔 井堤超浪之 世染似裳 不レ相鬼故 滝毛響動二

- 読み下し：

あきごちに むでこすなみの よそめにも あはぬものゆゑ たきもとどろに
朝東風に むで越す波の 外目にも 逢はぬものゆゑ 滝もとどろに

- 口語訳：

朝東風で 堰を越えてよそへ行く波のように よそ目ですら 逢ったこともないのに 滝の音のように噂が高いことだ

萬葉集卷十一・2840

- 原文：

いくばくも 不_レ零^{らぬ}雨^{あめ}故^{ゆゑ} 吾^{わが}背^せ子^こ之^の 三^み名^な乃^の幾^こ許^{くだく} 滝^{たき}毛^も響^う動^{どう}二^に

- 読み下し：

いくばくも 降^{あめ}らぬ^{ゆゑ}雨^{あめ}故^{ゆゑ} 我^{わが}が^せ背^こ子^こが^が み名^なの^のこ^こだ^{くだく}く 滝^{たき}も^もと^とど^どろ^ろに

- 口語訳：

なにほども 雨は降らないのに あの人の^{うわさ}噂はこんなに 滝の音のように高くて

31. 「尔故余漢」

萬葉集卷十一・2762

- 原文：

あし^{あし}か^かき^きの^の な^{なか}か^かの^のに^にこ^こぐ^ぐさ^さ に^にこ^こよ^よか^かに わ^{われ}れ^れと^とあ^あま^まし^{して}て^て ひ^{ひと}と^とし^しら^ら ゆ^ゆな^な

- 読み下し：

あし^{あし}か^かき^きの^の 中^{なか}の^のに^にこ^こぐ^ぐさ^さ に^にこ^こよ^よか^かに わ^{われ}れ^れと^とあ^あま^まし^{して}て^て 人^{ひと}に^にし^しら^らゆ^ゆな

- 口語訳：

あし^{あし}か^かき^きの^の 中^{なか}の^のに^にこ^こぐ^ぐさ^さの^の に^にこ^こよ^よか^かに わ^{われ}た^たし^しに^にあ^あま^まな^なを^を見^みせ^{せて}て 二^{ふた}人^{にん}の^の仲^{なつ}を^を人^{ひと}に^にし^しら^られ^{れる}る^でないぞ

32. 「長永」

萬葉集卷十一・2802

原文：

読み下し：

口語訳：

33. 「音杼呂」

萬葉集卷十一・2805

- 原文：

いせのうみゆ なぎくるたづの おとどろけ きみがきこさば あれこひめやも
伊勢能海従 鳴来鶴乃 音杼呂毛 君之所聞者 吾将恋八方

- 読み下し：

いせの海ゆ 鳴き来る鶴の 音どろも 君が聞きさば 我恋ひめやも

- 口語訳：

伊勢の海から 鳴いて来る鶴のように ^{とおね}遠音だけでも あなたが聞せてくださるなら わ
たしは恋い^{こが}焦れるものですか

*注釈

音どろも：

このモはダニの意だが、音ドロは未詳。遠く聞える音響の意か。オトに、驚ク・オドロオドロシなどのオドロが接して約音化したものをする説など諸説がある。

34. 「由多」

萬葉集卷十二・2867

原文：

かくばかり こひものそと しらませば そのよはゆたに あらましものを
如是許 将レ恋物其跡 知者 其夜者由多尔 有益物乎

読み下し：

かくばかり 恋ひむものそと 知らませば その夜はゆたに あらましものを

口語訳：

これほどに 恋しくなると 知っていたら あの晩ゆっくりして いたらよかったのに

35. 「湯桜干」

萬葉集卷十二・3174

- 原文：

いざりする あまのかぢのおと ゆくらかに いもはこころに のりにけるかも
射去為 海部之楫音 湯桜干 妹心 乘来鴨

- 読み下し：

いざりする 海人の梶の音 ゆくらかに 妹は心に 乗りにけるかも

- 口語訳：

漁をする 海人の梶の音のように そろそろと あの娘はわたしの心に のしかかってきた

36. 「とををに」

萬葉集卷十三・3223

- 原文：

みそつきがえに みづえさす あきのもみぢば まきもてる こすずもゆらに たわやめに あれはあれども ひきちて みね
卅楓枝丹 水枝指 秋 赤葉 真割持 小鈴文由良尔 手弱女尔 吾者有友 引攀而 峯

もとををに ふさたおり あれはもちていく きみがかざしに
文十遠仁 掬手折 吾者持而往 公之頭刺荷

- 読み下し：

…三十楓が枝に みづ枝さす 秋のもち葉 巻き持てる 小鈴もゆらに たわやめに 我

はあれども 引き攀ちて みねもとををにふさ手折り 我は持ちて行く 君がかざしに

- 口語訳：

楓の木の枝々に 鮮やかに色づいた秋の紅葉を 手に巻いた 小鈴を鳴らして たおやめ

で わたしはあるが 引きつかんで 梢も揺れるほどに 束ね折って わたしは持って行く 君のかんざしにするため

注釈：

「みねもとををに」：

このミネは山頂の意から転じて、木の最高部、梢を意味する用法。

トヲヲ：たわみ曲がるさまを表す擬態語。¹

旺文社『全訳古語辞典』第四版 ；

「とををに」形動ナリ

¹ 小島憲之・木下正俊・東野治之校注 新編日本古典文学全集8『萬葉集③』<全四冊>p388 1995.12.10

しなうさま。たわむさま。たわわ。

37. 「^{とををにも}十緒」

萬葉集卷十・1896

- 原文：

はるされば しだりやなぎの とををにも いもはこころに のりにけるかも
春去 為垂柳 十緒 妹心 乗在鴨

- 読み下し：

春されば しだり^{やなぎ}柳の とををにも 妹は^{いも}心に 乗り^こにけるかも

- 口語訳：

春になると しだれ柳が たわむようにしなやかに あの^こ娘はわたしの心に のしかかっ
てきた

注釈：

「とををにも」

トヲヲは自らの重みでたわみ曲がった状態を表す語。タワワともいい、二三一五の「或云」にはタワタワという語形も見える。ここは新柳のたおやかな感じによって、「妹」がしなやかに身をもたせ掛けてくる感触にたとえた。²

38. 「^{とををに}等乎々尔」

萬葉集卷十・2315

- 原文：

あしひきの やまぢもしらず しらかしの えだも^{とををに} 雪^{ゆきのふれば}落者或云、^{えだもたわ}枝毛多和々々
足引 山道不^ら知 白^{しら}檀^{かし}の 枝^{えだ}も^{とををに} 等乎々尔 雪^{ゆきのふれば}落者或云、^{えだもたわ}枝毛多和々々

- 読み下し：

あしひきの ^{やまぢ}山道も知らず ^{しら}白檀^{かし}の ^{えだ}枝も^{とををに} 等乎々尔 雪の降れば<或は^い云ふ、「枝もたわ
わ」>

- 口語訳：

(あしひきの) 山道もどこだかわからない ^{しら}白檀^{かし}の 枝も^{えだ} たわむほどに 雪が降っている
ので<あるいは「枝もたわわに」>

² 小島憲之・木下正俊・東野治之校注 新編日本古典文学全集 8 『萬葉集③』 <全四冊> p47 1995.12.10

注釈：

「枝もとををに」

トヲヲは重みでたわみ曲がる状態を表す語。タワタワの略、タワワの母音交替であろうが、上代語にタワワの確例はない。³

39. 「多和多和」

萬葉集卷十・2315

- 原文：

あしひきの やまぢもしらず しらかしの えだもとををに ゆきのふればば えだもたわたわ
足引 山道不知 白柯枝 枝母等乎々尔 雪落者或云、枝毛多和々々

- 読み下し：

あしひきの やまぢも知らず しらかしの えだもとををに 雪の降ればば<或は云ふ、「枝もたわたわ
わ」>

- 口語訳：

(あしひきの) 山道もどこだかわからない しらかしの 枝もたわむほどに 雪が降っている
ので<あるいは「枝もたわたわに」>

注釈：

「たわたわ」

タワはタワムの語根で、しない曲るさまをいう。⁴

40. 「湯良羅」

萬葉集卷十三・3243

- 原文：(ピックアップ)

…手にまける たまもゆららに しろたへの そでふるみえつ あひおもふらしも
…手二巻流 玉毛湯良羅尔 白栲乃 袖振所見津 相思羅霜

- 読み下し：

…手に巻ける 玉もゆららに 白たへの 袖振る見えつ 相思ふらしも…

- 口語訳：

³ 小島憲之・木下正俊・東野治之校注 新編日本古典文学全集 8 『萬葉集③』 <全四冊> p151

⁴ 小島憲之・木下正俊・東野治之校注 新編日本古典文学全集 8 『萬葉集③』 <全四冊> p151

…手に巻いている 玉も揺れて鳴るほどに (白へたの)袖そでを振るのが見えた 気があるらしい…

41. 「比師」

萬葉集卷十三・3270

- 原文：(ピックアップ)

…ひるはしみらに 昼者終尔 ぬばたまの 野干玉之 よるはすがらに 夜者須柄尔 このとこの 此床乃 ひし跡鳴左右 なげきつるかも 嘆鶴鴨…

- 読み下し：

…昼はしみらに ぬばたまの 夜はすがらに この床の ひしと鳴るまで 嘆きつるかも…

- 口語訳：

…昼はひねもす(ぬばたまの) 夜は夜もすがら この床が ぴしっと鳴るほどに ため息をついたことだ…

42. 「行莫行莫」

萬葉集卷十三・3272

- 原文：(ピックアップ)

おもふそら 思空 くるしきものを 不安物乎 なげくそら 嗟空 すぐしえぬものを 過之不_レ得物乎 あまくもの 天雲之 ゆくらゆくらに 行莫行莫

- 読み下し：

思ふそら 苦しきものを 嘆くそら 過ぐし得ぬものを 天雲の ゆくらゆくらに

- 口語訳：

思う胸の中も 遣る瀬がないのに (天雲の) ゆくらゆくら心は揺れて

43. 「往良行羅」

萬葉集卷十三・3274

- 原文：(ピックアップ)

おほぶねの 大舟乃 ゆくらゆくらに 往良行羅二 おもひつつ 思乍 わがぬるよら 吾睡夜等呼 よみもあへむかも 読文将_レ敢鴨

- 読み下し：

おほぶねの ゆくらゆくらに 思ひつつ 我が寝る夜らを 数みもあへむかも

- 口語訳：

(大船の) ゆらゆら揺れて 恋しく思いながら わたしの寝る夜は 数えきれようか

44. 「行良行良」

萬葉集卷十三・3329

- 原文：(ピックアップ)

おほぶねの 行良行良に 思ひつ 吾寝夜者 数物不_レ敢鴨

- 読み下し：

大船の ゆくらゆくらに 思ひつつ 我が寝る夜らは 数みもあへぬかも

- 口語訳：

(大船の) ゆらゆら揺れて 恋しく思いながら わたしの寝る夜は 数えきれない

45. 「多欲良」

萬葉集卷十四・3368

- 原文：

あしがりの とひのかふちに いづるゆの よにもたよらに ころがいはなくに

- 読み下し：

足柄の 刀比の河内に いづる湯の ようにもたよらに 見ろが言はなくに

- 口語訳：

足柄の 刀比の谷間二湧き出る湯のように 揺れ動くようなことをさらさら あの娘は言わ
ないのだけれど

46. 「多由良」

萬葉集卷十四・3392

- 原文：

つくはねの いほもとどろに おつるみづ よにもたゆらに わがもほなくに

- 読み下し：

筑波嶺の ^{いは}岩もとどろに 落つる水 よにもたゆらに 我^わが思^もはななくに

- 口語訳：

筑波嶺の 岩も鳴り響くほど激しく 落ちる水のように 揺らぐ気持ちはさらさら わたしは持っていない

47. 「等杼」

萬葉集卷十四・3467

- 原文：

おくやまの ^ままきの ^{いたど}いたどを とどとして わがひらかむに ^{いり}いりきて ^ななきね

- 読み下し：

奥山の ^ままきの ^{いたど}いたどを とどとして 我^わが開^{ひら}かむに ^{いり}入り来て ^な寝さね

- 口語訳：

(奥山の) ^ままきづくりの板戸を どんどんと押して わたしが開けたら 入って来て寝てよ

48. 「佐恵佐恵」

萬葉集卷十四・3481

- 原文：

ありきぬの さゑ さゑ ^{しづみ}しづみ ^{いへ}いへの ^{いも}いもに ^ももの ^{いは}いは ^ずず ^まま ^{にて}にて ^{おも}おも ^ひひ ^{ぐる}ぐる ^{しも}しも

- 読み下し：

あり^{きぬ}衣の さゑさゑしづみ ^{いへ}家の妹に 物言はず^ま来にて 思^{ぐる}ひ苦しも

- 口語訳：

(あり衣の) ざわめきの中に沈んで 家の妻に 言葉をかけずに来てしまったので 恋しくてたまらない

注釈：

さゑさゑしづみー未詳。

サエサエは「ざわざわ」のような擬声語か。仮に、旅立ち前のざわめきの中に埋もれて、の意と解しておく。

49. 「奴流奴留」

萬葉集卷十四・3501

- 原文：

あはをろの をろたにおはる たはみづら ひかばぬるぬる あをことなたえ
安波乎呂能 乎呂田尔於波流 多波美豆良 比可婆奴流奴留 安乎許等奈多延

- 読み下し：

あはをろの をろ田におはる たはみづら 引かばぬるぬる 我を言な絶え

- 口語訳：

あわの丘の 迫田に生い茂る たわみずらのように 引いたらゆるゆるほどけて わたし
に沙汰ぐらいしておくれ

50. 「奴流奴流」

萬葉集卷十四・3378

- 原文：

いりまぢの おほやがはらの いはみつら ひかばぬるぬる わになたえそね
伊利麻治能 於保屋我波良能 伊波為都良 比可婆奴流奴流 和尔奈多要曾祢

- 読み下し：

いりまぢの おほやが原の いはみつら 引かばぬるぬる 我にな絶えそね

- 口語訳：

いるまぢの おほやが原の いわいつらのように 引いたらほぐれて わたしの手から切れな
いでくれ

51. 「都良良」

萬葉集卷十五・3627

- 原文：(ピックアップ)

あまのをとめは をぶねのり つららにうけり あかとぎの しほみちくれば あしべには
安麻能乎等女波 小船乗 都良良尔宇家里 安香等吉能 之保美知久礼婆 安之弁尔波

たづなきわたる
多豆奈伎和多流

- 読み下し：

あまをとめは をぶね つららに浮けり あかとき しほ 潮満ち来れば あしべには たづ
海人の娘は 小舟乗り つららに浮けり 暁の 潮満ち来れば 葦辺には 鶴鳴き渡
る

- 口語訳：

海人乙女たちは 小舟に乗り 点々と浮んでいる 夜明けの 潮が満ちて来ると 葦辺に
は 鶴が鳴き渡っている

52. 「皎皎」

萬葉集卷十五・3668

- 原文：(ピックアップ)

於_レ時夜月之光、皎皎流照。

- 読み下し：

ここに夜月の光、皎皎に流照す。

- 口語訳：

この時秋の夜の月の光は、白白と流れている。

53. 「灼灼」

萬葉集卷十五・3835

- 原文：(ピックアップ)

於_レ時語_二婦人_一曰、今日遊行、見_二勝間田池_一、水影濤濤、蓮花灼灼、怜断_レ腸、不_レ可_二得_一言_一。

- 読み下し：

ここに婦人に語りて曰く、「今日遊行で、勝間田の池を見るに、水影濤濤に、蓮花灼灼

なり、可憐きこと 腸を断ち、得て言ふべからず」といふ。

- 口語訳：

そこで婦人に語って言われるには、「今日出かけて、勝間田の池を見たが、水面の影は大きく波に揺れ、蓮の花は明るくあでやかに満開、その見事さは格別で、言葉に尽せないほどだった」と。

54. 「濤濤」

萬葉集卷十五・3835

- 原文：(ピックアップ)

於_レ時語_二婦人_一曰、今日遊行、見_二勝間田池_一、水影濤濤、蓮花灼灼、唸_レ断腸、不_レ可_二得言_一。

- 読み下し：

ここに婦人に語りて曰く、「今日遊行で、勝間田の池を見るに、水影^{すいゑいたうたう}濤濤に、蓮花^{れんくわしやくしやく}灼灼

なり、^{おもしろ}可_レ怜_二きこと_一 ^{はらわた}腸_一を断ち、得て言ふべからず」といふ。

- 口語訳：

そこで婦人に語って言われるには、「今日出かけて、勝間田の池を見たが、水面の影は大きく波に揺れ、蓮の花は明るくあでやかに満開、その見事さは格別で、言葉に尽せないほどだった」と。

55. 「古胡」

萬葉集卷十六・3880

- 原文：

所聞多祢乃 机之嶋能 小螺乎 伊拾持来而 石以 都追伎破夫利 早川尔 洗濯

からしほに 古胡登毛美 高杯尔盛 机尔立而 母尔奉都也

- 読み下し：

香島根の 机の島の しただみを 拾ひ持ち来て 石もち つつき破り 速川に 洗ひ濯

ぎ 辛塩に こごとと揉み 高杯に盛り 机に立てて 母にあへつや

- 口語訳：

香島根の 机の島の しただみを 拾い取って来て 石で こつこつ殻を割り 速川で

洗い清め 辛塩で ごしごし揉み 高杯に盛り 台に載せて 母上に差し上げたかい

56. 「曾保」

萬葉集卷十六・3883

- 原文：

いやひこ おのれかむさび あおくもの たなびくひすら こさめそほふる
伊夜彦 於能礼神佐備 青雲乃 田名引日須良 粟曾保零

- 読み下し：

いやひこ おのれかむさび 青雲の たなびく日すら こさめそほ降る
弥彦 おのれ神さび 青雲の たなびく日すら 小雨そほ降る

- 口語訳：

いやひこさん 自ら神さび 青雲が たなびいている日でさえ こさめがしとしと降る山だ
弥彦山は 自ら神さび 青雲が たなびいている日でさえ 小雨がしとしと降る山だ

57. 「依依」

萬葉集卷十七・3966

- 原文：

紅桃灼灼、戯蝶廻し花舞ひ、翠柳依依、嬌鶯隠し葉歌。

- 読み下し：

こうたうしやくしやく まてふは花をめぐりて舞ひ、すいりうい い けうあうは葉に隠りて歌ふ。
紅桃灼灼、戯蝶は花を廻りて舞ひ、翠柳依依、嬌鶯は葉に隠りて歌ふ。

- 口語訳：

くれないの桃は明るく咲き誇り、浮かれ蝶々はその花を巡って舞い、緑の柳はたおやかに垂れ、

可憐なうぐいすはその葉に隠れて歌っています。

58. 「酌」

萬葉集卷十七・3972

原文：(ピックアップ)

縦醉陶心忘_二彼我_一、酩酊無_三処不二淹留_一。

- 読み下し：

しやうすいとうしんひが
縦 醉陶心彼我を忘れ、酩酊し処として淹留せぬこと無し。

- 口語訳：

勝手に酔って陶然となり自他の別さえも忘れ、酩酊してどこでもかまわず座り込む有様です。

59. 「琳琅」

萬葉集卷十七・3973

- 原文：

智水仁山、既韞_二琳琅之光彩_一、潘江陸海、自坐_二詩書之廊廟_一。

- 読み下し：

智水仁山、既に琳琅の光彩を韞み、潘江陸海、自らに詩書の廊廟に坐す。

- 口語訳：

あなたの智仁の徳は、宝玉の輝きを十分に内に包んでおられ、潘岳や陸機にも比べきあなたの才能は、生まれながらに詩文の殿堂に列するほどです。

60. 「愍徠」

萬葉集卷十七・3976

- 原文：

雖_レ欲_レ追_二尋良此宴_一 還知染_レ懊脚愍徠

- 読み下し：

良きこの宴を追ひ尋ねまく欲りすれど、還し知る懊に染みて脚愍徠することを。

- 口語訳：

その佳宴に私も列なりたいと思いますが、なお病後ゆえ足がふらついております。

61. 「許其志」

萬葉集卷十七・4003

- 原文：

いにしへ^ゆ遊 阿^{あり}理^き吉^に仁^に家^に礼^に婆^に 許^こ其^ご志^し可^かも 伊^い波^は能^の可^か牟^む佐^さ備^び 多^た末^ま伎^き波^は流^る

いくよへにけむ
伊久代経尔家牟

- 読み下し：

いにしへ^ゆ あり^き来^にに^にければ こごしかも 岩^{いは}の^か神^むさび たまきはる 幾代経^{いくよへ}にけむ

- 口語訳：

昔から ずっとこうあったので 峨々として 岩は神々しく (たまきはる) 幾代経たことであろうか

62. 「布都麻」

萬葉集卷十八・4081

- 原文：

か^かた^たお^おも^もひ^ひを^を 宇^う万^ま尔^に布^に都^に麻^に尔^に お^おほ^ほせ^せも^もて^てこ^こし^しへ^へに^にや^やら^らば^ば ひ^ひと^とか^かた^たは^はむ^むか^かも

- 読み下し：

か^かた^たお^おも^もひ^ひを^を 馬^{うま}にふつまに お^おほ^ほせ^せ持^てて 越^こ邊^しに^へ遣^やら^らば 人^{ひと}か^かた^たは^はむ^むか^かも

- 口語訳：

片思いを 馬荷でどかつと 背負わせて 越中に届けたら あなたも少しは心を寄せてくださるでしょうか

63. 「尔不夫」

萬葉集卷十八・4116

- 原文：(ピックアップ)

あ^あが^がまつ^つき^きみ^みが^が こ^こと^とを^をは^はり^り か^かへ^へり^りま^まか^かり^りて^て な^なつ^つの^のの^のの^の き^きゆ^ゆり^りの^のは^はな^なの^の は^はな^なみ^みに^に にふぶ

に^にみ^みて^て あ^あは^はし^した^たる^る
尔^に患^み美^て天^る 阿^あ波^は之^の多^た流^る

- 読み下し：

あ^あが^が待^まつ^つ君^がが 事^き終^はり^り 帰^まり^ま能^かり^りて^て 夏^なの^の野^のの^の さ^さ百^ひ合^あの^の花^のの^の 花^は笑^あみ^にに^に にふぶに^に笑^は

みて 逢はしたる

- 口語訳：

わたしが待っていた君が 務めを終え 帰って来られて 夏の野の さ百合の花が ぱつと咲いたように にっこり笑って お逢いできた

64. 「陶然」

萬葉集卷十八・4132

- 原文：(ピックアップ)

陶然遣し日、何慮何思。

- 読み下し：

陶然に日を遣り、何をか慮らむ何をか思はむ。

- 口語訳：

うっとりして日を送り、思い悩むことなどありません。

65. 「都婆良可」

萬葉集卷十九・4152

- 原文：

おくやまの やつをのつばき 都婆良可 尔 今日者久良佐祢 ますらをのとも

- 読み下し：

奥山の やつをのつばき つばらかに 今日 是は暮らさね ますらをの伴

- 口語訳：

奥山の 峰々のつばきの つばらかに一存分に 今日 是は楽しく過し給え ますらおたちよ

66. 「富呂」

萬葉集卷十九・4235

- 原文：

あまくもを 富呂 尔布美安太之 鳴神毛 今日尔益而 可之古家米也母

- 読み下し：

あまくも 天雲を ほろに踏みあだし 鳴る神も 今日にまさりて かしこ 恐けめやも

- 口語訳：

天雲を ばらばらに蹴散らして 鳴る雷でも今日以上に 恐れ多いことがございましょうか

67. 「恵良恵良」

萬葉集卷十九・4266

- 原文：(ピックアップ)

ちとせほ 保吉等余毛之 恵良恵良に つかへまつるを みるがたふとさ

- 読み下し：

ちとせほ 千年寿き 寿きとよもし ゑらゑらに つかへまつるを 見るが貴さ

- 口語訳：

千秋万歳を祝い 祝いさざめき わいわい騒いで お仕えするさまを 拝するめでたよさ

68. 「宇良宇良」

萬葉集卷十九・4292

- 原文：(ピックアップ)

うらうらに てれるほるひに ひばりあがり ころがなしも ひとりしおもへば

- 読み下し：

うらうらに 照れる春日に ひばり上がり 心悲しも ひとりし思へば

- 口語訳：

うららかに 照る春の日に ひばりが舞い上がり 心は悲しいことだ 独りで思うと

69. 「遅遅」

萬葉集卷十九・4292

- 原文：(ピックアップ)

春日遅遅、鶺鴒正啼。

- 読み下し：

春日遅遅に 鶺鴒正に啼く。

- 口語訳：

春の日はうららかに照り、うぐいすは今しも鳴いている。

70. 「波良良」

萬葉集卷二十・4360

- 原文：(ピックアップ)

あまをぶね　　はららにうきて　　おほみけに　　つかへまつると　　をちこちに
安麻乎夫祢　　波良良尔宇伎呂　　於保美气尔　　都加倍麻都流等　　乎知許知尔

いざりつりけり
伊射里都利家理

- 読み下し：

あまをぶね　　はららに浮きて　　おほみけ　　つかまつると　　をちこちに　　いざり釣りけり
海人小舟　　はららに浮きて　　大御食に　　仕へ奉ると　　をちこちに　　いざり釣りけり

口語訳：

あまおぶねは　　点々と浮んで　　ごぜんの用に差し上げようと　　あちこちで　　魚を釣っている

71. 「曾与」

萬葉集卷二十・4398

- 原文：

たづがねの　　かなしくなけば　　はろぼろに　　いへをおもひで　　おひそやの　　そよとなるまで
多頭我祢乃　　悲鳴婆　　波呂婆呂尔　　伊弊乎於毛比渥　　於比曾箭乃　　曾与等奈流麻渥

なげきつるかも
奈気吉都流香母

- 読み下し：

たづがねの　　悲しく鳴けば　　はろぼろに　　いへをおもひで　　おひそやの　　そよと鳴るまで　　嘆き
つるかも

- 口語訳：

鶴が鳴く声　　が　　悲しく聞えると　　遥かに　　家を思い出し　　背負った矢がひゅうと共鳴する
ほどに　　激しくため息をついてしまった

72. 「宇都良宇都良」

萬葉集卷二十・4449

- 原文：

なでしこが はなとりもちて うつらうつら みまくのほしき きみにもあるかも
奈豆之故我 波奈等里母知弓 宇都良宇都良 美麻久能富之伎 吉美尔母安流加母

- 読み下し：

なでしこが 花取り持ちて うつらうつら 見まくの欲しき 君にもあるかも

- 口語訳：

なでしこの 花を取って見るように つくづくと お目にかかりたい あなたですなあ

73. 「思努尔」

萬葉集卷三・266

- 原文：

あふみのうみ ゆうなみちどり ながなけば こころもしのに いにしへおも ほゆ
淡海乃海 夕波千鳥 汝鳴者 情毛思努尔 古所念

- 読み下し：

あふみ ゆうなみちどり な こころもしのに いにしへ
近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古思ほゆ

- 口語訳：

おうみ ゆうなみちどり
近江の海の 夕波千鳥よ おまえが鳴くと 胸がぎゅっとなるほど 昔のことがしのばれる

『萬葉集』卷十一・2653

- 万葉仮名：

うまのおとの とど 登毛為者 まつかげに いでてそみつる けだしきかど
馬音之 跡杼 松陰尔 出會見鶴 若君香跡

- 読み下し：

馬の音の とどともすれば まつかげに いでてそみつる けだし君かと

- 口語訳：

馬の足音が どんとどんと響くので 松陰に そっと出て見ました もしやあなたか思っ
て